本文

都々一節起原考
畫の諸形式
おぼえがき

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第一冊

○蛇の入りたる療治法

正德二壬辰之春、無名氏の跋ある「女中道しるべ」(横本繪入)の第五に、

「小蛇ゝゝに入たるには、へびの尾の外にいでたるところをなはにてゆはへ、尾に灸をすゆるに、たちまち出るとなり○又蛇の尾をゆはへ、小刀にて尾さきを少しやぶりて、こせう七りういるればたちまちいづ。出たるのち雄黄朱砂をこにして人參一味をせんじ、其煎湯にてのましむべし云々」とある。

○好色吉凶擲錢傳

春信か湖龍かまだ判斷のつかぬ會本「好女談合柱」の下に、好色吉凶擲錢傳といふのが附錄されてゐる。五錢を以てする錢占である。一番より三十二番まである。內十二番の、裏、表、裏、表、裏の卦の判が面白いから拔いておく。

筒持卦　來　此卦は女ぐるひをやめて男色にかゝるべし。わが女房又は遊女と極りたる女より外にうまきことあり。かならず是に取のるべからず。後大きなるわざわひを引出すべし。尤もおそるべし。

○甚句の起原

「源氏節の終に、名古屋甚九といへる俗謠を唄ふを例とす。甚九は江戸の人島田甚九郎と云ふもの之を謡ひ始め、一般力士の謡と爲る。其後三絃に合せて花柳界に流行す。名古屋に於て甚鍵と云ふもの此唄に妙なりき。名古屋甚九は起原詳ならず、一説に明治八九年頃、美狹松の門人美代治と云ふもの、藝妓となり、之を唄ふ、甚巧なり。其後また舊業に復す。聽衆彼が技を知り、源氏節を語りたる後に所望して唄はしめきと云ふ。(日本粹曲根元調等)(名古屋市史風俗篇二一二頁所載)」

○狗張子の再板

此の頃、狗張子(淺井了意作。元祿五年正月京、林九兵衛、同、伏見屋藤右衛門同梓、七冊)の再板を見たから、初版(徳川文藝類聚第四、怪談)との相違を記しておく。表紙の裏の見返しに、眞中に大きく、儒術狗張子とあつて、その右にはしがき樣のものが細かくあり、外題の左に、皇都尾陽書鄽、文昌堂玉照堂合版とある。その右の細かき四行ばかりのものが、丁度初版の義端の序に匹敵さるべきものである。(即ち再版本には、此の義端の序なし)此の、見返しのキッカケの細字を左に書留めておく。これと、初版の義端序と對照されたい。

「此書は照儀坊了意の作なり。沙門は極て博識强記にして、特には文案の豪傑たり。生平の著述はなはだ多し。晩年に逮んで筆力ます〳〵壯健なり。其頃編る御伽婢子の脫漏を拾ひ、全部七卷となしぬ。文体は今時の草双紙噺し本の類にあらで、本朝の奇談を評して東方朔が神異經とも賞じ、儒術狗張子と題する事をこゝに述るもの也」

最初の丁は、了意自身の序で、これは、初版本と異りなし。總目錄の個々、見出しの付け方が多少異つてゐる。各卷に收められたものゝ數、それによつた本文の一切は異同ないが、見出しだけがちがふのである。即ち初版の第一卷の三常陸坊海尊之事といふのが、鳥岡彌次郎富士垢離付常陸坊海尊が事といつた例である。卷尾は無論初版とはすつかり異つて、寛政七載乙卯十一月求板、京都書肆西六條花屋町永田調兵衛、尾州書房名護屋本町木村利兵衛と三行にある。

○雙六の外題袋

此頃、雙六の外題袋を五枚手に入れた。何かの參考にもと、各名と畫者を記しておく。

娘庭訓出世雙六(應需表題、豊國畫。無論三代也但し、行燈の繪の竹の落款に英泉畫とある。)その右に、娘一人立。泉市板○千社詣出世双六(千社札の會場らしい二階の樓。車といふ赤提灯が軒に幾つも釣られてゐる。會員どもの群集。玄魚筆とある)同板○新はんみさを双六(芳晴畫。奧女中らしき娘と中年增の二人を描く)板元不詳○ちんわんぶし雑雙六(芳幾畫。政岡御殿、飯焚の圖。鶴千代も千松も居る。千松が雀踊で、両袖を張つてゐる)辻岡屋文助板○笑門福々壽古六(岳亭梁左撰、芳幾畫。娘と、福壽草の鉢を捧げた植木屋の男)木屋宗治郎板。

都々一節起原考

はしがき

以下の叙述は、自分が最近別刊しつゝある校訂「江戸歌派叢書」の次編として近く上梓の運びとなつた「どゞいつぶし根元集」（嘉永六年序、珍文館老人誌）の解題に云ひ盡さなかつた事、及び他に敷衍して云ひ度き事どもを併せて、此の篇となしたのである。間々、右「どゞいつぶし根元集」飜刻本の、解題並に附錄の自分が執筆「熱田遊里沿革略、附都々一節の起原」と重複する箇處もあらうが、それは叙述の都合上已むを得ぬ事と恕して貰ひたい。即ちある點まで、從來疑問であつた都々一節の起原、及びそのもの創唱者の輪廓、當時の狀態が明らかにせられる事と思ふ。無論本記述と、「都々一節根元集」の飜刻本とは、併せ讀まるべきものであるが、此の記述のみにても大體は了知せらるべきやう、筆を運ぶ積りである。

嘗て湯朝竹山人氏が指摘せられたことであるが、（本著初編第二十三册、湯朝氏の「都々一節消息」參照。）成程、都々一節の起原に就ては、小量ではあるが、「都々一節」（廣田星橋翁述、風俗畫報第二百六十二號）が最も貴重な資料であつた。明らかに、名古屋の熱田（舊、宮）より都々一が生れたことを指摘されてゐる。その序に「己れ尾張の人某より聞得し一話に依り其他探求せし適說を掲げて、參考の一資

に供せんとす。」といはれてゐる通り、一は故老の言、一は翁の探求、（恐らく、中に說かれてゐる英山畫の錦繪の如きであらう。）此の二者に依られたもので、從來の漠然たる或は「都々一、天保に起る、扇歌より」などの妄說よりは、僅かに眞の措けるものなることは、言外に窺はれるのである。その廣田翁の叙述と主旨に於て殆ど同じく、しかもこれよりも傳へて悉しいものが、珍文館老人誌の「どゞいつぶし根元集」だつたのである。此の本、稿本一冊、舊狩野亭吉博士の藏書、現東北大學圖書館に秘藏されてゐる物。嘗て名のみを聞いて未だその眞形を觀ること能はなかつたものである。これが如何にして予の許に複寫本として屆けられ、それが上梓とまで運ばれたかは、右飜刻本の解題に詳記しておいたから、略くが、とに角斯界の爲、今茲に忠實なる勞力の奉仕を爲し得たと自分は欣懷措く能はぬものである。却說此の珍文館老人誌の「根元集」（以下根元集とのみ書す。）は、廣田翁の聞かれた一故老の言とは別物ではあるが、而も符節を合はすが如き點から、當時名古屋若しくは宮に於ては、此等の都々一起原に就ては、殆ど時人の常識であつたらうと思ふ。時代を異にしてゐる悲しさ、此の名古屋に生れ、名古屋で事を爲しつゝある自分が全く不知、尙且、飛び放れた仙臺の東北大の書庫深く秘められてゐるものを機緣として、始めて此土に生れた都々一の起原を知るといつた、迂濶な、しかし不思議な遇會には感少からぬものがある。

「根元集」は、以下の如き内容である。〔この内容の摘示、原本にはなし。〕

○宮驛宿中出女御免の事○傳馬町廓内の圖○同家名、駒立の圖○尾上惣兵ェ心中の事○大松屋若竹屋柿屋所拂○「おかめ買ふ奴云々」の唄の流行。ドドイツぶしの初め。○當時の流行唄四つ○よし〳〵節四つ○おかめの起原と鷄飯屋の始終○鷄飯店の圖○鷄飯店後園之眞景○鯛屋女房お仲が事○於哥女根元記○お龜御免の高札○謠曲「度々逸」○飯盛女の公許、上納金の事○はしりがね御免○おかめ駕籠願濟○脚本「心中操の相知潟」○淨るり「汐の別れ路」○中島に三國出來の事○同、圖○妓女、熱田ゃ高藏參詣御免○妓女惣踊の唄○同、衣裳○柳屋黃花樓出來、同唱哥○藝子、船に連行事御免○鯛屋、揚屋と成る。以上である。その中、自分が圏點を附したるは、都々一節起原に關して、最貴重な資料、他は、これに附隨して、當時「熱田遊里の沿革」に資する所多きものである。殊に、所謂「お龜」の考には欠くべからざるものである。畢竟、この著述は、見聞をそのまゝ順次にまとまりなく書留めて行つたものらしく、終りの脚本以後の如きは、都々一節には、無論交渉は非いが、然しこれも附けて綴ぢたと思はれるものである。〔但しこの者、熱田遊里の變遷、當時の風俗を知るには亦好個の資料〕したがつて、「都々一節根元集」といふ命題には、稍そぐはぬ、雜駁なもの、稍失望の感なき能はぬ。しかしこれらを

綜合補足して來ると、一體の「都々一節根元」が朧ろ氣ながら築き上げられる。これに自分は至大の愉悅、再誕の歡びを味はつたのである。今、その自分の築き上げた一体のものを左に項別にして記して見る。無論、校本「どゞいつぶし根元集」と參照さるれば、予の記述が一層明確に裏付けられると思ふ。

1、都々一の名義。寛政十二年(申)の秋より享和三年(亥)に至る、四年間に於て、恐らく享和三年頃に流行つた「おかめ買ふ奴、天窓(あたま)でしれる、油つけずに二ッ折れ、〔此唄の亂(シャイ)のはやし〕其(そ)奴(いつ)はどいつじや〳〵」の唄から來た。此のシマヒのはやしの、ドイツじや〳〵が、ドヾと吃り、ドヾイツドイ〳〵とかはり、浮世はサク〳〵と折返して囃すやうになつた。夫故、誰名づくるともなく、ドヾイツぶしといひ始めたといふのである。

○年代の傍証。一、寛政十二年秋熱田の築出に、鷄飯屋なる茶店出來。その家の女中に、「おかめ」と呼ぶのがゐて、此の床臺が大に流行つた。(「根元集、おかめの起原。鷄飯屋の始終」)二、此のおかめが、間もなく、即ち享和三年頃、宮宿神戸、傳馬、築出一般の賣女の惣名となつた。乃ちおかめ買ひが大に流行つた。(根元集、於哥女根元記に據る。この根元記に享和癸亥の記入あり。癸亥は同三年也。即ち寛政十二年秋より、享和三年に至る間に、一個のおかめが、賣女の惣名となつたのである。賣女の惣名となつたについては、於哥女根元記に悉しい。)尙、前揭、都々一の名義の中の、「おかめ買ふ奴」の唄の「おかめ」は、無論一個の茶店の女中時代の名稱ではなく、賣女の惣名となつた、享和期のおかめで無

論あらう。故に、以上の判斷がつくのである。

2、都々一の名稱を生んだ年代。享和末、〔同四年二月、文化さ改元〕文化のはじめ。〔前條より類推。〕

3、所謂後の都々一を最初誰れが唱つたか。享和十二年秋、おかめ（一個女中の名さしての）こ同時に、同じく鷄飯屋に女中をしてゐたお仲、〔熱田の須賀生れにして、後に、神戸町鯛屋の女房さ成る。〕この女が唱ひ始めた。此のお仲が一流の節を唱ひ出して、それが、女中たちや、遊客に流行つた。おかめが賣女の惣名さなつた享和末頃には神戸傳馬の妓樓に於ても盛んに唱つた。これをお龜のふし〔惣名いお龜が、酒間に唱ふからである。〕ともいつた。〔都々一の名稱の生れたのは、稍是より後〕〔以上は、根元集の、鯛屋お仲が事、於晋女根元記、度々逸等にて類推せられる。〕

〔疑問。〕こゝで、自分の疑問は、お仲を個人名のお龜と同一人ではないかさいふのである。しかし、よく考へるさ、お仲は、熱田の須賀生れ、中年以後、神戸の妓樓鯛屋の女房さして榮えたに拘らず、お龜は、謠曲「度々逸」には、信州生れさあつて、その晩年は、歴さしてゐない。殊に「度々逸」の中の、或る商人との「我は浮れ女の唄にうさをも紛れなん。君は商ひに御氣やつまるらん」さいうてゐることや、そのローマンスが遂げられなかつたこいつた說話が、どうもこのおかめ自身の事に思へる。即ち一個名おかめの晩年は、悲慘し

あつたやうに思へるのと、一方お仲の榮達、晩年法体となつて天壽を全うしたのとは、相違してゐるやうに思へる。即ち別人だと斷定してしまつた。同人とすれば、信州生れの女が、須賀へ貰はれて、鷄飯の女中には、おかめと字して出たともいへる。然しこれは全然採るに足らぬと決めた。即ち、自分のお仲、お龜の二個に對する斷決は、お仲は、後のどやいつを唱ひ出した者で、それが神戸で鯿屋の女房になつてからも、時に宣傳はしたらう。こにかく享和、文化頃、神戸、傳馬、築出の汎おかめに、この節が流行つた。お龜の方は、お仲のやうに榮達出來ず、唯、多少女として人氣があつた爲、汎お龜の基を成したに終つた。ローマンスも遂げず、晩年は不遇の中に終つたと、かやうに見るのである。即ちお龜も唄ひはしたが、始めた者ではない。然るが故に、從來、間々行はれる、「宮のお龜が唄ひ出した」といふ説は、全然誤謬で、宮の汎お龜が唄つて流行らした、その元は、鷄飯屋の女中のお仲（後の鯿屋女房）だと改めねばならないと思ふ。」

以上が今度の「どやいつぶし根元集」から得た歸納である。以下は、それ以後の事項に就て、他書、又は諸家の説を綜合した所のものである。

1、都々一が江戸に移つた頃。飯島花月氏は、嘗て（本著初編の第二十一册）逸名の都々逸集の序「葉々道人

記」中の「ドドイツといへる小唄、江戸にて唱ひ始めしは僅か四五十年の往昔」（これを花月氏は享保元と文化元頃にあたると云はれたが、寛政初めと文化初めの誤であらう。）といふのを採つて、天保より三四十年前というてゐられるが、一方忠臣藏となせ小浪道行常盤津の中の「ういていたこも名古屋と變り、そしてどゞいつ鈍な洒落」の文政十年七月市村座上場を楯にとつても居られる。自分が思ふに、案々道人記の四五十年前は、實は四十年前であらうと思ふ。理由は、前にも述べた肝腎の宮（ひいては名古屋）の發生が、文化はじめといふ點からである。忠臣藏の文政十年では又餘りに遲すぎる。丁度、これに又一説として、朝倉無聲氏が、「風俗研究」第四十六號にて述べられた、ドドイツの話の中に、遊歷雜記（江戸叢書卷之三より同七までに分載。所要の五編は、同七にあり。）の五編の上（文政七年記）の、岡崎宿の本陣大津屋での話を元に、「當時、ドヾイツは、東海道筋を始め、江戸市中は素より、府外の大塚に至る迄、流行つてゐた」云々といはれた、即ち文政説がある。即ち此等の文政五六年説（忠臣藏の常盤津は、この遊歷雜記の文政七年より遲れて同十年）と、宮の文化はじめの流行とは、間に文化の十四年と、文政の五六年と計二十年は隔りがある。これが餘りに大きい。自分が思ふには、やはり、案々道人記にもいへるといふに據るのではないが、すでに文化の中であらうと思ふ。盛んに流行つたのは、文政からでもあらうと折衷したいのである。（尚、朝倉氏の同記文中には、文政九年版本の「風流稽古三絃」の中を引いて、ドドイツの名義を解決しえたといはれてゐるが、これも同じく囃子詞であ

たゞいふのであるか、それの元は、「ごやいつ節根元集」のドイツジヤ〳〵たる事は無論である」

」、ごやいつは、よしこのより早し。これは、朝倉氏も、同風俗研究誌上に於て、小唄雜誌、（寫本、名古屋小寺玉晁選）の中の「文政五午年冬、よしこの節はやり來る。此歌ごやいつ巳來の大はやりにて、後々いろ〳〵調子もかはり候へ共、此の時はいまだ始り故、二上りのみにて、乙酉年（文政八年）迄はやり、酉年に至つて、本調子となる」を引いて、よしこのより古いといはれてゐるが、無論其の通りである。即ち、自分の「ごやいつぶし根元集」に據つた、都々一の名稱を生んだ年代を文化の初めとした、その歸納の迹を辿つても自明の事である。即ちよしこのが、從來文政に起るといはれてゐるが、それが、鷄飯屋お仲の女中時代（寛政十二年末から享和初めに亘る頃カ）の此年代より古くに既に生れてゐたといふ反證が現れざる限り、永久に、ごや一はよしこのより早きであるのである。

次に、此の宮のお仲の「都々一」は、その前生（前の系統）は何から來たか。潮來から來たかどうかといふ事は、飯島氏の言を藉りると、「都々逸は果して潮來から來たか、よしこのから變遷したか、よしこの都々一別個のもので其孰れが古いか」に惱んでゐられるが、然しよしこのは後と極れば、結局殘るのは、潮來と、都々一との二者のみである。これには、自分は、今い

かに忠臣藏の「ういて潮來と名古屋とかはり」があつても、何ともいへぬ。お仲の系統を突きつめるより外に仕方がない。それは、今度で最後に突當つてゐる自分の疑問である。突如として、お仲がこれを唄ひ出したのでは無論なからう。その父母があるわけだ。その唄の父母は、まだ疑問である事を遺憾とせざるを得ぬ。

4、都々一最初の節調。これも自分には未決である。謂ふが如く、潮來の名古屋と變つたもの、それが二上り都々一であつたか、そうして江戸ではその二上りのまゝで流行たか、又は何時頃、本調子と變つたか、これにはまだ何ともいへないのを悲しむ。唯、名古屋で流行つた都々一は二上り物であつたやうにも思ふ。（朝倉氏の引かれた「小唄雜誌」に、よしこのが文政五年より八年までは、まだ二上りのみだつたとある。それによつて、それより早いどゝいつもやはり二上りのまゝで流行つてゐたかと安推するのである。）さうして、原始の都々一と、原始のよしこのと、果して如何程の相違があつたか、これも杳として自分は知る所がない。江戸での都々一とよしこのとの交渉、これも後日の事にする。〔忠臣藏の「浮いて潮來も名古屋と變り」の此の名古屋は、原始の都々一で二上り都々逸、そしてどゝいつこんな洒落つどゝいつは、江戸の都々一、即ち本調子都々一と解していゝやうな氣がする。〕

尙、守貞漫稿第二十一、音曲中の「名古屋節、尾州にて行はるゝ小唄也。其始め何れの比なる事を知らず、今に至つて熱田驛家の娼妓は三絃に合せて專ら唱之也。其唱詞短く且つ卑陋の物多く、伊勢古市の音頭、宮の名古屋節一對のやうなれども其品同じからず。云々。此節江戸にては三下り都々逸と云。」〔ここに三下りとある。すれば本場の宮では、此頃は三下りであつたのか。久衛〕とあるのも、此の名古屋節は、

無論原始の都々一、即ち都々一と江戸都々一との交渉の一材料にはならう。

最後に、都々一節の異名として、名古屋節（浮れ草（近世文藝叢書十一）に數首見ゆ。尙、前條、守貞漫稿中の記事參照）、お龜の節、唄といつたは無論であるが、神戸節ともいつたらしい類推がある。それは、校本「ごゝいつぶし根元集」の解題、附錄にも自分が述べたが、神戸は、當時汎お龜の流行つた宮の廓の第一等地、こゝで唱ひ流行した故、乃ち神戸節と稱したといふのである。それには、自分が頃日――複寫本の（根元集）の入手と前後して購ひえた稿本「音曲神戸節」一冊、（いろは別になつた都々逸集、數百首あり）といふものがあつて、その中の唄の五六が、「根元集」の「度々逸」の文句と並びに頭註の唄と類似又は殆ど同一のものであつて、その「度々逸」（根元集の謠曲）の文詞を拔萃して、後に都々一となした、（廣田氏說）といふに據つても肯づけるからである。潮來に流行つたから潮來節、宮の神戸で流行つたから神戸節。同じ事と思ふ。

創始時代の都々逸の歌詞集。これが從來不明であつたが、家藏の稿本「音曲神戸節」が幸ひ自分の判斷にして誤らない限り、この命題に合した唯一の資料であらうと思ふ。（他日、當所より江戸歌派叢書の中として校訂上梓の筈である。）尙、神戸節と神戸との年代の交渉、また賣女としての汎お龜が考、これなどは、「音曲神戸節」校本上梓の際、更に附加する所あらう。然しその大体は、校本「ごゝいつぶし根元集」の解題、附錄にも窺はれはすると思ふ。

畫の諸形式

極く概念的に、自分のノート代りに記しておかう。斯るものも過去に於ける我々の祖先が生み出した文化の側面、人々の生活樣式を探る奈邊の資料にもならうと信じての事である。

繪本形式のものを第一に。師宣時代は、大抵美濃大判のやうである。我々が偶々にして見受けるかたものが殆どである。繪本位では、無論師宣以下の浮世繪師の餘技若しくは精力に成つな草子ものと、殆ど類似した大きさ、体裁のものである。嘗て平出鏗次郎氏舊藏本の師宣の「床の置物」といふを見たが、これには、立派に例の鱗形屋本の龍の丸の表紙が付いてゐた。板元も堺町柏屋與市開板と明示され、又、序跋もあり且つ「繪師菱川吉兵衞」と明示されてあつた。師宣以後は、暫らく、自分に所見がないから、何ともいへない。豊信になつて、恰も挿繪本位の祐信と同樣な、横本のものを見た。大本のものは、何とも斷言が出來ぬ。横本のものは、始めに、繪が數十圖續き、或る物語を追ふとよりも、個々のものが多かつた。終りに數枚の文章(或る説話)が附せられてゐる。(師宣には、この説話はないやうである。即ち大抵、彼の普通繪本のやうに、繪の上欄に於て、説明やうの文字を陳れ、かゝる説明と畫とで終つてゐるのである。即ち

（湖龍齋すぐ前までゞ様であるのである）春信になつて、普通の半紙本になつた。外題もいろ〳〵暗示的なひねつたものを工夫し、繪が大抵九圖位ゐづゝあり、その終りに、はじめの繪に關係のない或る短話が載つてゐる。繪も聯絡のない、個々のものである。さうして、冊數も大抵上中下三冊となつてゐた。（この以前は、自分の所見では、大抵一冊物のやうである。師宣を始めとして。）湖龍齋も春信の風で、はじめの繪數枚、說話少々といつた形式で、半紙本である。（但し湖龍齋には板畫形式のものも多い。これは後說）春章も然りである。同じく數枚の繪、短かい插話、上中下の三冊が多い。春潮、榮之、歌麿、政演の輩、皆これと同樣である。但し歌麿には、間々、横の小本形式のものもあつた。

これまでに至る繪本形式のものは、殆ど墨一色である。師宣は無論の事、春信、湖龍齋と雖も。（但し板畫形式——一枚繪もの——は例外）歌麿になつて、時をり彩色摺のものと、墨摺とを見受ける。同じ本であつて、多色摺のものと、墨一色との二樣あるものも見た。特製並製の謂か、或は墨一色のものは、再版とでもいふべきであらう。着彩本位で描かれたものの墨一色本は、衣物の柄などが、大まかな輪廓で、間の拔けた感じが夥しい。北齋、英泉、國貞、國芳の類は、全部多色摺である。さうして、その終りに、短かい說話のあること例の如し。さうして冊數も、一冊物若しくは三冊物である。（初代、豊國には、所見がないから何とも謂へない。）貞房（國貞門下）の如き歌川末流

もさうである。但しこの頃、挿繪本位の、擬繪本樣のものを盛んに生んでゐる。この頃から美濃二ツ折、即ち中本型のものが頻出してゐる。半紙本のものも多い。但し中本型では、英泉があり、歌川末輩があり、國貞、國芳の二輩は、寧ろ中本型よりも、半紙本が多いやうである。

挿繪本形式のものでは、祐信に見た。それ以前は、所見がない。祐信のこの形式のもの、多く三冊物、八文字舍本と殆ど同じく、或る說話が冐頭より始まつて、それに隨處、挿繪として描かれてゐる。月岡雪鼎のものにも此の類がある。特に、雪鼎或はその門流〔其の子の雪齋など〕のものには、訓蒙圖彙やうの大本がある。春信、湖龍齋、春章、政演あたりには、別に此の挿繪本形式のものを知らない。豐國（初代）になつて、讀本（よみほん）形式の、まゝ繪をまじへたものを見た。英泉に於ては、此の挿繪本形式のものが、又多い。英泉は、筆作の技も割合に長けてゐたので、彼の書作といつた、讀（よみ）と繪と混和したものも亦多い。大抵、人事內祕に關する敎訓、說示の類を綴り、その最初又は途中に於て圖畫を挿んでゐる。但しこの書は、繪本形式のものとは異り、代赭と墨の二色摺位ゐのものが多い。國貞國芳に於て、此の挿繪本形式のものも頗る多い。

板畫（一枚繪）形式のものにあつては、その最初の所見は、春信である。（政信、豐信らにもあ

りとは聞いてはゐるが、まだ確實なものを經驗しない）春信のものは、中判である。即ち彼の好みの中判型で、一枚物といふよりも、寧ろ數枚にて或るまとまつた感じを出さうとしたらしい物である。よりて、枚數も、大抵同じ畵樣、氣分の下に十二枚一組である。（年十二ヶ月の意味からであらう。）然しその中の數枚、若しくは零碎な一枚たりと雖も主なる目的は達しられてゐる。着彩は、彼の錦繪に見ると同樣である。彼の普通板畵の材料となつた、雪中の男女や、柳屋お藤の如きを材にしたものを自分は見た。湖龍齋には、大判のもの、中判、小判のもの、種々ある。中、小判のものが、數量に於て多いかと思ふ。大抵、、、十二支とか、、、十二ヶ月とかいつたもので、着彩は錦繪と同じで、枚數は十二枚一組である。雪鼎たち、その門流のものには、畵帖風になつた、一枚づゝの大判物があつた。これは、多く墨一色であつた。春潮のものにも、大判（錦繪大）、着彩で十二枚組と思へる物があつた。さて、以上の中、春信から春潮への間、繪の詞書がありや無しやといふと、春信にはまだ會話やうのものを見ぬ。湖龍齋には、なきとあると、兩樣を見受けた。春潮に至ると、必ず短かい言葉、が繪の空間に記されてあつた。歌麿になると、同じく兩樣あつたやうである。北齋、英泉、國貞、國芳以下然りで、中、英泉のものには、比較的お座へ出せるやうな、暗示風のものと、でないものとを混ぜた一

組物もあつた。獨熟した果は、却つてかうした暗示風な、白湯一杯といつたものを案出したのであらう。勿論かゝるもの丶一二枚は、春信あたりにも間々見受ける。然しそれは全くの附錄である。然るに、この英泉（その門人の泉晁など）に至ると、附錄ではなく、他と同格に、同樣に精力を揮つたこの暗示、所謂催情ふうものが多いのである。書帖仕立のものも、北齋、英泉の輩にあつた。國貞、國芳の輩にも此の綴ぢ目なき書帖風のものもある。但しこれらは、大抵はその終りに、二三枚の文章、狂歌やうのものがあつて、また初めにも、當時の文人共の書賛、序のやうのものが掲げられてゐる。色山人（劉山人が事）や金鷄などは、この序の筆者である。

次に、多少の異種と思はれるものを擧げよう。

一、文學び式のもの。このものがまた古くは、祐信及び其一派の横本物、後期の歌川末流の書家のものに多い。即ち、初めに繪があつて、終りに、女子の文のけいこのやうに、、、に遣る文として、樣々な文の書体、文例が擧げられてゐる。末期のものでは、文のはやしといつた外題で、中本型になつてゐる。（即ち是らは、入るれば、前の挿繪本形式に入るべきもので、着彩のものはない。）二、烏瞰圖樣のもの、數枚を繼ぎ合はしたもので、取材は多く廓内である。此の

風、歌川末派である。若彩絢爛たるものである。三、極小判、數十枚。極の小判で、數十枚、種類から謂へば、數百枚である。此等は、例の初代廣重の東海道五十三次が喝采を博したが爲に、その風を眞似て、東海道に材料を借りたものが多い。即ち東海道のみで、五十何枚はあるわけである。其他様々で、湖龍齋あたりの、、、十二支の十二枚の小判型のものよりは、氣分も雜駁で、取材も極めて猥雜である。

次に、文學物ともいふべき、讀本位、若しくは讀八分、讀二分といつたものを列べて見よう。浮世草紙風のもの。古くは、西鶴本の如き大本型のものより、後の八文字舍本の三味線物、禁短氣などに見るやうな横本である。本著の初編にも二回に亘つて説いた「むらく坊」の如きは、その古い所で、（但し此の本、半紙本）其後、西鶴を摸倣した好色本浮世草紙の類には、繪は平凡、文に於て猥雜といつたものが、少くない。色里三所世帶の如きも、この中に、入るれば入れられ得よう。八文字舍風になつてからは、その猥雜さが度を越してゐる。豆男を材料にしたものは大抵これである。豆男の他に、豆女もある。〔この豆男、豆女の形式は、支那の「和尚奇緣」あたりの一寸法師で巨身に變化しうる例の説話あたりの摸倣、脱胎から來てはゐなからうか。〕稍後まで、これが續いて、中本型のものにも、此の豆男豆女式のものがある。〔豆男の趣向は、この頃歡迎されたらしい。湖龍齋の大判の摘のものにも、これと同趣向のものがある。〕自分にも、豆右衛門後日女男色遊の一之巻（横本）があるが、

此の類は、殆ど無數であらう。繪は普通であつて、文に於てたわれの限りを盡してゐる。「好色本目錄」等に散見する豆云々は、則ち是れと判じてもよからうと思ふ。趣向は似たり寄つたりで、隱形自在で、至る處見聞したり、惡戯をして歩くのである。〔丁度、むらく坊の隱烏帽子、浮世榮華一代男の隱れ笠の趣向と異りはない。〕時には、此の豆男が、主題になつてゐるものもある。即ち此の豆男が活躍の中心である、傍觀者ではないのである。訓蒙圖彙の形式が、月岡派に多いことは述べた。〔丁度此の頃、不知足散人（小松百龜）の「魂膽遊仙窟」の如きが生れてゐる。これは、嘗て笑話本のやういうたが、實はではなかつた。或る物語の續きである。半紙本、五册物、繪は平凡である。〕さて、讀本風のものが後に生れた。京傳、馬琴等の讀本の大家が現れ、讀本を鼓吹した爲、これに似たものも頻出した。前代迄の、浮世草紙樣、八文字舍本樣のものは、殆ど繪は眞面目なるにも不拘、以後の讀本形式のものとなつては、文、畫共々に普通でなくなつてゐる。さうして前代迄の墨が、以後は、多色摺と變つてゐる。これらの畫家には、初代豐國、英泉、國貞等が多い。英泉の、玉藻前の五册、筑紫琴（石童丸の父加藤重氏を材としたもの）五册の如きは、これである。さうして、英泉のものは、一筆庵（英泉の戯作の上の名）自身の文と畫で、時に白水編次又は一筆庵ともしてゐるが、豐國、國貞らに至つては、文は、多く他の戯作本業のものに借りてある。猿猴坊月成などは多く此等に文詞を綴つてゐる。次に、人情本（中本）が盛んになると、またこの形式が生れた。新内の曲中人物を材料にし

た人情本が流行つた頃には、又これを踏襲した中本型のものが現れた。これらも、口繪插繪共に、多色摺で、繪は猥雜なものとなつてゐる。文は普通の墨一式であるから、即ちこの插繪にありては多色摺の必要上、かはつた用紙を使用し、それを本文の紙に、貼り續けてゐる、但しつまらない墨一式のものもある。「春雨衣」などは、全部墨である。〔然し此の「春雨衣」などは、例外で、繪は、平凡なものである。〕草双紙が流行ると、又此の風の物が流行り出した。「漢楚軍談」などは此の例である。何十冊と重ねられ、畫、文共に本性を發揮してゐる。尚、中本の一種ではあるが、稍異つたもの、即ち滑稽本として、東海道膝栗毛（一九作）にまねて某外題、十數冊續きの物もある。凡て文學界の雄名多き作を眞似てゐることは、僂指に遑がない。八犬傳の如き、田舍源氏の如き、即ち無論である。

其他の全くの異種としては、黄表紙型のもの、笑話小本型のものがある。共に繪は本來を失はぬものである。黄表紙では、「夕部口話今朝波留箱入娘双居」の上中下三冊物の如き、その例である。普通の黄表紙本と同じく、外題も、うすい代赭と墨の濃淡との三版である。一冊五枚であることも本式であるが、内容に至ると、稍黄表紙式を脱してある、即ち、普通の繪本型の詞の簡短なものと異りはない。（此の本、政演〔京傳〕の畫作だらうと思はれる。）

笑話本では、小本で一冊を見た。書は、ヒラキの數葉、小咄が數篇載つてゐる。見た物、外題不詳であるが、內容は、「うば」、「御利生」、「人まね」云々といつた小話どもである。此の書は春朗たることが、一圖の襖の落款でわかる。或は、笑話の作も、彼のではなからうかと思ふ。

脚本內容のものもある。これは、役者繪に堪能であつた、且つ流行を招致せしめた國貞あたりに間々見受ける。上中下三冊もので、一冊に一齣づゝ、あるまとまつた短い芝居を綴つてゐる。但し口繪は色摺數葉であるが、これは、大抵は本文の芝居の筋とは關係がないやうである。

殊に例外としては、狂詩集やうのものも見受ける。又、俗謠の註解やうのものも見受ける。「毬歌國字解」といふと、まじめなものと人は思ふであらうが、さうではない。一二三四五六藏板といふ所からして巫山戲てゐる。此の「毬歌國字解」は、漢文に書き流した毬歌やうのものを、和文で註解をしたといふのは、名義だけで、全くの戲々作である。然し此の種のもの、皆變名ではあるが、當時の詩人文人の宗たるものの閑筆では無論あらう。其他、此類の儒者或は攻儒者側が爲した閑筆の類は尙、種々ある。〔但し、此等の「國字解」樣のものには、挿繪はない。即ち繪本ではないのであるが、序でに述べたのである。〕

最後に、全部を通じて、畫材の主なるものを擧げておかう。

初めに、遊女と嫖客、或は町家の士女がそのモデルである。時には、貴族（大名、公家）のも

のもある。師宣から春信頃まで然りである。嫖客の中には、武士も居れば町人もある。春章の頃になつて、角力取も材料に入れられてゐる。若衆物もないではないが、豊信かと思はれるもの、若しくはその頃に多くして、以後はそれ本位のものは殆どない。間々、それを混へてゐるのみである。初代豊國、國貞あたりになると、頗る芝居が多い。役者、若しくは、其他劇作者などにモデルを借りたものが。或は、某俳優の身上に關する奇聞に借りたものも少くない。例へば三津五郎とその妻お大と、菊之亟の例である。又は、上阪した菊五郎が、大阪の鴻池善右衛門と藝者を爭つたことなどが、(この取材は、國貞の「上方色修行」にある。)見受けられる。俳優と御殿者などの如きは、謂ふ迄もない事である。以後になると、又東海道物が多い。即ち廣重の「東海道五十三次」各種が聲名を博したのに釣られて、赤繪本式に、この類のものが多い。三保の松原の羽衣傳説などは、乾度世話に飜譯されてゐる。江戸名所物も多い。これは、古くは江戸名所圖會、同花暦らの影響もあらうし、直接は、廣重らの同板畫の影響もあらうが、此の種の中本又は小判一枚繪が多い。其他に於ては、浮世節(どゝ一)の流行つた頃に、それを全篇採り入れた物や、或は大津繪節の繪本に借りた物が現れてゐることなどは、謂ふ迄もない。

以上、記憶に任せての略述である。錯誤あらば是正されたい。

著者より

お蔭で第二編に移る事が出來た。初編第一冊を出した大正十年十月を回憶すると、自分の氣持の上にも、この小誌の受ける氣持の上にも格段な相違が出來てゐる。然し身世匆忙日昏れて道猶ほ遠しの嘆が起らぬのでもない。まだ所期の三分の一も盡してゐない。材料は日夜怠らず蒐集してゐる。まだまだこれからだと思ふ。まだ幼稚園のつもりでゐる。此頃も新しい讀者があつて、「研究」の方はいつまで續きますか。と聞いて來られたのがあつた。一寸をかしな氣がした。人がさう思はれるのは無理はないが、しかし聞かれると自分も可笑しな氣がした。いゝ加減な氣持からでは、「死ぬ迄やる」とでも云うてゐるものゝ、どういふ事で金に、健康に、材料に塞らないとも限らない。うか〳〵した事はいへないと、返事を出さずにおいた。と同時に、何だか淡い悲哀を感じ、同時に意地張りでやたらに興奮も感じた。○まだ新年ではないが——目下は、丁度歳晩の本當に押詰つた光景で戶外は電車の響さへ「空元氣のやうに聞ゆる」——、お芽出度うと申さゞるを得ぬ。とにかく、此れが刷り上る時は、自分も多少お芽出たい氣分でゐようから、お芽出度うと今書いておく事もをかしくなからう。唯、每年今後も此の誌上で御芽出たしを如斯く曰はしめて頂きたいものだと、これはつかりはしみ〴〵思ふ。○家内中マメです。此頃生れた赤ん坊(ゆかり女史)が泣いて、無論笑ふのも泣くのも、怒るのも泣くばかりだが——多少耳障りだといふ位ゐです。女房は、そろ〳〵手助けをしてくれるやうになりました。○唯氣懸りなのは、此の研究はおろか、「叢書」の第二編も延刊しやせぬかといふ事です。御承知の年末の印刷所の多忙、ましてすでに三年間で御氣付きでせうが、この研究と叢書とを刷らしてゐる(寧ろ無理をいつて刷らして頂いてゐる)印刷所は名古屋第一流(校正の確かな事は日本有數)の印刷所です。不景氣で一帶はひまであつても、こゝは暇でないらしいのです。さうした所へあの組のうるさい叢書、(出來上れば、御納得が行きます)、此の研究を、愛情と義俠とがいかに印刷所諸君にあつても、完全に早く〳〵といふ譯には行かない。或は、この研究だけでもいゝから早くといふ事になるかも知れない。叢書は事によれば多少遲くなるかも知れません。叢書の方も成るべくは早く出したくあります。裏表紙の如きものです。本當のこれが珍本でせう。高が都々一と嗤ふ勿れ、私は都々一考だけでもつとしつかり進めて行つたら、博士にされる丈のものはあると思ひます。(呵々)とにかく本邦俗曲史の一座を占める都々一の根元として根本史料の紹介です。これを飜刻し了るに至つたに就ては、私の苦心は、無論買つて頂きたい。初編よりも三倍の日子と頭を痛めた事は、讀んで下されば分ります。それが爲、今月號の研究の方も原稿が面白いものが一向手に付かず、で叢書の提灯のやうにはなりましたが、尙悉しい自分の綜合として、本月の卷頭のもの、及び「盡の諸形式」を押し詰つた昨日今日で書き上げました。二月からはしつかり更に他の方面へ勉強する積りでをります。盡の諸形式も雜ではあるが、一寸面白からう。材料にはならうと思ひます。勿論常識的な事を出て居りませんが、先は、右まで。(十二月二十四日夜)

▽寄贈紹介、吉田曠二氏の新著 噂、家 等次號に廻しました。不惡。

大正十三年十二月二十七日印刷
大正十四年一月一日發行 【定價廿五錢】 送料貳錢

定價表		
一冊廿五錢	郵税貳錢	○郵券代用一割增の事
六冊分	壹圓四拾錢 税共	○照會は返信料添付の事
十二冊分	同 貳圓八拾錢	

編輯兼發行者 名古屋市東區東新道町百五十七番地 尾崎久彌
印刷者 名古屋市中區南大津町二丁目三番地 英比貞造
印刷所 名古屋市中區南大津町二丁目三番地 扶桑社
發行所 名古屋市東區東新道町一五七番地 江戸軟派研究發行所 振替名古屋九六七二番

●江戸軟派叢書貳編豫告●

珍文館老人稿・尾崎久彌校

校本 ごゞいつぶし根元集 全一

附 尾崎述、熱田遊里沿革略・都々一節の起原

和紙和綴表紙三版色摺美本
美濃四ツ折六十頁繪入
送料共金七拾七錢

舊狩野亭吉氏藏本で現東北大學圖書館藏の貴重本たる此の稿本の名を知らるゝ方はあつても、その全鱗を覩られた方は、まだ寥々、五指に充たぬでせう。今度ある不思議な機緣から自分の手にその複本が屆けられた。自分は、非常な亢奮と、恐らく始めて知る眩しいやうな心持で、校訂に從事し、事が熱田古遊里にも甚大なる交渉を持つ點から、旬日、現地を査ね廻り、且つ舊記古書の傍證に沒頭し、揚句まづ自分として精一ぱいの此の校本を作り上げた。それは、自分が決して、自慢でも誇大でもありません。唯諸賢に賞めて頂けば、事足るのです。此の本をしようちゆう、口癖にして見たがつてゐられた湯朝竹山人氏などは、先づどんなに恐喜されるでせうか。附錄として載せた熱田花街沿革略と都々一の起原(本誌本號所載のものとは別文です。)とは、この校訂の傍ら得た第一收穫です。これも必要と思ひ添へておきました。尙、諸賢に特に覽て頂きたいのは、「根元集」には諸在に熱田の舊地名や行事が現れてゐる事です。これも自分が、尾張名所圖會、尾張地名考、名古屋市史、其他の書物と故老二人の口述とによつて、殆ど全部くはしい頭註を施しました。本のある限り、是非同好の方々に行き亘ることを切望します。【尙廣告の心理ではありませんが、此の本だけ、五百部印刷、再版はしません。勿論紙型も取りあらず。無くなつたらそれで終ひです。尙、本叢書初編(十一月五日刊)は三百部數印刷でしたが、目下殘本十四冊、これも再版は不可能の事を述べておきます。】

——此の第二編、本月中旬出來——

名古屋市東區車道東町一五七
振替九六七二番

發行所 江戸軟派研究發行所

大正十三年十二月二十七日印刷
大正十四年一月一日發行

定價貳拾五錢 送費貳錢

大正十四年一月二十七日印刷
大正十四年二月一日發行
貳編第二册（通編第二十九册）

本文

宮のお龜考　附、よし〳〵節が事
梅亭金鵞の作物
鯛屋お仲が遺聞

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第二册

鯛屋お仲が遺聞

江戸軟派叢書貳編「都々一ぶし根元集」と本誌一月號都々一節起原考との補遺の一部分である。鯛屋お仲の傳説について、其後聞き込んだ事の二三を記すのである。

一、お仲は女房に非ずの説

お仲は、女房ではなかつたとの説である。即ち鯛屋の仲居だつた。さうして生れも伊勢だつたといふのである。（以下は、凡て本年一月上旬、誌友酒井潔氏が、他より聞き込んで下すつた材料である。）晩年、大分の財産を拵へて、在所の伊勢へ歸らうとした、とその便船が難船して、再び宮へ戻つた、さうして神戸の鯛屋へ舞戻り、一生を終つた。女房と間違へられたのも尤もで、このお仲が殆ど一手で妓樓の事を引廻してゐた。現に女房ではないといふ證據は、他に正妻があつて、それに子もあり、その血統が續いて、今日に至つてゐる、といふのである。女房と仲居との差はどゝいつぶしの根元に就ては、余り重大な問題ではないが、然し何れであらうか。小寺玉晁の「根元集」にはきつぱり女房とある。この酒井氏に聞かしてくれた昔神戸で勤めをしてゐた老婆といふのは、其の七歳位ゐの時に、お仲に逢つたのださうだ。しかしその子供の時の見聞（今日からは、多少の假想も混つてゐよう）よりは、嘉永六の序ある玉晁の記述に重きをおいたらどうか。しかし一方は廓内にゐた、子供乍ら事實に當つたといふのだから、信を措けぬこともない。迷つてゐると、偶然、用あつて、熱田に東北大助教授の古田氏を訪れた處、その家の老人も、聞けば女房のやうに覺えてゐるといはれた。さて何方か

二、鯛屋お仲の裾で掃く

お仲は、着物をぞろり〳〵と着て、だらしのないのが特徴だつたさうだ。それが爲、

神戸傳馬にや桑幕や要らぬ
　鯛屋お仲が裾で掃く

といふ唄が流行つたさうだ。（これは、酒井氏の聞き込みと、古田家老人と、一致した話である。）

三、お仲とよしこのに就て

酒井氏の質された老婆の言に依ると、都々一とお仲との事は少しも知らぬさうだ。たゞ鯛屋で、よしこのの會を時々やつた。その時お仲が、その中の秀逸に節付けをして唄つたそれが評判だつた、さうである。（然し、この話も、玉晁氏の記述の、最初唄ひ出したといふのは、全然よしこのに觸れてゐないから、都々一と見ねばならぬ。即ちこれの話をも事實とすると、お仲は、最初は都々一、それがよしこのと流行が替つてからは、「それは同じく玉晁の著「小唄雜誌」で、文政五年と定つてゐる。」それ以後は、よしこのをお仲が率先して唄つたのか。さうと取れぬ事もなからう。要するに、お仲は都々一及びよしこのの唄ひ手に適した程、美音で器用だつたのだらう。）

四、よしこのの流行について一説

よしこのの渡來流行に就ての一説。大丸屋（呉服商、京に本店を有した）の名古屋の隱居（恐らく分家の主人であらう）が、上方から將來して、この名古屋で流行した、よく神戸へ來ては唱つて聞かせた、その相手にお仲が出たと。これは、よしこの渡來に就て多少の眞實さがあらう。以上が、酒井氏から聞き込んだ主なるものである。

○

以下は、其後、自分の見當つた他書の記載で、自分の考及び根元集附錄の補遺たるもの

一、文政六年十一月、宮の傳馬町鶴屋の妓と府内駿河町の米屋某と心中した。その時流行した唄として、「小歌志彙集」（玉晁編）に十五首、更に七首の數へ歌が出てゐる。その唄によると、妓はおだい、男は半兵衛のやうである。

二、音曲神戸節（自分の藏稿本）の中に現れ又根元集の「度々逸」の註にも現れてゐる都々一の數首が、浮れ草（松井讓屋編：近世文藝叢書俚謠所收）の中の名古屋節の項の中に、そのまゝ現れてゐる。これを以てしても自分の前册「都々一節起原考」で說いた、都々一の異名が名古屋節だつたといふ推斷に證左さするに足りるものがあると思ふ。

（以上、一月二十五日夜、著者）

宮のお龜考

附、よし〳〵節の事

宮驛（熱田）の賣女をお龜と稱したことは、前冊の「都々一節起原考」にも略方を說いたが、尙、その補遺かた〴〵、纏めて記述しようといふのである。

お龜が、賣女の惣名となつたのは、「ごゞいつぶし根元集」のお哥女根元記が、享和癸亥の記入あり、從て同三年（癸亥）頃には、既に宮一般賣女の惣名になつてゐたと自分はいうた。その傍證を更に他に發見したからである。その前に、おかめの起原に就て、尙、一言略方を述べておきたい。

お龜とは、天狗の面が男、お龜の面が女の或るシンボルであることは、古くからいはれてゐるが、このお龜もそこらに起原を持つてゐはしないかといふ、自分で作る疑問である。これもあるが、然し自分は、「ごゞいつぶし根元集」の記事を信じたい。それは、同書のおかめの起原や鷄飯屋の始終に、確實に、一個お龜なる女性がゐて、それが熱田の東の出口、（東海道に沿つた）の鷄飯（茶飯に似たもの）茶屋の女中をしてゐて、人氣を得た、それが後に賣女の惣名となつた、且つお龜買ふ奴ドイツじや〳〵の唄まで生んだとある、あの記事に據るのである。尙、このお龜と汎稱した

については、此の個人名の他に、二三の異說がある。即ち、一、宮の熱田を由來、蓬萊（蓬が嶋）といふ傳說があるにより、蓬萊に遊ぶ龜の義から來たのだといふのと、二、一般に醜婦であつたから、お龜を異名にしたといふ說の如きである。然し是等は、個人名のお龜といふ根元集の說がある限り、全く後人の附會、若しくは想像であらうと思ふ。偖、このお龜が、寬政十二年末の茶店開店當時から、僅かの間に賣女の惣名となつた事は、根元集のお哥女根元記にもある通りであるが、更に、その享和三年よりも早く、享和二年の記事を他に發見したのである。それは、馬琴の「覊旅漫錄」である。同書は、壬戌と外題にもある通り、享和二年五月九日江戸を立つて、京阪に遊び、同八月二十四日歸府した、馬琴覊中の漫錄である。即ちその往路の宮に關する記事中に發見したのである。曰く、

「六月三日より雨ふらずして暑氣甚し。廿五日に至りて雨少しくふれり。近在みな雨乞す。予はこの時、名古屋にありき。廿七日の朝、桑名、四日市邊、朝四ッ時頃まで雨ふりけるよしなれど、宮は少しふりぬ。（以下二行書にて、久）宮と島見に一兩年前よりめしもりをおく事をゆるさる。吉田、たか崎には似ず、いづれも醜婦なり。名古屋人、これをおかめと渾名せり。妓樓あれど、旅人はその旅店へもよぶよし。廿七日に宮より乘船（下略）」

とある、是である。即ち享和二年六月、既にお龜と汎稱した證であらう。すれば、寬政十二年秋のお龜（個人名）茶屋より僅か翌享和元年、二年と、丸二年にもならないのである。お龜の

流行の程度、以て想ふべしである。〔この馬琴翁の筆法も、取りやうによつては、龍媒だから、お龜といつたのだとも取れるが、しかしそれは偶然の暗合と自分は解きたい。〕

偖このお龜の汎稱が、いつ迄稱へられたか。それには、確たる文献がない。戲作、俚謠に求めるより外にない。これには、幸はい、一九の東海道膝栗毛が眞先にある。四編の下の始め、桑名の先の所に、「此頃旅人のうたふをきけば、はやりうた「しぐれはまぐり土産にさんせ、宮のお龜が情所、ヤレコリヤよヲしく〱よし」とある、是である。この四編の下は、文化二年の刊即ちこの當時、お龜と稱したといふ一資料である。〔この文化二年は享和二年より四年目〕尚、それ以後に於ては、幸はひ、小唄志彙集（小寺玉晁著、近世文藝叢書俚謠所收）の中に、

〇同年（文政三年）冬、でんぐりぶし流行

「宮のおかめさんにしま縮緬の衣裳着せて、ながむれば、いかなお宮さんでもお腰がたよく〱なされますか、

こいつもばいしてでんぐりまなこのばい」

といふのがある、此のおかめである。即ち享和二年を距る十九年目の文政三年、尚、お龜が汎稱として續いた證左である。

それ以後にありては、尚、小唄のちまた（同じく小寺玉晁の著、近世文藝叢書俚謠所收）なる小唄雜記の中に「一天保元、庚寅年春、お影參りといふ事六十一年目の由にて、諸國の人類に伊勢へ參り、其節左の唄大に流行」といふがあつて、その唄の一つに、

おかめ〳〵とナア云ふておいゝれるな、わたしや新長屋の福の神よトヽセ

といふのがある。是である。即ち、天保元年（馬琴の羇旅漫錄の享和二年より二十九年目。）に及んでなほお龜の名のあつた證據である。但しこのお龜は、或は既に、神戸、傳馬（第一流と第二流）の遊女をいはずして第三流の新長屋（元の鷄飯屋附近の遊里として發達したるもの、即ち、宮の東の出入口、一名突出ともいひ、後に古町遊廓と稱し、明治四十四年まで存在してゐた。）を主に稱したものかも知れない。

この新長屋は、中々當時安值專門で持てたと見えて、この唄より少し以前の、文政十一年流行のどん〳〵節といふ中に、

「高い二階から新長屋見ればの、かさやひぜんの花ざかりの、ハリハドン〳〵」

といふのがある、此の通りの繁昌さであつたのである。〔この唄なども、以前なれば、この新長屋もうつかり見逃す所であつたが、それがすぐ氣が付くやうになつたのは、偏に「ごくいつぶし根元集」のお蔭である。〕これらに據つても、新長屋が、引續き（但し根元集には、一時廢絶とある）、この文政、天保間、競ひ迎へたことが分る。（以て、宮島遊里の、新長屋についての沿革資料とも謂へよう。）

それ以後に於ては、俚謠に現れた「お龜」は見當らない、唯神戸を唱つたものが、天保二年にある。曰く、

同年秋（天保二）東都よりはやり來る唄

〔前二略〕戀しき人をあとにして、嫌定のぬ旅の空、心はにごり涙顏、上着の袖にまぎらして、小くびかたむけ行く足の、あとにひかるゝ後髮、さてこそ永樂屋が氣にかゝる、コレけつまづくか、休み〳〵行かしやんしたがよいわいな」

といふのが是で、即ちこの永樂屋は、當時神戸町の大樓であつたのである。〔拙訂、「どゝいつぶし俣元集」にくはしく出でたり。〕

以後、お龜について確たる何物もないが、唯、宮の賣女に觸れた一戯作があるから、序でに附記しておかう。稿本、「栗毛の人眞似」前編二冊、〔序に、干時天保十一庚子春、とあり。〕著者は、石亭山人（或は石亭山猿。前編下の跋に、山鳥部金城南下市隱、石亭山猿誌とありて、石峯とよまるゝ印を捺せり。即ち、名古屋在住の人士なりしならんも、身元不詳）といふのであるが、その初編上のはじめ、宮を描寫した中に、

「…………。跡先かまわず、名古屋を立出、はやくも宮宿を過んとして、柳屋といふ酒妓家を通りすぎんとして、

けいせいの心　柳屋客は風
なびく枝あり　ふる枝もあり

德「ハヽヽヽ、けいせいも余り名がもつたいねイ、飯もりがしよくぶんだぜへ「めしもりといつちやふる枝もありが乘らねいからさ德「爰らのめしもりがふるもごていそふだ。誰がふられて

だまつて居るものか、しかしおめいなら、ふるだらう、その面（つら）だア、夜鷹もことわるだらう

佐「こふおいらが名吟をはいたとて、そうねだ（姉）むな（下略）」〔この佐、さ徳とは、佐九利兵衛さ、徳七なる二人の旅に記せる故也。〕〔この柳屋といふのは「どゞいつぶし根元集」の附録によると、傳馬町の妓樓で、天保十己亥年彌生、熱田傳馬町柳屋長右衛門、黄花樓出來と同書にある。〕

却說、このお龜が、新長屋（後に古町といふ）方面の遊女の惣名として殘りゐたらしいのは、私が、昨年末、此等熱田の古遊里遺跡探索の際、ある老婆から聞いた所「私の若い時分まで、古町のおやまに限り、お龜といつたのを覺えてゐます」といつたのを信ずると、明治前後まで尙一局部に惣名として、昔乍らの此名が傳へられてゐたのである。

以上は、旣に、「どゞいつ節根元集」の附錄に於て自分の述べた事項もあるが、同じく玉晁編の俚謠雜著其他から偶然拾ひ出したものを基に、こゝに纏めて見たものである。

〇附、よし〳〵節の事

よし〳〵節なるものが、名古屋に、丁度、都々一の生れる前後に流行つたことは、よし〳〵の調子を尻に附けた唄を數首、「どゞいつ節根元集」にも載せてゐるから、分ることであるが、根元集に不備な、その流行の年代が、偶然、「小唄志藁集」によつて分つたのである。卽ちそれは文化二年乙丑の名古屋流行である。小唄志藁集の冒頭に、「根元集」所載のよし〳〵節と同じもの、同じ數がそのまゝ載せられてゐる。そのよし〳〵節であるが、これは、其の頃榮えて、

（現に、文化二年刊行の、膝栗毛のお龜の唄「前記」も語尾によし〳〵とあるから、よし〳〵節の一であらう。）倘、遙か後の天保四年春にも、再び流行したと見える。同小寺の著「小唄のちまた」の天保四年春の頃に、よし〳〵節流行さして、

「正月二日の初夢に、あまた七福神寄集りて、四方を見渡す天保山、サヽ寶の入船よし〳〵」

以下七首の唄を載せてゐる。丁度、唄の形も、初期、文化二年流行の、

あてうし「鶴が岡での神前に、あまたのかぶとの有る其中に、是が高貞さんの兜なり、サヽ顔世が目ききはよし〳〵」（小唄志濃集）風俗畫報の二六二、廣田翁の文。ざゞいつぶし根元集。ともに同じ。）

とあるものと、似てゐるではないか。然るに、これは、名古屋で生れて、それが上方へ流行り、更に名古屋へ舞戻つたものゝやうに思へるのである。即ち、天保十五年辰之歳大新板の頭書のある、「日本唐土二千年袖鑒」（大阪板）といふものゝ、拾編に、文化六年、サヽよし〳〵ぶし（二十七年ニナル）と云ふのがあるからである。名古屋は、文化二年の流行である。それが、海を越えて、桑名に唱はれてゐた事、膝栗毛の示す通りである。そのこれが四五年を經て、上方で流行り、更に、大阪風の唄が天保期に名古屋に逆戻りした、かやうに見て差支ないかと思ふ。

「さうして、これが、或は、よしこのと何らかの因縁を持つてゐはしないか。しかし未考ではある。」（倘、風俗畫報の廣田翁の文には、これを吉之節といはれてゐる。是れ吉々の誤植か、又は同翁の明らかに思ひ違ひであらう。）

梅亭金鵞の作物

「妙竹林話七偏人」十五巻の作者として知られてゐる、末期の戯作者金鵞に觸れて見ようといふのである。金鵞の如き末輩を云々するのは可笑しいといふ評が出るかも知れないが、然し私一個からいふと、懐しいものがあるのである。「七偏人」は、子供の時、帝國文庫の活字本で讀んだ。その折、腹の皮の撚れるのを禁め得なかつた。「八笑人」や「和合人」にも隨分さうした傾向があつたが、七偏人に於て殊にさうであつた。私は、あの惡ふざけ、くどい地口、猥雜な彼等の趣向が、堪らなく面白かつたのである。それが未だに失せない。時々「八笑人」や「和合人」を見ると、もつと此のくどさを突き詰めたい氣になつて、「七偏人」に及ぶ。莫迦らしいと知り乍ら、「七偏人」にかかる。例の如しだと知り乍らである。それだけ、我々にも、「七偏人」の内容と同じい惡ふざけ、冗い地口、猥雜な趣向を歡迎する、野卑さが多量にあるのかも知れない。此の意味で、鯉丈の「八」や「和」と共に、此の金鵞の「七」は私の愛讀の一である。やゝ後になつて例の「春雨衣」が、その署名吾妻雄兎子が金鵞の變名であることを知つた。それは、十數年以前、大日本人名辭書の與へた智識である。に依つて、益々私の注意を惹いた。吾妻雄兎子の作が、私を喜ばしてゐるのでもない。然しあの多數な（恐らく二三十種）雄兎子署名の讀和や繪入本を私は一頃耽讀したものだ。丁度またか、例によつて例の如しと知り乍らである。同じ事

の連續、同じ趣向、猥褻な尾籠なうるさい描寫と、思ひながら、昔、初期の私には、興味があつた。その點に於て、私は吾妻雄兎子は、春水（狂訓亭、又は嬌訓亭）と共に忘られぬ名であつた。それと、七偏人と同一作者であると知つて、私は、成程と思へた。結局「七偏人」の類は、下級人情本的滑稽本であるからである。吾妻雄兎子の本領の作物としては、七偏人も成程と思へるからである。然し今、我々は、單なる好き心、或は猥雜な滑稽を喜ぶ心から、彼――金鵞に向つてはならない。その當時の時代――此の背景の力を勿論考へなくてはならない。畢竟彼も時代の兒であつた。彼は明治維新後まで生きてゐた。明治十年以後は、團々珍聞の記者として、相當に存在を保つた。あの團々珍聞――私の子供の頃、あの圖書だけにグロテスクやエロチックな感じを唆られた、……あれに記者をしてゐた。「七偏人」の內容、氣分が、散髮になつただけである。大名や公方の天下が、新政府の參與の天下に代つただけである。彼等所謂團珍式の諷刺、惡ふざけは、七偏人をして馬車走り汽車駈る明治の世に引張り出したといふに過ぎぬ。金鵞は、とに角その始終を、一ツの色で終らしめた。そこに彼のみに、他の魯文（假名垣）などと異つた色彩があると思ふ。魯文の如きは、相當に時代の新しさを追ふだけの教養（受け身、剽竊も樣々あつたが）に忘れなかつた。「西洋膝栗毛」の如き作は、金鵞は眞似が出來なかつた。そこに金鵞らしい特色があらうと思ふ。金鵞が團珍に據つたことは、彼自らを救ふためだつたのである。然し、昔の七偏人がとにかくある特色を保ちながらも時代の本流からは押のけられて、

眞面目に云々されないと同時に、團珍も相當に當時代の人心を刺戟し乍らも、未だ眞面目に人々からいはれてゐない。結局彼は、古壁に生えた黴、菌の如きものであつたのである。これが然し彼の一生を通じてゐるから面白い。然し彼も晩年は、清風明月を友として、寡居隱栖したといはれてゐる。これ金鵞の如き幕末頽廢の殘骸そのものには、即ちあの國會前後の日本の新しい政治上の運動や、及び坪内氏によつて唱へられた小說戲作の革新運動などには、てんから無理解無敎養な彼には、手がつけられなかつたのかも知れない。（又、拮抗する程の茶氣もなかつた、そんな年でもなかつたのだ。）同じ過渡期の戲作者というても、假名垣魯文の如きは、脚本の默阿彌と相拮抗して、殘燈を輝らしてゐた。にひきかへ、彼の此の跼蹐さは。それだけ彼は全く江戸期の遺物たるに過ぎなかつたのであらう。或は、魯文、默阿彌よりは劣つた才能の把持であつたともいへる。要するに、彼の晩年は最不幸であつた。纔かに團珍の記者として餘喘を保つてゐるに過ぎなかつた。迚も正系の文學史上の人物ではなかつた。此に彼を愛する私からは、同情の一掬の涙なき能はざる次第である。これが私を驅つて此の筆を執らしめたともいひ得られる。さて先づ、金鵞の作物を云々する以前、彼の輪廓を明らかにする爲、彼の小傳に觸れてみよう。是に就ては、彼としては氣の毒な程、其の資料に欠けてゐる。要するに七偏人の作者として最も響いてゐるだけ、七偏人は梅亭金鵞なりとは容易に聯想されるが、他は殆ど知られてゐない。それ丈、彼の逸話逸聞としても、その稱く名づくべきものも、殆ど數ふる

にも足らない。いろ〳〵詮索しては見たが結局徒勞であつた。唯、日本百科大辭典（三省堂）の長連恒氏執筆の金鵞傳が、まだしも他書の凡てに勝つて、豊富である。今それを左に摘載して見よう。

ばいていきんが（梅亭金鵞）徳川時代末より明治の中頃まで生存せし小說家。瓜生氏、名は政和、通稱熊三郎、柳剛流の劍客吉田勝之亟の次子なり、劍術に達し、瓜生氏の養子となる。本郷附木店に住するに及び、文章を好みて武術を廢す。服部應賀を介して松亭金水に交はり、戯れに妙竹林話七偏人を著はし、以後青渓雄兎子、鶯渓隱士、松亭鶴仙、竹亭綠水、半生半史、文福茶釜鼓等の戯號を以て、小說戯文をものし、又、迂流（狂句に用ふ）、白山人化三、梅亭化叟（以上雜報に用ふ）等の號あり。團々珍聞を起し、其記者となり、滑稽小說家の泰斗として知られしが、晩年に至り、富貴榮利を見ること塵芥の如く、靜に老を團子坂下に養ひ、偏に風月を友として、世外に超然たりつ。明治二十六年六月三十日を以て歿す、年七十三。淺草區阿部川町稱念寺内西尊寺に葬る。著はす所、七偏人のほかに、千社參、王子紀行、處女七種（六七篇。初篇より五篇までは春水作）、春色初若那（四五篇。初篇、二篇は狂文亭春江、三篇は、春水作。）、花鳥風月（三、四篇。初、二篇は狂訓亭主人作）、夜三の月 柳の横櫛等あり。

以上が、長氏執筆の略傳であるが、これが比較的、まだ悉しいものなのである。他に、大日本人名辭書の古今狂歌人物志に據つたもの、帝國文庫「人情本傑作集」下卷の解題中のもの、及び滑稽文學全集第五卷七偏人解題中のもの等があるが、此等は凡て人名辭書の小傳が基本となつてゐるらしい。帝文の小傳は、金鵞の門人鶯亭金升氏（現存）から聞く所とはあるが、人名辭書のと大同小異である。〔刊號の記載も、他は頗る簡單で、雄兎子と、鶯渓隱士と、白山人と、三者を人名辭書、及、全集には、晩年の梅亭化三の名江湖に鳴れりとあるを見るのみである。〕唯、異同点は、帝文の解題が、鶯亭氏から聞いたといふに拘らず、歿年を明治二十三年、壽を七十

さしてゐる事である。滑稽全集は、人名辭書に據つたのか、二十六年六月、七十三さしてゐる。前掲の長氏の略傳も二十六年、六月三十日であり、壽も七十三である、帝文本の相異は何から起つたか、誤植か、誤聞か、何れであらうか。（尙、村上靜人氏の「人情本略史」にも金鷲の小傳を見るが、是は、帝文に據つたものらしい。殆ど同じである。）長氏の略傳に洩れて、他に散記を見るのは、その交友人名である。今、他書の記載及び自分の思ひつきを綜めて、抄記して見よう。

交友人名。○瀧亭鯉丈。（帝文解題に據る。）○萬亭（服部）應賀（帝文。全集。尙、百科大辭典にも、應賀を介して、金水に交はるとあり。）○岳亭春信（全集。及び、七偏人四編の序を現に書きたれり。）○鶴亭秀賀（七編人三編の序の筆者。）○竹葉舍金瓶（金水の門人にして早世す。同社の好みを以て、その著「花鳥風月」の續篇を金鷲著すと自らいへるに據る。）

内、鯉丈は人も知る八笑人、和合人等の著者。應賀は、釋迦八相倭文庫等の合卷作者。春信は、北齋門人にして、畫及び戲作數種ある事、人の知る所也。秀賀また安矢女草十二卷の人情本及び他の作がある。岳亭春信は、彼と竹馬の友であつた事は、其の「七偏人」四編の序に春信自ら記す所である。

〔梅亭が初めゐた、附木店といふのは、東京俗談（關根正直氏著）中の、本郷只樂邊の第九にその說明を見る。要記すると、「四丁目五丁目（本郷）の間を西へ入る小路あり。余が幼き時まで附木店と呼べり。いかなる故かを知らざりしに、塵塚談（小川顯道著、温知叢書に所收。久註）には、「四丁目に附木店といふ地名あり。予十七八歲までは一二間有之しが、是も絕えたり。一町を隔てゝ兩所（肴店附木店の兩所也）とも跡方もなし」とあり。肴店の名は知る人なけれど、附木店は今なほこゝに住める古老の口にのこれり」と。〕

尙、彼の「七偏人」が此等の交友たちを題材にしたものであることは（帝文解題にいへり）、ともあるべきこ

とで、今確實な記錄を見ずとも、想像に難くはないであらう。次に彼の戲作の種類と數を、前述と重複するものもあるが、その全部を表にして見よう。〔年齢は、明治二十六年七十三歳說に據る。即ち文政四年生とする。〕

〇金鵞戲作年表

年齢	外題	畫者	冊數	部類	刊行年代
二二(?)	一、春色初若那		四・五篇六冊	(人情本)	不詳〔天保十三年カ〕

〇備考―春色初若那初・二篇六冊、狂文亭春江作、英一畫。〔天保十一年〕三篇三冊、春笑(二代春水)作、年代不詳。

年齢	外題	畫者	冊數	部類	刊行年代
二二(?) 二四(?)	二、花鳥風月	國芳 寄晴	三・四篇六冊	(同)	(三篇)天保十三年頃 (四篇)弘化元年頃

〇右、初・二篇六冊、初代春水訂、竹葉舍金瓶作、天保十一、二年頃刊。〔金瓶は、天保十二、三年頃歿。同三篇序に、金鵞自らいへり。〕

年齢	外題	畫者	冊數	部類	刊行年代
二四(?)	三、秋色艶麗 處女(むすめ)七種	梅里畫	六・七篇六冊	(同)	弘化元年頃

〇天保七年初篇刊 春水作、英泉、英一畫。五篇は天保十一年刊、作、畫、同上。

年齢	外題	畫者	冊數	部類	刊行年代
?	四、夜三の月 柳の横櫛	鶯齋畫	初―五篇十五冊	(同)	年代不詳〔七偏人以前、嘉永期の作カ〕
?	五、春色野咲の花(イ梅)	同	前後六冊	(同)	同
?	六、春宵新話 風見草	芳幾畫	初・二・三篇九冊	(同)	同

〇此書、金鵞前揭の「柳の横櫛」の後篇也。〔人情本目錄に據る。〕

三七
三八
四一
四二
四三　七、妙竹林話七偏人　鶯亭金升（梅亭門人）　初・二・三・四・五篇 十五冊　（滑稽本）　初篇 安政四年／二篇 同五年／三篇 文久元年／四篇 同二年／五篇 同三年

（備考。鯉丈作の「八笑人」初篇より四篇追加まで十二冊、文政三年より天保五年迄の刊、同「和合人」初篇三、弐篇二、追加二、参篇三計十冊、天保十二年刊。同四篇三冊（二代春水作）弘化元年刊。

四三後　八、滑稽千社参　鶯亭金升　初より四篇 八冊　（同）　年代不詳（文久三年以後）

（七偏人以後の作たる事明らかなり。即ち七偏人五篇の文久三年以後の刊ならん。

？　九、雑司ヶ谷紀行後篇 王子紀行　三冊　（同）　同　（千社参りと同時頃か。）

○備考。滑稽俳諧 堀の内詣三冊（一九作、二世歌麿画）文化十三年。後篇 堀の内詣 雑司ヶ谷紀行三冊（一九作）文政四年刊也。

以上を要約すると、彼の作として、獨立せるもの、（補遺物を略く）人情本に於て「柳の横櫛」自初篇至五篇十五冊、同後編風見草自初篇至三篇九冊、春色野咲の花の前後六冊の三種と、滑稽本に於て、七偏人の十五冊と、滑稽千社参の八冊とのみである。「七偏人」でとにかく盛名を博した彼として は多作とはいへない。それだけ彼は、摸倣の才ばかりが多少利いて、獨創の才に乏しかつたのか、又は、好きな戯作にも懶惰の本性を曝露して、從つて注文はあつてもおいそれと書かなかつたのか、又は、幕末多事なるに追はれて、彼もそれ所ではなかつたのか。とにかく、彼は、或は、戯作も本業とまでなり切らず、唯、連中と、ワイ〳〵ふざけ廻るのに寧日なかつたのかも

知れない。それにしても、中年期を過ぎた、定命に近い年配の彼としては、よくあの七偏人や千社參の惡ふざけの趣向が出來たものだ。無論周圍の實寫でなくば、あゝも穴くは、色々工夫して書かれなかつたであらう。即ち實事に近いものが多かつたらう。すると、よくもあんなにして遊び廻れた事の時間と根氣と、資力とに不思議ならざるを得ぬ。或は、彼は、資力に於ては、相當に富裕なるものがあつたのではなからうか、此の富裕さが、彼をして戲作專業にもならしめなかつた、三分戲作、七分はだゞら遊びといつた生活ではなかつたらうか。稿料も幾程も上らなかつたらうと見ての推察である。或は連中に富有者があつて、それを唆かしては食ひ仆してばかりゐたのか。連中を描寫したといふが、それはいゝとしても、その彼自身は、連中の何に當るであらうか。「七偏人」の喜次郎、「千社參」の笑次郎が、或は彼の位置でなかつたらうか。

幕末維新の際をどうして暮したかは不明である。野村文夫氏の團々珍聞に赴いて、（これを創む、又は起すと、他書にあるが、創めたのは、野村氏で、彼は、編輯一切の主であつたのであらう。）團珍に筆を執つたといふ。梅亭化叟の名は爲に江湖に響き、その狂歌又頗る歡迎せられたといふが、今これに就ては、的確な資料の持ち合せのないのを憾みとする。家藏の「團々珍聞」はその初期のもの、第二十六號より第五十號まで、第七十六號より第百號までの合本二冊、最近これの全部に眼を徹して見たが、一向化叟の名に見當らなかつた。とにかく、團々珍聞の創立當時、直ちに干與したとすれば、彼の五十七歲時である。（梅亭金升氏の入門もこの頃であらう。）最晩年風月を愛し、俗塵を離れたといふが、それは彼の何歲頃であつたか。六十歲と

すれば、團珍に在籍僅か四年、これでは余り短かい。恐らく、七十歳、(明治二十三年)前後の事であらう。同じく明治前半期まで生きた戯作者であるとはいへ、魯文とは、傾向の差が著しい。即ち魯文が、前半期の數の戯作から、西洋膝栗毛——假名讀新聞の編輯——魯文珍報といつたものにひきかへ、金鵞は七偏人——千社參——團々珍聞の記者といつたもので、即ちその對照が双方の個性を著しく浮きたゝしてゐると思ふ。さうして、晩年が、一方は雜著戯文の佗くなきありて、默阿彌等の交友もありて花やかであつたにひきかへ、一方は、不本意か本意か、とにかく隱栖の寂しさと來たのである。(魯文の明治二十七年十月物故、六十六歳も、金鵞と、先後、及び、年齢に多少の差はあるが、過去期の二文星先後して二ヶ年の間に消えた事は奇である。)

偖、金鵞の戯作の傳統は何處にあつたらうか。無論金水がその重なるものではあつたらう。(初代爲永春水も、亦彼の私淑する所であつたらう。例は彼が、春水の補作を多く爲してゐるに徴しても。)金水は、彼の交友(滑稽全集、及び百科大辭典等。)であつたといふのと師であつた(帝文等)といふのと二説があるが、師弟の關係があつたと見るべきであらう。即ち、彼が、花鳥風月の補作の自序にも、同社中の金瓶の作を補する意を述べてゐるからである。或は初めは、入門といふよりも、時折遊びに行つた、自分も眞似したくなり、戯作の筆を執つた、同時に、彼を師と仰いで、金水の一字も貰つたと見るべきであらう。さうして、金水も彼には相當な禮を執りはしたらう。一劍客の次子で、劍道の達人(諸說同。)であつた彼(金鵞)に對して、身分の相違からは、多少の遠慮もあつたらう。しかも何分一方は既に、鼻山人、春水、曲山人と並び稱せられた人情本の大家、且つ四十代の金水、一方はまだ二十歳(はたち)過ぎた斗りの若輩、そ

こに、金鵞としては、弟子の禮を踐んだと見るのは、當然の事である。而してその入門當時は恐らく、天保十三四年頃、春水手鎖間もなく歿の十三年七月後、金水獨り健在の頃であつたらう。(即ち時に彼二十二三歳、その處女作は、初若那の補作にあつたらう。時に、金水四十六歳。)さにかく、金水の助教は、當初の人情本の諸補作、創作に於て多かつたに違ひない。その證據は、彼自ら左の如く告白してゐるのに由つて分る。

「(前略)園が主人が誂を翁さまかせと請け込んで、種のよいのを當て事に、(春水の補作なるが故也、久)一鋤入れては見るものゝ、肥料のきかぬ草なれば、伸び立つべくもあらざるを、松亭大人が添へ竹に、どうやら斯うやら取り付いて、花咲くまでには爲したれど、先に翁(春水を斥す。久)がものしたる其草々に並べては、見るべき色香あらざれど。(下略)」〔七偏人六編上[illegible]〕

といふてゐるのに據つても分る。さうして、自ら金水を大人と稱したことはその當であるが、春水を讀して翁といふてゐる。恰も俳諧者流の芭蕉を翁と敬稱するに髣髴たるものがあるではないか。即ち彼は、事實、春水を人情本宗の翁だと信じ、春水より得る所も多きものあつたが故であらう。從而、彼は、春水の補作を屢々作してゐるが、一は頗る光榮に感じて行つた事だらう。人情本は如斯くにして、金水を受けてゐるさ見ても、然れば、滑稽本は何から來たか。是れ無論鯉丈よりの感化、又はその模倣に來たのである。現に、鯉丈とは、交友關係があつたとも稱するし、とにかく、多少親炙する所もあつたらうし、又作物上の感化も著しかつたらう。或は、鯉丈作の「八笑人」「和合人」の聲名高きにつれた、模倣心理も動いたであらう。現に、此等の消息を自ら告ぐるものに、彼の「七偏人」の自叙がある。

「瀧亭大人が八笑人には、八人の連をあげ、また和合人は、六人の笑客を集へ、滑稽洒落の粋をはき、人を笑はし腹の皮をよぢらしむ、其筆先の浦山しさに、八人と六人の中をとり、七人の偏屈ものを引出して、七偏人といふ名を付、當放題なる戯言をものし、寶集堂の主人をおたて、お先真暗厚面皮一部の本となしてもて書屋の肩を重らすもいかに、八笑人や和合人の玉や金の其中へ、瓦に齊しき七偏人、嗚呼我ながら押強しさ、案じたより産が安く、少しは賞せらるゝと板元い、辞な力におゝかな悔り、段々後を書次で、何様やらかうやら第五編(云々)。」

とあるに據つて、彼が當初摸倣に出で、自信のなかつた事が知れよう。然し此の滑稽本の處女作の爲には、彼の師金水、及び交友は、相應に力を盡してゐる。即ち、初編は松亭迂叟(金水)、二編は清江舍秋水(この傳不詳)。三編は、鶴亭秀賀(この秀賀の序文、七偏人につきて賞揚を極む)、四編は、岳亭春信の序である。尚彼の門下には晩年の鶯亭金升氏の他に、初期時代の後進に、玉屋文魚なるものがあつたらしい。この文魚は、京傳を引立て丶、彼の遊里の實地練習をして自在ならしめたといふ大通の文魚とは、恐らく同名異人であらう。年代の相違からも、境遇からもさうらしく思へる。とに角この玉屋文魚なるは、金鷲の准弟子であつたらしい。その證左は、「柳の横櫛」(金鷲作)の初編の序に、左の如くあるからである。

「(前略)友人金鷲子を訪らふに例も替らぬ書肆の催促、予も好める道なれば、予が稿半をさし覗くに、(中略)感ずる己な丁得に棄てず、序文してよと託せられ、辞めど許さぬ主人が頭振、未作徒馴ぬ禅官の突出し、先生大人の名代とは有難うざんすと云々」

尚、自分の附加へたい事は、從來一般に傳へられてゐる、現に百科大辭典の長氏說にも見ゆ

る、「七偏人」に際して、應賀を介して金水に交つた、若しくは入門したとあるのは、全く誤謬であらうといふ一事である。應賀が金水入門のための口を利いたといふのは、或は事實かも知れない、が「七偏人」の折ではなからうといふのである。即ち「七偏人」以前に、既に、「金鵞」の署名の下に、二三の春水の補作ある事、既記の如くである。春水の補作は、年代不詳故、「七偏人」以後だといふ説が成り立つかも知れない。然し、幸はひ「花鳥風月」四篇の甕六庵甲羅の序なるものがある。此の序を讀めば、此の作が弘化元年の頃即ち「七偏人」以前の作たる事は、殆ど確實性を持つた話であることが分る。即ち、

「(前略)應の言端へ駈け込む者は、是れ梅亭の主人にて、一昨年以來の騒しきに、人情本でもあるめえと、久々に四篇も出來てはゐたれど、其儘机の引出の主ともなれと打込置しに、今朝白銀町から出かけて來て、世界は既に太平鼓腹、花鳥風月の折からなるに、例の满尾を如何なせしやと、小言いはれて取敢ず、此の草稿は看せたれど、序文はお前に話してあれば夫を貰ひに來やしたと、聞いて(云々)」

とある。この一昨年以來の騒ぎとは天保十三年の水越が出した人情本に對する嚴令、春水の手鎖、同死歿等を指したので、この今年の太平鼓腹とは、天保十四年の水越の第一回の失脚、その後の小康を指したもので、即ちこの作天保十五年の五月以前の同年の板と見るべしといふに據つてである。〔同年六月、水野再び老中、その年十二月弘化と改元。但し水越、翌弘化二年二月、再び罷免〕この騒がしさを、ペルリ渡來の嘉永六年〔弘化元年より十年目〕、翌七年(安政元年)の如きも、出版界は取りたくもあるが、然し、ペルリ渡來の嘉永六年、翌七年の如きも、出版界は相變らずの駄作頻出である。然るが故に、この騒ぎとは出版界の受けたる恐慌、即ち天保十

三年の嚴命と見たい、殊に「人情本でもあるゆゑ」と人情本に結び付け、且つ自分らの宗たる春水の被害を特に大騷ぎというたとも思へるからである。〔尙、此の類推に似たものは、既に、村上濱人氏も下してゐる。〕即ち是にして見らない限り、彼は、「七偏人」の安政四年以前に、既に、人情本に於て作あり、且つ金鵞と稱し、金水社中たる事を標示してゐるのである。即ち、自分は、彼が人情本の作は、多く「七偏人」以前に係り、其の「七偏人」に至つて、純滑稽本作家になつたとも見たいのである。柳の横櫛の如きも、多分この「七偏人」以前であらうといふのである。「千社參」等が、彼の維新前の終筆だと思はれるのである。然れば、その他に於て、彼は何を遺してゐるか、まだ埋れてゐる作がありはしないか、その疑問は、彼の戲作者過程の長きより當然起る疑問である。これには吾妻雛兎子の假名作があるのである。或は、この方が彼の金穴であつたのかも知れない。さうして、この無數の雛兎子作は、「七偏人」「千社參」の前にも無論あつたらうし、こればかりは、（正系の人情本に筆は絶つてもこれ丈は）維新前後にも盛んに書き毆つたものであつたらうと思ふ。即ちとに角、金水に目見得した折は、「七偏人」ではないのである。殊に、七偏人の滑稽本と、金水のお得意(とくい)の人情本とは柄(がら)が違ふのである。即ち金水に就いた折は、人情本作家の眞似のため、後年の七偏人〔この金水への入門を二十二歳の天保十三年と見て、七偏人の安政四年の三十七歳迄には、十五年の距離がある。〕當時には、既に獨立した形を備へてゐたが、猶ほ師導の禮を執つてゐた金水の序をその初編に載せた、と見るべきであらうと思ふ。さうして使ひ慣れた金鵞（人情本作家としての名たる）を其の儘用ゐたものと見るべきであらうと思ふ。

餘談尙一回、及び彼の「七偏人」の他に、滑稽本の一作「千社參」（未翻刻のもの）の極概概評に移らうと思ふ。

著者より

どゝいつ節根元集の延刊したに就き

簡單にこの行きさつを述べたい。最初あの本の複寫を東北大法文科在學の某生に依頼したのは、昨年の夏休の時で、まだ叢書の計畫を實行しなかつた折だ。その後忘れてゐた十二月に、某生は約を重んじて、專任教授が留學中であつたり、又は狩野氏本が未整理の儘であつたりしていけないといふのを奔走して呉れられて複本が無事に自分に届いた。その時、實は叢書の第二編として「豊後節」が過半出來てゐた。然し竹山人氏はじめ多數翹望の此の珍本をどうがなして眞先にと思つたからすぐ校訂頭註にかゝり、同時に速刻某生へ、大學へむけ出版許可の依頼に及んでくれるやう依頼した。返事が來ない。十九日に又依頼に及んだ。その頃原稿は完成してゐた。多分よからうと高をくゝつて、(これによつて自分が一月苦んだのである)印刷所へ廻した。某生へ二十二日に又手紙を出した。とあの本の初校の出た二十六日に、漸く三本目の自分の手紙を見て、某生から驚いて暫く延刊して貰ひたいといふてきた。それは「寫さして貰ふ時、出版するとはいうてないから、大學の好意に對しても濟まぬ。全く研究用と述べてあるから」といふので、然し事情が急なれば直接大學の圖書館長へ依頼してくれと返事が來た。此方は意外に戸惑ひしたが、すぐ雜誌見本一册と、初校と、事情を縷々述べた手紙とを添へて、館長の武内義雄氏の所へ依頼に及んだ。電報料も封じておいた。同時に某生へも依頼した。所が中々その返事が來ぬ。雜誌の廣告は見らるゝ通り上旬を中旬と更へた(印刷所は、年内に收める積りだつたさうだ)印刷所の義俠で組のまゝ暫く待つ事になつた一月になつて、偶然、該大學の助教授古田良一氏が予と中學が同窓である事を知り、古田氏の實家の熱田へも赴いて事情を話し、武内氏への口添を依頼した。古田氏は、乍陰私の仕事を夙うから知つてゐて下すつた、すぐ依頼狀を送るとの快諾を得た。この古田氏の居宅が、丁度根元集の「中島」のすぐ近くなのも心が惹かれた。中々返事が來ない。組代の損はいゝとしても、自分の半月の苦心、奔走、諸君の期待、折角産れようとしたものが、暗に葬られる、それが殘念だつた。坪内博士や市島氏へ口添へを依頼に及ばうかとも思つた然し東北大學でも自分に諒解はあらうと信じてゐた。十二日に、武内氏から返電が來て、「返事暫らく待て」と來た。同時に、某生からの手紙に、大學では此方がペテンにかけたやうに怒つてゐられる、出版の意志を隱して拔いたやうにとの事であつた。で更に、もう一度武内氏へ此の誤解を解くやう書き、非賣品でいゝから直ちに刊行の出來るやう、懇々說いた。と同時に實は若しこの問題が長びけば自分も江湖に申分がないので、根元集の複本を此方でも探さうと東西奔走し、容易に玉晁著と分つたにひきかへ、この複本は、市内の何處にもなかつた。督促が諸君から每日數本來る。弱つて、後の計畫物の中で、根元集を貢かす程の自信のある「お船哥」を、殆ど三日不眠の勢で校訂淨寫を終り、すぐ印刷所へ廻し、これを一月中に出してくれるやうに依頼した。それが十五日、東北大からは中々返事が來ぬ、某生からは、總長とも相談されるとうですときた。愈々面倒だなと、少し自分乍ら事情のもつれに弱つてゐる處へ、今日お船哥の再校を見てゐる所へ、武内氏から自分の方の條件通りで刊行の内諾がきた。親切にも氏からも狩野氏の目錄によれば玉晁と有之候と教へて來られた。これでやつと大びらに出せる事となつたのである。武内氏が色々關係方面に渡りをつけて、うまく纏めて下すつたさうな。初めは誤解を怨んでゐた此方が恐縮したいやうな譯。以上の延刊の事情、恐らく此の雜誌と同時に、叢書第二編第三編ともに諸賢の机上に届く事と思ふ。草々。

(二月二十五日夜)

定價表

一册廿五錢　郵稅貳錢
六册分　稅共　壹圓四拾錢
十二册分同　貳圓八拾錢
○郵券代用一割増の事
○照會は返信料添付の事

大正十四年一月二十七日印刷
大正十四年二月一日發行
【定價廿五錢】郵稅二錢

編輯兼發行者　名古屋市東區車道東町百五十七番地　尾崎久彌
印刷者　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　英比貞造
印刷所　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　扶桑社
發行所　名古屋市東區車道東町一五七番　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

○本研究初編第二十六册（索引上）全部賣切。尙叢書初編も賣切申候。

●江戸軟派叢書貳編・參編出來●

小寺玉晁著・尾崎久彌增補
校本 ごゝいつぶし根元集 全

原本現東北大學圖書館狩野文庫本の一。校訂者の經驗する所によれば、蓋し著者（珍文館老人と署す）玉晁の自筆本、天下一本の物也。今、同大學の諒解を得て、茲に校訂者の頭註、及び十數頁の「熱田遊里沿革略」、「都々一節の起原」、並びに補遺「小寺玉晁小傳」「玉晁著述目錄」を附して刊行に及びたり。從來少數專門家間にその全斑を見んとして、樣々苦慮奔狂せしめたるもの、一旦にして頒布の機會を得らる。殊に名古屋に生れた此節を名古屋の幕末偉大なる雜學者玉晁に依りて資料が蒐集せられあり、しかもその校本をして名古屋人たる予、名古屋の印刷、名古屋の製本を經て、當所より刊行の機を得たるは、實に偶然に似て餘りに奇なる契緣なりと信ず。同好諸賢の清鑒を偏に俟つ。（二月五日刊）（尚、本叢書初編は、全部賣切、再版不能也。）

和紙和綴表紙三版色摺美本
美濃四ツ折大五十六頁繪入
此編に限り三百部印刷非賣品（會員頒布）

校訂 尾崎久彌校訂
御船哥大全 完

原本名古屋市石田元季氏の藏本。最近京大圖書館より複本を依賴に及んだその珍本、それを同氏の厚意により、此方が先へ物にしたの也。收載、國書刊行會本（近世文藝叢書俚謠）の蜀山人校合の「御船歌留」三卷や同所收「尾張國船歌集」と全くの異本、しかも類本に稀なる多數の歌を收載し、即ち川方枕、海方枕の二篇、各篇數十章、計數百首の古謠を集む。校者が、「ごゝいつぶし根元集」に劣らぬ自信を以て江湖に發表するもの也。底本頗る善寫本、從つて爾來難解視せられたる船哥、古謠の全鱗は、茲に容易に感得味解せらるゝを得べし。試みに前記類本と二三共通の歌詞（共通の歌詞眞に二三のみ也）を彼此對照せば、此の本善校本なる事を瞭然知るに足らん。予等は、相續いで此の珍籍、逸書を刊行し得たるを中外に宜して忸怩たるなしと云爾者也。（二月十日刊）

和紙和裝三色摺美本
美濃四ツ折五十四頁
定價送料共 金七拾七錢

名古屋市東區車道東町 江戸軟派研究發行所刊 振替名古屋二七六九

大正十四年一月二十七日印刷
大正十四年二月一日發行
江戸軟派研究 第二册
定價貳拾五錢 送費貳錢

大正十四年三月三日印刷
大正十四年三月七日發行
貳編第三冊（通編第三十冊）

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第三冊

本文

梅亭金鵞の晩年
お傳三津瀬川の三角關係
「野圃の玉子」と津山お龜

「野圃の玉子」と津山お龜

神戸の忍頂寺務氏から借覧中のものであるが、文化頃の宮(熱田)驛遊里(主に神戸)のお龜買ひに取材を藉りた酒落本がある。一は、南濱野圃の玉子と題して、初中後の合本、一は南濱夜光珠下卷(この端本は惜しい)である。(共に稿本)凡て丸に大の印あるより推せば、名古屋貸本屋、有名な大惣本である。南濱野圃の玉子は増井山人なる男の著、序に文化二乙丑春とある。夜光珠は作者靈齋子、年代は不詳である。(が同時代同一作者の物たることは、後に說かう。)何れその全貌は、自分の軟派叢書の中に差加へる積りであるが、問題は、前册で述べた「宮のお龜考」の一材證と思うて、先づそのお龜の資料らしい箇處だけをこゝに抄しておきたいといふのである。主に「野圃の玉子」に就てゞある。

先づ、野圃の玉子の序、咬菜軒つら水の序の中に、「菅の根の長門屋、武の柳や神戸に店をはびこりまた傳馬町の戀風になびく云々」とあつて、娼妓の猫にかきのめされ云々とある。次で凡例に、娼門、妓などとある。目次によると、初の卷　増井土師丸がぶらつく本街の光景、中の卷　万客のわやつく、永樂亭の富庶、後の卷　お花半七がいちやつく、閨中の談論とある。次に初の卷のはじめに、「お龜買夕べにいそぐ」とあり、初の終りの方に、ウタ「宮のおかめとナア薬でうちんはヨウさぼすばかりでナアヤレ手がないにヨウハイ〳〵。おかめ〳〵とナアいわんすけれどナ龜にや手もある足もあるヨウ」とある。此の唄誠に面白いではないか。

梗概をいふと、初の卷は、増井と土師丸が本町を神戸までのぶらつき、途上いろ〳〵な滑稽がある。中の卷は、二人が江戸者となつて登樓、(永樂屋は神戸の大樓であつた事、「ごといつぶし根元集」にも出づ。)江戸辯まじりに中々上手に白つばくれてゐる。下の卷は二人が、お花と半七なる男女の私語を立聽くの條である。作としては平凡であるが、處々當時の名古屋及び宮の色――言語、産物、名所などを打出してゐる所が面白い。

作者の増井山人とは、野圃の玉子の卷尾の落書によると、(滿壽井先生名伊兵衛、字豹惠、別號靈齋、靈齋子ト同)増井伊兵衛、字豹惠、別號靈齋であつたことがわかる。とに角、此頃、名古屋には、かうした素人作家がゐて、その作を酒落本風に仕立て、(この本もしかりで、その頗る普通板本の酒落本に、表紙、文字の書樣など似せてゐる。)同好者の貸覽、批評に委したさうである。仙果の如きも、東都に名を出すまでは、かうした回覽本で技を磨いたかも知れぬ。靈齋が増井であるとすると、夜光珠も同じく文化頃のものであらう。

夜光珠は、端本ではあるが、出來としては此の方が酒落本らしく思へる。同じく熱田神戸廓内の、ある痴れ男がお龜に騙さるゝ件である。跋に、☐井山人(増井山人のこと。靈齋増井同人であるとすると、此の跋は、増井が大家氣どりで、自作に他人らしく跋をしたものとされる。)とあつて、そのうちに、度々居續鶩意の傲慢子弟云々とある。このごゞつごいも都々一の囃子詞から來てゐることは無論である。何れくはしくは飜刻の折。

○

忍頂寺氏から、「粹辨當」に津山お龜といふのがあると云ひ越された。粹辨當は自分もその端本(自分のは續の初篇)を藏してゐるが、これは、正編初篇より四篇まで四册、同大成一册、及び續篇が此の初篇の一册以上あるらしい。問題は、正編の初篇といふことである。

津山お龜　三下り

津山お龜女郎、津山のやまの、きじの鳥、つまをこがれてけんとふける、さんまよけんとふける、ヤアこりや〳〵〳〵なんとかな、一貫三百十四ンまへ、かうしこなしてものせないかや、せばたけのぼぶらは、てうごならぬにきわまつた、宵からなます、酢と醬油はれかける、めつたにこやがけほしかのばん、ほしかのばんなら宵からしよ、ヤアかゝごこへひつぱつた、ゆるりのはまでも子ができ(表紙三にツヾク)

梅亭金鵞の晩年

金鵞の「千社參」及び假名吾妻男一丁の戯作話にうつる以前に、前稿以後、誌友から得た金鵞晩年の資料、殊に、金鵞の別傳等を、自分の材料と共に掲げることにする。以て、前稿の補遺と見做されたい。

一、金鵞の墓碑銘によつて、明治二十六年六月三十日歿したることの確證。（磯ヶ谷紫江氏報告）。二、嘗て帝國文學第二五卷二號、（大正八年二月）山崎麓氏執筆の「梅亭金鵞」中、鶯亭金升氏より得たりといふ金鵞の別傳の抄。（天野謙二郎氏より抄寫）。三、金鵞が明治十年以後の團珍に於ける活動、主に執筆題目、（一は酒井潔氏より、一は自分の家藏合本より拾得）。尙、此の回は、此の材料の羅列のみに止めて、此等の新資料より得た、自分の議論、問題は、第三回執筆の折に附加することにする。

一、金鵞の墓碑銘

梅亭金鵞の菩提所、淺草區阿部川町稱念寺中最尊寺墓地に服部の姓ある檀家は一軒しかありませぬ。墓碑一基、震災で臺石はくづれ、棹石は東西に少しづれてゐます。左側面三行目に法名が刻んであります。淸受院釋果得淨生信士　明治二十六年六月三十日　としてありますから、歿年を「明治二十三年」とするは誤りでありませう。西尊寺は最尊寺が正しいのです。

歿年を「明治二十三年」とする常文の誤りを申上げたいばかりに、お知らせをしておきます。

（二月十一日、磯ケ谷紫江氏より）

二、山崎麓氏の「梅亭金鵞」より

吉田政和といふ、文政六年三月三十日、両國藥研堀に生る。父は柳剛流の劍客吉田勝之丞、彼は次男なり。幼より劍道を修め、十三の時には父の門下生を凌駕す。父は更に專門の劍客にせむとして「伊勢の一劍客のもとに遣せり。彼はそこに居ること二年、更に近國を武者修行し、江戸に歸れる時は立派なる劍客なりき。弘化二年、二十三にして彼は、新田の四天王と云はれたる名家瓜生家の養子となり、本郷附木店に住居し、いつか劍道をすてゝ文人となれり。嘉永の初年、彼は友人服部應賀（萬亭應賀）に伴はれて、下谷池の端にすめる松亭金水をとへり。而してその門下となり、梅亭金鵞と號せり。金水は、筆耕家谷金水の門下、筆耕を業とし、常に人情本を淨書し、自得して著作家となれり。金鵞亦版下筆耕を業としつゝ「傍著述を事とせり。常に松亭に出入する文士、萬亭應賀、竹葉舍金瓶、杉亭金升、古森金淨、之に畫家、梅の本鶯齋（彼の弟）と主人金水を加へ、併せて七人、競吟、狂句、地口などの遊戯文學に耽り、口上茶番、立茶番の趣向に一日を短しとせり。之を寫生せるものの妙竹林話七偏人なり。藤岡氏は近世小說史に於て此等の作に對し「實世間に遠ざかれるの感を禁ずる能はざるなり」と評したれど、如何にや。

○金鵞の人情本

夜三の月柳の横櫛　〔特色〕春水等に比し

春色野咲の花　一、比較的に脚色の整ひたること
二、戀愛を描寫するに四圍の背景の取扱ひ巧妙なり
三、俗氣少し

（講談師にして作家なる乾坤坊良齋の作「切られ與三郎」及び、それを種とせる脚本、瀬川如皐の浮名横櫛に材をとれり。）

彼の此方面の眞の手腕は、卑猥なる假名を以て著はせる、性慾描寫の諸作に見ることを得。彼の此方面の作は、桃花園三千丸、鼻山人、柳水亭種清、假名垣魯文、大阪にては一荷堂半水等が各、假名を以て書ける此種の書に比し、遙かに群を拔けり。

○滑稽本

1、七偏人　2、滑稽和合人の終篇（追加三。四篇は二代春水）　3、千社詣（十返舍一九の六阿彌陀詣の後篇也）4、春水の花鳥風月の三四篇（これは人情本也）

金鵞が彰義隊の騷動を見たるは、小石川指ヶ谷町白山神社の裏手にすめる時なり。舊友榊原健吉が黑門前にて官軍と奮闘せる噂をきゝて、感慨無量なりしならん。瓜生政和の名を以て西洋新書、西哲叢談などの際物を書き、一方、端唄、都々逸などの赤本を書きて生活し、更に橋爪金造の名にて嬉笑新聞といふ滑稽雜誌を發行せり。時に師の金水は逝き、弟、鶯齋は夭し、金淨は放蕩の結果禁錮せられて交際せず、竹葉舍と杉亭とは旅にいで、七偏人仲間は離散せり。されど彼は、新しき友、鈍亭魯文、山山亭有人等と遊びくらせり。明治十年、團々珍聞の

創刊とともに主筆を託されたり。その姉妹雜誌の驥尾團子に、梅亭鵞人の名にて、人情小說春色花暦を揭げ、當局者より中止を命せられたり。されど彼は妄想未來記などの滑稽文を書きつゞけ居たり。彼は錢あれば、親類知己の困れるものに分ち與へたり。彼は後に、鶴聲社の編輯顧問となり、明治にて最初の古書翻刻をなせり。人のすゝめに任せ、傘一本、高下駄ばきにて、數ヶ月上方見物に出かけ、家人を驚かせたることあり。明治二十三年、巫山戲會の茶番の趣向を考案しつゝ、入浴し、その塲に卒倒して遂に半身不隨の晩年を送れり。（以上の稿は、金鵞の高弟鶯亭金升氏の稿より材料を得たるもの多し。）

三、團珍誌上の金鵞

金鵞がとに角署名して團珍に載せたのは、第十四號（明治十年六月二十三日）が最初だと思ひます。勿論初號より十四號迄の間に雜報の所などには金鵞らしい文章がありますが、何分署名がないので分りません。（同雜誌最初の間は、雜報、社說には署名してありません。）

△第十四號には、迂流としての川柳が八句出て居ます。

書籍館眼鏡橋まで添てあり
大鯰くつてから髭そりおとし
女學校開化したのも見えるなり　など

△第十五號にも迂流で川柳があります。

第二十一號から六十號迄缺本。

△第六十二號に　梅亭鵞人として、

○探訪膝栗毛　（滑稽本）

化三、糟造、現狀、癖二、文六、明七、開八、等の七偏人振り。化三は勿論金鵞ならん。

○春色花暦　梅亭鵞人

之れは人情本です。此の時分にやはり人情本を書いたと見えます。（勿論世界は當時のザ

ンギリ物です。）

文体や、當時の同誌上、人情物や滑稽物の連續を書いて居る作者はありませんから、蕩人は必ず金鵞だと思ひます。如何？

△第四百五十三號（明治十七年八月十六日）

縁奇仕喜內（おんぎしきない）　七婦區人（しちふくじん）の內　梅亭化三

○藝妓須（げいぎす）　○是で惡比須と聞えやうか此神地口は下手と見えたり

事代主ともいふ（主とはお前はんと言ふこと、お前はんの事を□□□□□□□澤山頂戴なの譯なるよし）此神足萎えたるが故に轉ぶを以て常とす。云々

梅亭化三の金鵞なる事は、確證あり。同誌四百五十八號竹葉舍呂安君（鶯亭金升）の傳に……

……偶、團社の隊長梅亭化三先生に謁し。云々

△第四百八十九號（明治十八年四月十八日）

裏面廣告中に、

○風狂筆の更第二號　題　隨意

、、、、、、、、

、、、、、、、、、

狂歌　梅亭金鵞大人

、、、、、、、、

、、、、、、、、、

明治十八年頃もまだ盛名を持して居た證據になるでせう。

△第五百〇五號（十八年八月十五日）

珍報欄に

無心配な斷　梅亭蕩人

小生所有の最後五百十一號迄に最早無し。

——以上酒井潔氏報告——

（自分が、前稿で、團々珍聞の第二六號——第五〇號、第七六號——第一〇〇號まで）の二冊合本に、金鵞が見當らぬといふたが、よく見ると到る處に金鵞の假名のものを發見した。その材料を號を逐うて、述べる。丁度前掲の酒井氏の

稿の闕ら分を補ふこさにならうと思ふ。」

▽第二七號　雜錄　都々一五首　匿名　迂　流

○「私しやおぼこ氣西洞屋よ人に見られりや赤らめる」といつた時世物である。

▽第二八號　同　川柳三首　同

○「本地は古猫、垂迹は檣の神」といつたもの、當時流行の猫（藝妓）と、成上つて權妻。その相手はいはずと知れた鯰（官員）である。

▽第二九號　同　都々逸文句入三首　同

○「私學校徒じやわしやないけれど、「小さい時からなま中に手習ひ迄も一ツとこ」まくら並べて寐るかくご」といつたもの。

▽第三〇號　同　同二首　同

○軍濟して歸つて來ればまたも浮氣で苦をさせる、といつたもの。

▽第三四號　雜報　文珠痴愚三人同行　迂流散人

○頗る七偏人の舊工同曲を襲つたもの。少し抄くと、弊社の餘探訪に文六明七開八と言ふ遊蕩ものが有りまして、染井の菊から瀧の川の紅葉見に行かんとの意氣がりで三分

なくなす智惠の相談が極ると、明七は狐に化された振をして二人の鼻毛を拔いて遣らん、夫にしては化されの規則通り馬の糞で無ければ彼奴等に早解りがせぬから、馬の糞の様に拵へた牡丹餅を竹のはに包み云々。三河町の餅屋へ往き、馬の糞の様に牡丹餅を拵へさせ、竹の皮へ包み持つて歸り、徐こ戸棚の隅へ隱し、文六と開七を誘ひ、先づめけ込まうと洗湯へ出かけし後で、此頃田舍から來た化三と云ふ配達が茶碗を尋ねるとて、戸棚の隅の竹の皮を見付け出し、開けて見ると馬の糞に似て居るので、「ハテ是は何だんべヱと匂ひを嗅ぎ、「馬の糞かと思つたら牡丹餅だァ、棚から落ちたと言ふは、此事だんべヱ。朝の牡丹餅は見逃すもんでねへト、一ッ摘み二ッ摘みみんな食つて仕舞云々。儘よ先刻社長の乘つて來た馬がたれた糞を代りに包んで置けば

大い違ひはねへだト極りを付け。云々」それから明七の失敗となるのである。

▽第三五號　同　同(續き)　同

▽第三七號　雑録　川柳二　都々逸二　迂　流

○長いひげ短かい智恵の叢にする。猫は餌に兎かくしたがるなます鯰。招きや魂さへ歸つて來るなぜに返さぬ貸したかねの類。

▽第三八號　雑報　化三に關したる記事あり、化三自身の筆ならん。

▽同　雑録　古今新聞紙序　同

▽同　同　川柳一　同

▽第三九號　同　新聞紙序(續き)　同

▽第四一號　雑報　？　？

○雑報の中に、「弊社配達の化三が……金を借りに……友達の家へ往き……石筆にて鼻紙へ『かして暮貸して暮との音を出せと耳へは入て暮のかねかな』云々、先の男が少し考へ……其紙の端へ『此暮をかねや有かと人問ば盃と計りに突出しておく』云々。化三は鼻紙一枚の損云々。といつたものがある。この化三とは、無論金鵞のことであるが、此文、金鵞の自作、結局、金鵞自ら第三者ごかして書いたと見るべきだらう。この勢でいふと、從來雑報の執筆は、他の署名のない限り彼の筆であらう。又、配達の化三(以下諸號にあり)と貶稱してゐるのも、故あらう。即ち、主筆といふのは誤り、客員格であつたらう。

▽同　號　同　文珠智恵三人同行　前號の續　迂　流

○是作、中絶ノマヽ。

▽第四二號　同　「配達化三」に關する話あり。

▽第四三號　雑録　狂歌三首　迂　流

○大ぎやうに言へば二年へわたる雨、天の憎みをうけしほし見世。降りつゞく雨にわしらが米びつのかはくはなにぞ究理先せい、といつたもの。

▽第四四號　雑報　化三に關した記事あり。

▽第四八號　雑録　都々逸　文句入　迂　流

▽第四九號　同　狂歌一首　同

〔以下第七六號より第一〇〇號まで〕

▽第七九號　雜報　（團珍探訪衛門於東京御史化三」署名ある指令なる戯文あり。）

▽第八〇號　同　（「オホン〳〵と化三が突袖なし小鼻をピク〳〵然と勃かし」云々と見せるものはさいふに、明治十年内告和漢閑會　呆笑薦告なる戯褒状あり。）

▽同　雜報

○近世盛衰競として、番附面の中央、行司格として

（盛）當路の傳信　團々社化三の名）慷慨悲歌の徒　薩長肥の官員　土佐の演舌會　（衰）西國の大達摩　權妻の拜命　假名讀社猫翁の名　本居平田宗門

とある。猫翁（魯文）と相並んで、共に盛の部に入れてゐる、自賛（恐らく然りであらう）がをかしい。

▽第八三號　雜報　（化三に關したるものあり。）

▽第八八號　同　（御註進〳〵と駈け込んだ化三の記事あり。）

▽第九七號　同

彼の自筆らしい、番附、都々逸競（團々珍聞自第一號至第九十號）といふのがある。行司が團々社化三、選者前橋烟酢、同三松とあり。しかもをかしきは西の關脇に、廿一として江流蕩人とある。無論、金鷲自身である。廿一とは、回數か首數か。

○

さて以上で、團珍の材料は盡きる。こゝに述べておきたいことは、金鷲の雜報ぶりが、初めの中は、自分の趣向で、いろ〳〵と面白をかしく書きのめしてゐるが、途中（第三十八號あたり）からは、何々さんからと末尾に記した滑稽投書の類で、雜報を埋めてゐることである。多少趣向が、涸れてきたといふせゐであらうか。

尙、金鷲は、飯島花月氏の青年時代に、信州上田まで出向いて、氏を訪れたこともあるさうである。尙、團珍の五十三號に載つた團珍一週年御禮のポンチの中、江流蕩人は金鷲の本人によく似た書きぶりであると、同氏の記述てある。悉しくは、同氏執筆の、「書物往來」第六册に出でゝゐる。

お傳三津瀬川の三角關係

有名な土器お傳（小傳とも書す）と、三代目坂東三津五郎と五代目瀬川菊之丞との三角關係を辿つて見ようといふのである。先づ此の三角關係に就て、比較的眞面目な記錄としては、「多話戯ぐさ」（演劇文庫第一編所收）の中に、「雪の夜に鹽梅好のお傳」として、左の如くある。

木挽町七丁目一名汐留といふ。こゝに扇屋万五郎といふ船宿あり、兄弟の娘を持ち、妹おむら姉おみれと名附け、兄弟ともよき縹致にて、姉は中津の留守居白井何某の世話に成り、おむらは芝口二葉町の御用達秋山新三郎といふ人の圍女に成り、扇屋はごん〳〵繁昌して金満になる。おむらは芝桝弟子になり、おでんと名を改め、義太夫の師匠になる。秋山の外に、福岡の太府の世話になる、是は久保町の清水樓の世話なり。此頃よりおでんは淫婦にて、清水樓にくつ附き、太府樣をしくじり、おでんの評判あしくなり、万五郎は深川の新地へ女郎屋を出し、五明樓と號し、大きに繁昌する。おでん再び二葉町の秋山の世話になり居たりしが、おでんは病がおこり、御定廻りの飯尾藤十郎にくつつき、我威を振ふ。此時秋山と飯尾と鞘當にて、大層混雜する。されども五明樓はます〳〵繁昌なり。五明樓の親子は芝居好にて、永木三津五郎が大贔屓にて、見物の節は茶屋へ三津五郎を呼び、をり〳〵は新地へも呼び、酒を呑せたり、芝居休みには内へ泊めたり致し、元より淫婦のおでん何かは以てたまるべき、何しか色に成り、水洩らさじとかたらひ、飯尾も秋山も突出して仕舞ひ、是非〳〵三津五郎の女房にならねばならぬといふ。三津五郎は無理に女房に暇を出し、

三津五郎の女房は萩野伊三郎の惣領娘にてお貞といふ、妹は尾上菊五郎（梅幸）寺しまの女房なり。伊三郎は上方役者にて先名坂東三津五郎〔是れ、二代目也。久〕といふ。

おでんを貰ひ、女房にする。三津五郎は芳町通り西床の裏に住居し、其暮し廣大なる事中々言語に述べ難し。●巳年の火事に深川の永木堀へ察をこしらへ、十年程は榮耀にくらし、此間おでんの行跡は筆紙に演べがたし。三津右

衛門、三十郎、七代目、大太夫京桝屋三絃彈、其外數多の者と密通せし事は、和印櫓下の面割等に顯しあり。瀬川菊之丞は、前々七代目團十郎の若衆なりしが、此節は三津五郎の若衆になりて永木堀に至り、芝居休みの内は晝夜止りて、甚彦道やら詐留多のと大なぐさみを催す。又ぞろおでんは路考に密通をする。此頃は三津五郎は酒を過し、○○も絶え〴〵ゆゑ、おでんもけたる(く)思ひ居し所にて、血氣の路考にくつ附きしゆゑ、おでんは有頂天に成り、餘り派出にせしゆゑ、三津五郎の耳に入り、弟子も氣をもみ、大混雜に成り、おでんしばらく仲人へ預けらるる。其のうち三津五郎の御客、取扱ひ再び永木へ立戻り、元の如く納まる。此の三月狂言は、鏡山にて、三津五郎の岩藤、路考の尾上、草履打の處、路考をぶち殺せ〳〵と見物立つて大さわぎ、芝居は古今の大入をして金主は福々。此盃替りにおでんを連れて路考は二本松へ欠落、三津五郎は寛仁大度の君子ゆゑ少しも心に懸けず、先妻のお貞を呼戻し、夫婦仲よく暮し居る。路考とおでんの惡評は江戸中ばかりでなく、甲州駿州三河尾張上方まで口々に罵り、種々の落首や川柳にて惡口澤山出來る。路考は二本松より出羽の庄内迄旅かせぎに出る。最早九月も末になり、奥州の陽氣寒く、おでんは路考に別れ江戸へ戻る。供は路考譜代の送り權八一人供して江戸へ下る。(數行闕)江戸へ着してからは、其の氣なく、十月下旬に路考も江戸へ登り、顏見せは木挽町へ出勤いたし、久し振りの顏見せ、大入せしが、七日目に病氣附、(路考)翌年正月七日に病死す。顏見せの巴御前が此世の名殘りとなる。

女には稀なちからぞ大根引　　路　考

辭　世

七種に覺えよき名ぞ佛の座　　(以上、多話戲草より)

偖、此の三津五郎は、三代目坂東三津五郎(初代の實子、二代の婿。)で、永木(えいき)とは、深川の永木に別墅を有したが故である。「近世演劇史」にも、此の三津五郎と菊之丞とお傳との關係に觸れた記事(原、「歌舞伎」に據り)を拔いてゐる。

五世瀬川菊之丞は三津五郎と五世半四郎に引立てられたるに、大恩人たる三津五郎の妻と通

じ、終に出入すること叶はざりき。然るに、「鏡山」の狂言にて、三津五郎の岩藤、菊之丞の尾上にて、草履打の處になると、此の事を知りたる見物、尾上を打殺してしまへと聲々に罵る。三津五郎は宅へ歸り、妻に向ひ「今日御見物が菊之丞の事を間男だから打殺してしまへと言つたぜ」と言つたきり、後は何も言はざりき。(歌舞伎)〔この鏡山芝居の話、「多話戯草」にもあること、前掲の如し。此文これと同一出典か。〕

四世歌右衛門が中村座へ下りて、「双蝶」に放駒を勤め、彼の菊之丞に濡髪の役を振られたるに、永木の親方(三津五郎)に話をして、しかといへばする、聞かなければ出來ぬ、とて愈々看板を上げる前日となり、出入の出來ぬ三津五郎の許へ裏口より入來り、此處の敷居は跨ぎがたきが、據所なき事ありて參りたり。と彼の事を取次に言ひければ、三津五郎は、それはするがよい、すぐ上れ、とて其れより五日の間自宅に留め、自身手を執つて稽古をさせたり。(同)

こゝで、續歌舞伎年代記等によりて、如上挿話の年代を調べて見よう。三津五郎菊之丞の鏡山の芝居は、「文政九年三月二十一日より普請出來 以上、青々園氏「近世日本演劇史」――に付市村座(江戸仕入雛行列」とある中の、中老尾上、菊之丞。局岩藤、三津五郎。といふのに違ひない。即ち文政九年三月以前間もなくに、お傳詫びが叶つて三津五郎へ復縁、菊之丞とは暫く手を切つたらしい。それが、此の盃替りに此路考(菊之丞)、おでんを連れて奥州二本松へ欠落とは、流石の君子の三津五郎も少々妬けたらう。然し間もなく前妻おていを納れた所を見ると、おていなる婦女は、名の如く貞、三津五郎を去られてからも寡居してゐたものと見える。乃ち、餘程の貞實な婦だつたらう。さてこの路考おでんの二本松行云々といふのは、歌舞伎年代記續編に、

「同（文政十年九月）廿一日より、瀬川菊之丞去年八月頃河原崎座にて忠臣藏大切道成寺相勤、夫より所々田舍を修行して、此度歸府に付き、中村座へ出勤なり。」

とある、文政九年八月以後、此の十年九月に至る約一ヶ年の事であらう。（この俳優の歸府を、多話戯草は、天保二年十月下旬のやう記せり。されどこは恐らく誤りならん。年代記には、是以前、時々の興行を記せり。）九年の三月に間男々々と鏡山で騷がれたものが、八月間もなきに二人で駈落、一ヶ年目にのめ〳〵と歸府、菊之丞も中々女形には似合はぬ圖々しさである。さて、「歌舞伎」に載つてゐる、三津五郎へ、菊之丞が詑を入れたのは、濡髮の芝居とあるから、それによつて、歌舞伎年代記續編を繰ると、文政十三年（天保元年）八月朔日中村座出勤、濡髮長五郎、妣玉照、菊之丞。放駒長吉、芝翫（歌右衞門）。といふのに違ひあるまい。すると、文政九年秋お傳菊之丞の駈落、同十年九月、菊之丞の江戸舞戻り、出勤。此の十三年の濡髮一件で三津五郎宅へ詑びに行くまでは、三津五郎と絶縁の形であつたらう。然るに、三津五郎が、左程怒りもせずに、手をとつて敎へたのは、昔の同性愛の愛憐がまだ仄かに殘つてゐたのか、今でもその氣があつたのか、とにかく、前の噂の眞最中に、鏡山の芝居がはねてからの妻女に平氣で話したといふ話（この妻とは、駈落以前のお傳であつたらう。）それらを照合すると、怒りながらも、究極の憤りを發し得られなかつた、そこに愛情が彼菊之丞にも不盡に注がれてゐたらうと思ふ。多話戯草にも書かれた、お傳が、奥州路の旅より歸府した、それ以後の記事が何れにも見當らぬ。三津五郎には、前妻おていがゐた。菊之丞とまさか縒を戻したのでもなからう。すれば、何處をうろついてゐたらうか。

間もなく、三津と、菊、所謂三津瀬川の死となるのである。即ち歌舞伎年代記の續編に、

天保二辛卯年

清尊院實譽秀佳信士　俗名坂東三津五郎 行年五十七歳　芝増上寺山内 月界院

十二月廿七日

無類極上々吉、今和事にては三ヶ津に双人なし。一代當り狂言數ふるにいとまあらず。（中略）。葬禮正月九日 和泉町より二丁町よし町より通町木挽町表裏五丁目橋より尾張町通り此日堺町より芝まで見物の群集、神事祭禮の如し。

天保三壬辰年

高照院勇譽才阿哲藝信士　俗名瀬川菊之丞 行年三十一歳　本所押上 大雲寺

正月七日

大上上吉當事娘形若女形所作事其外諸藝に通達し、若手には珍しき名人、京大阪にも此太夫如きはなく、標致よく愛敬ありて、諸人の氣請よく、贔屓連中も多くありしが、命數の限り是非もなき次第なり。葬禮正月十日、新乘物町より二丁町富澤町村松町藥研堀両國橋へかゝり亀崎町通り、昨日は秀佳今日は路考と見物道路に滿ちみちて、其の夥しき事筆紙に盡しがたし。秀佳路考の葬禮を見て、贔屓連中は勿論芝居好の者又は戯場ぎらひの野暮介迄も後に至りてはかゝる名人出來まじと皆歎きしとなん。（中略）

秀佳路考追善とて賣出し候繪本草双紙數々

三津瀬川上品仕立　柳亭作　國貞畫

三津瀬川法花勝美　綠間山人　國よし畫

葉名手桶忠臣藏　大仕かけ忠臣藏狂言畫本

三津瀬川落し咄し對面のせりふ

其外にしき繪等百五十番程も出板せし由、古今の珍事になん。

とある。

三津五郎は、「近世日本演劇史」には、彼の氣質を温和にして事を處するに公平なりきとある。（尚、彼のくはしき傳、及び彼の舞臺年表は、同、三世坂東三津五郎の條下（同書三七二——三八四）に出でゝゐる。）同書には、彼の妻（前妻）に關して、「三津五郎は永木（えいき）（深川に在）に別居を構へしかば、俗に之を「永木の三津五郎」といへり。彼の妻は二世三津五郎の長女にして、おていといひ、おていの娘二人は、三世菊五郎と荒川官吉（花友の父）に配せり。三津五郎には養子二人あり、一は四世坂東三津五郎、一は坂東しうか、孰も次ぎの時代の名優たりき。又門下に大吉及び三津右衞門あり、共に道化方たり云々。」とある。話は違ふが、この弟子の三津右衞門も、お傳の密夫の一人だつたのである。亭主の若衆——菊之丞お竊んだくらゐ故、弟子位ゐはお茶の子か。偖、この近世日本演劇史には、おていが追ひ出されて、お傳が入つた事は少しも書かれてあらず、首尾このお傳の文字を見ぬから、うつかりすると、挿話として引かれた鏡山や、菊之丞の詫びの一件、裏口から入つたといふ話も、やはりこのおていと菊之丞との事かと思ふ人なきにしもあらずであらう。とんでもない間違である。こゝもと、日本演劇史の著者の疎忽といはれても仕方がなからう。

相棒たる瀬川菊之丞の性格を、「近世日本演劇史」から引かう。

「此の時代に於て江戸の女方の先輩なりし者を五世瀬川菊之丞（濱村屋路考、享和二——天保三）とす。四世菊之丞の女婿にして俗に「多門路考」といひしが、僅かに三十一歳にして死したり。彼は大男にし

て、足袋は十一文甲高を穿き、不愛敬にて物いひも荒々しく、長谷川町に住して樂屋へ行く道、床屋大勢居並びし前を通りても挨拶なく、人に逢ふも顏を背向けて通る程ゆゑ、近邊の者憎みしが、舞臺にては此の人ほどの愛敬又あるべからず、日頃憎みし者も思はず濱村屋と褒めざるは無かりしといふ。云々。」

お傳の密夫は、後に本夫となつた三津五郎の他に、始め、娘の頃、秋山新三郎、福岡の太府（不詳）、清水樓、再び秋山、飯尾藤十郎、三津五郎、三津右衛門（三津五郎の弟子）「三十郎（關三十郎カ）、七代目團十郎）、大太夫京桝屋三絃彈、瀨川菊之丞（路考）、路考譜代の途り權八、（以上たわけ草に據る）の他に、尙數十名あつたことは、傚顏見世番附小傳〔近世風俗見聞集第四——巷街贅說卷之二（同、七六頁—七八頁）〕悉しく出でゝゐる。和印作者猿猴坊月成（二世焉馬のこと）喜代元延治太夫（初代淸元延壽太夫や、娘の頃として音羽幾五郎（尾上菊五郎カ）なども見えてゐる、尙、これに多とすべきは、お傳の年齡、生年が分明になつてゐることである。曰く、

役者素人
古今大　婬婦
地色金色
天明六丙午年出生
元祖　文政十丁亥年迄
四十二年に相成

即ち、文政十年（お傳と路考、駈落して、お傳先に、路考あとより歸府した年である。）に於て、お傳は、四十二の姥々櫻であるのである。まこと古今の婬婦といふべきであつたらう。こゝで前の「たわけ草」の記事に據つて、お傳の性的生活の中、三津五郎との交涉の生じた年代を類推するなれば、巳の年の火事で、三津五郎、永木に別宅を營んだ、十年程は榮耀にくらし、此間おでんの行跡筆紙に演べがたしとあるから、此の巳年は、文化六年の己巳であらうと思ふ。以來十年程

の亂行とは、お傳の、二十四歳（文化六年）から、文政元年の三十三歳頃までのことであらうか。三津右衛門、團十郎、三十郎は此間であらう。菊之丞との關係は、菊之丞が、三津五郎の家庭に入るやうになつてからの、文政はじめ頃からであらう。現に、從來團十郎の一座であつた菊之丞が、（これをたわけ草は、團十郎の若衆なりとしてゐる。）大和屋勝見（三津五郎）と提携したのは、文政二年の顏見世中村座の「花艶和黑主」の上演からである。現に此の時の、般若五郎妹八重菊のしばらくのつらねを、五代目菊之丞自作として、歌舞伎年代記續編に擧げてゐる。その中にも、

「（前略）當年つもつてまだよう／＼十八歳な何ンじやや力に成田の花の見突出されたる下手役者（團十郎に追はれたとの意カ）下手な役者は私よ、女子だてらに荒事は何れも樣と大和屋の親方さんを力にてけふお目見えの堺町、歸り新參千代八千代、重る菊之丞（下略）」

とある通り、即ち文政二年から、菊之丞、三津五郎の提携始まると見て可い。時に菊之丞は自ら曰ふ如く十八歳の紅顏の美少。お傳は、母親同然の三十四歳、三津五郎は、時に四十五歳。（天保二年五十七歳にして歿）これではお傳の狂ふのも所以あるかなであらう。天賚境遇相俟つてである。以後此の三角關係が（本當の三角關係、その角は互ひに相索くこと甚しく、今日でいふのとは、酷だしい徑庭のあつたことは推量に委す。）始まつたのである。爾後お傳と菊之丞との亂行が目に餘り乍ら、三津五郎がそのどちらも放逐しなかつたのは、彼が寛大な君子といふよりも、そのどちらにも愛憐の思ひ切ないものがあつたのではなからうか。三津五郎の愛は、お傳と路考とに、等分に放射せられてゐたのではなからうか。又菊之丞もこればかりは諒解してゐて、お傳

と不行跡を重ねながら、三津五郎にも慇懃を盡してゐたのだらう。後、お傳路考の逐電で、前妻のお貞を三津五郎が引き入れたのは、寧ろ、晩年女手なくては不自由なといふに過ぎなかつたのだらう。お傳を全く見限つて、貞實なお貞に返つたといふ程の後悔さでもなからう。更にさうした不徹底さ（お傳に對する）と、しかも三津と瀨川との交涉とを窺ふに足る好材料は、文政十三年、瀨川が裏口から謝罪に來たとき、五日も泊めて菊之丞に深切を盡した三津五郎の寬仁な態度がをかしい。菊之丞も、生きるために、こゝを先途と哀れつぽく、且つ媚によりをかけたであらうが、三津五郎も晩年、お傳はゐず、世間の義理ゆゑ憤慨づらはしてゐたもの、、その實懷しい菊之丞に謝罪られて惡い氣はしなかつたのであらう。それを一般は寬仁と許し、公平と見たのであらう。然し皮肉なる艶本作者は、決して之を單純なる寬仁にはとらなかつた。無論三津五郎路考の變態關係に之を結び付けてゐる。（後段、「極樂遊」解說參照）

尙、たわけ草の詳細なるには似もやらぬが、巷街贅說の、右番附のをはりにも、

娃婦小傳といへるは、天明寬政の頃、芝に名高きお傳と云ひし義太夫節の名人あり。そが門弟にして其業にも秀たれば、師の名をついで小傳といふ。今や戲場役者秀佳（古是業の男、三代目坂東三津五郎）が妻たり。抑娃婦にしてみそか男多かる中に、路考（三代目路考養子、路三郎が男、六（五）代目瀨川菊之丞）に密通して其事かくれなく世の中に噺草となりぬ。さるを何人か戲れつゝりけん、顏見世の入代り番附に似せて、其のたわれ男の數々を、浮世繪師歌川國貞が筆して寫し出づ、櫻木に彫せて專らもてあそぶに、無程其判な禁ぜらる。此番附摺出すの費、百金に餘れりとかや。又利を得ること二百金に過ぎたりと。痴呆たる事にしはあれど、大江戶の廣き、他國にはあらじ、予も亦癡漢の數に入て、乞見て爰に寫し、後の笑草とはなしぬ。」

筆の序でゆゑ、秀佳路考追善冊子の眞面目なもの、代表として、「三津瀨川上品仕立」、（種彥作、國貞畫）。「追善三ツ瀨川法花勝美」（綠間山人作、國芳畫）の二作の梗概に移らう。

「三津瀬川法花勝美」より　國芳畫

━三津瀬川上品仕立は、嘗て畵家國丸の生歿年を知る好資料として、齋藤氏により「浮世繪」第六號にも引かれたものである。序に、「(前略)予近年癇癪にて騷がしき塲をいとひ、絶えて芝居を見物せず、そのうへ性質遲筆にて、三行ばかりの文章にも、腕をくみ眉をひそめ、三日もかゝりてやつと成り。それをこらへて知らぬ事を早く書けとは無理承知。わるい合點でほんの間に合ひ云々。」と種彦の言のある際物である。地獄での話で、奪衣婆は、秀佳(三津五郎)の似顔繪を見て、首つたけ。閻魔大王は、路考(菊之丞)の艶姿に夙うから戀慕。それがお互ひとりもつて貰ひたいと、奪衣は路考に秀佳を强賴み。大王は秀佳に路考を强賴み。秀佳路考の惡戯で、大王奪衣が互ひに奪衣大王と知らずに、暗中の出會がある。だまされたと知つて大王奪衣の憤激。と秀佳が朝比奈となつて、鬼ども大王を取拉

ぐ。ごや迎ひ來つて、秀佳と路考と二挺の駕籠に乘り、極樂座へ上るといふので芽出度し。おやぢ橋角山本平吉の版である。裏表紙の裏に、くれて行としを名殘や朽はゝき。秀佳。門松のとれて淋しやけさの風　路考。と辭世の句が刻されてある。

追善三ッ瀨川法花勝美は、各ヒラキの繪が主で、しかもその繪が、芝居の或る場面で、それにこの秀佳路考の冥土行を揃ませてゐる。附會けて、屹度その繪の人物に二人をもつてゆくといつたもの。第一は、平凡な、旅姿の三津と菊。次は、桂川の心中の見えで、お半は菊。長右は三津、傍ら夜商人の荷担き姿の地藏菩薩の滑稽さがある。三途の川は無論桂川のつもり。次は權八、長兵衞の鈴ヶ森の眞似。雲介が鬼である。次が嫗山姥の煙草責めの處。山姥は菊。次は梅ヶ枝の手水鉢。次は、熊谷と敦盛。次は、妹背山の饅七。次は車曳。時平は閻魔大王、松王は鬼、梅王は三津五郎、櫻丸は菊之丞。何處でも芝居をやつてるからをかしい。次は曾我の對面。祐經は大王、十郎は秀佳、五郎は路考。で次が極樂行きでめでたし〱である。裏表紙うらに、秀佳路考連名の墓石があつて、それに男女の群れ詣つてゐる樣を描いてゐる。板元、通油町鶴屋喜右衞門、銀座四丁目川口正藏との合梓。(以上の中「三津瀨川上品仕立の趣向は、後の八代目團十郎の追善冊子「明烏夢物語」にも踏襲されて、閻魔と奪衣婆がペテンにかゝるのはその儘である。但し相手は、八代目三升と、坂東しうか「三代三津五郎の養子」の二人になつてゐる。此篇、演劇文庫第三編、八代目團十郎物の中に所收。)

○

かうした追善冊子よりも、路考秀佳とお傳の三角關係を痛切に穿つてゐるものは、艶本「極樂

遊」（女好庵著、不器用又平（國貞）畫）の三冊物である。如上まじめな追善冊子では、お傳の影が一向しない。それに秀佳路考は、いつも仲よく冥土の道伴になつてゐる。この極樂遊に於てはさうではない。相當に秀佳の嫉妬が搦んでゐる。艶本極樂遊（但し表紙見返しには、三津瀬川極樂遊とある。）の上、第一回、三途の濡事。

三途の渉の片ほとりに、色を商ひ世をわたる、無体に引あげ女をあてがひ、錢なき旅人は衣類を剝ぎとる、その業強盗引剝にも等しければ、人仇名して三途川の脱衣婆となんいふ家に、三四年の先の頃から、泊めおかれ、此の樓の流行妓たるお大といふ女あり。（これがお傳である。）或る日のことこゝへ來かゝる一人の旅人がある。（これが三津五郎である。）大「オヤおまへは大和やの勝見さん、どうしてこゝへお出でだ。かつ「ヲヽそういふそちはお大じやないか、思ひ廻せば三年さき冥土の鬼となつたのが「これで見ると、お大の文政十年歸府以後の消息が分らないといふたが、この天保二年の三年前、文政十二年頃に死んでゐたのだと見える。假想話ではあるが、作中人物の歿年は大抵正確を保つてゐるらしいから、この話も眞實と見て可からう」大「アイサとふに死んだけれどおまへを戀しい〳〵と迷うてゐる內こゝの內へ云々。かつ「イヤモウそう甘くはいきますめへ、それはお門が違ひやせう、大「アレサなんのばからしい、アノ多門（菊之丞が事也）さんの事なんぞは、ホンに夢にも思ひはしないョ。先頃は不圖したはり合でアゝいふ騷ぎになつたから詮事なしに少しの間夫婦の眞似はしたけれど、元木に增る裏木なしサ。よく〳〵ふかい緣ならこそ、思ひがけなく又こゝでおめにかゝるも二世の緣。先頃の事は堪忍して、どうぞこれから末始終女房にしておくれなト云々。こゝで覆水盆にかへるのである。

（表紙二より）ろ、こりや〱なんさかな、ねづみがはしらば桶かぶせ。」

同氏は「此の篇の序文には、安永三甲午仲冬さあります。が若し此の津山が作州の津山であれば、他にも古くからお龜がゐた事になります」さ云ひ越されたが、自分は是は、個人名の女郎で、偶然の暗合さ見たいが、ごうであらう。尚、自分も一考はしたいさ思ふ。

○畫の諸形式の補遺

東京の松本氏より來信、

「畫の諸形式の中に、師宣は勿論春信、湖龍齋さ雖も、繪本形式のものは殆ご墨一色であるさ說かれてゐるが、いささか例外があるからお知らせする。それは春信の恐らく初期のものさ思はれるが、中本で「十種香」さでも稱する一冊ものの繪本がある。彼の一枚ものほご錦繪さして完成されてはゐないが、彩色がさつぱりさあくごくなくて、いかにも感じが宜い。繪は二十葉、後文は「つれ〲ひさり笑ひ」さいふ題で、十九葉、それに素松さ稱する人の序文がある。○猶全論の中に、北齋英泉國貞、國芳の繪本・冊數が一冊若しくは三冊であるさ說かれてゐるが、之にも例外はある。例せば、國貞畫「三味線十二調子」は、六調子づゝ上下二冊になつてゐる。文は焉馬天保年中の作。」

以上、自分には珍らしい御報告であつた。殊に春信の繪本形式の彩色に至つては。倚も其後、自分もあの補遺さもいふべき見聞があつた。序でに之を書き添へておく。――それは、政信の大判（大錦よりも以上大に）墨摺の十二枚物の一枚に、あり〲奥村政信の署名あるものを見た事實である。

著者より

二月は雜誌も叢書も案外遲れた。殊に雜誌に於てひごい。叢書も納本をやつさ、三日さ八日に濟したぎりで、全部の製本は十日になつてからであつた。印刷所からは、舊正月其他で、人減りゆゑさ詫びが來た。自分の都合もあつて原稿も遲れたりして、あんなぶ樣、さいうてゐる此の號もまた三四日は延びるだらうさ愧れてゐる。今度は自分が流感の御仲間入をしたからである。風邪をひくさ、頭がぼんやりして駄目なものです。以後は多少の延刊は大目に見て頂きたい。十日になつてもまだ來なければ御催促を頂きたい。時々郵便の紛失もありませうから。（しかしこれが每月五六本もある現狀ではやりきれませんが。此体何處へごうなるか分らぬ、然し何處でも一はあるらしいことです。）□叢書も四月までは休止です。五月にはまた何か一冊出したい。豫定を更へて、洒落本か芝居物にしたいさ思ふ。尚、叢書の代五冊で參圓拾貳錢さいふのは、昨年限りの事です。□本年度はその都度七拾七錢づゝに願ひたい。□ごゞいつぶし根元集は、殘本僅少、本誌請君に限り、會員さ見做して、實費八拾貳錢で御頒ちします。□小寺玉晃全集、江戸軟派文獻、底本浮世繪類考なごは、今自分の別にやりたいさ思ふ事です。玉晃全集ば、ごゞいつぶし根元集の補遺にある如きもの、これは、先づ第一に出したいさも思ふ。以上。（二月二十五日夜）

○寄贈紹介

☒疲れた家　吉田映二氏著

疲れた家他數篇の創作脚本集である。テーマが、ブルジョアの惱み、暗闘、肉親の相殺に藉りてゐるだけ、眼新しく、それに氏の大震火災の体驗が織り合はされて面白い。殊に命題になつた「疲れた家」が光つてゐるさ思ふ「事件」性格を取扱ふのにも、手馴れたものである。（四六判三二八頁、東京小石川第六天町二四、段丘社。金貳圓）

☒褻語　富士崎放江氏著

頒布禁止になつたものださうだ。然しさりたてゝそれらしい處はない。氏の隨筆集研究錄であるが、二三エロチックな臭の烈しいのがある。氏の研究の滲透味は敬服の外はない。殊に土俗的の研究斷片至ては、拍案感嘆之を久しうせしめる。好著。袖珍七〇頁（福島市荒町、放江庵。非賣品）

□國語さ國文學（每號）○風俗研究（每號）○以毛圖流（每號）○墓碑史蹟研究（同）○性の知識（同）○國學院雜誌（同）○川柳續錦（同）

定價表		
一冊廿五錢	郵税貳錢	○郵券貳錢一割増の事
六冊分	壹圓四拾錢（税共）	○照會は返信料添付の事
十二冊分	同貳圓八拾錢	

大正十四年三月三日印刷
大正十四年三月七日發行　【定價廿五錢】　送料貳錢

編輯兼發行者　名古屋市東區車道東町百五十七番地　尾崎久彌
印刷者　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　荒北貞造
印刷所　名古屋市中區南久屋町二丁目三番地　扶桑社
發行所　名古屋市東區車道東町一五七番地　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七二番

依託販賣書目

○古今名家戯文集（序跋、報條等の部）八拾錢○新選歌曲集（淨瑠璃の部）八拾錢○近松門左衛門（塚越）壹圓貳拾○明治文化の研究（解放增刊）壹圓五拾錢○證道歌講義（山田孝道）六拾○山陽詩抄（袖珍）四拾○俗語大辭典（堀籠）壹圓八拾○俠文章（讀雲、來城共著）四拾○現今俳家人名辭書（宮地貞顯編）壹圓五拾錢○東海道中膝栗毛外金毘羅宮島及木曾四篇迄（活字本、五百頁）八拾○夢想兵衛胡蝶物語（馬琴、明治十九年飜刻）四拾○三体詩評譯上卷（野口寧齋）八拾○帝國文庫水滸傳下、壹圓○同眞書太閤記四、朝鮮軍記附、壹圓貳拾○聲曲類纂（大本上本、補遺附）七册、拾參圓○狂歌百千鳥（極彩色初摺美人畫）一册拾貳圓○畫本倭比事（祐信畫、初摺小虫入）十册九圓○帝國文庫赤穗復讎全集（上本）貳圓五拾○同其磧自笑傑作集下卷（表紙稍イタミ）壹圓八拾○猿の舌（眷庵）壹圓五拾○バグダン（同）貳圓五拾○奇話哀話（田中貢太郎）壹圓貳拾○南葵文庫陳列品目錄七拾○日本歳事史京都の部（江馬務、美本）貳圓五拾○俳諧歳時記栞草四册（馬琴、活字本）八拾○敵討傳（讀雲）八拾○圖書學概論（田中敬、美本）四圓○食物史（宇都宮黙龍。）壹圓四拾○變態知識（外骨編）十二册參圓六拾○浮世繪（雜誌）第一號より第三十號まで大揃、拾六圓○續德川實紀五册揃美本、貳拾圓○日本風俗圖繪（師宣の部）特製、參圓八拾○續々群書類從地理二册（美本）四圓五拾○同第七法制壹圓○同（續歌舞伎年代記全）貳圓五拾○近世實錄全書第三卷六拾○東京史稿（皇城篇。厚册）壹圓貳拾○風俗圖說（創刊號より七册增大號共揃）四圓五拾○浮世繪（雜誌）第八號より十一册揃、五圓○人情本略史（村上靜人）貳圓貳拾○江戸の夕榮（風俗珍話集）壹圓五拾○やつこ俳諧（珍書保存會本）八拾○雜誌三田文學二ノ七よりバラ三十四册參圓○雜誌思潮創刊號より十八册大揃參圓五拾○哲學雜誌第三十一卷第一號より第三十三卷第十號まで大揃三十四册四圓○哲學研究第二十一號より第三十一號まで揃壹圓貳拾○風俗一ノ一より二ノ六まで十二册八圓○風俗研究一より三十五迄六册欠拾八圓○猥褻廢語辭彙（外骨、初版）八圓○淨瑠璃註釋（山本）第貳編、八拾五錢○風俗志林合本、貳圓五拾錢○江戸情調と惡の讃美（高須）壹圓○

江戸軟派叢書の内（新刊）

○どゞいつふし根元集　全

非賣品　四六判大和紙　和裝美本

小寺玉晁著・尾崎久彌增補

都々一、尾張の宮より出づの新說を斷ずる唯一文獻、寧ろ享和文化文政期の宮宿遊里風俗資料として亦貴重なる逸文獻也。幕末偉大なる雜學者小寺氏の著、蓋し一讀を要す。是非の論は、この篇を觀ての後の事也。

○御船哥大全　完

送料共七拾七錢　同美本

尾崎久彌校訂

御船哥の最多量本也。校訂嚴正、所收の歌亦珍奇を極む。古今の歌曲ないまぜに、しかも津々浦々に材を藉りたる遊女たはれ男が悲戀悲愛の全展開、其他俚歌、童謠舟子歌さま〴〵とり〴〵綾羅を極めたり。蓋し稀本也と自奬に忸怩たらず。

大正十四年三月三日印刷
大正十四年三月七日發行

江戸軟派研究　第三册

定價貳拾五錢　送費貳錢

大正十四年三月二十八日印刷
大正十四年四月一日發行
貳編第四册（通卷第三十一册）

本文

お傳三津瀬川の三角關係
浮世繪師としての十返舍一九
附、一九自畫作物、及、挿繪本年表
都々一本解題抄

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第四册

都々一本解題抄

今日までに自分の蒐めた好此、都々一本の中、第一回、都々一本略解題を試みよう。今後も尚、蒐集を續ける積りであるから、第二次第三次、及び友人知己の蒐集をも加へ、愈々完全を期したいとも思ふ。今は、一家藏のもののみに據つておく。物の零碎、貧寒な嗤ふ勿れ。

○度々一圖會初編　銀庵主人　天保十三年頃
中本一冊、英泉の畫、爲永春水補綴とある東都風雅堂板。

○新板百人一首吉原ごゝいつ　弘化五年
禿筆庵可一（英泉門人）題、同畫と思はれる中本一冊、東都藤英堂板。

○しんよし原新宅さゝゐつぶし　同年頃
中本一冊、表紙に扇歌とあり、初代扇歌の謂也。（初代扇歌は、嘉永五年歿）藤英堂板、體裁等前に同じ。

○葉うた新吉原しんもん句ごゝいついよぶし　同年頃
中本一册、東都ふじや音次郎板

○よし原ごゝいつ　安政頃カ
中本一冊、國盛畫、東都いぐらかた町吉田屋三次郎板。

○新板はうたてうし付全盛名いり都々一　同年頃カ
中本一册、吉原、品川等各遊里の遊女名を讀み込みたり。畫者、板元不詳。

○ごゝ一圖會　初―五　光盛舍さく丸　万延元年
五編合本、中本一册。畫は、一光齋芳盛。國芳門人ならん、畫、野卑也。

○端唄部類二編　ごゝ逸の部　能六齋　同
横細長本一册。いろは尻取、つじうら、文句入、雜學、通計二百七十七章所收。

○清元部々一文句入初編　慶應年間
中本一册、畫者、板元並に不詳

○逸題　同
中本、さわり入部々一の殘缺本。畫、板元不詳。

○横はまお能部々逸　同
曉齋の畫カ。中本一册、頗るエキゾチックなもの也。

○度々一はうた二册合本　明治初年
初編貳編合本、小本、應久、金賀各々編初に題せり。金賀は、梅亭金鵞ならずや。

○漢洋部々逸圖會貳編　光齋　明治二年
取交漢は詩、洋は全ローマ字のもの也。畫者は一光齋芳盛カ。

○赤味漢語都々逸　山々亭有人　明治三年
字解
中本、所藏本其の三編。畫は歌重、板元は松林堂。

○五色染詩入紋句初論　蝶閑人　松延堂　同
畫者不詳、中本一册。

○新作別品都々一　明治初期
赤本物也、中本。其の三編と四編と二册。既に洋紙となりなれり、松延堂板。

○開化浮世ごゝ一　同
其の第三、五、六編の三冊、赤本中本也。板元松延堂。

○開化浮世部々一　同
同種のもの。中本一册、大橋堂板。

○逸　題　同
講院などの歌あり。明治十四五年頃カ。中本一册、島鮮堂板。

○部々一大津繪　風流千話文　明治十四年
淺草岡田作治の輯及板。中本一册。
（以上、全部東都板也）

○風流部々一　同年頃
半紙四ツ折本一册、春近畫、板元不詳なれども、歌者、トヨハシ、ミカハ等のみなれば三河豐橋の出版か。

○情歌戀の糸すじ　千賀徳太郎　明治十七年
横、細長本一册。表紙の繪、頗るキハドキもの也。名古屋、三輪淺治郎板、

○四季情歌林　志賀廼家　明治十八年
中本一册、頗る凝つたもの也、この本情歌をドドイツと訓せり。（浪華板には、慶應二年の情歌花言集あれども、此本、一荷堂半水の輯、同時によしこのと稱したれば、この情歌花言集の情歌もよしこのゝ意ならんと、此の都々一本としては取扱はざりき。爲念）此の情歌林は板元不詳なれども、大阪なるは明らか、但し裏表紙意匠によりて大川屋ならんか。
（よしこの本解題、及び都々一本補遺次册）

○月成は二代爲馬

例の猿猴坊（紅月成を爲馬であるとは、既に一部に知られてゐるが、初代か二代かは不（喪若三亡ツヾク）

お傳三津瀨川の三角關係 (續)

である夜、奪衣婆の許から二人が駈落。極樂さしてである。途中一字の辻堂で、牛頭、馬頭に、お大が呵責に逢ふ。三津五郎(此作では勝見)は柱に縛される。それが夢。

艶本極樂遊、中　第二回、假の妹背

西をさして行く途中、ある廣野で、道を聞いた菅笠、被布姿の男、それが思ひもかけぬ千代本遙壽(淸元延壽)だつた。(この延壽、無論淸元延壽齋(初代延壽太夫)文政八年五月廿六日、人に害されて死す、年四十九。即ち此の連中では一番先に冥土へ行つてゐる譯である。)遙壽の案内で、極樂町の入口まで來る。これから內へ這入るのに、女は構ひませんが、男は容易に通しません。役人衆を云ひ拵へる爲、二三日はこゝに逗留と遙壽に勸められて、こゝの旅籠屋に泊る。その晚、例のお大の病氣。これで見ると、作者は、淸元延壽も、お傳衞夫の役顏見世番附の一人だつた、あの通りの筋書を運んでゐるのである。たうとう遙壽とお大とが、逐電、極樂町へ逃込んで、道樂寺門前に店を借り、淨るり稽古の看板をかけて、女夫暮し。勝見は、出し拔かれたが、切手なければ後追ひ出來ず、悔し淚。爰に道樂寺の和尙は、貪欲强慾の惡僧、此程婆婆から來た多門(菊之丞)といへる美童を數多の給金で抱へ込んだ。(こゝにも多門生存中の、若女形としての變態的賣淫生活を取り入れてゐる。)

艶本極樂遊　下、第三回

道樂寺參詣の奧女中が、昔の馴染と知れて、多門と密會。和尙の憤怒。それを宥めて、寺門

前の家主雁助(かり)が、多門を暫く預る。そこに娘がゐる。これとも多門はいんぎん。この小娘の通ふのが、お大の稽古所である。多門も暇(ひま)な身、この稽古場へ來て、娑婆以來のお大との對面。そこで二人の甘いシーンが始まる。處へ大和屋のかつみが、「ア、こゝだ／＼」と尋ね來かゝる。二人驚く。勝見は、お大の髷(たぶさ)を取つておさへ、「またしても性惡女(をんな)め、ウヌどうするか見てをれ」ト相手を見れど、すつぽりとかぶる蒲團に顏見えず。嬌壽と思ひつゝふとんをはねのけ、顏見合せ、「ホイ多門か、怨みの程思ひ知れ」云々で、こゝで勝見が變態性の發揮となる。これが多門に對する復讐だといふのである。をりから來かゝる鶴屋閑木（鶴屋南北也。例の怪談南北で、文政十二年十一月廿七日、七十五で歿した。）この男の粹な捌で、多門お大は夫婦になり、多門と勝見は念者の仲を固める。流石は大作者の捌き、うまいもんだ。いよ／＼祝言の場となつて、「三人ン四人ン水いらずと謠ふも法の花がつみ、千代もかはらぬ菊蝶やめでたき春に若々とあいおい祝ふてしめてくれ、チョン／＼／＼モーッ、チョン」で大尾である。

莫迦らしいものだが、この所謂彼等三角關係の眞に、多少觸れてゐる、比較的にと、思はれぬでもないではないか。

他に、「風俗壽意姑傳」（落書庵景筆著、又平畫）三冊がある。（尙、此のお傳を取材とした艶本は夥しい數であらう。）これは、死後のものとも限らぬ。彼等の生前に、顏見世番附が出來てゐたやうに、これも文政十年頃のものでは無からうか。（番附は文政十年。お傳は、極樂遊によると、同十二年頃死。）これは主に、お大の方（これにもお大。お傳の變名）と菊彌（菊之丞の變名）の情話である。三よし左衛門時連（三津五郎の變名）といふ大名、

その妾お大の方（お傳）、小性小川菊彌（菊之丞）の三人が渦をまく。三よしの殿が、お大の方と同時に、菊彌をも愛してゐるのは、三津五郎お大菊之丞の三角關係に觸れてもゐる。殿の三よしは上に現れ、中と下とは、主にお大と菊彌の墮落である。この梗概は略いておく。

出版年月は極樂遊は、天保壬辰（同三年）春正月、耕錦堂の出版。（見返しにこの明記あり）。この「風俗壽意姑傳」は不明であるが、お傳、二優の歿前、恐らく文政末のもの、例の顔見世番附の文政十年の頃でもあらうか、これは既に述べた通りである。

〔尙、嘗て、本研究初編「エロチックスに滲む心持」に於て、挿繪とした不器用又平畫の扉繪の寫眞版は、此の「極樂遊」上の扉で、極彩色。お傳の艶姿であるのである。〕

物のあはれは戀よりぞしるてふ昔の言の葉を本となせるか、當時(このごろ)は世の流行こそ色に、あれ然はいへ萬物色を飾(かざ)る、色の世界に色なきは、深山の枯木々門田の案山子、身は墨染の坊さんすら、守本尊の大黒天に（以下六字欠）祠堂金何の勸化と集めたも、悉皆一つの（以下七字欠）の類は多し、たゞ世の中に色をもて、表となせる傾城より俳優にしくものあらんや、生ては萬婦に懸戀せられて（以下五字欠）旦暮の業とし、死しては畫像を家毎に掛て、巨萬の金を得さしむる、夫人とし生れなば、俳優になれや俳優になれやと、欲道の辻に住む、口欲道人識（極樂遊の序）

浮世繪師としての十返舍一九

最近、一九の狂歌繪本「江戸名所繪本」を入手した。かねて一九の傑作であるとは聞いてゐたが、〔「浮世繪の研究」第九、十號拙述、山氏の江戸名所物目錄參照〕披見してみて、成程と思つた。從來一九の畵技に對して、予らの持つてゐた淺識、彼の畵の程度は、たか〳〵膝栗毛物の狂畵の類と惟うてゐた、さうした先入的な、彼の爲には氣の毒な、遍頗な、輕卒な感じが、忽然破れざるを得なかつたのである。「江戸名所繪本」は、眞に堂々――戲作者の表看板を有した彼としてはである――たる風格ありともいふべきものである。我人共に多くは一九の畵技に對する、從來の淺見を一旦にして耻ぢしめるものである。それを、今自分が、此の機會に――この唯一資料を獲た幸運上――闡かにしておきたいと思ふのである。彼を浮世繪師として半面見ることは、或は妥當でないかも知れない。但し、從來一九の畵技は、相當に傳へられ、英泉や北齋が、戲作者として又傳へられるが如く、戲作者たる一九も半ば浮世繪師として諸文獻に載りをる以上、此の確たる浮世繪師風の手法を、問題にし、提示しておくべきは、やがて凡てに公平なるべき我徒の責であるとも思ふのである。

難かしい議論になつたが、要するに、此の一九の埋れた畫技に對して、新しく讃嘆したいのである。それである。偖、此の「江戸名所繪本」の解題、及び一九の浮世繪師としての予の論議

に移る以前、この機を利して、從來嘗て纏められてゐなかつた彼の自畫作物のみの年表を作つておかうと思ふ。（挿繪本の二三は別に附することにする。）彼の自畫作もかうして纏めてみると、驚くべき數量に上つてゐる。尙、不明なもの、畫者を自畫と斷らざるものは、一切略いた。これにも亦彼の自畫作物なきにはあらないであらう。此類をさへ數ふれば、蓋し夥しき數に上らう。今は、確然自畫と銘うたれたるもののみを、年代に據りて列擧してみよう（この年表、朝倉氏の小說年表に主に據り、青本年表其他二三を參して、異同は之を注した。）

○一九、自畫作物年表

（略號解――黃は黃表紙、洒は洒落本、笑は笑話本、狂は狂歌本也。）

年齡	種類	外題	冊數	年代
三〇	洒	倡賣往來	一	寬政五年
三二	黃	心學時計草	三	寬政七年
		○右、六樹園の想によりしと云。但し、此本、戲作外題鑑には、春町畫とあり。（久）		
仝	仝	新鑄小判嚢	三	仝
仝	仝	奇妙頂禮胎錫杖	三	仝
三三	仝	怪談筆始	二	寬政八年
仝	仝	御誂向鼠嫁入	二	仝
仝	仝	垣覗本草盲目	三	仝
仝	仝	替錢通用壽（イ護）語錄	二	仝
仝	仝	雷門再興 御膳淺草法	二	仝
		○文化五年「流返淺草法」と改題再板。		
仝	仝	欅會入雲鳥	二	仝
仝	仝	初登山手習方帖	三	仝
仝	仝	擲打變術卷	三	仝
仝	仝	信有奇怪會	二	仝
仝	仝	鳶油揚淩構	三	仝
仝	仝	化物年中行狀記	二	仝

全　全　色物小道帳　二　全
全　全　[illegible]日影七編即生　二　全
全　全　早野勘平若氣誤　二　全
全　全　蟲看鑑野邊若草（役）　三　全
全　全　由断敵薬功能書　二　全
全　全　浮世套錢箱　一　全
全　全　青海波龍宮　三　全
全　全　千里一刎勇天邊　三　全
全　笑　[illegible]風の神　二　全
三四　黄　打帥直開帳　三　寛政九年
全　全　闇思獸の世界（境）　二　全
全　全　家内安全鼠出入　三　全
全　全　金生水抜幹　二　全
全　全　誘東埔塞掌（こころわざかぼちやのつる）　二　全
全　全　壽金太郎月　二　全
全　全　太平記無禮講中　三　全

全　全　千早振紙屑籠（悪比壽）　二（或八三）　全
全　全　釣戎水揚帳　二　全
全　全　忠臣店請狀　二　全
全　全　貨物見越松　二　全
全　全　花筐勇者命　二　全
全　全　源氏目切平戸灘閣今昔狐夜啼　三　全
全　全　時世遍抜井　一名、緇名軍談　二　全
全　全　玄猪節（袋入）　三　全
全　全　貧福水掛論　三　全
全　全　風光花桂男　三　全
全　全　薯蕷鰻鱺薬（ヤマノイモうなぎ）　二　全
全　全　夜眼遠目笠の内　三　全
三五　全　御徳用黄金草鞋　二　寛政十年
全　全　假名文章女忠臣　二（或八三）　全
全　全　河童尻子玉　三　全
全　全　義光夜切珠　五（或八三）　全

仝　仝　雲上道中記　三　仝

仝　仝　前度往昔軍　二　仝

○此本、「往昔こんな物語」として、文化十二年再板。

仝　仝　かゞみ山草履打柴金照降町（增）　三　仝

仝　仝　十返舎戲作種本袋入　二　仝

仝　仝　尻撫御要愼　三　仝

仝　仝　忠臣星月夜　二　仝

仝　仝　雨宮風宮出儘略縁起　三　仝

仝　仝　取得貨徳用　二　仝

仝　仝　兎角一升人唯樽底拔　三　仝

仝　仝　福神江島臺　三　仝

仝　仝　熊坂長半物見松御休所　三　仝

仝　仝　太郎冠者　三　仝

仝　仝　一陽來伏帳　二　仝

仝　仝　價千金榮花夢相　三　仝

○一名、三助待爲運次第

三六　仝　赤本鼠黑本狐両評趣入抄　二　寬政十一年

仝　仝　穴賢狐縁組　二　仝

仝　仝　運開大黒傘　三　仝

仝　仝　大福茶呑噺　二　仝

仝　仝　敵討住吉詣　二　仝

仝　仝　正直即功紙　三　仝

仝　仝　善悪兩良藥　三　仝

仝　仝　竹本義太夫武士　二　仝

仝　仝　大鯨豐年貢　二　仝

仝　仝　露深淀引船　二　仝

仝　仝　源八渡平太堤三十石艌ノ始　三　仝

○露深淀引船の後編也。

仝　仝　殿下茶屋聚仇討　三　仝

○敵討住吉詣の後編、尚、天保二年畫を豊國に改めて再板。

仝　仝　腹内養生主論　三　仝

仝　仝　鳩讀試禮者笑宴　三　仝

仝　仝　花軍梅先陣　五　仝

仝　仝　星月夜鎌倉山　二　仝

三十七　仝　運次第出世縁組　三　寛政十二年
○此書、青本年表になし。
仝　仝　白井權八金松權八男達東錦繪　二（寛八五）　仝
仝　仝　大江山幾野紀行　二　仝
仝　仝　同後編　大江山物語　三　仝
仝　仝　白雨や田を見廻の開帳噺　二　仝
仝　仝　木下蔭狹間合戰前編　三　仝
○此本、及び次本、青本年表になし。
仝　仝　狹間合戰後編　三　仝
仝　仝　此縁唐有乎（今此奈縁）　三　仝
仝　仝　去御方の御好に付稚衆忠臣藏　三　仝
仝　仝　心學芋蛸汁　三　仝
仝　仝　出世鯉四方瀧水　二　仝
仝　仝　化物見世開　二　仝
仝　仝　貧福蜻蛉返　二　仝
仝　仝　昔話味縁熟　三　仝
○文化十二年に金蔓堀出分限と改題再板。
仝　仝　明眼千人盲仙術　二　仝
仝　笑　怪談富士詣　一　仝
○永壽堂作とあれど、一九の代書作也。（青本年表）
仝　笑　臍茨茶呑噺　二　仝
○此本同じく永壽堂作、實は一九の代書作也。（同）
三十八　黃　いろは短歌　二　享和元年
仝　仝　忠臣藏十二段續書事素人狂言（流）　三　仝
仝　仝　敵討巖柳島　三　仝
仝　仝　同後編　後日噺　二　仝
○文化十一年、前後編とも月陽齋にて再板。
仝　仝　嵯峨釋迦開帳延喜槃花　三　仝
仝　仝　金寶身躰直　二　仝
仝　仝　吉田初右衛門藝子菊野敵討初嵐桐一葉　三　仝
○此後編「敵討操草菊之籬」三は榮水畫也。
仝　仝　落咄三番叟福ノ種蒔　二　仝
仝　仝　質流思外幸　三　仝
○此本、文化五年「質流人行末」として再板。
仝　仝　智惠文珠御夢想丸馬鹿附藥　三　仝
仝　仝　人武士忠義功　二　仝

三八　黄　人心兩面摺（前）　三　仝
〇後編一裏面心拔路次一、享和三年板。
仝　仝　福德三年酒　二　仝
仝　仝　安全案内　山神御祭禮　二　仝
仝　仝　忠臣藏四十八文字　三　仝
仝　仝　春霞男達引　三　仝
〇此本、小說年表は畫者不明。青本年表に自畫さあるに據る。
仝　酒　野良の玉子　一　仝
仝　笑　落咄三番叟福種蒔　二　仝
三九　黄　的中地本問屋（あたりやした）　三　享和二年●●●●
仝　仝　美男狸金箔（いろをとこ）　三　仝
仝　仝　屈伸一九著（えいやつさ）　三　仝
仝　仝　嗚呼愚舖話（をやまからしいわ）　三　仝
仝　仝　播洲赤穗車川仇討實記（話種本）　三　仝
仝　仝　旅恥辱書捨一通　三（武八二）　仝
仝　仝　忠臣陶物藏　三　仝
仝　仝　夏紛男達縞　前　三　仝
〇一名、一九畫作曆七縞。
仝　仝　夏木立戀重荷　後　二　仝

三九　黄　玄德武勇傳　三　仝
〇此本、青本年表の自畫さあるに據る。
仝　酒　青樓奇談狐賓入　一　仝
仝　仝　吉原談語　一　仝
仝　仝　商内神　一　仝
仝　仝　廓の意氣地　一　仝
仝　仝　起承轉合　一　仝
仝　滑　膝栗毛　初編　一　仝
仝　狂　南總記行旅眼石（すゞり）（中本）　一　仝
〇改題、馬士の歌袋。江戶軟派叢書所收のもの也。
四〇　黄　兩面摺後編裏面心拔路次　三　享和三年●●●●
仝　仝　桃太郎後編初寶鬼島臺　二　仝
〇青本年表には、重政畫さあり。
仝　讀　怪物輿論　五　仝
仝　滑　膝栗毛　後編　二　仝
？　仝　紅摺讀本疱瘡輕口噺　一　年代不詳
〇右、附會案文の奥附に據る。（久）
四一　黄　化もの敵討　二　文化元年●●●●
仝　仝　人慾看通卜筮　三　仝

四一　黄　（化物繪本）繪本化物太閤記　二　全
○此本、絕版手鎖五十日を命ぜらる。
全　滑　諸用附會案文　一　全
全　全　膝栗毛　三編　二　全
全　全　風流田舍草紙　六　全
全　酒　敎訓角力取草　一　全
四二　黄　お誂向叶福助　金生木息子　三　文化二年
全　全　敵討丹洲手々打栗　五　全
全　滑　膝栗毛　四編　二　全
四三　黄　復讐矢指浦　前後　六　文化三年
○青本年表は、豐國畫とせり。
全　全　法誓輪廻仇討　三　全
（串戲）○同、豐廣畫とせり。
全　全　滑稽しつこなし後編　三　全
全　全　花雞大安賣　二　全
全　全　敵討此方之世界　二　全
全　全　其身益金持親玉　二　全
○此本、青本年表になし。
全　滑　膝栗毛　五編　二　全
全　追加　一　全

〃　黄　新板道中助六　三　年代不詳
四四　滑　膝栗毛　六編　二　文化四年
全　草　新作はなしうなぎ　口合　一　全
○此本、青本年表になし。
全　全　敵討連歌怪談　三　全
全　全　敵討仲間入　三　全
全　狂　滑稽鹿島詣（中本）　一　全
四五　滑　膝栗毛　七編　二　文化五年
全　草　商人金采配　三　全
全　全　花曇都仇討　五　全
○此本、青本年表は、春亭畫とあり。
全　全　雷門再興　瀧返淺草紙　二
○御膳淺草法の外題換へか。（小說年表）
四六　滑　膝栗毛　八編　三　文化六年
全　草　ちやばん串戲狂言一夜附　三　全
全　全　化物畫　四　全
四七　全　婦女忠臣假名文章　三　文化七年
四九　滑　續膝栗毛三編（木曾）　二　文化九年
○月麿、式麿口畫。
全　全　妙伍天連都　一　全

五〇　滑　續膝栗毛四編（木曾）二　文化十年

全　狂　江戸名所畫本　一　全

五二　滑　續膝栗毛六編（木曾）二　文化十二年

○式亭口畫。

五三　全　全　七編（全　）二　文化十三年

○二世歌麿口畫。

全　全　全　八編（木曾 善光寺）二　全

○同。

五六　草　八百屋料理當年靑物語　三　文政二年

全　滑　續膝栗毛九編（善光寺）二　同

○二世北齋口繪。

五七　全　雜談紙屑籠　六　文政三年

全　全　續膝栗毛十編（草津）二　全

○春亭口畫。

五八　全　全　十一編（同）二　文政四年

五九　全　全　十二編（同）三　文政五年

（備考、一九の歿——天保二年八月七日、六十八歲也）

〔此歿年壽、靑本年表及小說家目錄、名人忌辰錄等の說に據る。〕

○一九、挿繪本年表

三一　黃　大入目靑葉見物山時鳥初役金烏帽子魚　袋入　二　京傳著　寛政六年

五〇　狂　關東百題狂歌集　二　芍藥亭著　文化十年

○京傳、三馬等と合挿畫のもの也。（江戸狂歌書目）

五八　全　夷曲こゝし俵　二　田原船積著　文政四年

——以上、一九の自畫作、挿繪本年表、終——

かうして列擧してみると、彼の自畫作物が、其の初期、及び中期に亘り、案外夥しいことに自分乍ら驚かされたのである。

一九の畫の傳統如何

これは、從來何人からも聞かなかつた事柄である。果して一九の畫は、獨創であつたか、それとも、何人からか或は感化を、若しくは親しく指導を受けたであらうか。偶々、問題にしておかなければ、今後何人からも聞かれぬ事かも知れない。よりて、今、自分の思ひ付いたヒントだけを述べておく。

一九が元來、耕書堂（蔦重）で錦繪の礬水引をしてゐたといふのは、いつ頃か。寛政五年に「倡賣往來」を彼は出した、これが處女作である。近世國文學史（佐々氏）では、「これが緣となつたものか、やがて例の出版書肆蔦重に奉公する身となつた、馬琴がこの家の番頭を辭した翌年のことで」といはれてゐるが、すると、この彼の蔦重の礬水びきは、この寛政五年以後、同七、八年頃までの兩三年間のことであらう。（作者部類は、寛政六年の秋より奉公のやう、説いてゐる。終期は明かでない。唯、寛政の季に長谷川町の町人某に入夫したとはある。）然し此の間、繪草紙屋の蔦重にゐて、礬水びきをしながらに、彼は畫技を自然に會得したと見るのもをかしい。やはり、天然に多少の畫才があり、それが、この繪草紙屋の蔦重の、繪草紙の雰圍氣にゐて、次第に醞釀し、發達したと見るべきだらう。彼が、多少の畫才のあつたことは東海道膝栗毛の、發端に於て、彌次郎の身元につき、

「彌次郎は又、國元にて習ひ覺えたりし油繪などを書きて、其日暮につき米の」

云々とある、これによつての類推である。即ち彌次郎は、多少、彼作者——一九の自敍傳的

性質を具へてゐはしないかといふ前提からである。一九も駿河（府中）の生れ、〔遠江説の一説（作者部類など）は暫く除外す。〕彌次郎兵衛も府中の生れ、且つ其他に於て、多少の自分の臭を嗅がせてはゐないかといふのである。〔この油繪云々については、膝栗毛輪講——鳶魚氏にいろ／＼と出てゐる。参照を要す。編〕

　これはさて措いて、とにかく、彼の幼年時代から畫技に對する才能は多少のそれを有してゐたと見るべきであらう。然しそれが「倡賣往來」以後、數十種の自畫作に及んだには、餘程自信と又多少の時人の好尙もあつたが爲であらう。從來諸書は、「初期は、まだ小作家であつたから、自畫もした。中期以後は、大家になつたから、他の專門家に描かした」といふのが定説のやうでもあるが、自分は、これを否認したい氣もある。何となれば、需要なければ、決して物は生れず。時人の多少の喝采、少くとも板元の損がないと決らなければ、あの如き無數の自畫作の出版されよう筈がないではないか。殊に最初は、彼の奉公してゐた便宜上、その出版も蔦重一手のやうに見えるが、寛政八年以後は、泉市、村田其他いろ／＼書肆を更へてゐる。是れ多少彼の自畫自作が、世に認められた證ではないか。然るに、そろ／＼中家になつた彼が、まだその多くを自畫で作した、そこに、彼の自信と、矜持があつたのではなからうか。殊に、寛政六年には、彼は單一畫家として、京傳より取扱はれてゐる。京傳が、一九の名を賣らしてやらうといふ好意にもよるであらうが、とにかく寛政六年の「初役金烏帽子魚　袋入　京傳作」は、一九の畫であるではないか。

作者部類の「初は、多く自畫にて板したれども、其畫拙ければにや時好に稱はず、故に後には別人に畫せたり」とあるのは、自分の説とは全く反對であるが、これは、例の馬琴の嚴格な性格――寧ろ潔癖から來た惡口でありはしないか。寛政末は既に、相當な作家となつてゐた、に拘らず、自畫を尙續けて、殊に、彼の出世作の膝栗毛は、殆ど彼の自畫で一貫してゐる、それから考へても、及び、此らの畫技が拙かつたから賣れなかつたの畫技拙劣説を根柢から覆すものは、晩年に近い文化十年（彼の創作過程としては、極盛、爛熟期に方にある――）に狂歌「江戸名所畫本」の自畫編集本あるに於てをやである。單に畫技の描き故といふのは、全くをかしいではないか。即ちこの盛名隆々たる當時に於て「若し果して拙劣なる世評を買ふ惧れあり、又自家に自信なくば、如何ぞこの期に自畫の編輯本あらんや、必ず他畫家の專門家を頤使したであらう。然るに、自畫ときた。恐らく、彼としては、相當の自信もあり、或は自惚もあつたらうと見ては如何うか。

尙、彼が、專門的畫家の、らしい出發點を一方に有してゐたといふのは、京傳の本に挿繪した外に、板畫の製作のあることである。これは、吉澤商店のコレクションを集めた「浮世繪板畫全集」の中、第二八二圖にあるものである。一九畫と落款のある、役者（片岡仁左衞門）の畫一枚に就てゞある。該畫集の別冊「浮世繪師傳」の中には、

「一九は、其姓氏未詳なれども、其名よりして戯作者十返舍一九ならずやとの疑問を生ぜしむ。細繪にて役者を描きたる

もの、及び大判に角力取大童山文五郎を書きたるものゝ外見たる事なし、寛政より享和の人の如し。」

と假想してゐるが、自分はこれを一九その人と見たいのである。後年の「江戸名所繪本」の畫者、此種の板畫の二三は、當然と思はれるのである。この仁左衛門、即ち七代目仁左であつた。恐らく彼(仁左)の寛政元年より同六年、同六年十一月より同九年九月に亘る初期の江戸滯在期間の或る扮畫であらう。今檢索の遑のないのを憾みとする。大童山文五郎の出現は、また寛政七年である。即ち共に寛政六七年であるとする兩者の吻合と、及び京傳に挿繪をなした寛政六年と、これらを照合すると、この疑問一九は、彼一九であらうと思へてくる。即ち此間、此等の板畫は、一九が手ずさみに、蔦重又は其他から、(仁左衛門の板畫、板元不詳)出板させたものではなからうか。(大童山は、寛政七年十一月の番附に、張出前頭として、「羽州長瀞大童山文五郎、當卯八歳」にて土俵入」と見え、年長(けるに從ひだん〳〵弱くなり、かくて、二段目張出となり、二段目最終に列し、九年冬場所まで名を番附に止めたまゝで、後は消えたといふ。日本角力史、「民族と歷史」相撲號等參照。)

次に謂ふべきことは、彼の畫は、多少の天資がそれにあつたとしても、また感化、摸倣もあつたとしても、「無論見當を外した話ではないのであるが、然らば、誰人の畫に、似てゐるか、感化されたらしいか、それを自分が述べておきたいのである。吉澤コレクシヨンの役者繪は、見た所、頗る春章ばりである。或は春章にも感化されたか、それも無論春章個人ではなからう。春章は、寛政四年十二月八日、六十七才で歿してゐる。一九が、大阪の淨瑠璃作者や、(丸本、木下蔭狹間合戰に、合作したと稱するが、此の年代は寛政元年である。)入婿して離緣されたりして、

江戸へ放浪してきたのは、佐々氏の見らるゝ通り「倡賣往來」の以前、同四、五年の交と見てよからう。すれば、春章に逢つたか逢へなかつた位ゐのきはどさである。恐らく、春章門人の春英、又は後に、彼の自畫作以外他に描かしめた最初の畫家、即ち春亭(春英門人)などからして勝川派の筆法を摸したといふべきか。(春亭に、初めて挿繪せしめたのは、寛政十年の「初買大福帳」であり、次で享和元年の榮水(榮之門人)、初代豐國、春亭、などゝいつた風に、漸く、他挿繪が殖えつゝあるのである。)

尙、文化元年板の自畫作「附會案文」の挿繪、卷頭の「遊女文書く」圖などは、また頗る重政(北尾)に似たりといひたい。重政に直接敎へを受けなくとも、靑本無數の挿繪畫家たる重政の感化は、無形に、畫を好める彼に無論あつたと見て可からう。かと思ふと殆ど同時期の(一年前の享和三年の)旅眼石(一名、馬士の歌袋)は、頗るまた蕙齋(北尾政美、政美は重政門下)の略畫式の筆法を眞似てゐるともいひたい。(政美の略畫式は、寛政後半期に數册出てゐる。中、家藏のもので、年次の分つてゐるものは、人物略畫式三編が寛政十一年初冬。及び遊畫式の一册に文政三三月といふのがある。)然るに洒落本「起承轉合」の一九畫とした口繪を見ると、(起承轉合は享和二年板)また以後の「附會案文」と同じく、頗る重政か、でなくとも正確に浮世繪美人を學んだものと思はれるものがあるのである。飄脫、滑稽味はそこに決してない。かと思へば、同年(享和二年)の「膝栗毛」初編の繪は、「旅眼石」系と重政系との中間にあるやうに、それに彼の獨自の巫山戲味を持たせた、所謂一九の繪になつてゐるかと思ふ。即ち、重政や、政美の略畫や、勝川派の役者繪や、

或は、榮水(榮之門人)とも割合に心易かつたらしい點から、(最初期に榮水の挿繪本あり、且つ膝栗毛等にも屢々口繪を描いてゐる。殊に、「旅眼石」の卷頭の榮水畫の、僕を連れた一九と銘を打つた旅人姿の顔と、「附會案文」の冒頭の自畫像とは、頗る表絶似たりである。即ち、一九に親近してゐたもの、榮水と見てよからう。既にこの享和二三年に於て無論。)その師の榮之や榮水などの美人畫、或は蔦重の關係で歌麿等とも割合親しかつたでもあらう。即ち當初彼の畫技は、頗る是等が皆個々に彼に流れてゐると見てよからう。その中から彼は、獨自らしいものを二個生んだ、一は狂体畫として膝栗毛類の狂畫、一は正確畫として、「江戸名所畫本」類の精畫と、此うしたことに謂うてよからうかと思ふ。人は、或は、「膝栗毛」風の狂畫のみを彼の獨自と呼ぶかも知れない、然し起承轉合の口繪、附會案文口繪等からきた正確な、浮世繪世態描寫の手法、それが更に進んで、この「江戸名所畫本」となつた、即ちこも亦彼の圓熟境と見たいのである。

「江戸名所畫本」解題

前書が長くなつたが、愈々「名所」の書を紹介するのであるが、此に先だつて、簡單に、此本の解題を記しておかう。以て、自分の浮世繪師としての一九觀を一先づ終らうと思ふ。

家藏の「江戸名所畫本」は、綴直し本であるからといふのではないが、二冊のものの一冊合本らしく思へる。「狂歌書目」は一冊としてゐるが、漆山氏の目錄、並に家藏の一冊本の自序にも「ふたつの冊子」とあるから、家藏の本は、合本であり、二冊といふのが正しからうと思ふ。さ

て、外題であるが、之には二様ある。即ち表紙裏の見返しの外題と、序のはじめの標題とは異つたものである。見返しには、

十返舍一九著　高名狂歌集　江戸名所圖會　東都書林　南　聽　舍藏

と三行に亘つてある。然るに一九の自序の冒頭には、江戸名所畫本とある、（狂歌書目も此の名である）。よりて今は、姑らく此の自序冒頭の外題に一定しておく。序に、「（前略）さらにあが、ざえなくして、もとより畫の事は素人なり」と謙しつゝ、「云々、玉くしげふたつの冊子をいらなくもかいつけぬるものから「千早振紙數の拾餘章をかさねつゝ云々」とあり、末尾に「文化十年酉のはつ春、十偏舍一九識」と署名がある。畫は十七八葉づゝ二卷、畫中、狂歌の署名として、予らの耳目に親しいのは、和樽、京傳（山里東士さいふのがさうではなからうか。）、三馬、三陀羅、の類で、今の自分には一向高名でも何でもないと思はれる。畫は、凡て稍普通の浮世繪手法よりは、飄逸味があるかと思はれるが、然しさうした彼の一方の特色を持し乍らも、よく正確な、（に近からうとした）努力の見える點を買はずばなるまいと思はるゝ程の物である。寫實と飄逸味との融化、後の、或は同時期の穠麗な浮世繪美人畫（諸家の）とは何處かに違つた風格に於て、却つて彼をして、戯作者としてよりも一個浮世繪師として記念した方が意味あるかと思はれる程のものである。論議は無用、その代表的な二三を縮寫して登載することにする。即ち後掲の如きものである。一方の――狂体畫は、世間在り觸れてゐるから、これは略いた。この風格に似たものは、「旅

眼石（馬士の歌袋）」の自分の飜刻本の美人（江戸軟派叢書初編所收）を見て貰ひたい、即ち此は、この傾向を稍狂体にしたものと云ひ得られる。

補遺

前稿で、倡賣往來（一九の處女作、寛政五年）に一向觸れなかつたが、とにかく自畵作のこれが皮切りである。藏本、今自分にないが、昔偶見した記憶に據ると、附會案文と同樣、上欄に、彼の狂体風の畵があり、また口繪は、太夫、禿などの四圖、それが、享保十三年板の擊鉦先生著の「両巴巵言」（一名、両都妓品）の挿畵を摸したと自稱してゐるものであつた。この「両巴巵言」の畵者は、鳥居清信である。一九はこれを摸したとはいふが、それは既に鳥居を脱して、一九樣になりつゝある、さうした風格を負んだものである。不圖思ひ浮んだことは、一九はこの鳥居清信と畵系を引きはせぬか、無論私淑の點から。然しそれは、さう思うただけで、自分乍らをかしい。この両巴巵言と倡賣往來だけでは、清信の感化のみに、一九を見るを得ない。やはり、前々述の如く、諸家の畵本挿畵を摸寫臨畵した、就中重政や春英らに力を私淑的に受けたと見るべきだらう。

尙、數行の余白に、「江戸名所畵本」に載せられた狂歌の二三、代表的なものを擧げてみよう。○影ものゝ襟もうごかん上野山のぼりくだりの花の雲には（和樽）○廓言葉習ふ小つまの八文字かく手も多きたをやめのふり（山里東士）○たなばたは今宵妻乞ふ鹿ならでもみぢのはしをふみわけて逢ふ（三馬）○一文も拂はぬうちへかけとりのあきれが禮にきたる元日（一九）○淺草の市には鳩の眞似もして豆大黑をひとつ拾はん（三陀羅法師）。

（表紙二より）明である。然るに、これは無論二代焉馬である。土器お傳の情人の一夫でもあつたことは、前册にもある。それに、こゝに的確な證據は、同著、亦平畫の五大力戀の柵二册本の上の卷に、自序があり、終りに、

蓬萊山の麓にながくしを送る
隱人　猿猴坊月成　誌

と立派に署名がある。さうして此本、丙戌（文政九年）春新板、金玉堂梓と記入もある。即ち二代蓬萊山人改め二代焉馬たる事は無論である。初代の談洲樓焉馬は、文化五年に八十で死んでゐる。二代焉馬は、文久二年歿七十である。然しその作本期は、（月成として）畫者に初代國貞などの多い點から、文政末期天保頃と見てよからう。

○增井䕺齋などの事

前册表紙（二）でいうた、野圃の玉子の作者增井氏が、東海道膝栗毛五編上に出てゐるし、この五編は、殆ど尾張の狂歌師又は作者連の狂歌を以て、一九が畫賛にしてゐる。增井もその一人である。其他木の芽田樂、南瓜蔓人（これは、名古屋見物、膝栗毛四編綴足二册を作した東花元成の類ではないか。此の元成は、文化十二年頃、名古屋に僑居してゐた、江戸の産である。此の元成と、例のカボチヤ元成（三代一九）との間に關係がありはせぬか、これは又他の機會。）蛙面水、（これは、「野圃の玉子」の序文者）䕺齋時恭、（彼は時恭といふ名であつたと見える。）其他全部尾張の者である。皆一九の知己と見てよからう。

著者より

○前册は意外な延刊でお氣の毒をした、散々待つて頂いたらしい。堂々たる數人よりの物でさへ、延刊の普通である今日、というて自分の事情を辯護するのではない。歴史地理は延刊である。毎月延刊、其他學術雜誌は大抵十日位ゐは延刊である。延刊せぬのは、講談物、民衆用雜誌及びサンデー毎日、週刊朝日位ゐだ。延刊である時は、諸賢よりも自分の方が一層のいら立たしさである。○というてゐるうちに、今度は割合に早く編輯を濟した。どうも材料の配合が單調のやうでもあるが、ある題目によつて、それを一時にやつて了はぬと、後では纏らない惧れのある必要上、已むを得ず、あゝなるのです。とにかく江戸軟派の浩漢たる曠原を歩く旅人、行き當りばつたり花を摘み、道草を喰ふ、その樣々であると寬恕して頂きたい。その代り、毎月、諸賢よりは比較的專念的に歩きつゝ、漁りつゝあるのです。それは毎月此を出さねばならぬ必要上からです。とにかく諸賢のお蔭で、私も漸く智識づけられて、きたやうな氣がする。然しまだ不滿足でもあり、材料に於ても缺陷の多い、遺憾さを述べておく。つまり小生は、諸賢に代つて一個の報告者でありたいと思ふのです。○忠實な、多樣に興味を持つた報告者として。○軟派叢書も、來月は、ぼつ〳〵原稿にとりかゝるつもり。まだ材料は未定。○誌代をなるべく振替又は小爲替、切手はお止めに願ひたい。已むを得ずば、貳錢切手のみに願ひたい。○參錢切手や拾錢參拾錢は困ります。自分一人の仕事故、電報の必要もなし、來信も一切ハガキ故、切手が不必要で困るのです。○拙著の別單行も、（春陽堂出版のもの）校正を四校迄最近全部濟しました。内容は本文丈が五百二十頁。索引の校正がまだ途中、この索引は六十頁の豫定。坪内博士が長序、九ポイント十五行組で七八頁の序文を下された。此本、菊判です。裝幀は、見返し共小村雪岱氏、板畫の挿入寫眞三十九面ばかり、内容其他に就ては、何れ春陽堂から發表するでせう。六月頃の發行でせう。私の大正五年頃から昨年五月迄の記述の選集及同補遺です。本誌より取つたものもあり、又他の雜誌新聞よりのものもあります。○他後便——三月二十二日夜

寄贈雜誌　開化草紙（參拾錢、東京牛込戸山町十三正岡方）○性の智識○日本音樂○國學院雜誌○藥碑史蹟研究○川柳鯱鉾○帆柱（戸川殘花號）○風俗研究○國語と國文學○うた澤○新舊時代（創刊號）。

定價表		
一册	廿五錢	郵税貳錢
六册分	壹圓四拾錢	税共
十二册分	同貳圓八拾錢	

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

大正十四年三月二十八日印刷
大正十四年四月一日發行
【定價廿五錢】送料貳錢

編輯兼發行者　名古屋市東區眞郷町百九十七番地　尾崎久彌
印刷者　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　英比貞造
印刷所　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　扶桑社
發行所　名古屋市東區道德町一五七番地　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七二番

○春秋褄重著

あけぼのの幕や紫、ゆかりの君にトンと一夜もあゆち瀉ひとり根山のこの朝明を、梅もちらほら笑んでもゐるに、往きかふ人はいと稀に、芽ぐんだ櫻に笹鳴の雀も戀が憂いとてや、さつてもうら／＼木下を行けば、色んな事が思はるゝよ、二た年前の秋さなか、寒い晝過ぎ二人で來たは、夢かうつゝか幻か、その時入つた田樂屋、今も煤けてゐるであろ、そなたが妙に鼻白んだ、あの古疊もさうであろ、男女は不思議な世界、二人侘びしい心と心、抱き締められ締められて、主があらうが越える時や越える、堰かれた水も切れる時や切れる、行き通つたる蔦葛結んで解けない、解けたといふは、人の誠か僞かいな、勿体ないが申譯ばかりに詣つたあの御堂、今も假堂の儘でゐる、しや暗い壇の賽錢箱、あの時觸れたお前の袖、その八ツ口を覗みたる、麻の葉くづしひれ伏して、何か專念念じてゐたが、私にや却つて可笑しくあつた、見渡す岡に林と畠と、田舍へ行きたい籠の鳥、金ゆゑ堪へてゐるものの、せめて一日のんびりとしたいとはその時誰の口、並木の櫻も枯れてゐた、風は變らで秋風が、淋びしかつたよかさこそと、葉を騒がせてゐたつけが、お詣りすませた歸りがけ、そろ／＼薄れた夕陽のなかを、素破大變と流石に急いだ、派出なお前のあの髷に、散りかゝつたるその一葉、抓んで憎いと棄てたるを、お前は覺えてゐるかいな、うつかりひよんと消え果てた、昔の幻追うてゐる、わしの足許じく／＼と、はや陽炎か春陽立つ、軒の下つた駄菓子屋の、店に吊られた糸袋、南京豆の一竿に、埃たゝせてそよや風、鳩めもククと笑つてる、夢じや敢果なし忘れてしまへ。

――稿本「續篇小唄しんさく」より――

大正十四年三月二十八日印刷
大正十四年四月一日發行
江戸軟派研究 第四册
定價貳拾五錢 送費貳錢

大正十四年五月十五日印刷
大正十四年五月十八日發行
貳編 別冊第一（通卷第三十二冊）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

別册第壹

本文

江戸時代隨筆考證物翻刻索引（上）
1、戲作之部
2、演劇之部
3、音曲之部
4、雜藝之部
5、風俗之部
6、花街之部
名古屋の洒落本（市場直二郎）

名古屋の洒落本

市場直二郎

（前略）

扨て貴著江戸軟派研究二編第三册、第四册御記載の名古屋の洒落本作者「增井山人」「椒芽田樂」等の記事有益に拜見仕候。之に就て小生少しく愚考有之、御參考迄に申上候。增井山人及び椒芽田樂の著書に左の如きもの一見仕候。

一、南驛夜光珠一册、蕙齋主人作、文化四年作。

この書は、軟派研究第三册によれば、三册本なるかの如くなれども、京都帝大圖書館所藏の筆寫本（恐く作者の稿本か）は中本形一册本にして唐表紙を附けたり。作者の自序、花林堂紫旦の畫並に贊あり。次にヒラキ二面の傾城の彩色畫ありて、卷尾には增井山人の跋を附す。（增井山人と蕙齋との同一人なることは御高說の如し。）御說の如く熱田の洒落本なり。

序によれば、文化四年の作なり。

二、輕世界四十八手一册、合作、寛政十二年作

中本形筆寫本、椒芽田樂の叙、大文字屋獨息子の序あり。所々彩色にて嫖客の畫を挿入す。數章に分ち、各その作者を異にす。

南廓	切れる手	有雅亭　光
代雜面	見拔かれた手	滿壽井豹惪
大浮	不味な手	由賀翁齋
逸利氣	忍の手	於仁茂十七
伊奈兵	端出な手	有雅亭　光
臺華	易ひ手	川東京傳
通多田	捻つた手	木下山人
都他茂	鼠の手	由賀翁齋

蓋し之等の作者は皆名古屋邊の通がりの人間なるが如し。而して滿壽井豹惪とは勿論蕙齋增井山人のことなり。最後に「書肆蔦舍肆」とせるは、京傳作傾城買四十八手に飽く迄も摸擬せむが爲なるべし。

三、天岩戸一册　旭亭主人作、享和元年

中本形唐表紙。元大惣本なり。筆寫本。

埜見祐、山西主人、椒芽田樂の各序文ありヒラキ二面の女郎の墨畫（田樂畫）を附す。著者旭亭主人は何人なるかを知らざれ共、想ふに田樂、蕙齋等と同輩なるべし。

内容は珍らしく古市の洒落本にして、玉州、有竹、石州、知琴といふ連中が古市備前屋にて遊蕩せる樣をあらはせり。例の古市特有の「かいし」「すきじやいし」「ないじやいし」等の語を用ゐたり。兎に角古市資料として面白きものなり。

四、新織𠑊意鈔一册　椒芽田樂作、寛政十三年（享和元年）

中本形、表紙、内容共に筆寫本。彩色等を施せるこつたものなり。題簽は横廣きものにて左の文あり。

［大のや惣八］モシこのごろきのめでんがくせんせいにおたのみ申て一册かいておもらい申ました［客］フムこいつ名古やでの初のしやれさみへるさぞおもからうなんでや、モウこつちのせりふはよみにくいてや［惣八］あざやかにうつしてムり升［客］ちよつさよんで見やう［惣八］ごらんなされませトわらいのアハヽヽヽ

滿壽井豹惪の序、及び自序、並にヒラキ二面の「歌伎戲房之圖」とせる墨繪自畫あり

第一回　唱行水あらば否とは謂まじ

第二回　未看ぬ閨喔のうちぞ牀しき

第三回　宛毎の間に髫髪の面可斗

の三章に分てり、最後に自跋あり。

名古屋の洒落本にして、大惣の舊藏本なり

五、其　他

「𠑊意鈔」の卷尾に椒芽田樂の著作目錄あり

白徒教言	全
希有言茶理不調	三卷
拔粹俄開帳	三卷
妄言畫本桃燈藏	三卷
新織𠑊意抄	完
田舍獅子	一册
春秋洒子傳	山川両部
通哉是仙人	一編

江戸時代隨筆考證雜刻物索引

敍

本索引は、嘗ての「江戸時代小說雜刻物索引」につぐ、予の所謂「江戸軟派文獻」の一部である。主に、江戸期（二三はその前後期）の隨筆類に、取材した。但し二三（音曲の部の如き）の、隨筆といはんよりも編集とも名づくべきものも、便宜上採錄した。便利を思ひて、出來うる限り細かに類別したが、根が隨筆と稱するだけ、確たる分類法に適せざるものにも屢々遭會した。これらは、大凡その性質近邇の部にこれを置き、尙、怪しきは、一々、小註を附しておいた。尙、內容を一覽せる予よりは、明瞭ではあつても、一般から、外題だけでは內容の窺知困難なるものには、同じく夫々註を施しておいた。

かうした索引を作ることは、中々面倒な事である。勞して功なしではないが、勞餘りに多きゆゑ、誰も率先して勞を積まなかつたのである。しかし從來この種のものなきがため、我人大に日夕不便の苦楚を嘗めてゐたのである。勿論予はこれを以て完全なりとも所期してゐない。例によつて、自分の藏本のみに據つた。無論脫漏のあるは免れぬ事である。また重複すべきものも、他の零本類（というて自分は賤してはゐない）には多くあらう。唯、先づその主要部分だけは、とり纏めえたりとは惟ふ。脫漏其他の敎示を大方に希つておく。かゝる事業は、自他の協力に依る事無論。今自分は、僅かなる礎石を築いたに過ぎぬのである。この索引上下に分つ。上は、主に、江戸軟派に直接交渉あるものを先づ擧げた。目次、（下は豫定也）如左。

上の卷　戲作。演劇。音曲。雜藝。風俗。花街。

下の卷　見聞。雜考。史傳。地理（紀行を含む）。日記。神道。佛耶。武備。經學。法制經濟。政治。國文。

尙、各部に對しては、分類の獨斷なりしため、不明瞭なる項目もあらんかと思ひ、且つ檢索の便を思ひて、一々その部各個の內容說明ともいふべき文字を、各部の首に附した。それを記して後この索引に從はれたい。

先に自分の作り上げた小說索引はまた樂なものであつた。それに、殆ど書目の列擧に足りたからである。然るに今度の此は、そんな比ではなかつた。一々原文に照合して、その題目の分類を行はねばならぬ必要上、前期の殆ど三倍以上の勞苦をそれに要した。殊に分類をなるべく細かく、且つ今度は全部五十音に、各音の各書目も同じく五十音に別けたが爲、一層の煩累を來した。しかし今かくして出來たこの稿本に向ふ時、自分は、從來此の種のもの、一個も無かりしを思ふだけ、自分乍ら快心の笑が湧く、と告ぐる事を恕して貰ひたい。この類が一通り濟めば、今度はより悉しき、各事項の總索引である。

以上、直前の抱懷を述べて敍とする。

大正十四年四月末　久一圃志

一、戲作之部

（戲作及作者の評判・書目、傳記等。）

ア、増補青本年表　　新群書第七

イ(ヰ)伊波傳毛の記　馬琴　新燕石四

エ(ヱ)江戸土產　不詳　德川類聚十二
○黄表紙三十八部の評也。

オ(ヲ)稗史評判岡目八目　蜀山人　德川類聚十二

おかめ八目　馬琴　曲亭遺稿
○京傳の双蝶記の評。

をこのすさみ　馬琴　曲亭遺稿
○種彦の綟手摺昔木偶の評。

カ、好色本目錄　種彦　新群書第七

合巻外題集　　新群書第七

キ、黄草紙評判記菊壽草　蜀山人　德川類聚十二

京攝戲作者考　木村默翁　續燕石十種一

ケ、戲作外題鑑　未詳　燕石十種三

戲作者小傳　不詳　燕石十種一

戲作者略傳　不詳　新增補浮世繪類考附錄

戲作者六家撰　岩本活東子　燕石十種一

戲作者評判花折紙　不詳　德川類聚十二
○洒落本百七十部の判也。

犬夷評判記　櫟亭琴魚　德川類聚十二
○八犬傳、朝夷の二作の評判。

コ、國字小說通　木村默翁　續燕石十種一

サ、山東京傳一代記　京山カ　續燕石二

驫鞭　馬琴　曲亭遺稿
○三馬の阿古義物語の評。

ゾ、増補續青本年表　　新群書第七

ハ、稗史外題鑑批評　馬琴　曲亭遺稿
○春木作の同評。

稗說虎之巻　馬琴　曲亭遺稿
○桂窓主人の木石餘譚の評也。

ヒ、評判筆果報　　德川類聚十二
○狂歌師評判也。

平賀鳩溪實記　櫟齋主人　温和第四　燕石十種二　帝文（風來山人）

ホ、豊芥子略傳　二世種彦　新群書四

豊芥子略傳　椿文　同

本朝水滸傳を讀む並批評　馬琴　曲亭遺稿

モ、近世物之本江戸作者部類　馬琴　溫知第五

レ、了阿遺書附花鳥日記　村田了阿　新燕石二
〇戲作の文句の考證あり。

二、演劇之部

ア、赤烏帽子　德川類聚十二
〇寛文年間、伊勢古市座に於ける野郎評判記なり。

明烏夢物語　二河庵白道　演劇文庫三
〇八代目團十郎集の一。

雨夜三盃機嫌　木笛庵　珍書保存會本
〇三都野郎評判記。

あやめぐさ　福岡彌五四郎　新群書三

イ(ヰ)岩井半四郎擬期物語　新群書三

エ(ヱ)江戸花海老　蜀山人　新百家說林二

繪本舞臺扇　春章文調　風俗繪卷刊行會本
〇繪本なれども例外として。

繪本扮戲藷　楠亭藷　珍書保存會本

繪本水也空　耳鳥齋　珍書保存會本
〇繪本なれども參考として。

ワ、吾佛の記　馬琴　曲亭遺稿
〇馬琴の家乘也。

(俳優(作者を含む)の傳記、逸話、系圖、外題扮技等の評判、著名なる繪本、其他芝居故實、劇場の變移、芝居年中行事、役者の餘技(作句など)、法令等。(猿樂等を含む))

莚猿狂句集　雲錦　演劇文庫三

オ(ヲ)老の樂　二世市川柏筵　溫知叢書第一・續帝國文庫(俳優)
〇日次の雜記なり。

老の樂抄　二代目市川柏筵　燕石十種三

カ、垣下徒然草　珍書保存會本
〇江戸野郎評判記、寛文十一年刊りもの。

田舍芝居樂屋雜談　鬼笑　演劇文庫五

賀久屋壽々免　二三治　演劇文庫四

歌舞伎事始　爲永一蝶　歌舞伎叢書

歌舞妓さうし古寫本　尼崎雅喜　百家隨筆一(維月庵國書漫抄)

歌舞伎相續年表　豊芥子　演劇文庫六

歌舞妓十八番考　石塚豊芥子　新燕石三

花江都歌舞伎年代記續編　登芥子　新群書四

紙屑籠　三升屋二三治　續燕石二

キ、脚色餘録　西澤一鳳　新群書一

ケ、藝鑑　富永平兵衛　新群書三

戯財録　初代並木五瓶　續燕石十種一

劇界珍話　飛蝶　珍書刊行會本第九

劇場一観顯微鏡　默々漁隱　演劇文庫三

劇場訓蒙圖繪　三馬　〔飜刻單行〕

劇場新話　不詳　燕石十種二　温知第三

賢外集　東三八　新群書三　カブキ叢書

○尙、役者全書を見よ。

コ、古今いろは評林　新群書三　演劇叢書（假名手本忠臣藏）

新撰古今役者大全　不詳　金港堂（歌舞伎叢書）

古今役者發句合　富山　演劇文庫六

古今役者物語　師宣畫カ　〔單行〕

サ、作者店おろし　三升屋二三治　新群書三

作者名目　二三治　演劇文庫第五

佐渡島日記　蓮智坊　新群書三

○尙、役者全書を見よ。

澤村家賀見　波静　演劇文庫二

猿樂沿革考　川崎重恭　温知第十二　燕石第一

一名、楽番由來。

猿樂傳記　不詳　燕石十種一　温知第八

三座家狂言由緒　不詳　燕石十種二

戯場一覧三座例遺誌　曲廬亭主人　演劇文庫第一

シ、秀鶴隨筆　初代中村秀鶴　新燕石五

姿記評林　珍書保存會本

耳塵集　金子吉左衛門　歌舞伎叢書　新群書三

芝居年中行事　はじゅう　民間風俗　珍書刊行會本第九

芝居乘合話　中村重助　新群書三

芝居祕傳集　三升屋二三治　〔袖珍〕江戸文藝資料第一

芝居町御觸書　燕石十種三

〇慶安より寶暦より百余年間のもの也。

所作事祕傳　〔新刻役者全書に附す〕

新刻役者綱目　不詳　歌舞伎叢書

○役者大全の第二編。

新野郎花垣　　　　　　　　　　　　　珍書保存會本
ス、翠釜亭戯畫譜　　　　　　　　　　珍書保存會本
セ、世界綱目　　　　　はじやう　　　珍書刊行會本第九
ソ、續耳塵集　　　　　民屋四郎五郎　新群書三
タ、當世役者穿鑿論　　大通庵　　　　演劇文庫三
珍說正話多話戯草　　　量芥子　　　　演劇文庫一
チ、中古戯場說　　　　不詳　　　　　燕石十種二
忠臣藏偏癡氣論　　　　三馬　　　　　演劇文庫五・帝國文庫（三馬）
ツ、月雪花寢物語　　　中村傳藏　　　演劇文庫四
月雪花寢物語殘篇　　　　　　　　　　演劇文庫六
露時雨八代愁抄　　　　三界行者　　　演劇文庫三
テ、手前味噌　　　　　中村秀鶴　　　續帝國文庫（俳優）
田樂法師由來之事　　　不詳　　　　　史籍集覽本
傳奇作書初編　　　　　西澤一鳳　　　新群書一
一名、言狂作書。
傳奇作書拾遺　　　　　西澤一鳳　　　新群書一
傳奇作書殘編　　　　　西澤一鳳　　　新群書一
傳奇作書續編　　　　　西澤一鳳　　　新群書一

傳奇作書附錄　　　　　西澤一鳳　　　新群書一
傳奇作書後集　　　　　西澤一鳳　　　新群書一
傳奇作書追加　　　　　西澤一鳳　　　新群書三
ト、友なし猿　　　　　市川白猿　　　賞奇樓三ノ三
○主に狂歌集也。
ナ、中山文七一代狂言記　　　　　　　新群書三
夏の富士　　　　　　　圓貞　　　　　演劇文庫一
○春草の同名に擬す。
なゝゑびそ　　　　　　七代目白猿　　演劇文庫五
難波立聞昔語　　　　　　　　　　　　稀書複製會第一期
○評判記。
並木正三一代噺　　　　　　　　　　　新群書三
南水漫遊初編拾遺　　　西澤一鳳　　　新群書一
○風俗、音曲記事等また多し。
南水漫遊續編　　　　　同　　　　　　同
ノ、能樂考　　　　　　馬學　　　　　百家隨筆ノ三
能樂・猿樂・田樂考　　馬學　　　　　鑾庭叢村氏叢（寶　書）
能評判うそ噺　　　　　　　　　　　　德川叢書十六

ハ、俳優風　○狂歌にして評判記に眞似たるもの。　演劇文庫二
俳優茶話　朧月亭主人　演劇文庫二
俳諧父の恩　二世 [illegible]　珍書保存會本
梅幸集　附、尾上菊五郎一代狂言記。　新群書三
梅玉余響　[illegible]翁　演劇文庫第五
八代目市川團十郎一代狂言記　演劇文庫三
花競芝截話　演劇文庫六
花鏡璃寛話　演劇文庫六
フ、風流四方屛風　○文祿十三年版、繪本。　稀書複製會第三期
舞曲扇林　河原崎權之助　續燕石二／稀書複製會本第一期／珍書保存會本
舞正語磨　秋扇翁　珍書保存會本
舞臺百箇條　杉九兵衛　○能樂師十太夫の勸進能の評。　新群書三
ミ、壬生狂言　○楠亭の狂畫に狂歌を添ふ。　珍書刊行會本
八代目追善三升孝子　霍壽　演劇文庫三
三升屋二三治戯場書留　三升屋二三治　燕石十種一
眠獅選　八文舎自笑　新群書三
ム、剣野老　稀書複製會本第一期
メ、古今役者名物大全　島里亭　演劇文庫四
ヤ、役者金の揮　珍書刊行會本
[illegible]卅六歌撰[illegible]色紙　[illegible]亭　稀書複製會第二期
新刻役者全書　一名、□□品定秘抄。　自笑序　歌舞伎叢書
役者大系圖　一名、古今俳優家譜。　演劇文庫二
役者友吟評判　稀書複製會第三期
役者夏の富士　春章　珍書刊行會本
役者年中行事　○樂屋壽々免の姉妹編。　樂思遊人　珍書刊行會本
三都戲場役者一口商　○役者大系圖の前冊也。　演劇文庫六
役者用文章　自笑　演劇文庫一
俳優世々の接木　夢遊　演劇文庫一

役者論語　　新群書三
野郎三座託　　珍書保存會本
○貞享元年刊、江戸野郎評判記。
野藺妄誌　湛水　演劇文庫五
野郎評林嘲　　珍書保存會本
○貞享元祿間の江戸野郎物。
野郎蟲　　稀書複製會（第三期）　賞奇樓叢書　演劇文庫三
ヨ、夜雨眠玉草紙
○八代目團十郎集の中。
ロ、六方ことは　　稀書複製會第三期

三、音曲之部

（浄るり、俚謡、樂器、其他事項。編集、目録、評判、考證。（謡曲も含む））

イ（井）遊樂習道見風書　世阿彌　世阿彌十六部集
潮來考　村田了阿カ　近世文藝十一
潮來曲後集　馬琴　奇書珍籍第二
潮來絶句　藤堂梅花　奇書珍籍第二
潮來風　　近世文藝十一
糸竹初心集　不詳　有朋堂（近代歌謡集）　新群書六
糸竹大全　　音曲叢書　單行（佐々氏）　珍書保存會本
○箏、大怒佐、知音の媒の三を收む。
色竹歌祭文摘　　近世文藝第十一
ウ、浮れ草　松井譲屋　近世文藝十一
歌系圖　羽積　新群書六
諸名寄　未詳　三十幅ノ二
エ（ヱ）江戸節根元記　樗雅　音曲自在　温知叢書第十
江戸節根元由來記　　燕石十種二
院本集評絵本忠臣藏　集義堂　書文（赤穂復讐）
オ（ヲ）老の戯言　　音曲叢書
綸入落葉集　　珍書保存會本
尾張國船頭集　　近世文藝十一
御船哥大全　尾崎久宵校　江戸軟派叢書第三
御船頭留　蜀山人校　近世文藝第十一

書名	著者	所收
大薩摩長唄系圖		音曲叢書
御笑草諸國の歌		近世文藝十一
音曲口傳書		音曲叢書
音曲道知論		音曲叢書
音曲鼻毛拔	太平樂居	雜藝叢書二
庄内鶴岡御町々盆踊文句		近世文藝十一
カ、巷謠編	鹿持雅澄	近世文藝十一
歌謠作者考 ○謠曲の作者也。	不詳	百家叢説第三
覺習條々（異端）	世阿彌	世阿彌十六部集
閑吟集		近世文藝十一
キ、九位次第	世阿彌	世阿彌十六部集
曲附書	世阿彌	世阿彌十六部集
金島集	世阿彌	世阿彌十六部集
タ、花傳書	世阿彌	世阿彌十六部集
花傳書逸文	世阿彌	世阿彌十六部集
花傳書別紙口傳	世阿彌	世阿彌十六部集

書名	著者	所收
ケ、絃歌糸のみさを ○詩經の和譯。		續帝文（歌謠類集下）
コ、五音曲條々	世阿彌	世阿彌十六部集
小唄惣まくり （參、「吉原小唄惣まくり」を見よ。）		小唄（上田敏）
小歌志彙集	小寺玉晁	近世文藝十一
小唄のちまた	小寺玉晁	近世文藝十一
古今外題年代記		音曲叢書
今昔操年代記	西澤一風	新群書六
サ、淋敷座の慰		新群書第六
山家鳥虫歌		有朋堂（近代歌謠集） 我自刊我書 小唄（上田敏）
三絃考	高田與清	聲曲自在 溫知第五
三阮歌曲解 ○上方唄の散紅葉と雪との評釋也。	不詳	有朋堂（近代歌謠集）
シ、至花道書	世阿彌	世阿彌十六部集
習道書	世阿彌	世阿彌十六部集
淨瑠璃外題年鑑	一樂子	新群書第七

増補浄瑠璃大系圖　　音曲叢書
浄瑠璃秘曲抄　　音曲叢書
竹本豊竹浄瑠璃譜　不詳　（聲曲自在　燕石十種二　温知第四）
松月鈔（しようげつ）　吉田邑季子　（有朋堂　近代歌謠集）
○箏の組歌の註釋本也。
諸國盆踊唱歌　　新群書第六

セ、聲曲類纂　月岑　新据本六冊
聲曲類纂補遺　齋藤月岑　（新燕石四　音曲叢書　單行）
世子七十以後口傳　世阿彌　世阿彌十六部集
世子六十以後申樂談儀　世阿彌　世阿彌十六部集

ソ、俗耳皷吹　蜀山人　（温知第二　燕石十種二　新百家説林三）

タ、當世小唄揃　　有朋堂（近代哥謠集）
當道拾要錄　不詳　三十輯ノ一
○琵琶法師の祖神、平曲等に關して說けりと
斷絃餘論　　音曲叢書

チ、竹豊故事　一楽　新群書六
地方用文章　　近世文藝十一
○本邉音頭唄の類也。

中古雜唱集　竹信友　近世文藝第十一
忠臣藏岡目評判　初代一九　（演劇文庫四　帝文（赤穂復讐））

ツ、津村節　　近世文藝十一
つむらぶし　　奇書珍籍第二
○此方、前者より完なり。

ト、童謠集　行智　近世文藝十一
常盤津年表　　音曲叢書
ごゝいつぶし根元集　小寺玉晁　江戸軟派叢書第二

ナ、浪花其末葉　不詳　德川類聚十二
難波みやげ　穂積以貫　新群書六
○浄瑠璃評註の初めと云。
なら柴　原武太夫　燕石十種三
（一名、三絃根元記）

ニ、二曲三体繪圖　世阿彌　世阿彌十六部集

ノ、能作書　世阿彌　世阿彌十六部集

ハ、葉唄一夕話　梅暮里谷峩　（箏曲獨稽古　外骨著「此中にあり」第一）
○箏曲本は一部分、外骨本亦完備本ならず。
はなはらひ　　音曲叢書

- ヒ、琵琶撥附　不詳　三十輻ノ二
- 評判鶯宿梅　徳川文藝類聚十二
- フ、風曲集　世阿彌　世阿彌十六部集
- 風流謠年代記　稀書複製會第一期
- 評判音頭二見眞砂　不詳　近世文藝十一
- マ、増補松の落葉　大木扇德　新群書ノ六／袖珍文庫／近代歌謠集
- 松の葉　秀松軒　袖珍文庫／名著文庫／近代歌謠集／新群書ノ六
- 萬歳躍　稀書複製會本第一期
- ミ、道しるべ　里蝶　續帝文（歌謠類聚下）
  ○詠史等の作。

四、雜藝之部

- イ（井）遊花小言　雜藝叢書一
- 紙鳶全書　古川珸璋　雜藝叢書二
- オ（ヲ）萬年青種蒔　牧島某　雜藝叢書一
- カ、格五新譜　土井贇牙　雜藝叢書一
- 河羨錄　津輕采女　雜藝叢書一

- 今道念都をごりくどき　近世文藝十一
- 都の錦　音曲叢書
- ム、夢跡一紙　世阿彌　世阿彌十六部集
- 陸奥國田歌解　黑川春村　近世文藝第十一
- メ、名管記部類　未詳　三十輻ノ一
- ヨ、吉原はやり小歌總まくり　近世文藝十一／俗曲大全／近代歌謠集
  ○近代歌謠集は、總鹿の子さあり。
- リ、隆達小唄集　近代歌謠集（有朋堂）
- 瑠璃天狗　簑笠翁　新群書六
- ワ、若みどり　靜雲閑主人　新群書ノ六／近代哥謠集

（俄、茶番、落語、釣、相撲、遊戲、栽培、料理等）

- 貝合次第　雜藝叢書二
- キ、當話問答きゝはつり　雜藝叢書一
- 金魚養玩草　雜藝叢書一
- タ、口あひ指南　雜藝叢書一
- 菓子話船橋　群司莊子　雜藝叢書二／婦人文庫の「二節用」

書名	著者	所收
花壇養菊集		雜藝叢書二
ケ、撃毬談	不詳	雜藝叢書二
拳獨稽古		雜藝叢書一
コ、古今俄選	不詳	雜藝叢書二
古今物忘れ	護草堂主人	外骨氏本「此中にあり」二
古今物忘れの記	綾足	雜藝叢書二
サ、栽菊玉手箱		雜藝叢書一
座敷狂言早合點		雜藝叢書二
三題噺作者評判記		德川文藝類聚十二
シ、四季漬物早指南	小田原屋主人	「婦人文庫の一節用」
象棋六種之圖式	鶴峰戊申	雜藝叢書一
蹴鞠指南大成	外郎政光	雜藝叢書二
諸藝小鏡	閑窓	雜藝叢書二
ス、水練早合點	小堀常春	雜藝叢書二
相撲今昔物語	子明山人	新燕石四
相撲傳書	木村守直	燕石十種二 温知第六
新版歌仙すまふ評林		德川類聚十二
セ、清神秘錄 ○俄の種本也。	北流山人	續燕石十種二
清少納言智惠板		雜藝叢書一
小弓肝要抄	藤原基盛	雜藝叢書二
新なぞ遊び操背紐		雜藝叢書二
不及先生千里善走傳	岡伯敬	雜藝叢書二
タ、陶工祕囊 附、樂燒記。		雜藝叢書二
當流節用料理大全	高島某	「婦人文庫の一節用」
チ、茶番三階圖繪		稀書複製會第三期
茶番狂言早合點	三馬	雜藝叢書二
中將棋指南抄		雜藝叢書一
徵古印要	杜澂	雜藝叢書一
テ、釣客傳	黑田五柳	續燕石十種一
ト、投壺指南	田中江南	雜藝叢書二
洞簫曲		雜藝叢書一

投扇式　雜藝叢書一

ハ、抛入花傳書　雜藝叢書一

博戯犀照　山崎美成　續燕石十種一
○雙六、ちよぼ一等凡て博奕に關する事を輯む。

落語家奇奴部類　二代扇橋　新燕石二

ヒ、祕事指南車　雜藝叢書二

百戯述略　齋藤月岑　新燕石三

フ、口合類題麓の塵　雜藝叢書二

ホ、高野家盆景傳書　隣柳庵山樂　雜藝叢書二

高野家盆山之書　同　同

五、風俗之部

ア、樂屋興言鳴久者（あくしや）評判記　惡文舍他笑　德川類聚十二
○惡摺の評判記。

飛鳥川　八十九翁　新燕石一

娘評判記あづまの花軸　德川類聚十二

吾妻めぐり　德永種久　燕石十種二　我自刊我叢書
一名、色音論。

あづま物語　德永種久カ　近世文藝第十

高野家盆山秘言　同　同

マ、萬藝問合袋　錄卿　雜藝叢書二

メ、謎語彙抄　雜藝叢書二

モ、物覺秘傳　雜藝叢書二

百千鳥　雜藝叢書二

ヤ、養鶯辨　丸屋萬藏　雜藝叢書二

揚弓射禮蓬矢抄　附、同追考　雜藝叢書一

ヨ、喚子鳥　雜藝叢書二

レ、料理物語　雜藝叢書一

（大奥より下一般。〔花街は除く。別項とす〕服飾、名物、巷説、世相の變移、繁華記〔京阪も含む〕、凡て風俗資料として著しき物。尚、傍ら、故實、演劇、雜藝、見聞、花街等の各部を參照すべきは勿論也。）

雨夜物語　林道春　三十輻ノ二

安政乙卯武江地動之記　齋藤月岑　江戸叢書第九

案内者　中川喜雲　民間風俗
○近畿を主とす。

イ（并）一蝶流謫考　山東京山　續燕石十種一

一話一言　蜀山人　新百家説林四、五
○故實、見聞、また頗る多し。

一話一言補遺　同　同　五

異聞雜稿　馬琴　續燕石十種　二

○多く天保四より同七迄の記事也。

筠庭雜考　喜多村信節　百家說林續篇下ノ一

ウ、浮世草　不詳　鼠璞十種　一

○安永の風俗。

浮世の有樣　不詳　國史叢書本五冊

雲錦隨筆　鐘成　〔複刻單行〕

○史傳、演劇、故實等あり。

エ（ヱ）江戶塵拾　不詳　燕石十種　三

○江戶砂子の補遺なり。

增補江戶年中行事　民間風俗行事

江戶繁昌記　寺門靜軒　百萬塔 拾錢文庫

江戶風俗總まくり　不詳　江戶叢書　八

江戶眞砂六十帖　不詳　燕石十種　一

俳諧江戶名物かのこ　珍書保存會本

江戶名物詩　方外道人　江戶軟派研究初編

燕石雜志　馬琴　有朋堂文庫

○故實、地理の材料また多し。

オ（ヲ）阿姑麻傳　蜀山人　新百家說林二

大奧秘記　村山攝津守　新燕石五

大阪繁花風土記　だるまや書店（單行）

親子草　喜田有順　新燕石一

於路加於比　柳亭種秀（笠亭仙果）　新燕石一

○故實も混ふ。

カ、街談文々集要　石塚豐芥子　國書刊行會本三冊

○近世風俗三の豐芥子日記は、この要のまた要の抄出。

海錄　山崎美成　國書刊行會單行

○故實等また頗る多し。

蒿街贅說　藍叢翁　近世風俗四

甲子夜話　松浦靜山　國書刊行會　三冊

甲子夜話續編　同　同　三冊

假名世說　太田蜀山人　百家說林正上／新百家說林續上／續帝國文庫（名家漫筆集）

金曾木　蜀山人　新百家說林三

キ、嬉遊笑覽 二冊　喜多村信節　單行本 我自刊我本

奇異珍事錄　木室卯雲　鼠璞十種　一

久夢日記　不詳　近世風俗一
享保世話　近世風俗二
玉輿記　不詳　柳營婦女傳叢
○家康の祖母より九代家重の生母に至る。
羇旅漫錄　馬琴　有朋堂（日記紀行集）
○地理の部に入るべきなれども、特に風俗記事多ければ。
近世奇跡考　京傳　複製單行、温知第八
○一名、續骨董集。
近世事物考　久松祐之　温知第十二
近世風俗志　喜多川守貞　（單行）
○二冊、又は一冊合本。
近代世事談　沾涼　温知第三

ク、

蜘蛛の糸卷　山東京山　百家説林正上、燕石十種一、續帝文（名家漫筆集）
皇都午睡　初、二、三、編　西澤一鳳　新群書一
過眼錄　不詳　續燕石十種一
畫證錄　喜多村信節　同
瓦礫雜考　同　續帝文（名家漫筆集）
寛永小説　林信篤　史籍集覽本
寛天見聞記　不詳　燕石十種三、温知第四

ケ、

慶長見聞集　三浦淨心　江戸叢書二、神宮文庫、史籍集覽本（名著）
月堂見聞集　本島知辰　近世風俗一、二
元文世説雜錄　近世風俗二
元祿寶永珍話　不詳　近世風俗一

コ、

後見草（ごけんそう）　宗山齋　燕石十種一
○一名、明曆懲毖錄。
近世江都著聞集　文耕　温知第九、燕石十種二
江都百化物　不詳　續燕石二
○戯文也。
寛保延享江府風俗志　近世風俗三
こかねくさ　石川雅望　百家説林正下
骨董集　山東京傳　百家説林續中、有朋堂文庫

サ、

五月雨草紙　喜多村香城　新燕石二
讃佛乘　西澤一鳳　新群書一
○戯文、音曲、劇、またあり。

シ、

仕方俳諧　粋川子　新從吾所好（三都洒落本）
○芝居と遊里とを題材にしたる句集なり。
色音論　德永種久　（「風俗」吾妻めぐりを見よ）

時雨の袖　畑銀鷄　江戸叢書十
○安政大地震の記錄也。
賤のをだ卷　森山孝盛　温知叢書第六、燕石十種一
十八大通(じふはちだいつう)　三升屋二三治　續燕石二
正月揃　白眼居士　民間風俗
諸家隨筆集　高力種信　鼠璞十種一
諸國年中行事　操巵子　民間風俗年中行事
諸由緒　史籍雜纂三
○金座、江戸町年寄、淺草彈左衛門、吉原、諸劇場等の由緒を集む。
神代餘波　齋藤彥麿　燕石十種二
○當時の風俗見聞。
莘野茗談　平秩東作　江戸叢書十一、續燕石十種一
人倫訓蒙圖彙　續書複製會第二期

ス、還魂紙料(すきかへし)　柳亭種彥　百家說林續上
砂子の殘月　不詳　江戸叢書九
○江戸砂子の後追ひ也。

セ、江戸實情誠齋雜記　向山源太夫　江戸叢書八、九、十、十一
○法制、政治、商工業等の材料も含む。

世事百談　山崎美成　百家說林正下
攝陽落穗集　濱松歌國　新燕石五

ソ、續飛鳥川　新燕石一
足薪翁記　柳亭種彥　百家說林續編下ノ二
そゞろ物語　三浦淨心　近世風俗一
其昔がたり　三木隆盛　續燕石二

タ、當時珍說要祕錄　百萬塔
當世武野俗談　馬場文耕　温知叢書第十、燕石十種二
道聽塗說　大郷信齋　鼠璞十種二
只今お笑草　二代如皐　續燕石二

チ、著作堂一夕話　馬琴　温知叢書九
○故實もあり。
著作堂雜記抄　馬琴　曲亭遺稿
○見聞の事また多し。
女用訓蒙圖彙　珍書刊行會本五冊
塵塚談　小川顯道　燕石十種一、温知叢書第九

テ、天言筆記　藤岡屋由藏　新燕石一
天弘錄(てんこう)　不詳　近世風俗四

ト、天和笑委集　不詳　新燕石五
天明江戸飢饉　同　史籍集覽本
燈前一睡夢　大谷木忠醇　鼠璞十種二
齋藤月岑東都歲時記　齋藤月岑　風俗畫報單行本
石井士彰東都歲時記　石井[illegible]　民間風俗行事
兎園小說　瀧澤馬琴等　百家說林正下
兎園小說外集、同別集、同余錄、同拾遺　馬琴　新燕石四
〇故實の材料またあり。
獨語　太宰春臺　百家說林正上
ナ、北里戲場隣の疝氣　原武太夫　燕石十種三　溫知叢書第九
長唄當歌集　粋川子　新從吾所好（三都洒落本）
〇世態人情を描かせる狂体長唄，狂文を集む。
浪花五侠傳　不詳　燕石十種一
浪花の風　久須美祐雋　溫知叢書第七
浪華百事談　不詳　新燕石一
ニ、日本風俗備考　蘭人ヒスセル　文明源流叢書第三
贄（にへ）雜（まぜ）の記　馬琴　百家說林續中
〇故實めきたるものもあり。
ネ、寐ぬ夜のすさび　片山賢　新燕石五
ノ、後はむかし物語　手柄岡持　燕石十種一　溫知叢書第二
異本後昔物語　同　珍書刊行會本第七
ハ、寶永落書　不詳　溫知叢書第五
寶藏　山岡元隣　珍書保存會本
〇一個の風俗資料なり。
寶暦現來集　山田桂翁　近世風俗三
幕府祚胤傳　竹尾善筑　柳營婦女傳叢
幕府賢女傳　竹尾善筑　柳營婦女傳叢
近來見聞噺の苗　曉鐘成　新燕石一
〇享和より文化に至る浪花の種種の記錄。
花咲雪隱手麵塵　想堂主人　近世風俗四
〇安政より慶應に亘す。
花見車　珍書保存會本
〇元祿知名の俳人を遊女に見立評判したるもの。
春の紅葉　川崎重恭　江戸叢書八
〇文政十二年大火の記錄也。
半日閑話　蜀山人　新百家說林四
〇見聞、故實等の筆亦多し。

ヒ、 飛花落葉　不詳　史籍集覽本
○慶長―寛永間の落首等。

獨寢　柳里恭　燕石十種二／新從吾所好第二編(單行)
○燕石十種本は不完本也。

百人給　粹川子　新從吾所好(三都洒落本)
○一種の世相記。

フ、 富貴地座位　徳川類聚十二
○三都名物の位附け也。(安永年間)

深川珍者錄　不詳　續燕石十種一

播陽見聞筆拍子　濱松謌國　新燕石五
一名、播陽續落穗集。

麓の花　山崎美成　燕石十種三／温知第十二

ホ、 豐芥子日記　石塚豐芥子　近世風俗三
○街談文々集の抄なり。

反古籠　萬象亭　續燕石十種一

反古の裏書　鈴木桃野　鼠璞十種一

本朝世事談綺正誤　山崎美成　温知第七
○故實類もあり。

ミ、 見世物雜誌　小寺玉晁　新燕石四

見た京物語　三鐘亭半山　温知第九／續帝文(續紀行)

京都名物水の富貴寄　徳川類聚十二
○京都名物の位附也。

ム、 昔ばなし　鼠璞十種二

女子愛敬都風俗化粧傳　婦人文庫の「節用」

むかし〳〵物語　新見正朝　近世風俗

增訂武江年表　齋藤月岑　國書刊行會本一册

武江年表補正略　喜多村信節　續燕石十種一

武江年表、同補正略　齋藤月岑　喜多村信節　江戸叢書十二
○國書刊行會本と異同あり。

紫の一本　戸田茂睡　百萬叢書／戸田茂睡全集
○江戸地理の資料また多し。

紫のゆかり　山岡浚明　温知叢書第四

メ、 名物拜見自由自在　稀書複製會第三期
○遊女の細見風の江戸名物番附。

明和誌　鼠璞十種二

モ、 守貞漫稿　喜多川守貞　(風)近世風俗志を見よ

ヤ、 奴　南畝　温知第一／燕石十種／新百家說林三

奴俳諧　珍書保存會本
○清十郎刑後七年目の追善句集。

山城四季物語(都歲時記)　坂内直頼　民間風俗行事

ユ、夢の浮橋　蜀山人　燕石十種二
夢の浮橋附錄　豊島屋十右衛門　燕石十種三
ヨ、用捨箱　柳亭種彦　有朋堂文庫　温知第二
リ、柳營婦女傳系　不詳　柳營婦女傳叢
柳亭遺稿　種彦　續燕石二
柳亭記　柳亭種彦　百家說林續編下二

六、花街之部

ア、吾妻物語　德永種久　珍書保存會本
○吉原細見本の祖といはる。
イ（井）遊女考　相場長昭　燕石十種一
遊女玉菊考　不詳　燕石十種二の新吉原略說附
遊女玉菊傳　山崎美成　燕石十種二の新吉原略說附
遊女玉菊の墳記　梅嶋居士　燕石十種二の新吉原略說附
岩つゝし　北村季吟　三十輻の一
○古今集以下の男色に關する歌集也。
異本洞房語園　庄司勝富　（燕石十種三　温知第一　珍書刊行會本）
色里新迦陵鬢　不詳　鼠璞十種一
柳亭筆記　柳亭種彦　百家說林續編下二
閭里歲時記　川野邊寬　民間風俗
○上野國高崎附近。
レ、歷世女粧考　山東京山　百家說林續中
ワ、我衣　曳尾庵南竹　燕石十種・温知第十
忘れ殘り　四壁庵茂蔦　續燕石十種一

（遊女、藝者、其他廓內外一切、風俗、考證、傳記、（島原、新町を含む）其他好色物。）

カ、好色貝合　珍書保存會本
○好色訓蒙圖彙の姉妹篇。
好色訓蒙圖彙　三白居士　珍書保存會本
諸國遊里好色由來揃　不詳　近世文藝第十
かくれざと　石橋眞國　近世文藝第十
○岡場所也。
かくれ里の記　蜀山人　新百家說林二
○北廓に遊びたるの記。
キ、九蓮品定　浮世遍歷齋　外骨氏本「此中にあり」一
○江戸六十八所遊里の評判記。

ク、外國通唱　粋川子（西村定雅）　新從吾所好（三都洒落本）
○その實、花柳語を題材とせる俳句集なれど。

花街漫錄正誤　喜多村信節　新燕石三

廓中一覽　未詳　近世文藝第十
○澪標の拾遺なり。

コ、古今馬歌集　粋川子　新從吾所好（三都洒落本）
○遊里事物を材とせる狂歌集也。

古今若女郎衆序　（珍書保存會本／新從吾所好（花街篇））

シ、色道大鏡　畠山箕山　續燕石二

島原大和暦　不詳　近世文藝第十

洒落文臺　粋川子　新從吾所好（三都洒落本）
○外國通唱の後篇と云。

新吉原細見記考　加藤雀庵　鼠璞十種一

新吉原定書　燕石十種三
○寛政七年のもの也。

新吉原大盡舞　二朱判吉兵衛　書物往來四

新吉原常々草　磯貝捨若　珍書刊行會本

新吉原略說　山崎美成　燕石十種二
附、玉菊の遺記、玉菊傳、玉菊考。

タ、大盡舞考證　京傳　豊芥子　（舞曲自在／燕石十種三／温知十二）

大盡舞考餘　淺舍和山人　（燕石十種三／大盡舞考證の附錄）

桃源集　新從吾所好（花街篇）
○島原遊女の評判記。

高尾考　原武太夫　南畝等補　燕石十種一

高尾考　京山　續燕石二、續帝文（京山）

高尾追々考　加藤雀庵　鼠璞十種一

ト、洞房語園異本考異　不詳　温知第六

洞房語園後集　庄司勝富　續燕石十種一

洞房語園集　庄司恕齋　新從吾所好（花街篇）

ナ、長唄古今集　師宣　稀書複製會第三期
○流行唄と名妓の艶姿。

ヌ、ぬれぼとけ　新從吾所好（花街篇）

ヒ、秘事眞言　未詳　近世文藝第十
○大阪八ヶ所の妓品風俗の評也。

一目千軒　斜天香獅　近世文藝第十
○島原也。

フ、麓の色　飯袋子　近世文藝第十
○遊女の起原、廓中、私娼等。

ホ、北州列女傳　井蛙　百萬塔

北里見聞録　寛閑樓佳孝　近世文藝第十
北里十二時（イ吉原）　石川雅望　百家説林正上／單行／温知第五
北里年中行事　花樂散人　民間風俗

マ、
増り草　盧光庵　新從吾所好（花街篇）

ミ、
大阪新町細見之圖澪標　吟古市人　近世文藝第十

モ、
元吉原の記　馬琴等　新燕石一

ヨ、
吉野傳　佐經邦　燕石十種第三
吉原伊勢物語　原名、むかし男。　珍書保存會本
吉原大雜書　○遊女評判記。　稀書複製會第一期
吉原鑑　○吉原細見本の一。　珍書保存會本
暗夜訓蒙圖彙（よしはら）　珍書保存會本
吉原源氏五十四君　其角　續燕石十種二／珍書保存會本
吉原雜話　不許　温知第十二／聲曲自在／燕石十種三
吉原嘖嘲記　珍書保存會本（別に新摺本あり）
吉原十四ヶ條　中村佛庵　新燕石五
吉原書籍目録　種彦　新群書第七
吉原袖鑑　○評判細見記。　珍書保存會本
吉原大全　澤田東江　近世文藝第十／珍書保存會本
吉原丸鑑　德川類聚十二

リ、
（盧實）柳巷方言　未詳　近世文藝第十　○大阪新町其他。
柳花通誌　秀山人　近世文藝第十　○吉原の沿革。

○本索引中略號の一斑

○近世風俗（國書刊行會、近世風俗見聞集四册）○民間風俗（同、民間風俗年中行事一册）○新群書（同、新群書類從十册）○燕石（同、燕石十種三册）○續燕石（同、續燕石十種二册）○新燕石（同、新燕石十種五册）○温知（博文館、温知叢書十二册）○他略す。

著者より

延刊の申譯ばかりしてゐるやうだが、今度は此方の原稿がズバ抜けて遲れた爲です。その代り、いかゞで御座るといひたい、今度の隨筆索引、此間の小說索引が歡迎されたからといふのではなくして、やはり自分本位の仕事だ。實際、人が作つてくれなければ、自分で作るより仕方がない。自分が作つたら、人にもそれを弘めたい。小說索引よりも、實用的といふ意味から今度のものは最も多く且つ至便に使用されるであらう。つまり資料の檢索は、小說を讀む半享樂的態度とは違ふからな。で此の今度の索引、二十一日の午后から始めて、每日七時間以上、最終日の今日は日曜一日を潰してやつとまづ此册の分丈纒めた。分類をする必要上、各自の原文に一々當らなければならぬ。その手間が夥しいものだつた。よほど途中で棒を折らうかと思つたが、諸君の喝采を豫期する滿悅さも手傳つて、到頭仕上げた。その爲、自分はがつかりしたばかり、月末にかけて御覽の如き難儀な組と來たから印刷上當然のこの延刊となつた譯。延刊しても仕甲斐がありませう。今度の分來册もう一回。〇尙此索引、二册分、特に丁數を新たにした。獨立の便である。其中、脚本、淨るり其他にも及ぶ積りである。その折は、此の別の丁數を追ふ筈である。〇軟派叢書は、五月上旬に原稿に着手する。延刊するかも知れないから、餘程裕に見て頂く爲、六月中旬刊とする。内容は裏面廣告の如く、多少眼先を變へた。（四、二六夜）（著者）

寄贈紹介

〇板畫禮讚　稀書複製會編

米山堂氏の稀書複製會三期完了の記念出版である。坪内氏内田氏和田氏市島氏水谷氏井上(和雄)氏など十數家の板畫並に古書趣味の記錄の輯集である。裝幀典雅、挿繪また豐富好著である。菊判布裝三七〇頁（東京日本橋區通り春陽堂、參圓八拾錢）

〇書史　創刊號

今度大阪の書史會から生れた、同會機關雜誌である。此號「大阪に關する書籍展覽會目錄」に全内容を費してゐる。この目錄、地誌名所類以下錦繪、風俗物に至る數項、斯學者に稗益する所極めて多い。會員頒布の由。裝幀用紙また頗る凝つたもの、和書趣味橫溢たりである。半紙判、挿繪數葉。（大阪市南區塩町二ノ一八毘田方、書史會）

〇やなぎ樽研究　創刊號

惠那岐川氏等唱道の新誌、和本仕立、和紙摺。岡田三面子、武笠三氏、西原柳雨氏等の執筆がある。健全なる發達が望ましい。（岐阜市金屋町二丁目、柳書刊行會。參拾貳錢）

〇長唄　創刊號

小谷靑楓氏等の新誌、洋紙和綴。大正長唄史其他好記事多し。就中「新譯壹曲類纂」は研究記事として恰適である。（菊判三十頁。東京市神田區錦町一ノ十九、長唄社。貳拾七錢）

〇風俗研究(四月)〇國學院雜誌(同)〇葉碑史蹟研究(同)〇川柳鯱鉾(同)〇性の知識(五月)〇國語と國文學(同)〇新舊時代(同)。

（表紙二よりツヾク）

右の中、「春秋洒子傳」は、中本形二册の筆寫本にして、寬政五年の稿なり。作者は關に、唐來三和作とあり。曲亭山人の序、自序あり。各册初めに二枚宛の口繪あり。春秋の二册に分つ。

春の卷　春王三月躑躅大盛。諸公婦人如二東山一。

秋の卷　秋八月月淸紗大喰。通人乘二輪寶一奔レ沖。

春の卷は「東山の花見」、秋の卷は「堀川の舟遊」なうつせり。洒落本といはむより寧ろ三馬一派の寫實的滑稽本の鬼あり。不思議なることは、唐來三和と椒芽田樂とに同著ある話等にはさるなり。而も三和作とせるこの書は殊更に三和のすべて名古屋訛あり。想ふに田樂が主人も亦、馬の名を筆せしもの。序者曲亭以上は、すべて馬琴に非ざるべし。

以上京大圖書館本によりしものに御座候。（完）

定價表
一册廿五錢　郵稅貳錢
六册分　稅共壹圓四拾錢
十二册分同　貳圓八拾錢
〇郵券貳錢一割增の事
〇照會は返信料添付の事

大正十四年四月十五日印刷
大正十四年五月十八日發行　【本冊三限參拾錢】（送料八錢）

名古屋市東區實重東町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比眞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社

名古屋市東區道東町一五七地
發行所　江戶軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

〇本册に限り一部實特價参拾錢としました。それは、每月豫定の刷出部數を超過させぬ爲です。勿論半年以上繼續の方々は、此の限に非ずです。只今初校を終った所です。（五月九日午後四時）まだ一回の再校、それから刷上製本、發行は十五日前後でせう。（發行所）

大正十四年五月十五日印刷
大正十四年五月十八日發行

大正十四年五月二十八日印刷
大正十四年六月一日發行
貳編 別册第二（通編第三十二冊）

本文

江戸時代隨筆考證物翻刻索引（下の一）

7、見聞之部。 8、故實雜考之部。
9、史傳之部。 10、神道之部。
11、佛教之部。 12、耶蘇教之部。

「江戸軟派文献」の解説

尾崎久彌著

江戸軟派研究

別册第貳

「江戸軟派文献」の解説

表紙裏のまだ宛が出來ないから、幸はひこの別册にふさはしいこれで、埋め草にする。どうしたヨタになるかも知れぬ。其段は悪しからず。

自分は、本庄氏の「日本經濟史文献」や池邊氏の「日本法制研究書目」に刺戟されたといふでもないが、近來切に此の種の物の、我が軟派文學に缺けてゐる、その物足らなさを感ずるやうになつた。先年、京都から大阪の森氏の「風俗研究資料」が出て、稍我徒の所冀の先駈をされた形であつたが、しかしそれも極の簡單で、且つ前二書よりも不便なものであつた。唯さういふ形式の本が現れるといふ事が大に人意を強うした譯であつた。後、本庄氏の「文献」が出た。「原論」の時よりも整理されて、且つ便利さも増してゐる。唯結構ではあるが、我々には少々派違ひであるだけ、殘念の至りであつた、と同時にこれを得た經濟學徒の幸福を羨まずには得られなかつた。それ以後私の「軟派文献」を作りたい野心は、日増しに増長して行つた。その第一の石投げが、昨年の「小説雕刻物索引」となり、又今度の「隨筆考證索引」となつた譯である。この隨筆考證索引もホンの骨組である。無論許せば、全部の内容總目次(各篇の内容細目の)にも及ぼしたいが、今は努力を吝まざるを得なかつた。一はそれには材料がまだ不完全であるし且つ時間をそれのみに奪はれる餘裕さがないからであつた。で此の骨組で先づ辛抱するより外なかつた。その中諸君の中で、此の内容細目索引を作つて頂けば、喜んで自分はそれを聲援し、またそれを使用もしたいのである。迚も文献を作る必要上、さして、必要のない本までも、それが過渡期の一個零碎な刊行物であつても、文献の一歩を印する以上は、それに眼を徹さなければならぬ。圖書館の不完全なる此地にゐては、假令完全に藏書をそれらに見るも、一々足をその館に運ぶ時間を有せない自分にとつては、やはり詰らないと知りつゝ自からそれらの刊行物を眼當り次第購はなければならなかつた。お蔭で足一歩、名古屋を出なくとも恐らく玄人泣かせの古本相場通になつてしまつた。御承知の如く、どんな零本——以前なれば振向きもしなかつた物でも單價暴騰の折柄、それも需要に比べて供給の乏しい現在では、迚も容易に入らない。それにキレイな本、本とばかり求めてゐるから、容易な事ではない。

樂屋話はこれで打切。偖、自分が、他の善本の出來るまで、稿本でもいゝから仕上げたいと思ふものは、「文献」であるが、その豫定内容をいふと、前編と後編に分つ。前編は、この頃ぼつぼつやり出したやうな諸種の雕刻物索引である。(自分のこの文献は、なるべく原本に據らず、雕刻物に據る事を特色としたい。)まだ手を付けぬのは、淨るり、脚本、音曲、狂歌、浮世繪本の類である。後編は、明治以後の雜著の總目次と索引、及び諸雜誌要目の列擧である。この雜誌といへば、せめて十二三册で廢刊したものはいゝが、歌舞伎の百七十何號や風俗畫報の四百七十何號となると中々骨である。まして、演藝畫報や新演藝に於てをやである。其他「歴史地理」や「藝文」の類、硬さうな雜誌からも見當り次第拾ひ出したい。然しこれは中々の難事である。自分の許にも少々は持合してゐるが、中々これは個人の藏本では追つ付かない。古い所では「江戸會誌」といつたものもある。大阪の「近松會雜誌」といつた名の知れぬものもある。それに明治以後數百、數千の雜著が厄介である。迚も一生の中には出來さうもない。その第一歩として、その中、明治以後の自分の蒐集した雜著諸雜誌の總目錄、刊行年代だけでも出さうかとも思ふ。つまり自分の藏本の一部目錄解題である。損も少々なら、出したいとも思ふ。

何だか、譯の分らぬ話になつたが、此の頃の此の第二册目編輯のために疲れた頭のせゐと恕してもらひたい。(五、二四、著者)

江戸時代隨筆考證飜刻物索引（下ノ一）

（風俗若しくは故實等に入るべき程の体系なけれども、一般世相、奇談、史實等斷片的記錄の類。（古も含む））

七、見聞之部

ア、奥州波奈志　只野綾女　｛女流文學全集第三／温知叢書第十一

イ（井）磯山千鳥　堀秀成　百家說林續中

ウ、雲萍雜志　柳里恭　｛百家說林正下／續帝文「名家漫筆集」

オ（ヲ）老の長咄　未詳　温知第十二

翁草　神澤貞幹　續帝文「名家漫筆集」

落栗物語　藤原家孝　百家隨筆一

尾花が本　本居宣長　百家說林正上
○一名、思草。

思草　本居宣長　（見）尾花が本を見よ

カ、海西漫錄　鶴峯戊申　百家隨筆ノ三

雅俗隨筆　笠亭仙果　新燕石四
○異聞怪談集也。

キ、牛馬問　新井白蛾　温知第十二
○故實また多し。

其蜩庵隨筆　神澤貞幹　隨筆大觀第二
○演劇等もあり。

橘庵漫筆　田宮仲宣　新刻本十冊
○風俗等間々あり。

橘庵漫筆　田宮仲宣　外骨氏本「此中にあり」一
○同書の抄なり。

タ、愚雜爼　田宮仲宣　｛續帝文「名家漫筆集」／隨筆大觀第二

怪談老の杖　平秩東作　新燕石三
○諸國の怪談集。

花月草紙　松平樂翁　｛百家說林正下／名著文庫／有朋堂文庫

サ、想山著聞奇集　想山齋主人　續帝文（近世奇談）

三洲奇談　續帝文（近世奇談）

シ、事蹟合考　柏崎具元　燕石十種一
○大道寺友山の落穗集追加に增補したるもの也。風俗また參すべし。

春波樓筆記　司馬江漢　百家說林正上
○中に、「江漢後悔記」を挿む。○一たいに、風俗の材料に富む。

新著聞集　續帝文（近世奇談）

セ、蕉齋筆記　小川白山　百家隨筆ノ三
○風俗、其他の資料多し。
關の秋風　松平樂翁　百家説林正上
ソ、即事考　竹尾善筑　鼠璞十種一
タ、譚海　津村正恭　國書刊行會本一册
○風俗、故實等またあり。
膽大小心錄　上田秋成　新燕石五
ト、とはずがたり　中井甃菴　温知第六
ハ、八水隨筆　不詳　隨筆大觀第四　温知第二
○故實、史傳多し。

ヒ、飛驒の山　荻生徂徠　三十輻ノ二
フ、楓軒偶記　小宮山楓軒　百家隨筆ノ二
ホ、北窻雜話　片山松齋　三十輻ノ三
マ、窓の須佐美　松崎堯臣　温知第七
○史傳の事も多し。
窓の須佐美追加　松崎堯臣　温知第十
○同
ラ、老媼茶話　松風庵寒流　續帝國文庫（近世奇談）
リ、柳淇園先生一筆　柳里恭　續燕石十種一
ワ、渡邊幸庵對話　杉木義隣　三十輻ノ四　史籍集覽

八、故實・雜考之部

（故實、典據の討究、雜事に關する考證、（書目、目錄類も入れたり）主に風俗と見聞二部門以外の稍硬きものを集む。されど萬端に觸れたるもの多きが故に、凡てにまた所要の資材含有せるものあること不尠。特に要注意。）

ア、足利學校考　杉山精一　續史籍集覽本
東鑑異本考　榊原長俊　三十輻ノ二
扇考　伊勢貞春　百家叢説二
扇考　松岡明義　百家叢説二
押字考　伊勢貞丈　百家叢説三
あふびつくり　伊勢貞丈　隨筆大觀四
天野政德隨筆　天野政德　隨筆大觀一
○見聞またあり。

イ（井）、韜軒小錄　伊藤東涯　百家説林正上　三十輻ノ三
○地理の事、また多し。
遊女考　相場長昭　温知第五
遊女考　中島廣足　百家叢説一
右文故事　近藤正齋　近藤正齋二
○秘庫の書籍を攷證せるもの。
郁子譜　不詳　三十輻ノ一

稻負鳥考　藤原善一　百家叢説三
筠庭雜錄　喜多村信節　續燕石十種二
エ(ヱ)榮花物語考　安藤爲章　百家叢説二
燕居雜話　日尾荊山　百家説林續編下ノ一
○間々、見聞なども混へたり。
遠碧軒記　黑川玄逸　隨筆大觀ノ三
天象以下二十門あり。
ヲ(オ)鋸屑譚　谷川士清　百家説林正上「谷川士清先生傳」
淤能碁呂島考　菅政友　菅政友全集
同　大江春平　百家叢説二
小野道風像冠服考　伊勢貞丈　三十輻ノ三
溫故隨筆　小野竹叢　隨筆大觀四
カ、孝經樓漫筆　山本北山　續帝文「名家漫筆集」
好書故事　近藤正齋　近藤正齋三
○法制、風俗、經學等の諸要素をまた含む。
夏山雜談　小野高尙　三十輻ノ四　隨筆大觀ノ一
○公事に關するもの、他。
傍廂　齋藤彥麿　百家説林正上
かつみ考　屋代弘賢　百家叢説三　三十輻ノ三
○三十輻本、稍廣なり。

かつみ考　狛諸成　百家叢説三
金澤文庫考　杉山精一　續史籍集覽本
假面譜　喜多古能　續々群書十六
○假面作者に關する古來の傳説。
家屋雜考　澤田名垂　百家説林正下
閑室漫錄　山崎美成　百家隨筆ノ一
○かねて、名家の詩歌文を抄す。
漢籍倭人考　菅政友　菅政友全集
閑窻一得　不詳　三十輻ノ二
閑窓自語　柳原紀光　百家説林正下
酣中淸話　小島知足　百家説林續上
閑田耕筆　伴蒿蹊　有朋堂文庫　百家説林續下ノ一
閑田次筆　伴蒿蹊　百家説林續編下ノ一
キ、九桂草堂隨筆　廣瀨旭莊　百家隨筆ノ一
擬集古錄　並河永　三十輻ノ三
橘窻自語　橋本經亮　鼠璞十種ノ一
疑問錄　山崎美成編　續燕石二
宮城堂舍諸門炎上誌　榊原長俊　三十輻ノ二

祇園會山鉾考　林　恕　百家叢說一

錦所談　山田以文　百家說林續上

○故實のこと多し。

欽定古今圖書集成總目　不　詳　三十輻ノ一

ク、

廣益俗說辨　井澤蟠龍子　國民文庫一冊本

活版經籍考　吉田篁墩　百家隨筆ノ三

菅(くわん)像辨　貞　丈　温知第十二

關秘錄　隨筆大觀六

○風俗の事多し。

冠位通考　石原正明　百家叢說三

群書備考　村井量令　國書刊行會本一冊

君臣名義考　大江春平　百家叢說一

ケ、

桂林漫錄　桂川中良　百家說林正上

蒹葭堂雜錄　木村弘恭　新摺本五冊

○見聞、風俗、地理其他あり。

玄同放言　瀧澤馬琴　百家說林正上、續帝國文庫「名家漫筆集」

コ、

古今要覽稿　屋代弘賢等　國書刊行會本六冊

古事記年紀考　菅　政　友　菅政友全集

後松日記　松岡行義　百家說林續中

○有職の事多し。

滑稽雜談　其　諺　國書刊行會本二冊

狛犬考　温知第八

曆　屋代弘賢　古今要覽稿三十輻ノ三

昆陽漫錄　青木昆陽　百家說林正上

サ、

祭儀略　村士宗章　大藏永綏　三十輻ノ一

○儒式の祭儀を述ぶ。

喪儀略　大藏永綏　村士宗章　同

蒼梧隨筆　大塚嘉樹　百家說林續上

喪(さう)志編　揖取魚彥　百家隨筆ノ三

○和漢の故事。

糟粕手鏡　三十輻ノ三

竈(さう)北瑣語　恩田蕙樓　三十輻ノ一

○俗語の出典、經史詩文の疑義を辨す。

福(さき)草(くさ)考　感應水月　百家叢說二

さきくさの考　中島廣足　百家叢說二

雜稿四卷　菅　政　友　菅政友全集

○雜考、史傳、其他多し。

さへづり草　加藤雀庵　（單行三册）
○風俗、見聞、史傳また多し。
三議一統之辨　伊勢貞丈　三十輯ノ一
三餘叢談　長谷川宣昭　隨筆大觀ノ一
傘笠考　屋代弘賢　百家叢說一

シ、

秋齋隨筆　秋齋　隨筆大觀四
寺社寶物展閱目錄　續々群書十六
○山城大和地方の古社寺也。
十二月の名考　齋藤宇方伎　百家叢說二
十二月和名考　高内眞足　百家叢說二
示木公達書目　荻生徂徠　三十輯ノ一
鹽尻　天野信景　單行二册
○風俗、見聞等また多し。
清水千清遺書　百家隨筆ノ三
正倉院御開封勘例等御尋之日記　續々群書十六
正倉院御開封記草書　續々群書十六
天保四年正倉院御寶物目錄　續々群書十六
正倉院寶物御開封事書　續々群書十六
○天保四年十月也。

昌平學校釋奠式並御祭供　林鵞峯　三十輯ノ二
石楠堂隨筆　蜀山人　新百家說林三
逃齋偶筆　林衡　隨筆大觀二
○歌に關するものあり。
酒話隨筆　不詳　隨筆大觀四
○酒、風俗の事多し。
淮后淮三后考　新井白石　百家說林正下
春湊浪話　土肥經平　三十輯ノ一
松竹問答　松岡辰方　百家說林續編下ノ一
織錦舍隨筆　村田春海　百家說林續上
諸國名義考　齋藤彦麿　百家叢說二
○地理のまた資料。
琹歌袋祕閣考　未詳　百家叢說三
榊巷談苑　榊原篁洲　三十輯ノ一　隨筆大觀ノ一
人名考　新井白石　百家說林正下
新蘆面命　谷重遠　三十輯ノ二

ス、

相撲行粧考　伴蒿蹊　百家叢說一
○相撲の事、尙、雜藝の部を參照せよ。
墨田川梅柳新書を刊する例　馬琴　松村操編（曲亭遺稿）

書名	著者	所收
セ、正齋書籍考	近藤正齋	近藤正齋全集
〇經學のもの多し。		
西洋學家譯述目錄	穗亭主人	文明源流第三
清閑雜記	岡西惟中	百家説林正下
碩鼠漫筆	黑川春村	〔單　行〕
扇子考	大塚嘉樹	百家叢説二
善庵隨筆	朝川善庵	百家説林正上
〇史傳もあり。		
賤民俚考	菅沼權兵衛	百家叢説一
ソ、遡遊從之	蜀山人	新百家説林三
續昆陽漫錄	青木昆陽	百家説林正下
俗説贅辨	谷重遠	國民文庫本「廣益俗説辨」
タ、刀劍略説	大塚嘉樹	百家叢説二
道成寺考	屋代弘賢	燕石十種三　温知第七
高ねおろし	穗井田蓼我	百家隨筆二
〇茅原の茅窻漫錄の駁也。		
煙草二抄	京山	續帝文（京山）
多波禮具佐	雨森芳洲	百家説林正下
チ、中陵漫錄	勝成裕	隨筆大觀五
〇風俗、見聞等の材料またあり。		
ツ、通信考	奈佐勝皐	百家叢説一
〇神代に於ける外國との交通。		
橡(つるばみ)考	不詳	百家叢説三
テ、莛(てい)響(きやう)錄	高橋宗直	隨筆大觀五
朝鮮官員考	未詳	百家叢説三
條々聞書貞丈抄	伊勢貞丈	續々群書七
〇公武の法制、風俗の事多し。		
鳥(てう)目匹數考	大藏請近	百家叢説一
〇錢に關する考證。		
鉄研齋輶軒書目	齋藤正謙	文明源流第三
〇海外に關する圖書約六十種。		
轉注説	狩谷掖齋	百家説林正下
ト、東大寺古文書目錄		續々群書十六
東大寺三倉開封勘例		續々群書十六
東大寺正倉院開封記		續々群書十六
屠兒考	伊藤常足	百家叢説一
とはずがたり	村田春海	隨筆大觀四
〇歌文等の事多し。		
鞆之起原考　同伊都能竹鞆訓考	未詳	百家叢説一

ナ、七草菜粥考　中山方鳩　百家叢説二
なゝくさの考　阿部照任　三十輻ノ一
難波江　岡本保孝　百家説林續下一
○史傳また多し。
南留別志　荻生徂徠　百家説林正上
南留別志の辨　不詳　温知第五
南畝莠言　蜀山人　新百家説林三　隨筆大觀二
ニ、にぎはひ草　灰屋紹益　新燕石二
○茶、歌、蹴鞠道にも及べり。
二倉道具目錄　續々群書十六
日本紀の御局の考　藤井高尙　百家叢説三
ネ、ねさめのすさび　石川雅望　百家説林續上
寢よとの鐘　兒島尙高　隨筆大觀四
○神道の事多し。
年山紀聞　安藤爲章　百家説林續上
年山打聞　安藤爲章　隨筆大觀六
○歌のこと多し。
年中故事　玉田永敎　民間風俗
年々隨筆　石原正明　百家説林續下一　有朋堂文庫

ノ、熨斗目考　松岡辰方　三十輻ノ二
ハ、梅園日記　北愼言　百家説林續上
敗箒添塵　多田義俊　百家隨筆ノ一
○井澤の俗説辨の駁也。
梅窓筆話　橘經亮　百家説林續下ノ二
梅村載筆　林道春　隨筆大觀三
卯花園漫錄　石上宣續　新燕石三
庖丁書錄　林羅山　百家説林續上
坊保町圖解　大塚嘉樹　三十輻ノ二
幕朝故事談　不詳　温知第二
○風俗、法制またあり。
羽子板圖說　跡部光海　百家叢説一
花かつみ考　藤塚知明　三十輻ノ三　百家叢説三
花かつみ之考　多賀常政、眞丈、忠寄　百家叢説三　三十輻ノ三
腹赤考　田中元勝　百家叢説一
春の七くさ　曾永年　百家叢説二
改正板本東鑑目錄　榊原長俊　三十輻ノ二
ヒ、比古婆衣　伴信友　百家説林續中

皮類考　伊勢貞春　百家叢説一
領巾麾山考（ひれふる）　馬季　松村操編（曲亭遺稿）
賓客禮俗式　中川忠英　三十輻ノ二

フ、
藤原氏擅權考　菅政友　菅政友全集
筆のすさび　菅茶山　百家説林正上
筆のたはふれ　志賀理齋　隨筆大觀四
不問談　篠崎東海　三十輻ノ二
墳墓考　中山信名　百家説林正下

ヘ、
辨國號考　小野高潔　百家叢説三

ホ、
茅（ぼう）窓漫錄　茅原定　百家説林正上
北邊隨筆　富士谷御杖　百家説林正上
反古染　越智爲久　續燕石十種一
○染色紋章及衣服に關する考證なり。
本朝細馬集　土肥經平　温知第九
本朝刀劒略記　壺井義知　三十輻ノ二
本邦刀劒考　榊原長俊　百家叢説二

マ、
勾玉考　谷川士清　「谷川士清先生傳」百家叢説三
○附、石劍考、白石考。

松の落葉　藤井高尚　百家説林續上
松虫鈴虫考　屋代弘賢　百家叢説一
松屋叢書　高田與清　温知第三
松屋筆記　高田與清　國書刊行會本三冊
○風俗の材料また多し。

ミ、
任那考　菅政友　菅政友全集
民間時令　山崎美成　民間風俗
○風俗の材料また多し。

ム、
無垢衣考　京傳　續燕石二

モ、
木文考　速水行道　百家叢説三
茂睡考　山東京山　新燕石三

ヤ、
山城國號考　長澤伴雄　百家叢説二
大和事始　貝原好古　國民文庫本（廣益俗説辨）

ラ、
蘿月庵國書漫抄　尾崎雅嘉　百家隨筆ノ一

リ、
柳葊隨筆　栗原信充　百家説林續下ノ二
○間々、風俗の材料を含む。
理齋隨筆　志賀理齋　續帝國文庫「名家漫筆集」隨筆大觀二
凌（りょう）雨漫錄　不詳　隨筆大觀四
閭學禮俗式　中川忠英　三十輻ノ二

和漢三才圖會　（單行）一

九、史傳之部

ア、赤穗義士傳一夕話　山崎美成　帝文「赤穗復讐」
赤穗義人纂書　鍋田晶山　國書刊行會本（單行三冊）
秋田杉直物語　不詳　列侯深祕錄
（佐竹騷動の一。）
秋田治亂記實錄　同　同
○同
朝倉敏景條々　三十幅の四
會津藩文書　史籍雜纂五
天草土賊城中の話　史籍集覽一六
蛩の燒藻　森山孝盛　溫知第十一
雨の夜さもし火　湯淺元禎　三十幅の二
有村家文書　史籍雜纂五
○井伊大老要擊の史料。
靑砥藤綱傳　馬琴　松村操編（曲亭遺稿）
イ（井）、遊女濃安都　列侯深祕錄
（尾張宗春が事。）

碗久考　馬琴　松村操編（曲亭遺稿）

（個人又は政局に關し其他一般史傳及び該資料たり得るもの。德川實紀などの正記の類、又は此種私記。御家騷動物祕錄も混ゆ。倚、古代の文獻も二三混りたれり。（多く江戶期に成れるもの也。）外交文書も二三混ゆ。）

石川忠總家臣大阪陣覺書　續々群書四
異人恐怖傳　志筑忠雄譯 黑澤翁滿校　文明源流第三
維新公自記　島津義弘　續々群書十三
伊勢守殿御系圖　澤巽阿彌　三十幅の四
出石侯內亂記之事　列侯深祕錄
○仙石騷動の一。
出雲國造御嗣考　內山眞龍　百家叢說二
異年號考　穗積保　百家叢說一
盤井物語　列侯深祕錄
○栗山大膳に關す。
ウ、雨窓閑話　不詳　百家說林正上
內山家藏古文書　列侯深祕錄
○栗山大膳に關す。
エ（ヱ）、營中刄傷記　不詳　新燕石二
越後家一件　史籍集覽一六

炎上之記　町尻東林　史籍集覽一七

オ（ヲ）

おあん物語　女流文學全集第一

於多蒲幾　猪飼房續　史籍雜纂の三

遠近橋（をちこち）　高橋多一郎　國書刊行會單行一册

〇幕末水戸史料の一。

落穗集　史籍集覽一〇

大阪陣山口休庵咄　山口休庵　續々群書四

大塩平八郎檄文　史籍集覽一六

太田和泉守覺書　史籍集覽一七

太田道灌日記　（（史）我宿草を見よ）

大村記　史籍雜纂の一

カ、

海西雜記　中岡愼太郎　史籍雜纂五

景勝家法　直江兼續　三十輻の四

家傳史料　大田南畝　史籍雜纂の三

蚊やり火　列侯深祕錄

〇樂翁當路時代文獻の一。

キ、

鳩巢小說　空鳩巢　續史籍集覽一七、一八

休明光記　續々群書四

〇松前奉行羽太正養が在役中の蝦夷に關する記錄。

紀侯言行錄　續々群書三

〇賴宣の事を記す。

議奏歷　續々群書二

己丑記　麻谷老人　史籍集覽一七

歸南日記　平井義比　史籍雜纂五

僞年號考　中山信名　百家叢說一

吉備烈公遺事　湯淺元禎　續々群書三

〇池田光政の言行錄。

行々筆記　中岡愼太郎　史籍雜纂五

京大佛殿炎上　史籍集覽一七

玉音抄　林大學頭　史籍集覽本

玉露叢　不詳　國史叢書本

〇法制、故實またあり。

近世畸人傳　伴蒿蹊　有朋堂文庫單行

近代公實嚴秘錄　百萬塔第八

ク、

舊事紀僞書明證考　多田義俊　百家叢說三

國造國司考　奈佐勝皐　百家叢說二

颶風記事　史籍集覽一七

熊澤蕃山幽居始末　菅政友　菅政友全集
外蕃通書　近藤正齋　近藤正齋第一
官武通紀　國書刊行會本二册
○幕末史料の一。
關城書考　中山信名　史籍雜纂三
關東洪水　史籍集覽一七
栗山大膳記　吉田久太夫　列侯深祕錄
栗山大膳記事　坂田諸遠　列侯深祕錄
○明治十五年のもの也。
久留米騷動記　列侯深祕錄
黑田甲斐守書付　列侯深祕錄
○黑田騷動文書の一。

ケ、

畔柳助九郎武重覺書　三十輻の三
慶元古文書　續史籍集覽 自五二至五四
慶長年中卜齋記　我自刊我叢書
見語　列侯深祕錄
○加賀騷動の實紀。

コ、

源平盛衰記人名　三十輻の四
弘長記　三十輻の四（史籍集覽）續群書類從

心の双紙　松平樂翁　百家說林正下
梧窓漫筆　太田錦城　有朋堂文庫（名家隨筆集）單行
梧窓漫筆拾遺　太田錦城　百家說林正下
國司國造考　大塚嘉樹　百家叢說二
御當代記　戸田茂睡　戸田茂睡全集
艮齋間話　安積信　隨筆大觀六

サ、

嵯峨實愛手記　史籍雜纂五
櫻田御殿之古事　史籍集覽一七

シ、

指華入京日載　史籍雜纂五
○幕末史料の一。
事語繼志錄　續々群書三
○松平信綱の事を記す。
事實文編　五弓雪窓　國書刊行會本五册
嶋原天草日記　松平輝綱　續々群書四
嶋原一揆松倉記　續々群書第四
嶋原記　史籍集覽二六
常山紀談　湯淺常山　續帝文（常山紀談）
正德以來聞書　史籍集覽一七

舜水先生行實並略譜　今井弘濟　安積覺　續々群書三
職掌錄　史籍集覽一七
新東鑑　附、附圖　不詳　國史叢書本
神功皇后攝政考　坂上康敬　百家叢說三
新國史考　作信友　百家叢說三
信州淺間燒　史籍集覽一七

ス、駿府記　史籍雜纂ノ二
駿府政事錄脫漏　史籍集覽一七

セ、惺窩先生行狀　林羅山　續々群書三
靜寬院宮日誌　史籍雜纂五
世子奉勅東下記　○幕末史料の一。　采重謙藏　史籍雜纂四
西木子紀事　○栗山大膳に關す。　井上某　列侯深祕錄
西木紹山居士碑銘　○同。　列侯深祕錄
政隣記抄本　○加賀騷動の一。　津田政隣　列侯深祕錄

紹述編年　○幕末史料の一。　伊知地貞馨　史籍雜纂四
赤城士話　史籍集覽一六
先哲像傳　齋藤義胤　有明堂文庫
撰類聚國史考　河村秀根　百家叢說二

ソ、續皇年代略記　平高潔　續々群書二
同　私記　史籍集覽一九
續德川實紀　○法制、風俗等多き事無論。　（單行）
續南行雜錄　佐々宗淳　續々群書三

タ、大成殿上梁の私記　藤原安辰　史籍集覽一七
桃源遺事　○光圀の言行錄。　續々群書三
當代記　史籍雜纂ノ二
高城下野家記　橋爪正仙　三十輻ノ三
立花立齋島原戰之覺書　史籍集覽一六
龍の宮夢物語　○幕末水戸史料の一。　列侯深祕錄
田沼狂書　○落首戲文。　列侯深祕錄

田沼主殿頭へ被仰渡書　列侯深祕錄

ツ、通船一覽　國書刊行會本八冊
○貴重なる外交史料の一。
土屋忠兵衛知貞私記　續々群書第四
○大阪両役の雜記。

テ、丁卯日記　中根雪江　史籍雜纂ノ四
○幕末史料の一。
傳奏次第　續々群書二
天和聚訟記　列侯深祕錄
○越後騷動の一。

ト、戸木林以下徒黨一件書付　史籍集覽一六
德川實紀　（單行七冊）
○法制、風俗等多き事勿論。
讀老庵日札　老樗軒　鼠璞十種一
○戲作者等の傳多し。
土氣(とけ)古城再興傳來記　三十輻ノ四
○上總山邊郡土氣，酒井家の記錄。
土氣東傳記　三十輻ノ四
○同。
十時三彌介書上之寫　史籍集覽一六

ナ、浪速人傑談　政田義彥　續燕石十種一

南山皇胤譜　菅政友　菅政友全集

ノ、野木瓜亭隨筆抄　史籍集覽一七
野里口傳　野里四郎左衛門　同一六

ハ、房總里見誌　岡島成邦　史籍雜纂ノ一
方長老朝鮮物語　林鵞峯　三十輻ノ二
○日鮮外交資料の一。
寶曆國民嗷訴記　列侯深祕錄
○久留米騷動記の一。
寶曆四甲戌歲騷動御制詞　同
○同
法皇外紀縕門鴻寶　續々群書二
土津靈神言行錄　續々群書三
○保科正之の言行錄。
はなさく松　塙保己一　三十輻ノ一
濱の松風　列侯深祕錄
○水越失脚の際の戲文等。
濱松侍從箝問封書　列侯深祕錄
○同
播州色夫錄　列侯深祕錄
○榊原が高尾の一件。

	書名	著者	所收
	鞞人漂著		史籍集覽一六
ヒ、	日向記		史籍雜纂ノ一
	微妙公御夜話	山本基庸	史籍集覽二六
	百家琦行傳	八島五岳	有朋堂文庫
フ、	風流眞顯記 ○繪本太閤記中の人物評。		德川類聚十二
	不慍錄	德川齊昭	史籍雜纂五
	吹上御苑炮術上覽之記	成島司直	史籍集覽一七
	福岡夢物語 ○黑田家奸臣隅田が事。		列侯深祕錄
	富士山燒之事		史籍集覽一七
ヘ、	別當杢左衞門覺書 ○一名、島原記。		史籍集覽二六
	辨官補任		續々群書二
ホ、	北海異談		百萬塔三
	戊辰日記 ○幕末史料の一。	中根雪江	史籍雜纂四
	本朝改元考	山崎嘉	百家叢說一
	本朝世紀考	伴信友	百家叢說三
	本朝歷代法皇外紀	釋元策	續々群書二
マ、	籬の菸	靜海舟	史籍雜纂五
	松平越後守家來裁決書		列侯深祕錄
	松前若狹守へ被仰渡候御書付		史籍集覽一七
ミ、	水戶藩黨爭始末		史籍雜纂四
	耳嚢抄		史籍集覽本
ム、	陸奧國軍團舊地考	櫻戶櫻翁	百家叢說三
メ、	正續明良洪範	眞田增譽	國書刊行會本一冊
モ、	森岡貢物語	馬文耕	史籍集覽一六
ヤ、	颺言錄 ○五代綱吉の言行を錄す。	堀田正俊	續々群書十三
	柳澤家祕藏實記		列侯深祕錄
	山田右衞門作物語 ○天草亂史料の一。		續々群書四
ユ、	由比正雪召捕次第		史籍集覽一六
ラ、	羅山林先生行狀	林靖	續々群書三
リ、	理慶尼の記	理慶尼	女流文學全集第一
	鄰交始末物語解	雨森芳州	三十輯ノ二

林氏異見　林春齋　史籍集覽一七

レ、歷朝禪位考　大江春平　百家叢說一

ロ、論衡解錮　馬　季　曲亭遺稿

ワ、隈山春秋　平井義比　史籍雜纂五

一〇、神道之部

ア、會津神社の訓詞　惟足　續々群書一

正親町公通卿口訣　神道叢說

天穗日命考　千家俊信　百家叢說一

イ(井)出雲大社記　續々群書一

答井澤長秀書　谷重遠　神道叢說

カ、學規の大綱　吉見幸和　神道叢說

神路の手引草　增穗大和　神道叢說

神漏岐神神漏美命考　荒木田久守　百家叢說一

賀茂注進雜記　續々群書一

キ、玉籤集　玉木正英　神道叢說

依勤續進高年申加階狀　河邊精長　神道叢說

タ、皇太神宮殿舍考證　度會延經　續々群書一

我宿草　太田道灌カ　百家說林正下

○一名、太田道灌日記。

倭紂書　列侯深秘錄

○松平乘邑に對する沙汰書の擬作。

倭蘭年表　不詳　文明源流第三

(神道の解說、故實、祭典儀、神名號等。社緣起の類も入る。此項、尚「故實雜考」の部を參照すべし。傍證たる神名號、國號考等、彼に在り。)

軍神問答　貞丈　溫知第十

ケ、外宮神領目錄　續々群書一

元祿七年加茂祭記　續々群書一

サ、三社託宣考　伊勢貞丈　神道叢說　溫知第十

○後者と物異れり。

三社託宣略抄　續々群書一

○皇太神宮、八幡、春日の三社。

三種神器極秘傳　跡部良顯　神道叢說

三種神器名考　伊勢貞丈　百家叢說三

シ、持授抄　山崎闇齋　神道叢說

十二支訓傳　桑名松雲　神道叢說

諸社一覽　續々群書一

○地理、史傳多し。

書名	著者	所收
神學承傳記		續々群書一
神學一口傳		神道叢說
神家常談	眞野時綱	神道叢說
神祇伯家學則		神道叢說
神宮續秘傳問答	出口延佳	神道叢說
神宮秘傳問答		續々群書一
神社便覽		續々群書一
神代卷獨見	伊勢貞丈	神道叢說
神道	谷川士清	神道叢說
神道天瓊矛記	井澤長秀	神道叢說
神道或問	多門正玄	神道叢說
神道學則日本魂	松岡仲良	神道叢說
神道管要	度會家行	神道叢說
神道啓蒙	高屋近文	神道叢說
神道指要	榮名井廣聰	神道叢說
神道四品緣起	橘三喜	神道叢說
神道生死之說	跡部光海	續々群書一
神道正統記	藤中溪	神道叢說
神道初傳口授	伴部安崇	神道叢說
神道書目集覽	鈴木行義	神道叢說
神道大意	若林强齋	神道叢說
神道大意	吉田兼俱	神道叢說
神道大意註	吉川惟足	神道叢說
神道通國辨義	森昌胤	神道叢說
神道傳授	林羅山	神道叢說
神道傳來系圖	宮內昌興	神道叢說
神道獨語	貞丈	温知第六
神道祕傳抄		神道叢說
神道辨草	源忠義	續々群書一
神道問答 一名、和漢問答。	伴部安崇	神道叢說
神道由來記	卜部兼直	神道叢說
七、赤水雜錄	長久保玄珠	三十輻ノ二
蕈栞草紙	多田義寬	三十輻ノ一

タ、道神考　秋元安民　百家叢説一

チ、筑紫小戸靈蹟考　宮崎大門　百家叢説一
　○地理、史傳にも交渉あり。

ト、東照宮大權現緣起　續々群書一
　土德篇　吉川惟足　續々群書一
　豐受皇太神宮殿舍考證　度會延經　續々群書一

ナ、中臣八箇之傳　淺利信賢　神道叢説
　中臣祓再八箇一箇之傳　淺利信賢　神道叢説
　與中村恒亭書　谷重遠　神道叢説
　神學納(なふ)涼問答　小野高潔　神道叢説
　南窻筆記　加藤宜樹　百家隨筆二

ニ、二十二社略記　續々群書一
　日本學則　上月信敬　神道叢説
　日本紀神代卷奥書　船橋國賢　神道叢説

ハ、土津靈神正學記　續々群書一

ヒ、病後手習　伴部安崇　續々群書一
　○神道説話の一。
　日吉祭禮記　續々群書一
　○一名、月能桂。

フ、藤森弓兵政所記　山崎闇齋　神道叢説

ミ、未生土之傳　惟足　續々群書一
　三輪物語　熊澤蕃山　神道叢説

ヤ、陽復記　度會延佳　續々群書一
　○神道論。
　八神考　富永瓢　百家叢説一
　○明治九年成る。
　八重垣大明神由祝詞　續々群書一

ユ、唯一論 附 葉水翁行狀　大山爲起　神道叢説

ヨ、吉田家記文　鹽田兵庫　神道叢説
　吉見宅地書庫記　源誠之　神道叢説

一一、佛教之部

（弟子傳、寺緣起、及び佛教各種の雜考。問答記。教理の解説等。勿論此種の雕刻物、之に盡きず、九牛の一毛也。尙、國書刊行會本「信仰叢書」其他を參照すべし。）

イ（井）祐天上人一代記　帝文（高僧）一
　一休諸國物語圖會　續帝文（續高僧）

一心常安　　近世佛教集說
エ（ヱ）永平道元禪師行狀圖會　　帝文（高僧）
役行者御傳記圖會　　續帝文（續高僧）
圓明國師御傳　　續帝文（續高僧）
オ（ヲ）遠忌考　山崎美成　百家叢說一
カ、荊萱道心行狀記　　續帝文（續高僧）
キ、記主禪師行狀繪詞傳　　續帝文（續高僧）
行基年譜　　續々群書三
ケ、契沖阿闍梨傳　　續帝文（續高僧）
コ、興教大師實傳　　續帝文（續高僧）
弘法大師行狀記　智証　帝文（高僧）
弘法大師弟子傳　　續々群書三
興福寺別當次第　　續々群書二
興福寺濫觴記　　續々群書十一
故紙錄　柳澤の妾染子　近世佛教集說
木葉衣　行智　續々群書十二
○修驗山伏道の雜錄、雜考。

根孔抄　不詳　近世佛教集說
○立川流の典籍の一。
サ、西行物語　　續帝文（續高僧）
山家學則　敬光　近世佛教集說
三國七高僧傳圖會　一禪居士　帝文（高僧）
シ、慈覺大師一代略記　　續帝文（續高僧）
寺格帳　　續々群書十二
實理學捷徑　　近世佛教集說
品川問答記　　史籍雜纂ノ一
宗法問答　　史籍雜纂ノ一
諸宗階級　　續々群書十二
諸宗評判記　　德川類聚十二
親鸞聖人御一代圖會　　帝文（高僧）
セ、招提寺千歲傳記　　續々群書十一
赤倮々　服部蘇門　温知第六
善光寺本尊考　屋代弘賢　百家叢說一
ソ、僧官位服制考　淸原經賢　百家叢說三

續山家學則　敬彥　近世佛教集説
祖心法語　祖心　近世佛教集説
タ、大辯才天祕訣　淨嚴　近世佛教集説
踏雲錄事　行智　續々群書十二
○修驗山伏の來歷等。
チ、筑前國宗像郡阿彌陀經石銘考　青柳種信　百家叢説一
智證大師一代略記　續帝文（續高僧）
千代見草　日遠　近世佛教集説
テ、貞安問答　史籍雜纂ノ一
傳教大師傳　帝文（高僧）
天台座主傳　續々群書二
ト、東叡山御建立旨趣　孝泉　近世佛教集説
並、輪王寺御門室由來。
東寺長者補任　續々群書二
德本行者語一册　近世佛教集説
ニ、日蓮聖人一代圖會　帝文（高僧）
ハ、寶篋印陀羅尼經和解祕略釋　蓮体　近世佛教集説
法隆寺良訓補忘集　續々群書十一

播隨意上人諸國行化傳　續帝文（續高僧）
ヒ、祕密安心往生要集　蓮体　近世佛教集説
フ、深草元政上人御傳記　續帝文（續高僧）
釜斯幾　近世佛教集説
不動尊愚抄　不詳　近世佛教集説
○立川流の典籍の一。
（双）両子寺略緣起　馬學　曲亭遺稿
ホ、發心即到記　近世佛教集説
ミ、明惠上人御傳記　續帝文（續高僧）
ヤ、藥師寺黑草紙　續々群書十一
藥師寺新黑草紙　續々群書十一
ユ、唯稱安心鏡　大我　近世佛教集説
リ、両大師（元三慈眼）傳記　帝文（高僧）
レ、勵聲念佛感應編　近世佛教集説
了譽上人繪詞傳　續帝文（續高僧）
蓮如上人御傳記　續帝文（續高僧）
蓮門學則（双）　近世佛教集説
ロ、六郷山両子寺大緣起　馬學　曲亭遺稿

二二、耶蘇教之部

（耶蘇教江戸期文献の一也。但、天草亂については、「史傳之部」に數書あり、參照を要す。）

オ(ヲ)、大村家秘錄　史籍雜纂ノ一

キ、切支丹宗門來朝記　續々群書十二

吉利支丹物語　續々群書十二

契利斯督記　續々群書十二

サ、査祆餘錄　三十幅の三／續々群書十二

○吉利支丹組屋敷の役所日記。

テ、天馬異聞　カピタン某　文明源流第一

○天草亂の見聞記。

ナ、南蠻寺興廢記　文明源流第一

同　史籍集覽本

南蠻寺物語　不詳　文明源流第一

○史籍集覽本「―興廢記」の原本。

ハ、破提宇子　ハビアン　續々群書十二

伴天連記　續々群書十二

ヒ、肥前國有馬古老物語　續々群書十二

□史傳の部補遺

改定史籍集覽本の脱漏ありたり、左に錄す。凡て五十音順。括弧內は、該卷數也。

○荒木彦四郎村英先生之茶話（一七）○蘆田記（一三）○以貴小傳（一一）○今川記（一三）○今井軍記（同）○上杉家近來政事大略（一七）○氏鄉記（一四）○雲州軍話（一五）○岡田家右衛門元次覺書（一六）○恩榮錄）一一）○加藤肥後守忠廣之事（一五）○川角太閤記（一九）○菊池傳記（三）○耆舊得聞（一一）○淸正記（一五）○廣澤記（一六）○建康㯮御物語筆記（一六）○諸家業記（一七）○相撲行家事家傳（一六）○駿河土産（續一〇）○鈴鹿家記（二四）○園岡家始末記（一三）○瀨尾舊記（一三）○祖父物語（一三）○反町大膳訴狀（一三）○藤堂家覺書（一五）○信綱記（一六）○一柳家記（一四）○本阿彌次郎左衛門傳（一六）○堀內傳右衛門覺書（續四四、四五）○本多越前守利長家覺書（一六）○三河記異本考（一七）○水野日向守覺書（一六）○水谷蟠龍記（一三）○本山豐前守安政父子戰功覺書（一五）○山田仁左衛門事蹟（一六）○山崎荻生二先生事蹟（一七）○安井門跡次第（一二）○湯淺勘助直宗傳記（一三）○由良氏書（一六）○吉岡傳（一六）○脇坂家傳記（一五）○渡邊華山口書（一六）○渡邊勘兵衛武功覺書（一四）

著者より

前册は、以外にも延刊の甚しいものがあつた。それは、一寸欄外にも斷つておいたが、生憎私の原稿が豫定より三四日遲れたため、印刷所が他の定期物を控へてゐる一日から八日までの中へ、差込む事となり、ネッチもサッチもゆかなくなり、それでも九日にやつと初校を見せてくれたが、その校正は、また校正ではなくして、例の訂正、增補といふ始末都合の惡い事は、十日の銀婚御大典の祝日翌十一日の休日と來たので、十三日にやつと再校が出た始末、それからまた少々修正をやつた始末ゆゑ、たうとうあの不始末です。十日には出來ると思つたのが、あの始末です。この册も心配はしてゐるが、今度は多少無理をきかして早くなりませう。すでに、雜考までは印刷所へ廻してあります。それが爲叢書の原稿も遲れ、手につかず。やつと只今この册編輯と同時に仕上げたら、生憎豫定より頁數が少なくて、二十五六頁といふ始末。よりて急に、アト二十三四頁のもの、(それには、三津瀨川上品仕立にする積。)を補寫せればならぬ事故、今四五日は、原稿の仕上げが遲れます。結局この叢書も、六月二十日頃出來かと思ひます。重ね〴〵の不始末を御許しありたい。○最近家に病人もありました。それは、三女のなつよが、轉地療養をさせねばならぬかとまで病勢が進みましたが、それもどうやら治りました。行數これで盡く、余は後便。

寄贈紹介

○岸田吟香翁　若山甲蔵著

維新前後新聞發達史の好資料である。當時に於ける吟香翁の活動が、この書に殆どその逸話を蒐めてゐるといふてよい。寫眞版數葉を口繪に掲ぐ。著者の故人を記する、敬虔なる、熱意ある筆は、欽すべき限りである。中に、「もしほ草」第九篇の全篇を掲げてゐる。(定價不明、四六判約一〇〇頁、宮崎市橘町二丁目宮崎縣政評論社)。

○茶碗屋茶話　芳野町人著

芳野町人事、淺井竹五郎氏の近著である。氏が一陶磁器商としてではなく、廣汎なる趣味眼、眞純な人生鑑賞眼よりして物された、其の記録である。專問語には一々小註も附してあるから、當業者以外のものにも、中々了解されて却つて面白い。時には一般骨董を論じ、古器を評し、時には芝居話、世相事の鋭偽なる評語にも及んでゐる。私たちと違つた世界でもあり、共通の世界でもある。最近面白く讀まして貰つた事を感謝しておく。(四六判布裝、二八八頁。貳圓。東京市外中野町谷戸二四〇七、山名書房)。

○西宮小誌　吉井太郎著

○西宮先賢遺蹟顯彰繪葉書　同

舊友吉井氏の近著である。西宮小誌は、西宮市制の記念として編されたものであるが、簡にして要を得てゐる。繪葉書は、コロタイプ版六枚、解說付である。共に鄕土の貴い記錄である。(小誌、繪葉書共、代不明。西宮市西宮神社々務所)。

○歌舞伎　創刊號

吉田暎二氏が主に編輯されてゐるらしい新雜誌である。唯歌舞伎座の機關雜誌といふだけが、少々心持の上で變だが、しかし內容は中々粒揃ひである。木村氏の「演劇大辭典」の續稿も、この誌上に來號から續掲されるさうである。發達を望む。(菊判、七二頁、口繪數葉付。一部參拾錢。東京市木挽町、歌舞伎座內、同發行所)。

○風俗硏究(五月號。婚姻の沿革。灸の事。江戶中期世相と民間容儀服飾等)○國學院雜誌(同。豐後に於ける海外貿易の起因等)○延壽情話(第七册。初世延壽略年表。吉原の藝者と見番。淸元の「文屋」と「喜撰」等。)○國語と國文學(六月號。萬葉集と民謠との關係等。)○墓碑史蹟硏究(五月號。誓願寺中の墓地等)○川柳鯱鉾(同。心中女夫柳。柳樽略解等。)○やなぎ樽硏究(同。誹風柳樽全集に就て—三面子。甲子夜話に出てゐる川柳—山椒。古句解答—花月、等)

定價表
一册 廿五錢 郵稅貳錢
六册分 壹圓四拾錢 稅共
十二册分 同 貳圓八拾錢
○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

大正十四年五月二十八日印刷
大正十四年六月一日發行【本册三限參拾錢】

名古屋市東區東…町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社
名古屋市東區…町一五七番地
發行所　江戸軟派硏究發行所
振替名古屋九六七二番

○本叢引尙一册、要目は、書道、繪畫(浮世繪も含む)、政治法制、經濟、敎育、日記、地理、歌文俳、雜等也。(本年中に增刊)。尙、軟派叢書第四編は、樂屋話の他、三津瀨川上品仕立、及び狸編大津繪節と落咄役者評判よせ一卷と三篇の合本として、本月中に原稿とり纏め、六月二十日頃には刊行すべし。それまで御待ちありたし。案外內容を充實させ可申候(五、二九夜)

依託販賣書目

◘菊判以上　○四六判　△小本

（和本の部）○繪本義經一代實記一、五（天明版春章畫）壹圓○假名讀八犬傳（春水作、國芳畫）自四編至八編十册壹圓八拾○人心覗機關（三馬）粗本三十○川柳百人一首一册壹圓八十○一九作國丸畫玉茵草紙三册、畫入萬寶集他一册合貳圓△開化柳多留他二本壹圓錢太功後編の旗飃（淨ろり丸本）壹圓錢繪口合瓢簟（半山畫）八十錢東西年表（井上頼國、大槻如電）八十○王菊全傳花街鑑上下合、（鼻山人作、英泉畫）壹圓五拾○增補東海道膝栗毛二、五、六、七四册（脅文作、芳幾畫）八十△粹の懷四册合本元表紙付、粗横本（半水編、貞信畫）七十△よしこの名婦の里二册、八十○道戲問答（英泉畫作）七十○附會案文（一九畫作）壹圓五拾○假名手本忠臣藏七段目より（廣重畫、淨るり本）壹圓五十錢東海道敵討四（一名、元祿曾我部の錦作繪入、元祿十五年版）三丁落元表紙付一册、八十錢百富士一册（明和版、文晁風畫、俳諧本）貳圓五拾錢墨水流燈會之記（美本、着彩繪數葉入）壹圓五拾○聞上手二編（百龜自畫作）一册貳圓○慶長見聞集四册（史籍集覽本）壹圓錢歷世女粧考（京山、美本元版）五圓○繪入國譯百論經（淡彩畫入）貳圓五拾錢八十翁昔がたり（師宣風畫入）參圓五拾錢色音論、諸國盆踊唱歌（我自刊我叢書）壹圓五拾錢狂文寶合之記（政演政美畫上本）拾五圓錢千秋樂小謠萬歲樂（天明版、繪入）八十錢田舍源氏（芳幾畫、和紙翻刻）十册八十錢審美綱領上下二册（鷗外珍本）貳圓八拾○石川豊信畫譜一帖（緞子特製）極彩、參圓錢長崎の俤（畫集、解說付）壹圓五拾○色里三所世帶、風來山人戲作鎌倉太平記合本（緞子表紙翻刻）五圓○長崎古今學藝書畫一覽壹圓參拾○千社札繪馬小額展覽會目錄七十○南葵文庫陳列目錄六十錢繪入好色一代女三册（原本通り複製）四圓五拾錢誹諧名さり笠（古版）貳圓五拾錢日本風俗圖繪（特製絹帙入）參拾五圓錢瓦礫雜考（信節）合本五圓△花街好情（明治十七年刊）五十錢浪花名所百景（堅錦百枚）貳拾五圓錢東都名勝繪合（廣重豊國合作双六ヱ）一枚參圓五拾錢輕口臍順禮（畫入）三册參圓（**以下洋本の部**）錢旋頭歌評釋（神谷）和裝八十錢東西美術提要（原、石谷）壹圓○續國歌大觀三册七圓五拾○耶蘇教の日本的研究（木村鷹）壹圓六拾錢演劇新潮大正十四年一月號八十錢葵文庫、東海道膝栗毛二册壹圓八拾錢法華經の行者日蓮（姉崎）貳圓參拾錢印度五千年史（高桑）五圓五拾○大奧の女中（縮刷合本）壹圓八十錢幕末小史（戸川殘花）三册貳圓錢宮本武藏（同遺蹟顯彰會）壹圓六拾○柳澤吉保（林和）壹圓六拾○伊曾保物語（拾錢文庫本）參拾○獏の舌（魯庵）元版、壹圓六拾○七花八裂（楚人冠、絕）壹圓五拾○三都の生活（岡田播陽）八十○近松淨るり集中（有朋堂文庫）一册壹圓參拾○近松門左衛門全集（春陽堂版、高野、黑井）十册揃貳拾八圓錢演劇十講（島文次郎）壹圓貳拾○小咄十種（無聲編）壹圓五拾○吉原十二時（雅望作、北溪畫）翻刻。八十錢南總俚俗（內田）壹圓七拾錢珍書百種（宮崎三昧）七十錢屋上庭園（白秋等）創刊號壹圓五拾錢海の日本（太陽增刊）八十錢明星（明治三十四年一月號）八十錢新聲（明治三十六年代）增刊號共五册合、壹圓錢千山萬水（乙羽）八十錢中央史壇增刊平將門號四十△名著文庫狂言二十番八十△雨月物語外二（東亞堂）三十△鶉籠虞美人草（漱石）合本貳圓△彼岸過迄四篇（同）同△三四郎それから門（同）同△東京と大阪（銀月）三十△へなぶり（朴念仁）四十△俳句小史（紅綠）壹圓△啄木全集第三、書簡壹圓八拾△累卵の東洋（乙羽）七十錢日本語學史（長連恒）二册參圓五拾錢ラスキン美術と文學（澤村）參圓○燈影（花袋）初版參圓五拾錢發展（泡鳴、初版菊判本）壹圓五拾錢都の花第一號より第十號まで十册揃四圓五拾○明暗（漱石、東朝切拔製本、全繪入）壹圓錢趣味の日本史三册（新保磐次）美本拾四圓○冷笑（荷風、初版）壹圓八拾○珊瑚集（同、美本）參圓五拾○あめりか物語（同）八十○結婚禮讃（無想庵）壹圓八拾○烙印（小宮豊隆）美本壹圓○表象派の文學運動（泡鳴譯）八十○秋江隨筆（金星堂叢書）壹圓○美辭學後篇（高田早苗）八十○俳諧辭典（櫻桃）貳圓○近世畸人傳（佐藤註）八十○むら竹（篁村）七册貳圓五拾○婦人と犯罪（文明協會本）壹圓五拾錢聲曲自在（博文館）八十○ハウプトマン（元版・鷗外著）一圓○破戒（藤村、元版）壹圓八拾○春（同、同）壹圓五拾○社會主義評論（河上肇、讀賣新聞社刊）五十錢歌舞伎一四七號三十錢藝苑雜稿（岩村）參圓八拾錢史學雜誌第二十六編第五より第二十八編九まで二十九册參圓錢淨瑠璃註釋（山本、絕）二册揃壹圓三十錢○近松門左衛門（塚越）八十○古事談（史籍集覽本）三册九十。

大正十四年五月二十八日印刷
大正十四年六月一日發行
江戸軟派研究　別册第二
本冊ニ限リ一部賣　定價參拾錢　送費貳錢

大正十四年六月二十八日印刷
大正十四年七月一日發行
貳編第五冊（通巻三十四冊）

本文

驅蠹のひま

女男色遊―穉平家花村―毬歌國字解―新刻圖彙―春遊輿―千羽鶴―風流友世車―運開扇花香―兒童文珠稚敎訓―無厨庖即席料理―五人切西瓜斬賣―大通多奈於呂志―野夫鑑―貞烈竹の節談―春雨日記―松亭漫筆―輿歌六々集。

増井彙齋が著作

初代一九の「旅眼石」

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第五冊

初代一九の「旅眼石」

曩に江戸軟派叢書初編で、自分の飜刻した「馬士の歌袋」は、其後發見する所に據ると、博文館文藝叢書本の膝栗毛全集（饗庭氏訂）に、同名、但し袋を囊とす）の下に飜刻されてゐた。然るに其後更に神戸の潁原退藏氏藏本「旅眼石」を借覽するに及んで、この本「馬士の歌袋」と殆ど同本、題名と序と本文の一二丁のみ相違せるを知つた。しかも此の旅眼石には明らかに、自序中に享和壬戌の記入がある。即ち享和二年の稿たる事明らかであるが、即ち此等を綜合すると、此の「馬士の歌袋」は、旅眼石の改題本であり、後版であるのであるから自分が「馬士の歌袋」を飜刻した責任上、此の潁原氏本（即ち初版本）の自序題詩、凡例並びに「馬士の歌袋」に欠けたる初二丁の全文を掲げて、世に傳へようと思ふのである。以下折々註をもて丁數の異同を示していかう。

「尚、江戸軟派叢書四編巻尾の、同「初編補遺を参照せられたし。」

○

表紙、青。中本。外題「南總紀行旅眼石」。

序

さゝ鳴のうくひすもあら玉の春たつかさに哥口をしめしてさえつり水にすたく蛙もあらかれの土これかへす田のくろにあつまりてたはれうたの會をやすらむくつかたく\にかふりこさはのとりかなくあつまふりの歌ふくろひらけしより（以上、序一の表）よにひろこりて犬うつわらはむしろうろ翁まてこの道くさの種うふることゝなむおのれも千秋のつらねにうち交りて今やふもとのちりひちよりたはれ哥の道しる石のみきに左なはせありきぬされや去年の春明ほのゝ紫句ふふさくにゝ杖をひきたるも鹿島香（以上、序一ノ裏）取息栖のみつのやしろに詣侍らん事をおもふにこそそれか中に羈旅のよしなしことをよみ出たるうた將風土のさまのことやうなる名ところのあやしきまてかいつけたりしを茲に書肆の乞ふにまかせてひとまきのとちものとなしたるはいさおこかましくも（以上、序二ノ表）おのれにけなき

わさおきならすや

享和壬戌初春　自誌（以上序二ノ裏）

〔この享和壬戌は、同二年である。〕

握杖回跡雲
水僧記事蟲
出頭陀囊
大喜陸稿□□（以上、序三の表）

〔此の序三の表、松葉散らしの緣をとりたる角の中に、右の如き体裁に刻す〕

凡例

一此に著すものは。當意の即興を詮として。其部言っ手爾をはの拙さは。概落首体に相同じ。仍て此道に名たゝる。君子の鏡に備ふべくもあらず。只兒女の爲に。悉く書を以まうけこ。是に投ぜむことを欲す。是を以て。視る人の呰言は。敢て予が非とするにも。足らざるべし。

一幽僻佳境の奇事珍話等は。見聞に任せて誌す。就中木城。松岸。潮来。等の倡家遊戯の風流。遊女の風情を口づさみて。舊時の殘響をおもふ而已

一山川の佳景。風土の秀麗なるは。予があらはす。總行奇談に精しければ。此に強て詳にせず。

已上〔以上、總振假名附、序三の裏〕

〔此の凡例中の自記、並に前の題詩によれば彼に、頭陀囊、及び總行奇談などの此の本以前の著があつたやうである。〕

〔以下、本文〕

南總紀行旅眼石（たびすゞり）　十編舎戲著

發　語

こゝしむつきの末つかた假にしもあらず。おもふことのありて。常陸。しもつふさのうちなる。鹿島。香取。息栖の。みつのみやしろに。詣侍らむとて。旅のまうけ。あらましにものし侍りて。なには江のよしあしくとも。おもひたつ日をきちにちとなしつゝ。鳥がなく。あづまのみやこをあさになし。玉くしげふたつの國の橋をわたり。立川を（原長州ウラへ）（以上、本

驅蠹のひま

驅蠹のひま〳〵に、名の通らぬ零本ではあるが、ついでに記錄しておくことも何かの足しにならうかと以下書いつけておく。雜種、（凡て未飜刻）主に年代順。一部分である。

○

一の卷　　刊行年代未詳

○豆右衛門後日文男色遊

横中本。豆男物の一種である。後日とあれば前編五卷（?）は此の以前にあること必定。この後日の一之卷の目次如左。

あがり膳すはつた胞衣の紋違ひ

奥勤の上﨟は大社の帳はづれ　京の妾は誰が蒔し戀の種

大事の役めを一のみにする大盃

相撲取並の御奉公○百貫○○

給金はかつかうより高い鼻自慢　どこへ出ても恥はかゝぬ冬○○○し　○○ありく御伽男の○○つけ實

役めは鵜つかひ同前の身喰ぬ殺生

秋の夜の長○夢にさへみぬ殿子のおもかげ　世界の後家

大將いたづらの旗頭　氣まゝに○○○ぬ床の關守

晝の女夫いさかひ○軍の○○

男を尻に敷銀弓矢八貫目　○あまつてりんきさせぬお内儀樣　城郭をかためる謀斗の作病。

横本、半丁が十五行づゝ。繪ヒラキ三圖入。表紙靑。恐らくは例の自笑作、寶永板、「魂膽色遊懷男」五冊の後編か。全丁數目次とも二十二丁。

○源平稚太平記一稚平家花槻　上一冊　享保二年板

小本。外題が皆一樣ではない。序の所には、源平稚（この本、稚を凡て雅とせり）太平記とあり、本文の始めには、源平繪本花かいらきとあり、柱は平家とある。表紙外題は、前記の如し。內容は、稚說（どき）の平家物語といつたもの。畫が古雅である。ヒラキ九圖入。全丁數序一、本文一八計一九。內容は、きをん女御淸もり出生記、忠もり天上のやみ討、淸盛くまの山參詣の事、淸もり榮花、しゝが谷むほんのくわだて、藏人守行つな訴人、流にんの事、しゆんくはん有王にたいめん、山門御こしふり、以上である。序文の筆者は、遊童人といふ署名であるが、その序によつて此の本「六の卷と分ち源平おさな太平記」としたことが分る。遊童人の自畫作であらう。それにしても遊童人とは誰人か。畫は、鳥居派か。本文、半丁が十行づゝ、文字は例の孤本流。

○毬歌國字解　全一冊　刊行年代未詳

半紙本、刊行年代不詳。見返しには、潘吉凱先生學、毬歌（てまりうた）國字解、天窓閣藏と三行にある。嘗て外骨氏が、この著を近松門左衞門作だと傳へてゐるがとその著（「猥褻と科學」の中）に說かれてゐたが、外骨氏も不信であつたやうに、自分も門左とは信じない。初めに、墨客鄕といへる男の題が一丁ある。漢文である。次に、序ニ古文手毬詞ーとあつて、同じく序一丁、牟陽　潘吉凱選ス.

とある。この序によると、椀久の塚を毀つて、中に得たる一書といふのである。さうして「余久が斎觴顛と友とし善し、其書を悉すことを得たり、此に附記す」(原漢文)とあるが、これも余り宛(あて)にならぬことは、その椀久の塚を掘つたのが、魯の驕王といふのである。つまり古文孝經の眞似、シヤレであらう。結局この濡古凱(濡は姓らしい)氏の戯著であらう。椀久に假作云々が眞僞何れにもせよ、とにかく椀久以後のものたることは無論。(椀久は、實事譚には年次不明。浪華名家墓所記」には、延寶五年九月七日歿とある。)元祿享保が活躍期の門左に之を結び付けるも一理あるが、これぱかりは可笑しからう。次に二丁、引証書目がある。本文は第四丁より始まる。内容は、正月の火水始(ひめ)めより、節分に至る。徒歌といふが、これが支那時文風に書かれてはゐるが、實は和文の強いての漢譯、(そのノリ假名がしぜん手毬歌の如く、韻律を踏んでゐる。)それを更に片假名交りの國文に、故事故實をしかつめらしく引証して訓じてゐる。本歌、注とも、暗示に富んだ、ヱロチシズムである。全丁數、題一丁、序以下二十丁計二十一丁。(内、本文は第四丁より二十丁迄)末に、龜鶴千萬年、春王正月、手まりつく日、一二三四五六藏版と、四行にある。表紙、黒みがゝつた青、布目あり。

○新刻圖彙　一　明和六年版

半紙本一冊、はじめに、不知足軒書とある序が一丁ある。この序に、己丑初春とある、即ち明和六年の己丑であらう。即ち此の不知足軒は、不知足(不知是ともいふ)散人と同人、例

の小松百龜であることは無論。（江戸軟派研究、初編第二十五、二十六、二十七參照。）さて此の序には、「（前略）有レ客　投ニ圖書一請ニ參考一、余不レ得レ止校合一過而以授レ之、此爲レ序」とある。客とあり、授レ之とあれど、これも自ら投じ自ら授けてゐるのではなからうか。次に古圖彙の序として、一丁半（三面）あり、その終りに、時や貞享三年彌生中の五日、洛下の野人無色軒三白居士、みづから序とある。これが全文は、好色訓蒙圖彙の序であらう。（但し書体は、「聞上手」、「艶道俗說辯」等共通の百龜の筆である。）次に凡例一丁半（三面）がある。この凡例、初版「好色訓蒙圖彙」に闕くるもの、即ちこの明和版の來歷を記すものなれば、左にその全文を載せておかう。

凡例

一貞享の比洛陽の無色軒好色圖彙を撰む畫工は吉田半兵衛圖レ之其功勉めたりといへ共今を以て見れば繪は板天神のごとく文も亦むかしの諺語にて解しがたく二三の小兒すら其圖を見るに忍びず捧腹してこれを捨つ當世枕繪の多き諸名畫筆を盡して艶色を寫し人をして畫女に命をむしらしむ詞花言葉又盡さざるなし盛哉好色の書世に行るゝや棟に積牛に汗すしかりといへどもかの貞享訓蒙の如き書を見ず近世大全といふ書出るといへども美盡して未レ盡レ善余於レ爰嘆息して先生不知足翁に乞てあらたに參考せしめ急に催して梓に壽す

一器財肉具の圖は好色の末書どもに往々載るといへども此書に欠べきにあらざれば畧圖してその紀原を尋ぬ

一和歌文章は好色の先務なりしかりといへども長きをいとひて此書にのせず余が艶書軌範に悉し追て印行すべし

一遊女野郎等の賣色の諸分はその名目を擧て詳にせず後篇を待て委く述べし

一閨房の圖大概之を揭ぐ名目の末に淫詞をのべ圖每に淫語を加へて閨遊の具に備ふ

一書肆剞劂の功をいそいで草稿早卒に成ル故にことば簡に考證疎にして見聞いまだ廣からずおそらくは遺缺するも猶多く誤り亦少からじ後の君子の訂正希ふのみ

東　陽　悦　麿　識

以上、序の全四丁である。以下本文、はじめに、訓蒙好色圖彙卷之一、不知足軒刪補、無色軒編輯、悦麻呂校訂、木公齋圖書とある。この中、不知足は、百龜の別號。悦麻呂も恐らく同人。（現に、悦麿の凡例中の、余が艶色軌範といへるは、同じく不知足の作たる艶書式と同一の物ではなからうか。（研究初一十五、俗說辯序を見よ。）殊に、艶道俗說辯も、悦丸梓とある、即ち悦麿、悦丸、不知足、凡て百龜の分身であらう。）木公齋の圖書とは、木公は松、即ち小松の自分の姓を匿せること無論である。即ち不知足は愈々百龜たること明確となつた譯である。以下、天象、地儀、艸木、禽獸、の三篇。天象は七夕二星、夜這星。地儀は、領巾振山、望夫石、妹背山、旦也岡、陰陽石。艸木は、連理枝、女郎花、定家かづら、相思木、想思艸。禽獸は、戀おしへ鳥、比翼鳥、鴛鴦、鹿、山獺、などゝある。こゝろ〳〵圖案的な、正確な手法を守つた圖を挿んでゐる。中々閨房の情、淫語などに至らぬ先に終つてゐる。此本、何冊ありや無論未詳。尙、貞享の好色圖彙本と如何の異同ありやも未考。

○春　遊　興　全一冊　明和四年版

中本型一冊。見返しに、孤立道人譯、春遊興、金華堂壽梓と三行にある。はじめに京都圖南

子といへる男の序二丁、それに丁亥春三月とある。即ち明和四年の板行である。（尚、本文末自書の中にも明和四年春二月五日とある。）序にいふが如く、「今古の童謡を譯して以て詩と爲し」（原漢文）たものである。次に自序の如きもの一丁、（署名なし）以下本文、末に自書、及び附尾數章、最後に東都源輝と署名せる跋一丁、全丁數序跋本文卷尾とも二十四。作者は、增上寺の僧、釋大我といへる者である。

短かい例をいふと、

童謡にこなたおもへはてる日もくもるさへた月夜もやみとなるといふを記す

寤寐思ニヘバ二君子ヲ一、優然トシテ暉日モ晻シ、踟躕シテ搔レ首ヲ時ニ明月懸テレ天ニ闇シ

本文、罫を引き、假名の童謡は一罫に二行にて入れ、譯詩は、凡て一罫半。唐本好み。

○千　羽　鶴　　下一冊　　刊行年代未詳

外題亦不詳である。柱に「せんはのつる」とある。富川房信畫と中にある。即ち黄表紙の先駆、青本の一種であらう。似よりたる外題、「小説年表」等になし。此本「せんはのつる」の下卷たることは、丁數が六より十なるによりて明らけし。曾我兄弟に材を藉りたるもの也。每葉挿繪、用紙、例の極めて粗悪也。

○風　流　夜　世　草　　下一冊　　安永五年版

柱には「はしか」とあり。但し、此卷はじめに、「大阪下り女ちからわざ　ともよ」と幟を建て、喜瀬川

改めともよとなりて、女力業を見する件あり。これによつて、風流友世車の上下十葉ならんと思はる。〔巻尾に作者東西南北迯、鳥居清經畫とあり。謂ふ所、朝倉氏小説年表の風流友世軍二巻といへると吻合す。著者畫者また同樣。〕梗概は、喜瀬川改め友世の看板をかゝげた見世物小屋の木戸。次にその舞臺、棧敷に痲疹道人が來てゐる、友世の美貌と力に見惚れてゐるのだ。この痲疹道人は當時流行つたはしかを偶人化したもの、蠻國より來たとある。次は、白木屋お駒斷罪の場で、當時惡病の基たる痲疹道人を退治るものならば、一命助けとらさうと代官が情。次は、喜瀬川のともよが、白木屋庄兵衞方へ訪れる。才三郎に馴染んだ喜瀬川は、庄兵衞異腹の子お駒の姉と分る。兩女痲疹道人退治を約す。痲疹道人の住家の場。家來二人、いかにも蠻人風。お駒、色仕掛にて、道人が世界の人壽を縮め封じたる茶壺を覆がへす。痲疹大荒れ、そこへ尾花や才三郎が救ひに來る。最後才三郎お駒の祝言、喜瀬川はお部屋となつて、目出度計讃で終る。文詞細字にして多量、頗る前記の千羽鶴と趣を異にしてゐる。殊に、前者に比べて筋を複雜にせる點、千羽鶴(青本?)とは違うて、所謂黄表紙物の先驅をなしたことは明らか。此本、柱には、はしかとある。そのせゐでもなからうが面白いことは、この本、素人のいたづらと思へない程、綿密な筆彩色をもて、朱一彩の色どりを全斑に施してゐる。これ痲疹除けの意味であることは無論であるが、購賣者の有意識の書入としては、余りに巧みであると思はれるのは、如何。或は、痲疹除用として、當初より筆彩を施したものではなからう

か。但し既に板に色板が現はれてゐたことは謂ふ迄もないから、板元自身としては此の筆彩が可笑しい。兎に角痲疹の流行につれて、その禁厭に賣り出した草子たることは無論であらう。無論一種の際物である。此の點、黄表紙の或る特色を既に具備してゐるものと謂はれよう。

○運開扇花香　上下二冊合　天明四年板

春朗（北齋の前名）畫作の黄表紙。彼二十五歳時の作、黄表紙自畫作の四部目である。彼のまだ春章門下當時の作である。（春章門から自から去つたのは、その翌々年。）梗概をいふと、

都のさる公卿の姫君、家沒落して、惡家老中村某の爲に吉原へ百両に賣渡される。中村は行方知れずになる。此の中村の朋輩に、松元幸次郎（松本幸四郎を地口つたのである。彼だつて、若い時は、役者讃美の流俗を追つたのだ。中村もその意味に違ひない。）といふがあつて、いかにもして金子才覺して、姫君を救ひ出さんと、女房もろとも色々苦心する。とど幸次郎は、吉原へ太こ持に、女房お作は後家の体になり浮れ男の袖を引いて金銀工面なさんとはかる。先是、このお作の菩提寺の僧に、大ゆう（大友、これも役者の姓を借りてゐる。）といふがあつて、この僧或日、蜻蛉の睦み飛ぶを見て邪念を起してゐたが、折ふしその寺へ參詣に來たお作を見て、ぼつとりとしたる〇〇つき云々で色々と戯れる。お作はこの大友をまんまと欺す。餓有情の悲しさ、すつかり欺された大友は、有頂天、そこで寺の什器を持ち出して、古物買の中村此兵へ（此者、姫君を賣つた惡人也）へ賣渡す。此兵へは盜み物とは承知の上で買ひとる。大友は、これで作つた六十両餘りをお作に屆ける。お作、晩の首尾を假約束して返す。間もなく、大友が惡事、寺に分り、盜物を買つた此兵へもろとも村人どもに捕へられた所を、住僧の情で命助かり、追放となる。爰に幸二郎が兄、上方で酒問屋の番頭を勤めてゐたが、弟幸次郎が金子入用と聞き、五十両だけ賄つて江戸へ來り、新川へ立ちより樣子を聞けば、鴻の巢に住居する

さ聞き、黄昏を熊谷へさしかゝるさ、俄か強盜になつた此兵ヱ、大友の兩人に殺害される。アト、此兵ヱ、大友はこの金の分配で爭鬪、ごご大友此兵ヱを殺す。(以上上の卷)。よし原あふひや花おざ(花荻)さいへるが例の姬君でみな口勇次郎さいへる色男さ深く馴染んださある。現に、花荻が親しさうに、その部屋で手習稽古をしてゐる。「わつちがさうこふさんのまねをしんすからみなんしよ」さあるさ、「ありがてゑ〳〵」さ勇次郎の詞である。さうこふさんさは、澤田東江であらう。次は、大友が還俗して、名を千右ヱ門さ改め、煙管商賣の町人さなり、いろ〳〵儲けることあり、さらば燈籠見物に行かんさて仲の町に來り、花荻の道中を見て、ふら〳〵さなる。千右ヱ門は、大盡風に粧ほひ、名もかうのずや千右ヱ門さ紛はしく名乘り、取卷四五人連れてあふいやへ登樓、花荻をあげる。松元幸二郎も蓬萊屋錦藏さ名乘り、太こ持をつさめる。千右ヱ門は、花荻が唐樣を書くに俺も負けはしねへさ、扇子に文字を書く。それを錦藏に頂かす。次、勇次郎さ花荻、花荻が今宵來た千右ヱ門さいふ客に身請けされるので、大愁嘆。その場へ錦藏立出でゝ、夫婦が貯めたる百兩さ、千右ヱ門より盜みさつたる二百兩さ合せて三百兩を差出し、これで身請をなされませさいふ。兩人、恩は一生着ますぞえさ來る。こゝで、花荻さ幸二郎さ主從の名乘りが替される。花荻は、「すりや幼ないから介抱してくれた幸二郎であつたかいのう」さいふのである。次は、吉原土手で、錦藏さ千右ヱ門の出合。錦藏は、兄の敵さいふのである。熊谷で、兄の死骸の傍らに、自害さ見せかけた中村の死骸さ、遺書の中村の手蹟があつたが、中村は昔の朋輩なれば、文字は見覺えあるが、似ても似つかず、然るに今宵、太鼓持の我に與へたうぬが扇子の手蹟こそ、中村の遺書さ寸分たがはぬ。さてこそ兄をうぬらが二人で殺し、慾心起して相棒中村奴を殺し、中村自害さ見せかけたはうぬの業。すなはち、兄の仇、人殺の罪人はうぬださいふのである。千右ヱ門は、盜まれた金の詮議もそこ〳〵、逃げて歸る途中山下の方へ來りしに、ある茶屋に花荻の姿を見かけしより、やけになり、それを連れ出し立ち退かんさする。さ、主の女房が來て邪魔立をする。つく〴〵見れば以前自分を欺したお作故、運氣さなつて、刀を拔き、すた〳〵に斬る。所へ亭主の錦藏立返り、千右衛門を斬つて

恨を晴すアト、勇二郎花萩の祝言、勅勘ありて勇二郎、家名をつぎ、又花おぎは、女ながらも能書の譽れあれば、

尙ほ叡慮に叶つたといふのである。

北齋自畫作の初期の作風を傳へる爲に、比較的悉しく紹介した。畫は、春朗の落欵がなければ、無論春章かと思はるゝもの、畫に於て春章を摸したことの著しいのが、先づ肯ける。

○兒童文珠稚敎訓　三冊合　寛政十三(享和元)年板

時太郎可候作畫の署名になる、同じく北齋黄表紙の一。序に、猿のつなぎのあるので有名である。下卷の第一に、「へたさくしや可候」として、自分を畫いてゐる。次には、「そろべくたび立」として、同じく自畫像である。これが此の作の特色といへば特色であらう。畫は旣に北齋風になりきつてゐる。(梗概略す)

○無厨庵即席料理　三冊　享和三年板

同じく時太郎可候の北齋黄表紙もの。第一丁表に、自畫像ありて、蔦重におくつた、口上の手紙が掲げられてゐる。この作、此の扉でまた有名である。作は以前の「花扇」とは代つて、物語風より純滑稽味に進んできてゐる。料理に現れる、飯類、野菜、酒類、味噌、一切の擬人である。飯の部、汁の部、酒の部、茶菓子の部、香の物の部。(以上上卷)。ちよこの部、ひらの部、すの物の部、とりざかなの部、吸物の部。(以上中卷)。同吸物の部、鍋燒の部、こくせうの部、や

きものの部等（下卷）といふ風である。

○五人切西瓜斬賣　三冊合　享和四（文化元年）年板

京傳作長喜の畵である。此の本所藏本、後の再板かとも思はれるが、時々かゝる体裁の物を見うける所より、初版本にして、且つ黄表紙末期にはかゝる体裁かとも思はれる、未考。とにかく三冊の合本であつて、卷首には別に五丁の自序が附してある。表紙は、黄ではなく、寧ろ赤みがゝつた茶表紙で、貼外題は、左上に、細長く青色紙で、墨刷である。讀本かと間違へられさうなもの。寧ろ滑稽本かとも思はれるもの。然し内容は黄表紙風である。（梗概略）。全丁數、序とも二十丁。大きさ、普通の黄表紙物より竪に於て稍長し。（この本、最近の朝倉屋の書目に出てゐて同じく巾一となり、三冊合本の体であることを示してゐる。さすれば、この黄表紙凡て所謂合卷風に既になりつゝあつたのではなからうか。序でに、朝倉屋の右書目に、此の本七圓とあるが、これは可驚高値である。内容、畵樣、無論黄表紙の爛熟を示す物ではなく、体裁に於て、自分の判斷にして誤らない限りは、合卷と純黄表紙との楔子であつて、然程の値打があるとは思へない。）

○大通多名於路志　全一冊　刊行年代未詳

閑言樂山人の自序三丁不明の跋二丁とも全丁數廿三丁。小本洒落本。内容、謠がゝりの物で、ワキ、長ばをり鶸茶のひも綟きせる持。シテ、惣髮なでつけ唐しやうぞく扇子持。さういつた二人の問答で、通の不通の粹の不粹の、當時の通人、唐人の寢言のありつたけを盡して、とゞ「樣がかわいてきたお茶でも給ヾヤせふ」に終る。諷刺に富んだ、物語を離れて寧ろ議論、

従つて情緒纒綿の描寫は缺けてゐる、風變りなものであるく粹學綱要といつたものであるゝ

○野　夫　鑑　　全一册　　天明七年刋

外題の感じから外れること夥しい作。野夫は、野暮ではない、甫醫のヤブである。四方山人（蜀山人）の序、（これに天明丁未のとし五月雨の比とあり。）二丁。駿陽竹室梧泉の序一丁。自序、駿陽東湖山人書の一丁。この四丁とも全丁數二十。本文の始めは、不仁野夫鑑とあり。梧泉の序中に「卿根木皮をあげつろひておのづから金玉の聲の聲す也」とある、さうした内容。中、歌麿畫（この落款極硬し。彼の初期の表徵）の圓頂の野夫姿を描く。作者、東湖山人は不詳。

○松の操第二輯貞烈竹の節談　　卷之上一册　　文政十二年刋

松の操物語（一筆庵可侯（英泉）の自畫作。）の前後六册の後編である。著者、南仙笑楚滿人（二代。初代春水）驛亭駒人（春水の變名らし。）の合作と稱す。挿五、卷頭ヒラキ三、本文中同二。丁數、琴通舍英賀（春水た書りとさいへり。）の序及口繪墨摺とも口五、本文廿二。それはいゝが、この本、製本一切半紙本たる事である。でなければ此んな零本を云々する價値は無論ないのである。半紙本の人情本、現に此の本、表紙、その外題等、凡てそれにつろくして大きく、用紙一切半紙である。唯、文と繪の輪廓は、普通人情本の物に殆ど近い。どうした本であらうか。人情本に半紙は絶對にないことは無論であるが、現に此の證據がある。唯揃本でないから何ともいへないが、刷の上乘からいふ

と再板では無論ない。見本の仕立か、何であらう。それにしても外題紙は立派に半紙本表紙の大きさである。これがまた可笑しい。つまらぬ事かは知らぬが、年來の疑問の一。

○春　雨　日　記　　初、貳、參九册　　天保五、六、七年刊

著者、初代春水（狂訓亭主人と署す）一筆庵英泉畫。「年表」には、十二冊とあれど、家藏本はこの三編九冊。特筆すべきは、これが尾張東壁堂の版たることである。東壁堂は、所謂永東。（名古屋本町。永樂屋東四郎）北齋漫畫、神事行燈、浮世書譜等の板元を以て知らる。そこよりこの初代春水の人情本も出たのである。此の本、「年表」に出板年代未詳の部に挿入せり。今、次編を見ると、序の終りに、于時天保六未春、金龍山人狂訓亭、爲永春水誌とあれば、天保六の板行たることは論ない。三編には、同じく序に、「于時天保七申の孟陽云々」とある。初編は不明なれど、遡つて天保五であらう。年代明瞭故に一寸。

○松　亭　漫　筆　　上下二卷　　嘉永三年版

著者、松亭金水。大本二冊、无名翁（英泉）の挿ヱ、上下六圖のヒラキあり。上卷、序、口繪、目錄計三丁、本文二十九。下卷二十六丁。板元、大阪河内屋茂兵衛（群玉堂）。上之卷目次、芭蕉翁三日月の句、本地垂跡兩部習合、觀物（みせ）、鼠火災を避（さくる）、觀音姦婦を輔る（たすく）、酒と茶、附り得失。下之卷、圍棋、昔噺の說、放生會、警枕、人中長きは壽也（いのちながし）、酒呑童子、鎌倉權五郎景政、蜀山

入話脈、文字を可レ敬。以上、餘り面白くもない。唯、人情本の中堅作者金水（この本、金水道人（中村定保[illegible]）とある）にも、此種隨筆の著があつて、京傳、馬琴、種彥、京山の徒を摸した、流石に春水（初代）には無之かつた、うい奴と褒めて貰ひたさのうぶな心情仄めくものとして、予は買ひたいのである。

○興歌六々集　全一冊　天保十一年刊

最後に狂歌本廣重畫を一冊擧げる。此の六々集は、一名新選興歌三十六歌仙とも云ふ。見返しに、芍藥亭宗匠、千柳亭大人、鳳鳴閣大人並撰。新選興歌三十六歌仙。天保庚子春發兌、催主東嶺庵樂水云々の文字が見られる。次、狂歌六々集序（七十三齡、芍藥亭）一丁。六々集引（鳳鳴閣主人）一丁。次、畫像（彩色）、北溪畫にて初丁表は癸任卿、以下所謂此集の三十六歌仙。（以上、癸任卿の半丁全面とも六丁半。）六丁の裏より畫、（彩色）此の畫廣重の執筆。ヒラキ二面の圖にて十圖。以上この畫像、畫の最終丁の裏を除き、十丁。但し畫十丁の裏より本文。本文は、花、郭公、月、逢戀、天象、以上畫の最終丁を除き二十丁。總計序以下三十八丁、半紙本也。廣重の畫、彼の爛熟期に中しをれば、始めて見る玄妙醇化の筆域、彼が花を愛し雪を愛した證左は計十圖の中、花三圖、雪三圖あるに仍りて知られる。雪の二圖、最も妙、普通板畫とはまた特殊な無韻の詩情である。

増井粂齋が著作

粂齋のことは、既に二三謂うたが、（本誌貳編第三冊（野圃の玉子）。第四冊（増井粂齋なごの事）。別冊第一（市場氏稿の名古屋の酒落本）。）其後に得た彼の刋本著作（津島土産膝栗毛）もあれば、更に綜合的に書いつけておかう。

○

増井粂齋傳。不詳を遺憾とする。文化頃、主に大惣貸本用の稿本戯著を書いてゐた一種當時の通士、地方作者、暇人の生活を送つてゐた、身元一切不明。士分の輕輩であつたか、又は、彼が兄事した（？）椒芽田樂の如く一市井醫であつたか、又は町人出か。才は、（主に摸倣ではあつたが）相應にあり、文辭も猥雜ながらにあつた、とにかく當時文化文政期の名古屋俗文學壇の錚々（此の讃辭は、やゝ滑稽な感じがするが）たるものであらう。初代十返舎一九とも相識であつた。（後掲、津島土産序を見よ。）。即ち當時江都文壇の覇たる此の一九と相識であつた、（寧ろ、師事に近きものがあつたと見るべきであらう。彼と一九との相識は、彼の作津島土産の文化十二年頃であるか否かは疑問であるが、古くより私淑（？）してゐた識は、彼の野圃の玉子は、明らかに一九の享和元年板「野良の玉子」を踏襲したものであり、尚、後に津島土産の、膝栗毛に倣へるものあるに於てをやである。津島土産に就ては、尚、後に言ふべし。）親しい交渉にゐた。これだけでも既に彼の位置を名古屋俗文學界に向上せしむるに足る、まして彼の一作（刋本「津島土産」）に、初代一九が序を成してゐるに於てをや。

世評の一斑。嚴とは言へないが、若干の材料としては、偶然、「野圃の玉子」（彼の稿本）の表

紙裏に、時人が落書した左の詞がある。

評曰、石橋庵主人（□齋が事也「久藏」）惜哉若而好善文、然博才早罷作、此后（種々カ）種作書至後年必可爲一奇人。

（早罷作は、早く作を罷むか。但し後に津島土產の如き作あり。決して早く罷めたるには非ず。惜哉さは、早く作を罷むるを惜んでゐるのであらうか。）

即ち高く評價されたものである。後年必可爲一奇人とある此の語の通り、大正の年次、自分の筆によつて此に彼の名が活字となり、現在日本文化の先覺たる諸賢の眼に觸れしめてゐるのである。即ちこの落書者、地下に己が偶筆、好識を爲してゐることに驚いてゐるか奈何か。

尙、同じく「野圃の玉子」の卷頭に、高名壷楊樹兒下嵐翠といへるの題書に、（正札請合とある角印を捺せり。）

這些冊兒則實南濱（久藏。熱田神戸傳馬の遊里の謂也。例の品川を擬したるならん。）遊春的諸小史中第一書也嗚呼增井嗚呼豹惠干前無作者干後無作者而已（原、此の圏點なし。）

とある、此の極讚辭は、無論樂屋褒めではあらうから大に割引の要はあるが、とにかく當時素人作者の雄たるものではあつたらう。「野圃の玉子」卷末の無名山人跋にも、

「（前略）奇也妙なり、先生は呼嗚文聖乃徒乎、梅干乎、主人逆鱗曰、予を梅干トいふは我をしわくたにしたるか、予對曰左にあらず、主人曰如何、予打手答、ア、スイナル哉」

とある。夫程スイか否か、小梅ぐらゐの酸味はあつたであらう。其他此類なほ、つら水の野圃の玉子の序（いさゝか趣向のすもりなく剝つて見せたる作意の妙。みる人是はさ否打すべし云々など。）如きものがある。

年齡。不明であるが、此の「野圃の玉子」當時、左程の年老ではなかつたらう。その證は、前

にもあつた、若而好善文とあつた通り、當時なほ無分別者の仲間たるに相應(ふさ)はしい、客氣の年配であつたらう。(即ち初代一九などよりは勿論の年少、彼が此に師事したらうと謂うた譯である。)

彼の性格。才あるものゝ常、多少の(否、或は大の)己惚氣はあつたらう。「野圃の玉子」の卷尾に、滿壽井先生名伊兵衞云々といへると同筆蹟のもので落書がある。即ち左の如きもの。

滿壽井山人年若キ時ヨリ行過甚シ仍時人是己惚主人ト云

とある。(註――此の行過は、ゆきすぎ、いきすぎと訓る。出しやばり者、臆面なし、輕卒、生意氣の感じに近き者をいふ方言也。)如此き己惚氣は無論彼にあつたであらう。臆面なきもの、それ自身は常に幸福也。彼も亦此の自己陶醉の幸福漢であつたであらう。

葉齋傳。名古屋の戲作者。姓は増井、(戲作には往々万壽井と記す。或は滿壽井と。)名は伊兵衞(「野圃の玉子」の卷尾、表紙裏の落書に據る。)、諱は時恭(一九が東海道膝栗毛五編上の挿繪の題署名に據る。)石橋菴と號す。(稿本「野圃の玉子」の自序に據る。)葉齋子亦同じ。字は豹惠(「野圃の玉子の卷尾落書に據る。」)、又時人、己惚主人とも綽(あだな)す。(「野圃の玉子の卷尾の落書に據る。」)文化頃、稿本、刊本の戲著、(主に熱田娼(おかめ)女に關する一種の洒落本)の著述多し。生歿年不詳。

とでもいふべきであらう。その交友關係を擧ぐるに、初代十返舍一九(寡あ、師事せり。増井の野圃の玉子が一九の野良の玉子を模せる事前にいへり。兎に角師弟に近かりしか。現に、一九、後進誘掖の意にて、刊本「津島土産膝栗毛」に序す。)、楳茅田樂(同時代の名古屋劇業的戲作者の一。稿刊本の小説、通あり。葉齋、田樂の著「□意鈔」(稿本)に序す。)、牧墨僊(北齋門人。文化十二年版の刊本「名古屋見物」に挿繪し、中、楳茅田樂の口繪の賛あれば、墨僊、又、葉齋とも交誼ありしならんと思ふ也。)其他、燈臺元暗、南瓜蔓人、蛙面水、(以上、凡て東海道膝栗毛五編上の中に、その挿畫に狂歌を賛せり。即ち當時の狂歌師の亞流。倚、蛙面水は、咬菜菴つら水として、野圃の玉子に序せり。)などとも、交遊ありしなるべ

く、且つ「天岩戸」(稿本享和元年の自序等の序あり。)の著者旭亭圭人(他に、小本にして、落噺の列本二三あり。)。稿本「輕世界四十八手」(寛政十二年作。いづれも著者なし。この合作)の合作者、在雅亭　光、於仁茂十七、木下山人など、或は花林堂紫旦(稿本、南驛夜光珠の著。「野園の玉子」に描く。)など、(此中一人にして何人なも兼ねたるもあるべし。)その關係の中に描くべきものであらうか。(以上、野園玉子以外の操出については、市場直二郎氏の京大本探索の報告に據る所多し。)

○棄齋の著作目録

一、(稿本)野園の玉子　初、中、後三巻合　文化二年作

二、(同)南驛夜光珠　上下二巻　文化四年作

○此の南驛夜光珠は、江戸軟派研究第三册の余の記述には下巻一册也とせり。是れ予が記述の根據、忍頂寺氏本は所謂大惣本の貸稿本の一にして、外題に明らかに下とあり、本文はじめにも下之巻と記せるが故也。然るに後に(本誌別册第一)市場氏の謂ふ所は、京大藏書本にも南驛夜光珠の稿本あり、是れ一册なり。さし、作者の序、及び紫旦の口繪を附けたりと報ぜらるゝに據れば、即ち京大本は、此の夜光珠上巻にして、此の忍頂寺氏本下巻なるべし。現に、此の下巻、表紙、例の大惣の平假名分けの番號ありて、上欠と明記せり。當時、既に此の上巻散佚せしものならんか。殊に作者自ら下之巻と書れるに於て論なし。即ち先づ、此本、上下二巻ならんと定む。

三、(刊本)津島土産膝栗毛　上下二巻　文化十二年版

▽著作の眞僞疑はしきもの

一、滑稽考(こうけいこう)(野園の玉子後編)(野園の玉子の奥書に據る。)

二、里鳥可愛(かあい)のうら(野園の玉子の奥書に、来春出来とあり。)

三、當世噺の問屋(四方の好士の新しきおとしばなしを集め、書林大野や惣八へ出し申候こと、同奥書にあり。尚、外題横に近刻とあり。)

四、南陌翠楊柳　完(夜光珠下巻の奥書に據る。)

五、僞客融通一覽　完(同)

以上で、増井棄齋、個人の紹介は略總れりとして、さて次に最近獲たる彼の刊本の唯一(現在の予の智識なり。)たる津島土産膝栗毛の解説に言及しよう。一九が之に序せる點もあり、彼の名古屋洒落本系

以外、滑稽本作者たる面目の紹介である。

津島土産膝栗毛上編下編二卷である。自分所藏のものは、明治二十二年四月求版、名古屋若山文三郎(和田屋)といふの發行に係る、洋紙摺二冊本。但し、序以下本文、活字摺ならず、全元(もと)木版なり、即ち再摺本也。したがつて一九の序文また彼の例の筆癖歴如たるものがある。作者名は、石橋庵增井著。丁數、上編、序二丁、本文廿九。下編、三十一丁。本文、うんつくや太郎兵衛と、其の棒組の孫太と兩人、名古屋より津島(元、尾張海西郡。素盞嗚を祀る。例の津島祭として世に鳴る。現、海部郡。)に至る、途次の滑稽、惡戯、洒落の數々を作爲せしものである。狂歌を挿める所、內容形式共に一九の膝栗毛を摸して遠からずのものである。左にその序(一九署)の全文を擧げよう。

津島土産序

つしまみやけあり、そは竹の皮にも入れず、藁苞(わらづと)にもせずして、唯ひとひらの袋入となし、書林松花堂の賣弘る所なり、本家は石橋庵增井なる人の製するにて、初編の補(みせ)をひらきしより、排設(はいせつ)の美味(うまみ)口あたりよく、今歳(ことし)後篇の跡仕込を、ちよつとつまみて味ひたるに、奇妙な仕出しの滑稽方語、かのいやし坊の彌次郎兵衛も、舌打して頤(おとがい)を叩くへし。予感稱のあまりにかく

序することしかり

文化亥秋名護屋旅泊中

東都　十返舍一九題

に據ると、初版は、松華堂版。殊に好資料と謂ふべきは、文化亥（此年、同十二年）の秋には、一九が此の名古屋に來てゐたといふ、此の文末の記事である。文化十二年秋は丁度一九の木曾街道膝栗毛六編の板行せられた後である。無論永逗留ではなかつたらう。或は、例の体驗傳説の如く、自身木曾に行つた其の歸路又は往路でもあつたのか。〔六編の再自叙に、前年の秋より善光寺に參り、以後所々逍遥の意が書かれてゐる〕殊に面白きは、同年の春には、「名古屋見物道中膝栗毛」二冊（一名、四編の綴足）〔名古屋書肆觀竒堂版〕（東花元成作）が板行されてもゐるのである。とにかく此の間、藥齋や田樂、他の膝栗毛五編上の挿繪の賛をした（名古屋の）少壯連、或は四編の綴足の作者とも懇意になりつゝあつたのであらう。時に一九、五十二歲である。

此の序、三面、（一丁半）、附言半丁。著者の此の附言によれば、「津島土產の別號に、祇園の二字」を借りたとある。尙、「表題を祇園守とこぢ付たり」ともある。別名、祇園守といふか。內容は、二卷ともところどころに挿繪のヒラキあり、玉鳳、（或は玉齋）、華溪、の落款がある。內容は、辛抱しいしい通讀したが、一九おん大の作の輪廓を忠實に摸して、彼よりより多く下卑たりといはうか。寧ろ方言、風俗の點に於て、該時代其方面の好資料。內容のヒントに就ては、おん大の膝栗毛もさることながら、一面大阪二輪加などの趣向（篇中の惡じやれに於て上方系統のやう思はる。）よりも來すや、さうした氣分の著しいのを認めるのである。

〔補遺〕尙、藥齋と號した所以は、彼の名、伊兵衛の伊から來てゐよう。卽ち同音に借りたのである。尙、柳芽田樂は、寧ろ彼の先輩、彼が兄事したことは、疑ひない。現に、田樂には、馬琴の紹介もて享和元年、東都版「挑燈庫闇の七扮」三冊（重政畫）の刊行あることから考へても。尙々、田樂は、名古屋の市井醫、本名は神谷剛甫である。

（表表紙ウラより）

文壹の表）ますぐに。ほそ竹のしもさをすゝめて。やがてさかさいのわたしを。あなたにこへて。たどり行ほどに。朝もよゐ。如月ちかく。所まだらに。きへのころ。野つらの雪に。若くさのいさ青う見へたる。うつはりの雫。ほろ〳〵さきこへて。糸あそぶ空のうらゝかなるに。おのれごちの。こゝろにかゝる雲もなし。くはへぎせる。はゞかるべくもあらねば。すり火はなたず。たばこのけふり。霞むかさおもほゆるばかりになん。はやくも市川の御關所をうち過けるに（以上、本文壹の裏）

〔次に、十返舍一九さ僕太吉の旅姿の圖あり茶水讃さ歎す。太吉、肩に、天秤の前後に荷を結びたるを負ひ、一九、頭巾を冠り、合羽着用、脇差一本、手に笻をもてり。背景は、鳴子の繩わたす田「我ながらりゝしゝ見ゆるあしもさはこれあつらへの紺のたびたち」さ賛あり。この一九の表貌、頗る彼の自畫作「附會案文」（文化元年）の自畫像さ相似したり、彼の背像の一さして信ずるに近きか。此の挿圖半面、本文二の表〕

舟ぼりのわたりより。道づれになりたるひさは。おなじたはれ哥の道くさくふ。厩の豆成（うまやまめなり）さいへる人のよし。これかれをかたり合ッゝ行徳のささにいたり。笹屋さいへるに。やすらひはべる。こゝはうごんの名所にて。ゆきゝの人。あしをさゞめ。うごんそば切。たうべんこさを。せちに乞ひあへれば。うつもきろもあるじひさり。いまたそのこしらへ。はてしもあらず見へはへれは

御てしゆの手うちのうごんまちかねて
いづれも首をながくのばせり

〔以上、本文二の裏。以下、予が讓刻「馬士の歌袋」本文第三丁表以下さ全く同一也。既に、此の本文第二丁の裏「乞ひあへれば。うつもきるも……」以下は、二本全く同一、同刻也。即ち、今ちく「旅眼石」本さ比較し來れば、改刻修補の跡が著しい。即ち「馬士」本は乞ひあへれば」の前までが、比較して太字で、角も大きく、乞ひあへれば以下の板木さ丁數さに、強いて合せようさした、附け合はせの跡歴然たりである。即ち「馬士」は、序の別丁數なく、直ちに本文の丁數にうつり、即ち「馬士」の序以下この「乞ひあへれば」までの二丁が、丁度「旅眼石」の本文二丁に相當させてゐるのである。さて、この「旅眼石」本文の第三丁以下、馬士の第三丁以下、凡て同板木、從つて卷尾も一切同樣、（奥附、共に無し）共に三十二丁にて終つてゐるのである。〕以上。

○寄贈紹介

演劇篇　石川巖編

書物往來叢書の第一輯、野郎虫垣下徒然草剝野老野郎三座詫の四篇合本である。野郎虫の他は、此が最初の活字であるさいふ。凡て初期の演劇の參考資料で、格別全部が美童所謂野郎の評判記類で、即ち當時士民の變態性欲的興味が窺はれる好資料でもある。校訂其他に於て定評ある石川氏の新著、江湖にお奬めする。（四六和、和綴、帙入、一三〇頁挿繪數個入。壹圓五拾錢。東京市本郷區千駄木町五十八、從吾所好社發行）

抄本日本永代藏　藤村作著

高校用さして編纂せられたものさいふ。校訂は、藤井氏の有朋堂文庫さ異同あり、また參照するに足る。卷頭、西鶴肖像一頁、附圖一頁、印刷製本頗る佳良也。（菊判本文七八頁八拾錢。東京市赤坂區傳馬町三ノ十一　至文堂）

□雜誌の部。國語さ國文學（七月號）大福光寺本方丈記に就て、萬葉集さ民謡この關係等。●歌舞伎（第二號）逍遙、青々園、紫偕鳳魚、清太郎氏等の「孤城落月」さ「三人吉三」に關するもの。仇討狂言の研究（木村錦花）等●國學院雜誌（六月號）。幕末志士の暴行さ其下手人（井野邊）、宇都保物語は鎌倉以後の偽作か（松下）等。●性の知識（六月號）●川柳譏錄（六月號）、三面子、花月、百樹、映絲諸氏の執筆。●長唄（第三號）鶴亀の研究、大正長唄史、新譯聲曲類纂等。●開化草紙（第二）、隨筆自鳴鐘（岩佐）、羅針盤（今）、開化チャリネ（夜話）（正岡）等。●墓碑史蹟研究（第二十一冊）

定價表		
一冊	廿五錢	郵税貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	税共
十二冊分	同貳圓八拾錢	

○郵券貳錢一割増の事　○照會は返信料添付の事

大正十四年六月二十八日印刷
大正十四年七月一日發行　【貳拾五錢】

編輯兼發行者　名古屋市東區東新町百五十七番地　尾崎久彌
印刷者　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　英比貞造
印刷所　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　扶桑社
發行所　名古屋市東區東新町一五七番地　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七二番

○著者より。軟派叢書四編は無事出來、既に一部の發送を終り候。○別著「江戸軟派雜考」も發禁の噂ありさて、心配罷在りしが、先月之も無事春陽堂より發市仕候。三女なつよも半月入院せしが、昨今は先づ安堵の狀に候。○叢書五編は、九月頃發行の豫定に候。先は。　二十四日

●江戸軟派叢書第四編出來●

尾崎久彌校訂並に編著

豐年舎蒲作述　**樂屋ばなし**　全

種彥作 國貞畫　**三津瀨川上品仕立**　全　**合一册**

尾崎久彌編　大津ゑぶし 落咄　**役者評判よせ**　全

表紙三色刷和紙和裝繪入
本文美濃判四ッ折五〇頁

定價一部七拾五錢
送費貳錢（書留九錢）

校訂者曰く。樂屋ばなしは逸名の人蒲作が作せる芝居道の一種の秘傳書。嘉永六年の稿也。類本無きに非れど、しかも醂刻本としては稀に、しかも此の本簡潔にして要を得たるを德とす。まして隨處珍說奇話を認むるに於てをや。無學者の爲せる有學の書也。殊に近松門左衞門の江戸より竹田出雲に送りたる狀といふもの（僞作ならんか）、面白し。三津瀨川上品仕立は、例の三津五郞と瀨川の追善册子の代表作、追隨作を多く出せるもの也。大種彥の流暢艷冶なる筆致は、此の假作物語にもよく顯れたり。本誌既載「お傳三津瀨川の三角關係」と併せ讀まば、感深からん。役者評判よせ一卷は、主に編者藏の噺本及び大津ゑぶしの中本小本瓦版の種々より役者評判に材を採りたるを主に蒐めたるもの也。俳優演技若しくは俳優生活の論評として、役者評判記類の裏を行くもの、皮肉、賞讃交々有り、又以て逸すべからざる好資料也。（七月一日既刊）

目次

解題●**樂屋ばなし**一册○狂言俳優の起り○所業藝數の事○關の扉の所作事○三ヶ津にかくれなき名人○時代狂言臺詞の故事引事○淨瑠璃狂言の節章句切三味線の乘方○顏の色取化粧の事○詞番ひの心得○間違ひ易き事○初心の時第一愼むべき事○俳優心がけべき事○淨瑠璃作者の一失○女形の心得○ふり附の事○近松門左衞門、出雲におくる狀○忠臣藏が事○淨瑠璃節の濫觴。●**三津瀨川上品仕立**（繪入）全一册●**役者評判よせ**一卷。大津ゑ節七章。柳ぶし一章。落咄、「狂言」以下十一話●附錄、江戸軟派叢書初編拾遺。

發行所　名古屋市東區東道町　振替名古屋九六七二　江戸軟派研究發行所

大正十四年六月二十八日印刷
大正十四年七月一日發行

定價貳拾五錢　送費貳錢

大正十四年七月二十八日印刷
大正十四年八月一日發行

貳編第六冊（通冊第三十五冊）

本文

浮世繪エロチシズム沿革誌
並に其目錄
増井梟齋の『津島土産』初編
和本手入れ漫談

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第六册

增井蕙齋の著作增補と「津島土産」初編

最近、市場直二郎氏より左の書簡に接した。いつも乍ら筆勞謝して余りある。

「あの御稿中、蕙齋著作目錄にまだ加ふべきものがある樣です。而も刊本です。或は津島土産と共に彼の乏しい戯作中の兩大關(刊本として)かも知れません。即ち「滑稽驛路梅」といふ書です。名の如く一九あたりの亞流らしいものですが、大分探しましたが今以て入手致しませぬ。或は御地あたりにはころがつて居はしますまいか。實はこの書は最初「一心學いろはいましめ」(天保四年巳春正月出板、尾張書林、玉野屋新右衛門、美濃屋伊六發兌)といふすこぶるカタイ本の卷尾の廣告で見ました。それには、

滑稽驛路梅 初編辰春出板 二編巳春出板 石橋菴增井著

とあります。之によれば、初編二編と出て居り、確に蕙齋の著の樣です。辰といふと天保三年、巳は翌年、即ち「いろはいましめ」の出た天保四年の樣です。で若しやと思つて、日本小説年表を見ましたがありません。次に新群書書目(中本書目)を見ると、やつぱり天保三年の所にあります。

滑稽驛路梅二 石橋菴增井作 梅亭華溪畫

所がどうもおかしいのは、天保三年に既に二册とあることです。或は初編が上下二册となつて居るのか、但しは初編二編で二册なのか判りません。或は二編は實際には出板されなかつたかも知れません。これは現物が出ればすぐ判ることです。

それからこの書は「津島土産」の板行からは、十七年も後のことです、又「野圃の玉子」からは、二十七年も間があります。隨分永い間こんなことをやつた男と見えますれ。初めは大に通人風をふかして酒落本の樣なものを書き膝栗毛一派が盛行する樣になると、この方へ移つたらしく思はれます。永い間ですから、この外にも色々な戯作をしてゐることでせう。」

成程、「新群書書目」の中本書目中にも、天保三年度に、唯一つきり載つてゐる。これは蕙齋としては有益な發見である。次に、私も偶然の一致といふのか、又は氣をつける時にはおいそれと拾へるといふのか、刊本「津島土産」の初編上一册の正のものを最近手に入れたことである。市場氏の此の書信は七月十一日出、自分が此の初編上を獲たのは、同十七日夜、不思議である。に就て謂はねばならぬのは、自分が先頃紹介した再板「津島土産」は、(洋紙本)實は、正の物の第二編の上下二册である事である。道理で、この洋紙本上の一九の序に、見らるゝ通り、「今年後編の跡仕込」とあるのである。(前月號參照)前月これを寫し乍ら可笑しいなとは思つたが、是である哉である。即ちこの一九の序は二編の序であつたのである。自分の求め得たのは、右の初編の上一册で、下は欠である。結局この最近入手の元本一册と、洋紙本二册とで、初編二編の四册の中、元本の初編下の一册が欠けてゐることになるのである。その中又この欠本を探し當てたいと思ふ。次に此の洋紙本を、一册を上編とし一册を下編として胡麻化したのは、元本初編の板木が當時欠けてゐたのか、或は求板に都合が惡かつたのか、何かの事情であらう。とにかく私の洋紙本の二册も元本があつたに違ひないことは、洋紙本卷尾に、求板とあることである。倚、洋紙本の最近入手の初編上の蕙齋自身の序と、凡例〔共に全文〕とを掲げておかう。因みに此本、蕭書本やうの土器色表紙。中本、叙凡例其他口繪で五丁、以下本文三十である。丁附は、上ノ一、上ノ二……とある。(挿繪。花溪、玉僊〔小寺玉晁の師〕等數圖入)

叙〔この下に、傍示を描き、是ゟ增井領と酒落れたり〕

鷓鴣よく物眞似をすれども口上をはなれず。お染猿よく俳優(やくしや)を眞似れども振附をはなれず。夫(それ)潘岳を眞似の彼醜男(かのぶをとこ)。西施を眞似たる醜婦(ぶきりやう)等(てやい)。鵜の眞似をする野暮烏鵜のまねする鷺坂伴内。其及さるを學んは、泰山を脇はさへて北海を越(こゆ)るがごとし。大陰囊(たま)を引挾んで早飛脚に行(ゆく)がごとしと。たしなんで見ても情なや月をほしがる猿猴の。性(しやう)は作者の耻しらず。終(つひ)に道中膝栗毛に擬して。拙き著述を那すといへども。彼書は古今の名馬にして。評判千里の外を走り。此作は駑才にして。恰も闇を曳いだす。しみつたれ牛に異ならず。角(つの)文字

(裏表紙ウラへ)

浮世繪エロチシズム沿革誌
並に其目錄

此の一篇を、今は亡き愛兒ゆかりの靈に献ぐ。

はしがき

今、自分が此の篇に筆を執りつゝあるは、ゆかり死亡の直後である。ゆかりとは、昨年晩秋生れた自分の四女であつた。今日で滿七箇月半、未光瀞が膽に遇つたといふ。暑くなりかけから、おできが出來てはゐたが、激變は、この三四日である。自分は、結婚後六年で四兒を擧げた。凡て女兒であることさへまだいゝとして、二女のあきちは、その名の如く、一昨年夏滿一ヶ年有月で死亡、これは恐らくの消化不良、今またこれである。三女のなつよは、この冬から氣管支を患つてゐたが今は快復しつゝある。門下から鳥が立つやうに、四女はさよならをした。子が多いから疎かになつたせゐもあらうし、父性來弱かつたせゐもあらう。凡ての子が膽がいやに肥大である。腺病質を腸胃炎の遺傳でゞもあらうか。自分は今にして考へねばならぬと思ふ。自分の著刊「江戸歡樂雜考」は不評を通して無[illegible]に沮まつた。それも望外の責任である。三女なつよも入院までしたが、今後轉地療養すれば大丈夫とまで漕ぎつけた。それらに氣がとりの[illegible]に、此の四女は逝いた。運命であらうか。併し荊妻との愛情行爲が、斯くの如き短日月の生命を生む。責任は一に自分らにある。

此篇の目錄は、昨日の午後から夜へかけて全部說明分類の謄寫を終つてゐた。(草案は、數日以前に出來てゐた。) それを今朝見直し、黃昏後一時間ばかり清書をしてゐると、此の急變に驚かされたのである。然し自分は、亡き兒の靈を弔ふと共に、この自分の一方の兒、この記述のために筆を進めねばならぬ。今階下で、家内が、悔みの人々に應へてゐる。それを耳に入れ乍ら、以下此の稿に筆を進めるのである。(時に、七月二十二日午後四時)

○

今、自分は、戀愛描畫にエロチシズムと宛てた。エロチシズムてふ外來語は氣障でもあらうが、迚もこの語にでも依らなければ、複雜な浮世繪の氣分を現すことは出來ない。エロチシズムは、「文藝又は繪畫の上の、戀愛的傾向」さうした單なる意味では、現在は無論ない。もつと複雜化したものとして、現に我らは使用する。單純なるエロチシズムは、男女戀愛の描寫である。然しこれを更に、かゝる男女戀愛の描寫であつて、而もその過度、我らの眼を刺戟すること甚しい、即ち催情、挑情、挑發の意味に使用する。即ちエロトマニア（色情狂）とまでは行かざる、その中間の刺戟濃厚の、しかく與ふるものを謂ふのである。單なる戀愛の意味から此の挑情挑發へ、即ち此の語自身のかゝる變化と同じく、我が浮世繪の戀愛描寫の上にも、此の單純より複雜の、進化、寧ろ變化が見られるから面白い。

浮世繪の全斑が、必ずしもエロチシズムとも限らない。風景畫には殊にその表面の形式上、このエロチシズムを遠ざかることと夥しい。然しこの風景畫の如き淺き交渉は別として、〔但し、風景畫と雖も、點景人物の描寫には、此の影響を受けてゐる。〕一般にこれから影響されてゐることは否めない。中、役者繪の中にも、隨分エロチシズムの酷いものがあるが、然しこれは、役者繪の繪そのものが生んだエロチシズムではない。勿論知らるゝ如く、俳優の演技、舞臺の光景が、その有するエロチシズムが、此の浮世繪の一派役者繪に、その影を投げてゐるのである。但し逆に、板畫の上に現はれた畫家の技巧に據るエロチシズムが、舞臺の俳優演技の上に影響を與へたと思はるゝものもないでは

ない。即ちけだし人事を取扱うたものの浮世繪は、凡てその強弱の差はあれ、此のエロチシズムの影響を受けもし、第二として自らも生んでゐると思ふ。唯一つ、浮世繪のエロチシズムとして、本場の如く考へられ、當初は人事その物より此の氣分の示唆を受けたかも知れぬが(否、大に受けたらう)、後には、繪そのものの方から、反對に人事に、(之を觀る人々の群に)、刺戟を挑發を與へたと思はるゝものがある。既にお氣付きの事と思ふが、即ちかの美人畫(男女の情的描寫、遊里描寫、及び一般風俗畫を含む)である。此の意味から美人畫は、慥かにエロチシズムを受け、またこれを發してゐる唯一のものである。(役者繪は、受ける方の分が強い。)然しこの美人畫と雖も、その過程に於ては、(主に師宣より芳年へ)幾多の變化を生んでゐる。こゝに、私は、エロチシズムの語義そのものの單純から複雜へ變化したやうに、同樣の變化を認めたいと思ふ。以下、即ち此の美人畫を主にした自分のエロチシズムの展開槩說及び概評、その目錄である。

エロチシズムの語義そのものが、戀愛より挑發、性的興味の露骨なる表現と、變化したが如く、浮世繪美人畫の描法も、師宣より芳年(よしとし)にかけて、この傾向を追うてゐる。即ち戀愛畫よりあぶな繪(舊義、寧ろ狹義のもの。本來の語として)へ、あぶな繪より性的趣味の暗示へと、推移してゐるのである。人間戀愛心の推移にも是は言及されるとも思ふ。少男少女の戀愛は、即ちエロチシズムの原始時代、浮世繪からは師宣時代のあの單純さ。それが中年期の爛熟、後年の晩紅、平凡化したる性的生活は、是れエロチシズムの極點たる露骨を以て當然とさせるものであつて、

即ち浮世繪からは英泉輩の如き性的興味の露骨な表現あるものと、相均しきものがありはしないか。是れ大に面白き問題と思ふ。

此の浮世繪の變化に、傍証として江戸時代小說の推移を考へてみるも面白い。有益なる對照である。或は、浮世繪のエロチシズムがしかく進化、變化したのは、時代人心の傾向（需要者の要求心理――單純より複雜を要する）に導ち、迎合していつた點もあらうが、また直前の時代人の性的生活の推移にも影響されてゐようと思ふ。即ち元祿前後は、人間の生活が華奢好色に趁つたとはいふものの、未だ頽廢は萌さなかつた。唯、ぼんやりした刺戟で滿足してゐた。明るい、華やかな、大まかなもので彼等は精一杯滿足した。それが文化文政、天保度となると淫靡頽廢の極に達した。私娼の跋扈は勿論である、艶書艶本の禁令を侵しての盛行、仲條の業昌、一々擧げる迄もないが、とに角より強き性的興味に引摺られてゐた事は否めぬ。さうした時代人生活の影響も僅かにあらう。即ち時代人生活の影響と、隨つて時代人要求の的に協ふためめの製作と、是等交々あつて、あの浮世繪の盛んなるエロチシズムの發展を見たのであらうが、尙、間接には、小說壇の影響も受けてゐないか。否々、或は、影響といふよりも、兩者並行して、同樣の結果を來したともいへる、或は觸れつ離れつ、結局同樣な現象を招いたのでもあらうか。然し、畫家の執筆時の微妙な刺戟には、此の小說壇の推移も大に動機を與へてもゐようと思ふ。試みに、表面に現れた、兩者の類似の移動の迹を表示してみよう。

（浮　世　繪）　　（小　說）

戀愛の描寫(輕度)。	師宣の頃。	假名草子——浮世草子。
戀愛の描寫(重度)。	政信より春信。(及び以後、歌麿の頃まで)	浮世草子。
挑發態(あぶな繪風)。	政信より初代豊國の頃まで。(湯上り、風に吹かるゝ女。洗濯。階段の上り下り。俄か雨。以上による上半下半の或部分の露出。主に婦人一人又は婦人のみの集團。)	黄表紙、及び洒落本の初期。(其他、噺本、滑稽本等)(又狂歌川柳の流行にも。)
大首繪の纖情的表情。	歌麿より英泉。	洒落本。
大首又はシーンの閨事の暗示。	英泉前後。	人情本。

若し師宣、春信、清長、歌麿、英泉を以て全浮世繪史上の美人の各時代を劃し得るならば、これに小說を以てすると、師宣は假名草子、春信は浮世草子、清長は黄表紙、歌麿は洒落本、英泉は人情本と、氣分より對照せしめ得られよう。如何。此の對照、自然に暗合、比較の妙を得てゐはしないか。

次に、浮世繪一般エロチシズムの推移に就て、徇くはしき概說を試みてみよう。

師宣時代の男女圖。この時代は男女一對のみのものも多いが、一体に溫雅である。遊宴等の畫樣は比較的多く、艶畫本の斷片と思はるゝ物の一對畫にありても、この遊宴雜居の圖とさして異りなく、唯、稍エロチックかと思はるゝばかりである。(以下叙述を可成く簡にする。)さて自分が戀愛畫樣と名づくる物は、一對の間に情緒が多少通へるものに附く名づけるので、その多なるものを重度とし、少なるものを輕度として區別したのである。然るに、師宣頃にあり

ては、此の情緒の纏綿比較的淡く、即ち輕度なるものが多いのである、以後の春信より歌麿に至る間には、此の淡きもあれば、濃度なるもある。濃度も可なりの數である。

政信(奥村)、豊信(石川)頃から、所謂あぶな繪(狹義のもの)風が行はれ出した。前の表にも示したが、風に吹かるゝ女(その脛のひらき)、湯上りのみだれ姿、化粧の肌ぬぎ、其他樣々あるが、要するに上半、下半の露出である。これには、畫家が單純に、風に吹かるゝ女の圖、又は化粧の圖として、描いたものでは、無論ないと信ずる。無關心さうに見せかけて、實は故意であると。畫家の特殊の興味も動いてゐるが、又これを描いた結果の、人々の殊に好色的な時代雰圍氣に養はれてゐる野郎どもの喝采歡迎、高き評價を豫期してゐると思ふ。つまり、彼等は享樂し乍ら描き、描いて儲けた(物質には尠かつたであらうが、[illegible]に於て)ものと見て可い。さうしたあぶな繪のものは、政信、豊信、春信、湖龍齋、清長、歌麿まで、更に豊國(初代)、國貞、英泉にまで及んでゐる。一寸した横坐りの風にしどけなき、所謂見る方の者が生むエロチシズムは、恐らく此の政信あたり以後(その發生は師宣あたりに)浮世繪全部を通じての畫樣であらうと思ふ。外人が、浮世繪を見て、さぞかし日本の女といふ女は、行儀の惡いものだなあと凡てに思ふであらうと思ふ、爾くにである。(是等は、時代風俗の實寫といふよりも、寧ろ畫家の好色心理、性的興味に對する人一倍の敏感さが手傳つてゐると思ふ。即ち作者の幻像が大部分である。)然しこれが、歌麿以後になると、この風が殘つてはゐるが、首座を失つて、代るのは、大首の媚態又は男女閨事の暗示である。この原因は、あぶな繪が、殆ど浮世繪として一

般形式となり、即ち平凡化した、さうした點からの忌避もあらうし、又一には、畫家及び時代心が、この程度の微温的催情では飽き足らなくなつたせゐでもあらう（刺戟は更に刺戟を追ひ、生むこと、いつの時代も同じである。（尚、此前後の叙述に就ては、本著初編の「浮世繪の心理」及び「エロチックスに滲む心持」等を參照せられたい。）

戀愛情緒の濃厚又は大首の猥態。これは、絮說する迄もない、以前の微催が濃厚を呈したのである。戀愛情緒の濃厚さは、春信に始まり、清長は割合に少く、歌麿にその極點を示して居る。（悉しくは目錄を見よ。）勿論それにも輕重があるが、春信の或物、歌麿の或物は寬然たるエロチックスである。大首は、歌麿に始まり、猥態を悉してゐる。元來大首繪の美人は、歌麿が創始ではあるまいか。春信に大首は無論ない。湖龍も無論（大抵全身立、坐である。）春章の美人にも清長の美人にも此の大首は一向見ぬ。春潮、榮昌輩に見受けるが、此等は、歌麿以後の作、即ち歌麿を學んだかと思ふ。即ち大首なるものは、歌麿が始めかと思ふ。この大首の起源を査ねて見るも面白からう。今、自分の偶感してゐるまゝをいふならば、この大首は、寫樂（役者繪の）が先か、歌麿が先かといふ問題である。矢張り歌麿が先であらう。即ち彼の「婦人相學十軆」は、寬政二年の作であると謂はれる。すれば、寫樂の寬政六七年よりも先である。然れば、この歌麿の大首は、彼の創案かといふに、これには、役者繪の春章——主に、文調と合作の繪本「舞臺扇」——から來てはゐないか。然し春章と雖も、一枚繪の役者繪には、此の大首は殆ど無いやうである。即ち美人の大首の創始は、全く歌さんであらうか。（「舞臺扇」よりの暗示は、寧ろ曰ふべき程のものではあらなかつたらう。）この歌麿の大首を摸して、役者に應

用したのが、寫樂であらう。即ち大首繪のあの皮肉な繪（女性の性的特徵のあの暗示書樣）の
つ。英泉などの極端さは、やはり歌麿がその端を發してゐると謂はれよう。

暗示の極点。大首又は一人立の如何を問はず、美人畫エロチシズムの極點は、英泉にある。これは知る人多からうから、細説を略く。とにかく、私の持論であるが、英泉の繪は、女性が地獄へ墮落したものである。性欲の地獄である。宛然、暗示手法に據つた、公刊のエロチックス（艶畫）は、是である。

併、この末期の暗示的手法（大首、又は一般男女又は美人一人立等の圖を含む。この全盛は、その最初は歌麿（若しくは清長）であるが、これは、所謂洒落本の流行などと同樣の徑路であらう洒落本の通人趣味、甘つたれることを避けて、暗喩、探りあひを好み、表面淡泊、內面濃厚を喜んださうした傾向（だと自分は思ふ）と類似して、若しくはかうした時代人生活心の多少の感化を受けたかと思ふ程である。）この以前は、無論、人間の單純主義。即ち浮世草子の單純なる平板なる露骨時代〔西鶴物の少數を略き、一般八文字舍本の類〕で、即ち師宣より春信前後である。）それに又一は、頻々たる好色本好色畫の禁令（悉しくは、本書の初編に載した「本朝艶畫考」を見よ）の結果、正面を避けて裏面に穿入したといふせるもあらうと思ふ。それが英泉に至つて、閨房事情の暗示と、淫靡の濃厚さの極點となつたのであらう。即ち人情本に墮落、若しくは人間愛欲本能の極髓に達したと思はれるのである。（唯、浮世繪の概觀上、この暗示のひどさは、歌麿に始まり、英泉、及び最尾の芳幾芳年に至つてその度を增してゐるが、割合に少いのは、春潮春英らの勝川系統、及び初代豊國輩である。一は

春潮春英輩は、歌麿に壓倒せられ、初代豊國は、弟子の國貞や（國芳には、却つて拙い。矢張りそんな暗示なんかを嫌つたのかも知れぬ。豁達な彼の氣性は、暗示を避け、又、媚態萬幅を描くに適しなかつたのかも知れぬ。但し彼の會本には、瞬時の境を描いて、英泉國芳輩を凌駕してゐるものもある。）、又は英泉輩にお株を奪られて、役者繪に强いて自分を慰めたといふべきものかも知れぬ。然し折々は（初期のもの）この物あり、又前期のあぶな繪風のものもないではない。

偖、最後に、一般美人畫にも多少のこのエロチシズム（樣々の意味の）がある事を述べておきたい。即ち一般婦人の群集（戸外、戸内とも）の平凡なるものにありても、その線の柔らかさ、姿態に漂ふ脂粉以外の甘さ、それは輕度のエロチックであるといひたい。これらは、浮世繪の上では尋常茶飯である。春信の優冶な線は勿論であつて（但しまだ輕くして上品な氣分）、歌麿に至つては稍重く、（榮之にすら、これがある）英泉前後に至つては、あくどいものである。但し英泉そのものには、美人の一人又は二三人で、多數群集は割合に少ない。（挿繪本の挿畫は例外。）

以上で概説を終る。以下目錄に移るが、その目錄である、自分の類別の仕方は、以上の概說で自然と意味がとれようが、個々の畫家及びその畫題である、これは、自分の目今蒐集しある限りの原書、複製、目錄、外國著書の全部に據つたのであり、これが一般から見ての全部でないことは無論である。それと、今一つ斷つておくのは、英泉國貞及び以後が頗る拙いことであ

る。これは抄いのではない、實は無數である爲、わざと略いたのである。と、これらは、今日却つて一般の常識であり、その以前（浮世繪の初期より中興期）の方が、特殊智識とならざるを得ぬ現狀ゆゑ、その特殊の方に細微の渉獵を盡したのである。即ち廢頽期の簡素は、此らの理由である。首尾一貫せざるを咎めたまふな。更に一言――以下の目錄の分類及び書は、殆ど全部板畫（一枚繪及び其類）である。繪本及び挿繪本挿繪の類は一切省いた。之も煩しいからである。尙一つ、各畫家の畫題は、「　　」の中に示せるは、原題。他は、無題の物で即ち畫面より自分が適宜つけたものである。參考として、判の大きさ其他も出來る限り示しておいた。さて以下かうした豫備知識をもて讀まれたき自分のエロチシズムの浮世繪板畫目錄である。（以上の記文、二十二日夜八時に認了。明日は友引ゆゑ葬式は明後日に延した。さうした相談を、女房と母たちとしながらこの稿を終つたのである。）

浮世繪戀愛描畫板畫類別目錄

一、戀愛畫樣（輕度）板畫目錄

鳥居淸信。役者繪の男女（ストレンヂ氏「日本板畫」に所載。）

奥村政信。お七吉三の役者繪（大判、長漆繪）

鳥居淸滿。男女役者繪（中判）畫題略く。各樣あり。

鳥居淸廣。涼み臺に男女、女笛を吹く。（見立唐玄宗と楊貴妃。）（紅繪大判）。口若衆、美人猫を愛す。（同）

勝河輝重。相對擁爐眠圖（繪本の一部かと想はる。ストレンヂ氏本に所載。）（判不明。紅繪摺か）

細田榮水。「小紫、平井權八」(兩人、合奏の圖である)(長錦繪)。

歌川豊國(初代)。蚊帳の男、外の女(ズッキ氏本に所載)(大錦)。

三、挑發態畫樣(輕)板畫目錄

鈴木春信。月見、緣臺の女二人(中判)□「調布の玉川」(普通同題の物と違へる構圖。)(中判)□布晒し美人之圖(上に鍾鬼、鬼を吊して文を差出し、下に女立ちゐる、その次の圖)(長紅繪)

春重(司馬紅漢)。室内二美人(緣側紅葉、室内、一美人立ちて帶を占め、一美人坐して鏡に向ふ。此の坐せる方、姿態稍ひざし。)(此圖、鈴木春信畫と落欵せるも、クルト氏は之をもて司馬江漢作なりとせり。暫く同氏の說に從ふ。同氏の「鈴木春信」參照。)(中判)。

礒田湖龍齋。鼠持美人(柱繪) □子に乳をせがまれる美人(同)。

勝川春章。張物、洗濯二美人(中判)□「吉原八景、衣紋坂の夜雨」(男に茶を出す女、女の風一寸ひざし)(中判)

鳥居清長。菖蒲二美人(その中の、蹲へる女)(大錦) □「箱根七湯」の內、宮の下、湯上り女。(中判)□「張物三枚續」の左一枚(大錦)。

喜多川哥麿。「娘日時計、午の刻」(湯上り美人)(大錦)□「青樓十二時の丑」(同) □「同、巳の時」(同)□子供美人(その美人の胸)(同)□影畫、茶店美人(嘗て、好古堂の逸品集中に出でたるもの)□美人、子供に行水の圖(砂摺、大錦)。

勝川春扇。雪中の年增美人(その美人の脛)(竪二枚續錦繪)〔この圖、嘗て、雜誌「錦繪」の第一號に縮複製せられたり。〕

安藤廣重(初代)。「古歌六玉川の內、武藏調布」(中短册)。

四、挑發態畫樣（重）板畫目錄

奥村政信。風に吹かるゝ女（細繪、紅繪）

石川豐信。風の三美人（細繪、三枚つゞき。紅繪）□涼み臺の女（中判。紅繪）□湯上り（女ばかりか菖蒲酒の贊あり「自分の浮世繪裸體畫目錄並に解說（一裸體美」掲載」の中に、くはしく解說してゐる。參照。）【ファイケ氏本に所收】（柱繪、紅繪）。

鳥居清滿。湯上り（ファイケ氏本の物）（嘗て「あぶな繪畫集」にまた載せたり。）（紅繪、柱繪）□「湯上り」の數圖。（ザイドリッツ氏本に所載。頗るひどきもの。くはしくは、「裸體畫目錄並に解說」參照）

鳥居清廣。「深川娘三幅對」（中、扇を翳せる美人。）（大判、紅繪）□緣側の二美人（一人は盥に足を洗ひ、一人は爪を剪る。）（大判、紅繪）□比丘尼、階段を下りる圖（あぶな繪畫集に載せたるもの。）

鈴木春信。機織り女。下に子供の窺ふ圖（無落款。中判）（クルト氏の「春信」にあり。）□日暮里、お仙茶屋（群集の中のお仙の立姿、床几の後の男女の風。）（横繪か）□「調布の玉川」（布さらしの女也。）（中判）□かほよ花（湯上り美人嘗て、好古堂の逸品集及び、「やまと錦繪」に出づ。）（中判）□「見立六哥仙」（柱繪）□湯返り二美人と少女の圖（雨中、風呂屋裏の圖。）（中判）□「調布の玉川」（子供、母の背になびける圖）（柱繪）□團扇持美人（「あひゞき」と自分が名けた、「あぶな繪畫集」所載の家藏中判物と同樣の構圖。ひどしと一面、是れ戀愛と挑發と混へ、しかも挑發態樣に於て一層ひどきものと謂はんか。）（柱繪）□蚊帳釣る美人と猫。（猫が背に）（柱繪）□子供と蚊帳釣る美人（前圖よりは、稍穩やかなり。）（中判）□風に吹かるゝ女（背景、枯木。）（ファイケ氏本にあり。）（中判）□「風」（懷紙、簪、文などを散らせる圖。風とありて、「せめてたゞめにみぬ風のつてにだになびくときかんことの葉もがな」の歌を添へたり。）【一九一四年巴里版、「日本板畫」にあり。風に吹かるゝ一美人の繪としては、そのひどさ、恐らく前後無比。前圖よりも酷きこと數等】（中判）

春重（司馬江漢）蚊帳美人。外に居眠る少女、寛ふ若衆（美人の立膝、寄拔也。）「此圖、戀愛シーンとしても可ならんも、寧ろ此の立膝の形（かたち）により此の中に置く。」（中判）。

北尾重政。「當世見立美人八景、両國のきはん涼みげいしや、すがたもやう。」（の、ほうづきもてる女の膝）（大錦）

石川豊雅。「六歌仙幼遊」（美人、風に吹かれて衣捲ひ、子供指さす圖なり。）（小錦）

鳥居清長。「風俗東の錦」の內、湯上り三美人（その中、爪剪れる女。）「好古堂の遺品集にもありし有名なる繪。」（大錦）□水邊夕涼二美人と茶屋女（茶屋、床臺の二美人の中一人の腰かけやう）（大錦）□「風俗東の錦」の內、女二人、凧もてる子供一人」（先に立てる頭巾の女の裙つ）（大錦）□俄か雨三枚續の內、右一枚（三枚つゞき大錦）□「青樓十種香」の大文字屋誰袖（寢ころびたる樣）（中判）□炬燵（あぶな繪畫集に載せたるもの。）（大錦横）□洗濯美人（子供が、[illegible]て指させる圖）「清長に至りて始めて最も故意的なる、即ち露骨なる描法、現る。しかもかゝる皮肉なる物は、今後にも殆ご見ざる所也。」嘗て春信に、機織る女の脚下の子供ありたれご尙程度淡かりき。」（中判）「尙、初代豊國の洗濯二枚續は、この清長を摸したるかに見えて、穩當なり。」□六郷渡しの一枚。（大錦）

喜多川歌麿。水邊團欒の數多美人（中、右一枚の毛氈の上に寢たる年增女の膝。）（三枚續大錦）□泊り客三枚續（大錦三枚）□髮結子供二美人（子供、女の乳房を吸へる圖）（大錦）□「青樓十二時、辰之刻」（臥せる二女）（大錦）□臺所美人二枚續（もの剝げる女の立膝。）（大錦二枚）□「風流五葉松」上諸り二美人（大錦）□山姥の乳を吸ふ金太郎。（金太郎、右の乳を吸ひながら、指もて左の乳をいろへるが、故意である。此の皮肉さ、また效果甚大也。性感の內面味に滲透せる

畫家として、恐らく女體の感受性の全部を殆ど近代人以上に知了せる不思議なる性的描寫畫家として、唯一彼の名を記すべし。かゝる体的感受性の鋭敏さを、或る程度迄露骨に現せるもの、古今、彼のみ。勿論、艶書本の類を除けばである。前代の清長は、唯所謂あぶなさ、――肢体一部の露出――それに伴ふ子供の悪戯などの、滑稽の表面を有せる輕き暗示、皮肉さのみ。前々代の春信は、勿論、單純なる露出、それがひどくとも、彼の優婉なる描線は、唯一味の淡き催情を與ふるもののみ。寧ろあつけなきもの也、非近代の物である。後代の英泉の類は、直ちに閨房、房事の聯想、表白に匆惶として趁る。未だ歌麿の示したる如き、餘裕ある、しかも辛辣骨に徹する洞觀味は無之かつたのである。女體の内外知了の畫家、女体感覺の使入者、そは歌麿であらう。

而して此圖、金太郎と對へる、簡潔なる山姥の若き美なる貌、そが、体的快感と母としての慈愛とに相交錯せる、その複雜さを描破したることも勿論である。□「化粧二美人（一人立つて、鏡の蓋を手にし、一人坐して鏡を手にす。）（柱繪）□「北國五色墨の内、てつぽう」「あぶな繪畫集」所載のもの（大錦）□母衣蚊帳美人添乳の圖、好古堂の逸品集にもあり、比較的流布廣き圖。然し隨分ひどきもの也。（大錦）□「婦人相學十躰」の内、（煙管持美人の乳）（鼠摺、大錦）□「婦人人相十品」の内、（煙管持美人の胸の露出、但し前とは構圖違ひ、左り向き也）（大錦）□「婦人相學十躰」の内、うはきさう。（例の手拭搾りの美人、その乳と房）（雲母摺、大錦）□美人鏡臺、子供乳を吸ふ圖（大錦）。（この構圖、若干を違へて數圖あり。何れも相當に効力を擧げたりと見らるゝ）

北尾政演。「青樓美人自筆鏡」の内、（最後の三味線を膝

における女)(大錦二枚大、横)。□「當世美人色鏡、山下花」(三美人の中、右と左の女。)(大錦)。

二代歌麿。「其姿同じ舞風流」(助六意久見立の中の、女の腰かけ様胸と膝との)【「やまと錦繪」所收】(大錦)。

勝川春潮。俄か雨(左の一枚女の脛。)(大錦)。

細田榮昌(榮之門人)。爪切る美人、湯上り。(「あぶな繪畫集」に嘗て載せたり。清長の「風俗東の錦」と構圖酷似せるもの。)(柱繪)

初代豐國。「六玉川、武藏調布」(疲れて足を投げ出せる女の態。)(中判)

鳥居清滿(二代)。横坐り美人(極印あり。ストレンジ氏本に所載)(大錦)。

歌川國貞。「時世江戸鹿子、茅場町旅宿」(寝床ける女。様 髪梳のあたり。)(大錦)□「風俗化粧鏡」(鏡面美人、化粧の圖。)(大錦)。□「あらゐ小町」(湯上り、拭ける圖。)(同)□蚊帳美人、煙草喫ふ圖(嘗て好古堂の逸品集に複製せられたり。國貞の此邊のもの、皆是れ艶書本様式なり。墮落したる催情畫風、惡化、頽廢化せるエロチシズム也。觀者に故意に催情効果、又は閨事聯想感を與へんと努めたる跡顯著なるもの也。歌麿の甘美なる恍惚味より陶醉感、こは苦きまづき刺戟、壓迫感に移りたるの觀がある。)(大錦)

□「四万六千日」(蚊やり火。子供、美人の帶を曳く圖)(大錦)。

五、戀愛・挑發態兼併畫樣板畫目錄

1、その輕きもの。

鈴木春信。階子段美人と若衆階上の圖(中判)。(脛の露出、挑發態畫樣にも無論のもの也。)

2、その重きもの。

春重(司馬江漢)。「深川樓」(廊下二美人と影の客。)(中判錦繪)

鈴木春信。あひびき(嘗て、夕暮れさも假り

に名けたるもの。自分所藏。「あぶな繪畫集」に攝りたり。同想、酷似の構圖の柱繪あること前述の如し。」（中判錦繪）。

鳥居清長。青樓の或るとき。（青樓、屏風に手をかけた美人の腰さ顔みて何をかいふらしい廊下の美人」）（中判）。

【備考、此の區分内の、挑發態は、大抵無作法なる、故意又は自然の羞恥にして、主に、腰の露出也。】

六、女一人閨事暗示の激しきもの板畫目錄

鈴木春信。娼樓、美女、行燈の灯を剪りをる圖。（後の、英泉などの構圖に最も多き型なり。）（中判）。〔此圖、クルト氏「春信」に載す、春信さして珍らしき畫也。〕

歌川國貞。「星の霜當世風俗」の内（美人、行燈の心を切りたる圖）（大錦）。

【備考――此の項のもの、此の前後の二圖を代表として掲ぐ。英泉などには、此の趣向最も多し。例へばその一圖、美女柱に凭りて文讀む。その脚もとに、堆き手をつけざる懐紙の一括あり。これなど故意に「これでも分らぬか」といひたげの、暗示を通り越して、提示也。即ち、その余一切を略いた。尙、既出項の、戀愛書樣の激しきものは、皆即ち此の閨事の暗示と見て可である。唯、彼らは、男女の一對多きにをり、此は女一人といふだけの差である。】

七、顔面表態（主に大首美人）の暗示雋銳なるものの板畫目錄

鳥居清長。夢見（夢に富士、馬上の人さなる圖、その女の顏。）（柱繪）。（この構圖に似て程度輕きもの、春信、湖龍齋等にまた多きこさ、人の知る所であらう。）

喜多川歌麿。歌麿の大首は、一般に是也。中、稍鋭きは、辻君（半身のもの。美なれども、何處かに娼婦の臭を持たせたる所、彼の惜き程の技巧と謂ふべきである。）（大錦）□「名所腰掛八景」の俯ける年増美人。（大錦）。此程度猛烈にして而も歌麿描くのものに、「西驛た印」なる大首大錦がある。尙、「歌撰戀の部」の、年增、眉を落せる美人の顏貌表情も、娼婦美の十分の發揮とも見て可であらう。嘗て自分は、ダ・ヴインチの「モナ・リザの微笑」と匹敵すべき娼婦母婦の混和型の顏面表情に、此の一圖を選んだことがある。母婦高潔なる表情とも見られ得、娼婦露骨野卑なる表情とも見ば見られ得るものである。

細田榮昌。榮昌の大首も亦、此の表情を漂はせること、比較的豐か也。されど、根が榮之系統を正直に引ける爲か、歌麿を摸し乍らも、その大首は一般に甘けれど、しかも高雅を失はず。寧ろ娼婦美に於て效果乏しきものと謂はうか。

榮水（榮昌と同じく榮之門人）の大首、又は半身も、高雅にして甘けれど、榮昌と異るは、彼の豐頰なるに比し、此は稍面長なるにあり。

初代豐國。晩年の團扇繪の、美人半身に此の目的に叶へるもの多い。一々は擧げない。

池田英泉。英泉に於て、此の味が獨特、强烈となりたるは、謂はずもがなである。唯彼の筆趣は、稍冗漫、或は、刺戟をより强く十二分ならしめようとした、若慮からかも知れないが、必ず附帶物——即ち情紙を嗜ふ

るか、本を讀むじれつたき表情か、何らかの景品がある。然しそれ丈、甘さは何處へやら、娼樓趣味滿溢のものとなりたるは是非もない。その一例をいふと、「今樣美人十二景」の十二枚物の如きは然りで、中の、「手がありさう」や、「しんきさう」や「うわきさう」など然りで、「うわきさう」は殊にひどいものである。（この「うわきさう」、拙著「江戸軟派雑考」に挿繪として掲げた。ストレンヂ氏本にも亦登錄して居る。）此等は、一例に過ぎないものである。

（追記）以上で、予の浮世繪戀愛描畫目錄の大体を終つたが、尚、裸体若しくはに近き下肢又は半身の露出描畫及、暗示描畫、戀愛の濃厚描畫等については「あぶな繪畫集」解説及び自分が曾てものした「浮世繪裸体畫目錄彙に解説」の類を参照せられたい。あれに載せたれば、重複を避けて、これに載せなかつたものもあるからである。

挿繪本のエロチシズムに就て

挿繪本の概觀に觸れておかう。戀愛描寫の輕又は重は、浮世草子本に折々見かける。鳥居庄兵衛（清信）の挿繪、後世では八文字舍本の挿繪など相當に重だと思ふ。黄表紙や輕口本に於ては、畫風の差は無論、畫家によつても細かい區別があるが、概して、戀愛描畫のらしい物は見當らぬ。但しあぶな式は黄表紙に多いかと思ふ。洒落本は割合に凡てに淡白である。戀愛の重度、あぶな式、又は閨事の暗示など交々あるは、人情本に多く、草双紙に若干を見るのである。人情本は格別エロチシズムというてよい。各樣の此の氣分がこれに漲つてゐる。滑稽本は、野卑や無稽さはあるが、エロチシズムは案外少いと思ふ。以上、ホンの概念である。

（表表紙ウラより）

の國字をもて。册子の首尾を補ふといへども文面則誕に比して。其始末正しからず。鄙言亦小便に似て。去程にわる長し。一句一章益ある事を述す。唯妄言のモウと吼出るまゝの口車を曳て。早牛も遲牛も。誕にはあらぬ津島まで。行程五里の道草を。くらわんと欲する而已四方君子笑覽の後。牛を馬に乘かへたまふ事なかれと爾云。

于時文化十一
甲戌春
石橋庵眞辞述 ■［］

次に日本惣社津島牛頭天王神儀の半丁。次は、ヒラキにて、津島祭車樂圖。次ウラの半丁、凡例。

凡　例

此書は名古屋より津島迄五里の間の滑稽なれば道向の數々山烏の尾張の洒落の長々しき故先甚目寺に筆を止めて前編の二卷とし、余は後編にあつくる物ならし。

卷中の言葉の尻に［でや］のかなあり是則國なまりにして東都の［だ］上み方の［じや］の類なれば。で。や。と切て讀むべからず、でやとつゞけてよむべし。

又詞の中に［するから］［いふのさ］の類ひあり是又國の言葉にあられども名古やなまりのしみたれたるをはしおらんが爲也、見る人其誤りを正して笑ふ事なかれ。

次に、本文。本文の始めは、日本惣社津島土産初編上卷とあり、次の行に、名古屋石橋庵增井著とある。

寄贈紹介

支那三百畫家傳
中川■■著

淸末より明代に遡り、約六百年間の畫家三百三十有余を拔萃して、列叙したものである卷初、人名索引あり、口繪三十有余枚、全部精細なる銅版である。卷末に、著者の自作になる題畫百絕を附してゐる。一般東洋畫趣味者には、必讀の參考書であらう。（菊判本文二〇八頁。其他約五十頁。絹張表紙模樣金美裝。五圓。東京市神田表神保町二修文館）

新評 古今と新古今
尾上柴舟著

古今、新古今に對する著者の雜考で、一名有二歌集の秀歌評釋ともいふべきものである大正十一年度版の訂正再版である。評釋は、普通の學者とは違つて、著者自身實に歌作せられた經驗上よりか、洞察釋明、甚だ要を得てゐるのが多い。從來の定說に捉られぬ所も結構である。卷末に、歌の索引を附してある好著である。（四六判三七八頁索引一〇。口繪タイプ二。武圓五拾錢。東京市神田區北神保町弘道館）

淸元研究
創刊號

淸元に關する新誌の忍頂寺氏の後援に據るものらしい。目次、「梅の春」註釋（忍頂寺務）義太夫型と淸元型（森川丹三）其他新道に關する記事滿載、寫眞版二頁添付、表紙等依裝遊いものである。菊判三六頁。神戸市荒田町三丁目四九ノ五〇大江戸藝術社。四拾錢）

著者より

ゆかりの初七日のすみ次第、知多郡古見海岸へ家族の大部分が轉地の筈である。依りて八月以後の書信の御返事が後れるかも知れぬ

○最近、「新小說」編輯部より依頼をうけて、猥本雜談を書いた。雜誌に組んで十頁内外。これを書いたのは、今度のゆかりの激變しかけた最中の、十八、十九兩日である。その篇と、今度の本册の本文とは、丁度ゆかりを追ふる記念の如きものである。○今日午后、形ひの相談をなしてゐる所へ讀賣新聞の圖書室主任木村氏より依頼の書狀を受けた。それは例の新刊高野黑木兩氏の「元祿歌舞伎傑作集」上下二卷の批評文を求めて來られたのである。これは明日、息を休めてから書く積りである。○以上とりとめもなく。（廿二日夜十二時）

定價表		
一冊	金貳拾五錢	郵税貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	税共
十二冊分	同　貳圓八拾錢	

○郵券貳錢一割增の事
（照會は返信料添付の事）

大正十四年七月二十八日印刷
大正十四年八月一日發行【貳拾五錢】

名古屋市東區東道巷町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社

發行所　名古屋市東區東道巷町一五七番地
江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

○增井蘂齋の「驛路梅」に就き。今、ふと「江戸時代小說類展覽會陳列品目錄」（大正十二年五月、日本圖書館協會創立三十年記念）を見ると其（の）九十六頁に、滑稽驛路梅がある。これには、京都、天保三年刊三卷三册とある。京都とは、例の合板の故であらう。參考までに（稿校時—二十八日夕）

和本手入れ漫談

依託書目も整理済ではあるが、どうせ來月は不在がちの事ゆゑ、發表しても一々御返事や荷造りも出來まいと、九月に延す事にしたい。仍てこの一頁を埋めるものがない。で此の雜筆と來たのである。

和本の直し方

これは、諸賢の中では私以上に苦勞なさる方もあらうから、御承知であらうが、しかし自分は自分の實驗である。多少の參考にならば幸ひである。

虫食ひ本の手入れ。虫は避けられないものだ。それも自分の手に入らぬ前は、何とも責めやうがない。さてこの本には如何に手入れするか。私は余程の虫でも裏打はしない。裏打は余計虫を呼ぶといつた功利的の意味からではない。感じの惡い事夥しいからである。即ち裏打の代りに虫のひどいのは、裏打紙を一枚づゝ挿んでおくのである。勿論その前に、こて、を一度かける。

○こてのかけ方

こては、本當は、紙に濕りを帶ばしてかける方が、しつかりするといはれてゐるが、自分は濕らしてゐるうちに、折角の本を汚しはしまいかといふ惧から、濕りはかけない。その代り、伸して、何度もこてをかける。そのかけ方も、ぢかは無論焦げる惧がある。薄い紙一枚おいてかけるがよい。大抵はそれで皺が直る。でもいけないものは、こてをかける代りに、その本の紙の裏に、ドッサを引いてやる。それを新聞にでも一々挿んで、一度乾して了ふ。すれば大抵の皺は、ピンとする。かうすれば、こての厄介になるのは少いのである。

破れの多い本

本のはれ目が破れたり、ちぎれて無くなつたりといつたものも、中に紙を挿んで、その皺も伸せば、大抵感じがよくなる。

紙質のほけたるもの

紙のはれ目が、多年の唾液でよれたり、ほゝけたりしてゐる。こんなのは、丁寧に氣長に、自分の手の指で抓んで、取るのである。そこが和本のとりえで、その部分は多少紙質が薄くはなるが、この掃除で大抵見違へるやうキレイになる。むしるのではない、丁度、ピンセットで抓むやうなもので。和紙は纖維であるから、或る程度まで抵抗力が強い。でかうされても別に大して變りはない、却つてキレイになるのである。

糸の綴ぢ方

大部分昔の糸の殘つてゐるものは、そのまゝそれを使用し、それに今の糸で出來る限り近いのを足して綴ぢる。全く昔の綴糸のないのは、仕方がないから、その本にふさはしい糸を苦心して見つけて綴る。(但しかうした仕事が、私の家内の仕事です。和本を買ふたび妻君のこぼすのは、これが爲です。子供の介抱、洗濯、それに私の用事、雜誌日々の發送通信等、彼女も中々骨が折れる所へ、この古本直しの相手をやらされる。こぼすのも尤もです。)

表紙の無いもの

表紙の無いのもある。これはどうするか。仕方がないから古本屋で、表紙丈が目的の本(淺[illegible]物や教訓物。殆どゴッブンに近いもの)を買つて來る。さうしてそれをあてる。但し大本の方がよい。大抵は[illegible]でも、丁度よく合はぬものである。都々逸本のやうに薄い紙は仕方がないから、今出來の[illegible]摺りの紙の、なるべく無地を買つて來る。然し出來うれば今出來の物は避けたい。紙質の[illegible]よりも色が氣に食はぬからである。私の一番困るのは黃表紙の表紙如きものである。あんな特殊なものは迚も今はない。一度——自分はかういふ考を持つてゐる。表紙のないのに困つてゐられる方は、天下に自分獨りではない、諸賢も少くとも同様であらうから、私の手許で、自分の氣に入つた諸種の昔風の色に紙を染めさせて、それを實費でお頒ちしようかとも思ふ。自分用のみでは、迚も新しく染めるといふ譯にはいかない。仍つて、諸賢の多數を得なければ、迚も出來ぬ相談だと思ふ。これは現在自分の切望である。

これで行數盡きた。又折を見て續談を仕らう。時に二十三日、午前零時半。階下でゆかりの通夜をしてゐる、母、妻、叔母どもの囀をきゝ乍ら、〔彼等は全部女で、追憶談ばかりに耽つてゐます。〕二階に獨りで認了。(著者)

大正十四年七月二十八日印刷
大正十四年八月一日發行
江戶軟派研究 第六册
定價貳拾五錢 送費貳錢

大正十四年九月二十一日發行 貳編第七冊（通卷數三十六冊）

本文

膝栗毛物のいろ〳〵
「稿本江戸寛政實錄」の演劇記事（上）
式亭小三馬の賣藥披露

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第七册

小三馬の賣藥披露

弘化三年新版の式亭小三馬作三代豊國畫の「戯作花赤本世界」四冊の處々に、小三馬の自家營業の披露を兼れてゐる。その中の幾部分が(例へば江戸水など)親の三馬讓りで、幾部分が小三馬の新案かは不明であるが、とにかく小三馬の當時これだけの賣藥其他を爲してゐたことは明らかである。左にその全部を摘錄しておく。これも何かの資料にもと(尚、此の「戯作花赤本世界」四冊の內容に就ては、他日別に謂ふ所があらう。親の三馬の文化八年版「腹の內戯作種本」三冊(美丸畫)の飜案であるが、然し小三馬の述懷境遇がとり容れられて面白いものである。殊に赤本全部の通覽槪說なども兼れ、加ふるに三代豊國の、國貞より師名を襲うたに就て重要な資料ともいふべき記事なども含んでゐる。此等は他の機會に讓る。)

式亭製藥御ひろう

○江戸の水 ▲大箱代百五十文 つめかへ百文 ▲中箱代百文 同六十文 ▲小箱代五十文、同三十二文
にきびの大妙藥、御顏のできもの一切によし。夏冬ともに白粉はげず、きめこまかにしてつやをいだし、白粉のうつり惡しき御顏によくのりて、はげざる事請合なり。

○天人香 二匁 百五十文
この上なしの清淨極製、かほりは殊に芳ばしく、年へて失せず、つやを出だす事世にすぐれたる白粉の奇方、まづ一ト包求め、試み給はゞ、その功速やか也、くはしくは能しよに記す。

○にほひ入御えりおしろい 百文 五十文 卅二文
御えりにのりて、うるはしきつやなり。半襟よごれず、白粉まだらにはぐることなく御襟てら〳〵と光り、香ひ殊に芳ばし。近來功能あらはれ、追々相弘まり候間、製法念入奉差上候。

○三馬みせ製藥 婦人三養湯 百文 五十文
産前はやめ、産後あと腹の惱みによし。血の道一切まくらさげつぎむしに即効あり。婦人懷胎となりて五月キ日より毎月十日目〳〵に怠らず用ひ給へば、十月にみちて安産し、生れし子健やかなり、その外血の道より出づるにだは病ひに盡く効あり。

○月水(つきやく)不順を治す名方 天女丸 百廿四文
くわいにんを休む妙やく、月々の經水滯れば樣々の病となる故、これを用ひ給ふべし。いかほど年久しき不順も治らぬ事なし。又兼々子をうむ人此藥毎月一包つゝ用ひ給へば何ヶ年も懷姙せず、その月よりよき頃と思はゞ藥を休むべし。この藥は産と産との間を遠ざけ婦人を健やかにして、生れし子もすら〳〵と成長する婦人の良藥也。

○紅毛奇方 妙あらひこ 代五十文 廿四文
すべて男女に限らず御身じまひ御風呂に召させ給ふか、手水を使ひ給ふ折に、糠袋の中へ入れ用ふれば、御顏御肌へ玉の如く清らかになり、うるはしきつやを出だす。

○御懷中早化粧 あづまの 代百文 五十文
御ものまうで、御遊山の途中にて、白粉はげるとも、すぐに間に合ふ御調法の藥布なり。

○金勢丸 代百文 五十文
酒の醉をさまし、諸々の毒消し氣付腹一切の妙藥、諸病に即効あり。懷中して甚だ調法の丸子なり。

○しやくの黑藥 大包百文 小包五十文
いかほど強き癪なりとも立所に治す。平生持藥に用ふれば、一生癪の根をきる良藥なり。

○御顏の藥 洗粉おしろい 薄化粧 百文 五十文
あつき御化粧を嫌ひ給ふ御方、或は四十才以上の御方によし。夏化粧、薄白粉のうへなしなり。

○極製御ふしの粉 五十文 卅二文 十六文
外に類なしの極製法也。

○御藥はみがき 大箱五十文 小箱三十二文
正銘麝香りうなに丁子入り、他家無類の名方、砂を用ひず、御齒藥り一式にて製する故、口中に入りて甚だ輕し。一流無味なしの製法、つけ匂ひにあらざれば、日かずたちても匂ひ失せる事なし。

● 又々此所にて式亭製藥御ひろう

○御にほひ袋 蘭香袋四季の友 代金貳朱青
藥の類かさばる物を用ひず、外に類

(裏表紙ウラへ)

膝栗毛物のいろ／＼

（一）、初代一九作の膝栗毛

初代十返舍一九の「東海道中膝栗毛」を援り出しに、之に類似の作頻出した。延いては明治初期にまで及んだ。また一種近世小說史壇の偉觀、奇觀であらう。本記述は、そのこれが類似作の一斑目錄と、並びに自分の藏本又は一見した二三に就ての解題である。先づ、膝栗毛の類似作を、朝倉氏の「日本小說年表」及び新群書類從「書目」の二著及び一二現品に據つて、順序に拾はう。足らざるは、最後に補ふことする。（以下の目錄中、外題の上の●印は翻刻物（活字本）あるものの意）

外題	冊數	作者	畫者	刊行年代
●東海道中膝栗毛初篇	一	初代一九	榮水口繪	享和二年

○但し此の初篇、本文冒頭外題は「浮世道中膝栗毛初篇」とあり。序には「道中膝栗毛」とあり。

外題	冊數	作者	畫者	刊行年代
●同　後編	二	同	自　畫	同　三年
●同　三編	二	同	同	文化元年
●同　四編	二	同	同	同　二年
●同　五編	二	同	同	同　三年
●同　追加	一	同	同	同
●同　六編	二	同	同	文化四年

○此の文化四年すでに、「東國滑稽膝栗毛一」「旅枕裏青海八」などの摸倣作出づ。尚、後を看よ。

外題	冊數	作者	畫者	刊行年代
●同　七編	二	同	同	文化五年
●同　八編	三	同	同	同　六年

○此年、同作の「江の島土産」出づ。後を看よ。

外題	冊數	作者	畫者	刊行年代
●續膝栗毛初編（金比羅道中）	二	同	月麿口繪	同　七年
●同　二編（宮島參詣）	二	同	北齋口繪	同　八年
●同　三編（木曾街道）	二	同	月麿式麿口繪	同　九年
●同　四編（同）	二	同	自　畫	同　十年
●同　五編（同）	二	同	月麿式麿畫	同十一年
●東海道中膝栗毛發端	一	同	式麿口畫	同
●續膝栗毛六編（木曾街道）	二	同	同	同十二年
●同　七編（同）	二	同	二代歌麿口畫	同十三年

●同　八編（従木曾路至善光寺）二　同　二代歌麿口絵　文化十三年

●同　九編（善光寺道中）二　同　二代北斎口畫　文政二年

●同　十編（上州草津温泉道中）二　同　春亭口畫　同　三年

●同　十一編（同）　二　同　自畫　同　四年

●同　十二編（同）　三　同　同　同　五年

二、初代一九自身の膝栗毛擬作

●滑稽江の島土産　一　初代一九　春亭畫　文化六年

●同　二編　二　同　同　同　七年

●同　三編　二　同　同　同

○右にて完結。

●滑利喩言大師めぐり上編　三　同　春好畫　同　八年

○右、未完のまゝ。

●串戯教諭六阿彌陀詣前編　二　同　同

三、一九以外の、一九作追補のもの

名古屋見物●●●●●道中膝栗毛　上下二册　東花元成　墨僊口絵　數者畫　文化十二年

○一名「四編之綴足」、（この本の事、後に細説せん）（この本、他目録類に一切なし。）

續々膝栗毛初編　二　同　自畫カ　天保二年

同　二編　二　同　同カ　同

○此年一九死す。此の「續々膝栗毛初、二」の四册は、寓目稀なるもの。に就ては、飯島花月氏の記述（「書物往来」第五、第六に出づ。）にくはし、參照。

●同　後編　二　同　文化九年

●同　三編　一　同　同　十年

●方言修行金草鞋初編より貳拾壹編　同　月麿及び國丸等　自文化十年至天保元年

○右、合巻物、一編六巻（三十丁）。

●滑稽俳語堀の内詣　三　同　文化十三年

●堀の内詣後編雜司ヶ谷紀行　三　同　文政四年

續々膝栗毛　三編　二　二代一九　天保六年

○此の二代一九は、例の絲井鳳助の改名せるもの（初代歿後間もなく）。春馬改めの一九（實は三代）ならず。尚、この「續々膝栗毛」については、花月氏の記述を參照せよ。

●奥羽一覧道中膝栗毛初編　三　二代(實は三代)一九　　嘉永元年
●同　　二編　三　同　　同
●同　　三編　三　同　　同
●同　　四編　三　同　國芳畫　同　二年
●同　　五編　三　同　一信畫　同　三年
●方言修行金草鞋　貳拾貳編より貳拾四編(完)　二代(糸井)一九　天保三年　天保四年
●雜司ヶ谷紀行後編王子紀行　三　梅亭金鵞　年代不詳

(四)、初代一九以外の、膝栗毛物擬作

英國滑稽羽栗毛　初編　一　宇多樂庵　嬉丸亭　文化四年
旅枕裏青海　前編、後編　八　彦玉作　藍月畫　同
○右、文政七年「播州膝栗毛」と改題。(書目)
身延道中滑稽華鹿毛　三　一九校　河間亭主人　永山畫　同　六年
諸國無茶修行　一　山赤亭川々　等琳　同
○右、疑はしけれど。
成田道中黄金駒　一　赤項賀米　同　八年
田舍通言驛路の鈴　一　東里山人　春扇　同
○膝栗毛物なりや、疑はし。
王子土産　一　一九閲　長二樓乳足　同　九年
○酒落本「世界花の下物語」(乳足)(年代不詳)の改題又は同一本ならずや。「花の下物語」は、予之を藏するが形式は、酒落なるも、内容、王子參の二人の滑稽にして、宛然「膝栗毛」の擬作なり。姑らく疑ひて記す。尙「書目」には、花の下物語を中本の中に舉げ、一名王子道中膝栗毛とせり。(久)
日本惣社津島土産　四冊　初貳編　岩井雪齋　數者畫　(初)文化十一年　(貳)文化十二年
○名古屋版。(此本、年表、書目共に記入なし)右の解題本誌前々、前册を見よ。
●大山道中栗毛後駿馬　初編　二　鯉丈　國直　文化十四年
○一名、大山道中膝栗毛。
●同　　二編　二　同　　同　文政元年
●同　　三編　二　同　　　　同　四年
ぬしにひかれて善光寺參詣　二　岡山鳥　貞房　同
芝土産滑稽道中雲助斷　三　曉鐘成　自畫　同　三年
博勞俚談旅壽々女　三　鯉丈　　文政八年

滑稽有馬紀行　三　大根土成　白暎　同　十年
樂屋道中記芝飆栗毛　二　濱松歌國、　同十一年
道中役者三升栗毛　二　濱村輔重　春　同十二年
◉温泉土産箱根草初二編　六　鯉丈　天保三年
○右、書目は、弘化元年刊とせり。
◉同　三、四編　六　二代春水　弘化二年
○右、完結。
滑稽驛路梅　三　石橋庵增井　華溪　天保三年
○右、京、名古屋版。前册「江戸軟派研究」を見よ。
滑稽道中宮島土産　六　十方舍一丸　自畫　嘉永四年
○無論大坂版か。（久）
滑稽富士詣　十　魯　文　芳虎　萬延元年
談合膝栗毛　三　十方舍一丸　自畫　年代不詳

道中芝飆膝栗毛　二　藤山人　同
近郷道中膝栗毛　九　狂訓亭主人　英泉　同
（但し初、二、三編三册は、弘化三年出來）
旅中滑稽脚栗毛　六　黎川子　同
女膝栗毛　三　同
松山道中膝栗毛　六　同
滑稽千社參　八　梅亭金鵞　鶯齋　同
○以下、「年表」「書目」以外より補。
浮世膝栗毛　二　一九閲　乳足作　年代未詳
甲州道中膝栗毛　一　魯　文　同
筑波道中膝栗毛　一　不　詳　同
秋葉參詣一九紀行　二　同　同

（五）、初代一九「膝栗毛」の改刻本又は増補本

繪本膝栗毛　初編より七編　一九原稿再鐫　英泉　第五編弘化五年　第七編弘化七年
○右、合卷物の形式。一編二册（一册は十丁）、毎丁挿繪入。此本、「年表」及び「書目」共になし。
◉滑稽五十三驛　初編より十編まで　初代一九稿　畫者不明　文久二年
○右、舊版「東海道中膝栗毛」全八編の改版也。表紙貼外題は、東海道中膝栗毛とせり。是れ、本文は全く舊版本と同樣なれど、編次、挿繪を改めしもの。（編次も舊の八を十に改めたり。）「滑稽文學全集」に飜刻せる東海道中膝栗毛は此の版也。畫者不明なれども、頗る拙なり。（此事、「年表」、「書目」共に記載なし。）
東海道中栗毛彌次馬　二　初代一九稿　岳亭春信寫　芳幾　文久元年

○此本、「書目」、「年表」共に、刊行年代未詳にせり。予に藏本あり。その初編序に文久元酉年初秋とあり、且つ検印も酉九改也。即ち文久元也。形式合卷、毎丁挿繪あり。文詞は、僅かに面影を残すのみにして、全く野卑、且つ短篇に改竄、毎丁一驛の描寫にして、猥雜なる挿繪よく之に伴ふ。神奈川の次に、横濱といへるありて、蝙蝠傘を挿せる支那人の辮髮に、古草鞋を附けんとする喜多の惡戯如きを描けり。表紙極彩色摺。

(尙、此本の事、後にいふべし。)

増補東海道膝栗毛　自初編至七編　狗々山人　芳年　自慶應三年至明治三年

○一編上中下三冊、合計七編二十一冊也。中本(合卷式ならず)東京松林堂梓。文詞、原本(初代一九稿)の物を所々切り縮め、狂歌も一を取りて二を捨つるの体に出でたり。編者の狗々山人は、例の笠亭仙果也。此本、本文冒頭には、「道中滑稽談」とせり。(尙、後說を見よ。)

以上を以て、明治以前の膝栗毛、及び類似作、及び改版本等の一斑目録を総る。錯誤、脱漏また尠からぬであらう。補正を俟つ。次に、今自分の藏本にあり合せた、比較的閲見の尠からんものに就いて述べ、最後に、明治以後の「膝栗毛」と命せるものゝ一斑を、各書目類によりて補記しておかう。

○

先づ、嘗て一見したものに就て一二を述べる。第四、一九以外の擬作の中、滑稽有馬紀行の三冊は、嘗て一見した事がある。これは類のない半紙本である。無論大阪版で、挿繪は、有馬風呂の裸体の圖などを見たが、拙である。表紙は黄、有馬筆が圖案にされてゐた覺えである。(文政十年刊といふもの)。

身延道中滑稽華鹿毛、これもその第二、第三編を見た事がある。中本型。普通の初代膝栗毛本と類似の内容と挿繪。さて以下、藏本の部解説にうつる。前目録中の註と、重複の點ありやも不知。叙述の都合上と、諒恕ありたい。

○

【目録】第三の、一九作追補の中、

名古屋見物道中膝栗毛　上下二冊　東花元成作　文化十二年

都々一ぶし文献の傍証として遺るべからざるもの。即ち此編上に、宮驛の描寫と共に、すでに「ざゝいつぶし」の名を記入し、その一首を記せり。即ち此本、文化十二亥の春と序にあれば、當時以前に此のざゞいつぶしが、名古屋及び宮驛に行はれたる證左である。勿論小寺玉晁の「ざゞいつぶし根元集」現れたる今日に於ては、寧ろ當然にして平凡なれど、また多少の傍証と做すに足る。（尚、此等については、本誌貳編第一冊を見よ。）さて、

此本中本二冊、表紙青、貼外題「名古屋見物道中膝栗毛」上又は下。本文冒頭には、「名古屋見物四編之綴足」上又は下と出づ。初代一九の東海道が、宮驛より直ちに桑名に便船して、名古屋を見物なさゞりしを遺憾に思ひて、綴足とは洒落れたる也。而して此の著東花元成といふ。

この東花元成に就ては、色々な意味での疑問を抱いてゐるが、自分は、今はその概念だけに止めて、餘はより多くの考査の他日に譲りたい。即ち此の元成は、一九の系統（門下又は准門下）たることは無論であるが、元は江戸の者、暫らく（この文化十二年前後）此の名古屋にゐた。雅號の類似から、例の江戸京町大文字屋の南瓜と何かの縁由はないかといふのである。（下巻の跋には、「……の南瓜にあらず雅友冬瓜の元成……とはあるが）南瓜に冬瓜、奈邊かの交渉ありと見たいのである。左に、材料として、序、跋の二三を拔萃する。

「（前略）乗懸ッては是非もなく、手綱抱繰四編ひざ栗毛の驥尾に附。（中略）蹈ふんばり大音あげ。關東兵衛九代の强飮。冬瓜の元成、名古屋の筆陣我なりと。（下略）

文化十二亥の春

名古や僑居に
おゐて誌之

狂土たれ
東花元成」

(以上、上の序)

「(前略)〇予生れて江戸なれば水道の水を飲んで馬鹿氣強今(おしつよく)は金のしやちほこをにらんで僑居すること光陰矢の如し。はや春秋五ヶ年を經ぬ。さるによつて宮重大根のあまみをおぼえ、尾州味噌の壚からきあじわへ、くはず貧樂にまかせ、名所舊蹟もあらましたづねあるきぬ。(下略)」(以上、上卷凡例の中)

「爰に京丁大文字屋の南瓜にあらず雅友冬瓜の元成、膝栗毛の宿引をして、(下略)」(以上、月光亭墨僊。下卷の跋の冒頭)

本文は、彌次郎、喜多八郎として此の兩人の名古屋見物の件。次編の滑稽追々出板、稿成るの意味が下卷に書かれてゐるが、刊成らずして、此の二冊のみと思はれる。上卷の凡例には、「前編二冊とはなりぬ」と作者自ら記してゐる。上卷口繪、北亭墨僊(例の北齋、名府滯在中の弟子。名古屋浮世繪師の雄。門下に玉僊等あり)宮の濱、高燈籠の、頗る例の北齋張り(その九段坂の横繪の如き)の遠近畫を描き、額縁の如き輪廓をとれるともその摸倣といふべきである。黄、茶褐、薄墨などの淡彩、西郊田樂(椒芽田樂)の狂歌の賛があるさて上下二卷中の挿繪は、墨山(僊)及び其他。各畫に當時尾人の狂歌の賛を掲げたること、初代一九の東海道本と体裁同樣である。文詞、後者「津島土產」よりは、まだましかと思はれる。

【目錄】第四、一九以外の、膝栗毛擬作の中、

日本惣社津島土產 初、貳編四冊 の增井棗齋作である事、及びその棗齋の略傳、著作概目錄、並に此の「津島土產」その物についての解說等は、前々月、前月とすでに繰り返してゐる。最近誌友の一

に此の完本四冊の藏本ありとの通知を受けた。何れ一覽を乞うた上、（欠本補寫の價値ありとは思へないが）何れ他の機に發表しよう。（尙、京傳の著作中に、尙一種を發見したるを告げておく。それは、新群書の書目を今日檢索して居て偶然の獲物であるが、其の洒落本書目中に、文政五年、似口鸚鵡返一、石橋庵眞酔作とあり、註に、「安永二年「鸚鵡盃」（出放題夢中作）の後編に擬して出せり」とある、即ち是である。板元等は未詳なれど、更に一種、殊に洒落本の列本を加へたことになる。）

【目錄】第五の、初代一九本の改刻本其他の中、

　繪本膝栗毛、一九原稿、英泉畫といふのは、藏本零本、その五編二冊と七編二冊とである。表紙、普通合卷物の如く、一編上下の二冊にて、畫が左右に續くやうになつてゐる。此の第五編表紙は、英泉の畫、バックを額緣やうにして天龍川の景、上冊の右下に（即ち畫面二冊ツヾキの右下のふち）御兩人の旅姿を描いてゐる。英泉の風景畫として面白きもの。着色は、遠景の赤と、樹蔭のうす墨、水の藍、他の茶と此の四色。第五編上冊の見返しは如左。

故人十返舍一九原稿
溪齋英泉狂畫
每篇二冊續而發兌
東海道中　繪本膝栗毛　第五編
書肆　文盛堂
本所相生町一丁目　紙屋利助版

　本文冒頭には、「繪本道中膝栗毛」とある。以下此の第五編、荒井より御油（上冊）、つゞき赤坂より池鯉鮒（下冊）まで。每丁挿繪、草双紙体なる事前述の如し。文詞、初代一九を多くそのまゝ、唯、合卷風の假名書きと改め、序を文盛堂曰などゝ作り替へたるのみ。第七編二冊は、追分より松坂雲津（以上上冊）、つゞき山田宿まで（以上下冊）。

以上二編の零本ゆゑ、此の本何編まで出でたるやは不明であるが、とにかく、此の第七編の終りには、下の如くある。

繪本膝栗毛八編　伊勢外宮より妙見町内宮相の山古市の滑稽、續いて出版いたし候。京、大阪、金毘羅參詣まで追々差出し申候

とあるが、その中英泉も死ぬ頃（嘉永元年）であるから、若し續いてゐるなれば、書者が代つてゐよう。然し此の本殆ど英泉の編書と見て可なりであるから、（文詞は初代一九を繼承してゐても）英泉の歿年を以て中絶したのであらうと思ふ。

滑稽五十三驛　初編より十編まで　改刻本　文久二年

これは、「滑稽文學全集」にも、一々挿繪（舊版とは異る）を入れて飜刻されてゐるから、解説を略く。唯、此本原本の体裁をいはゞ、舊版（但し舊版本に初、後摺の二種あり。初版は、青表紙に竹格子の例の一九印を一パイに摺れるもの。茜表紙は、後摺本）後摺本よりは稍厚つぼたい、黄味の勝つた表紙。本文の文字も太く、拙。挿繪も勿論、太い線の、以前の野卑乍らも飄逸の氣分のあつたのとは、比べ物にならぬ。文詞は、全く舊版本（初代一九）と相同じい。

東海道中栗毛彌次馬　二　岳亭春信寫　芳幾　文久元年

例の讀本作家で浮世繪（始め北溪、後に北齋に學ぶ）も描いた岳亭春信（定岡）の寫といふのである。（見返しには岳亭記、十返舍一九作とある。）書者の芳幾も、一惠齋芳一九など、洒落れてゐる。藏本その初編。年表等の二とは、初編貳編の意味であらうか。挿繪頗る幕末氣分を漂はし、文詞も亦初代一九の迹を改惡すること甚しく、一丁多く一驛として、各丁に猥雜な挿繪を揭げてゐる。

增補東海道膝栗毛　自初編至七編　狗々山人編

芳年の書である。文詞、增補とはいへど、多く初代一九の筋をその儘繼ぎ、唯、各驛の書き

出し結び等に改惡の迹あるかと思はれるものである。この本、寧ろ芳年の畫に於てとりえあるもの。初代一九の原本を摸し乍らも、又彼の自在なる、豁達なる、しかも簡素な筆を廻らしてゐる。其他に於て別に謂ふべきはないが、唯此の狗々山人といふ者である。魯文も狗々と稱したやう（書名、失念）傳へられてゐるが、それはこの仙果の誤りではなからうか。「江戸時代戯曲小說通志」や、「慶長以來小說家目錄」などにも狗々山人を仙果の別號としてゐる如く。（小說家目錄は、狗々山人と誤植してゐる）とにかく此の狗々山人、仙果であらうと自分が見たのは、左の此本三編序によるのである。

「（前略）十返舍翁諸國の方言に精しといへども、微細の所に至つては誤なしともいはれず。余は皆無餘國の俗語に疎けれど尾州は生國なれば此書にも彼邊ばかり少しは其誤りを訂しぬれば、原本とはや丶異る所これかれあるべし。（云々）

明治二己夏　　狗々山人

これで狗々山人は、熱田生れの仙果（本姓高橋、初代種彦の門人。曾つて二代種彦を名のる。）であることは肯づけて、且つ彼れ晩年窮余の著作たる事が分るが、唯可笑しいのは、この序の明治二とある事である。從來の諸說、凡て仙果を慶應四年二月九日歿、本所中の鄉東盛寺に葬る、享年六十三としてゐる事である。すると、此の明治二は、幽靈が書いたかといふ事になるが、これは、恐らく、（自分の仙果—狗々山人からは）明治二は書肆のさかしらで、仙果生前に既に纒められてゐたものと思ふ。強いていへば、狗々に二人あつて、此の後の方は、仙果の弟子かと思へるが、そんなに熱田生れが都合よく二人もある筈はない。唯、仙果の歿年が明治二

年否此本七編の三年になり下らぬ以上は、遺編と見るを普通とせよう。しかし妙な現象ではある

以上、略自分の目下の所期を書き盡したから、最後に、明治の膝栗毛物を、唯その書目のみ、左に見當りたるまゝを記さう。(二三の他は、殆んど未見本。唯賣立目錄等による自分の記憶である)。

○

○明治以後の膝栗毛物一斑

西洋道中膝栗毛　十五　魯文　明治

○中本、表紙綠。外國旗を打出しにしたるもの。嘗て零本を家藏してゐて、子供の時、そのエキゾチックな畫詞に胸を轟かしたが、今は散じてしまつた。

東京開化膝栗毛　三　笑門舍福來　四代豐國　明治九年

花街膝栗毛　一　矢尾蛸一郎　明治十六年

○此本の事、早稻田文學「明治文學胎生期續篇」(大正十四、七)に生方氏の記述として委しく出づ。

猫狐豐川詣笑談膝栗毛　三　菅沼左膳　明治十七年

○此本、三河岡崎、伊藤小文司(環翠堂)發行人。著者又同町の人。菅沼氏、雅號を桂林舍一枝といふ。畫、口畫とも數葉。(判、中本和製)

彌次郎兵衛喜多八再來膝栗毛　三　夢外舍主人　明治廿三年

○此本、中本、(洋紙和裝)、發兌、東京いろは、山口藤兵衛、大川屋。著作者本名を宮川勝五郎といふ。挿繪面白し。人物は丁髷の兩人にて、背景は明治の洋館人力車等也。再來して一々勝手の狂つた所が興味か。(場面は、東京也。)下女の轉がり落ちる所など、隨分猥雜な繪がある。畫者不詳。

民權膝栗毛　(二)　不詳　年代不詳

其他尙多かるべし。今は、唯その一斑のみ。以上を以て、姑らく本記述に筆を擱く事とする。幕末類似本に、原本綱目のたび、隨時增補する所あらう。

「尙、例の春本男一丁(金鷲)の猥本膝磨毛八編(十六册の解題は、故意にこれを略いた。唯何處までも形式(見返し序まで)及び筋、一切初代一九の東海道を擬して、而も猥になり切つてゐるだけを述べておく。蓋し一種の珍であらう。」

「稿本」江戸寛政雜錄」の演劇記事（上）

稿本で「江戸寛政雜錄」（全十卷五冊）といふものが家藏にある。序跋によると、大阪の人太平散木（身元不詳）の編、「近き頃東都に下り、」その見聞雜事を輯錄したものといふのである。内容、市井の雜事、風俗、及び演劇逸聞等であるが、就中演劇逸聞に於て、取るべきものが多いと思ふ。今左に、編者の序、及「南島の俳醫萬歲樓」なるものゝ跋と、全目次と、次に全卷中の演劇記事の目星しきものとを拔載しておく。（間々原文の假名を漢字に、淸音を濁音に換へ、且つ句讀送假名等は一切新たに附した。圏點等亦自分の便宜上である。）當時劇壇の逸資料ともならば、幸甚である。

○

江戸寛政雜錄序

都をば霞とともに出でしかど、秋風ぞふく白川の關と能因が詠ぜしは、居ながら羇旅の心を思ひよりしなり。予近き頃東都に下り、聞き及びにし彼地の繁華、誠に目を驚かし侍りぬ。夫が中にも見るにつけ聞くにつけ書き記したる珍奇の噂どもを取りあつめて、十の卷となし、寛政雜錄と題し侍ると云爾。

江戸寛政雜錄惣目錄

第　一

一麴町扇屋娘玉花子（ぎよくくわし）、幼才の事　并に玉花子孝心にて、一萬枚大字席書の事

第　二

一佐野善左衛門殿墓所の事
並に石碑の圖

一江戸大火の事
並に築地本願寺御堂類燒の事

一役者藤川山吾急死の事
並に松本幸四郎上方へ登る事

第三

一陸奥にて仙臺通寶の錢を鑄る事
並に他國通用御差留の事

一八丈が嶋より開帳來る事
並に八郎大明神緣起の事

一竹本政太夫江戸名殘の事
並に津の國難波骨接出張の事

第四

一井伊家女中忠烈の事
並に敵討の實説

一中洲にて役者發句會の事
並に海老藏名句の事

第五

一小野川强力の事
並に谷風、病氣の事

一兩國橋新築地繁昌の事
並に小竹榮五郎一世一代の事

一麻布人相見妙術の事
並に市兵衛町酒屋、放蕩の事

第六

一若林俊哲、名譽居合の事
並に下人口論の事

一常州百姓の娘難病の事
並に下女の生肝をとる事

一酒井雅樂頭樣御溜り詰に成り給ふ事
並に御能の事

第七

一江の島辨才天御戸開の事
並にそそ坊主の事

一角の芝居作者増山金八、江戸へ下る事
並に新作東通事の事

第八

一龜戸天神雨乞の事
並に天國寶劔奇瑞の事

一市村羽左衛門、中村座へ出る事
　並に羽左衛門一世一代の事

第　九

一嵯峨釋迦如來開帳の事
　並に夜半参詣御停止の事
一猿子橋喧嘩の事
　並に侍、人をあやめる事
一市川門之助が召使ひの事
　並に吉原の曲輪にて珍説の事

第　十

一猿若座古手屋八郎兵衛狂言の事
　並に喧嘩騒動の事
一江戸米高直の事
　並に御仁政御觸の事
一五十三次人馬割増の事
　並に因幡小判の事

惣目録終

編者　太　平　散　木

（以上巻一の初メ）

寛政雜録跋

太なる哉太平の御代の榮へや、御上の御威勢は申すも愚也、いやしき民家波濤の末まで君恩にあきみち、四海野に手打、まことに唐土堯舜の御代もおさ〳〵ならべ比すべし仰ぐべし。散木子が東土産を通覧するに、寔に五十三驛の長途に手脚を勞せずして、彼地の形勢目の下りに見るべし。爰に跋して心意の怡悦する處を記し侍る者ならし

南嶋の俳醫

萬　歲　樓

（以上、巻十の最尾）

○役者藤川山吾、急死の事

並に松本幸四郎、上方へ登る事

いづくの土か我を待つらんといへる古歌の心、旅せる身には殊さらに感ふかく哀にぞ覺ゆ。
爰に歌舞伎芝居役者若女形藤川山吾といひしは、大阪にありて角の芝居座本をも勤め、贔屓あつきものなりしが、辰のとし冬の末に至り、東に下りけるが、雪霜深き寒空をしのぎ、長途の旅をしける故にや、江戸へ着きし其日より病の床に臥し、醫療手を盡せども、其甲斐なく終に東の土とはなりぬ。惜しむべし〳〵。其亡靈故郷の妻子一門を慕ふ心深かりし故にや、幽靈と成りて道頓堀山吾が宅へ來り、妻子に對面せし其噂明白なり。芝居邊の人に尋ねて知るべし、疑ふ所なし。

扨又松本幸四郎は、江戸生立の役者にて、贔屓強く藝道も又功者なり。(ホノマヽ)大坂へ抱へられ、岩井半四郎と二人づれにて上るとて、名殘の狂言を出し、殊の外流行りしが、程なく大坂へ着けるより後は、江戸表の評判只幸四郎一人當り通すやうにて、當大阪道頓堀芝居類燒以前顔見せ以來、二の替り三の替りと只幸四郎半四郎の評判附のみを江戸表にて賣出し、殊さら江戸の風俗にて、役者の名をいはず、其家名を呼んで賞むる事にて、幸四郎が家名高麗屋といふ、是によつて中の芝居貳の替り傾城正月の陣立の狂言筋書に幸四郎仕打等合せ記し一冊の本となし、名大阪高麗屋橋と號して賣出せしに、殊の外賣り高上りけり。我此地へ歸りて幸四郎が評判をきく所、江戸にての噂とは大きに相違せり。見ると聞くとの違ひ、誠に天地の隔たる如し。

松本幸四郎ハ高麗屋といふ。　尾上菊五郎ハ音羽屋といふ。
澤村宗十郎ハ紀伊國屋といふ。　岩井半四郎ハ三河屋といふ。
瀨川菊之丞ハ濱村屋といふ。

あらかじめ皆斯樣の事なり。土地によりて風儀の異る事、また珍とすべし。すべて今大阪生立の役者江戸に有りて名を知らるゝもの、三桝德治郎、澤村宗十郎、中村里好（里好は中村松右衛門といひて、後には中村松江といふ）、瀨川菊之丞（市山富三郎が事なり）、瀨川如皐（富三が兄七藏事也）中村幾藏、是等の類なり。德治郎は三ヶ年あと、辰のとし江戸へ下り、木挽丁にて去年まで殊の外評判よかりしが、堺丁へ來りし後は一向不評判なり。德治郎藝の立（性カ）は、中村富十郎にて始終をしたるものなれ共、江戸の人氣大阪などゝ事かはり、藝の性根を見る事なし。仕打くすみて見にくしとのみ云ひ觸しけるは、惜しき事なりと、江戸にても黑（玄）人分は評判して惜しむ事なり。里好は中村勘三郎座の立役者なり、よく江戸の氣風を呑込みてよし。幾藏は爲十郎の型をうつして人の請よし。如皐は桐長桐座の立役者なり。宗十郎は中村座やつしにて、殊なう女のひいきする事なり。菊之丞は竹田の小役者より成上りたれど、今菊之丞が名跡といひ、狂言も余程上達してみゆれば、人の用ひ殊の外よろしく、三桝德治郎、中村里好などより遙か上に立てり。京より中村十藏當春下れり、さばき役請よし。

淨るり語りにては、竹本政太夫、竹本住太夫、竹本是太夫、豐竹越太夫、豐竹百合太夫、鶴澤三次、皆江戸にての立物なり。政太夫評判、黑人うけ始終よし、素人請大概なり。百合太夫は四段目、語り聲昔にかはらず美し、町の請も先づよし。越太夫は大坂にてさまでの太夫にてもなかりしが、江戸にては人受よろしく、今豐竹肥前座にて二段目語りて、三次が三味線、江戸一番といふ。是太夫一向評判なし、結城座にゐれどもゐるかともいはず。住太夫は此春より歸り新參にて江戸の受よき太夫なれ共、出し物あしき故にや、格別當りなし。小栗の三段目極彩色の兵助内の段など語りけれども評判なし。此春に成りて結城座といふ芝居へ豐竹若太夫下

りたり、是は本竹本和佐太夫といふて三勝のさわり場得手の太夫なり。其後嶋太夫といひけるが、また若太夫と改名し、看板にも元祖ゟ第三代豊竹若太夫と書いて出し、當大坂市の側にて（本ノマヽ）せし偖代萩三代目此太夫場を出し、比類なき大當り、外々の太夫皆此の若太夫に押されたり。誠に大手柄といふべし。

人形にては桐竹門三が子門藏下り、評判大きによし。元來江戸の土地の風としてふと面白しといひ出せば、無性にそゝり立ちて、是を賞め、一旦悪しきといひ出せば見た者も見ざる者も皆口を揃へて誇る事なり。夫故浄るりにても江戸の人の好く所をよく呑込んで語る時は、當りはあれ共、浄るりの本躰水臭く成るなり。政太夫、住太夫など本躰を崩さず誠の義太夫節を語りて、あてに行かざる藝はやゝもすれば評判うすし。既に以て去々年、嵐雛助下りて評判悪しきにても知るべし。誠の藝道に目の明かざる所なり。太夫役者に限らず、久しく江戸に留まる時は金は溜りて藝は下るなり。金を溜めんと思はゞ江戸よし。藝を勵まんと思はゞ大坂にまさる事あるべからず。此故に霧澤文藏など久しく江戸に留まりし事聞き及ばず。渡世に賢こくして藝に疎きは、其道の耻とする所ならずや。

附り藤川山吾亡靈、道頓堀母の許へ來りしは、去年押詰めての事なり。家内には今頃など山吾歸り來るべしとは思ひもよらざりしに、衣服の表着に浴衣を、て短かき脇差をさし我内へ來りければ、母や妻子は大きに喜び、定めて旅の疲れこそ有らんとて一間に入れて休ませ置きける處へ、江戸よりの仕立飛脚、かの狀を持來りて、山吾死したりと告ぐるにぞ、母親大きに怪しみ、奥へ駈け入りて見る、山吾が來て戻りし浴衣と脇差一腰のみ空しく殘りて、姿は見えず。扨は山吾故郷に殘りし母妻子を慕ふ事の切なる餘り、亡靈と成りて歸りしものと知られけり。誠に痛ましき事にあらずや。此こそ聊かも虚説に非ず、彼のほとりの人々よく知る處なり。疑はしくは尋ねて知るべし。（以上、巻二の三）

○中洲にて、役者發句會の事

並に市川海老藏名句の事

中洲は、江戸御城の東南第一の遊里にして、遊人雅客より集り群をなせば、茶店の灯火河上の遊船、花火の火勢、らん／＼として花の吹雪かと疑はる。此所に松本幸四郎居住せり。座敷甚だ風流を誂せり。幸四郎大坂へ登りし跡賑しとて役者中寄り集り、酒酣にして昔し市川栢莚が餘風とて發句を各々詠せし也、其一貳を記す事左の如し。

探題

つくゑ　　澤村宗十郎
禮帳や机のうへに梅ふゞき

鹿　　中むら里好
しか鳴や奥の院にも泊り客

千鳥　　中村幾藏
千鳥なくあすの氣色や夕滋り

田うへ　　市川門之助
一寸も先へはゆかぬしぐれかな

霞　　芳澤五郎八
霞みけり櫻の中の寛永寺

野分　　大谷廣右衛門
扨しづかすゝき斗りの野分哉

茶碗　　市村羽左衛門
時ならぬ花香きゝつ五月雨

雪　　中村傳九郎
初雪のつもり加減や東山

時雨　　市川團十郎
星はまだ雲間に有て時雨哉

其座に市川團十郎が子海老藏も居あはせたりしが、當年九才なり。我も題を下されよといひければ、心得ぬとて一ツ取らせけるに、開きみれば、ほとゝぎすの題なり。是よき題なりとて

我も口まねを致さんとて、即座に筆をとりて、

聞からに旅寐も嬉し時鳥

斯の如く吟じければ一座感じ合ひけり。誠に昔は八才にて歌よみし例も傳へ聞き侍れど、今の世にもかゝる才子有けるよと、驚かぬ者なかりけり。　――(以上、卷四ノ二)

○角の作者增山金八、江戸へ下る事

並に東都通事を作る事

增山金八は元來江戸の生れなりしが、幼少より大阪に來りて並木正三が流を學び、作名世に高し。今年江戸へ來り、中村勘三郎座に勤め、初はる、三桝曾我といふ狂言を作り、大きに流行りけり。金八江戸に來りて土地の人の詞をきくに、京大坂と事變り一圓詞通じがたし。上方の詞惡しきかといへば恐多くも、十善の御位天子の御座所なれば、誠に日の本の手本なり。然らば江戸惡しきかといはんに、江戸は忝なくも、公方樣の御膝元也。所詮東都の上みへ通じ、あづまの言葉を上へ通じ、上の詞をあづまの人に悟らしめん迚、東都通事といふ書を著はし、未だ板行には出ず。短かき書なる故、印行し難き故にや、爰に其半を書きのせて、大阪の兒女に見せしめ、あづまの言葉を聞きわけ易からしむ。

東都通詞　　增山氏著

上は京　下は江戸

姉女郎　おいらん、　ヲ丶しんき　ヱ丶じれつたい、　しごなし　いくじがない、

ヲヽ夫は〳〵　ヲヤ〳〵、　はしり元　ながしもと、　藝子　藝者、
濱通り　川岸ッぱた、　小むすめ　小あま、　小わつぱ　小僧、
きやうとい　とんだ、　お内寳樣　おかみ樣、　あじよくする　おつうにする、
髮のわげ　かみのはけ、　つと　たぼ、　小ざかしい　おちやつぴい、
月のもの　ゑんかうぼう、　なんきん　かぼちや、　まんざい　まめぞう、
きりわら　たあし、　買てくる　かつてくる、　借て來る　かりてくる、
すぎはら　のりいり、　口合(貢)　地ぐち、　粋　つう、
そふであろ　そうだろう、　せをふゆく　せよつてゆく、　おうてゆく　おぶつてゆく、
おわれい　おぶされ、　そうれい　弔らひ、　おなご　おんな、
ぎん出し　すきあぶら、　おゝすかん　おういや、　ゆどうふ　あわゆき、
みつちや　あばた、　道樂もの　どらうち、　ぬすびと　ごろぼう、
鼻毛よまる〳〵　貳本ぼう、　もむない　まずい、　せうゆう　たまり、
うわしる　したじ、　こかす　ころばせる、　國太夫　豐後、
家ぬし　大屋、　おうこ　てんぴんぼう、　かたげる　かつぐ、
くわんおん　かんおん、　つぶす　こわす、　そこめる　はりこむ、
宿老　名ぬし、　そうか　よたか、　な　だ、
さかい　から。

右大概なり。誠に浪花のあしは伊勢の濱おぎ、國々によりて方言あり、楊子が方言を著はせるも其故ありとかや。

——(以上、卷七ノ二)

（表紙ウラより）

なしの製法、仍て諸方御邸樣の御用に相成申候

○御目あらか薬　龍樹散　代　卅六文

目の病一切によし、はやり目は一日で治す

○小兒百日ぜきの奇藥　百文

水あめにて用ふ、至つて飲みよき藥なり。

○人參仙傳即功油　五十文　廿四文

第一打身切傷すりこわし、小兒胎毒くちかさの類、腫爽瘡燒、草履草鞋食ひ、毒虫に螫されたる、その外諸々のでき物一切によし。

○ふり出し廉寰入り　風引一夜なほし　四季か げん代　廿八文

第一四季の引風、暑寒のあたりに即功あり食傷くわく亂、喘咳、癥冷、水のかはりのぼせ引下げに妙也。他家に製する振り出し藥い及ぶ所にあらず。

○けはへ藥　百文　五十文

世にたぐひなき名方なり。

○專門御眉刷毛

歌川豐國筆新形模樣入彩色摺たたう、懷中御調法の品、代二匁三分、此品は卵の毛にて作りたれば、御顔にあたり軟かにて、けはひし給ふに別而よろし。

以上、馬猿（產まぶさる）を看板さしただけあつて、親以來隨分怪しい藥（天女丸など）もあるが、とにかく全部三馬店製品、販賣であることは「又々御披露」などの語によつて窺はれる

寄贈紹介

○元祿歌舞伎傑作集　上下二卷　高野辰之・黒木勘藏編

上方の部一冊江戶の部一冊計四十四編の元祿劇本所收・內三十一編新出の飜刻本である。但し既出の十三編と雖も、校訂の嚴正親切さに於て類本に勝る事數等也。初代市川團十郎自作脚本は殆ど此に粹を收められた。其他京江戶の作家になる珍本集、劇壇文獻の偉觀であらう（裝幀の美もよく內容に伴つて、近時出版界の最高記錄である。（二冊定價二十五圓、菊版約千五百頁、挿圖二百個以上。東京牛込早稻田大學出版部）

○歌舞伎略年表第二　日比谷圖書館

第二は鶴屋南北號である。大南北の脚本上演に就ての完全に近い年表である。挿圖コロタイプ數圖入。編は、日比野圖書館內東京地誌部主任波多野賢一氏であると聞く。（頒價三十二錢、東京市神田、表神保町克明堂）

○兒童圖書　日比谷圖書館

兒童圖書の分類目錄である。最近圖書此種の概觀として結構である。（頒價不明、同館）

○雜誌の部。新小說（八月號、九月號）○國語と國文學（八月號、九月號）○歌舞伎（第三、第四）○淸元研究　第二號○國學院雜誌（七月號、八月號）○性の智識　七月、八月、九月號）○川柳雜錄　七、八月號）○長唄（第四、第五號）○墓碑史蹟研究（第二十二、第二十三冊、第二十四冊）○帆柱（八月號）○やなぎ樽研究（八月號、九月號）○新舊時代（八月號）

○著者より及び御願の件

名古屋から市外電約四十分の古見といふ海岸で、家族一同此月を暮した。生き殘つた長女、三女幸ひ健全、三女も見違へる程丈夫になり申候○軟派叢書第五編は洒落本を所定頁數に詰めれる丈詰める積。原稿は來月着手、十月刊行を御待ち被下度候○尙、特に御願する件有之、それは、最近自分の思ひ立にて、名づくれば「江戶軟文學大系」といつたもの、その第一として洒落本全集を思立ち、原稿さへ出來れば、刊行の目星は略〻相つき申候。就而從來未飜刻の洒落本、中々自分一家の蒐集では間に不合、就しは甚だ乍勝手、諸賢御愛藏の洒落本書類中、未飜刻（これは拙編昨年十一月十二月の小說飜刻物索引で御照合の上）の物の書目と、及び貸寫の餘裕とを割いて頂き度いのです。右乍唐突幾重にも御願したいのです。未飜刻の物百種は、集めたいと思ひますが、如何でせう。（著者、大正十四年八月二十三日）

定價表

一冊廿五錢　郵稅貳錢

六冊分　壹圓四拾錢　稅共

十二冊分　同　貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割增の事

○照會は返信料添付の事

大正十四年八月二十八日印刷

大正十四年九月一日發行　【貳拾五錢】

名古屋市東區[illegible]十七番地

編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地

印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地

印刷所　扶桑社

名古屋市東區道明町一五七番地

發行所　江戶軟派研究發行所

振替名古屋九六七二番

依託書目 （[illegible]）

■特大判●菊判○四六判△小判

■LA Beate' De La Femme Dans' L' Art（彩色刷五十葉）四十五圓 ■Die Schonheit Dier Frauen（寫眞約三百圖）五十圓■Stratz' Die Rassen schonhiet Des Weibes（約四五〇頁）特製十五圓■同上（假綴）十圓■Stratz' Die Schonheit Des Weiblichen Korpers（約四九〇頁）二十圓■露西亞本（風俗、生理、人體、美術其他）三冊揃總金背皮美本二十七圓●Le Nu Salon（二十八圖）八圓■L'e tude Academizue（三冊、各寫眞二十餘圖）十三圓〇性慾名著文庫（二、三、六、八、四冊既刊全部）十二圓■雜誌（Cl nr 一九一六年度版十二冊（原合本クロース二冊）四圓五十錢■同一九一七年より一九二二年迄の内四十九冊、十四圓■The Outline of Literature and Art 二十四冊、十五圓〇淨瑠璃に現れた女の情操（島中雄三）九十△川柳雜纂（花岡百樹）一圓△大奥の女中（三六判、合本）一圓六十●東京圖書館和漢假名目錄、一圓五十〇吉原十二時（雅望、北溪畫、讀刻）七十〇[illegible]道通鑑（繪入、活字本）一圓二十●支那三百畫家傳（中川）四圓●はじ匂（紅葉著作）一圓●雲のちぎれ（頷雲）八十〇增補浮世繪の印象（尾崎、藤浪）二圓五十●雜誌「露西亞文學」（大正四年創刊號より揃）五冊一圓●近代三十六文豪（文章世界增刊）五十●早稻田號（趣味增刊、明治四十年刊）八十●新社會（堺枯川主筆、雜誌大正五年より大正八年迄）十二冊三圓五十●キユーピズム（蘇武）四十●雜誌ハガキ文學（第三卷一より第四卷一迄）十三冊一圓五十●雜誌七人（小山内薫發行雜誌、漱石「琴のそら音」所收號）八十●ほとゝぎす增刊五人集、五十●六合雜誌（タゴール號）三十●雜誌「隨筆」創刊號、五十●同「白然」創刊號五十●スバル創刊號二冊五十●スバル短歌號（第九號）一圓●東京史稿（皇城篇）一圓■新演藝（大正十年全部、大正十一年半）揃十八冊七圓五十●續歌舞伎年代記（豊芥子新群書、第四）二圓五十〇狀阿彌脚本集（美本）二十五冊揃六十八圓△河竹默阿彌（同案候著、三六判、春陽堂）三圓八十〇續徳川實紀（新本）五冊二十圓■（和）風俗圖説一ノ一より二ノ一まで揃七冊五圓●日本女裝風俗繪本、（和）七冊五圓〇（和）其由縁部彿初編以下三冊合（英泉畫作）八十●（和）八犬傳（馬琴）第一輯より九輯揃（明治十六年複製、繪入）二十八冊五圓■日本風俗圖繪（師宣の部）特製絹帙入三圓五十〇古今名家戲文集（序跋、報條類）八十〇近松門左衛門、巣林子戲曲（民友社）揃二冊一圓五十●明治文化の研究（雜誌解放增大號）一圓二十〇日本歳事史京都の部完（江馬務）二圓〇むら竹（篁村。明治二三刊）一册三十〇金港堂小說叢書（明治二〇刊）五十〇十千万堂日錄（紅葉、美本）一圓〇江戸紫吕記（靜軒著、銅牛註）五十〇近松淨瑠璃集（有朋堂文庫中卷）一册一圓●パリー（長田秋濤、珍本）一圓五十△（和）端唄部類ごごいつの部一册（能六齋）横本八十●（和）胸算用嘘店卸（北齋自畫作稿本、稀書複製會本）二圓五十●反古袋（綠雨、初版）一圓■巨万ざらへ（福井藩市川庸德稿本演劇風俗漂流談等、舊永田文庫本）美本二冊三圓●（和）名人忌辰錄（關根）初版本揃、五圓

〇買入希望。●●●●演藝畫報（本年一月號及び四月號）なるべく美本。[illegible]當發行所文庫

在品目錄

〇雜誌「江戸軟派研究」初編第七册より第二十五册まで（揃）一册二十五錢（送料二錢）

〇雜誌「江戸軟派研究」貳編 第一册より最新刊迄（揃） 一册 同上

●ごゞいつぶし根元集（江戸軟派叢書二編）和紙和裝本（非賣品△本購讀者に限り送料共一册八十二錢

●御船歌大全（江戸軟派叢書三編、和紙和裝本） 一册 送料共七十七錢

●俳優樂屋話他二篇（同四編。同） 同 七十七錢

發賣元 江戸軟派研究發行所 振替名古屋九六七二

●狂歌入東海道五十三次 全五十六葉、彩色摺

東京日本木版畫粋社より木板手摺、半紙二ッ折大に讎刻せるもの。初代廣重筆、原圖通りの彩色入。五十六葉の他、目錄附。特價一部送料共三圓十八錢。

●日本木板浮世繪大鑑 全六輯

（同上印刻。大錦大、一輯四枚入。原圖通り多色摺特製奉書紙付。六輯にて三十六圖解說附）全六輯揃送料共特價十四圓。

取扱所 江戸軟派研究發行所 振替名古屋九六七二

照會は 依託書目、在品新本とも、御照會、當方より返信後御送金の事。尚、御照會は一切往復葉書にて御願申上候。

大正十四年八月二十八日印刷
大正十四年九月一日發行

定價貳拾五錢 送費貳錢

大正十四年九月二十八日印刷
大正十四年十月一日發行

貳編　別冊第三　（通編第三十七冊）

文本

江戸時代隨筆考證物飜刻索引（完）

13、書道の部。14、繪畫の部。15、地理の部。
16、日記の部。17、戯文の部。18、俳諧の部。
19、和歌の部。20、國文の部。21、經學並に詩。
22、政治の部。23、法制の部。24、經濟の部。
25、雜之部。

英泉の別隱號と續都々一本解題

尾崎久彌著

江戸軟派研究

別册第參

英泉の別隱號と續都々一附よしこの本解題抄　川柳寺雀羅

猿猴坊月成と英泉のものを見付けたので、一寸御知らせ申上げます。

實は昨年、月成の「百鬼夜行」を見ましたが、あの繪の作者は誰か、初心の小生には分らずにゐました。國貞？……とは思つても見たのですが、豊國、國芳とその畫風をすつかり飲みこめてゐない私には、その斷定が出來なかつたのですが「此花」第十枝、問答欄に怪談夜之殿は、文政頃の版本「百鬼夜行」の後篇、作者は猿猴坊月成（齋馬）、畫は不器用又平（國貞）なりとあつたので、さてはと分りました。そしてあの後篇があつたのかと思ひ、あの化物の畫にほと〳〵感心した私は、その後篇の化物が、怪談夜之殿が、どんなに面白いものだらうと、見たくてならないのでした。

ところが、先日、某氏の藏本數種を見せてもらつた中に、「三味線十二調子」と云ふのがありました。月成作であります。然るに、貴著「江戸歡派研究」二篇第四册に、畫者に初代國貞などの多い點……とあるので、此花紙上の言と合せて、この「三味線」も國貞かと見ましたが、どうもそれらしくありません。どうも英泉らしいのです。（分らない私にも、英泉のあの目だけは深く頭にしみ込んで居るのです）で、なにかないかと所々さがしましたら、ありました〳〵、乙篇（これは三篇甲、乙、丙、で成つて居るらしく、私の借りたのは甲と乙だけ、百鬼夜行と全型）中の或繪の屏風に、

開齋筆、好信畫

とあるではありませんか。開齋筆、これはたしかに溪齋ならんと、早速、浮世繪類考を見れば、名義信とあるので、いよ〳〵間違ひなし。

極彩色で、花鳥又うるはしい。この本をみせてくれた某氏に早速お知らせしたわけです。英泉の白水を知らなかつた私が、この新發見（？）をしたわけです。

以上、一寸何を云つたか譯がわからぬやうですが、前文のやうに、月成物の畫者の中に英泉も居つたこと。と最一つ英泉のかくし名開齋、好信を發見したこと。この二點です。

○

□よしこのぶし　初篇　東都一坊扇歌作
豆本、未曾志留坊一禪の口繪あり、板元不明

□よしこのぶし　二篇　東都一坊扇歌作
全上豆本、曉鐘成撰、初、二編共三度刷、いづれも、十八丁、表紙共十枚。

□うかれよしこの三津のさかへ　初篇
須花一荷堂主人序、横長本、十五丁、百五十章、大阪心齋橋綿谷喜兵衛板。

□うき世よしこのぶし、しきのしらべ、秋三篇。一荷堂半水序、十六丁百六十章、大阪心齋橋通富士屋政七板。

□よしこの、色の一ふし
十四丁、百四十章、大阪平野町石川和助板、以上三册共横長本。小信畫口繪表紙なり、恐らく半水の作ならん。

□逸題
横長本、二度刷の美本、編者板元共不明、体裁より察するに大阪板の如く、前項三册に似たり。備前や三津松、富吉、杉本や百合、小糸等の作者の名より見れば藝者のやうに思はる。十五丁百四十七章。（尾崎曰く、此本古市本か。）

□逸題
吾妻雄兎子編、十二丁六十七章、板元不明。

□新ふらみ都々いつ　風流山人撰
福助改中村芝翫撰、八丁四十八章、石川屋板（東都ッこ）。

□ふらみどゝいつ　八代目三升作
八丁四十八章、丁數上に四の字あるところより察すれば、四編にて他に三册出版されしこと明なり。「前掲「新ふらみ都々いつ」と全書店の出版ならん。

□新板はうたどゝいつ
十二丁十五章、他に端歌數章あり。

□けいしやどゝ逸　二篇
落丁本、自四十一丁至四十八丁三十二章、作者板元共不明。

□新はんげいしやさゞいつ　明治十八年版
二十七丁百八章、東京小菅松五郎出版

□辻占都々逸
馬喰町吉田屋板、二十丁二十章。

□辻うら都々逸
礫川主人編、馬喰丁三丁目吉田屋小吉板、二十丁三十八章。

□歌仙辻うら都々逸
板元不明、礫川山人編、十九丁三十六章。

□おくさん、辻うら詩入どゞいつ　二篇
吾妻雄兎子編、落丁本十八丁三十四章なれど恐らく十九丁三十六章ならん。（以上）

○右、川柳寺氏は、よしこの本と都々一本とを、混へてゐられるが、自分の前回の分は純都々一本である。よしこの本は、一册も其の中に含んでゐない。何れこの増補、續々解題を、よしこの本とも、試みよう。（尾崎）

江戸時代隨筆考證彙刻物索引

（下ノ二）

一三、書道之部

（書道一般、文字起原、書道故事、口傳の類を集む。勿論此種文獻の一斑なり。）

ア、華手書考　屋代弘賢　百家叢説一

イ（井）以呂波探玄抄　不詳　三十輻の一

以呂波之傳　佐々木文山　同

カ、學書捷徑　鴻谷孔平　日本書畫苑一

狩谷棭齋手簡　日本書畫苑一

〇書法の得失を論ず。

キ、麒麟抄　傳、行成　日本書畫苑一

〇書道の口傳書。

金玉積傳集諸額次第　同

〇諸額の書法、願文、消息文等の故實。

ク、觀鵞百譚　細井廣澤　日本書畫苑一

〇和漢書道の故事逸話。

觀鵞百譚批考　中山高陽　日本書畫苑一

コ、弘法大師書流系圖　傳、定頼　日本書畫苑一

金剛談　小林元儁　百家説林正下

シ、汜上漫草　不詳　日本書畫苑一

〇和漢書道の故事。

執筆撥鐙法　細井廣澤　日本書畫苑一

書道訓　森尹祥　日本書畫苑一

書法式　基時　日本書畫苑一

書法發揮　河原保壽　日本書畫苑一

テ、天朝墨談　五十嵐篤好　百家説林續中

〇文字、かな、紙、墨等に及べり。

ト、東江先生書話　橋本圭橘　日本書畫苑一

ニ、入木道傳書目録　源尹祥　日本書畫苑一

〇書道傳授目録、傳授書目等。

ノ、能書事蹟　穗積保　日本書畫苑一

ヒ、筆道祕傳抄　小鹽幽溟　同

筆法才葉集　藤原教長　日本書畫苑一

〇群書類從本の異本也。

ヘ、米家書訣　市河米庵　日本書畫苑一

ホ、墨道私言　廣澤の男九皐　日本書畫苑一

ヤ、様字考　本多忠憲　百家叢説二

夜鶴書札抄　日本書畫苑一

〇書法口傳。

リ、臨池清談　　日本書畫苑一
　○書法論。

一四、繪畫之部

ウ、増補浮世繪類考　齋藤月岑　温知第四
　新増補浮世繪類考　龍田舍秋錦　（單行）
カ、狩野五家譜　小林自閑齋　日本書畫苑二
キ、近世逸人畫史　老樗軒　百家説林續中
ク、繪事鄙言　桑山嗣粲　日本書畫苑二
　○古今和漢畫家の品評。
　畫巧潜覽抄　大岡春卜　日本書畫苑二
　畫則雜話　櫻井雪館述　日本書畫苑二
　畫道金剛杵　中林竹洞　日本書畫苑二
　畫道傳授口訣　狩野素川　日本書畫苑二
　畫譚鷄肋　仲山高陽　百家説林正下
　畫法彩色法卷　西川祐信　日本書畫苑二
　○繪本倭比事の附錄。
　畫法小識　不詳　日本書畫苑二
　畫論傳受祕事口訣　林守篤　日本書畫苑二
コ、増訂古畫備考　朝岡興禎　（單行五册）

ワ、和漢筆道手習指南　浪花隱士　婦人文庫（一節用）
　（日本畫、浮世繪等也。沿革、畫法、他種々あり。勿論未だ一斑のみ。）
サ、三曉庵隨筆　木村時員　〔三十幅ノ四／日本書畫苑二〕
　○畫事、及び畫人の逸話。
　山中人饒舌　田能村竹田　〔日本書畫苑二／田能村全集〕
シ、自畫題語前後　同　田能村全集
　○後は、竹田門人帆足杏雨の編。
　寫山樓記　野村文紹　新燕石十種三
　○文晁等の逸事也。
　畫簡鈔　田能村竹田　田能村全集
セ、西洋畫譚　司馬江漢　百家説林續中
ソ、續本朝畫史　檜山義愼　日本書畫苑二
　○一名、皇朝名畫拾彙。
タ、丹青若木集　狩野重良　日本書畫苑二
　○諸畫家の略傳。
チ、竹田莊師友畫錄　竹田　田能村竹田全集
ツ、圖畫考　齋藤彥麿　日本書畫苑二
ト、屠赤瑣々錄　田能村竹田　田能村竹田全集
フ、文晁畫談　文晁　日本書畫苑二

ホ、細川殿障子畫贊　　三十幅の四
本朝畫史　狩野永納　日本書畫苑二
ム、武江扁額集　月岑寫　稀書複製會第一期
无名翁隨筆　一筆庵英泉　燕石十種二
一名、續浮世繪類考。
柴野大德寺中客殿畫之知簿　不詳　三十幅ノ二

一五、地理之部

ア、奥州人安南國漂流記　　續帝國文庫（漂流奇談）
あがたの三月四月　舊國　續帝國文庫（續紀行文）
秋山の記　秋成　續帝國文庫（續紀行文）
阿州船無人島漂流記　　續帝國文庫（漂流奇談）
葦の若葉　蜀山人　新百家説林一
○大阪滯在中の記事也。
蘆分船　一無軒道冶　續々群書第八（だるまや飜刻）
飛鳥山碑始末　鳴島和鼎　三十幅ノ三
熱海紀行　也有　續帝國文庫（續紀行文）
東めぐり　不詳　同（續紀行）
會津風土記　　續々群書第八
白水郎子記行（あまのこのすさび）　岡西惟中　續々群書第九

ヤ、養德錦顯文鈔　堀直格　日本書畫苑二
○本朝畫家人名、年代歿年等。
ユ、ゆめのたゞち　黒川春村　日本書畫苑二
○圖畫考の批正也。
リ、輪翁畫譚　屋代弘賢　日本書畫苑二

（名所記、特に地理の説明に悉しき地名及國號考（この類雜考の部にもあり、參照し）。紀行文、紀行日記類。外國地誌、外國漂流談の類。此の部凡て風俗、見聞等の資料に富める事勿論也。）

亞媽港紀略藁　近藤正齋　近藤正齋一
亞墨新話　　續帝國文庫（漂流奇談）
有馬名所鑑　不詳　近世文藝第二
安南紀略藁　近藤正齋　近藤正齋一
安南國漂流物語　　續帝國文庫（漂流奇談）
イ（井）、遊京漫錄　清水濱臣　百家説林正下
○風俗の資料、下卷に散見す。
伊香保記　源定勝女　女流文學全集第三
伊香保の道行きぶり　倭文女　有朋堂（日記紀行集）女流文學全集第三
伊勢紀行　去來　續帝國文庫（續紀行）

以曾都堂比（磯づたひ）　只野綾女　續帝文（續紀行）、女流文學全集第三、溫知第十一
潮來圖誌　奇書珍籍第二
伊豆國懷紀行　箕川翁　續帝文（續々紀行）
磐城風土記　續々群書第八
隱州視聽合紀　續々群書第九
ウ、宇瀰地理考　宮崎大門　百家叢說一
エ（ヱ）、永壽丸魯國漂流記　續帝文（漂流奇談）
蝦夷記　續々群書第九
蝦夷島記　續々群書第九
江戸雀　師宣畫　江戸叢書五、六、近世文藝第一
○また風俗の資料多し。
江戸砂子補正　加賀美遠懷　新燕石十種二
江戸惣鹿子名所大全　師宣畫　江戸叢書三、四、
○勿論、また風俗にも觸れたり。
江戸日記　井上通女　女流文學全集第一
江戸方角地名記　加藤船盛　戸川殘花著（東京史蹟寫眞帖）
增補江戸咄　不詳　近世文藝第一
江戸見草　小寺玉晁　鼠璞十種二

江戸名所記　淺井了意　江戸叢書二、續々群書第八
江戸名所圖會　有朋堂文庫四冊、名所圖會本四冊
江戸名所花暦　岡山鳥　有朋堂文庫（江戸名所圖會）、錦葵文庫一ノ二、博文館本縮刷
江戸往古圖說　大橋方長　燕石十種三
遠州船無人島物語　續帝文（漂流奇談）
オ（ヲ）岡部日記　眞淵　有朋堂（日記紀行集）
奥の荒海　岡田士聞妻　女流文學全集第三、續帝文（續々紀行）
奥の細道　芭蕉　百家說林正上、有朋堂（日記紀行集）、續帝文（紀行）
カ、改元紀行　蜀山人　新百家說林一、續帝文（續紀行）
○大阪へ赴ける道の記。
甲州略記　青木昆陽　三十輻の三
庚子道の記　武女　珍書百種一、續帝文（續紀行）、有朋堂（日記紀行集）、三十輻の三、女流文學全集三
甲申旅日記　小笠原長保　續帝文（續々紀行）

麴街略誌稿（かうじ） 河内全節 鼠璞十種二
甲戌紀行 其角 續帝文（續紀行）
高野山通念集 一無軒道冶 近世文藝第二
革令紀行 蜀山人 新百家說林一
○大阪以西の長崎へ至る記。
葛飾記 青山某 燕石十種二
香取の日記 千蔭 續帝文（續紀行）
河内國名所鑑 三田淨久 近世文藝第二
鎌倉物語 中川喜雲 近世文藝第二
嘉陵紀行 村尾嘉陵 江戸叢書一
○江戸附近の踏査見聞錄也。

キ、

歸家日記 井上通女 女流文學全集第一 有朋堂（日記紀行集）
綺語文草 西澤一風 新群書一
○有馬温泉記其他。
紀州船米國漂流記 續帝文（漂流奇談）
木曾路名所圖會 秋里籬島 名所圖會本一冊
癸卯干役日錄 續々群書第九
君のめぐみ 宣長 續帝文（續紀行）
京雀 不詳 近世文藝第一

京都往來 鈴鹿定親 續々群書十
○往來物の一。
京童 中川喜雲 近世文藝第一
京童跡追 中川喜雲 同
魚籃先生春遊記 珍書保存會本
○東奥温泉七湯誌の紀行、狂歌狂文、歌句詩等を混ゆ。

ク、

懷橘談 續々群書第九
○出雲國誌なり。
黄葉紀行 田能村竹田 田能村全集
環海異聞 續帝文（漂流奇談）
關東海道記 中山通村 續帝文（續々紀行）
寛文印知集 續々群書第九

ケ、

慶長年間江戸圖考 中神守節 燕石十種三
藝備國郡志 續々群書第九
乾坤辨說 向井玄松 文明源流第二
元和七年東海紀行 續々群書第九

コ、

江海風帆草 同
後午の日記 荒木田麗子 女流文學全集第三
紅毛雜話 森島中良 文明源流第一
紅毛談 後藤梨春 文明源流第一

小金の御狩　成島峯雄　續帝文（續々紀行）
國號考　奈佐勝皋　百家叢説二
越路紀行　一峰　續帝文（續紀行）
五十三次江戸土産　—　德川類聚十二
小春紀行　蜀山人　新百家説林一
○長崎より歸府の記。

サ、
西遊記　橘南谿　有朋堂文庫　續帝文（紀行）
裴遊稿　嵐雪　續帝文（續紀行）
嵯峨遊覽記　藤原爲景　續帝文（續々紀行）
嵯峨紀行　藤原稙通　續帝文（續々紀行）
堺鑑　續々群書第八
薩州人唐國漂流記　續帝文（漂流奇談）
薩州漂客見聞錄　續帝文（漂流奇談）
佐渡日記　旦水　續帝文（續紀行）
參海雜志　華山　稀書複製會第二期
三餐餘興　蜀山人　新百家説林一
○下總勝鹿及び武藏玉川の紀行。

シ、
自遣往來　續々群書十
一名、江戸往來。
志州船臺灣漂着話　續帝文（漂流奇談）

下谷通志　山崎美成　新燕石十種四
十方庵遊歴雜記　釋敬順　江戸叢書三、四、五、六、七、
○武相常總に於ける名所古蹟の見聞記。
篠枕　中院通勝　續帝文（續々紀行）
椎の葉　椎木才麿　續帝文（續紀行）
上京日記　望東尼　女流文學全集第三
上下紀行　德永種久　續帝文（續々紀行）
○都のぼり、江戸くだりの二。
松榮丸唐國漂流記　續帝文（漂流奇談）
諸國里人談　菊岡米山　續帝文（紀行）
初午の日記　荒木田麗子　女流文學全集第三
神昌丸魯國漂流始末　續帝文（漂流奇談）
壬戌紀行　蜀山人　續帝文（續々紀行）　新百家説林一
○大阪より東部への道の記。

ス、
杉田日記　清水濱臣　續帝文（續紀行）
菅笠日記　本居宣長　有朋堂（日記紀行集）
須磨日記　香川景周　續帝文（續紀行）
駿河臺志　未詳　燕石十種二

セ、
西北紀行　貝原益軒　續帝文（續紀行）

瀬田問答　南畝問・貞雄答　〔燕石十種一／新百家說林三〕
仙道會津元和八年老人覺書　續々群書第九

ソ、宗因東の記行　續々群書第九
宋(そう)雅道すがらの記　飛鳥井雅縁　續々群書第九
○室町時代、應永の頃。
空おぼへ　菅・園　新燕石十種一
○江戸大傳馬町の記錄。

タ、臺州漂客記事　續帝文(漂流奇談)
澤庵和尚鎌倉記　{稀書複製會第三期／續々群書第九}
竹内德兵衛爲漂流談　續帝文(漂流奇談)
多氣窻螢　北島材親　百家隨筆ノ三
韃靼漂流記　續帝文(漂流奇談)
辰巳無人島訴狀並口上留書　續々群書第九
旅の命毛　土屋茅淵女　{女流文學全集第三／續帝文(續々紀行)}
旅のなぐさ　員淵　有朋堂(日記紀行集)
多摩川考　與清　温知第十
玉川砂利　蜀山人　新百家說林三
玉川披砂　蜀山人　新百家說林一
端郡風土記　續々群書第八

チ、中山日錄　續々群書第九
筑紫紀行　菱屋平七　續帝文(紀行)

ツ、筑波山懸明書　稀書複製會第一期
○小說体。
津島祭記　伴蒿蹊　續帝文(續々紀行)
椿までの記　春海　續帝文(續紀行)
爪じるし　蘭芝　續帝文(續紀行)

テ、貞德他行道の覺　續々群書第九
○天正十一年五月十七日の事。
丁未旅行記　池田綱政　續帝文(續々紀行)
調布日記　蜀山人　新百家說林一
○玉川邊の巡視見聞記。
蝶の遊　山崎北華　續帝文(續々紀行)
○一名、續奥の細道。
寺川郷談　寶永堂　三十幅ノ三
○土佐國寺川郷の俚俗談也。
天竺德兵衛物語　續帝文(漂流奇談)
天竺物語　續帝文(漂流奇談)

ト、東奥白河往昔之記　續々群書第九
東遊記　橘南谿　續帝文(紀行)／有朋堂文庫

東海紀行　井上通女　女流文學全集第一／有朋堂（日記紀行集）
東海道名所記　淺井了意　溫知叢書一／滑稽文學全集第一
東行筆記　湯淺常山　續帝文（續紀行）
登嶽日記　鋤雲　續帝文（續紀行）
東國紀行　宗牧　續々帝文（續々紀行）
東國陣道記　細川幽齋　續帝文（續々紀行）
東都紀行　辻雪洞　新燕石十種二
十勝日誌　松浦武四郎　續帝文（續紀行）
常磐日記　土師熊文　三十輻ノ二
督乘丸魯國漂流記　續帝文（漂流奇談）
德永種久紀行　德永種久　續燕石十種一
鳥島物語　續帝文（漂流奇談）

ナ、

長崎緣起略記　續々群書第八
長崎行役日記　長久保赤水　續帝文（續々紀行）
長崎土產　簑山　稀書複製會第三期
長崎蟲眼鏡　不詳　近世文藝第二
中空の日記　景樹　續帝文（續紀行）

難波鑑　一無軒道治　近世文藝第一
難波船　だるまや飜刻
苗場山に遊ぶ記　牧之　續帝文（續紀行）
南海紀聞　續帝文（漂流奇談）
南向茶話　酒井忠昌　百家說林續上／燕石十種一
○江戸舊地に關する問答也。
南都七大寺巡禮記　續々群書十一
南漂記　續帝文（漂流奇談）
南都名所集　太田叙親・村井道弘　近世文藝第二

ニ、

日光山紀行　烏丸光廣　續帝文（續々紀行）
日州船漂落紀事　續帝文（漂流奇談）
日本行脚文集　大淀三千風　續帝文（紀行）

ヌ、

幣ふくろ　士朗　續帝文（續紀行）

ノ、

野ざらし紀行　芭蕉　續帝文（續紀行）／有朋堂（日記紀行集）
後の岡部日記　眞淵　有朋堂（日記紀行集）

ハ、

梅櫻日記　近藤芳樹　續帝文（續紀行）
望海毎談　不詳　溫知第八／燕石十種三
○江戸名所舊蹟の傳說等。

馬丹島漂流記　　帝國文庫（漂流奇談）
番人打破船　　帝國文庫（漂流奇談）

ヒ、
常陸帶　安東朴翁　帝國文庫（續々紀行）
○元錄年間のもの。
常陸紀行　黑崎貞孝　帝國文庫（續紀行）
一目玉鉾　西鶴　江戸趣味文庫 向陵社本（浮世草紙）
ひともと草　南畝等　新燕石十種二
○和文集なれども、題材は江戸名所案内体のもの多し。風俗、また多し。
兵庫名所記　植田下省子　續々群書第八

フ、
富士一覽記　宣阿　帝國文庫（續紀行）
船路のゆきゝ　熊谷直好　帝國文庫（續々紀行）
豐後紀行　田能村竹田　帝國文庫（續々紀行）

ヘ、
丙辰紀行　林道春　有朋堂（日記紀行集）帝國文庫（續紀行）
漂客加察哈出奔記　　帝國文庫（漂流奇談）
漂客壽三郎手簡　　帝國文庫（漂流奇談）
漂客談奇　　帝國文庫（漂流奇談）
漂流記　彦藏　文明源流第三
漂流口書　　帝國文庫（漂流奇談）
漂流始末口書　　帝國文庫（漂流奇談）
漂流日記　　帝國文庫（漂流奇談）
ペラホ物語　　帝國文庫（漂流奇談）
邊要分界圖考　近藤正齋　近藤正齋第一

ホ、
奉使小錄　青木昆陽　三十輻ノ三
北國一覽寫　雪旦　稀書複製會第三期
墨水遊覽誌　花屋敷菊塢　江戸叢書一
墨水消夏錄　闌洲東秋頤　燕石十種一
○風俗、また多し。
北窻瑣談　橘南谿　有朋堂文庫
○處々、故實の材料に富む。

マ、
本所雨やどり　加藤敬豊　新燕石十種五
松堡里山莊に遊ぶ記　大梅居梅外　帝國文庫（續々紀行）
松前島鄕帳　　續々群書第九
松前人韃靼漂流記　　帝國文庫（漂流奇談）
前橋風土記　古市剛　續々群書第八

ミ、
三浦・紀行　白英　帝國文庫（續々紀行）
三河雀　花翁　近世文藝第二
御嶽さうじ　上田秋成　三十輻ノ二（藤簍冊子の中）

道芝の露　成島和鼎　續帝文（續々紀行）
宮川日記　多田滿泰　續々帝文（續々紀行）
都の手ぶり　石川雅望　百家說林正編上／錦窠文庫一ノ二
○風俗の材料また多し。
ム、向岡閑話　蜀山人　新百家說林三
みるめのさち　成島司直　續帝文（續紀行）
武江披抄　蜀山人　新百家說林一
異本武江披抄　蜀山人　江戸叢書十一
○江戸砂子の補遺也。
武藏國隅田川考　中神守節　温知第六
武藏野地名考　田澤義章　百家叢說三
無人島談話　續帝文（漂流奇談）
モ、藻屑　藪氏母　女流文學全集第三
ヤ、安寺、持方の記　岡野蓬原　三十輻ノ三
山田仁左衞門渡唐錄　續帝文（漂流奇談）
ユ、夢かぞへ　野村望東尼　女流文學全集第三
夢のしをり　松田直兄　續帝文（續々紀行）
ヨ、雍州府志　黒川道祐　續々群書第八
吉野記　飛鳥井雅章　續々群書第九
○歌にて示す。
吉野山獨案内　周可　珍書保存會本
輿地各國積解　平野呂博　三十輻ノ二
輿地誌略　青地林宗譯　文明源流第一
リ、琉球國鄉談　續々群書第九
立圃東の記行　續々群書第九
○句多し。
レ、麗遊　未詳　新燕石十種三
○こんにやく島、加役島、中洲等の記事也。
ワ、和紀記行　岡西惟中　續々群書第九
○歌にて示す。
和州舊跡幽考　林宗甫　續々群書第八

一六、日記之部

（學者、畫家、作者、他諸派の日記なり。地理、風俗等の資料に富むや必然也。）

イ、遊相日記　華山　稀書複製會第一期
一立齋廣重旅日記　初代廣重　近世文藝十二
カ、航米日錄　玉蟲誼　文明源流第三
加藤枝直日記　加藤枝直　近世文藝十二
金杉日記　山崎美成　續燕石十種二
甲寅紀略　鈴木黄軒　近世文藝十二

ク、文化十二亥年花鳥日記　村田了阿　近世文藝十二

ケ、月岑日記　齋藤月岑　近世文藝十二

サ、暫遊日記　竹田　田能村全集

シ、市隱月令　村田了阿　近世文藝十二

式亭雜記　三馬　續燕石十種一

○風俗、演劇等の資料多し。

惺々曉齋繪日記　曉齋　稀書複製會第二期

松蔭日記　柳澤側室町子　女流文學全集第一

セ、全樂堂日錄　渡邊華山　近世文藝十二

テ、天正日記　内藤清成　續々群書類五

○德川氏江戸に移るの記。

ナ、なゐの日並　笠亭仙果　新燕石十種二

○安政二の大地震の日記体也。

ハ、陪駕日記　竹田　（田能村全集 稀書複製會第一期）

○歌日記なり。

馬琴日記　和田萬吉校（大正十三年版）

○馬琴天保二年の日記。

馬琴日記抄　饗庭篁村編

○明治四十四年文會堂版、諸家論評のもの也。

ホ、戊子日記　馬琴　近世文藝十二

ヨ、擁書樓日記　小山田與清　近世文藝十二

リ、柳亭日記　種彦　近世文藝十二

ワ、倭學戴恩日記　高田與清　「單行」

一七、戲文之部

（風俗等の好資料に富む。但し此の種のものとしては、一斑なるのみ。）

ア、あづまなまり　石川雅望（六樹園）　滑稽全集十二

賈佑士平傳　蜀山人　新百家說林二

ウ、梅が枝物語　石川雅望　「都のてぶり孝證」

○院本盛衰記梅が枝無間の段の和文譯。

エ（ヱ）繪空事　石野廣道　燕石十種三

宛丘子傳　蜀山人　新百家說林二

オ、おさしばなし年中行事　林屋正藏　民間風俗

○年中行事を材とせる落語集なり。

コ、古今若衆序　細川玄旨法印　三十幅の四

後水鳥記　蜀山人　江戸叢書七

シ、若道之勸進帳　井尻忠助　三十幅の四

酒佛妙樂經　[illegible]齋　稀書複製會第二期

ス、春夏帖　蜀山人　新百家說林二
　水鳥記　地黄坊樽次　江戸叢書七
セ、千紅萬紫　蜀山人　新百家說林二
チ、狂歌忠臣藏當振舞　宿屋飯盛　帝（赤穗復讐）文
ナ、長門本忠臣藏　石川六樹園　帝（赤穗復讐）文
ニ、二國連璧談　平秩東作　新燕石十種五
　○男童寵幸に關する戲作也。
ハ、俳諧忠臣藏　二九亭赤面　帝（赤穗復讐）文
　巴人集　蜀山人　新百家說林二
　巴人集拾遺　同　同
ヒ、評判千種聲　未詳　德川類聚十二
マ、萬紫千紅　蜀山人　新百家說林二
メ、妙々奇談　不詳　溫知叢書第三
ヨ、四いろ草　滋野瑞龍軒　新燕石十種三
　○風俗も見ゆ。
　四方のあか　蜀山人　（滑稽全集十二　新百家說林二　名著文庫）
　四方の留粕　蜀山人　（滑稽全集十二　新百家說林二）

一八、俳諧之部

ク、廻文俳諧百韻　石田未得　三十輻の二
コ、五色題發句合の評餘　馬琴　曲亭遺稿
シ、子姪に俳諧を禁ずるのふみ　鳴島錦江　三十輻の一
テ、貞德終焉記　安原貞室　三十輻の二
ハ、俳諧古文庫　馬琴　續燕石十種一
　俳諧歲時記栞草　馬琴　（單行）
　俳諧の發句　紹巴　三十輻の四
　俳諧隆達　珍書保存會本
　梅名並花形　不詳　三十輻の二

（俳諧專門の索引ではないから、かゝる僅少さである。唯、かゝるものに此等ありさだけ記するの責たるのみ。）

ヒ、枇杷園隨筆　井上士朗　賞奇樓三の五
フ、風月菴主に答ふる文　馬琴　曲亭遺稿
マ、罔両談　馬琴　曲亭遺稿
ユ、夢の秋　馬琴　曲亭遺稿
　夢見草　馬琴補　曲亭遺稿
ラ、老鳥菴評批言の辨　馬琴　曲亭遺稿
　羅文居士七回忌追薦俳諧連歌　馬琴　曲亭遺稿
リ、立圃追善集　未詳　三十輻の二

一九、和歌之部

（歌話、歌論、歌日記、歌紀行、其他歌に關する何くれ、考證故實など。）

- ア、顯綱家集　　三十幅の四
- 明智光秀百韻　　三十幅の四
- エ(ヱ)圓珠庵雜記　契沖　（百家説林正上 三十輻の一）
  - 一名、雜記。
- カ、風のしがらみ　土肥經平　隨筆大觀三
- 歌体約言　田安宗武　三十輻の一
- 河社　契沖　百家説林續上
  - ○古歌、古集に關する考證多し。
- キ、季吟子和歌　季吟　三十輻の二
- ク、君臣歌　細井廣澤　三十輻の一
- ケ、月齋雜考　清水濱臣　百家隨筆の二
- コ、古學先生和歌集　伊藤仁齋　三十輻の一
- 國歌八論　荷田東滿　三十輻の一
- サ、西行上人談抄　蓮阿　三十輻の四
- シ、續歌林良材集　下河邊長流　續々群書十五
  - ○故實の資料あり。
- 心敬紀行　心敬僧都　三十輻の四
- ソ、園の池水　林光平　百家隨筆の一
- ト、鳥の迹　戸田茂睡　戸田茂睡全集
- ナ、梨本集　戸田茂睡　續々群書十五
  - ○故實またあり。
- ニ、日記歌　孝謙　三十輻の四
- ハ、泊洦筆話　清水濱臣　百家説林正上
  - ○主に歌道の故實、更に俳諧にも觸れたり。
- ヒ、僻言調　戸田茂睡　戸田茂睡全集
- 百人一首一夕話　尾崎雅嘉　有朋堂文庫
- 百人一首雜談　戸田茂睡　戸田茂睡全集
- フ、賦山何連歌　　三十輻の四
- モ、不求橋梨本隱家勸進百首　戸田茂睡　戸田茂睡全集
- ワ、和歌三神考　貞丈　溫知第十
- 和歌世詁　不詳　百家説林正上
- 和歌物あらかひ　友[illegible]齋　珍書刊行會本
- 和歌兩神記　　續々群書一

二〇、國文之部

（國學、或は國文註釋の類、或は假名考の類、勿論一斑也。）

- カ、荷田大人創學校啓　荷田東麿　續々群書十
- ケ、源氏外傳　熊澤蕃山　三十輻ノ一

サ、桑家漢語抄　楊梅顯直　三十幅ノ四

セ、勢語七考　眞淵　三十幅ノ一

ツ、藤簍冊子（つゞらぶみ）　秋成　（單行）

○三十幅の「御嶽さうじ」またあり。歌文遺編也。

つれ〲草拾遺　不詳　〔三十幅ノ一　史籍集覽本ノ一〕

ヘ、片玉集抄　津村宗庵　三十幅ノ二

○婦人の和文を集めたるもの也。

二、經學並ニ詩之部

オ（ヲ）翁問答　姉充　續々群書十

○中江藤樹の應問を錄す。

カ、學者角力勝負附評判　德川類聚十二

學問關鍵　伊藤東涯　續々群書十

漢學紀源　伊知地季安　續々群書十

サ、三德抄　林道春　續々群書十

○智仁勇等。

シ、斯文源流　河口子深　〔三十幅ノ三　温知第三〕

春鑑抄　林道春　續々群書十

○五常を記す。

三、政治之部

ア、鸚鵡言　松平樂翁　三十幅ノ三

ホ、本朝學原浪華鈔　松下見林　續々群書十

ヤ、倭片假名反切義解　耕雲散人　明魏　三十幅ノ四

ワ、和學講談所御用留抄　續々群書十六

和學辨　篠崎維章　三十幅ノ四

和字解　貝原益軒　三十幅ノ四

和學大概　村田春海　續々群書第十

（此種の一斑のみ。唯棄つるに吝しきのみ。）

ス、隨緣沙彌語錄　竹田　田能村全集

セ、靜齋詩稿　河口子深　三十幅ノ三

チ、竹田莊詩話　竹田　田能村全集

千代茂登草　藤原惺窩　續々群書十

○明德、誠、敬、以下、其母を諭したるもの。

テ、敵戒說　林道春等　續々群書十

塡詩圖譜　竹田　田能村全集

ヒ、百活矣　竹田　田能村全集

（政論、政体の記事、建言、美治錄等の類也。勿論此種の一斑也。此他、國史叢書、日本經濟叢書本等參照の事。）

イ、遊藝園隨筆　川路聖謨　百家說林續中

有斐録　三村永忠　史籍雜纂ノ二
○池田光政の美治録也。
カ、龜山訓　列侯深祕録
○松平乘邑の訓。
ク、華胥國ものがたり　中井履軒　三十輻ノ二
寬政御用留　蜀山人　新百家說林二
勸忠書　堀田正俊　續々群書十三
ケ、下馬のおとなひ　堀秀成　百家說林續上

二三、法制之部

ア、青標紙　大野廣城　江戸叢書二
イ、伊勢町元享間記　鼠璞十種二
○風俗の資料またあり。
エ(ヱ)延喜式工事解　春田永年　續々群書第六
延喜式工事通解　春田永年　續々群書六
カ、講令備考　稻葉通邦　石原正明等　續々群書六
○令義解の史的研究。
格逸　續々群書第六
タ、貨幣秘録　不詳　温知第五
寬文記　續々群書七
ケ、建官考　逵井孝德　續々群書七
○江戸幕中のもの。

タ、建言書　竹田　田能村全集
對問　米澤侯　三十輻ノ二
謫居童問　素行　續々群書十
ト、獨考論　工藤眞葛　新燕石十種二
ナ、內安録　內藤忠明　温知第三
マ、松のさかへ　不詳　史籍雜纂ノ二
○家康以下、諸名侯の善政録也。
ク、栗山堂書抄　柴野栗山　三十輻ノ三
(勿論、此種のものとしては一斑也。類書、專門叢書に多く俟たざるべからず。日本經濟叢書の類略く。)
コ、江次第鈔　續々群書第六
シ、周尺考　荻生徂徠　三十輻ノ一
諸國御關所覺書　續々群書七
○地理、風俗のまた資料也。
タ、當今(中御門)年中行事　續々群書七
○中御門帝は、吉宗將軍の折也。
テ、增補田園類說　續々群書七
○檢地之事以下田園一般の制度。
ト、殿居囊　大野廣城　江戸叢書一
ハ、白石先生小品　温知第二
○故實また多し。
ヒ、閑なるあまり　松平樂翁　温知第四

フ、武家諸法度之奥書　久世廣之　三十輻ノ一
ホ、本朝法家文書目錄　續々群書十六
ヤ、野叟獨語　杉田鷧齋　温知叢書第四
○風俗また多し。

二四、經濟之部

イ、絲割符由緒書　續々群書十六
エ、江戸町方書上　徳川商業ノ一
○町家の起立、職業、祖先等。
オ、おしてるの記　蜀山人　新百家說林二
大阪商業習慣錄　遠藤芳樹　徳川商業ノ三
○明治十六年成る。
カ、家產俗談　林宇兵衛　三十輻ノ三
盍徹問答　不詳　三十輻ノ一
キ、今古米錢略考　不詳　百家叢說二
コ、國本論　松平樂翁　三十輻ノ一
後藤庄三郎由緒書　徳川商業ノ一
呉服師由緒書　徳川商業ノ一
○後藤縫之助他二家。
サ、材木定價書　藤井直　三十輻ノ三
シ、商賣往來　續々群書十

リ、吏徵　續々群書七
律逸　石原正明　續々群書六
○別錄、附錄計三卷を附す。幕制の資料。
レ、歷代租法　不詳　三十輻ノ三
（同上。尚、此項、商業に關するものを含む。）
諸職往來　續々群書十
諸問屋再興調　町奉行調　徳川商業ノ三
○江戸也。
絲亂記附白絲割符由緒書　高石某　徳川商業ノ一
○支那より輸入の生絲專賣權の由來等なり。
セ、錢錄　近藤正齋　近藤正齋三
タ、堂島舊記　徳川商業ノ二
チ、竹橋蠹管抄　南畝　竹橋餘筆
竹橋餘筆　同　同
竹橋余筆抄　同　同
竹橋餘筆別集　同　同
町人考見錄　三井高房　徳川商業ノ一
○京都町人の事蹟。
町人考見錄追加　徳川商業ノ三
テ、天壽隨筆　佐久間東川　三十輻ノ三

ト、問屋沿革小誌　　徳川商業ノ三
　○大　阪　也。
十組問屋取結書　　徳川商業ノ三
ナ、奈良縣布古今俚諺集　三枝散人　徳川商業ノ一
ニ、日本橋魚市場沿革紀要　阪本二三郎　徳川商業ノ一
　○明治二十三年成る。
ノ、延米商濫觴記　　徳川商業ノ二
　○名　古　屋　也。
ハ、寶永年間諸覺　　鼠璞十種二
ヲ、古著問屋舊記　　徳川商業ノ三
　○江戸町奉行の記錄。

メ、名産諸色往來　　續々群書十
ヤ、八木虎之巻　猛虎軒主人　徳川商業ノ二
　○米　相　場　也。
八木のはなし　不　詳　温知第十二
　○阪地の米相場記也。
八木豹之巻　　徳川商業ノ三
　○米　相　場　也。
八木龍之巻　見龍館主人　徳川商業ノ二
　○同　右。
リ、両替商舊記　　徳川商業の三

二五、雜之部

ア、朝清水記　英一蝶　三十輻ノ二
　鬢の焼藻・森山孝盛　温知第八
イ、遊相醫話　森立之　鼠璞十種二　〔十錢文庫 文明源流第一〕
　伊曾保物語
　文祿舊譯伊曾保物語　新村出校訂　〔單　行〕
オ（ヲ）老の幸　坂昌周　三十輻ノ一
　大海のはし　富士谷成章　百家說林正下
　和蘭醫事問答　建部清庵　文明源流第二

（前廿四項に入る能はなかつたものである。暦、本草、蘭學、解體の如き、此の中に入れたり。尚、種々あり、悉しく見らるべし。）

ア、阿蘭陀文　　續奇文（源流奇談）
カ、改過筆記　馬　琴　續燕石十種二
　○神經質なる馬琴の性格躍如。
　解體新書　杉田玄白　文明源流第二
　笠の露　馬　琴　曲亭遺稿
　○亡兄羅文の追悼文等也。
　牙籤考　近藤正齋　近藤正齋三
　傍廂糾繆　齋藤彦麿　百家隨筆ノ三

假名暦註解　山路主住　三十輻ノ二
鎌倉閑居記　吉川惟足　三十輻ノ二

キ、
鳩巣與白石諫書　鳩巣　三十輻ノ二
氣海觀瀾　青地林宗　文明源流第二
喫茶往來　玄惠法師　三十輻ノ四
杏園詩集　蜀山人　新百家說林二
況齋雜話　岡本況齋　百家隨筆ノ二
○風俗、歌文、故實、音曲等種々の材料あり。
曲亭遺稿　馬琴　〔單行〕
○國書刊行會本と別本、杉村操編（明治十六年版）雜考歌文を集む。

ク、
寓意草　不詳　三十輻ノ三
楠判官兵庫之記　三十輻ノ四
荒陵懷舊詠　順宣律師　三十輻ノ二
科場窓稿　蜀山人　新百家說林二
訓蒙淺語　大田晴軒　百家說林正下

ケ、
瓊浦又綴　蜀山人　新百家說林三
瓊浦雜綴　蜀山人　新百家說林三
敎訓歌繪　不詳　婦人文庫の「節用」
けんどん爭　馬琴 美成　新燕石十種二

源平往來　續々群書十
○往來物の一。

コ、
上近衞公書　柴野栗山　三十輻ノ四

サ、
三英隨筆　望月三英　三十輻ノ四

シ、
上苑梅譜　不詳　三十輻ノ二
ジヤガタラ文　續帝國文庫（漂流奇談）
酒茶論　沙門蘭叔　三十輻ノ四
植學啓原　宇田川榕庵譯　文明源流第二
蜀山人尺牘　蜀山人　新百家說林二
蜀山文稿　蜀山人　新百家說林二
後言　小說家主人　百家說林正ノ上 松村編
心猿辨　馬琴　（曲亭遺稿）

ス、
與鈴木牧之書　馬琴　曲亭遺稿
○戲作等に觸れたり。
すゞみ草　建部綾足　續燕石十種二

セ、
消息往來　高井蘭山　續々群書十
旃檀瑞像考　屋代弘賢　三十輻ノ三

ソ、
疏儀莊記　北村季吟　三十輻ノ二
麤細略記　不詳　三十輻ノ二
○布、本草物。

そゞろ物語　三浦淨心　温知第八
存心　奥田子礩　三十幅ノ三
　○俚言を取っての訓戒及び之が小解。

タ、
讀大日本史私記　士清　谷川士清先生傳
當世名家評判記　徳川類聚十二
　○天保時、江戸の儒者詩人書家等の評判也。
たかはゝき　齋藤彦麻呂　百家隨筆ノ三
但馬國太田文　太田政頼　三十幅の四
檀那山人藝舍集　蜀山人　新百家說林二
　○狂詩集。

チ、
千とせの門　蜀山人　新百家說林二
　○狂歌狂詩、文章を集む。
女學範　大江資衡　婦人文庫の「節用」

ツ、
壺すみれ　黑川春村　續燕石十種二
　○狂歌の傳統を記す。

ト、
東作遺稿　平秩東作　新燕石十種三
冬至梅寶暦評判記　徳川類聚第十二
　○寶暦、江戸の諸名家の評判也。
戸山御庭記　久世舍善　三十幅の二
鳥おどし　川崎重恭　百家說林正下
兎園會集說　温知第十一

ナ、
梨本書　戸田茂睡　戸田茂睡全集
　○神儒佛、武士道の對問也。
難後言　不詳　百家說林正上

ニ、
廿三番狂歌合竝附錄　馬琴　曲亭遺稿
二大家風雅　蜀山人　新百家說林二
　○狂詩を集む。
日本養子說　跡部光海　三十幅の三

ネ、
寂惚先生文集　蜀山人　新百家說林二
　○狂詩集。

ノ、
後の爲の記　馬琴　曲亭遺稿
　○馬琴、亡兒琴嶺の行狀記。

ハ、
梅園叢書　三浦安貞　百家說林正下
　○寧ろ教訓話錄也。
梅柳短策　南畝篇　三十幅の三
寶貨售　徳川類聚十二
　○古錢の評判記。
寶貨漫文抄　大村成富　瓜瓞十種二
放生會を觀し記　太宰純　三十幅の二
蕃藷考　青木敦書　三十幅の四
蕃藷考補　青木敦書　三十幅の四
蕃藷錄　松岡成章　三十幅の四

板兒錢拔萃　瀨尾柳齋　鼠璞十種二
〇玩錢日錄也。

ヒ、檜垣寺古瓦記　服部元喬　三十輻の二
非時文摘紕　橋本稻彥　百家隨筆の三
〇村田春海の同著を非議せるもの也。
病間長語　温知第十一

フ、富士の人穴　珍書保存會本
文敎温故批考　狩谷望之 屋代輪池　百家隨筆の三

ヘ、漂流紀事　文明源流第一
〇ロビンソン漂流記の重譯。

ホ、慕歸繪詞十卷一軸　從覺　三十輻の四

ミ、光圀卿敎訓　安積覺　續々群書十
水やり花　上田秋成　三十輻の二
〇享和二の淀川洪水を叙し、及びそが考證也。

ム、武藏鐙　温知第十一

モ、百舌の草莖　蜀山人　新百家說林三

ヤ、山鹿先生語類拔書　不詳　三十輻の二

ヨ、四方指之事　三十輻の四

ラ、蘭學階梯　大槻玄澤　文明源流第一
蘭學遷　藤林淳道　文明源流第一
蘭學事始　杉田玄白　文明源流第一

蘭山先生十品考　小野蘭山　三十輻の二
〇右、本草物。
蘭說辨惑　大槻磐水　文明源流第一

リ、琉客談記　赤崎海門　三十輻の二

レ、曆象新書　文明源流第二
〇英人奇兒の著の譯。

ロ、魯敏遜漂行紀略　横山保三譯　だるまや翻刻

ワ、若紫　津田はやみ撰　三十輻の三
和漢合鑑本草（鈔本）　後藤彥　三十輻の三
和藥出產摘　東桂武群　三十輻の二

〇洩れたるもの

夥しい此種の物より、主に家藏に據つた索引であるため、洩れたもの、追補したきものも色々にある。中、今思ひ付いたまゝの叢書本の名のみを記しておく。今は姑らく諸賢の各自追補に俟ちたい。即ち京都叢書〇我自刋我本（江戸名園記など特に）〇大日本名所圖會本〇新井白石全集〇山家語類〇本居宣長全集〇藝苑叢書〇通俗日本經濟叢書〇大日本地誌大系〇故實叢書本〇日本文庫等である。

（大正十四、九、二十九）

寄贈紹介

○魯敏遜漂行紀略　全

最近大毎に行はれた、文明移入に關する古書展覽會の記念出版として三百部制限の下に複製されたものである。物は、有名な、横山保三（同苗桂子女史の養子。明治初期歿）氏が安政四年に板行した、魯敏遜漂流記の譯本である。箕作阮甫の序、井上文雄の序、本文挿繪色摺共十九丁、年次の新しい割に珍本として喧ましいものである。譯文、恐らく外國譯の胎生期としては既に立派に整ひ、貴族をよしあるいへすぢとルビーしたり、蒸餅にプロードと振つてゐたり其他原始的巧緻な事には一驚する。面白きものである。此の複製頗る上乘。表紙用紙、印刷殆ど原本の氣分といふべしだ。本文は全部ヂンク版（？）で、鮮明である。見返しの感じ恐ろしくいゝ。（價不明、大阪市南區南炭屋町二十五、だるまや書店發行）

○源氏物語號　國語と國文學特別號

國語と國文學の十月特大である。源語の汎的研究、部分研究、英譯本又は繪卷物等。源語研究史の資料、及び源語の書誌。内、我々に最も重寶なるは、植松安氏の源語書誌であり、新しき好研究として面白く拜見したのは私の恩師石村貞吉先生執筆の「源語に表れたる物の氣に就て」である。（價貳圓、東京赤坂傳馬町三ノ十至文堂）

○芭蕉研究號　早稻田文學九月號

芭蕉研究が大部分である。内、勝峯氏の芭蕉研究書目と、石原氏の明治大正芭蕉書目とは、又貴重な記錄である。此號は小說「地上に現るゝもの」で發禁となり、芭蕉の部分丈で臨時再版が出來てゐる。寄贈を受けたのは初版本であるが、依て此の問題の小說を讀んだ。牢獄生活の出來星看守の悲哀と、震災當時の四人對看守の問題を取扱つたものである。ちよい〳〵安寧的に變な所もあるが、それ程の物でもない。要するに看守生活を曝露したのがいけないのだらう。然し特別な讀物ではある。（價八拾五錢。東京神田東京堂）

○歌舞伎　秋期增刊號

白井喬二氏他九氏の讀物十篇、他、青々園大伍、綺堂氏等の仇討物研究を集めた仇討號である。口繪の錦繪の複製、表紙の錦繪摺、迚も派手なもの。廉價な事天下一品であらう。（特價五拾錢。東京市京橋區木挽町、歌舞伎座内、同發行所）

○書物禮讃　第二

この雜誌には、新村出氏の後援が著しく眼に立つ。今號にも新村氏の「小關三英の譯書ナポレオン傳」がある。他、「書齋より」の杉浦氏の地誌本の解題、草部氏の洒落本五臟眼、佐古慶三氏の「大阪大繪圖の現出に就て」など有益に拜見した。（參拾五錢、京都市三條通寺町東入、杉田大學堂）

○新小說（十月號）○墓碑史蹟研究（第廿五）○性の智識（十月）○國學院雜誌（九月）○清元研究（第三）○長唄（第六）○川柳鯱鉾（九月）○新舊時代（九月）、歌舞伎（九月）○芋蔓（第六號）○通俗醫學（九月、十月號）○やなぎ樽研究（十月號）

著者より

本冊は別冊第二、一先づ此索引を完成した依而軟派叢書の第五へん原稿もこれにかまけて、つひまだ仕上らない。○此の索引で啥ど今月は寧日なかつたのです。○豫告はしない方がいゝ。遲くも十一月には一冊叢書本も出來上る事と御待ちありたい。○洒落本の所在探索も大分捗どり、百種は出來た、もうあと百種は欲しい。珍本貸覽の便を一層與へて頂きたい。○尚、英泉畫集も其中出したい。何分此頃現金の回收（主に依託先）が中々出來ないので、實は此の雜誌も四苦八苦です。薄い乍らもとにかく、私一人で、大した延刊もなく毎月一冊は出してゐる勇氣をだけ買つて頂きたい。現金がちと寄つたら、是非英泉畫集を出したいと思ふ。それに來年度からは、本誌も和紙和裝にしようかとも。和紙なら、二段組になる譯です。○飯島花月氏から頓る有益な寄書に接した。來冊に發表する。○惡性風邪（實は小生もひきなり候）の流行の折柄、御自愛を祈る（九、二七）

定價表
一冊廿五錢　郵税貳錢　○郵券貳錢一割増の事
六冊分　税共　壹圓四拾錢　○照會は返信料添付の事
十二冊分同　貳圓八拾錢

大正十四年九月二十八日印刷
大正十四年十月一日發行
（本冊定價參拾錢）郵税貳錢

名古屋市東區東新町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英北貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社

發行所　名古屋市東區道東町一五七番地
江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

依託書目（送料別）（○印□印△四六判以上小本）

（和本之部）△畸人百人一首（川柳著、北齋畫）壹圓五拾○忠臣山賤傳（桃華園作、北泉畫）五冊本ノ内第二欠四冊壹圓貳拾○繪本神事行燈（國芳畫、色摺）粗本五拾○北齋漫畫九編（粗本）五拾○北齋漫畫初編（手ズレアリ初版）壹圓○通俗伊蘇普物語（明治五年板、曉齋畫）一より五迄五冊貳圓八拾□見聞獨歩行（傳法□議、安永七年板）壹圓五拾□つれ〲草繪抄上下二冊揃（元祿四年版）參圓五拾○民間經濟錄二篇（福澤諭吉、慶應義塾出版、明治十三年）八拾○女重寶記四の卷、（諸藝の段、繪入）八拾□女訓姿見（色摺口繪入、下河邊拾水畫）參圓五拾○往生要集三冊（繪入）壹圓五拾△奥羽道中膝栗毛初編三冊（上中下）八拾△道化繪本（北齋畫）表紙ナシ八拾△合世鏡上中卷（鼻山人作）二冊九拾△宮島參詣續膝栗毛二ノ上（一九作）參拾△假名□□□□□吽倉初集上下（如皐作、國貞畫）二冊八拾△黄金水大盡盃（春水作、國輝畫）初編上下二冊壹圓◎袖玉道中細見記（横本、文政十年板）五拾△山家集類題（文化十一年板、松本柳齋）上下合貳圓五拾△囊苑叢話（山縣篤藏、明治三十年板）二冊壹圓五拾△江戸諸家人名錄（文政元年板）七拾△詳註聊齋誌異圖詠（上海版）八冊壹圓△雜誌「江戸趣味」（大正八、十月）貳拾◎上方趣味（大正五年卷）四冊帙入貳圓◎同（大正八年、夏の卷）四拾◎同（大正十四、春の卷）五拾○俊寛僧都嶋物語卷八（一名俊寛考。馬琴）五拾○佛教論評卷一（石川舜台發行、明治九年刊）八拾○繪本日蓮大士御一代記（享和三年板）上下揃、壹圓五拾□百富士（明和四年板、俳句入繪本）參圓△八犬傳犬の草紙拾、拾壹（仙果、豐國。見返シ初代廣重）四冊壹圓△身振いろは藝（南北作、重政畫）一、三編壹圓五拾△すゞきもんど三編下（仙果、國貞）四拾△春服對作賀紋、初編上下（仙果、國貞）八拾△開化浮世ごと一（極美本）八冊五圓△新作別品都々一（二冊）壹圓參拾△開化都々一、仙明治都々一本計四冊貳圓△はうた糸の調べ二冊壹圓貳拾△はうた房根の猫（明治五年）一冊八拾△お駒才三くどき（明治二十二年板）參拾△謎々春の氷二編（美本）壹圓△艶情奇觀第一集（明治十三）壹圓△錢占いきなよし此（皓月堂板）八拾◎五行六行淨瑠璃外題目錄（文政三年板）八拾△東都仙洞綺話（三木愛花）壹圓◎芭蕉翁發句集（小虫入）貳八拾◎東京紀勝（明治二年板、曉齋等繪入）貳圓△相撲さいけん卽酉一冊（嘉永六年板、豊國畫）壹圓五拾◎卜筮傳授、身の上吉凶事合本（古版）參拾△新板なぞづくし（明治初年版）五拾○一休和尚狂雲集（森大狂校訂、民友社）壹圓八拾◎よしこの四季の詠一冊八拾○醫者あらそひ（假外題。古版繪本）五拾○繪本噺山科（落語本）第四、八拾○柳橋新誌（柳北）初編美本壹圓◎近世奇跡考（京傳、後刷本）二冊貳圓五拾○東京新繁昌記（服部誠一）自初編至三編三冊壹圓貳拾△開化大津ゑぶし三種三冊壹圓八拾△流行噺の安賣（東里山人文政九年板）貳圓貳拾○傾城禁短氣初編（自笑、外題付）八圓○百人狂畫圖式（國芳畫色摺）貳圓△廓の癖（谷峨作國政畫、洒落本）參圓八拾◎三教色（唐來三和、同）事打木六圓五拾【以下洋本の部】□不二（外骨氏雜誌）第二號、參拾△情死の研究（性増刊）參拾○神田明神□□記（繪入、□□）八拾○三田文學（第七ノ十一、□□□揭載）貳圓五拾○同（第三ノ九、荷風、五月闇揭載）參圓○浮世の有樣（文政天保間諸事風俗錄。國史叢書本）五冊の内第三欠四冊參圓△英學獨歩集誌（明治十八年）六拾○スリ（巾着切沿革史、壹圓）雜誌風俗畫報（創刊號より四七八號迄の内約三十冊欠本）七拾五圓□社會新聞創刊號（明治四十年、西川、片山等）壹圓□新生活第二號（木下尚江主筆、明治四十一年。新聞体）五拾△主潮（大正八年雜誌）創刊號より四冊揃壹圓參拾○日本文學史（アストン、芝野譯）參圓五拾○栗里先生雜著（□田□）三冊拾貳圓○大日本文學史（鈴木□□）參圓五拾○谷川士淸先生傳（同遺蹟保存會）附後□□附貳圓○日本の音樂（無當淸倍）六圓五拾○世阿彌十六部集（東佐校訂）六圓△新一葉物（鷗外譯、胡蝶文庫）壹圓五拾○新橋夜話（荷風、同）貳圓五拾○すみ田川（同、同）貳圓○曲亭馬琴（笹川種郎著。馬琴幼時の資料）參拾△みなつくし（上田敏）貳圓五拾○土（長塚節。美本初版）貳圓五拾○小鳥の巢（三重吉、美本初版）貳圓八拾○近松傑作全集（逍遙、不倒。美本）五冊拾七圓○宴曲全集（東佐校）四圓五拾

大正十四年九月二十八日印刷
大正十四年十月一日發行

本册ニ限リ一部賣　定價參拾錢　送費貳錢

大正十四年十月二十八日印刷
大正十四年十一月一日發行

貳編第八冊（通編第三十八冊）

本文

洒落本 五十音別年代順 書目

一九の「一九の記行」に就て（飯島花月）

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第八冊

一九の「秋葉山鳳來寺一九の記行」につき

飯島花月

(前略)研究第七册中膝栗毛に關する御記述特に興味を覺え申候。其内愚見一二、

秋葉山鳳來寺一九の記行　上下二册

之は飜刻か又は原版の新摺かは知らず、明治二十年頃東京日本橋書林わんや伊兵衛より相求め所藏す。此店は明治十五年頃江戸歎派本いろ〳〵飜刻出版致候故コレモ其中の一とすれば、飜刻せしものと思はれ候。繪は一九自筆で其序文によれば名古屋には緣故深き著述なるを知る。依て煩を厭はず序の全文寫し入貴覽候。

自序(冠帽印、陰文猴左咏三字)

風月の才ありて。松風蘿月を翫び。心の儘に杖ひきたらんは。さこそ樂しかるべきに予は才も無く。財も無く。元より無風流にして。何ひとつ覺えたる事は無ければ。古歌に名たゝる名所舊跡など。娑婆で見し與次郎鑵にも思はず。旅中目にとむるは。唯飯盛おじやれの。髮の毛の縮れたるこそ好ましけれ。たま〳〵女馬の乘心地よきに。氣を慰するも。又おかしかりき。頃は文月の末つかた。鳥が啼。あづま街道に杖をはせて。山鳥の尾張の名護屋に。年頃親しき書肆を尋ねて。心無くも十日餘りを喰潰したれば。其雜用の代にとて。秋葉山鳳來寺の記行を編みよと。書肆頻に攻もとむ。そこで予が思ふやう。五右衛門は生熟の時一首をよみ。忠度は腕のあるうち。書置れたればこそ。其歌千載集に撰ばれたり。予も置土産に筆を揮つて。喰にげの譏りを免がれんと。行がけの駄賃。たつ鳥跡を濁さずとは啌の皮。赤耻をかき殘して。すこしはお茶を濁すにあたれり。嗚呼旅はうきものにあらずや。かゝる義理とふごしの長口上を。序の言葉に結びぬ。

文化亥晩秋　東都　十返舍一九識
(例の熊手の花押と「一月二十九日生」の陽文の印あり)

文化の亥は其十二年、名古屋の書肆は永樂屋にても可有之歟、御取調下され度候。又秋葉山と鳳來寺との口繪ありて、其次の附言の末に、左の識語がある。

此書にひさしき尾陽津島みやげといへるは石橋庵増井なる人の著述なり。既に初編行はれてことし其次編にいたる予艸稿を閲せしに俳語滑利倶に盡せり予序詞を加へて近刻す高覽の君子宜しく評し賜はらん事を願ふのみ(トシテ「貞一」の款識あり)

書中の挿繪はみな一九自筆と信ぜられる。奥付缺如し原版の書肆不明なり。書名上編の初には秋葉山鳳來寺一九記行、末尾には秋葉山鳳來寺十返舍自身記行　上册終。又下編の口には、秋葉山參詣一九之記行、末には秋葉山參詣一九之記行下卷終と斯く不統一なるは、飜刻者が賣行を謀つて私しに付けた名と思はれる。

又啓文の西洋道中膝栗毛は、明治三年九月の序あつて、十五册漸次刊行されたのを明治十七年四月に四六版一册の活版本に飜刻出版されて居ます。膝栗毛の類書としては、文化四年京都永壽軒出版、鹿田小擣著の「尻毛の思」二編二册家藏あり。奥付に三編出版の豫告も出て居る。插畫は歌川豊秀で、一向面白くもなき書方ながら御記述の書目中に見えぬから序作ら申上げます。

梅亭金鵞の膝磨毛の類本は幾通り出たか、私は三種も四種も見た記憶あり。其他澤士の假名垣魯文にも類著ありしと覺えなり候。梅亭は明治になつても晩年まで切付表紙の猥書を澤山出してをり、明治二十年頃かと覺ゆ、信州漫遊の途次私の家へ立寄つた時の話に、猥書は書くに骨が折れず、同じ様な事を幾度でも繰返し〳〵書いていけば宜いので其上原稿料は割合能く出して呉れるから若い時分から何時でも錢が無くなれば書いたものですと云つた。膝磨毛の話も出たが、今は委しい記憶がない。此老人、天窓はテラ〳〵光つて、如何にも幕臣らしい偉大な体軀であつたが、談話は大口を遠慮なく放言して頗る快活な面白い人であつた。世間に寫眞の存否を知らぬが團々珍聞第五十二號に團々社中一同の漫畫式肖像が出て居る。洋畫家本多錦吉郎の筆の亞鉛版で其內汪流蕩人(金鵞の本名は瓜生政和)とあるのがそれで、いかにも能く似て居(長細の三〇)

酒落本（五十音別 年代順）書目

酒落本の全書目を、年代順、五十音別にして編纂してみた。最近所用ありての事であるが、一般讀書子にも至便なと思ひて此に登載する。出據は、朝倉氏の「日本小說年表」酒落本の部。新群書類従書目の酒落本書目、更に他の文獻適記錄又は原本所藏の諸家書目によつての集成である。中に往々にして、形式内容の類似に過ぎぬもの（新群書の酒落本書目は此の弊が多い）も含まれてゐるが、今は姑らくその全部を拾ふことにした。書名の上に、○を附せるは、既飜刻せられたるものゝ謂、又書名の右に或は左に圏點を附せるは、戯作評判花折紙に現れたるものゝ謂である。但し是が全部名作とは限らないこと、従來諸家の定說の如しである。

ア

題	冊數	作者	年代
○あづまの花軸	三	不詳	明和六年
△一名、娼評判記。			
あつめもの（イ小說）	一	不詳	同
○賣飴土平傳	小一	鶴山人 春信	同
鸚鵡盃	一	出放題夢中	安永二年
△右後編「似口鸚鵡返」（眞辞作）、文政五年版。			
北極 穴知鳥	一	松壽軒東朝	安永六年
惡酒雜言鑑	一	瓦楽亭	天明年間カ
○鹽梅餘史	一	馬琴	寛政十一年
天の岩戸	中一	旭亭主人	享和元年
△右、稿本。			
○商内神	一	一九畫作	享和二年
甲子夜話後話 啞意恨思（あいかへし）	一	谷峨 長喜	同
興斯 跡引上戸	一	一九	文化三年
仕懸 茶無 仇手本	一	あつ丸 北齋	不詳
△右、後編「通神藏」。			
安名手本執心藏	一	東西散人 英泉	同
同 後編	一		同
△右、初編目次によれば三冊ものゝ如し。中絶か。			
相合傘（イの話）	一	不詳	同
春色 雨夜斷	一	鐘下亭一瓢	同
牢の廊	一	京傳	同
青大通返答	一	馬鹿人	同

イ（平）

○異素六帖　二　無々道人（澤田東江）　寶暦七年
褄陰隱逸傳　一　風來山人　明和五年
遊ふ多壽寄　半三　遊蕩山人　明和八年
○遊子方言　一　田舍老人多田爺　明和年間
遊君花すまひ　二　安永三年
△右、一名、一目千本。
今おせん傳　一　安永六年
○一事千金　一　金魚　安永七年
遊里名所　一　同
○伊賀越翁籠　一　蓬萊山人歸橋　安永八年
無頼通說法　一　杜選和尚（春町畫作）　同
色事指南所　一　よし田錦江　同九年
愚人贅漢居續借金　一　蓬萊山人　天明三年
遊婦里會談　一　同　同
彙軌本紀　一　島田金谷　同
入込浴室情流理　一　京傳　天明六年

○田舍芝居　一　萬象亭　天明七年
○一向不通替善運　一　甘露庵蜂滿　同八年
田舍談義　一　京傳校　竹塚東子　寛政二年
遊里不調法記　一　礁音成　同六年
△大阪に材を藉りたるもの。
十界和尚話　半五　不詳　寛政十年
△右、上方もの。
青樓夜話色講釋　一　一九畫作　享和元年
遊子語言　一　享和三年
花街滑稽一文塊　一　金太樓　文化四年
伊吾物語　一　谷峨　同七年
田舍道言驛路之鈴　一　東里山人　文政六年
意氣客初心　二　山月庵　天保六年
遊仙窟　一　釣山人　不詳
遊僊窟烟の花　一　薄倖　同
△右、二書同本なりや異本なりや。
いろは醉故傳　一　振鷺亭　イ二代目自笑　同
起承轉合後篇遊治郎　一　一九畫作　同
△一に滑稽遊治郎。

遊客年々考 一 不詳
東山見番 意妓の口 一 振鷺亭（蓋は清長カ） 同
市が榮ゆる除夜 一 振鷺亭 同
今いま八卦 一 放蕩軒 同
遊子ノ娯言 二 鶯蛙樓 同（辰年）
△右、後編「妓娼精子」。
△右は、前掲の「遊子語言」とは別本ならん。
非中水 二 頭陀樂雲水 同

ウ

卯地臭意 一 鐘木庵主人 天明三年
○浮世四時 一 南陀伽紫蘭（後窪） 同四年
○自惚鏡 一 振鷺亭 寛政元年
三十一至 うかれ草紙 一 莊鹿 同九年
虚実情夜櫻 梅松亭庭鶯（書者不詳） 同十二年
△右、後「傾城買談花街雀」と改む。

エ（ヱ）

艶詞両巴巵言 一 撃鉦先生 享保十三年
艶歌選 一 烏有子 安永五年
○恵世物語 一 止動堂馬呑 天明元年
○恵比良梅 一 一九 享和元年

江戸嬉笑 一 馬笑、三笑、三鳥、三馬評 文化三年
驛者三友 一 紀南子 不詳
永代談語 一 振鷺亭 同
煙華漫筆 小一 張葛居辰 同
△右、大阪版。

オ（ヲ）

惚己先生夜話 一 明和五年
女鬼産 一 安永八年
鳴通力 一 新好 天明八年
○面美多通身 一 郭通交 同集交 寛政二年カ
青樓阿蘭陀鏡 五 蘭臊 寛政十年
△右、京版。
大磯風俗通 一 知季 同十二年
○水中魚論 丘釣話 二 閑山烏 文政二年
傾城情史 大客 一 闌亭 天保三年
御前手打 翁曾我 一 閑東米 同
△右、後編「見通三世相」。
面和俱噺 一 遊樓亭主人 同

音羽瀧　一　同

於見なめし（をみ）　一　同

△右、細見物。解題嘗て「江戸趣味」（朝倉氏稿）に載りたり。

カ

閑居放言　一　玩世道人　明和五年

○甲驛新話　一　風鈴山人（蜀山人）　春草叢　安永四年

樂女好子　一　雫中舍山蝶　同（イ、同五）

客者評判記　一　爲馬　同八年

蚊不食呪咀曾我　一　爲馬　同

通ふ神の講釋　一　通野意氣　天明元年

○世話双紙歌舞妓の華　一　客楊黛　同（イ同二年）

○甲驛妓談角鷄卵　一　月亭佐笑　同四年

客衆氷面鏡　一　京傳　同五年

△右、酒落本ならず、細見なりともいふ。

○客衆肝照子（かゞみ）　一　京傳畫作　同六年

寒暖寐言　一　呂信作　百喜畫　同

金の和良路（わらぢ）　一　山旭亭　天明頃カ

○假里擇中洲の華美　一　内田新好　寛政元年

格子戯語　一　振鷺亭　同二年

○學通三客　一　秋收冬藏作　新好畫　同

輕世界四十八手　中一　櫨芽田樂等　同十二年

△右、稿本。（京大藏）

○嘉和美多理　一　不詳　享和元年

甲驛夜の錦　一　宇治茶釜　享和頃

○叶福助略緣起　一　振鷺亭　文化二年

函嶺復讐談　一　鬼武　同五年

○寒紅梅丑の日待　二　振鷺亭　同十三年

△右、珍説丑の日待と改む。

歌舞伎雜談　一　文政元年

教化別傳籠細工　一　東里散人　不詳

閏日八日佳妓窺　一　あつ丸　同

雅佛小夜嵐　一　不詳　同

好色諸國物語　一　笑山　同（亥年）

○客衆一華表　一　同

奇談假根草　一　紅月樓主人　同

キ

書名	冊	作者	年代
當世問答聞きはつり	一	無智庵	安永五年
鬼神論評判娘	一	夢中道人	同七年
○喜夜來大根（きよくだいこん）	一	梨白散人	安永カ
起原情語	一	行過（逢夢）	天明二年
金錦三調傳	一	五猿	同三年
○狂詩諺解	一	蜀山人	同七年
○玉の蝶	一	振鷺亭	寛政元カ
○戯作四書京傳予誌	一	京傳	同二年
△右、改「滑稽文選」。			
虚實柳巷方言（さとことば）	三	香具屋先生	寛政五年
△右、大阪板。			
○甲子夜話（きのへね）	一	谷峨	享和元年
野干寶這入（きつね）	一	一九	同二年
起承轉合	一	同	同
南駅祇園會挑燈藏（上）（下）	一	蘭奢亭薫 長喜畫	同

書名	冊	作者	年代
奇妙圖彙	一	京傳	享和三年
○狂言綺語	三	三馬	文化元年
京傳居士談	一	馬鹿山人	文化十四年
△右、四十八手後之卷。			
錦雞帳	一		不詳
當世花系妓娼精子	二		同
△右、遊子娯言の後編。			
狂言綺語	一	風來山人	同
紀南子	一	紀南子	同
奇談青樓禿筆（かきつゞくかむろふで） 中本	一		同
△右、一名、傾城買禿筆。			

ク

書名	冊	作者	年代
○廓中奇譚	一	白岡江先生作 珉江畫	明和六年
廓中掃除	一	福輪道人	安永六年
廣街一寸間遊	一	戯笑	同七年
東都氣娼廓膽鏡	一	あつ丸	天明頃
○廓の大帳	一	京傳	寛政元年
○廓通遊子	一	藍江	同九年

怪談愚草　一　新好　寛政十年
○手管早引廓節要　一　馬笑　同十一年（イ十年）
○廓の癖　一　谷峨　同
△有、傾城買二筋道二編。
青樓小鍋孔雀巣問記　一　山旭亭　寛政頃
廓の櫻　一　谷峨　享和元年
○傾城買談客物の意氣地　一　一九　同二年
火事用心集　一　同三年
當世廓中掃除　半五　蘆橘庵　文化四年
△有、京・阪。
當世廓中掃除　一　玉水館　同
△有さ國木カ。
口開品の安賣　一　鬼武　同
比翼兵庫結　一　樂成　同五年
黄素妙論　一　三道　同
△有、一名、色道養生訓。
くるわの茶番　一　楚滿人　同十二年
願懸注文帳　一　南北　文化十四年
○雛の花後の廓の鶯　一　鼻山人　文政元年

華里通商考　一　不詳
△有、一に延享五年といふ。
廓中問語　一　强異軒　同
廓中喫語　一　朱樂　同
廓中事始　一　玉川調布　同
雪非双紙　一　同
廓文章　一　同
○奇談眞吉門八雜話　中一　振鷺亭清長　同

ケ

俠者方言　一　明和八年
○契國策　一　安永五年
○妓者呼子鳥　一　金魚　同六年
淫女皮肉論　一　同　同
傾城異見之規矩　一　吳綾軒　天明元年
傾城智惠鑑　一　雲樂山人作 歌麿畫　同三年
現金論　一　百馬　同五年
傾城買糠味噌汁（イ女郎）　一　赤蜻蛉　同八年

書名	冊數	作者	年代
吉葉の玉	小一	春花園花丸	寛政五年
△右、大坂版。			
狂言雜話五大力	一	艶二北溪	享和元年
魂膽胡蝶枕	一	著々樂齋北溪	同二年
後編句雙紙	一	艶二北溪	同
極夢三開卷	一	温冷舍漁徑	文化二年
△右、稿本、名古屋物か。「書物叢談」第二所載。			
手管見通五臟眼(まなこ)	一	山旭亭 畫者不詳	不詳
𡚶大無多言(イタ)	一	行成山房作 春頭畫	同(巳年)
胡蝶夢	一	大莊子	同
魂膽情深川	一		同
小紋裁(こもんだて)	一	京傳繪本	同
小紋新法	一	同	同
△右、小紋裁の後篇。			
小紋雅話	一	同	同
古今若色婦	一		同
古今吉原噺	一	京傳	同
古文手毬歌	一		同

書名	冊數	作者	年代
後編極穢卷	一	無拆言葉ナシ坊	同
三國獨合點	一		寶曆八年
○里の亭環評	一	風來山人	安永三年
三十番傳頭合	一		同六年
櫻川仙女傳	一		同
雜文穿袋	一	朱樂菅江	同八年
通神寸禪三教色	一	三和作 歌麿畫	天明三年(イ三)
殘坐訓	一	鈍九齋幸丸	天明四年
○指面草	一	京傳	同六年
女皇三人酩酊(なまよひ)	一	三多樓主人(戲家主人)	寛政頃
三都廓通言	一	五瓶	文化四年
糞土一覽	二	醉齋	文政三年
△右、京版。			
○玉菊全傳花街鑑	一	鼻山人	同五年
○廓遊餘興花街壽々女	三	同	同九年
娼妓筆硯花街雀	一	鼻山人	不詳
△右と同本なりや。			

○柳巷訛言　一　喜三二（闇持）　不詳

娼閣祕言　一　同

讀極史　一　千代丘草庵　同

○酒の徒雅　一　えいじ　同

傾城買談三部集　三　京傳　同

△京傳の繁千話、角鷄卵等を集む。

花街風流解　中三　伊賀丸　同

△右、大坂本。

○咲分論　一　竹窓　同

廓の種　一　春花園花丸　同

△右、大坂か。

三幅對　一　無學堂大醉　同

シ

新月花餘情　一　寶暦七年

春遊興　一　釋大我　明和四年

商人繁榮門　二　安永六年

娼妃地理記　一　道陀樓麻阿（喜三二）　同

○浄瑠璃稽古風流　一　佐伊野散人　同

○十八大通百手枕　一　金魚　安永七年

△右、一名、契情買指南所。

品川八景　一　蕉鳥亭（イ擬畫ナシ）　同八年

深淵情　一　楓某　同

○家暮長命四季物語　一　歸橋　同

○眞女意題　一　森羅萬象　天明元年

百人一首馬鹿講釋始衣抄　一　京傳　同七年

新土地遊來望妓婦　一　戾狂散人　同

△右、新土地來毛牛ともあり。

○白川夜船　一　京傳畫作　寛政元年

新造圖案　一　同　同

○繁々千話　一　同　同二年

○娼妓絹籭　一　同　同三年

○仕懸文庫　一　同　同

娼賣往來　中一　一九畫作　同五年

春秋酒子傳　中二　唐來三和　同

△右、三和は僞名カ。稿本（京大藏）。

○品川楊枝　一　芝晋交　同十一年

昇平樂　小一　寛政十二年
　△右、大坂版。
教學品川海苔　一　關東米　寛政
娼客竅學問　一　一九　享和二年
○滑稽素人芝居　一　慈悲成　同三年
酌緣起　一　文化元年
○男倡新宗玄々經　一　鐘西翁　不詳
　△右、大坂版。天明を下らざるべしと。
春襷折甲　一　大雅堂　同
新發幸大寺不實錄　一　島田金谷　同
白無垢芳町櫻　一　同
品川呼子鳥　一　同
振鷺亭噺日記　一　振鷺亭　同
新吾左出放題盲牛　一　大盤山人　同

ス

水月ものはなし　半三　蜩侯　寶曆八年
　△右、水月無物論とも云ふ。上方版。

○寸南破良意（すなはらい）　一　南鐐堂一片　安永四年
粹のたもと　一　同九年
○甲駅新話粹町甲閨　一　蜀山人　安永頃
粹學問　半三　寛政十一年
　△右、上方版。
教訓相撲取草　一　一　竹齋　文化元年
　△右、同題一九作と同本ならん。ケを見よ。
姿見振八景　一　可樂　同十一年
青樓眞廓誌　小一　いろは亭主人　不詳

セ

○聖遊廓　小一　寶曆七年
　△一名、雪月花。大坂版。
○穿當珍話　小一　黑白山人　同
　△北言指南。大坂版。
青樓樂種　一　雲中舎山蝶　安永四年
當世故事附選怪興　一　鼠赤堂大噓　同
○仙術金のなる木　一　同九年

○世話新御茶　一　蜀山人　安永頃（或は天明）
○舌講油通汚　一　南陀伽紫蘭作　春町畫　天明元年
○世界の幕なし　一　本膳亭坪平　同
青樓五雁金　一　梶人作　永理畫　同八年
△右、後編「染抜五所紋」。
青樓娭言解　一　蘭奢亭薫　長喜畫　寛政二年
青樓心得草　中一　蓬萊山人　同九年カ
青樓松の裡　一　一九　享和二年
青樓日照雨　一　一九畫作　同
△右、狐竇這入後へん。
青樓日記　一　白楊東魚　同
青樓小鍋立　一　成三樓　同
○青樓玉語言　一　笑馬　文政五年
青樓女庭訓　一　鼻山人　同六年
△一本、此の作一九作とし、籔學問の後篇といふ。
青樓曙草　一　鼻山人　同八年
○船頭深話　一　三馬　不詳
○船頭部屋　一　同　同

青樓惚多手買（ほたてがい）　一　花笑　疊丸　同
世説新御座　一　振鷺亭　同
小説白藤傳　一　玩世教主　同
○青樓酒落文臺　小一　醉川子　同
△右、京版。

ソ

袖かゞみ　一　眞顔　天明元年
其アンカ　一　中橋散人　同六年
（青樓）五雁金後編染抜五所紋　一　梶人作　永理畫　寛政二年
俗談諺種（半）　一　塵塚山人（イ泥田坊夢成）　不詳（亥年）
○曾我糠袋　一　唐洲　同
曾我拍子舞子濱　一　同

タ

當世花街談義　半五　寶暦四年
○辰巳の園　一　夢中散人　明和七年
蕩子筌枉解　一　茶釜散人　同

書名	冊	作者	年代
當世作之種	一	兵百作	安永二年
投扇興	一	擧圃	同三年
○當世左樣候	一	無別庵別世界	同五年
當世左樣茶	一	新吾三	同
當世爰かしこ	一	京傳	同
大通傳	一	高慢齋	同六年
○當世虎之卷	一	金魚	同七年
△一名、契情買虎之卷。			
○大通秘密論	一	夢中散人	同
當風ものは朝商	一	抽采舍	同
當話問答之卷	一	道樂山人	同
○當世杜選商	一	吉千慶子	同
○大抵御覽	一	朱樂菅江	同八年
玉菊燈籠辨	一	南陀伽紫蘭	同九年
○貧幸先生多佳余宇辞	一	不埒山人	同
○白拍子の文反古誰が袖日記	一	實嘉傳	安永頃
當世導通記	一	天竺老人	天明二年
大通紀山寺	一		同三年
通扇興	一		同
太平樂記	一	桃栗山人	同四年
○短華蕊葉	一	不詳	同六年
○大通契語	一	笹葉鈴成	寛政二年
△一本に、大通閨語補、一、鈴成、寛政二年とあり。又一本には、大通契語、鈴成、櫻田書、寛政十二年とあり。三本なりや、二本なりや、全一本なりや。			
○辰巳婦言	一	三馬 哥麿	同十年
當變木限倉八卦	一	一九	同
○道中粹語錄	一	蜀山人	寛政カ
△一名、變通輕井茶話。			
吉原談語後篇誰也行燈	一	一九	享和二年
靑樓和談玉子四角	一	鼠樓庵馬鹿人	同
旅芝居田舍正本	一	万壽亭正二	文化十一年
○太平樂卷物	一	天竺老人（風來）	不詳
大通店於呂志	一	雲樂	同
多荷論	一	茶にし	同

○當世猪の子　一　同

當世氣ごり草　一　金々先生　同
△右、同本カ。

當世氣轉車　一　金々先生　同

巽夢卒爾屋　一　同

○當世風俗通　一　喜三二　同

○當世女風俗通　一　春町作 春章畫　同

投扇興譜序　一　同

辰巳の世界、　一　東來山人　同

當世繁榮通寶　一　同

大通愛想盡　一　中橋狸吉　同

大通人好記　一　持麿　同

チ

○仲街艷談　一　樂亭馬笑　寛政十一年

千歳松之色　一　不詳
△右、上方本カ。

地者八景　一　京傳ト云　同

蟠陽英華　一　同

甚孝記　一　爲馬　同

長者教　一　室町頃とも云　同

ツ

通仁枕言葉　一　歸橋　天明元年

○東西南北突當富魂短　一　西奴　同

通人三國師　一　同

○通人の寢言　一　柿發齋（爲馬）　同二年

古今無三人連　一　辰狂散人　同（三年）

通人屋滿言葉　一　斧拔山人　同

○通言總籬　一　京傳自畫　同七年
△右、たゞ人さよむか。

通詩選諺解　一　野山人　同

○通詩選笑知　一　同　同

通天興　一　花街　天明頃

○通氣粹語傳　一　京傳畫作　寛政元年

通俗子　一　呂平庵渡橋　同十一年

鶴岡花選帳　一　谷蝶　享和二年

通言東至船　一　富士楽斎　不詳
通人講釈　一　同
△右、改題「通の穴這入」。
つゝれの錦　一　同
△渡邊幸山作、洒落本による同題稿本あり。是れか。
通俗雲談　一　雲雀亭春麿　同
仮手本後篇通神蔵　一　あつ丸作 北斎画　同
通人蔵　一　同
△右、通神蔵と同本カ。
通志選　一　里南隣　不詳

テ

○天狗髑髏鑑定縁起　一　風来山人　安永五年
手管智恵鏡　一　志水燕十　不詳
△傾城智恵鏡と異本カ同本カ。
娼註銚子戯語　一　孟蛋先生　同
定家文庫　一　同

ト

○飛だ噂の評　一　風来山人　明和三年
東都青楼八詠並略記　一　慨臥散人　安永四年
△右、一に青楼八詠と曰ふと同本ならん。
○登美加遠佳　一　豊川里舟　天明二年

一五四

○富岡大論　一　万象亭　天明四年
○富岡八幡鐘（おかはちまんかね）　一　かはきち作 北渓画　寛政二年
取組手鑑　一　振鷺亭　同五年
東都真衛　一　三笑亭可楽　文化元年
東海探語　一　美満寿山人作 北嵩、北秀画　文政四年
△右、深川もの。
富札買徨秘伝　一　不詳
大通[illegible]ざくろの巻　一　森羅万象　同

ナ

○南閨雑話　一　夢中山人寝言　安永二年
南閨新話　一　同　同
△右と同本ならん。或は新は、雑の誤植か。
浪花今八卦　中一　同
△右、上方版。
○中洲雀　一　道楽山人　同六年
南客先生文集　一　路鉄作 春章画　同八年
擲銭（なげ）青楼占　一　金毘羅山人　同九年
北郭故賓内所図会　一　小金あつ丸作 政演画　天明六年
南極駅路雀　一　逸我　同

放蕩虚誕傳　一　變手古山人　安永四年
○寶花新驛　一　菅江　同六年
○放屁論後篇　一　風来　同
花姿色名寄　一　柿本臍丸　同八年
初葉南志　一　魚京　同九年
○芳深交話　一　穴好　同
初登　一　同
○麻疹戯言　一　三馬　享和三年
誹諧通言　一　五瓶　文化二年
四季日待春廿三夜待　一　山鳥　同九年
初恵比壽　一　一九　文政三年
河東方言箱枕　中三　大極堂　同五年
△右、上方版。
麻疹癮言　一　花守　同七年
○馬糞夜話　一　紀南子　不詳（安永年間カ）
△右、一名、新宿穴學問。
花の下長物語　一　乳足　同
話のやうだ　一　同
花名よせ　一　耕書堂　同
△右、花姿色名寄と同本カ。

百安楚飛　一　咄雨庵　安永八年
○飛花落葉　一　風来山人　天明三年
○人遠茶懸物　一　一播齋（芝甘交）　同六年
○一目土堤　一　内新好・白晝　同八年
秘事傳授嚢　一　振鷺亭　寛政五年
△右、一名、戀瓜花八書。
ひろふ神　一　，　同七年
白狐通　一　谷峨　同十二年
信濃南結比翼紫　一　宇田樂庵　享和元年
手管早算獨稽古　一　宮久亭三笑　同二年
素見數の子　一　一九　同
白狐傳　一　艶二　文化元年
秘事傳授嚢　一　築書夢輔　同二年
△右、寛政五年本と同本カ、再板カ。
○秘事眞告　一　善牙山人　不詳
△右、大坂版。
○嫖客三躰誌　一　艶二・北溪　同
百家評林　小一　採花亭主人　同
△右、一名、浪華樂府。

一目千軒　一　不詳

白狐通　後編　一　同

△右、谷峨とあれど、僞作か、稿本。

鄙風俗眞垣　一　同

△右、稿本。信州田中温泉を材とせるもの、蓋し珍也。

フ

百人一首三十六哥仙風流娘　一　明和六年

○婦美車紫鹿子　一　歸橋　安永三年

風流裸人形　小一　同五年

△右、大阪もの。

○風俗問答　一　隴羅山人　同

○深川新話　一　山手馬鹿人　同八年

風俗砂拂傳　一　隴松子蔦者不明　同十年（イ九年）

○富賀川拜見　一　歸橋　天明元年

○風來紅葉金唐革　一　同二年

○深川手習草紙　一　十方蔦内　同五年

福神粋語錄　一　天竺老人（萬象）　同六年

不實論　一　同七年

ふくら雀　一　百成　寛政元年

大寶新話風俗通　一　松風亭如琴　同二年

月雪二ツ蒲團　一　醉醒水吉　享和元年

△右、文化に、「驛路花」と改題。

○婦足髷　一　成三樓子興　同二年

△右、清川全傳雪の梅と改む。

婦多通尾里　一　在雅亭光　文化三年

△右、稿本、名古屋物カ。（書物禮讃第二參照）。

八百八家後節穴さがし　一　千兩庵頃持（イ錫輔）　文政九年

風俗三石士　中二　鍋脈　弘化元年

○二日醉大入盞（前編）　一　萬象亭作政演畫　不詳

風流仙婦傳　一　時雨庵主人　同

揚花水性浮華川容氣　一　同

二もと松　一　越路浦人　同

○深川大全　一　京傳稿　同

△右、蠧菴子舊藏稿本。賞奇樓叢書に出づ。

ヘ

瓢金窟　一　烏有先生　安永五年

偏屁子邊　一　同八年

變內變的論　一　天明二年

○蛇脫青大通　一　風來　不詳

部屋三味線　一　遊女某　同

ホ

本草妓要　一　承露主人　安永頃

北國五ッ雁金　一　梅月堂梶人　天明八年

△右、青樓五雁金と同本ならん。

○北華通情　小一　花丸　寛政六年（五）

△右、大坂もの。

北川蜆殼　半二　二斗庵幸雄　文政九年

△右、大坂物。

廓雑談余興北里通　三　東里山人　同十年

北廓雜卯方　一　百一誌　不詳

マ

間似合早推（粹）　小一　史登徳齋　明和六年

△右、大坂物。

○雙床萬久羅　一　山手山人左英　寛政元年

松の登妓話　一　鶺鴒齋豊年貢　同十二年

新織傳意鈔　一　椒芽田樂　同十三年（享和元）

右、稿本（京大藏）。

○娼妓美談籬の花　一　鼻山人　北溪畫　文化十四年

拾遺枕草紙花街抄　一　不詳

ミ

○美地の蠣殼　一　蓬萊山人　安永九年

見た京物語　一　寛政元年

美止女南話　一　萬壽　同二年

青樓夜話廓數可佳妓　一　成三樓鳳雨作　なべ丸畫　同十二年

○南門鼠　一　紫色主　同

見通し古　一　一九　不詳

狂言綺語かしく六三郎見通三世相　一　振鷺亭　同

深彌滿於呂誌　一　可鴫　同

見通部戯場　一　柳陽舍園鶏　同

青樓夜世界闇の明月　一　小金あつ丸　北齋　同（寛政頃カ）

ム

むすぶのみす紙　一　明和年間

無益痴禁抄　一　阿字齋　安永元年

息子部屋　一　京傳自畫　天明六年

△右、一名、令子洞房。後更に、廓中奇言根古伽魔起と改題再板せり。

無駄壽奈古　一　多羅福孫左衛門　同

武江彦物志　一　岩崎常正　文政七年

○無駄駿辛甘　一　千差萬別　不詳

色里三十三所息子順禮　一　同

書名	冊数	作者	年代
滑稽講談息子氣質	一	振鷺亭	不詳
無駄物語	一	雲楽山人作 春水畫	同
メ			
明和伎鑑	一		明和六年
名所かゞみ	一	名隣	不詳
モ			
○文選臥座	一	狂糸、湖峨州	寛政二年
百千鳥	一	三蝶	同十一年
もみぢがり	一	南郭山人	不詳
百美知之娌（もみぢのり）	一	南鶴山人	同
△右、二書恐らく同本ならんか。			
ヤ			
藪さがし	二	藪井竹齋	(初)安永二年 (二)天明六年
山下新談	一	タアンン作 畫不詳	安永六年
山下雑談	一		同
△右ニ同本カ。			
○當世役者穿鑿論	一		同
○山下珍作	一	馬鹿人	天明二年
野夫鑑	一	東湖山人作 哥麿畫	同七年
野良玉子	一	一九自畫	享和元年

書名	冊数	作者	年代
南濱野圃の玉子	一	増井葉齋	文化二年
△右、稿本。			
谷中の月	一	十字亭主人	文政十一年
陽臺遺篇（小）	一	獣笑閣主人	不詳
△右、大坂板。「月花餘情」の後編也。			
不粋照明房情記（やぼ）	一	京傳カ	同
△右、一名、大門雛形。			
○山嵐	一	種彦	同（文化四年カ）
陽臺三略	一		同
奴通	一	堂駄先生	同
ユ			
晴昔の茶殼（ゆふべ）（イ唐）	一	紫色主（艶二樓）作 さよ丸畫	不詳
廓中餘情由佳里の月	一	鼻山人	同
夕志語言	一	鸞蛙樓主人作 小（北カ）泉畫	同
ヨ			
○夜半の茶漬	一	京傳	天明八年
○吉原楊枝	一	京傳自畫	同
○傾城買二筋道三編宵の程	一	谷峨	寛政十一年
○吉原談語	一	一九	享和二年
今昔物語夜慶話	一	宇田楽庵	文化三年

○意篇吉原讀語夜鄽行燈　一　桃猿舍犬雄(一九)　文化十四年
　△右、誰也行燈と同本カ。
後篇葉見數の子夜半の冷酒　一　一九　不詳
響手家語　一　同
吉原帽子　一　煙花滾子 畫不詳　同
四ッの谷　一　曾滿人　同

ラ

來芝一代記　三　寛政九年

リ

○力婦傳　一　滑滄涙(風來)　安永五年
○龍虎問答　一　蓬萊山人　同八年
両國しをり　一　丹波助之丞　天明三年
○李不盡通詩選　一　蜀山人　同四年
良夜靜撥　一　藍川風通　不詳
鯉池全盛噺　一　雲樂　同
柳巷三關笑　一　金箔　同

○里鶴風語　一　風来　不詳

レ

○後篇娶遊事列仙傳　小一　寶暦十三年
　△右、大坂版。

ロ

樓妓選　一　里南鐐(東洞)　文政二年
論語丁　一　盧來先生　不詳
華里通商考拾遺六丁一里　一　万亭高慢仙　同
論娛交　一　同

ワ

○和唐珍解　三　和　天明五年
別の鐘　一　不詳
○和漢同詠道行　一　蜀山人　同
　△右、魂膽心氣樓と改むといふ。

(表紙の二より)る。幕末小説家滑稽本の作者殊には猥本の著者として明治に残存した作者中、魯文は寫眞が存して居るが金鵞の寫眞は恐らくは無いであらう。さすれば此團珍の漫畫は彼の風貌を偲ぶべき唯一の資料と考へるのである。梅亭は後に化三(ばけざう)とも號した。此漫畫中に化三とあるは、別の社員で梅亭が此名を稱へたのは、其後の事である。(九月十四日)

寄贈紹介

近世生活と國文學　麻生磯次著

篇章を分つこと六、近世生活に滲透して兼て當時文學の特質を巧みに捕捉した好論文である。一部を雜誌で拜見した時も夙に敬服した。今斯くして系統立てられて見ると、その綜合的態度の堅確さに驚かされる。好著である。(四六判四五四頁、東京赤坂傳馬町　至文堂。參圓五拾)

萬葉集の新研究　久松潜一著

久松氏が東大新進唯一の萬葉學者であることは夙に世の知る所である。時代相と各歌人の藝術的内容と生活とに喰ひ入つた研究として最新の優秀記録である。好著。(同、四四四頁、附表附。同。同)

書誌　第一冊

東大圖書館内有志諸君によりて新たに成された古今東西典籍研究の集誌である。一號、姉崎、千葉(龜雄)、植松安氏等の執筆。會員募集中である。健全なる發達を望む。(參拾五錢　東京市神田區表神保町十、坂本書店。)

遞信紀念論叢書目錄　金田晴一編

明治三十五年以來の我國遞信省發行の論叢書目錄及解題、摺出高も記入がある。斯道好事家には、重寶此上ない。(非賣品。發行所不明)

コクテルの作り方　佐藤紅霞編

きれいな凝つた本である。こんな本は、見たり弄つてゐる丈でも氣持のいゝものだ。本文色摺。コクテル、コブラー、サワー、ポンチ、エグノグ以下云々、數種の高襟飲料の研究參考書である。私の江戸軟派とは遠ざかるが、自分だつてこれ位ゐのものは、飲んではゐる。私よりも荊妻が大に參考になるといつた。とにかく面白い本だ、可愛いゝ本だ。裝幀の氣の利いてゐる事此上なし。次篇には性慾學辭彙が出るさうだ。さぞ斯うしたキレイな、結構な本だらう。早く見たいものだ。(袖珍一三六頁、絹表紙、壹圓八拾錢。東京市小石川區戸崎町十二、紫文庫刊行會。)

○新小説(十一月號)此號には、自分も「西鶴孫東鶴の著作」を執筆した。見當つたら讀んで頂きたい。○墓碑史蹟研究(第二十六冊)○歌舞伎(第七號)○風俗研究(第六十三、第六十四、第六十五)○川柳乾鮭(十月號)○早稻田文學(十月號)○歴史地理(十月號)○國學院雜誌(十月號)○國語と國文學(十一月號)○大大阪(二ノ十。)大阪の氣の利いた川柳雜誌。古川柳の研究もある。○川柳よのころ(四ノ九)岐阜の雜誌、久良岐氏や花月翁、柳雨氏等の執筆が見えてゐる。○性の知識(十一月號)○清元研究(第四)○新舊時代(十月號)

著者より

今月は又洒落本書目で總紙面を取つた。自分としては直接の必要があつたからではあるが、一般にも重寶であらうと思ふ。就ては昨今洒落本の此種の書目の整理と諸家の借出しに寧日ない。愈々確實に、來春(都合により秋)、春陽堂が發行責任者となつて、豫約(又は分賣)の形式で、江戸軟文學大系を刊行、四六判七百頁全十五卷以上、中、洒落本が五卷で、其の擔任が小生、坪内博士を始め數家の贊助。博士の御意見により自分の洒落本選擇は、既刊中の名作若干種と、未刊物大多數、計二百五十は出したい。夫には未刊翻刻物の材料確實が百種内外の現狀では大に悲鳴を揚げる。是非諸家の御藏書を御借りしたい。逐次搜索書目を廣告しますから、(本月その一)御藏本有之、若くは御見當りの方は、實入又は貸覽に就て十二分御世話下さい。迚も大事業で憔悴たるもの有之候。[illegible](尾崎生、十月二十六日)

定價表

一冊卅五錢	郵稅貳錢
六冊分	壹圓四拾錢　稅共
十二冊分同	貳圓八拾錢

(一、[illegible]) (一、[illegible]照合に通信料添付の事)

大正十四年十月二十八日印刷
大正十四年十一月一日發行
[illegible]

編輯兼發行者　名古屋市東區東道東町百五十七番地　尾崎久彌
印刷者　名古屋市中區[illegible]町二丁目[illegible]番地　莫北貞造
印刷所　名古屋市中區[illegible]町二丁目[illegible]番地　扶桑社
發行所　名古屋市東區東道東町一五七番地　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七一番

洒落本原本 捜索廣告（その一）

「著者より」の自記の如く、目下大車輪にて蒐集しつゝあれど、中々捗どらず候、官營圖書館本にも多少在本（入用のもの）あれど、これは迚も小生らの地下には不能、よりて自力さ大方本誌後援の諸賢にお縋りする。買入にてもよし貸覽にてもよし。貸覽なれば、小生責任を持ち、小生自身取扱ひ、往復一册につき七日にて複寫、御返送可仕候、本の痛まぬ事は保證、小生を御信じありたく候。一々貴書庫を御訪れするが本意なれど、各地に分散もしをり、且つ例のピンボッ退なし、何卒喜捨的に御後援を奉願上候。若し又御存じよりの書肆にて、以下の所要書目のものたとひ一本なりとも二本なりとも有するあらば、精々御紹介の勞を御願申度、微弱なる小生一個の事業として此種の文献的共同勞苦の一として、大方の義俠的後援を偏に御願ひするにて候。以下所要書目、順次に掲載。全部にて、まだ欲しきもの、一應は内容に眼を徹したきもの、二百種は可有之候。右御願まで。草々不一。

（尾崎久彌）

洒落本原本所要書目（一）

（ア）仇手本一册〇相合傘一册〇雨夜噺一册〇鸚鵡盃一册〇跡引上戸一册〇悪酒雜言鑑一册〇穽の廓一册〇青大通返答一册〇（イ）遊ふ多壽寄三册〇無頼通説法一册〇色事指南所一册〇居續借金一册〇遊婦里會談一册〇遊僊窟烟の花一册〇遊君花すまひ一册〇今おせん傳一册〇遊里名所一册〇入込浴室情流理一册〇色講釋一册〇一文塊一册〇遊客年々考一册〇意妓の口一册〇市が榮ゆる除夜一册〇異見規矩一册〇遊子語言一册〇伊吾物語一册〇田舍通言驛路之鈴一册〇今いま八卦一册〇遊子娯言一册〇井中水二册〇（ウ）則地臭意一册〇（エ）驛者三友一册〇艶詞両巴巵言一册〇永代談語一册〇煙華漫筆一册〇（オ）惚己先生夜話一册〇女肆三人生酔一册〇翁曾我一册〇面和俱噺一册〇音羽瀧一册〇鳴通カ一册〇（カ）雅佛小夜嵐一册〇假根草一册〇甲驛夜の錦一册〇樂女好子一册〇閑居放言一册〇蚊不食呪咀曾我一册〇籠細工一册〇客衆氷面鏡一册〇格子戯語一册〇（キ）起原情譜一册〇妓情返夢ノ解一册〇祇園會挑燈藏一册〇錦雞帳一册〇金錦三調傳一册〇聞きはつり一册〇奇妙圖彙一册〇紀南子一册〇（ク）廓街一寸間遊一册〇比絲兵庫結一册〇華里通商考一册〇孔雀染勒記一册〇廓膽鏡一册〇廓中閨語一册〇同契語一册〇雲井双紙一册〇（ケ）傾城買糠味噌汁一册〇俠者方言一册〇契情買夢の汗一册〇教訓角力取草一册〇傾城人相鑑一册〇契情買言告鳥一册〇契情實の巻一册〇同後編〇見番太平記一册〇契情徳噺一册〇傾城極祕巻一册〇契情畫の世界一册〇傾城初噺一册〇藝子酒戯一册〇契情買心得二册〇現金論一册〇（コ）功慶子一册〇古今三通傳一册〇古今無三人連一册〇古今若色婦一册〇古今吉原噺一册〇古文手毬歌一册〇言葉の玉一册〇後編極祕巻一册〇小紋雅話一册〇こんたん手引草一册〇魂膽胡蝶枕一册〇五臓眼一册〇公大無多言一册〇魂膽情深川一册〇（サ）殘坐訓一册〇讀極史一册〇三國獨合點一册〇櫻川仙女傳一册〇三都廓通言一册〇娼妃地理記一册〇品川八景一册〇新發華大寺不實錄一册〇白無垢芳町僂一册〇品川海苔一册〇深淵情一册〇新土地來毛牛一册〇新月花余情一册〇始衣抄一册〇酩繰起一册〇新吾左出放題盲牛一册〇粋のたもと一册〇素見數の子一册〇青樓眞廓誌一册〇姿身振八景一册〇（セ）青樓樂種一册〇青樓松の裡一册〇青樓日照雨一册〇青樓俟言解一册〇青樓心得草一册〇青樓曙草一册〇世説新御座一册〇青樓占一册〇選怪興一册〇青樓五雁金一册〇青樓小鍋立一册〇（ソ）俗談諺種一册〇其アンカ一册〇滄拔五所紋一册〇（タ）當世左樂采一册〇大通傳一册〇玉菊燈籠辨一册〇誰也行燈一册〇當世作之種一册〇玉子四角一册〇多荷論一册〇當世婦の子一册〇當世氣轉車一册〇巽夢卒爾屋一册〇當世繁榮通寶一册〇當世爰かしこ一册〇當風ものは朝商一册〇當話問答之巻一册〇導通記一册〇當變木眼倉八卦一册〇大通愛想盡一册〇大通人好記一册〇大通紀山寺一册〇太平樂記一册〇（チ）千歳松の色一册〇地者八景一册〇嬬陽英華一册〇（ツ）通俗子一册〇鶴岡花選帳一册〇通言東至船一册〇通人講釋一册〇通俗雲談一册〇通人三國師一册〇通天與一册〇（テ）手管智惠鏡一册〇銚子戲語一册〇定家文庫一册〇通人屋滿登言葉一册〇（ト）取組手鑑一册〇飛美佳女顏一册〇東都青樓八詠一册〇富岡大論一册〇東都眞衞一册〇富札買樣祕傳一册〇ごらの巻一册。

大正十四年十一月二十八日印刷
大正十四年十二月一日發行

定價貳拾五錢 送費貳錢

大正十四年十一月二十八日印刷
大正十四年十二月一日發行

貳編第九冊（通號第三十九冊）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第九册

本文

稿本「江戸寛政實錄」の演劇記事（下）
〇附、異說「鏡山の實錄」。
身延道中華鹿毛と旅枕裏青海
洒落本改題本の異例
洒落本書目補遺

洒落本書目補遺

前册の洒落本書目の補遺である。

イ〇深色狭睡夢　二冊　芦屋高根　文政九年
ウ〇薄紅葉　一冊　流浮世　寛政元年
オ〇お伽草春の壽　一冊　馬琴　文化十二年
キ〇鬼れい論　一冊　山月庵　天保五年
ク〇粋うろり　五冊　廬橘　同
コ〇戀湊女護生娘　中一冊　藥川南嶺　文政五年
コ、桑平ひでん清明もどき戀道雙陸占　一冊　播州古池丹下　不詳
セ〇青樓雜談　一　寫本　同
セ〇船窗笑話　一　同
チ〇珍學問　一　慈悲成　享和三年
△右、落語本。
チ〇茶番類語　一　焉馬　安永八年
ツ、通客一盃記言　一　五岳　文化頃
△右、稿本。
テ〇竊潜妻　中二　盛田小鹽　文化四年
フ〇婢下婦妓ふみ身嘘　一冊　墨之山人　文政三年
△右、稿本。
ホ〇本朝別(列カ)女傳　中一　振鷺亭　不詳
マ〇萬更大師異圖本　一冊　鉄山信智　寛政二年
ミ〇見立花のお江戸　一　洒落齋　安永七年
メ〇妙々手段　一　風來山人　不詳
リ〇里千隣通志選　一冊　北郭先生訂正　不詳
リ〇合刻両都妓品・史林殘花　一　不詳　同

以上、成川圭司氏、飯島花月氏、忍頂寺務氏等の諸家藏本に依りての追補である。

訓みの誤り。

クの部に入れた廓の意氣地は、サの部の誤である。頭の割註も謬つてゐた。サに入れ、
〇傳授之巻廓意氣地　一冊　一九　享和二年
と訂正。尚、始衣抄は、ハの部、
〇百人一首始衣抄　一　京傳　天明七年
と訂正。仲街艶談は、ナ、
〇仲街艶談　一冊　樂亭馬笑　寛政十二年
と訂正。

尚、追補事項如左。

イ(井)の遊君花すまひは、繪本。遊里名所は一に遊里名所鑑、名隣作とある。いろは醉故傳は、二代目自笑は削る。振鷺亭作、二代目自笑序、寛政六年。井中水は、旅行記。
ウの、うかれ草紙は、飜刻本あり。
エの驛者三友は、元外題「紀南子穴學問」。
オの翁曾我は、天保三年は誤り、不詳と改む。
オの女鬼產は、無氣しつちう作。
カの客衆氷面鏡の註の細見は、役者評判記カと改む。
カの客衆一華表は、關東米の作。
キの紀南子は、紀南子穴學問の事ならん。驛者三友と重複。よりて削る。
キの、奇談書繫禿筆は、狂蝶子文麿の作。
クの廓の櫻は、右、言告鳥の二篇目と註す。
ケの妓者呼子鳥、右、妓者虎之卷と、天明七年再板を入る。
ケの契情買中夢の汗は、同夢の盗汗。
ケの傾城極秘卷は、傾城買極秘之卷。遊里山人。
ケの歌妓酒戯は、一向不通替善運と殆ど同一。序と始め數丁、終一丁違へるのみ。他は、全部同文。前者の再摺追補ものならん。「一向一の歌麿畫は、落款を削りて再使用せり。
コの功慶子は、一に功慶子三千丈といふと同本か。
サの、殘坐訓は、教訓物。
サの妣閣秘言は、陽臺遺編と合刻、獻笑閣主人の著。
シの昇平樂は、白舟作。
シの品川呼子鳥は、一に鶯馬亭作。
セの穿當珍話は、安永に再刻す。
セの世話新御茶は、世説新御茶の誤植。
セの青樓曙草は、一に……未明草。中本。
セの船頭新話、一に寛政十年作。
セの船頭部屋、一に同十二年作。
ソの曾我糠袋は、寛政八年作。
タの當世花街談義は、洛陽孤舟作。
タの當世氣ごり草は、次と同本。氣轉車は、氣轉草の誤。即ち當世氣轉草の一。安永二年作。
タの當世風俗通、一に安永二年板。
タの當世女風俗通、一に同四年板。
チの千歳松の色、松夫作、嘉永六年。
チの長者教、寶暦十二年刊。

（未完）

稿本「江戸寛政實錄」の演劇記事（下）

〔附、異說「鏡山の實錄」〕

○市村羽左衛門、中村座へ出る事
並に羽左衛門一世一代の事

市村羽左衛門は、往古より吹屋町歌舞妓芝居の座本なりしが、去々年類燒の後は、暫く座元退役して、今其座を桐長桐といふ。然るに堺町中村勘三郎座に市川團十郎勤め居けるが、羽左衛門を勸めて、中村座へ出座せしめしは、誠に希代の事なりといひて、人々沙汰せり。此座に羽左衛門一世一代を勤む。外題三ッ人形彌生ひな形と號して、三役ながら人形の身振をまねたるものなり。大評判にて見物群集せり。此一世一代といふ事京大坂に云ふとは、其の仕方大きに相違せり。すべて上方の一世一代は其役者一生の仕納め所中への暇乞なり。江戸のは左にあらず、其藝を再びせぬといふ事なり。夫ゆゑ一世一代したる役者舞臺に勤め居る事常々なり。是もまた壹ッの珍談ならずや。

一世一代の事を語るにつけて、江戸に珍說あり。豊竹肥前様が座に、鶴澤蟻鳳といふ三味線引あり。江戸にて鶴澤流の親玉なりしが、何と思へるにや、去年より三味線をやめ、名殘の狂言を出し、夫より淨るり語りとなり、今豊竹蟻鳳といふ。元來三味線は幼少より手練なれ共、淨るりは一向聞き苦し。殊さら昔より例のなき事を始め、今迄三味線の時は賤しめて相手にもならざりし下手淨るり共の下につき、床にては見物の鈴をうけ、樂屋にては肩身をすぼめ、いくばくの恥を掻きしも、一ッの珍談と云ふべし。——（以上、巻八ノ二）——

○中むら座古手屋八郎兵衞狂言の事
並に喧嘩騷動の事

中村勘三郎芝居、三月末より名古屋山三新狂言を増山金八櫻田治助両人が筆作にて、殊の外大はやり成しが、五月節句頃にいたりけり。時に三月末の事成しが、元來此なごや山三の狂言に古手屋八郎兵衞を取組たる趣向にて、役わりは八郎兵衞に門之助が弟市川八百藏、おつまに中むら里好、香具屋彌兵衞に市川團十郎、出がたりハ富吉踏齋宮太夫、役といひ是といひ古今の大はやり成しが、頃ハ夕方七ッ過成しが、侍六七人おもてより切入たりしが、さうどうな丶めならず。上を下へとかけ廻し。見物ハおれよ／＼といひて子を逆しまにか丶へ辨當をふみ碎き。散亂して樂屋へ逃入たる所。樂屋口も裏より切人とて堅く戸ざしければ、後よりは手しげく切立られてくづれ來たる人、誠に將棊倒しの如くなるに、前後に度を失なひ、詮方つき、樂屋の中腰にこしらへたるれんじ窓をつき破り、向ふの水道へ飛入／＼、命から／＼逃まどひけり。扨また表ハ四五丁四方。店を明たる所なく、ひし／＼と差かためければ、逃入べき方もなく、あれよ／＼と聲をあげ、逃散人を追廻し、拔身にて追かくる故、騷動は云に及ばず、手負あまたなり。堺町東横丁にて、芝居表方の者共、件のやからを追取卷、棒にてとり卷たり。中にも茶場の喜八とかや云ふもの、棒の術に得たりければ、飛こんで打んとしけるに、相手遙に手利まさりにて、喜八が額をちやうど切ば、眼に血入てたじろくに驚き、皆散／＼に逃失たり。夫より何國ともなくなりけり。程なく　御公儀樣より檢使の御役人樣いらせられ、尤の儀に思

召、町人の手に合ざるに御咎もなかりしが、元來此喧嘩は、其前日に、あるやしき方の仲間、酒に醉來り、芝居へ入らんと無体の事どもいひ罵りけるをとらへて、芝居の者共、彼仲間のあたまに物を打着せ置、袋打に打たりし遺恨なり。是によつて其御咎つよくて、牢へいる者多かりしが、切入て、あばれたる者もいつしか召捕られけるよし聞へけり。しかし芝居ハ御咎めもなく相つとめ、入牢の輩もいく程なく御免ありしなり。御上ミの御慈悲有難くぞいひあへり。

其夜、諸方より勘三郎座本の事ゆへ、見舞に行事多し。行人ごとに、燭臺蠟そく一挺つゝともし歸り下されよとて遣しける。實に全盛をはる者にぞ有ける。（以上、巻ノ十ノ二）

×

〔序でに、此の稿本「江戸寛政實録」中に、「鏡山」の實録さして、異説がある。筋路は同じ様であるが、[illegible]しい。それに普通説では、松平周防守家中の事さしてゐるが、此は、井伊の分家の出來事である。草履打「或は、草履を職つけたに過ぎぬらしい。）を肯定する説もあるが、（「芝居さ史實」。「敵討」[illegible]）此は、全く草履の事も見えない。それに憤死の遺書もその全文がある。これは、他にも類似を見たが、これも僞作にしても一興。依りてさにかく、その全文を載せておく。（尚、此の「草履打」などに就ては、今度、「歌舞伎」（雜誌）に「見後の駒下駄」さ題して、自分の意見を[illegible]た中にもある。これは、歌舞伎座十二月興行の「駒下駄」に因んで、草履打、下駄打の大體さの雑言である。）〕

江戸寛政實録第四

○井伊御屋敷忠烈の女中の事
並に敵討の實録

越後與坂の領主井伊兵部大輔殿ハ、當時の御大老江州彦根の城主井伊掃部頭殿の御一門にて、

御はぶりよくおわしましける。此兵部殿御上やしきに女のかたき打あり。其由來を尋るに、御局頭に鷹津といへる女あり。年五十に過たりしが、生れつき邪智ふかくして物ねたみつよく、朋友をいたわる事なかりしかば、部屋中の女中心にふかく是をにくむといへ共、言葉をもつてこびへつらひ、其日を送る事にてぞ有ける。然るに御つぼねの中に若菜といへる女中あり。天性とそなわる所の美人にして、風俗のあでやかなる事、誠に一度ゑめれば百の媚ある風情なりければ、殿のおぼし召も淺からず有ければ、はや鷹津これを深くねたみにくみ、何とぞして耻辱をあたへ、屋敷の内をしりぞかしめんとぞ企てける。ある時朝の事成しに御前より若菜を召す事急なりければ、取物も取あへず、いそぎて御前へ參るとて、彼鷹津が部屋の前を通りけるが、折ふし鷹津は部屋の戶口に立て、四方を見はらし居たりけるに、斯ともしらず、若菜は一圖に御召を大切とはせ行けるを、時こそ來りけれと、鷹津心によろこび、若菜殿先待たまへ、身ふしやうなれども御前の御目鏡にて局がしらを勤むる我なるを、我立たる前を一言のあいさつも有べき筈なり。然るにみぬ顏をして通らるゝは、何さま宿意のすじ有てか、但し又何ゆへに斯人をふみつけたる仕方せらるゝや、子細を承わらんと六ヶ敷ぞ云かけたり。若菜大きに驚ろき、こは思ひ懸なき御とがめに預り候。其御許様に對し、何しに宿意をさしはさみ申べく候半や、ふみつけたる抔とは、勿躰なき御事に候なり。只今御前より急に御召遊され候ゆへ、御上意を大切にぞんじ、詰元より御許樣是に入らせられ候共、見付申さず候段、返す〳〵あやまり入候、何とぞ申上るに言葉もなく候、只〳〵御前の御用遲なわり候ては、如何に候へば、猶々跡にて御わび申上候半と吳々いゝ置、御前をさしてはせ行けり。扨それより若菜は御

前の用事つとめ終りて、部屋へ歸り、段々とわぶるといへども、一圓聞入れず、侍輩の女中もとも〴〵言葉盡して挨拶すれども一向取上ざりければ、若菜は何ともせんかたつき、我部屋に歸りても只鬱々として思ひ深くみへければ、若菜が召つかひ、麻楚といふ女、心にかけて是を案じ、若菜が前へ出て、何とぞし玉ふかと問へども、つぶさに語りもやらず、一間に入て、一通の文をしたゝめ、此文を親達の里へもち行來れよといふ。麻楚心得候なり迚、若菜が親里へ其ふみを持行けるが、道にてしきりにむなさわぎしけるを心得ずとおもひ、手に持たる文をひらきみるに、書置の文言なり。其文の言葉にいわく、

わさ〳〵一筆申しまいらせ先さや御二かた樣とも御きげんよく入らせ玉ひ候ていか斗の御嬉しさに存まいらせ候へばわが身事も是まで御前のしゆ尾も宜し九つとめ居申候所にきのふ思ひもよらずいさゝかのふ調法より事起り、つぼねがしら鷹津殿と申人ににくまれ、今はせん方つき候まゝしぬると覺悟きわめまいらせ、夫に付御二親を跡にのこし、先だちまいらせ不孝のつみふかく恐れまいらせ候へ共是非なく候へ者猶なきあとの御とむらひ草葉のかげよりかへす〳〵も待居まいらせあら〳〵かしこ

けふ　若菜

父上樣
母上樣
御二所へ

右のごとく認ため有ければ驚くとなゝめならず周章ふためきて屋敷へ歸り、部屋へ入らんとせしに、早一間の内に南無阿彌だ佛〳〵と稱名のこゑ高らかなるに、あわやと一間にかけ入みるに若菜はこほりの如くなる短刀にてこゝろ元を差とをし、今を限りと見へたり。麻楚涙と共

に若菜が身をいだきかゝへ、こはそも何たる事ぞやといふに、若菜苦しき息の下より其方さだめて途中にて文をひらきみつらん、只恨めしきは鷹津なり、其方ふしぎの縁にて、此介抱に預かる事過分なり、たゞ我身のなる果あはれと思へや、主従は三世といへば、猶しも冥途にてこそ逢らめ、さらばと云て、事絶たり。麻楚大きに悲しみ、此うらみ鷹津にむくわで有べきやわと淺からずいきどほり、胸に隠し、若菜病中にて打臥候と披露しければ、さすが女の思慮うすく、若菜誠に心地あしきとのみ思ひてぞ居たりけり。唐土秦の始皇の世に荊軻はつるぎをふところにして燕の地圖を上覽に入んといひ立、始皇の御前へ出けるためし、麻楚は深くぞ思ひこみけん、ある日朝より雨ふりてければ、時こそ至れと悦こび、重箱をふくさにつゝみ、局頭鷹津が部屋に至りて云けるは、主人若菜申上ます今日は雨中のつれ／＼に候に、先は鷹津樣さへ／＼しく入らせられいく入悦び候なり、我身事もけふはすこし心よく候ゆへ、豆いりを致し候まゝ御すそ分いたし候迚件のふくさ包みを出しければ、鷹津何の心もつかず、是は思し召寄せられて、忝しなどゝ立より、ふくさづゝみ手に取んとする所を、麻楚飛かゝつて鷹津を仰向にふし倒し、胸元に乘かゝつて、いかに鷹津承われ、なんじ生得物ねたみつよく、我主人若菜がわづかの麁相をいゝたて、色々佗れども聞入ず、ついに夫ゆへ自害し果られたり。主人のかたきおもひしれやといゝ樣咽を一ゑぐりに疊へとふれと差通しければ、何かわ以てたまるべき其儘鷹津は死したりける。夫より麻楚心しづかに刀をぬぐひ立上りて、主人若菜がかたき鷹津を下女の麻楚只今打とめ候也、御見とゞけ下されよといふに、局中大きにさわぎ立、御前へ上聞

に達しければ、頓て御役人入來有て死骸をあらため、麻楚を御前へ連出たり。殿樣事の始終をつぶさに聞し召分られ、扨々なんじは忠節のものなり、男子ならざるぞ口惜。局がしら鷹津其身の役義にほこり、同列の友を輕んじ侮ごる仕かた、にくみても余りあり。今より汝をもつてつぼね頭とせん、是我なんじが忠節をはげます所也との玉ひければ、麻楚云けるは、殿樣の御仁惠有がたく存じ奉り候へども、主人にて候若菜まつごに申候ひしは、主從三世のちかひ冥途にて相待よし申候へば、片時もはやく冥途へ參り、此よしを若菜へも告しらせ度候へば、只御いとまを給わり、相果たく候といへども、御聞入なく、ふかくも麻楚が心底を感じ入らせ給ふて、君々たらざれば臣も臣たらずといへり、まこと斯のごとく忠貞のこゝろ厚きは、ひとへに若菜が心榮正しきによつて也とて、若菜が跡あつく御吊ひなど有て、夫より麻楚局がしらと成、忠節のほまれ高かりけり。まことに剛毅木訥は仁に近しといふ古語のごとく、女ながら麻楚忠義のいさほし、學士大丈夫といふとも辟せざらましとぞ聞へける。去々年堺町にて竹本住太夫淨るりに語りし鏡山古郷錦繪と云しは此事なり。（以上、原文ノマヽ）

（久須曰く）草履打の實說は、普通蜀山人の「一話一言」等によつて、享保九年松平周防守の家中の出來事としてゐる。享保九年である。此の見聞錄の寛政とは大分の距りがある。勿論、以前の出來事の、聞書と取れぬ事もないが、此の「寛政實錄」の記事は、大分當時の傳說化したものであらう。因みに「鏡山」の院本は、容楊黛作、天明二年正月堺町薩摩外記座上場が初めである。

身延道中 華鹿毛と旅枕浦青海

「膝栗毛物のいろ〳〵」の補遺である。最近神戸の川嶋氏より「旅枕浦青海」に就ての解題を寄せられ、これに前後して、「華鹿毛」の二編六冊を購入した。即ち華鹿毛に關する輪廓概略と、附するに旅枕浦青海に就ての川島氏の一文を以てしたのである。尙、其後、膝栗毛物の中、擬作書目の中に、追補すべきもの二三を得た。それを先づ錄しておく。中、「滑稽臍磨毛」に關しては、「典籍の研究」第三號にその解題を寄稿しておいた。就て看られたい。

○擬作書目の中（追補）

滑稽臍磨毛　上中下三冊　嘯天狗作　文政四年　曉鐘成校　文政六年

○右、大坂見物もの也。馬琴、之に序せり。

伊勢道中三方廣人　冊數不詳　經丈　不詳

足毛の讖（こまごと）　二編二冊　（イ醉川子）盛田小塩作　歌川豊秀畫　文化四年

○右、京都永壽軒版。

○

以下、身延道中滑稽華の鹿毛の解題である。

「身延道中滑稽華の鹿毛」は、中本全六冊（初二編各三冊）物である。初編三冊は、一九の序に文化巳孟陽とあり、即ち文化六年。二篇は、同一九の序、文化庚午春とあるにより、文化七年たることが分る。初代一九閱、甲陽　河間亭主人著である。命題、各様になりをる。即ち初編の見返しには、上に横長に圍みをとつて、甲州道中滑稽十返舍一九閱とあり、下に華鹿毛初編［全三冊］とある。次で一九の序の冒頭には甲府道中華鹿毛とある。本文冒頭は、身延道中滑稽華

。。の鹿毛とある。即ち三樣の外題である。

作者、甲陽の人、河間亭主人とは誰人であらうか。甲州在とは分るにしても、素性は如何、全く存知する所がない。唯、一九に遙かに謁を執つたもの、直接の門人ではなかつたらうといふ程度である。丁度、名古屋の增井棠齋の「津島土產」に一九が序をものした如く、門人ならざる親昵關係(寧ろ著者よりは一九の聲名を利用の關係に於て)に於て生れたものと思へる。全六冊(「年表」所載は、三冊とある。誤り)、所々挿繪のヒラキがある。感じは、普通の膝栗毛物と同じ、狂的寫生書である。調子が稍硬いが、全体に於て、御丁寧に初代一九の東海道などを摸したものである。(狂歌の贊あること亦同じ。)先づは、左に、初編の一九序文と凡例とを(全文)載せる。

甲府道中 華 鹿 毛 敍

河間亭のあるじ。予が膝栗毛に道をかへて。甲府道中に筆を走せ。此一集を編る。それ月花は都會に有て。是を賞するに。酒食の美を好で備ふることをもはらとなせば。却て其感情うすく。邊土塞地には。其事疎なるが故に、おのづから實景を得るの樂み深し。今や此書も東海木曾の兩道に異にして。往來も偶身延詣富士參の外。旅客を見ざれば。凡而事の足らざると。ものゝおくれたるとを。何だら發智の柿の種本とし。葡萄棚の下行水に墨摺ながして。打栗のうちも捨ず。蠶のいとぐち操出し。郡内縞のおりよく仕上し三冊もの予にわたりをつけて。兄貴たのむと投かけられ。そこで呑込。龍王多葉粉の吸口をたゝく事しかり

文化巳孟陽　十返舍一九誌

(次に、永曲譽の半丁、口繪あり(川、兩岸、此岸に花咲く)。遠見、旭、駿足の栗毛のあとにたち出でかけるもながき花の下鹿毛　河間亭と贊あり。)

凡例並附言

○此編發端は四ツ谷新宿ニ始り。甲州身延山参詣まで。左次兵衛鬼七兩人が旅中の滑稽。及び旅人飯盛女其處〳〵の人物の下情。茶屋の馳走流船歩行渉並風土の佳勝まあらましを穿てしるす

○此編三巻は武州小佛嶺に到て畢る。が此次郡内通り二瀬越の轉倒より。上野原川留の功拙。夫より道中筋の洒落。笹子峠の危難。甲州石和鵜飼川にて。經石を尋るおかしみよりして甲府一見のあらまし並鰍澤より川船にて下る趣向。身延山参詣まで。大槩草稿出來あれども。帖數の多きを厭ひて。後編にゆずつて雅客の催促をまつ

○俚言。方語の通稱に異なる事あり予多年この道中を往來なすといへども。俚俗の訛言悉く聞知するにあらず。その大槩ないさゝかききおぼへたる而已。殊更東都の方言は邊鄙に住る身にて委しからねば。その誤りあらん事を怖る。閲る人笑ふ事なかれ

○巻中府中泊飯盛買の滑稽　予その妓臺に遊戯したる事なければ。如推量のまゝをしるす

○巻中の東曲哥は。筆をとつて口から出次第なる排諧なれば。只一笑を求る而已。可否を論ずべからず

○此冊子は只兒童の讀やすからん事を純さし。かなの誤り等改糺すにいとまあらず。讀人是を咎る事なかれ

（以上凡例終）

［書出しの二三丁を摘んでみよう。］

身延道中滑稽華の鹿毛　上　巻

甲　陽　河　間　亭　主　人　著

五風十雨時をかへず。弓は挑灯と共に袋に入り。太刀は大山講中の肩に擔はれて。石尊の廣前に納る御代の有がたさは。生酔となつて大道一はいに大手を振てあるけども。道をゆずつて咎る人なく。嚢中自錢次第で西國東海の果迄も足を勞せず。往來自由自在にて。辨當持ずに腹の

へる氣遣ひもなく。旅は憂ものなどいひ傳へたるも。今は保養ながらに旅立して樂みとする世の中。斯る有がたき御代に生れ合せたるは。八百や見せよりも冥加ある事になんおもほへける。實や江都神田八町堀なる。とらめんや彌次郎兵衛居候の北八兩人が。伊勢參宮より京大坂諸に遠慮も長旅の滑稽を膝栗毛てふ冊子に著し普く世上に流布を見て。かの彌次郎兵衛が住居たる。ひとつ長屋の左次兵へとさいへるは其むかし四國を廻つたさるもの丶悴にて。親の名を其儘に。二代目の左次兵へと名乘れども。いまだ四國は扨置て箱根を越た事もなく。年の程は勘平殿より二ッ三ッも增りけれど。何ひとつ取しまりたる事もなきぬらくら者。しきりに彼兩人が旅中の洒落を羨み。日比無二の朋とする是も同じく役者にて。酒と女は飯より好物。貧乏なれども名斗は福七といへるなまけもの。渠を伴ひ　〔以上、初上ノ二表まで〕

○

以下は、貳編上中下三冊の解題。貳編になると、更に「身延詣花鹿毛」（一九序）と代つてゐる。先づ貳編上の序　（一九）。

身延詣花鹿毛序

深草の元政法師が身延記行は。孝に據て其譽高く。今河間亭うしの身延記行は。誹諧によりて其稱弘し。渠は法花經の壹部は卷□原旨とし。これは花の鹿毛一部三卷を□編とす。視者隨喜の念をなし。聽者批謗の徒にあらず。作意の妙法はこれ。塹出しもの丶堀の內。千部も萬部も賣るハ〱。そこへも本がデ、ブデブ〱爰へも本がデ、ブデブ〱。日蓮宗かしらねども。酒には信心堅固の版元。髭題目の髭撫して予が方にきたり。是に序せよと徒は投ず。上戸弘通の柄樽を見せて。予にも亦信心を發しむ。こゝにおゐて。ものいはずにかくのごとし

文化庚午春　十返舎一九識

○

身延詣滑稽花の鹿毛二編

凡例並附言

此編ハ武州小佛驛より。甲州郡内上野原驛に至て終る。此間道法纔六七里の間なり。三巻に綴たるは。身延山迄の道法四十里に足らざる所なり。悠然慭延し。追々後編を著さんと。初篇の世に行はれたる僥倖に乘が來て、鼻の下と共に長〳〵し、。筆を撓たる趣向なれば。好士の閲に倦ん事を恐る。希くは只身延山まで。道中筋驛々。及び風土山川の道しるべき而已見給へかし

卷中相州津久井驛より。甲州郡内迄の方言。わかりがたきは。あらまし側に其意をしろす。されど事多ければ、悉く記すにいとまあらず。こは其言葉つゞきにて監察し給へ

夷哥の排設並俚俗の方言等は。そのことはり前篇の凡例に述たるが如し

此次三編は。速ち拂衣て。都留川の川明きより。郡内道中の滑稽をしるし。夫より甲州休息山立正寺へ詣。且石和鵜飼川にて。經石をひろふ趣向までなり。書集めて。爰にて筆をとゞめ。其次四篇に至て。甲府より身延山までなり。こと〳〵く書著し。此篇にて満尾せしめんとす

凡例終

○

ところが、此の初・貳編の六冊で、あとは未刊に終つたらしい。版元は、貳編・初編とも同じく、大阪心齋橋通唐物町　河内屋太助。江戸通油丁　村田次郎兵衛。同市ヶ谷田町下二丁目上州屋仲右衛門、同梓とある如しである。

わるふざけの一例として、二ノ下の卅一より同卅五(大尾)までを全文載せておく。甲州郡内上野原驛宿に於ける描寫である。凡て此類の、一九ばりの隨分下卑た滑稽のとり〴〵である。

(前略) 男「コレ〳〵手めへ。晝の約束ダアからさつきにから忍んで來て待あかしタアに。あせそんなに手間がされた。早く爰へ○○○寐なさろト(ふく七が手を引ばる。これはかの下女このふたりともにはぐらかしておのれははづしてほかの所にねたるさ

みへたり。このさきふく七は。いよ〳〵おとこのこゝろなれば。あいさつもなりがたく。むごんにてにげのかんとするに。此おとこは下女とこゝろへふく七が手をしつかりとらへて。これまへ引こまんとする。こはたまらぬともぎどうにふりはなし。はしごのかたへにげゆくに。かのおとこも追かけいでとらへんとする。この時ふく七は。やう〳〵二かいの口までさぐりより。やにわにはしごへあしをふみかけたるに。いかゞはしけんこのはしご。ずつとすべりばたりとはづれければ。このとたんにふく七も。二かい口よりまつさかさまにおちんとす。これはたまらぬと。二かいくちに両手をかけしつかととらへけれど。足とまりなくぶらさがりけるに。此あたりに。にはとりのすをつるしてありければ。やう〳〵これにあしを引かける。これにおどろきすにいたるにわとり。三四羽ばた〳〵と羽だゝきして。まいたちければ。このそうどうに。ていしゆも目をさまし。何事やらんと。あはたゞしく。手しよくをともして。たちいでながら ていしゆ「ヤアヤアコリヤアあに事だ〳〵 トかのまいたちたるとりのすを。すつと見あぐるに。ふく七は二かいの口にぶらさがりゐたりければ ていしゆ「ヤア〳〵。そこに居たは。だれだ〳〵 ト手しよくをさしいだし ヤアこんたア。泊りの旅人衆(たびうどしゆ)か。イヤハヤとひようもない人だ。そこへあがつてあにやうさつしやるのだト いわれてふく七ぬからぬかほにて ハリトウ〳〵〳〵さて〳〵〳〵扨。此度のかるわざは。二かいの口を腕にてたもち。其(その)たいこなたへさがりますれば。これを名付て野田のさがり藤でゴウザアリイマアスウルウデヱ。ござアいてい主 トていしゆはきもをつぶしゐる。「ヤアあにようきやアる。此人ハ氣でも違(ちがつ)たつそうだ。たまげ果タア 左二兵へはさいぜんよりのそうどうを聞耳たてゝゐたりけるが。いまていしゆがたちいでたるをきゝて。おのれもおきいでゝひそかに此やうすをみて。おかしさをこたへて有けるが。もう出てもよきじぶんと。てい主のそばへちかく立より。ぬからぬかほにて 左二「もしく〳〵御(ご)ていしゆさん。あの男はせんてへかるわざ師で。こんど甲府の善光寺に。開帳があるといつて。やとはれて行(ゆき)やすが久しく休んで居ちやア。たいがくづれてやりにくいといつて。さつきから。やつてみたがつて居やしたが。爰(こゝ)じやアやかましくて。お宿へ氣の毒だと。わしがやう〳〵おさへて置たを。いつのまにかかけ出(だ)して。地取(ぢどり)のけいこをするのでござへす。てい主「イヤハヤお前迄が。おんなじ様にばかべいいわつしやる。どこの國にか輕業(かるわざ)の地ごりといふがありますべい。左二「そりやアおめへが。何も御ぞんじないからさ。惣ていかる

わざでも。地取をせにやア。場所へかゝつてへこみやす。ハテ角力とりのは。けいこにさるのを地どりと云ふ。また輕業師なんぞのは。拍子を地へとつて合せるのでそこで地どりと云ひやすのさ。ていしゆ「それもそうだんべいもしり申さぬが。とひやうもない夜る夜中さんだア所へかけ上つて。にはとりをさはがせたり。はしごをおつぱづしたり。イヤハヤあきれけへつて。物がいわれ申さぬ トていしゆはふくれがへつている 左二「そこはあの男も。久しくけいこを休んだから。あんなすこたんをやらかしやす。これが又おめへの所だからゑゝが、人中であんなしそこないをすると。外聞をかきやす。したが夜中にお宿をさはがせたは。あの男の不調法。そこはわたしが御詫いたしやすから。おめへ御了簡なすつて。いつておやすみなさへし。はしごはわたしがかけて。おろしやしやう。ていしゆ「ホンになにがなんだか。にが〳〵しい事タア 左二「どうぞはしごをかけるうち手しよくをちよつとおかしなさへ トていしゆより手しよくをかりうけはしごをかけながら サアしつかりと。とかまつて。おりた〳〵。ふく「ア、またつし。あぶねへ〳〵。左二「ハテぶてうほうな。かるわざ師だ トいふうちふく七はそろ〳〵はしごをおりかゝる 左二「ツレ〳〵洞庭の秋の月じやアなくて。〇〇〇〇からも野田のさがり藤がみへる。ふく「ヱ、しやれ所じやアねへ。両の腕がいたんで。はしごもとかまらねへから。しつかりおさへて居てくんな トよう〳〵はしごをおりれば ていしゆ「イヤハヤおめへがたは。本氣じやアないそうだ。左二「あいさせんていふたりながら疝氣もちで ていしゆ「あにようぎやアるだか。さつぱりうらにやアわかり申さぬ。サア〳〵はやくいつてつつぷして。あすの朝はそう〳〵立てもらひましやう。左二「わしらアこん夜にも立てへくれへだが。川留でしかたがねへ。川さへあいたら。じつきに立やしやう。そんならお休なさいやせ ト左二兵へはふく七をさもなひ

ざしきにかへりてわらひを
もよほしながら。口すさむ

二階からおもひがけなきかるわざに
落のこざるも時のしあわせ

ふく七もこれをきゝて

立居にもよく氣の廻る下女としらで
口車にぞかゝる難澁

彼これ興じて。夜もいたく更たるまゝ。夜着うちかぶりてふしけるとなん。

身延詣滑稽花の鹿毛　二編下巻終

〇

〔以下、川崎右次氏より寄せられた「旅枕浦青海」に就ての全文である。此の「旅枕浦青海」は、最近、大阪鹿田の目録に廉い値で現れた。注文したが、賣切れてゐた。先是、名古屋で「綺磨毛」を求めて早速一讀感を「典籍の研究」に送つた。其後、此の鹿田目録に、同じく此の「綺磨毛」が現れてゐた。ある時にはあるものと思つた。然し一部一冊の細本の現狀、注文はぐれの方も多からうと、同情の感に堪へぬ。〕

〇旅枕浦青海に就て

膝栗毛物擬作の内に掲げられし旅枕裏青海は「播州巡り旅枕浦青海」の誤りなるべし。前編後編各上下づゝにて四冊物なり。半紙本一冊約三十枚内外、前編は文化四年即ち膝栗毛六編の出でし七月中旬に膝栗毛の板元たる大阪心齋橋唐物町河内屋太助及び江戸通油町村田屋治郎兵衛

の両人に依て刊行せられたるは注意するに足るべし、但し後編の出版は夫より十七年後の文政七年七月にて、極元も江戸を除き河内屋の外に大阪江戸堀二丁目今津屋辰三郎が加れり。

著者は浪華肴市邊とあれば雑喉場近くの彦玉といへる人、序文は欄花堂、挿繪は藍月とあるも何れも詳傳は知らず、挿繪は前編後編とも卷首のもの一枚色刷、他は墨刷にて一冊四個宛あり、後編卷首には島臺を畫き上に左の題歌あり。

西伎例怡之尼廼徽能末都乃四万駄五十卅妹脊之難架破古連雅八自万里　　仙鏡詠

又其裏返しに浪華魚市邊彦玉著として左の語を記せり。

逸尓賛詩蒼鹿質發玖恩近月作馬似天卅逸節賭瓜塚松浦壽揃（ソクテンキリミスイカリカイタマコメケカコンチカツキサマニテモイツセツカケウリツカマツラスソロ）

ソクテンキリミスイカリカイタマコタケカの十九字の意通じ難く、御示教を待つ。

挿繪には夫々題句あり、句者は東宜、月窓、吾雀、味水、銀樹、由來、稲丸、魚眼、井頂などあり。浦青海の趣向は一九の膝栗毛に取れるは明かなり、即ち江戸麹町の二四川屋八郎兵衛と相貸家ののんだ屋彦介の両人が大阪を出立して播州巡りを爲すの滑稽を記し、大阪より尼ケ崎まで船、夫より徒歩にて西宮、御影、住吉を經て兵庫に入り、更に明石、加古川、石の寶殿、曾根、高砂、尾上を旅行し、到る處滑稽を演じ之に狂歌をこじつける處殆ど膝栗毛其儘なり。

家藏の四冊は同一表裝にて何れも旅枕浦青海とありて、文政七年改題せられざるが如し。播州膝栗毛といふは通稱にはあらざるか。（完）

洒落本改題本の異例

〔新歌妓酒戯に就て〕

最近、洒落本改題補刻本の甚しい例を見た。即ち命題の「歌妓酒戯」である。この本、作者不明である。（原本、鼠喰ひ凄。序文は、万□井山人と讀ある。例の名古屋の万壽井と直覺されるが、すれば此本名古屋版かとも思へるが、慥かでない。）小本一冊、純然たる蒟蒻本然るに内容を見るに及んで、端なく、これが、前作あるを知つた。剽竊ではない。剽竊にしては余り無作法大膽だ、寧ろ改題補足ともいふべきである。即ち一向不通替善運〔天明八年版、甘露庵山跡蜂満作といふ〕の補刻本かと思はれるのである。それが如何に補足したかは、次に確證を擧げよう。然るに、滑稽なるは、此の「一向不通替善運」がまた前本ある事である。即ち此の「一向不通」は、江戸時代文藝資料第一卷洒落本の部に飜刻されてゐるが、その校訂者の朝倉無聲氏の此本解題には、左の如くある。

一、一向不通替善運　一卷　本書は、安永六年版本「浄瑠璃稽古風流」の總同及び文章を剽竊せしものにして、當時新作を裝ひて出せし洒落本界にありては、實に稀有の事なれば、重複ながら茲に收載せり。聞く著者甘露庵蜂満の僞作ならず。天明八年の版本也。

とある。幸はひ、同書に、この前本と稱する「浄瑠璃稽古風流」も飜刻されてゐる。今此の、「浄瑠璃」と「一向不通」とを比較するに、成程箇に於ては、多少踏襲した點も見えるが、大体に於て別物たるの感が著しい。即ち前者に於ては、後段、浄瑠璃の故實、議論で以て大半を埋めてゐるに拘らず、後者は、師匠の三勝に情夫の半七、此の二人の情事を揃ませてゐる。三勝が姙んでゐて、半七が買つてきた中條流の藥を袂に貰ふ所など、かうした人情本氣分は、前者に

毛頭にない。趣向の類似といふのは、若い女の師匠、その稽古場の氣分を襲いだといふに過ぎぬ。これを剽窃といふのはちと酷だ。類想にして寧ろ脱胎である。然るに、此の「一向不通」と「藝子酒戲」の程度は、こんな生優しいものではない。全然、「一向」をとり入れて、唯、串語に序の變更と首尾を少々殖やしてゐるに過ぎぬ。「藝子酒戲」の原本、鼠喰ひ激しく、大分難落丁であるが、とにかく之に據つて、その改補の迹を擧げてみよう。

序　（この序は、「一向」とは全然別物也）

〔初メ、序一丁欠〕儒者も門（以下三字位欠）。酒を呑むことかと思ひ。奥（二字位欠）いへば先生も。舞の手かと心得たるは。實大通の世界にあらずや。則ち此小册は。何某が著述にして。色男の忍び駒。野暮なお客の調子はぐれを。よく書とつたる奇作なれば。口も三弦の縁をもて。其緒を爰にしるす。

寅の春　　万口非山人

新織 歌子酒戲

〔以下、第一丁、表全欠字。裏最後二行、殘欠〕

聲を發せんとお〔以下六七字欠〕あげてかぞふるにいとまあらず。〔以上、本文第一丁終〕斯くひとごゝろのうつりかはりしも普く見聞するものゝ多ければ〔以下三字位欠〕りぬべきことなりかし。（以下四字位欠）に女を見んほどこゝろの（以下五六字欠）うじ、しゐたけは（以下半行欠）な（以下三字位欠）一トしほ（以下約十字欠）したひ（以下約十字欠）かるゝ（以下欠）いふも（以下欠）うら山しく（以下欠）の（以下不明）傾城の（以下半行欠）たは何にたとへんかたなし、（以下四五字欠）唯藝子の意氣なるほど、ことにうれしきものはあらじ。ひとのよく馴れひとのよくもて興するものは、藝子を最〔以上、本來は本文第二丁の終り也。〕第一といふべけれ。そも地ものに似て地ものにあらず。けいせいに似てけいせいにあらず、いづれ一方にかたよらざるは、實に是を茶と

いふべし。そのゆへいかにとなれば、下戸も上戸もおしなべて、一口もいかぬといふひとあるべからず。仍て茶は藝者のもちまへにて、茶にうかさるゝは、〔次にノキ即ち第三裏より第四表へ挿圖。藝者稽古場の風。弟子の若い男たち二人。師匠の歌妓。女弟子の子供三人。第四丁の裏も半丁全面繪・歌妓、男と相傘、下に大まつはる。〕〔次に、本文以外の、半ペラの紙一枚、それに中央輪廓をとりて、後篇忽こまなどゝあり。次、第五丁の表、第四丁裏の繪とツヾキ。師匠の勝手口、師匠の母らしき老婆、水差を手に提げて入らうとする所。〕〔以下第五丁のウラ〕又世のひとのならひなるべし。されば萬事にうつりやすき人ごゝろより、かゝるうれしきものを見るだにあるを、ましておもしろく引きかたりなどせんには、誰れかたましゐを奪はれざらんや。われも人もたちまち青銅貳百の弟子入して細腰の傍に寄らば百のさらひも惜しむにたらず。百疋の摺物も更に痛ごとゝおもふべからず、あしたに五ン合を持參し夕べにけんどん箱をまねきても一トたび笑顔を見るにいたらばをのづから糸代たゝみせんと共に、風前の塵なるべし。三味線の皮の離るゝはりかへあれば、はりつめてしばしはなれぬ櫻紅葉あり。士あり町人あり色男あり不男有り。思ひ〳〵に意氣をつくしてこゝにかよへるにぎはひも、大平の代のいさをしとはいふべけれど、是皆無益のさかひに心のうつりゆくなれば、ひとり辨ふべき所にこそあなれ。さは云へもとより善惡不二にて迷ふもさとるも一やうなれば、こゝろにまかせて呑めうたへ、聖賢の道をまなぶも豐後長唄のけいこにかゝるもさのみたがひはあるべからず。青表紙の道理をも更に道理とわきまへずば、淨るりにもおとるべく、淨瑠璃のあはれなるもあはれと知りて勸懲の益をとらば、なかゝ青表紙にまさるべし。されば其益なきことに益あるならひは此道をこゝろざして巳待にてれぼうとなる事なく、又三線箱の角なるも忽撥皮の角のとれたる通子となるべし。通子となれるうへならでは、彼の青べうしの意

味深長なる事をも覺ゆべからず。故に人情を知らんと思はゞ、此所書をもて、かしこに行べし。本町〔に〕〔以下二一向不通」と全然同一也、一字一句相違なし。即ち「一向」の「丈町」新道に作業法……」の新道にかゝる。（國書刊行會本、三二三頁上の六行目、上より五字目）但し補刻本の證據には、こゝまでの本文七丁の文字は以下に較べて稍大字、文字も太し。書風も別である。又、以前は眼よく、以下は惡し。即ち以下は後摺の意無然たり。勿論、三勝も半七も、一切人名もその通り也。何ら改刻の所なし。唯最後、「一向」は「御袋の足おさ」が諸欠へきこえる……」の所が、「歌妓酒戲」では、おさの足おさ」までが、元版本で、是迄廿八丁、以下の最尾の一丁、廿九丈が改刻されて、「一向」も、二行年であるに拘らず、約一丁表裏全部に文を續け、大尾としてゐる。それを、鼠喰の欠字をそのまゝ、載せておく。即ち、此本、序二丁と本文七丁、最尾一丁と改刻、以外は繼足し也。〕

「バタ〳〵〳〵〳〵〔三かつ〕はつさニ、もうおれつてへ。いつその事逃やしよう〔半七〕はてマアそうせずとも今いふ通りに〔三〕アレサそれでも此まゝ〔以下二字欠〕なれちやア毒だハナ〔以下四字位欠〕うなづく折かし雨ふりくる三かつはかい〳〵しく〔以下五六字欠〕しめ壁にかけてある傘をとつて〔以下四五字欠〕たす〔半〕ひらいて三かつを覆ひかくし〔以下同〕外へ出る〔おふ　ふく〕すれちがふて門口を覗き〔以下同〕とんだくらい晩だぞ、これはしたり火が〔以下同〕そらうちに入り三かつやこの子はにゐる〔以下同〕とつさんは二階に寢てか、三かつや〔以下同〕歸へんなつたか三かつやさよべごさけべどなしもつぷてもなければ、さてはにげしと心えてそんなら今の傘がホイ〔半〕〔三〕両人はあとをも見ずして「行空の

新織げいこ酒戲

といふのである。即ち第四丁裏第五丁表のヒラキ續畫は、この最後の光景である。本文中途、第十五丁裏と第十六丁表ヒラキの往來の男女の圖は、「一向」飜刻本の如し、寸違はず、但し「一向」のうた麿筆の文字を削り居る。以上、版元承認の上、或は新版元舊版求版の上、某作者に依囑して、改題、前後だけ更へ、版木を新舊繼ぎ足し、新本の如くに見せかけたものかと思ふ。本屋の惡戲か、作者の不德義か。とにかく改版本（くはしくは、改題補刻）の異例として、此に示したのである。

寄贈紹介

〇川傍柳 初編　岡田三面子・西原柳雨著

安永九年版川そひ柳初編の注釋と評である二氏の合評で、途中で外骨氏も參加してゐる。讀んで面白く、考へて益あるものである。疑問句は其の儘疑問句として他の釋明に俟つてゐられる。柳界最近の好著である。（岐阜市元町二丁目、川柳よろこ社。八〇錢）

〇誹風柳樽全集に就て　岡田三面子著

國書刊行會本の誤謬脱落を訂されたるもの小冊子却つて貴重有利なる文献である。我等もこの書を得て、始めて全集本の誤脱を訂すを得たのである。敢て奬む。（岐阜市金屋町二丁目、柳書刊行會。二十五錢）

〇校訂誹風柳多留拾遺に就て　今井卯木著

嘗に柳書刊行會で刊行された誹風柳多留拾遺の正誤增補の記事である。學に忠なるものとして、敬服に堪へぬ。（同、二十錢）

〇敷地の話　能勢久一郎著

〇郊外住宅圖集　同

流派違ひの本ではあるが、ブル氣分で見るに面白いものである。能勢氏は、小誌の創刊當時よりのお近づきであるが、聞けば東都に於ける斯道新進の學者であるさうな。同志のお方にお奬めする。（各十二錢。東京市外野方町下沼袋一、五八〇、文化住宅研究會）

〇歌舞伎　第八號

益々充實されてきた。本號からは、高野辰之氏の歌舞伎劇前史が別頁で連載される。日本演劇辭典（木村・川尻二氏）の連載は從前の如し。尚、來月號からは、伊原青々園氏の例の「京阪歌舞伎年代記」が連載される。其他、劇評考實等、斯道の唯一權威たるに背かぬ。伊原氏の連載前に方り、大に提灯を持つておく。（三十錢。一年分三圓三十錢。東京市京橋區木挽町三丁目二十一、歌舞伎發行所）

〇目錄　尚美社編纂

尚美社の最近賣立目錄である。清重清滿などの役者繪に逸品が多い。廣重の好風景も可なりの量だ。歌麿の若描きものもある。我らは徒らに食指動くの嘆あるのみ。（東京市神田元佐久間町一、尚美社。非賣品）

〇開化草紙　寄席號

異國趣味と江戸趣味との融和した、濃厚な氣分の雜誌である。勇、杢太郎、莊八諸氏の執筆。輕い、面白い讀物滿載。（東京市外代々木初臺五二九、藤田方、開化書舗。三十錢）

〇愛書趣味（創刊）神奈川縣茅ヶ崎十間坂原、齋藤昌三〇やなぎ樽研究（第七、第八）柳書刊行會〇風俗研究（六十六）風俗研究所〇清元研究（第五）大江戸藝術社〇新小説（十二月號）春陽堂〇新舊時代（十一月號）明治文化研究會〇歷史地理（十一月號）日本學術普及會〇早稻田文學（十一月號）其社〇川柳鯱鉾（十一月號）中京川柳社〇國學院雜誌（十一月號）其大學〇性の智識（裸体美號、十二月號）其社〇延壽情話（第九册）忍頂寺務〇長唄（第七、第八）其社〇國語と國文學（十二月號）至文堂。

著者より

此頃洒落本の翻刻事業にかまけて、軟派叢書の第五篇を大變遲らした。然し最近、原稿は出來た。飯島花月氏所藏本の稿本「續々膝栗毛」初編二編三編の翻刻である。これは、叢書の二册分の量である。中、初編二册二編の上までを叢書第五編として出版。一月一日刊の豫定。〇本月二十二日岐阜縣中津川の青年の前に江戸軟派漫談の御話をした。〇洒落本翻刻も、着々進捗してゐる。諸家の御同情も殖えた。反響の多いのに驚いたが、校訂の難義なのにも驚いた。〇此の號の原稿と前後して、新小説正月號、歌舞伎來號にも書きました。新小説は、「會本の作畫及年代考」です。〇來春からは、從來の材料の一まとめです。本誌もつと充實させたいと思ふ。最近事情上、挿繪を缺いてゐたが、來春からはこれも豐富にしたいと思ふ。（十一月廿六日夜）

定價表

一册廿五錢	郵税貳錢	
六册分	壹圓四拾錢	税共
十二册分	同 貳圓八拾錢	

〇郵券貳錢一割增の事
〇照會は返信料添付の事

大正十四年十一月二十八日印刷
大正十四年十二月一日發行　「貳拾五錢」郵税貳錢

編輯兼發行者　名古屋市東區宜道東町百五十七番地　尾崎久彌
印刷者　名古屋市中區……町二丁目三番地　英比貞造
印刷所　名古屋市中區……大津町二丁目三番地　扶桑社
發行所　名古屋市東區道東町一五七番地　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七二番

〇第二著者より。新小説新年號の拙稿「會本の作畫及年代考」中にも說いた朴年人とは、歌川國虎の別號と只今分りました。從來朴年人署名の艶書本を國貞風としてゐたが、これで確かになつた譯です。（十二月一日、再校時）

洒落本原本 捜索廣告（二）

(ナ)南客先生文集一〇擲錢青樓占一●内所圖會一〇南門風歸一〇情のちまた一〇南闇抄一〇成子綱一〇謎春の友一〇名寄短歌一〇なまけもの一(ニ)にた山きどり一〇肉道秘鍵一〇にゃんの事だ一〇似口鸚鵡返一(ネ)根津見衣一〇野島通夜物語一〇(ハ)花明詞一〇放蕩虚誕傳一〇初葉奈志(初咄)一〇初登一〇春廿三夜待一〇初惠比壽一〇(ヒ)百安楚飛一〇秘事傳授囊一〇白狐傳一〇(フ)風流娘一〇風流裸人形一〇風俗砂糖傳一〇不實論一〇ふくら雀一●風俗通一〇二ッ蒲團一〇風俗三石士一〇風流仙婦傳一〇浮華川容氣一●二もさ松二冊〇(ヘ)瓢金窟一〇偏屁子邊一〇變内變的論一〇北國五ッ雁金一〇北川蜆殼一〇北里通一〇(マ)間以合早推一〇(ミ)美止女南話一〇見通三世相一〇みやまおろし一〇見通部戯場一〇(ム)むすぶのみす紙一〇無益痴禁抄一〇武江彦物志一〇息子順禮一●息子氣質一〇無駄物語一〇名所かゞみ(色里名所鑑)一〇(モ)百千鳥一〇(ヤ)藪さがし二冊〇山下新談一〇谷中の月一〇陽臺三略一〇奴通一〇(ユ)由作里の月一〇夕志語言一〇(ヨ)夜慶話一〇夜半の冷酒一〇よつでかご一〇四ッの谷一〇(ラ)來芝一代記三冊〇(リ)両國しなり一〇良夜靜搔一〇鯉地全盛噺一〇柳巷三關笑一〇(ロ)樓妓選一〇論語丁二〇六丁一里一〇論娛交一〇(ワ)別の鐘一(タ)大通店おろし一。

依託販賣書目

【和本】おどり稽古(北齋畫。再刻)五十五錢〇萬物雛形畫譜(永濟畫、初摺上本)五冊五圓〇畫史會要(初摺六冊)七圓五十錢〇聚美畫鑒(初摺精刻二冊)十圓〇諸職畫鑑(政美、初摺上本)三圓〇あづまの手ぶり(椿年。初摺美本帙入)二十五圓〇吉原すゞめ(政信 四圓五十〇手拭合(稀書複製會本。彩色)一冊三圓〇いろは短歌(同、)一圓五十〇馬琴金瓶梅草稿(同)三圓〇四季雜字(同)二圓〇洗張浮世模樣(同、原稿)三圓〇胸算用噓の店卸(同、北齋自筆本)二圓五十〇古川柳末摘花(初篇より四篇まで合本。活字本)一冊十八圓〇雜誌「國粹」(落丁有)十一冊三圓七十〇上方趣味(一冊落丁)二冊五十〇異本洞房語園(溫知叢書本)一冊一圓五十〇此花(美本、大坂版)十五冊十八圓〇浮世繪の研究(第一、第六冬號缺。浮世繪協會刊)二冊四圓〇大通世界(幸堂得知、黄表紙原圖通模刻數篇)第一第二合本美本二圓五十〇繪本江戸土產五編(廣重)一圓半〇浮世畫譜初編(英泉畫。淡彩半紙本上刷美本)貳圓〇無飽三才圖會(曉鐘成。前後揃大本)六冊上本七圓〇稗史億說年代記(中本三冊)三圓五十〇狂歌七夕說(歌麿畫、奧落丁)半紙本合一冊三圓〇英名百雄傳(貞秀。中本三冊揃)二圓八十〇八十翁昔がたり(師宣模畫入。初摺)大本一冊四圓〇百富士(俳諧繪本、大本)一冊三圓五十〇江戸諸家人名錄(文政板)初編一冊七十〇錢占いきなよし此(中本一冊)八十〇近世奇跡考(後摺京傳)二冊二圓半〇風流俄天狗(繪入、俄種本)大本貳編より五編まで四冊美本二圓五十〇音曲叢書第五編(浄瑠璃大系圖所收)一冊八十〇義烈百人一首(緑亭川柳著、北齋圖芳等畫)一圓〇續英雄百人一首(同)七十〇誠忠義臣略傳(同、)四十〇【洋本の部】〇風雲集(芳々園等)特製一圓〇風俗畫報、京都大博覽會號五十〇同増刊上野公園下四十〇同淺草公園上四十〇同百五十二號三十〇同大増刊慶事集(二百號記念)一圓〇同菅原天神千年祭圖會八十〇同成田鐵道名勝誌五十〇同小金井名所圖會八十〇同伊勢行啓圖會八十〇溫知叢書第二編(用捨箱、俗耳鼓吹等所收)一圓八十〇友禪染(漣作)八十〇情死の研究(性の増刊)三十〇小說百家選十五冊(明治二十七八年。春陽堂)八圓〇野の花(花袋、新聲社版)八十〇此花(十八)五十〇不二(雜誌)二冊三十〇ひとり娘(柳浪、美本)八十〇籠まくら(漣、柳浪、紅葉等。同)八十〇五調子(紅葉著。美本)六十〇雜誌舊「歌舞伎」三十七以下バラ十六冊、三圓五十〇浮世草紙(向陵社本七冊十五圓〇繪入黄表紙名作集二圓三十〇世界一大奇書(合卷)二圓〇大正柳多留一圓五十〇類題川柳名句選卅五錢〇歐山米水(乙羽)美本八十〇評釋川柳名句選一圓五十〇類題川柳名句評釋二圓〇帝國文庫本道中膝栗毛(美本)三圓五十〇續氣質全集二圓五十〇相撲大鑑(常陸山。厚冊)一圓五十〇日本演劇史(伊原述)二圓〇近世畸人傳(佐藤註)九十〇雜誌「都の花」(金港堂)創刊より第九迄揃四圓〇南蠻記(新村、初版)三圓五十。

大正十四年十一月二十八日印刷
大正十四年十二月一日發行

大正十四年十二月二十八日印刷
大正十五年一月一日發行
貳編第十冊（通編第四十冊）

本文

『江戸節根元記』の異本
浮世繪に現れた歌、狂歌（上）
寸錦三綴

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第十冊（通編第四十冊）

○

（前略）梅亭金鵞の記述に對し、右花岡百樹氏より注意によれば、金鵞の肖像は文藝倶樂部第一卷の第三號かに綸像が出て居た筈にて翁の遺弟鶯亭金升氏翁の小傳をかき、それに挿入したものなりとの事に候、聞取のまゝ乍序申上候（下略）（十一月八日、飯島花月氏）

○

（前略）「江戸名物詩」について、少し心づいたまゝを。當館にも忍頂寺氏本、飯島氏本（第二丁重複、第十四丁現在、第二十五丁重複せず）と同じものがありますが、御說の如く、右は再版本と思はれます。

當館のは青表紙で、題簽に名物江戸狂詩選 仝 とあります。（忍頂寺氏、飯島氏のも青表紙と思ひます。）これだけでは再版本である確言は出來ませんが、曾つて貴臺が御紹介になりました同一著者の「茶菓詩初編」の原刻本と、再版本？とが幸ひに當館に所藏されてありましたので、それの再版本を何心なく見ますと、「江戸名物詩」の所謂再版本と同一紙質の、同一の青表紙でありました。

そしてその茶菓詩も原刻本と再版本？とは左の樣に相違して居ります。

〔原〕　〔再〕

序（方外道人）（丁付ナシ）　同

表　△鐵雞題書
裏　△銅脈先生肖像（賛畫）｝第一丁

本文　（十三丁）　同

△太神樂　（第一丁）
△駒込茶市　（第一、第二丁）
△鳥飛山［アスカ］　（第二丁）
△吉原櫻花　（第二、三丁）
△賣卜先生　（第三至五丁）
△書畫會　（第五至八丁）

跋（靜軒居士）（丁付ナシ）同

以上の△印の分だけが、再版本に余計です。飯島花月氏の御說の如く、名物詩も、茶菓詩も共に、鐵鷄、錢鷄等の道樂半分の再版ではありませんでせうか。

それから「名物詩」當館本の第二十四丁が、他はみな「廿」になつてゐるのに、この頁だけがことさら「二十」となつてゐるのも、可笑しいと思へば思はれます。貴臺御所藏本は如何でせうか。右心づいたまゝを一寸御知らせいたします。匆々（十一月廿六日、日比谷圖書館內、波多野賢一氏）

（久爾曰く、此の御手紙により、早速御返事を出すべき處を、例の多忙と無性のため、延引、申譯として此に載せさせて頂き、此余白に返事を書いつける。家藏本は「名物詩」矢張り御館本と同樣、家藏二本とも「二十」と第二十丁付あります。家藏の中純初版初摺本と思はれるものは、青表紙、また別本初版後刷本は、うすい代赭の色です。「茶菓詩」は、只今藏本無之ければ、何とも申上げられませぬ）

（尙、波多野氏以外の方に。右の波多野氏の御手紙は、小生の書いた「新小說」十二月所揭の（飯盛女値段附、附「江戸軟派雜考補遺」）の中の「江戸名物詩」の落丁本增丁本の異本數種についての、飯島氏、今井氏、忍頂寺氏等の御手紙を列載して小生の註書きをした、それを讀まれての御通知と思はれます。「御手許に「新小說」御持ちの方は御對照ありたい。）

○

研究第九冊拜見（中略）扨同冊一七六頁「旅枕浦青海に就て」の中の雜間。

逸众（爾の略なるべし）養詩蒼（五と同音の何とかいふ字の誤なるべし）鹿質發玖は、一二、三、四、五、六、七、八、九を同音の多劃文字に代へたるまでにてこれに傍記せる片假字は、右數字に對する符牒なり。即ち大阪雜喉場の通り符牒にて、江戸藏前の通り符牒と共通の語あり、素より他人に解し雜き樣作りたる暗號故、語源は詳にし難し。私が人より聞きて又は雜書より抄し置きたる兩種符牒を對照せられば、略ぼ了解せらるべく思ふ。即左に

	一	二	三	四	五	六	七	八	九
大阪ザコバ用	ヨソ	テン	チカラ	ミス（お手トモ）	イカリ	カイ	タマヤ	ウタ	ケカ
藏前札差用	ソク	ブリ	キリ	ダリ	ガレン	ロンジ	サイ（ナントウ）	バン	キバ

｜は浦青海所載と一致する語。（ワタとコタは、いづれにか誤なるべし）附言、西使例云々は狂歌、セキレイの尾ノへの松ノ島臺モイモセノ中ハコレが始マリ）（十二月九日、飯島花月氏）

「久爾曰、右、セキレイは少生も判讀致居候も一二三四は全く雜解見當つかずのもの、御教示難有く〳〵。流石は、花月翁に候。」

「江戸節根元記」の異本

（燕石十種本との異同）

江戸節根元記（悉しくは、江戸節根元由來記、一に江戸節根元集）が、誤謬に滿ちてはゐるものゝ、丁度浮世繪類考が未だに浮世繪研究上、數顧の値ある如く、此も音曲史上、價値少からざる參考資料として、よく繙かれる。但し原本、もと寫本。しかも數本あつて、異同甚しいことは、既に先輩によりて謂はれてゐる如く、（燕石十種」第二、解題參照）世間周知の事實である。然し從來翻刻されたもの、即ち活字本としては、本の体裁上數種を見受けるが、而も殆ど否全部、同一系のものである。即ち左の三種本、

○「聲曲自在」鼇頭のもの。（博文館舊刊、日用百科全書の中）
○溫知叢書第十編のもの。（博文館刊）
○燕石十種第二のもの。（國書刊行會刊）

前二者は、共に江戸節根元記、後一者は、江戸節根元由來記と稱するが、共に此の三者、今之を比較するに、結局同一系の寫本から出たものと觀られ、項目に增減全くなく、唯、語句の末に、僅かな異同があるのみである。唯一箇、相違といふべきは、聲曲自在本、溫知本、共に著者可柳の跋を略けるに、（或は脫せるに）燕石本は之を載せてゐることである。他は、とり立てゝ謂ふ程のものはない。元來聲曲自在本は、溫知叢書本と、全く同一、こは、異時に二者に

發表されたものと見てよい。故に、聲曲本は、殆ど此の比較からは略いてい〻。然るに、殘る温知本と燕石本とであるが、これは、前にいうた通り、跋の有無くらゐで、其他は、さしたる異同はない。何れも脫字、誤寫らしきもの散見し、讀みにくき事同樣である。唯、温知本では、著者の可柳が、「奈良柴」(一名、三絃根元記。原武太夫著。燕石十種第三所收。)から轉載してゐる所の此著、冒頭の三項余を、……云々として其の全文を略いてゐる。燕石本では、其儘正直に其の全文を載せてゐる。これくらゐの校訂上の差があるといふだけである。從つて、我等は、燕石本、温知本、兩本を有する必要はない。結局、稍校訂正確、所據の原本も誤字少く見ゆる、それに跋を採り入れてゐる燕石本一本に依つた方が、煩ひもなく、また信用も置けるといつただけのものである。其の燕石本は、默阿彌家藏本に據つたと、その解題にある。(或は、温知本も、此の默阿彌家藏本の轉寫か。でなくとも無論同系のものであること、前述の通り一見瞭然たりである。)以上が、從來、我等の「江戸節根元記」なるものに對する、智識、使用材料の現在の凡てである。

然るに最近、自分は、これに關して或る喜びの機會に逢着した。即ちゆくりなく、自分が、その異本(寫本一冊)を發見するに至つたのである。同學山本直樹氏文庫に秘藏されてゐたものであるが、自分の懇望により、寄贈を有難くしたものである。それに據ると、少々ならぬ異同(主に燕石本との)が發見された。殊に、此の異本に據れば、此の根元記の著者は、この記作成後間もなく、可柳より柳雅と改名してゐる。(下掲「異本第一跋」參照。此の跋、流布本になし。)而して、柳雅署名の下に、最後の跋を爲せる以上、此本寧ろ柳雅の著と謂はなくてはならない。

是一個だも、從來諸書にない所で、紹介の意義は大にあると、倍々此の秘本を價値づけてた。殊に面白いのは、燕石本にも見ゆる第一跋が、本文は殆ど同樣なるも、年次の記載に於て、此は、燕石十種本の文化元年といふのよりは誠に早く、寛政十三年云々といへるにある。これだけでは、古いもの、原寫本、自筆本に近きものと强ち斷じも出來なからうが、倘、他に有力な信憑根據は、最後の寫本家二人の識語である。即ちそれに現れた年號と、原著者記入の年號との接近である。此點だけよりするも、年次の新しい河竹本に據つた燕石本（同系の温知本等）よりは、信賴の度が深さうに思へるのである。（下揭の識語、及其前段參照）

とにかく、全くの僞作とは、いかに割引しても考へられない此の異本（以下此の異本の文字を使用）の、流布本との異同點を檢討することは、相當に斯界に意義あることと思ふ。即ち、今、主に燕石十種本との對照、異同の迹を列擧してみることにする。その以前、先づ此の寫本の体裁に就て、云ひ洩らした事を解題代りに添へて置く。

江戸節根元集　表紙外題は、竹露隨筆。一冊

この竹露隨筆の貼外題は、他に見ぬ外題であるが、是は、著者柳雅と改名後の改號竹露庵の竹露に據つたものである事は、無論。（下揭、此本、第二跋參照。）著者は、竹雅の門人、愚性堂可柳、後に改めて、竹露庵柳雅といふ。（竹雅の弟子たる事、跋（第二跋、即ち此跋、燕石本に無）に見ゆ。）但し其他一切不明。寛政十三年當時、六十七、八歳なりし事、此の本跋（第一跋）によりて知らる。本文、冒頭は、江戸節根元集と銘記されてある。美濃紙本、本文跋とも五十三丁、外に前寫本者及び此の寫本作

成者の二個の識語表裏計一丁、總計五十四丁。即ち此の識語によりて、此の異本、原本以後二次の筆寫によつて成つたものである事が知れる。然るに、その識語の中、第一次寫本當時の年月が、享和二年九月であること明記され、しかもその享和二年は、原著者再傳改め傳寫の第二識に記入せる享和元年霜月を隔つる、一年にも滿たざるものである事から推して、原本に最も近きものならざるやの、信頼的聯想が起るのである。第二次の寫本年號は、該識語の示す如く、嘉永三年とある。享和二年より嘉永三年では大分の隔りがあるが、結局底本となつたものは、この享和二年本である事を思ふと、字句の末の誤寫は論外として、大体に於て、享和二年本の即ち原著者自筆本に最も近しと惟るゝ面影を傳へてゐるものと見ていゝ。如何であらう。乃ち左に、その識語二個の全文を載せておく。

享和二壬戌秋九月九日友人披齋對校託姉君
さま予所謄寫也吾家之子孫莫以末技俚鄙之
書敢漫放擲焉

蘭軒主人記

○

同儕竹瓦子秘藏之書爲記念所贈于同遊東郷
生今茲嘉永三年庚戌之春借而寫之畢

陶谷

○

以下、いよ〳〵此の異本と、流布本の代表燕石十種第二所收本(「江戸節根元由來記」)との異同である。まづ、此の異本にのみ見えて、燕石十種本になき項を全部擧げておく。其次、類似の項の異同に及ぶ。（勿論、或は、この異本の特出事項、その記事の中の或ものは、或は、之を燕石十種本にも見るのがあるかも知れない。今、自分は、此の二本の對校を三度なしての執筆であるも、燕石本に於て、

未だ見落し無きを保し難い。若し該遺失、發見の方々は、示教を垂れて頂きたい。）尚、此の異本の流布本との異同とに就て、特筆したいことは、顯著な有無記事を除くも、尚ほ各章の順序に於て、此異本、燕石本とは、其の過半數が相違してゐることである。（これが爲に、自分は、異同の檢索上、非常な勞を徒費したのである。）然し結局は、順序は違へても、同一、又は類似項目を何處かに發見する。此の各章の順序異同は何によつて生じたのであらうか。或は、燕石本自跋の年代が證明する如く、此の異本を更に著者自ら校合し、改編したものが、燕石本であるかも知れない。それにしては、燕石本に於て、可柳竹雅と改名の第二跋を踏けるは、何に由るのであらうか。今は、唯此等の疑問を提出するだけに止めておく。

●「江戸節根元記」、異本流布本の異同。

○燕石本に皆無の記事

一、五人曾我三段目帯引上るり、中村勘三郎座にて初代半太夫語り、三絃青柳三左衛門、作者塚原市左衛門也、此時大當りなり、（此項、燕石本四五四頁下の「きぬた」の次あたり。）

一、池の端仲町に町醫師勝原宗壽といふものあり、此醫師娘にゑつといへる者岡安南市の弟子にて手事の名人也、誠に江戸一也、後に本郷新町屋に石野次左衛門といふものあり、此ものの妻になり、其後は淺草御書替屋敷住居ありける、（此項、燕石本四六七頁下の「押さ淨るりの三絃始りは」の次あたり。）

一、元祖河東は藤十郎といふ、小田原町魚屋なり、二代目河東は、庄右衛門吉原町大門外下駄

屋也、三代目河東は宇平次、池の端茅町なり、四代目河東は傳之助本銀町也、五代目河東は平四郎本郷春木町也、六代目河東は忠次郎淺草諏訪町也、七代目河東は傳藏　此もの事忠次郎養子也、（前項の直ちに次ぐ）

一、元祖蘭洲は、新吉原江戸町二丁目蔓蔦屋庄二郎（本ノママ）といふ傾城屋なり、二代目蘭洲は佐倉屋又四郎といふ、同商買なり、剃髮して志明と改め、三代目蘭洲は養子にて、池の端仲町龍岡といひし者の悴也、始めは東爾と名乘、夫より蘭爾また蘭洲と名乘、少しの譯合にて剃髮して、其爪と名のり俳諧師となる、（此項、燕石本四六九頁上、二代目庄右衛門云々の項の次あたり）

（以下、燕石本、四七一頁ノ七行目次ニ入ルベキモノ、二項）

一、秀彌弟子二代目秀彌、天明年中古人になり、弟子品川宿に鐵右衛門といへるものあり、此もの河東相方となり岡安喜三郎と名乘る、

一、享和二戌年二月東爾事古人となり、此節迄市村羽左衛門座相勤ける也、（此の一項は、柳雅若しくは別人の書入ならん）

（以下ノ系圖、温知本、燕石本等ナシ）（此項、燕石本の四七四頁、戒名列擧の箇處に相當す）

薩广浄雲（次郎右エ門）　子ト無ハ弟子なり

- 薩广太夫（次郎右エ門）
  - 大薩广（次右エ門）
    - 式部太夫
- 丹後太夫
  - 外記太夫（下リ大薩广）
  - 土佐太夫（虎之助）
    - 土佐太夫
- 長門太夫
  - 近江太夫（語齋）
    - 手品市左衛門

丹波太夫

源太夫 虎屋

肥前太夫

和泉太夫

永閑太夫 虎屋

大源太夫 次郎兵衞、後喜元

小源太夫 竹之助

永閑太夫 金右エ門

半太夫 半之丞 後ニ業雲

河東 藤十郎

双

笠 半太夫同門ニ而有ケルカ河東ニ付 此者名人也、芝居勤ル

弟子 河笠

弟子 古笠

河丈 庄右エ門

河

洲 字半次 後河東

河

丈 金次郎 後山手河東

河

丈 新右衞門 回國ニ出

河

丈 善五郎

夕丈 藤十郎 後紫軒

東

佐 次郎右エ門 後藤十郎 富暁ト成

蘭洲 庄二郎

蘭

洲 又四郎 後志明

東

爾 又四郎 後蘭爾又蘭洲

傳之助 後河東

河

洲 茅場町忠二郎 後沙洲

沙
　洲　平四郎　後河東
蘭
　洲　又四郎
東
　佐　次郎右エ門　後藤十郎
蘭
　爾　忠二郎　後河東

東　佐　藤一郎　後夕丈
東　洲　平五郎
東　爾　市郎兵衛
東　曉　七右エ門
東　雅　惣右エ門
文　爾　文二郎
藤　郎　後東佐
藤　郎　早世
沙　洲　傳藏　後河東
　東　爾　金七
　東　榮　庄五郎
　東　和　安兵衛
河　洲
東　里　利左衛門　後沙洲
蘭　爾

九四

○

（以下ノ柳雅署名ノ第二跋ハ、他本ニ一切無之。即チ、燕石本ノ可柳（可柳ハ前名也）署名ノ跋ノ次ギ也。但シ可柳署名ノ跋モ、年代ノミハ違ヘリ。即チ燕石本ノ文化元年トアルモノ、此ハ寛政十三年辛酉春トアリ。）

抑先師竹雅は「東都一流の音聲」殊に切なるものなりしも、河東其名に鳴り、普く門弟東の字を以て其流の佳名とす、予倩思ふに師の美名物換星移るにしたかひ、いつしか隱れ、其家流を失んことを憂とす、頃しも霜月末つかた、嚴寒の難地、纔のあんかに寄そひ、破障子に颪をいとひ、肱を枕してとろ〱まとろむ折から、夢ともなく現ともなく予か庭前の柳に物音して、紫雲一むら舞下り、異香四方に薫す、こは何事と仰きみれば、雲上に忽然と辨才天三十二相の御形を現して立給ふ、たえなる御聲にてのたまはく、我は江の嶋明神なり、汝常に東都一流の音曲ある中にも志深く、しかも竹雅の流をくみ、其名聞ゆといへども、其職たる山彦河良我を常に念し願ふには、連中に可柳といへる物あり、同座會席の折柄河良可柳間違ある事互に迷惑なる事もあるへし、我倩考ふるに汝常に先師の佳名を殘んとするの志ありとの事、是幸ひ河東か門弟に片名をつけしためしをもつて、今より汝師の片名をとりて、是より竹露庵柳雅と改名有へし、我音曲守護の神なれは、汝に此事告んと思ひあらはれし也、ゆめ〱疑ふ事なかれと、御神躰は忽紫雲に乘して飛去給ふ、予夢覺てあら有かたの御告やとあたりを見れは、さいつころ戲作せし東都一流の音曲集取ちらしありしすへに、白紙の殘りありしは、是幸ひと、改名せよとの御神託（本ハ詑）なり、今柳雅と改名すとも是まで可柳と呼來りし名を、今更柳雅と誤呼ものも有まし、最早老年にも及ひし事なれは、其儘捨置へしと異見する族もありしかと、神のをしえを背く事恐れあれは、其儘に書しるしぬ

愚性堂可柳改

享和元年辛酉霜月廿八日　竹露庵　柳雅

（燕石十種の默阿彌本は、文化元年の年次記入ありて而も可柳のまゝである。此の異本の第二裝、從來漠然たる可柳の正体に對する別にとりたてゝの資料には非れど、享和元年既に柳雅と本人自身では改名してゐた唯一典據である。辨天の夢告云々は、無論眉唾ものであるが。）

○異同激しきもの

一、いの字扇は、いの字五十字あるゆへに、いの字扇子と名付しなり、文は八島にて那須の與市日の丸の扇を射落せし事を作りしなり、（燕石本四五九頁ノ上、一九行目以下參照。）

一、濡浴衣濡扇子、此淨瑠理は、庄右衛門河東と元祖源四郎及破談し時、東古手附の三絃故、（以下四段ノ記事、此邊類似ノ事、燕石本四六一頁ノ一二行ニ在）源四郎方にては今に不用、源四郎は夕丈藤十郎の相方と成、柳の紙雛、ひすひの柳、雛の錦、富士筑波二重霞（燕石本、嵐新勝）、四段共節付至而宜敷大にはやりし也、濡浴衣の淨るりは、市村座にて菊五郎新勝両人にて所作事あり、大當り也、濡扇子は、庄右衛門追善物也、藤十郎方の四段の淨る理は、皆芝居物なり、（燕石本、四六三頁下ノ一七行以下參照）

一、駕籠布團二番目岩保の疊夜著炙するゑ曾我狂言なり、（本ノマヽ）此三弦前彈樂（らく）の手なり、至て面白き手（以下、燕石本と大差なし）附なり、節付は河丈夕丈両章也、此淨るり今にはやりし也、傳之助河東の頃仙臺様へヒ召、駕籠布團の淨瑠理御好ニ付語るへしと被仰ける也、傳之助な毀（リ）語り出しけるに、むつを浮といへる處を、暮を浮と語りし故、御前にも悦ひ給ひて、御褒美有し由、元祖

（燕石本、凡て東作ニ作ル）
東佐中聞し也、ケ樣なる事どもいつれの淨るりにも有し事也、常に心掛へし（燕石本四五八頁下ノ三行目以下參照）

一、信田道行、此淨るりの内に、畜生音といへる處二ヶ所有、次に釣り狐林の次郎友末といへるもの、兄の側國人を討、（本ノマヽ）都の住居難成、和泉の國岸和田と云處に引込逼塞して居たりしか、渡世には夜る／＼狐狸を獵す、或夜羅に懸りける時小鍛冶宗近通り懸り、羅を切おさ（本ノマヽ）し、狐を助け逃しける、友末主従立腹して、宗近に過言を申ける故、友末肩先より打放れ、夫より此かた獵するものもなく、此原長三十六町横三十町、原中程に稻荷の社祭あり、夫より原下り口に信田大明神大社あり、別當幡松院稻荷社二ヶ所有、八町下り信田村西裏に信田の森、安部葛の葉の社は是なり、（燕石本四六一頁下ノ二行目以下參照）

一、四季の屏風、是は忠次郎河東名弘の淨るり也、（巻羽織以下、有迄の同文、燕石本四六二頁ニ在）巻羽織（本ノマヽ）といへる淨るりは、傳藏河東名弘、兩國柳橋河内屋半次郎方にて寛政十一未年夏興行有、忠二郎名弘は、安永年中淺草駒形駿河屋にて興行あり、賑々しき事なり、（燕石本四六一頁下ノ一二行目以下參照。）（同四六二頁上ノ九行目參照。）

（燕石本、温知本共ニ享保）（以下、上記二種本大差ナシ）
一、享和二戌年春狂言、松葉屋瀬川に鷺江（イ路考）、市川といへる突出女郎に鷺三郎、此出に松の内の淨るり、河東沙洲東爾東永東和、三弦源四郎河良文四郎新九郎相勤大當、市村羽左衛門座にてなり、（燕石本四七一頁ノ上ノ一八行目以下參照）

○他の必要なる異同文字

(1)燕石本四五三頁上ノ最尾、「右者夜半楽紅葉集鴉鳥十寸見要集より抜書」とあるのが、「……鴉鳥集……」と集の一字見え、(2)、同四七〇頁下ノ一四行目「一明神河良弟子赤城にて文志、神田明神にて扇志」とあるのが、「二代目河良弟子韓女赤城明神下文志、神田明神下扇志」とある。明神河良は、明神社内に住んだからどうせ同じく二代目河良の意ではあるが、此の異本の方が分りいゝ。(3)、同四七一頁上ノ八行目「一、湯島切通し邊に平野氏といふ隠居異名竹雅」とあるのが、「……善三郎といふ……」と、名だけあつて平野とはない。

(4)、最後に注意することは、第一跋（燕石本では、此跋ばかり。可柳署名のもの。）の、己が年をいへる項が、左の如く著しい異同があることである。

〔燕本〕(前略)もはや七十次にもなれば世をのがれんとし(下略)（燕石本、四八一頁ノ下）

〔異本〕(前略)最早七十にも二ツ三ツなれば、世をのがれんと(下略)

燕石本の跋年次は、文化元年甲子五月である事、前にいうた。此は、（即ち異本、その第一跋）寛政十三年辛酉春である。こゝに著しい差がある。何れが正しいのであらうか。一方は、寛政十三年當時、六十七、八歳といひ(異本)、一方は、享和を經て、文化元年に七十次といふのである。年齢そのものから、どうせ七十前後ではあるが、嚴密にいうと、なぜ此の二種の記載あるかを問はねばならぬ。七十次を、正七十にとれば、寛政十三年（此年、二月享和と改元）に六十七八歳であるもの、丁度文化元年には、七十一、二歳であるから、両者とも記する己自身の年齢に於ては、畢竟相同じいとも謂はゞ謂はれよう。然し此の二樣の書分けは、疎却は出來ぬ。自分からは、どうも燕石本の方が、著者自身又は後人の手による修正のやうに思へてならぬのである。

○燕石本のみに見ゆる事項（異本になきもの。）

此を綜合しておかう。此の異本が善本とも限らないが、年次が異本より新しいだけ、默阿彌本の燕石本（並に同系の温知本）は、攙入、或はありやの懸念もないではない。（善意に解釋すれば、著者自身の後日（恰も文化元年頃）の增補とも思へる。）然し今は、唯、此の列舉だけに止めておく

○燕石本四五八頁下、反魂香云々の項○同四五九頁上、清見八景云々の項○同、四季の舞の項○同頁下、天皇忍のだん云々の項○同、嫁入五人曾我の項○同、濡髮庄右衛門河東追善云々の項○四六〇頁上、千年の[illegible]云々の項○同、常陸帶の項○四六一頁上、壱萬度云々の項○同下雛の磯云々の項○四六二頁上、隅田川の淨瑠理云々の項○四六四頁上由縁の江戸櫻云々より、四六六頁下の「釣鐘の段文に」云々迄、二十項全部無し。○四六六頁下、終より二行目、助六廓の夜櫻云々の項○四七〇頁下の一〇行目、文化四丁卯云々の項○四七三頁の下、一三行目、古近江作云々の項○四七四頁上、過去帳やうのもの、（恰も異本にては、こゝ、系圖也。前掲）全部。以上。

なほ、類似の項を記載しながら、燕石本特り多量の文字に亘りたるものが、一個處だけある。これは同四五七頁下の、新世帶元祖河東節附云々の項である。これは、異本では、「新世帶出遣ひ續もの也、新世帶淨るりの中に近江なるつくまの祭はつかしやといへる事は……」として、以下即ち燕石本の四五八頁上の九行目より十六行目の「恥しといふなり」まで載せてゐる。其他の部分は、異本に全く之を闕くのである。如斯く即ち、芝居に關係した出し物の解說、字句の解義傳說めいた所が、異本には多く之を闕くやうである。然しこれが、默阿彌又はその以前の御雅以外の書入だとも斷言はせぬ。

○めりやす鳥羽屋三右衞門の項の溫知、燕石、異本の異同

最後にこれに觸れておきたい。これは本著初編の「藤蔓」の評釋中で（拙著「江戸軟派雜考」にも所收）述べたことであるが、今度の異本がこれだけは一番い丶やうに思はれるから、重複を厭はず載せておく。私議は挿まぬ、唯異同による諸賢の研覈に訴へたい。

（溫知本）（全書五五頁）東都にて長唄目利安、初めは、鳥羽屋三右衞門なり、其後豊後節も彈なり、三右衞門事、後に東武專太夫と名乘、歌は文五郎といへるも專太夫の三絃の弟子なり、東武の弟子にあらざるはなし、（下略）

（燕石本）（全書四七二頁ノ上）一東都にて長唄目利安諷ひ始めは鳥羽屋三右衞門也其後豊後節も彈始るなり三右衞門事後に東武專太夫となる唄は文五郎と云へるもの專太夫の三絃の弟子也東都に三絃弟子にならざるはなし、（下略）

（異本）一東都にて長哥目利安諷ひ始めは、鳥羽屋三右衞門也、其後豊後節も門人彈始る也、三右衞門後東武專太夫と成、哥は文五郎といふ、東都の三絃專太夫の弟子ならざるはなし（下略）

×

以上、異同の迹を要約すると、一、有無記事互に尠からざる事。二、跋の數、及び年代記入に相違ある事。三、各內容章句の順序、相違激しきこと。四、系圖等の有無。等である。

最後に、此の機會に於て――異本舊藏家山本直樹氏が、此の秘本を提供して、予をして此の發表を自由ならしめられた好學の高意に對し、予は感謝の微忱を表したいと思ふ。

浮世繪に現れた歌・狂歌（上）

觸目の限りの、浮世繪（主に版畫、一枚繪の類）に現れた歌（和歌の意）、狂歌の類を、此等を主にして、その畫者、畫題、判の大小を記述しようといふのである。一は最古典にして永久に新しきもの、一は近世に端を發するもの、とにかく日本文學の中の、最も普遍的な此等が、如何に浮世繪師の手に依り、諒解せられて、版畫の上に（主に、賛やうのものに）應用せられてゐるか。畫家により、その同じ賛の如きに用ゐるにしても、畫を主にしたか、歌を主にしたか、とにかくその應用の程度如何。それ〴〵差別もあらうが、それを知るのも一興と思うたからである。（尙、延いては、民衆化せられた短歌は、如何なるものかの問に、容易に答へるものも是であらうと思ふ。）概括的評語は、此の實物掲載後の、最後のことにする。今は、暫く、歌、狂歌の順序に、類を追うて摘載してゆかう。案外の多數に上つたので、實は自分としては、途中で棒を折りかゝつたものである。まだ二三未調査のものもあるが、これで一先づ大体は集め得たかと思ふ。以上。（尙、畫題の中、「　」のものは原題、他は假外題である。）

畫家別年代順　浮世繪版畫に現れた歌　附たり狂歌

○歌の部

其一、鈴木春信の部

○菅　公（藍細繪さ云）（海邊月を見る、牛上の菅公、牛曳く老爺。此類他に數枚、歌は、右又は左の短冊形の中にあり。「百五十回忌春信圖錄」に所載。）

菅原道眞　菅のまや露の空(そら)にすみもせで心つくしの有明のつき

○阿倍仲麿（水細繪）（海邊、月を見る仲麿さ、唐人二人。同）

百人一首ノ內　安倍仲麿

あまのはらふりさけみれば……。

○「寄雪戀」（水細繪）（舟中、編笠を被れる若さ、傘頭に向ひ、雪積る松が枝さ塀の上に雀飛ぶ。）

寄雪戀　鶯世

あはれさは人は思はしいたつらに春ふる雪のおもひきゆさも（上ノ右、短冊形にあるこさ如例。）

○「むかし男」（大判細繪。紅繪カ）（八橋の景）

……ら衣きつゝなれにし……。

○深草少將、雪中（同、同カ）（素足、雪中かよひ）

あかつきのしぢのはねかきもゝはかき君が來ぬ夜はわれぞかず〱

○「仁」（中判、錦）（小女の頸筋を剃る美女）

人をめぐむ心の道に宿からば名をさへさむる身さもならなん

○「義」（中判、錦）

何事も身□□くだり理をわかちいつわりなきを義さはいふべき

○「禮」（中、錦）（衝立二美人）

君を思ひおやに孝ありいかりなく禮義をつくす人ぞたのしき

○「智」（同、同）（手習ふ子供さ打見る少女、手に手を貸す傍の美女に）

道しある世に生れなはなのつからひさつをしらば十もしらなん

○「風流六哥仙」の內（中判）（美女、窓より月を見る。春。）

風流六哥仙　在原業平　月やあらぬ春やむかしの…

○「風流四季哥仙二月水邊梅」（中判錦カ）（暗中、梅を手折る若衆、婢）

末むすぶ人の手さへや匂ふらん梅の下行水のながれは

○閏三月（中判錦）（貝拾ひの美女さ若衆。）

こきまぜに色はなくしてよる貝は錦のうらさみゆるなりけり

○「風流四季哥仙　卯月」（中判、錦）（窓前に訪よひる若衆虛無僧、覗く美女の二人。雲形の中、時鳥。）

人もさへ咲や卯月の花さかりこてふに似たる宿の垣ね

た

○窓下の若衆虚無僧（桂繪）（右と略ご同構圖。）

いかにせんあまのすむてう恨ても戀しきかたに歸るなみ哉

○「風俗四季哥仙　五月雨」（同）（湯返り二美女と少女。）

ふりすさふさたへはあれさ五月雨の雲ははれ間も見へぬ空かな

○「風俗四季哥仙　仲秋」（同）（月見、緣臺の二女。）

秋萩の花□の露にかけさめて月もうつらふ色やそふらん

○「風流江戸八景　上野の晩鐘」（中、錦）（侍若衆と、子供侍と母親らしきもの。）

この山のころまちえたる花さかりよそにはつけよ入相のかね

○「風流江戸八景　品川歸帆」（中錦）（障子越、品川の海見ゆ。緣側に遊女と男髷の子供一人。）

うら人も家路はかはろしな川にかへるはおなし眞帆のつり舟

○「風流江戸八景　駒形秋月」（同）（舟より娘を引出す奉公人風の美男若衆。遠景に河。）

にほの海てる月かけをこまかたになかめあかしもすまも迎えん

○「風流江戸八景　角田川落厂」（同）（船中の一美人と釣する一美人。）

こえてこしみれはあまたの雲ぢより隅田かはらにおつるかりかれ

○「風流江戸八景　眞乳山の暮雪」（同）（炬燵の大小二美人と一若衆。）

しら雪にふりつむ道はまつち山木ことに花と見ゆる夕くれ

○「風流江戸八景　兩國橋夕照」（中判）（欄干の二美人。）

川風もへたゝる國の名のみにておなし夕日の□□□もよし

○「風流江戸八景　淺草晴嵐」（同）（柳屋の店先。店のお藤と腰かけたる若侍。）

雲はらふあらしにつみもあさくさに世わたる人もむれつゝそよる

○「風流やつし七小町　そとは」（細繪、紅繪。）（杉の木の下、柴を負うて憩ふ母と、石を杉に打たんとする兒。初期のもの也。）

様らゝの道なれはこそあしゝらめそこは何かはくるしゝるらん（同構圖に、中判のもの有っ柱繪にもありっ但し柱繪のものは、子供、木に上る。）

○「風流やつし七小町　かよひ」（細ヱ、）（緣側、立ちて煙管をもてる太夫と、腰うたげなる小女。）

あかつきのしゞのはれかきもゝはがききみかこぬ夜はわれぞかずく

○「風流やつし七小町　關でら」（中判、錦）（水桶を頭にせる婦人、腹かけだけの子供の手をひく。空に虹、岸上に女郎花。）

わびぬれば身をうきぐさの……。

○「風流七小町やつし　しみづ」（柱繪、錦繪）（櫻下二美人）

何をして身をいたつらに帶さめんたきのけしきはかはらぬものを

○「風流七小町　あふむ」（柱繪）（右と同一種の內カ）

雲のうへはありしむかしにかはらねどみし玉たれのうちそ床しき

○「風流六玉川　調布（たつくり）の玉川」（柱ヱ、錦）（母の裾をひける裸体の子供。下に龜遊ぶ。）

たつくりやさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉川のさゝ

○「風俗（流カ）六玉川」の內　高野の玉川（柱ヱ、同）（下に若衆虛無僧。）

わすれても汲やしつらん旅人のたかのゝおくの玉川のみつ

○調布の玉川（中判、錦）（有名な、布晒し美人。）

調布の玉川　たつくりやさらす垣根の朝露をつらぬきさめぬ玉川の里　定家

○調布の玉川（中判、錦）（晒す母っ桶を手にせる小兒。）

右のものと、構圖を違ふ。歌は同じ。

⊙欄に凭る美女と子供（中判）（戶外、布さらしの遠望。但し無落欵）

調布の玉川（歌は同じ。）

○千鳥玉川（中判、錦）（飛ぶ千鳥。見る美人と子供。）

千鳥玉川　能因法師　陸奧名所　夕されば汐風こしてみちのくの野田のたま川千鳥鳴くなり

○井出の玉川（中判、錦）（美人の馬子、馬上の若衆。）

井出の玉川　俊成　駒とめてなを水かはん山吹のはなの露そふ井出の玉川

○擣衣玉川（中判、錦）（美人、碪を打つ。相向へる二美人室內と。一人は室內、一人庭に碪打つとの二構圖異種二枚あり。）

擣衣玉河　相模　松風の音たに秋は淋しきに衣うつ

なりたま川のさと

○萩の玉川（中、錦）（川の萩を見る煙管持美女と他の美女。）

萩の玉川　俊頼　あはでみむ野路の玉河はぎこへて色なる浪に月やどりけり

○夜釣りの若衆（同、同）（篝火燃え、千鳥とぶ。）

千鳥玉川　能因法師　夕されば塩風こしてみちのくの野田の玉河千どり鳴なり

○野田玉川（柱、錦）（千鳥、下に左半身の見ゆる頭巾、傘もつ雪中美人。）

風俗六玉川　能因（歌は右に同じ。）

○掃花（中判、錦）（櫻下、箒にて掃く美女と仰ぐ美女。）

紀貫之　櫻ちる木の下風はさむからで空にしられぬ雪ぞふりける

○菊花壇美人（中判錦）（菊花の前に蹲へる美女と、立つて見る若衆。）

大中臣頼基朝臣　一ふしに千代をこめたる杖なればつくともつきし君がよはひは

○見立寒山拾得（中判、錦）（箒をもてる女中文よめる美人。）

中納言朝忠　あふことのたえてしなくは中々に人をも身をもうらみざらまし

○雪中美人と小女（中判、錦）（女、左向き、頭巾、傘つ小女、傘を挿し、提灯を手にす。）

紀友則　夕されば佐保の川原の河風に友まどはせて千鳥なくなり

○見立天智天皇（中判、錦）（遠望に耽る美人。）

天智天皇　秋の田のかりほの……

○櫻下摘草四美人と一若衆（横、中判錦）

良敎　いつしかと花の下ひもとけにけり霞の衣たつとみしまに

○室内二遊女（中判、錦）（河の見ゆる室内二遊女、一人は立ちて煙管を手にし、一人は寢て本をよむ。）

寂蓮法師　淋しさはそのいろとしもなかりけり槇たつ山の秋の夕ぐれ

○磯邊の二美人（中判）

源重之　風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくだけてものをおもふころ哉

○文讀遊女と若衆（中判、錦）

三條院女藏人左近　いは橋のよるのちぎりもたへぬべしあくるわびしきかつらきの神

○出女と旅人（中判、錦）（宿先、旅人を揃ふる美人。）

蟬　丸　これやこの行もかへるもわかれてはしるもしらぬもあふさかの關

○座敷美人（中判、同）

伊　勢　三輪の山いかに待見ん年ふさもたづぬる人もあらじさおもへば

○浮世美人　寄花　八重櫻（中判、錦）（欞の窓より腰かけ、きせるを手にして海を見る遊女。遠めがねの秃。）

〔原題〕浮世美人　寄花　みなみ　山さきや内元浦　八重櫻。〔みなみは、例の通り品川の意。〕

春の日のひかりを添て山崎にさかりまたるゝ八重さくらかな〔屋號さ遊女の名のよみ込、宛も狂歌めいたり。〕

○浮世美人　寄花　常夏（中判、錦）（扇地紙賣さ戸内の娘。）

〔原題〕浮世美人　寄花　路考娘　瞿夏

□日にも思ふ中には□風いらりたにみへぬさこなつのはな

○雪灯を持つ美女と菊を手折る若衆（同）（女が主、若衆は從、お染久松もどき。）

寄　菊　待えしさおもふ夕へもさふ人の袖の色なるしらきくの花

○「風俗四季の華」の内（大錦）

風俗四季の華　春　光吉（花を生くる遊女さ、後ろ人形を持つ秃。）

花にのみあかぬ心の儘ならす八百よろつ代の春も經ぬべし

○海岸茶みせ、若衆二美人（中判、錦）（高輪、御休所よみつや」さあり）

和田のはら朝なきなみの舟人もたよりの風はありさこそきけ

○寒夜男女（中、同）（女を引入れんさする室入口の若衆。）

風さむみけふもみそれのふる鄕はよし野の山の雪□なりけり

○闇　夜　梅（中、同）（暗中、緣側、娘の袖をひく若者、お染久松もどきいもの。）

月影はそれさも見へすかすむ夜の袖もさやかに匂ふ梅か香

○階子段を上る美人（中、同）（階子段に美人、二階に若衆、顏を見す。）

忍戀　數ならぬ山かくれ□むもれ水うちには絕なもらさゞりけり

○手習ひ、居眠る子供と見る美女（中判）（美女は立ちて櫛に手をやる。戶外、杜若。）

杜　若　春風の池吹あらふ波のうゐにおのれかけろふかきつはたかな

（春信の部、未完）

寄贈紹介

○眉斧日錄 川柳寺狩羅氏複製發行

風窗湖十撰の寶曆二初夏、江戸吉文字屋開板の「眉斧日錄」、さいうても、自分はこれ迄此の本の存在を知らなかつた。聞けば、川柳の過渡期のものさして、非常の珍書であるさうな。これを川柳寺氏が、單式印刷の新式印刷を應用して、本文全部、原本通り複製されたものである。或は最近の稀書複製會本も此の印刷に依つてゐるのかも知れぬ。さにかく此の單式印刷は極めて廉く出來て、さうして原本通り、本のシミまで出るさうな。此本、本のシミは止めたが、文字、行間、凡て原本通り、寸分違はぬさうな。矢張り寫眞による製版で、聞けば石版さ凸版さのアヒの子のやうで、しかも凸版よりは廉くて、インキの乘りもしつかりしてゐて感じがいゝ。表紙も糸も吟味してある。用紙も色のついた澁い紙である。内容は、右云つた極め付のもの、それを一册五〇錢で提供するさいふのだから殆ど奇蹟的出版である。此本、全丁數、解題さも四十丁。尙第二篇は、種彥評二葉柳でこれも近刊であるさうな。三百部の限定出版さの事、是非諸賢の申込御後援を御奬めする。(五〇錢、東京市外野方町下沼袋一五八〇、能勢久一郞氏方)

○國文學史綱要 [illegible]著

國文學史の大体はこれで攫めるらしい。製本用紙最も佳良、挿圖の多きことも苦心の窺著しく、此の種の本さして極めて稀だ。唯、自分の研究範圍内に於て謂へば、近世文學に於て洒落本さ人情本さの分界明瞭でなく、俗曲で豊後節を落したり、都々逸な例の如く扇歌の創作のやう書いたり、其他數ヶ處難點はあるが、これは、著者へそのうち申送る筈であるから再版には訂正さるゝであらう。さにかゝ在つて惡くはない本である。(貳圓、菊判布裝三五八頁別に年表附。東京市神田區神保町二、東京修文舘)

○富士 珍聞閣文舍編

悉しくは、「富士山に關する書籍目錄」である。富士山に關する著書、有名無名を問はず可なり豊富に集められてゐる。この中に、逸してあるもので、自分の心付いたものでは少國民の臨時增刊「富士山大觀」(明治三十三四年頃發行)位ゐだ、在來のものはそれ程全部入つてゐるさいつていゝ。好參考書である。(小形本、三六頁、大坂市此花區上福島中一丁目二七、森谷書店内、珍聞閣文舍、非賣品)

○典籍之研究 第 三 集

益々賑々し。わけて小生の恩師石田元季先生御執筆の「小寺玉晁の自著目錄」は、結構なものである。高安暘江氏の「江戸作者部類の稿本」も好讀物である。其他數家。(大坂市西成區玉出町九七九、香文房内、典籍の研究社六拾錢)

○歷史地理(第四十六卷、第六)○墓碑史蹟研究(第廿七)○風俗研究(六十七)○川柳鯱鉾(十二月號)○長唄(十二月號)○大大阪(二ノ十二)○早稻田文學(十二月號)○歌舞伎(第九號)○國學院雜誌(十二月號)○性の智識(新年號)○書誌(第二)○國語と國文學(新年號)

著者より

洒落本書目の補遺の殘りは、まだ〳〵殖ゑさう故來月に廻す。○花月氏百樹氏の本も御借りしてあるその儘で、まだ外の原稿に追はれて、校訂の筆を入れる暇がない。筆耕が二人ばかり頼んでありますが、結局自分が初めから寫す程の手間が入ります。それが爲出すさ豫約し乍ら「續々膝栗毛」にもまだ筆が入れてない。幸ひ印刷所も年末多忙であらうさ解釋して、一月下旬刊の事に延した。不惡。○最近小生十年間の一浮世繪さ雜賀衆一に關する雜筆(諸君の御存じないものが過半です)が命題の通りで、春陽堂から刊行されました。三色版の出來榮えだけでも極上です。それに裝幀は雪岱氏が筆を揮はれたもので す。澁くて派手さいふ無理な注文によく合つてゐます。裏面廣告の如きものです。御推奬下さい。○尙、川柳寺氏の單式印刷を應用して繪本刊行の豫定があります。追而悉敷(廿四日)

定價表	
一册廿五錢	郵稅貳錢
六册分	稅共壹圓四拾錢
十二册分同	貳圓八拾錢
○郵券貳錢一割增の事	○照會は返信料添付の事

大正十四年十二月二十八日印刷
大正十五年一月一日發行 (貳拾五錢) 第[illegible]號

編輯兼發行者 名古屋市東區東道泉町百五十七番地 尾崎久彌

印刷者 名古屋市中區南伊勢町二丁目三番地 英比貞造

印刷所 名古屋市中區南大津町二丁目三番地 扶桑社

發行所 名古屋市東區道泉町一五七番地 江戸軟派研究發行所 振替名古屋九六七二番

賀正

肝心の此の詞を忘れ候。偖、例年賀狀を頂き失禮致し居る方々へ、本年は、小生工夫の洒落本仕立の繪葉書を差上げ可申候ニ本式にするさ、第四種便にせねばならぬ厄介な物に候。その代り、少々妙な趣向に候。然しこれもホンの戲さめのいたづら氣分の思ひ付に候。非常な面倒な作り物故、僅か百枚限り作つたるものに候。さいうても文字が小生の手を煩すのみにて、他に女子供總がゝりの仕事に候。先は、

尾崎久彌氏二新著

浮世繪と廢頽派　全

小村雪岱氏裝幀

●表紙木版手摺十數度摺美人半身
●上下金地色朱。見返し更紗模樣　好評忽四版

原色版四枚銅版手摺十六枚
挿繪計廿九個　用紙純白分厚
四六版本文三四〇頁解說等二〇頁
定價一冊金貳圓七拾錢送料八錢

著者は自序に於て「趣味本位の鑑賞の雜感、見聞、考證其他の類である。但し自分の前謂うた門路上、大多數は、愛欲描寫の上の浮世繪並にその廢頽派に關する記述である。云々。凡て坊間浮世繪研究書としての普通約束を破ること甚だ多い。」というてゐる。收むる所左記の三十有七篇、凡て此の主張の下に成された、廣浮世繪並に其廢頽派に關する記錄、時には愛欲描寫の憎しい內容に迄穿貫してゐる。此種廢頽派に對して深切な同情と特殊事實に對する研究と、是れ蓋し從來稀有な事で浮世繪愛好一般江戶趣味研究同好者の座右に是非一本をお奬めする。

內容總目

浮世繪美人畫の四大家○春信の性の國○歌麿の性の國○哥麿の悲しみ○神性と獸性と○歌麿と英泉甚く○モナ・リザの微笑○熔異端爐（北齋に及ぶ）○浮世繪の逆輸入○ノエノロサの版畫優越論○摺物師の悴○浮世繪の匂ひ○繪を味ふ心○或種の變態性欲か○秋な背景にした江戶の艷男艷女○うきよゑのくに○廣重の他力境○廣重を踏む○廣重の東都名所の內○廣重の催情風畫○構圖の踏襲○草双紙の外題袋○國芳畫より○雪の夜道○浮世繪と犬○浮世繪と玄○浮世繪裸体畫目錄並に解說○浮世繪挑發畫風考○美人と風景十二首○地者を棄てたる記○エロチックスの內容と体系○會本の諸形式○艷道俗說辭と不知足山人○廣義のあぶな繪○あぶな繪畫集繪圖解說○あぶな繪畫集の禁止について○浮世繪エロチシズム沿革誌

挿繪目次

並に其目錄

張物三枚續（清長）○茶店二美人（春信）○朝顏湯上り美人（同）○夢（歌麿）○琉球美人之圖（原色版）（同）○浮世四十八手の內（英泉）○お梅粂之助（歌麿）○お稽古がよひ（英泉）○モナ・リザの肖像（ダ・ヴインチ）○歌撰戀の部の內（歌麿）○風（北齋）○蚊帳（春信）○美人合の內（二代豐國）○見立七小町の內（英山）○兩國（國安）○風流花合の內（二代春好）○源氏後集餘情の內（二代豐國）○高輪月夜三枚續（原色版）（廣重）○四月三枚續の內（初代豐國）○初戀三枚續の內（三代豐國）○倭文庫外題袋（廣重）○假名よみ八犬傳同（國芳）○加賀千代女の圖（國芳）○雪の夜道（同）○風に吹かるゝ女（政信）○涼み臺の女（豐信）○夕立二美人（原色版）（國貞）○座敷若衆美人之圖（湖龍齋）○鏡面美人之圖（英泉）計別摺廿枚

東京市日本橋區通四丁目五
春陽堂發行
振替東京一六一七番
（御申込次第目錄進呈）

近松淨瑠璃讀本　全

○表紙近松紋金摺込灑洒本文二〇四頁他一二頁四六版。挿繪口繪一枚（原色版）挿繪一四個
定價一冊壹圓參拾錢送費六錢

高等學校女子專門學校及同程度の國語教本として編まれたものであるが一般讀書子にも興味少くはなからう。校註詳細を極め、挿繪亦先例を破つて同想同材を扱つた浮世繪の逸品を以て埋めてゐる。原文を最も讀み易からしめ且つ章句の採伐適當を得て前後の連絡を保ちよく短時間に授業し得るやう編まれてある。別に挿繪解說の悉しいものを附す、恐らく一般近松文學讀本としても可能であらう。恰も英のノムの沙翁物語以上にである。此篇第一篇時代物篇である。（再版發售）

目次

一、源氏烏帽子折（一、代見の雪。二、田村川の人笹■念佛往生記（一、清姬姉弟道行。二、成道。三、涅槃）■釋迦如來誕生會（一、悉達太子道行。二、厨のうちそと■國姓爺合戰（一、千里が竹。二、獅子が城內。三、奸賊代誅）■曾我扇八景・曾我會稽山（一、四鳥の別。二、蓍野の雨■吉野都女楠（一、最期の一念。二、天皇かちどのみちゆき）■碁盤太平記（一、吉龜の浮木。二、朽ちせぬ石）■挿繪（清倍、廣重、春章、春信、豐國、春亭、北齋、國貞、英泉、師政、國芳等十四個本文大小摺込別に原色版一葉）

東京市神田區駿河臺南甲賀町八二
三學社發行
振替東京六六九八五番

大正十四年十一月二十八日印刷　江戶文學研究　第十冊　定價貳拾五錢　送料貳錢

大正十五年二月四日印刷納本
大正十五年二月六日發行
貳編第十一冊（通編第四十一冊）

本文

浮世繪に現れた歌、狂歌（完）
附たり、川柳

『四谷怪談』の根本

蒐書解題（一）
○赤本智惠鑑以下八種

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十一冊
（通編第四十一冊）

■**赤本智惠鑑** 中五冊 明和七年 臍齋主人飯袋子

巻一、滝（よだれ）先生傳、鼠の藝つくし。巻二、犬と猿の相撲、鶴の眞似する鳥。巻三、佐々貫三八、十王の勸進。巻四、鳥勘左衛門、獣の伉儷。巻五、大酒金平。題の書体など、頗る酒落本の傾城智惠鑑と同樣である。とにかく内容は、噴歎の境をゆく。初期酒落本の中に教訓物を往々見受けるが、これもさうかといひたい物。巻五の大酒金平は、誠は醉喋の先生「きんぴら」は挿話として出る。巻四の鳥勘左衛門の中に、有益な物を發見した。それは例の隨胎臀の中條をなかでうと讃む一例である。これはナカデウだと井上和雄氏から得て教へられたが、出處は不明のまゝであつた。それが此にある。曰く「隨胎の中條早流が後家」が、親不孝な息子を連れて、道場へ來る作である。この早流は、無論、その意に借りて、人名としたのであらうが、中條の振假名は、明かになかでうである。

■**怪談雨夜鐘** 半、五冊 濱華東男子著 東武十遍舍校

年代不詳。序、（初代）一九。古今の奇談怪談であるが、挿繪が面白い。畫家も不詳である。蘭巻べつたり、あかゑいの魚、船幽靈、豆狸、山地々。かされ、お菊むし、野きつね、鬼くま、凡て小いやらしい物ばかり。（彩色摺一）此の本の東男子は一体誰か。最近、例の吾妻男一丁が、梅亭金鷲の以前に、古く初代又は二代と二人位ゐはあつたらしい發見があるが、此の東男子はその初代ではあるまいか。尙、これは「吾妻男一丁の數代に就て」に讓る。尙、此本、柱は、奇談二葉草とある。

■**通略三極志** 中三巻 安永九年 四國子作 清長畫

黄表紙の一である。十五丁物。三國志の今樣。玄宗と相方の的ろ、閨中愁嘆の圖など面白いが、然し清長とはどうも受けされない、うつかり見てゐると勝川派の風。

■**源平惣勘定** 中二巻 天明三年 四方山人（蜀山人）作 哥麿畫

清盛と佛。宗盛、資盛。ひよ鳥越。與市の扇の的、知盛の亡靈、平家蟹、頼朝。凡て此等を今樣人物を以てしたのである。□□□けいせい檜扇、二位尼やりてとなり、義經遊興といつた圖など、その女性の描分けなど、歌麿としては初期のせゐもあるが、これも前の清長と殆ど同一感じ。前が清長なればこれもさうかと思はれさうな物、然し何處となく、前の清長が、役者の似顔風で堅いに拘らず、これは軟かく甘味が流れてゐる。此の前後同じく黄表紙である。

■**怪談摸摸夢字彙** 中三巻 享和三年 京傳畫作

豊房（石燕）の「百鬼夜行」にヒントを得たやうな作。見越入湯から節鬼まで二十五種お化けの附會。最初にヒラキ一圖に、京傳書齋の圖がある。醒世の額を懸け、右に本屋の小僧の體。左、京傳机に向ひ、夢見の體。その催足の體。次へと續く（例の京傳鼻に描いてゐる。）最後に、出來た原稿を渡す同じく京傳と、小僧。

■**十六利勘略縁起** 中三卷合 文化十三年 京傳作 豊國畫

これも黄表紙。然し末期だから、中本に近い感じである。十六羅漢の擬物で、一、欲連損者から十六、迷損者まで、凡て尊者が損者となつてゐるのも面白い。通損者などは、遊所通ひの駕籠内の体、虎が奴になつて「さんまいのかごにはさすがのおれもかなはぬ」と息せき、頭いて走る圖などがある。凡て羅漢も女を相手にした今樣に酒落させられてゐる。

■**伊呂波短歌** 中二卷 寛政酉、十三年、初春 一九畫作

此も黄表紙。上の初めに、はんもと樣へとして、十偏舍の手紙がある。黒本にも此の種いろは短歌があるが、これは大等の踏襲であろ。現に、「古めかしき趣向新敷存付けちらし」云々と初めの手紙にもある。上に、いろはを並べて、それに一々、詞を引いてゐる。それが下の挿繪に關聯があるやうで無い。上の文句は、頗る悪女房が誹る詞や、其女房のふてた云草。下の繪は續きで、夫婦喧嘩から離縁、また元に納るで芽出度し〱になつてゐる。

■**滑稽妙伍天連都** 中一冊 文化八年 一九作 美丸畫

「書目」のみにあつて他には漏れてゐる物である。一種の小咄本、座頭法會から、長脚押（あしながのすれおし）に至る、十七件、は全く小咄の戯著であるが、口繪が、面白い中に、母と父と息子の裸体が、下女の所へ走のあとをつける体、息子下女の所へはひたるにあとより人おさすゆへ、ゆきわへそけたる圖、親父下女の寐所へはひかけてゆくさ三の圖に説明がある。これは、本文の這くいふのに相當する。猥なもので、ある。三夜御長臂（あしながてながの）遊戯も、異國趣味滑稽との融和である。

前冊補遺　前冊表紙二の下段で、花月氏のいはれた著は、最近原本を手にし得て見ると、甚、やはり花月氏のいはれる通りであつた。但し、コタは髄にコタである。

○二美人と子供（中判、錦）（緣側小兒と美人。室内髮梳く美人。）

椿　春かすみ立□かくせ風吹は花のにしきのなびきもそする

○「風」（中判）（娘、風に吹かる。あぶな繪。）

せめてたゝめにみぬ風のつてにたになびくさきかんこの葉もかな

○かきや茶屋（中判、錦）（お仙と客の美人。）

さくら花あかぬ心のあやにくに見れと猶こそみまくほしけれ

○かきやおせん（中判、同）（店先、若衆の髮を梳くお仙。若衆、三味をひく。）

せきあへぬ袖の泪の玉かつらかけてもしらしたきつこゝろを

○太夫道中と順禮の父子（同、同）

遍　照　天津風雲の通路吹とぢよ…………。

其二、春重の部

○藤棚下の美人と茶屋女（中判）（藤棚の下、緣臺の美人と、茶屋女。）

紫に淺しほ染し花なれば色ふかゝらん池の藤なみ

○見立林和靖（中判）（美人文をひろげ、側に禿、背に鶴と梅。）

行末を君に契らはあしたつの千代に八千代の春を重ん

○鳥　追（短册繪）（胡弓を彈けるもの）

行末にふかきえにとて契つゝまたむすはれぬよさの川こも

○雪中、相傘の男女（柱繪）（同構圖、中判にもありて有名なるもの。）

かきりなきふかき深山もいかならんけふ九重につもる白雪

【參考】尙、此頃、細繪判紅繪摺に、畵者を違へて、歌をものせるもの多し。例へば、春信、重政、清滿同型にして此の類がある。多く畵樣に作ふ歌にして、（歌は凡て、畵の上緣、短册形の中に入る）貫之、仲麿、業平の如し。

○「雪月花」の内　（中判、錦繪）（欄に凭る若衆と美人。）

雪月花　品月の月　秋風に雪（すすカ）と晴行月影のひかりもたかき沖つしら浪

○「風流七小町　雨乞」（中判、錦繪）

こさわりや日の本なればてりもせてさりとてはまたあめが下とは

○舟の戀　（中判、錦）（男女舟中）

川水に行ゑもさたなく乘かけていはぬこさばに月の光りに

○雨中、楓二美人　（中判、錦繪）

紳な月しくるゝまゝに小倉山下てる□紅葉しにけり

○青樓の雪　（中判、錦繪）

いつしかにふりつもりぬるゆきなれば歸る山路に道まよふらん

其三、磯田湖龍齋の部

○「風流六歌仙」の内　（柱繪、錦繪）（若衆馬子。美人、馬上、河を渉る。）

風流六歌仙　業平　月やあらぬ春やむかしの……。

○「風流七小町　せきでら」（中判、錦繪）

わひぬれば身をうき草の……………。

○金魚を池に放つ二美人　（同、同）

池水に色をうつしておもたかの花は涼しき物とは見ゆれ

○蚊帳の内外の男女　（同、同）（蚊帳中の美人。覗く若衆。蚊帳外に居眠る少女。）

幾夜かはおもひこめてしれやの戸をさしもはたさで待はくるしき

○廊を歩む美人と女中　（同、同）（廊下の美人と案内の女中。障子の破れから覗く男。）

深川樓　夕風にひくてになびく女郎花初あき比のすがたなるらん

○源氏十二段風　（同、同）（美人、琴をひく。外、若衆笛を吹く。）

琴の音にひかれて思ふ心から戀しき糸をたのみつる哉

○船中二美人と若衆　（柱繪、同）

風流近江　八橋歸帆

（まカ）□ほひきてやはせに走る舟はいまうち出のはまをあさの追風

○「仁」（中判、同）
（春信の同題参照。全く彼と同一構圖。彼れの剽窃みたること明瞭。尚、拙著新刊「浮世繪と膠積派」所收「構圖の踏襲」参照。）

○見立高砂（中判、同）（若衆と美人）
風流名所鏡　播摩高砂
波間よりゆふひかゝれる高砂のまつのうははかさまさりけり

○室内三遊女（中判、同）

風流江戸八景　三囲の落雁（春信にも同題のものあり。其項参照。）
雲あまた・こしぢにまつちかき三めぐりかけて落るかりがね（上の句、欠字か。）

第四、駒井美信の部

○緣先、二美人（中判）（一人は文を見、一人はそれの相手になる。）
戀すればうきみさへこそおしまなれむなしき世にただすまんとおもへは

第五、清廣（鳥居）、清經（同）の部

△清廣畫

○小野小町　中村富十郎（紅繪カ、細繪判）
井のうへに旅寝をすればいと寒しこけの衣を我にかはなん

△清經畫

○うつぼ舟の上臈（中判、紅繪カ）
（舟中美人。上の雲形、若衆ありて遠眼鏡にて窺きなる圖。）
住吉の岸打浪やうつほにぶれこかれ行衛はかたの松かぜ

第六、春章（勝川）、文調其他の部

△春章畫

○六歌仙の内、喜撰法師（若衆茶を焙じる、後に娘。）
我庵は都のたつみ鹿ぞすむ……。

△一筆齋文調畫

○「三十六花撰　中まんじや玉きく」（中判）

くもれかしながむるからに悲しきに月におぼゆる人のおもかげ

○「三十六花撰　中あふみやみやこじ」（中判）（花魁、禿、新造。）

世の中にたへて櫻のなかりせば春のこころはのどけからまし

△春光畫　（吉澤コレクション「浮世繪版畫全集」に在）

○「風流六哥仙　文屋康秀」（子供野に遊ぶ圖）

ふくからに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしさはいふらん

△石川豊雅畫

第七、重政、政演の部

○「やつし八景　三井晩鐘」（中判錦）（子供むれて、風鈴をうつ。）

△重政畫

おもふそのあかつきちぎるはじめぞとまつきくみ井の山あひのかね

第八、清長の部

○「六歌仙幼遊　文屋康秀」（小判錦）（美人文使ひ。露の插れな子供指さす。）

ふくからに秋の草木の………。

△勝川春山畫

○萩の玉川　（小錦）（二美人、子供を遊ばす。）

あすもこむ野路の玉川萩こえて色なき浪に月やどりけり

△玉川春水畫

○二美人障子を張る圖　（小錦）

みよし野の山のしら雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

○「耕作十二節　五　苗代」（小錦）（美人と小娘、張物。子供居る。）

△政演（北尾）畫

里とほみつくる山田のみもりすさたてる僧都に身をそ（ふご）□しぬる

○伊勢物語見立（大錦）

しら玉のなにそと人のとひしとき露とこたへて消なましものを

第九、榮之、榮昌の部

△榮之畫

○「六歌仙　遍照」（大判、紫摺）（室内三美人）

おもひつゝぬれはや人の見へつらん夢としりせはさめさらましを

○右の作、寛政元年頃と云。

○「風流略六哥仙」（大錦）（美人冠をさし出す。）

文屋康秀　吹からに秋の草木の…………。

○右、寛政六年の作と云。

○「子　貝」（間錦）（宮参り美人。）

第十、初代豊國の部

○「美人七小町」の内、「玉屋内玉菊」（大錦）（玉菊、文かく圖。）

おもかげのかはらでとしのつもれかしたとへ命にかきりあるとも

○「座敷八景　燭臺夕照」（中判、錦）

やまの端に入日のかけはほのくらきひかりをゆづる宿のともし火

伊勢のうみきよきなきさに駒とめて都のつとに子貝ひろわむ

○源氏繪三枚續、井筒（大錦三枚）

（右）月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとの身にして

（中）筒井つゝ

（左）くらへこしふりわけ髮の

△榮昌（榮之門人）畫

○「調布玉川」（駒とだけ、美人の坐姿。上に短冊形ありて、中に左の歌。）

調布やさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉川のさと

○右、寛政六七年頃の畫と云。

○「今様娘七小町　草紙洗小まち」（大錦）

まかなくに何をたねとてうき草のなみのうね〳〵おひしきるらん

○右、文化六七年頃の畫。

松風の音たに秋はさひしきに衣うつなり玉川の里　路考書

○「役者地顔六玉川　擣衣玉川」

（全身、右むき。煙管を手にす。）

【其　他】

其他の畫家に就ていふと、やゝ古い所で、長喜畫の「和歌三神扇合」のやうに歌を短冊形にして小さく上に現はした物など、凡ての畫家に大抵は共通で、殆ど枚擧に遑ないといつてよい。北齋では、例の横繪續物の「百人一首」の類、畫に此の歌頗る多い。國貞（後の三代豐國）、廣重、國芳の輩、また「百人一首」物に、見立人物に添へた歌、頗る多い。三代豐國、國芳、廣重（初代）の連作の「擬百人一首」や、また二代豐國（後素亭）の青樓美人畫に、この百人一首の趣向を借り、その歌を上に示せる物もまた。三十六歌撰の類も同じく然りである。六玉川の傳習も中々止まない。殊に同じ版畫でも、短冊繪類にまた多作した廣重（初代）の如きには、此の六玉川其他が、極めて多い。一々此等を拾つてゐると、限りがない。此等末期の諸作家についていふと、「見立百人一首」類を除き、また初代廣重一個が、古歌の應用、最も多い。「金澤八景」（横繪大判）。「近江八景」（中判竪、若がき）の類には、此の歌が畫面の風致を添へて、床しく應用されてゐる。やはり風景畫家としての、彼の一個の風韻ともいへよう。（同時に、狂歌の應用も多い。然し概觀的にいふと、狂歌の應用は、——廣重にあつては——江戸名所物に多く、歌の應用は、諸國名所物に多いとも謂へよう。）

英泉（池田氏）にあつては、百人一首物もなければ、さりとて他の歌應用も余り見受けない。彼には、こんな物を必要しない程、美人描寫の心に燃犀してゐたのかも知れぬ。「俺はそんな景

品はいらぬよ。どうでい、此の女の眼を見てくれ。睫毛の震へを見てくれ」といやに氣取つてゐたかのやうに思はれる。

借、以上で、一先づ歌の結びとする。

○狂歌の部

狂歌は、餘り昔にはない。勿論、江戸に於ける狂歌の一般的嗜好は、蜀山人前後であつたらう。その通り、此の浮世繪の狂歌應用程度も、大抵この寛政期頃からである。以前にないこともないが、その程度の多いのは、である。從つて、歌麿以後に多いのである。（尚摺物書に、此の狂歌の賛様が多いことは論を俟たない。摺物發生の原由からいうても、これは當然な事のやう考へられる。今、此類は略いておく。）例外として、春信の左掲、「七福神」の如きがある。

一、鈴木春信の部

○「浮世七福神」の内、辨天（中判）
（瀬川菊之丞の似顔若衆と、松葉屋内染之助の似顔辨天。）
（各、似顔は、上に吊した提灯によつて知られる。）

神かけてれかひまいらせそろ〳〵とすゞしめたまへあ

はやふりそて

○同、壽老人（同）（美女に足袋を穿かする壽老人。）

まれかれとしかさの子のふり袖にうかれたらふ壽老人かな

二、歌麿（初代）の部

○「琴棊書畫」の三枚續（大錦三枚）

琴　おもしろや峯の松風かよふ神ひさ手かきなす間の爪音　紀長人

畫　むた書の繪は手習の□□ものか山水天狗筆とりて見

ろ　千客萬來

暮春園巷　打ちらす口は花ながらゆく春をさむる手のなきせきそつらけれ　橘打枝

○右、畫は、歌麿自身を指せるにや。此等の狂歌、凡て短册形の中にあり。

○「高島屋おひさ」（大錦、雲母摺）

愛敬に茶もこほれつゝさめにけりよいはつ夢のたかしまやさて　唐花忠紋

○松原、富士の遠望（横大錦カ）（敷美人。駕籠の中、美男。）

天のはころもいくかへりするかのくにゝすみさけを樂さかいへるやとりのあるし瀧麿ぬしを

羽衣の酒をたのしむざれ哥はあづまあそびのするがまひさち　四方赤良

珠流河二十町酒樂齋のあるにわか大人の門に入てたはれ哥よめるさきゝて文のたよりにつかはしける　つぶりの光

たはれ哥これもなか〳〵氣のくすりもさめはのぼれ蓬萊のやま　宿屋飯盛

たはれうたするがさいくのたけ高くさてもあみたりよくつゝりたり

○「南國美人合」（團扇持美人）

客のみか風もたへせぬ袖ヶ浦此すみかこそすゝしかりけり　眞顔

○大首美人（大錦）（井出の玉川の扇面を上におけるもの。）

よし原に客は心の駒とめて玉河はさにちらす山吹　坂月亭徽良

○莨呑太夫（同）（口から出た煙の線の見ゆるもの上に扇地紙短册、その短册に。）

毒の玉河さ見ゆれさわすれては又濳いつろさんや堀詮　巴人亭光

○「六玉川」の內、上﨟見立太夫（大錦）

玉河の里さこそみめ居つゞけのきやくはれんじに晒手巾　貫庵則取

○「六玉川　扇屋內花扇」（大錦）（生花の圖）

山吹のこかれを風にちらしぬるその玉河の井手の大じん　貫庵則奴

○「扇屋內　花扇」（大錦）（短册と筆もてる美人。）

のせられて見る朝貞の花あふき人の心の秋の來されは　柳原向

○「玉屋內　まき絹」（同）

はりのあな名は糸によるまききぬの織あけて見れはうつくしき哉　蕎林亭

○卷絹と藝者（同、黄摺）（下に藝者三味線、上に卷絹、後に禿。）

はりのあな名は糸によるまききぬの織あけて見れはうつくしき哉　蓄林亭

○「江戸町一丁目　玉屋內若梅」（同）

白むくの雪のうちより咲いでゝ名もかうばしき若梅の花　蜂両江

三、春英、政美、俊滿、榮昌の部

○中村傳九郎死繪（細繪、錦）

舞臺も今はめひさの夜の鶴、名のみ此世にのこるおもかげ

△春英畫

△政美畫

○柳さ男女（大錦カ）（娘、男に抱上げられ、柳を手折らうとする。女、緣臺にゐる。）

ながながさ柳の糸のみたれ髮結ぶ人あれはさそ風もあり

（右）路考の詩。

（中）花道つらね　もの云はぬ花の口わされぢ上戸川のおもさへもとゝいろの春

（左）句を載せたり。曰く、

さそふ水あらばきみがもさにいかんこさなれがふ　さかつきのながれて花の行衛哉　酒子

△榮昌畫

○「靜玉やしつか」（大錦）（二人全身美人。）

おもふさちつめりしあさゝかきつばた世にむつましき花にそ有ける　吾友軒米人

△窪俊滿畫

○桃林盃流し（大錦三枚續）（美女數人、中央に若侍。）

四、初代豐國の部

○役者繪　助六（大錦）

市川の家の素袍は寒紅梅幾千代までも殘る助六　元祖市川海老藏

○七福神見立美人（三枚續大錦）（各々七福神の歌あり、中、その一）

一つをもしらは十をもしるべしわらべを友にあそふ神

皆（有落）

○机に凭る遊女（大錦）（机に對ひ、短册をおき、筆をもち案ずる美人。）

はりつよきつるもつ藤のこむらさき松の位のでつへんに咲　狂歌堂　四方眞顔

五、國丸の部

○琴碁書畫の內　琴（四枚大錦の內）

うつくしきすがたを花さみや川の櫻につなぐ春の駒下駄　京山

○右、恐らくは、古市牛車樓（備前屋）の自版ものならんか。

六、國直、國芳の部

△國直畫

○「雪月花」の內、花（大錦）（「げいしや」を描けるもの。）

寐てませさいふた夜すがら起て見る花に果報は有明の月

△國芳畫

七、廣重（初代）の部

【初代廣重あたりも、また此の狂歌の應用、多い。大錦版、短册繪版、其他とり／＼。今その二三を擧げて、一斑と爲すのみ。】

○「四季江都名所　夏　兩國之月」（中判短册）

○遊女と禿、綾とり遊びの圖（間錦）

いりあひをしらぬくるわの櫻かもうき／＼ぬく／＼のかへり風あり　四方部眞顔

○百花園三枚續の中（大錦）

げいしや　百草の中にも涙の月にたちて露の玉ちる風の穗すゝき　能外亭織升

（國芳畫には、勿論此の狂歌を賛にしたる畫樣、他に所見多し、美人畫風景畫とも。今その中の一。）

○「東都富士見三十六景　昌平坂の遠景」（横大錦）

道艸の道の左りは駿河臺ふじはむかふに笑ふ春の日　應賀門人　万花亭應山

橋のうへ人かきわけてのぞきけりからくり花火あくろ両こく

○「江戸近郊八景」の内　（大錦橫）

△「玉川秋月」　（一枚）

いつまでも見む入方の山つくろちりたにすへぬ玉川の月　生花齋

國分寺布日瓦はまつたくて光くたくろ玉川の月　△松乃亭片葉

大江戸の水際たちて照月の雪の白布さらす玉川　養老人濯成

△吾妻杜夜雨　（同）

石となる楠の根よりや出つらんあつまの杜の夜の雨かな　藤乃亭二字守

柳しま柳のみのたかりてましあつまの森の夜半の春雨　水月堂

ﾅきここは何か吾妻の神垣た百度もめくろ夜のむら雨　松梅亭商八

○金澤八景　内川暮雪　（同）

木蔭なく松わむもれてくろとさもいさしら雪のみなさ江のそら

○同　小泉夜雨　（同）

かちまくらさまもろ雨も袖かけてなみたふろ江の昔なそおもふ

×

結びとして浮世繪に現れた歌・狂歌の概觀を述べておく。先づ歌。

歌は、春信前後に、特に春信に最も多いやうである。（但し以前に於ても、西村重長の細繪判、紅繪の、美人三副對小野小町右の、「花の色はうつりにけりな……」の類もあるが。）其後に於ては、榮之に比較的多い。春信といひ、榮之といひやはりクラシックな、高雅な氣分を感じさせられる畫家だけあつて、此の古典の隨一、歌の應用は尤もである。春信、榮之、其他前列擧によりて分る如く、概して美人畫に多い。役者繪は少く、（役者繪は寧ろ句を應用）純風景畫は、その發生の時期と同じく、廣重前後である。さうしてそれは、概ね畫中美人の情緒、男女の光

景に作奏して相當の效果を擧げてゐるもので、多くは古歌である。その古歌の中、百人一首、三十六歌仙、六玉川、七小町の類が優位を占める。さうして此の見立小町、見立六玉川、三十六歌仙(或は六歌仙)の類が更に進歩又は俗化して、後世のあの豊國(三代)や國芳廣重などの見立繪となつたのである。即ち此の初中期の、古歌應用の美人畫類は、後世のあの絢爛たる見立繪の先例ともいはばいはれよう。が概して、此の見立繪としての古歌の應用ではなく、唯、賛として作奏物としての古歌の應用は、とりわけ春信及其の系統に多いと謂うてよい。春信の中判、美男女を描いたその上の雲形の中にものせる古歌は、凡て涙ぐましい程我らを幽深纖麗な境に引入れる。(例のわ印本には、此の春信――延いては政演あたり――には、此の雲形の中に歌を記したものが多い。)で以後は、概ね、より多く平民的な通俗的な、且つ滑稽洒落味を持つた狂歌、句(狂句ともいふべき)の類を以てしたらしい。但し末期の、擬百人一首、見立百人一首の、畫面と歌との共感力の乏しいあの濫出は、例外とする。

次に狂歌。

狂歌は、前例の如く多く歌麿以後である。一々拾つてゐたら迚も煩しいから、前例もホンの一部分に止めたが。さて畫樣は、美人畫に多い。役者畫も見當りはする。役者繪は、露骨なその畫中役者の讃詞である。美人では、矢張り此の讃詞もあるが、大抵はそれと不離不即の關係にある。風景畫は、例の如く初代廣重あたりである。此に狂歌に就て特に謂ふべきことは、無論その性質發生上既に明瞭な事であるが、歌に比べてこれは殆ど創作であることである。その畫面のみに使用せられたかと思はるゝものである。歌は、古歌の引用で、その作者は、大抵古代の名家で(間々、創作らしいものがあるにはある。それは、該畫家の手すさみか、或は誰か

に頼んだものかゞあるに拘らず、此の狂歌は、該書家當時の狂歌師の作に依つたが多い。さうして此の狂歌は、その畫の製作に方つて、ものされたと思はれる物が勿論多い。即ち、あとから、その畫によつて、（又は同時に）物されたものである。歌の如く、歌が先にあつて、それと畫を強ひて結び付けた苦しい（とも限らぬが）骨折はなかつたのである。さうしてその狂歌は、署名のないものは、大凡そ畫家自らの作か又は誰かに依囑したのである。（然し畫家と雖も、無いことはない。彼等には戯作の才のあつた者もあるし、でないものも、此の畫賛くらゐの狂歌の一つや二つやは、ひねれたものである。）

最後に、尙。思ひなしか、自分は、春信あたりの畫と歌とには、ぴつたり合つた、微妙な高調した興味を感ずるが、歌麿の狂歌と畫とには、畫はいゝが、その賛やうの有署名又は無署名の狂歌は却つて邪魔になつて、無くもがなと思はれるのが多い。以上だけ述べておく。

○附たり、浮世繪版畫と川柳

此の川柳が、狂歌若しくは歌以上に多量にありさうに思はれようが、その實自分の觸目では最も尠い。絶無に近いものだつた。末期の芳幾芳年あたりに、狂句と銘うつたそれはあるが、川柳は無い。その乏しい中から、辛うじて拾つた二個を擧げておく。中一個は多分の缺字である。

○「誹風柳多留」　清長畫　（中判）　（遊女二人緣側、茶屋女房庭に居り迎ひの提灯が下ぐ。）

□こばを・・・・子の・・んといひ　（迎カ）

といふのである。「やまと錦繪」の清長の卷にある繪であるが、此圖、天が切れてゐる爲、以

上の缺字である。此の句は、全体は何といふのであらうか。昨年末、西原柳雨氏に問合せたが不明と云ひ越された。諸君の中で、何とかこれを判じて頂きたい。畫は、天明七年頃の作といふ。（倘、橋口五葉氏の解説には、「清長は同じ題目で、此の外に數種の畫を作つてゐる」とある）

他の一は、

○「誹風柳多留」　春潮畫（大判、黄摺、湯返り二美人。）

美しひうへにも欲をたしなみて

倘、歌、狂歌、川柳の他に勿論、句と詩とにも云ひ及ばねばならぬが、句は、別に（「新小説」大正十五年二月號）載せておいたから、こゝには詩の一例として、風變りなもの、一個を擧げておく。

○見立駕籠昇と客（二美人）　哥麿畫（大錦）（原題は、「近代七才女詩歌」、その内の一枚である。）

留　別

恩情何淺九年好　別恨難レ堪万里身
想見歸レ家口山河　月前相望涙痕新

讃州　井上通女

といふのである。才女の詩に加ふるに、容顏寶珠の如き美女、一幅の好調和である。

補遺——狂歌の中で、春信の七福神で、他を脱した。此に補塡しておく。凡て同題である。福祿壽（寄いでたちの福祿壽と三味を彈く遊里美人）福祿壽三ッの調子にこま〳〵といさも目出度そろふすが〳〵き□布袋（子供をあやす傍に母の美人）三味ならぬ調子にのつて福德をうけ給ふへきてん小僧との□大黑（門松にかゝつた羽子を、俵を踏まへて一美人を肩車にし、取らしてゐる大黑。傍に羽子板持て立つ美女）こざつた〳〵ゑほうはおろか草木までなびく始はあら玉の春□蛭子（柳屋お藤店先に帳面を展げてゐる）淺草のいちふしのこの柳腰にしきゑみすも見され三郎。

「四谷怪談」の根本（ねほん）

最近、大南北の復興で、「四谷怪談」もやかましくいはれるやうになつた。飜刻本も既に數種出てゐる。自分の知つてゐるものでは、左の五種。

一、博文館　續帝國文庫　脚本傑作集上卷　所收　（いろは假名四谷怪談）
二、有朋堂　有朋堂文庫　脚本集下卷　（同）
三、春陽堂　世話狂言傑作集第一卷　（東海道四谷怪談）
四、同　大南北全集第十二卷　（同）
五、聚芳閣　歌舞伎叢書第一　（同）

で、飜刻年次の最も舊いのは、續帝文の脚本傑作集上が、明治三十二年九月二十八日、最も新しいのは、大南北全集第十二の、大正十四年九月廿三日である。從來此の五種の飜刻本の異同を訊かれたり、どれが善本であるかを問はれたりする諸君が多かつた。昨年の「演藝畫報」誌上に、松居松翁氏が、丁度四谷怪談上演當時、自分が參考にせられた爲、此等の異同に就て言及せられてもゐるが、然し直接此の飜刻本に就ては、明かに善否を指してはゐられないやうであつた。（勿論「大南北全集」第十二の出ない以前でもあつた。）で此に、今自分の氣付いてゐる儘を正直に述べておく。即ち前五種の中、第一種第二種は、同系のもの、（寧ろ同種）即ち根本（上方出版の繪本形式刊行臺帳、）の活字本であり、第三種と第四種とは、同樣、唯第三種に脫かした地獄宿「宅悅内」（お袖が、直助に「挑まるゝ處」）を挿入し、完全を期してゐるとの差である。さうして此の第三、第四は、共に初演（江戸）當時の寫本臺帳に據

つたといはれるものである。第五は、これは地獄宿も入つてゐるが、さうして同じく江戸上演の寫本を活字にしたものであるが、初演ではない。校訂者三島霜川氏が卷末にも謂へる如く、「三代目菊五郎の初演本を底本として、やはり三代目の四度目か五度目の、二代目の陽三十郎の伊右衛門、片岡市藏の直助權兵衛の時の臺本を參考として、多少取捨するところがあつた」といふものである。即ち、校訂者の作爲に據る處が多く、初演本ともつかず後演本ともつかぬものである。

根本(ねほん)を活字にした續帝文と有朋堂とは、底本は刋本の根本であつて結局同一であるが、然し活字に現はれた所を見ると、多少の相違(寧ろ有朋堂の削除)がある。帝文本は、根本(ねほん)の本文は、その儘増減なく活字にしてゐるが、有朋堂では、帝文本が禁止に遭つたせゐもあつたか、ところ〴〵猥雜なせりふを略いて、簡にしてゐる。然し両本とも地獄宿は附いてゐる。(帝文本の禁も此の地獄宿の猥せりふが幾分祟つてはゐないか。この邊、初演臺帳系統の、大南北全集本等では、入れてはゐるが、余程斟酌されてゐるらしい。)つまり、有朋堂本は、帝文本の中から猥せりふを省略したといふだけである。即ち此だけの遺憾はあるが、續帝文本が、禁をうけて、同じ帝文本「西鶴全集」よりも更に手に入り難い今日、(「西鶴全集」は、發行より半年位ゐ後の禁。「脚本傑作集」は、發行後間もなくの禁。よりて、西鶴より本が少いのである。)根本の活字本を見ようとすれば、有朋堂文庫の脚本集下に據るの外はない。

上記を要約して、何れが善本であるかを更に謂ふと、即ち根本(ねほん)活字本としては、續帝文本が唯一。初演臺帳の活字本としては、今日、「大南北全集」所收のものが、ある限りの最善本であらう。といふ歸結になるのである。

さて以下本題に入る。

〇

最近、自分は、「四谷怪談」の根本原本、前後十冊を手に入れた。これに據つて帝文本の活字と比較すると、本文は全部其儘である。即ち内容の紹介としては、間然する所ない。が、挿繪等は一切載せてない。尙、口繪の体裁等一切。見較べて旣に氣が付いてゐる自分からは、氣が氣ではない。仍て夫等を遲蒔ながら玆に紹介に及ばうとする所以である。即ち、によりて帝文本又は有朋堂本の缺陷を補足しようとの婆心に外ならぬ。今更珍らしくもないと嗤ひ給ふ勿れ。

いろは假名四谷怪談　前編　五冊

根本の形は御存じでもあらう。凡て半紙本である。此も然りである。前編五冊、共通の表紙である。模樣は、上に菊五郎格子、下、中央に大きく鼠一匹、その尾は左へ刎ねて、題簽の下に隱れ、頭は仰いで菊五郎格子を見上げる樣。格子は薄い墨、鼠は、紅から色と墨との二色。（裏表紙表は、上、格子。下に長い蛇、その尾が、同じく格子に入つてゐる。）題簽は、いろは仮名四谷怪談　一と、ルビーも此儘振つてゐる。（此の両面の意匠、「四谷怪談」の全曲の中核を握つて、面白い。）一の巻だけ、見返し（表紙裏の半面）には、薄墨と代赭との二色摺で、庵室、白張提灯や卒塔婆が見える。上は暗をきかしてボカシの墨。その間に、梅幸の句がある。曰く、「梅幸　霧たつやみゝつかくれつ峯の岩」と。次、巻頭は、例の役人替名、（この替名は、帝文本略く。有朋堂文庫本は、此の根本どほり、替名を載せたり。）その右ふちに、左の口上書がある。

今もあづまの左門町縁をむすぶの願ひをばお岩稻荷の
御利生さうはさに聞し民谷なにがしいろさよくさの
ふた道かけてつまさ小者にぬれ衣を著せて流して
堀の名もかくすさすれごおのづから附まさふたゐ
しつさのいちれん身の毛も彌立雨夜のぞうだん
おしういためにやつす身の與茂七ふうふがなみだ
にてしめるおそでがみさほさへたちまちわかる
造花の仕かけ善にすゝめてあしきを
直助忠臣義士の世界をそのまゝつゞりあはして

とある。（此口上、帝文本有朋堂本共に、欠く。）此の八冊、後に十冊となつたものであらう。次、ヒラキ、口繪極彩色（錦繪摺）、直助權兵衛中村芝翫、民谷伊右衛門市川海老藏、佐藤與茂七尾上菊五郎、三人隱亡堀出會ひの場。下に、魚籠がお岩の顏になりかゝり、それから陰火が立ち上つてゐる。次、同じくヒラキ錦繪摺、小佛小兵へ靈魂尾上菊五郎、小塩田又之丞嵐璃寛、與茂七女房お袖中村富十郎、小佛小兵衛の幽靈が氣味の惡い程、巧みに描かれてゐる。（此の圖、孫兵衛内の段、「四幕目の二」小兵衛の靈が、又之丞に妙薬を屆ける處。）

いろは假名四谷怪談

實錄八冊

次、裏半面、錦繪摺、尾上梅幸部家姿の圖、とある。樂屋の体である。藍摺菊五郎格子の浴衣を着、手拭肩に、菊五郎、手に面を持つてゐる。（お岩の面か）後ろに大きく、骸骨を描いた戸板が立てかけられてゐる。煙草盆、鏡臺見え、上に、肥後米五十俵、梅幸丈江ヒイキ。大幟三本、梅幸丈えとなどある。以下本文第一丁の表。凡て帝文本等に同じ。（冒頭の見出しは、繪本いろは假名四谷怪談卷之壹とある。）

以下插繪解說。（三丁目裏と四丁目表。）お袖店先、直助權兵衛と、喜兵衛、醫者扇彌との出會。例の楊枝

店、□（十一丁目裏十二丁目表）伊右衛門、四ッ谷左門を追ふ處。上に、圓形の中に、お梅と、うばおまきとが見えてゐる。□（十四丁目裏十五丁目表）佐藤與茂七、おくま、橋づめの出逢ひ。背景も中々念入に描いてゐる。）（以上第一卷）（以上、序幕、淺草寺内の場である）（八丁目裏九丁目表）宅悅店先。直助權兵衛。豆絞を鷲抓み、胡座をかいて力む。宅悅立つて頭を掻いてゐる。戸外、與も七とお袖。□（十三丁目表）〔この圖ヒラキ、ナラズ、半面〕左門を伊右衛門暗殺。□（同裏）〔同上〕奥田庄三郎を直助權兵衛虐殺の圖。□（十七丁目裏十八丁目表）お岩、お袖、各々死人にとりつき愁嘆。伊右衛門、權兵衛、非人を片づけてゐる圖。上に三日月、鴉、黒雲の間に群れ飛ぶ。大坂繪とは一概にいへない、陰森な氣分を滲み出してゐる。（以上、第二卷）（以上、序幕の第二、宅悅内の場、及び第三、大川端）（三丁目裏四丁目表）秋山長藏、關口官藏二人して、小兵衛を責めてゐる。伊右衛門指圖の体。□（七丁目裏八丁目表）産後のお岩、子を抱いて、右手、藥を持ち、伊右衛門を見送りをる。伊右衛門の後に例の官藏と長藏がゐる。お岩「お早ふおかゑり被成ませの体。お梅にはうばおまき。□（十一丁目裏十二丁目表）娘おむめ、喜兵衛、其に自害と見せて、伊右衛門に迫つてゐる處。喜兵衛には女房お弓とりつき、伊右衛門の色男は、両方を制してゐる体。（以上、第三卷。）（以上、二幕目の中、一、伊右衛門内の場。二、喜兵衛内の場である。）（四丁目裏五丁目表）お岩、形相變る。手に脱き持つた髪の血が長く、ひつくりかへつた格子の上に滴れる。左、宅悅、脚を逆さにして仆れてゐる處。□（十一丁目裏十二丁目表）伊右衛門、小兵衛を殺す圖。□（十三丁目裏十四丁目表）伊右衛門、誤つてお梅と喜兵衛を殺した處。小兵衛の亡靈現れ、手に赤兒を吊り下げてゐる。伊右衛門、刀を脱いて、驚いてゐる。右、お梅の首、左、衝立の際に、喜兵への首が轉がつてゐる。衝立の蔭に、蛇が首をもたげてゐる。小兵衛の下陰火。此圖、また上乘の出來。（以上、第四卷）（以上、二幕目の中、三、元の伊右衛門の内。四、元の喜兵へ内。）（二丁目裏三丁目表）隱亡堀、喜兵へ女房お弓非人。うばおまき、

守(まもり)を取らうとして、水に陥(はま)つた体。左、堤の上に小兵への親の佛孫兵へ。□(五丁目裏 六丁目表)直助と伊右衛門の出會ひ。直助は腰うたげて煙管を口。伊右衛門は立つて。竿を肩(かた)。□(八丁目裏 九丁目表)戸板返しの處。初代國貞の錦繪には及ばないが、矢張りこれだつて凄い出來。(以上、第五卷)(以上、三幕目、隠亡堀の場。)

いろは假名四谷怪談　後編　五冊

表紙の意匠は、梅の模樣、紅ガラ色の一版摺。花は白ヌキ。表裏とも同じ。(全五冊、此の同じ意匠。題簽は前編に同じ。)

後編第一卷、表紙裏の見返し、寺の屋根見え、手前は堤、二株の櫻、上は花びらの白ヌキ。その中を、後編四ッ谷怪談と、筆太な大字、二重の線であり、その文字のあと代赭。他は藍、草、濃緑等、製版に凝つたもの。下に春梅齋北英の落款がある。次ヒラキ、立派になつた伊右衛門の大小姿。後に折助控へ、傍らに犬。遠見は藪營、上に、時鳥。背景は桔梗や女郎花、萩。線はギコチで拙いが、錦繪摺。次、ヒラキ、右　赤坂傳藏、左　小兵へ女房お花の大首似顔畫。其裏、前編冒頭と全く同樣な、口上と外題、及び役人替名。次、本文第一丁。(五丁目裏 六丁目表)お袖門(かど)さき。戸外、佛孫兵へと孫の治郎吉。□(十一丁目裏 十二丁目表)右手、庭にお袖。上り端に、直助、櫛を持つてゐる。その裾を、盥から出た手が引張つてゐる圖。(以上、後の第一卷)(四幕目、法乘院門前の場、(未完にて、第二に續く。))

――以下次册

寄贈紹介

日本詩歌の体系 兒山信一著

國文學研究叢書の第三編である。序論の他一、無定形詩より一〇唱歌に至り、附錄には日本詩歌系圖がある。重寶ではあるが、概觀といふ規約上已むを得なかつたかも知れぬが自分の見當る限りでは、ちよい〳〵遺漏誤謬があるやうである。就中七、八の俗謠、俗曲に於て。特に謂ふべきは、三二五頁の都々一の起原の如き、矢張り佐々氏說を踏襲してゐられるやうであるが、これは既に「どゝいつぶし根元集」や最近竹山人氏及び小生も驥尾に附して物した「どゝいつ節起原考」などに見えてゐる通り、寛政末、熱田に生れたものである。然し此等は微瑕で、概觀的には凡て首肯し能ひ、体系の名に背かぬものである、（四六判、布裝、本文五〇二頁。東京市赤坂區傳馬町三丁目至文堂。參圓五拾錢）

抄本 胸算用 藤村作編

同編者の「日本永代藏」と同樣、高校用のものとして編せられたといふ。問屋の寛濶女以下平太郎殿まで十四章。頭註の詳細なこと、例の通りである。好教科書。（布裝菊判、七〇頁。七拾錢。發行所、東京市赤坂區傳馬町三丁目、至文堂。）

都市計畫と法制 岡崎早太郎著

第一章都市計畫の意義から第十章土地の收用法及使用まで、細論してゐる。附錄として三十四頁、大阪都市計畫の過去及び將來がある。本論の根據も大阪が主である。所々我々の參考とする事がないでもない。（四六判附共四六八頁。布裝。東京市麹町區内幸町一丁目金港堂。貳圓五拾錢）

小唄研究 湯朝竹山人著

竹山人氏の近業である。第一篇小唄節の家元から第二篇うた澤節と小唄節、第三篇歌澤能六齋と俗謠雜著などから第九篇都々一節文獻一斑、第十篇都々一節一消息、第十一篇清元節と小唄節との交渉。第十二篇三味線禮讃に至る。大抵「うた澤」や「清元研究」や「新舊時代」などに嘗て載せられたものであるが、斯うやつて纏まつてみると、興趣並に裨益は深い。就中、好必讀文字は、第一篇の小唄節の家元であらう。最近、名古屋にも小唄の趣味會が出來て、自分も其の報條を賴まれたりして、熱意贊同してゐるが、さうした人々にも、此の「小唄節の家元」は、大に參考にならう記事である。其他概して氏の忠實な文獻あさりと諸家筆錄の編集とである。自分は、此の同一紹介欄に、一は、兒山氏の「日本詩歌の体系」を述べ、一は此の書に關して謂ふを、廣く音曲界より嬉しい機緣に思ふ。最近、此本と前後して斑山氏の「日本歌謠史」も出でた。益々此種文獻の重層に、力強く思ふ。が特に親昵の交誼上といふべきではないが、此の「小唄研究」を大方に奬めたい。（貳圓、紙裝、四六判三二〇頁余。東京市小石川區表町百九、アルス）

古今風流譚（能勢久一郎著、文化住宅研究會。拾貳錢）□暖爐の話（同。同。同）□書物禮讃（三）□文章往來（一）□新小說（一月號）□書誌（二）□愛書趣味（二）□早稲田文學（明治文學興隆期號）□歌舞伎（二ノ一）□新舊時代（一ノ十）□國學院雜誌（新年號）□清元研究（六、七）

著者より

新年お目出度う。然しこれは既に舊い。が扨自分には尚お目出度がある。最近（本月、五日朝）妻が産した。別に不思議でもないが、今度こそ硬派でした、曰く男兒。五人目で男でしたのです。是迄四人の女子にはうんざりしました。（然しその中の二人は欠けてゐます）今度の子は一兒懸命に育てたいと思ふ。□こんな事にかまけく、それに他の原稿をせつかれたりして軟派叢書の原稿整理も愈々遲れた。然し第五編は、活版屋諸君の豫定を狂はさぬ限り、二月中旬に製本されよう。御待ちは願ひたい。□内容裏面廣告の通り□裏面廣告には、尚一項。「音曲と歌舞伎」の發行計畫を披露しましたが、其通り是非實現したい。數に滿たなければ中止。諸君の奮發助を冀ふ。□洒落本集成の原稿も續々出來上りつゝある。□最近著の「浮世繪と硬派」はお蔭で六版を重ねました。然し荊妻未だ臥床のため、多忙は此上なく候。（一月二十四日夜）

定價表

一冊廿五錢	郵税貳錢	
六冊分	壹圓四拾錢	税共
十二冊分同	貳圓八拾錢	

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

大正十五年二月四日印刷
大正十五年二月六日發行 （貳拾五錢）

名古屋市東區東新道東新町百五十七番地
編輯兼發行者 尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者 英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所 扶桑社

名古屋市東區東新道東町一五七番地
發行所 江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

●搜しもの。鏡花全集編輯の濱野英二氏からの依賴で、最近色々材料を整へてあげた。中に流石の私及び知友たちでもどうにもならないのは、明治廿七年の「幼年雜誌」（博文館）に現れた「大和心」である。知れない〳〵。天下の鏡化ファン諸氏、何とかして搜し出されないだらうか。至囑。

大正十五年三月二日印刷納本
大正十五年三月五日發行

貳編第十二册（通編第四十二册）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十二册（通編第四十二册）

文本

「四谷怪談」の根本（完）
豆男の黄表紙
風來山人の僞作
美人大首畫目錄
豊後節語物集六種段目（上）
四代目澤村四郎五郎聞書

四代目澤村四郎五郎聞書

最近所用あつて、此の澤村四郎五郎四代を調べた。四郎五郎襲名以後は殆ど名古屋になり、且晩年と終焉も名古屋であるに拘らず、其の一生は頗る捕捉に困難を感じた。幸ひ自分が名古屋新聞二月十三日に寄せた捜索願の要領に據つて、諸方から斷片的に集つた、及び友人達の遺族知己踏査の結果とを綜合して左の如きを得た。無論明治末期に死歿した、旅役者ではあるが、經歴面白く、(案外にである)且つ一部の劇界資料にもと、本著餘白に掲げておく。(尾崎生。二月二十二日記)

○四代目澤村四郎五郎傳

四代目四郎五郎は、實姓名西尾多吉（本姓は代田(だい)、大阪生れである。原籍大阪市南區難波新地十四番町とある。實父は代田岩吉、その五男である。生時文久二年八月十六日。大阪において何歳頃か、先代實川延若の弟子となり實川雁五郎と名のつた。明治十九年以前、名古屋に來り、四代目助高屋高助（記錄によれば、高助は、十八年十月頃より滯名、十九年二月二日客死、彼の墓は現に名古屋熱田にある。）「再弟子入り、明治十九年、少くとも高助死亡以前即ち一月の名古屋新守座興行に於て、澤村四郎五郎の襲名披露をした。時に二十五歳。時の藝題は、「嶋爲朝八丈嶋」で。助高屋が爲朝、四郎五郎は代官左太夫を演じたと。「青年時頗る天才的であつた」と謂へる。此の四郎五郎の名は三代目宗十郎及初代助高屋高助共に名乘り、殆ど宗家の別名の如くであつた、此の名を年少の彼が襲ぐに至つたのは、そこに技倆拔群の点もあつたらう。以後主に名古屋の劇場寶生座、新守座等に出演してゐたが、同期俳優の先代中山喜樂の媒介で同じく役者嵐（一に實川）三之助の養子となりその女西尾みつ方に入夫。戸籍面では明治二十七年四月十六日、然し内縁關係はその以前古しといふ。當時俳優としての位置は、座頭格とまで行かず、モタレ又は中役であつた。當時、妻の實父母即ち舅姑は健在であつた。西尾光藏、同はぎの（光藏即ち前に謂うた嵐三之助であつて是も役者、先代延若の弟子、後實川延之丞といふ。女形役者、本姓不詳、淡路生れ、四才にて尾張犬山藩の長谷川家に養子となり、同家にて妻を迎へ一男を生み、後離縁、後妾たりし西尾はぎの方へ入夫、西尾を名乘る。以前既に四郎五郎妻みつ女生れてゐた。畢竟、四郎五郎とは、同門、後、父子の間柄といふ譯也「しかも養父の三之助（光藏）も養子の四郎五郎（多吉）も共に役者にして共に入婿たる奇なり。」但し光藏夫婦は、以前より別居、伊勢山町五九、六〇番地（東別院南）にゐた、若夫婦は、門前町大光院裏に住んでゐた。此頃四郎五郎夫婦は幼女を他より貰ひうけ、養女同樣にしてゐた。（此養女入籍なし、榊原姓。現在養子兵三氏を迎へ、東川端町に現存。四十二三歳）明治二十九年頃四郎五郎は大光院裏の家を疊み、舅姑の家に同居、間もなく貰ひ娘を舅姑に預け、夫婦にて上京、以後明治三十七年八月、養父危篤の招電ある迄、東京にて興行、主に市川才三郎と一座。養父死亡前十日程に歸名、養父は、同年八月廿五日死亡、以後姑と夫婦、養娘と伊勢山町以前の處に同居。同年間もなく名古屋末廣座の座付俳優となり、市内劇場、縣下及び近縣、又は北海道札幌、仙臺、秋田などを巡業した。其頃は既に妻みつ女は耳を病ひ聾同樣となり、從つて此の巡業には同伴しなかつた。四郎五郎、明治四十三年頃肺を病み病狀漸進、四十四年頃は、偶々出場するも一役くらい受持、間々舞臺で血を吐いたといふ最後愛知病院に入院、十日程にて死亡（即ち同年四月二日死、享年五十歳、東橋町崇覺寺西尾家墓地に骨を埋む。（光藏も同處。晩年は窮迫甚しく、最後の入院費用にも窮した程であつたと云。辭世東風寒うなりて梅は散つてゆく――。法名、釋良譽信士。此頃、貰娘は既に別居してあらず、未亡人みつ女、按摩職業を同居人におき生活（從前通りの伊勢山町六九、七〇）、大正三年二月六日には實母はぎが死亡した（晩年異母兄の岩倉町住、長谷川房次郎氏（この長谷川氏は、みつの實父西尾光藏（三之助）の先養子先。その出生子）の介抱をうけ、大正十三年九月十一日名古屋にて死。法名釋尼妙滿。（みつ女は、四郎五郎より歳の年長。即ち文久元年十一月二十四日生。因みに四郎五郎養母はぎ（みつ實母）は天保三年正月二十二日生）長谷川氏方は提灯屋業である。この長谷川房次郎氏の二男又三郎氏、西尾家を襲ぎ、光藏四郎五郎らの位牌を守る。即ち此の又三郎氏は、四郎五郎妻のみつとは、叔

（裏表紙裏へ）

「四谷怪談」の根本（續）

（三丁目裏四丁目表）お袖、洗濯。戸内、宅悦に揉ませてゐる直助。□（七丁目裏八丁目表）お袖を口説く直助。（少々あぶない畫樣。）□（十三丁目裏十四丁目表）庭先、お袖と直助。門前、與茂七、訪ひよる圖。（以上、後編第二卷。）（以上、第四幕目の一、法乘院門前の場、全終り。）

（三丁目裏四丁目表）婆おくまと、佛孫兵へとの間に挾まり、止めをるお花。泣いてゐる治郎吉。□（九丁目裏十丁目表）孫兵衞方に厄介になつてゐる小塩田又之丞、赤坂傳藏と對面。□（十四丁目裏十五丁目表）又之丞に、小兵への亡靈、妙藥ソウキセイを屆けに來た處。（以上、後編第三卷）。（以上、四幕目の二、孫兵衞内、終。）

（二丁目裏三丁目表）慘殺されたお袖を挾んで、右、遺書を持つた與茂七と、左、太刀を振上げてゐる直助。□（九丁目裏十丁目表）一軒家の体、お岩の大きな顏の亡靈。伊右衞門、太刀を拔いてゐる。□（十三丁目裏十四丁目表）伊右衞門狂亂。止めてゐる近藤源四郎其他。（以上、後の第四卷）（以上、第四幕の三、直助内。第五幕（大詰）の第一、一軒家。第二、蛇山庵室（未完）。）

（二丁目裏三丁目表）お岩の死靈と伊右衞門□（七丁目裏八丁目表）右、雪模樣の輪廓内に、百萬遍の講中と眞中に苦んでゐる母おくま。左、戸口の暗に、蹲ばつてゐるお岩の死靈。此圖も上乘。お岩の死靈よし。□（十一丁目裏十二丁目表）伊右衞門をとり卷いた面々。右から又之丞、佛孫兵へ、お花、治郎吉。左、與茂七、傳藏。（以上、後の第五卷終）（以上、大詰の第二、蛇山庵室の場（續き）、第三、深川回向院寺内の場。）

尙、畫樣に就て尙いふと、口繪を除き插繪の分は、凡て墨摺。口繪插繪とも春梅齋北英（北齋派）の畫である。尙此本の板行、前編五冊は、奥附に據れば、天保五歲午仲秋。後編五冊は

天保六乙未孟春。共に大坂河内屋太助版である。（が、「和布苅神事」など同様、尾の松屋、京の鉛屋と合梓の意も奥附にある。）

以上の内、挿繪は、上乘の作と思はるゝものは餘り深刻で載せられないし、他は餘りに平凡である。迷うた擧句、こゝには略くことゝした。尙、前後とも第五卷には、當時河内屋から既出版に拘る根本數十種の目錄、及び他劇書の廣告及び説明があるが、此の中、根本刊行目錄は、これ以後の分も加へて、畫家別年代順に分類せられたものが曾て坪内博士の旣著にある。（「少年時に觀た歌舞伎の追憶」）唯、幸ひの機會であるから、劇書の部分のみ左に拔書きしておかう。全部「四谷怪談」後編第五卷の卷末に據つたものである。（解説めいたものは、其の本の廣告文であつて、要略である。）

三都俳優ますかゞみ 三ケ津歌舞妓古今役者のあたり狂言の像を似良正寫しにす、尤役者似顔を書初し松好齋を始め、流光齋芦國の畫其外當時名人春好齋北洲先生或は曉鐘成柳齋重春春梅齋北英東都歌川國貞大人など似良に妙を得し諸名家の寄合畫にして云々。○八文舍自笑編 諸方好人衆細評 三都役者大評判記 出精嘶 全三冊 顏見世壽品定位付一年中狂言竝に尾張伊勢堺其外諸所歌舞伎狂言の分不洩細評仕り毎年正月二日新版發兌申候。○歌舞伎叢書 考古の書なり 全部十二冊○俳優奇跡考 古今役者名人の一代記狂言の次第 全部八册○戲場訓蒙圖彙 三馬著豊國春英畫 全部五冊（解説略）○俳優訓蒙圖會全部六冊 三ケ津の當時名高き役者の當り狂言の像を似良正寫となし、悉く江湖風流の和歌狂文狂歌發句狂詩等の贊詞を加へたる ○俳優大系圖　全一冊○戲場一覽增補　一冊○俳優用文章 古今名高き役者自筆を多く集む 全一冊○芝居節用集全一冊○松好齋著 戲場案内兩面鏡 古今芝居にかゝはる事を年代記に見立年々二のかはり狂言の外題等又は役者の與廢俳名かへ紋所付手打連中名前芝居の場の名目其外一切 折本一帖〔以下書名と冊數〕○俳優四書全十九冊○梅幸集全一冊○眠子選全二冊○玉乃光全二冊○桐島臺全二冊○一蝶邯鄲枕全一冊○よしを一代記全一冊○市川の流全一冊○璃寛帖全二冊○耳塵集同續集全一冊○芝翫百人一首玉文庫大本全一冊○歌右衛門錦繪姿全二冊〔以下略す。〕

豆男の黃表紙

（京傳の「七色合點」に就て）

榮花男（八文字屋本）を作り直した京傳の黃表紙、寬政四年の「唯心鬼打豆」のある事は、「黃表紙百種」にも收められて、知られた事實である。「榮花男」系統の、隱現自在を得た男が、世間大小內祕事を見て歩く、これは物語として歡迎されさうな筋である。それが京傳の「鬼打豆」になると、稍趣を變へて、單に隱身現身二樣の術に通じるといふのではない、もつと複雜したもの、即ち「鳥獸魚虫の類の魂に入りかはり、其の心を知るものならば、物を憐れむ情をしり身に得の付事もあらん」と、淺草觀音に念じ、觀音より夢にお手の豆を九粒頂き、その豆を一ツづゝ飮むものなれば、其物と魂入れかはるべしといふ靈驗を得て、其の實行に就くのである。此の、物と魂を入れかへる、これが單なる隱現自在とは違つて、複雜化したといふ譯である。

自分は、今此の「唯心鬼打豆」を語らうとしたのではない、其の改題本と稱する享和四年（文化元）版「榮花男二代目七色合點」（同じく京傳作）に就て說かうといふのである。從來諸書目、並びに「黃表紙百種」の校訂者幸堂翁すら、「文化に至り書風を替へ外題を七色合點豆と改めて出せり」（黃表紙百種七三〇頁）とか「唯心鬼打豆の改題」とか單に謂はれてゐるに過ぎぬ。――然るに自分が最近此の改題本と稱する「七色合點」を手にし得るに及んで、鬼打豆と對照すれば、（鬼打豆は、黃表紙百種の飜刻による。）繪そのものゝ對照は出來ないが、文辭と筋とに於て、可なりの異同が發

見された。決して單なる改題本ではない。即ち兩者比較してみると、それ〴〵特長はあるが、七色合點は、鬼打豆を一層通俗化し、興味化して、從來謂はれてゐる一筆庵（英泉）の「夢輔魂膽譚」（中本）との接近の度が、「鬼打豆」よりもひどいと思はれるのである。試みに黄表紙百種本の「鬼打豆」と異同のある、異の點だけを左に例擧してみよう。序からして違ふのである。

口豆にものいへども。背の青豆を知らず。手豆にものかけども。筆豆の拙きを曉さず。豆人形の虚名を貪りて。お手に豆が九ッとかぞへ。豆板の小利に走りて。足に豆を踏いだすは。なべて浮世の豆右衞門にして。豆蟹甲に似せて。穴を掘ることを思はず。うぬぼれの味噌豆を煮に。豆殼を焼がごときとあり。うば玉の黒豆。おさき眞暗にして。ひさかたの空豆に。鉄炮をはなすとも。浮べる雲の福豆。豈福茶の柄杓にあたらんや。隱元豆の禪味をあまんじて。座禪豆の悟をひらき。鬼打豆に心の邪鬼を掃ひて。一生の无事豆をねがふにしかじ。且世の流行は。豆藏の品玉かはるよりも早く。豆と陶鎌で斬よりも速なり。塗箸で豆はさむとも。是をとゞむるとあたはず。流行おくれの此草紙も。若用ひらるゝことあらば。それぞ煎豆に花なるべし。

醒世老人

享和四歳次
甲子春發兌

山東京傳述（巴山人）

（次ギウラ。本文。觀音堂内、觀音樣より笊の豆を貰ひたる豆助。）

〔本文ところ〴〵引例。假名は適宜に漢字とす〕

今は昔、八文字屋豆助といふものありけり。なんでもものに飽き易く、そのくせ慾深き（此邊「鬼打豆」では、年若けれども

至極ふた親に孝行にすなほなる生れつきとある。名も徳太郎）男なりけるか、昔八文字屋の自笑が著はしたる榮花男豆右衛門が身の上の自由なるを羨み、淺草の觀世音へ一七日通夜申しけるに、満ずる夜豆を十一つぶ授かりけり。「昔の豆右衛門と違ひ、わたくしは女嫌ひでござれば女のことは望みござりませぬ」（さうして、數の十一といふのは、觀音の詞によれば、十一めん觀音に象つたといふのである。觀音の詞は其他に於て「鬼打豆」と大差なし。）

次は、鰻屋の店先で、鰻と魂を入れかへるのである。この處、「鬼打豆」と大差なし。唯二人の客を「國元の友達」とあるのが、「くにもの」と變りをる位である。次、半丁、鰻の魂の入つた豆助の体が、橋の欄干から水に入らうとする。それを周章てゝ止めてゐる二人。此邊も「鬼打豆」と筋に於て變りなし、唯、地の文、會話の文、多く違へてはゐる。次、矮狗と魂を入れかへる處であるが、これは場處に於て甚しい相違がある。即ちこれは青樓に於ける事實である。曰く、

「それより豆助すぐに素見と出かけぶらくと美しいやつを眺めありく。

「さてく美しいもの。おれが女嫌ひでもつたものだ。そうないと三百近なくなるせんざだ。

「此ちんのやうなけちなちんはおつせん、げいはなしふんしはわるし、そのくせにいぢはきたなし、いつそ誰でにやつてしまひんしやう。

「豆助、此狆と魂を入かへ、犬がらを愼み言葉に從ひ、樣くの藝をしけるゆゑに、江戸一の狆といはれ、殊に秘藏されけり。（繪は、格子內花魁と狆。外、豆助と按摩。新吉原の体。）

〔次ギ、ヒラキ。遊女部屋の体。花魁、禿、狆、客など〕

「或る狆好きなる客人、女郎よりも此狆に惚れ、女郎に貰ひかけれども、女郎も戀心起りて中く吳れる氣はなかりけり。或時女郎金につまりて此客に無心をいひける時、狆をさへ吳れるなれば三十両やるべしといひければ女郎いよく戀心にてきばり、そつちこつちして、ついに五拾両にて貰ふ筈に手を打ち、さて此五拾両を狆の首玉へくゝりつけて重たがるを見て

獣さみけるが、豆助が魂、此五拾兩が急に欲しくなりて、雲を霞に駈け出し、中田圃へ行きて深田の中へ飛び込み忽ち魂を我がからだへ戻し、すぐさま中田圃へ行きて、狆の死骸を引上げ、五拾兩なしめこの兎にして、飛ぶが如くに逃げ去りけり此時廓の者狆を追かけ來り、色々探しけれども知れず、つひに狆と五拾兩を棒に振つて了ひけり。

「さてものことに百兩つけてごらうじませ。

「そのやうに重たがつてはまづ駈落する氣遣いはないぞ。

「二一天作の五拾兩ぶちくんが一しん、算盤づくでは買はれぬ高い狆だ。

「おもいわん〳〵。

「かあいさうに、さいておやりなんし。（以上原文）

（次ギ、緣側の豆助、猫と魂を入れかへてゐる。友達が借りた金壹兩を持參するが、猫に小判で見向きもせぬ。友だちは、豆助が相手にならぬをいゝ事にして、猫ばゞをきめこんで歸つてゆく。（以上、上卷）

（次ギ、隣の家で、初鰹で諸白、一杯飮まんの仕度最中、飛込んだ猫の豆助は、飯焚男に擲木で敲かれる。次ぎ、向島邊の宗匠の菴室、そこで蛙と魂を入れかへ、俳論。次ギ、秋葉山へ參詣し、猿と魂を入れかへてゐる。と、向ふより知つた人と旅の人と行きあひ、二人が物を言ひかはして、旅の男のいふのを聞けば、「おまへは豆助どのの家を知らぬか」なぜかなら、此頃豆助の叔父が病ひつき、生てる中に遺品分けさしようと、豆助に金五拾兩手渡してくれいと言づかつてきた。處々探したが在處が分らぬ。此の上は、一旦國へ此の金を持つて歸るの外はないというてゐるのである。相手の男は、「私も久しくあはぬが」といふのである。それを聞いてゐた猿の豆助は、手を伸ばさうにも足らず、「あゝ猿猴の手が欲しい、こゝからはほんの水の月だ」といふ處である。

（次ぎ、猿の魂が入つた豆助、路傍桃賣の桃を盗つて、天秤棒でどやされようとしてゐる處。
此邊、狆となるあたりから、鬼打豆とは殆ど異樣である。
（次ぎ、猿となつて木から落ちた豆助、怪我の癒えた後、淺草へんをぶらつき、花鳥茶屋へはいり、鸚鵡と魂を入れかへる。鸚鵡の魂を入れた豆助は、知つてゐる人に出あつた所が、その人のいふ通り鸚鵡返しに喋つて別れる。此邊、「鬼打豆」の鸚鵡の趣向とも異つてゐる。
（豆助の鸚鵡は、役者の聲色、書物の諳誦樣々な事をする。さる御大名、五百兩で買ふ相談整つたが、鸚鵡の豆助は、その五百兩が、一文も自分の物にならぬのを見て、やがて魂を戻す
（次ぎ、せめて一日なりとも大名にと、大名と魂を入れかへる。繪は、向う、大名道中、下駕籠舁に向つて、「身が邸へ連れて行けい。褒美は望み次第」というてゐる大名の魂の入つた豆助。「此きちがひはおつな熱を吐く、中々面白い狂ひだ、どこからうせた。嘲のやうな」といううてゐる駕籠舁。次ぎ、納戸金二千兩を取出して、逃げる計畫をしてゐる豆助の魂の殿。衝立のうしろから、此頃樣子が可笑しいと覗いて警戒をしてゐる近侍。以上、中卷。
以下「下卷を端折つていふと、二千兩を持ち出した殿は、近侍にすぐ見付けられる。仕方なく門外へ一々その封金を投り出す。近侍は驚いて、「無間の鐘の夢でも御覽じましたか」というてゐる。その投つた金は、構への堀へ皆落ちた。魂を入れかへた所が、折ふし豆助の体は遠方にあつたから、息せき此の堀へ來た頃は、既に家來の者が出て、堀から金を拾ひ上げた跡であつた。）
（次ぎ、一度は芝居もやつてみたいと、葺屋町の大當草履打の狂言を見にゆき、お初になつ

てゐる久米三郎と魂を入れかへる。久米三郎の魂の入つた豆助の体は、土間へ落ちたと思つて、頻りと舞臺へ上らうとする。それを芝居の邪魔する者と思ひ、皆が制する。見物は「當り芝居ほど喧嘩の多いもの」と呟いてゐる。

次ぎ、占者(うらなひ)の体に魂を入れかへて、先だつて狆を飼つてゐた花魁の格子先へ來て、占を見る。よく當るので、十二銅を四五十せしめる。次ぎ、占者の魂の入つた豆助に、先途の飛脚が出くはす。故里から言づかつてきた五十両を、知らぬといふのを無理に渡してゆく、豆助が魂を入れ戻した時は、此の五十両は他へやつて、占者のものとなり、折角靑樓で儲けた四五十のおひねりも袂へ入れ忘れてきて、たうとう返す〴〵の損失。

次ぎ、角力場。有名な當時强い角力取りと魂を入れかへ、手もなく負ける。豆助の体に入つた强い角力取りの魂は、散々意氣ばんで、わがからだと知りつゝ、したゝかに負けた自分の体を踏付ける。豆助は苦しくなつて、魂を返す。負けた角力取は、をかしいことゝ、豆助の体を散々打擲する。以上第十三丁うら。(以下二丁分落。)

「鬼打豆」と較べて頂きたい。同想といふ外は、殆ど別物の觀があるのである。さうしてこれらを取入れ、尙若干の切り繼ぎと、創意らしいものも混せて、中本の長篇物にしたのは、例の一筆庵自書作の「魂膽夢輔譚」である。是は、飜刻もあつて、(帝文「滑稽名作集上」其他)よく知られたものである。無論此の夢輔は、此の種の筋を引延して、中本形式に纏め、且つ、猥雜味をもつと加へたものである。が魂の入れ替へ等、趣向は、最初の八文字屋豆右衛門ではなく、此の京傳の豆助を直接踏襲してゐるのである。(夢輔譚は、天保十五年より弘化四年、中本、五編十五卷ものである。)

風來山人の僞作

中本一冊、「世の中善惡かゝみ」といふのがある。見返しには、

風來山人平賀先生著
世の中善惡鑑　完
東都書林　玉養堂梓

とあるが、さて此の善惡鑑、從來風來の著作書目には、さつぱり見かけぬ所のものである。二世風來(森島市齋、竹杖爲輕、源平藤橘、萬象亭等凡て同一人)かとも思はれるが、見返し、右の如くきつぱり平賀先生とあるによつて、矢張り初世風來の積りでゐるらしいことは明かである。ところが、これはまた隨分御念の入つた僞作である。が、僞作にしても何だか餘りに突拍子もなくて、類がないから、問題には多少なるだらうとも思はれる所のものである。先づ序を紹介する。

人善なさは善かならす返る、惡をなせば惡かならすむくふとは、聖のおしへなり、予もまた小冊をつくりて、世のなか善惡かゝみと、なつけて、いさゝか好事の家に、是見よかしのたわことをいふ

頃は心のこまの　ひものゆるめるなか月

風來山人誌

本文は、世の中善惡鑑、風來山人作前　世の中善惡鑑風來山人作後と、二篇となり、其合本である。丁數は、前後を追うて、前が十六丁目迄、後が廿八丁目迄である。外に序の一丁である。さて此の前後二篇の本文が、如何に念の入つた、一寸類の無い(乏しい)僞作であるかは、本文前篇の一二丁分を紹介するから、それを讀まるれば直ちに諒解が出來ようと思ふ。

世の中善惡鑑　　風來山人作前

五重の天守雲に聳へ金の鯱日に耀て朝鮮人さへ馬をとゞめ日本一よか〳〵とゆびさして通りたる事嘘でない本國の繁昌枇杷橋より宮まで三里の間市町軒をつらね行程三箇の津に續たる大都會外にあらはいふて見給へ都といへど海なくして生た魚は見馴ず江戸は水あしくして酒造らす夫をもひとつに聚たる自由尤外より取集て京も江戸も事は欠ねども其他に産するは風味格別にて色をも香をも知る人はしるへし第一米穀天下に勝れ薪は堀川に入船あらそひ木曽のざいもく白鳥に山をなし壚は南野に燒出し陶は瀬戸より運ぶ川魚は西より集り山の物は東北より入るかゝる目出たき城下に遊女町のなきは玉に疵と浮氣人の殘念がれどそれも又有難き國制百何十年終になくて外に曠き夫もなしもともり押出して惡所と號すれば佛なぶりの祖父婆々も後生善處とこそ願へ惡處はねがふ所にあらずまだ云たき自慢もあれどさのみはと口をしめたる袋町筋に大黒屋二俵衞とて商賣は搗米や一に俵積ならべ二に賑やかな見せ付三人の娘を持て世渡りにかしこく明暮の碓ふむ足に味噌とやら次第に内證も暖に成空も彌生の節句過ちかきころ聞ばいかなる好事か千もとの櫻を移し植て八事を花の山となしけるとかや夫終に見ぬも癡人一年の氣延しにと娘ともいざなひてたま〳〵の花見の趣向是は米櫃から駒が出たと供の調市も我を折斗朝はとふから出たれどもめづらしき道草に時を移し山へ着たは晝

の日脚爰かしこと梢を詠れば、（下略）

これは、何處を主題にして作したものであるか、分りましたか。金の鯱で分つたでせう。でも分らなければ、嘘でない本國の繁昌枇杷橋より宮までとある、その宮で思ひ付かれませう。謂ふ迄もなく、これは全部、名古屋の事である。枇杷橋といふのは、正しくは枇杷島橋といふべきであらう。青物市の立つ枇杷島町の西の橋である。もとは名古屋の西隣であつたが、近來は、市と併合して市の西區となつた。宮は現在の南區熱田。「都といへど――」「江戸は水あしくして――」都と江戸との缺點を捉へて、お國自慢に耽つてゐる。こんな風來山人があつたゞらうか。宛然、我鄕よしの態度、風來が名古屋者であるとは勿論、また名古屋に住んだとも、聞かぬ事だ。ほんとに御叮嚀な作である。然しそれにしても、此の僞作は、名古屋の勝手を知つてゐる自分から謂へば、一々正鵠を得てゐる。地理上の事は勿論、風俗上の史實にも、大凡そ此の記述のやうである。以上引いた所に就て、今少しく謂ふなれば、米穀の自慢は、例の尾張米、堀川は、小つぽけな、今では市の糞尿の捌け場になつてゐるが、もとはそれでも兩岸に櫻があつて、風致のあつた、隅田川の三分一程の川。木曾は御承知。白鳥は、堀川の熱田に入つた所。附近に材木町といつた町もある。瀨戶は東春日井郡、例の瀨戶物の元。遊女町がないといふのは、是も事實で、享保十八年頃以來禁ぜられて、後寛政末に、おかめを宮の神戶傳馬に許した事は、諸君が自分の飜刻した小寺玉晁の「ごゞいつぶし根元集」で知らるゝ如しである。袋町、町名である。「八事を花の山となし」。八事は、名古屋の東郊、春秋の散策地。と數へて來ると、何が興味で風來が、こんな名古屋を舞臺にして書いたか。眞赤な僞せ者と云ひたいがそれを一寸控へさせるのは、見返しの風來山人平賀先生著の文字である。殊に名古屋版であることか、東都書林とある。玉養堂といつたやうな書肆は、あらうか。井上和雄氏の書賈集覽を

尋ねてみよう。探したが、無い。愈々正体不明と來る。書き出した序でであるから、本文梗概を一走り書いつけておかう。處々文体筆致が、なる程風來を眞似てゐるなといふ處はある。

二俵衛と娘と調市と、八事の山奥を尋ねてゐると、「竹一村の奥、世にすれたらしき菴あり。門の明たるを幸に内へ入て樣子を見れば主は五十余りとゞら兀たる天窓つき、僧でもなし俗でもなく、夢借舍と額打たる世を遁れし男とは見へたり」其菴を借りて辨當を使ひたいと賴み込むと、主も存外氣さくな性で、中へ呼び入れ、互ひに酒を酌みかはして、その男が勸善懲惡めいた芝居の功德話をする。二俵衛も共鳴する。轉じて二俵衛が願ひによつて、娘に聞かする爲め、女子道の教訓話をしつゞける。いたづらをする女を粹の通り者のといふのは、不義をしかける男の言譯で、傾城茶屋女の身の上の事。堅氣の女房にはあるまじき事といふのである。其の外これに類した長談義が續いて、弱つたのは調市、「勝手の隅に肘枕二寢入程やつて起たれどまだいつ立れそふな氣色もなし窓元見れば彼岸のすへのこりが艾の有を幸ひに丹那の草履の裏にたばこ呑顔して一火見しらせたれど聾はともきかぬこそ道理なれ、さめやらぬ目に取違へ、庵主が草履の裏をこがせし、菴主はなしの内にもゝ尻して、我等常々小便にはかたいが何としてやらけふは頻に立たふ成ますとて二三度も裏へ立しがこれ灸穴のまちがひとは後にそおもひ知られたり」といふのである。

後篇は、雪の日に、伊勢町の座頭古市が來て、さる武家方の堅い叔父が、父の留守中、悴の二人に武士の心懸を說く、それを隣部屋で聞いた話をするのである。前篇後篇とも繪入、話の中に現れる人物の描寫である。唯、前篇のはじめの挿繪、夢借舍の庵の戶を窺る二俵衛と、後につゞく娘二人、辨當を提げ傘を肩にした調市との姿は、挿話以外のものである。描線、凡て拙、北齋派と思はれる。それにしても此の本出版年次不明が殘念である、無論風來の死後であらうとは思ふ。稿成は、古いかも知れぬ。序の「心の駒」は午であらうが、すれば安永三年頃か。其他の類推では、前篇、夢借庵主の物語の中に、「近年靜觀房が下手談義、單朴翁が雜長持輕口のなぐさみ本に仕立、結構成教訓あらゆる世間の人情をつくせしが、女子の訓いまだこまやかならずと日比おもひし事いわでふくれし腹けふは云々。」とある一項である。即ち（當世）下手談義（靜觀房）は、寶曆二年東都版、大本五冊である。

美人大首畫目錄

「浮世繪美人大首畫の研究」を思ひ立ち、左に示すは、今日迄纏つた大首美人の目錄である、參考の部として役者大首繪の代表作を擧げておく。未定稿ではあるが是を發表する所以は、諸賢の是正補遺を得て、より完全に近からしめいと所冀しての事である。不日、此の目錄を完成し、附圖百數個を添へ、概說を附し、春陽堂から公刊の筈である。

畫家別 美人大首繪目錄（畫の順序は、姑く年代に據らず。）

○歌麿之部

●辻君（正銘哥麿筆と落款あるもの。）●玉屋內花紫（「青樓七小町」の內。文書く、筆を口に銜ふ。）●「青樓七小町」の內（大文字屋多賀袖。煙管をくはへ、左向き）●同（霧屋篠原）●六玉川の內、上臈見立太夫（准大首）●書いた文を口で切らうとしてゐる美人。（大錦）●（半身に近く）富本豊ひな（左向き、文をよむ。雲母摺）●鏡面に映る顏。（「姿見七人化粧」の內、雲母摺。）●「六玉川」の內、井出の玉川（左向き美人。背景カラ摺）●「名所腰掛八景」の內（両手を頭、櫛を挿す圖。雲母摺）●「同」の內（俯ける顏。こゝろある笑顏見せけり福壽艸と賛あるもの。）●「同」、大首茶臺持美人（右むき。）●（半身）扇屋內花扇、（のせられて見せ□□良（がほ）の花あふき人の心に秋の來たれば 柳原向とありて、極印あるもの）●「高名美人六家撰」の內、富本豊ひな（扇持ち、右むき美人）●子供と美人（裸体の子供を抱けるもの。淺黃摺）●井出の玉川（よし原に客は心の駒とめて玉

川ほとにちらす山吹、坂月亭數良の短冊と、井出の玉川の扇面を上にものしたもの。大首）●千鳥の玉川六玉川物の一。）右向きの大首。（右手で上衣を抓む。）●「高名美人六家撰」（難波やおきた、茶を出す處。）●「當時全盛美人揃」の内、玉屋内しつか（半身。筆を銜へ、文を書ける處。）●山姥（山姥、左向き伏目、金太郎吸ひながら左向き。右手にて母の左乳をいろふ。（尚、山姥、此種の構圖多少の異同ありて尚多し。））●「五人美人愛敬鏡」の内、かつらや□□。（左向き文よむ。大首也）●「同」の内（松葉屋染川。正銘哥麿筆と落欵あり。團扇持美人）●「同」（富本いづみと左の上の輪廓内模様によりて判讀せらるゝもの。）〔團扇持美人、鼠摺〕●湯上り「乳あらは、左手を袖に入れたまゝ耳許にもてゆく。右手は中より腹へ。●二人美人（「青樓遊君合鏡」の内、松葉屋内染之助、喜瀬川。役者の二人半身の如き

感じ）●「北國五色墨」の内、（お守と乳と見ゆるもの。寛政六年頃の作と云。）「同」の内、「てつぽう」（「あぶな繪畫集」に載せたるもの。）●難波屋おきた（大錦、左むき、盆の上茶を載せて持つ。雲母摺）●子供を抱ける美人（美人の顔は左向き、背に團扇見ゆ。）●娘（雲母摺。袖に入れたまゝ右手を一寸上げてゐる。左向きの顔。）●湯上り太夫（雲母摺。手拭を口に啣ふ）●當世名茶八人美人（黄摺大錦。一枚を上下左右、八ッに仕切れるもの。松が枝の蔦。難波のよし。三浦のはま。家竹のすゝしめ。梅が枝にうくゐす。篠はらのすゝき。住の江岸の松。川邊のつた。と八人。）●「當時三美人」。（雲母摺。富本豊ひな。難波屋おきた。高しまおひさ。）●團扇持美人（眞平の大首也。右手を髱の邊に上ぐ。若狹屋版。）●藝國と印（左向き、あごに右手。）●西驛た印（左手を

右の襟もと。右むき）●（半身）高島おひさ（右むき、團扇を持つ。雲母摺）●（同）難波屋おきた（左向き。雲母摺）●大文字屋一もと（鼠摺。右向ける顔。乳ほの見ゆ。左の袖を口によす）●葛吞太夫（口から出た煙草の煙の線も見ゆるもの。上に扇地紙。短冊ありて、毒の玉河と見ゆれどわすれては又濟いつる山谷堀かな巴人亭光の狂歌あり。六玉川の一也）●手拭を銜へたる美人（大首らしき大首。雲母摺）●「當世女風俗通、上品の女房」（大々首。扇持美人）●「同、中品の女房」（同、湯上り仰ぎ目洗ひ髪、毛彫精細を極むるもの）●同、下品の女房（針に糸をとほす女）●難波屋おきたと瀬川菊之丞（二人美女風。上がおきた。）（間判錦繪）●「婦人人相十品」の内、（相観歌麿考書とあるもの。寛政二三年頃と云。竪大判雲母摺錦繪。傘持御殿女中式美人。）●（半身）「婦女人相十品」の内、（相観歌麿考書。雲母摺。藍地、葛吞美人。乳あらは也。）●同、（文見る女房、相観……あり。雲母摺）●「婦人相學拾躰」の内、鐵漿付美人（「此相至て情ふかく心にゆだんなく萬事に行わたりてつゝしみふかきとつれなり」とあるもの。）「同」の内、（「にふわにして心あくまてやさしくなさけもつともふかし風に□たるゝ柳水にしたがふうき草のごとし。」とあるもの。鼠摺煙管持美人で、乳あらは、右向きのものである。）●同、（面白さう。鏡を手にもち、打見る左向きの顔。雲母摺）●同、文を差上げて讀む、眉ある若女房（准大首、此□つゝしみふかくまたいちつよくやぼならぬ相なりみかたにとつては女壹疋なるべしとあるもの。）●「同」の内、（「浮氣のさう」、相見歌麿とある雲母摺。手拭持の美人、但し半身に近し。」）●同、（鶴屋版。顔剃美人。准大首。）●「木挽丁新やしき、小伊勢屋おちゑ」（雲母摺。歌麿畫と落款す。本を見る美人極初期のもの。天明八年頃の作かといふ。此圖、雲母摺の創始ともいはる。）●踊子揃の内

（天明頃の作と云ふ。「錦繪」第三十號。）●「南國美人合」の内（團扇持美人。寛政七八年頃）●「丁字屋雛鶴、唐琴」二美人（松安版）

○春潮の部

●小野川と高島屋おひさ（小野川は上。黄摺）●高しまおひさ（雲母摺團扇にて口をかくす左向き）●鏡中の高しまおひさ（眞に大首）●あふきや花扇（左向き美人）●谷風となにはやおきた（二人の大首。）●谷風、なにはやおきた（おきた右上。谷風、左下）（谷風、手に茶碗をもてるもの。前圖とは異る。）●淺草三美女（中、蔦やおよし。右堺やおそで。左、柳屋おふじ）

○菊麿（歌麿門人）と石上と長喜

●菊麿畫。（松葉屋内粧ひ、松村）（長錦）●樹下石上畫（松葉屋内市川。）（同判）●長喜畫（大阪新町東扇屋つかさ太夫。右むきの貞）

○榮之の部

●櫻花持美人（「略花六家撰」の内）●見立橋さくら、（扇や橋立。煙管をもてる美人。上に櫻のつらなり）●瀧川花魁（大錦。寛政頃。但し此の花魁は天明頃最も流行せしと云ふ。）

○榮鳥（榮之門人カ）の部

●青樓美人合、五明樓文越（雲母摺）●同、角玉屋玉菊。

○榮水の部

●「美人五節句」の内、（扇屋内花人。寛政十年頃と云ふ）●丁字屋内唐琴（右手盃、左に菊の花に俯ける顔。）●兵庫屋内月岡（俯ける美人、挿菊）●松葉や喜瀨川（扇もち美人左向き）

○榮昌の部

●鶴屋篠原（大錦）●「青樓四季美人合」の内、（雲母摺、角玉屋小紫。）●「廓中美人競」（笹屋春日野、湯上り、右むき美人。淺黄摺。）●「同」、（靜玉屋靜、右向き、左手に煙管。）●「同」（丁子屋雛鶴。人形を手にす。寛政十年頃と云ふ）●「同」（松葉屋染山。左向き、雲母摺）●「同」（丁子屋美佐山。上に傘。右向き俯目の顔）●「同」扇屋花人。文を

持つ太夫。（淺黄摺）●頭巾美人（左手を胸におく。そのあたり頭巾の線、波うてるもの）●當世三美人（湯上り姿。寛政八年頃と云）●松葉屋内粧（紗の團扇を手にもてる右むきの顔。）

○榮里の部

●「青樓美人合」、茶屋いつみや内（雲母摺。團扇持、茶屋女房風）〔寫樂程度の半身畫。〕

○豐丸の部

●叢豐丸（豐春門人。洒落本に挿繪往々あり。）畫。市川ゑび藏となにはやおきた（暫く姿と、美人。）〔間判錦繪〕

○豐廣と豐國（初代）

●豐廣畫。丁字屋内雛鶴（鏡面、口紅を點ぜんとする全身に近けれど、准大首ともいふべきもの。無論顔が中心也。長錦判）●豐國畫。風流三副對の内。（難波屋おきた。右向ける顔。初代豐國としては、團扇繪以外に少き大首美人畫一枚。）

○英山の部

〔英山にも大首は殆どなし〕風流雪月華の内、けいしやふう（右手盃、左手懷紙。右上の圓内に高輪の月夜。高輪月、よし原の最中といへど秋のよはねも高輪や月の名所、一圓窓宗古と賛あるもの。極印あり。）

△英泉、國貞、國芳以下は略く。此の三者の中、英泉に大首尤も多き事、人の知る所也。

〔役者繪の大首を附す。寫樂は多くクルトの「寫樂」をはじめその複寫多き新刊仲田氏「寫樂」等に網りて見ゆればこれを略く。しかも寫樂を以て役者繪大首の創始てふ素人流の謬見を破り、且つ寫樂以前にすでに大首ありし證左ともなるべきもの。たゞ、此の春英春好等の大首役者古きか、歌麿の大首美人古きか、又は同時なりやは別論に讓る。〕

附、役者繪大首目錄

○春章の部

●扇面形女形、文を見る（扇圖、半身役者繪の初めにして、且つ歌麿に美人半身のヒントを與へたるものか。）●幸四郎半四郎舞臺姿（天明初年頃と云。大錦判）●役者半身（腕ぐみ、首を左によせ、目は右へ。）（浮世繪版畫全集の第百七十六圖）

○春英の部

●助六（寛政三年。大錦）●定九郎（寛政五年頃と云ふ。同）●女形役者（半身。間判雲母摺）●きのじ屋眠舍（半身。細錦判）●侍と暫（侍は上、暫は下。大首に近し。例の二人對照の大首。春潮の谷風とおきたの如きも、此の類の摸倣又は類似か。）●太夫と右侍と左男達と三人大首の役者繪（寛政年間。雲母摺。歌麿の三人美人などと同じ構圖。大錦）●女形（背は藍のつぶし。揚羽の蝶の紋。左向きの顏）

○春好の部

●市川門之助（女裝の大首。寛政三年頃と云。）●不破と名古屋（春章の二人半身と似るもの。）●女（淺黄摺大錦）

○文調と清政

●文調畵。両面摺、影畵男大錦。たいこもち（役者繪風である。）●清政畵。岩井半四郎　江戸娘道成寺（清長忰清政と落款あり。極印あり。）

○初代豊國の部

●正面描大首（坪内博士「芝居繪と豊國及其門下」の卷頭木版畵）●澤村宗十郎似顏と云（ズッコ氏本に在っ仙臺侯廓通ひの風か。左向き）●松本幸四郎（阿波十郎兵ヱ。右向き。無落款）●瀨川菊之丞と云（ズッコ氏本。左向き）●澤村源之助と云ふもの（左向き殿樣。衣に櫻の模樣、上衣は袷。極印ナシ）●大谷德治　由良之助といふもの。上下姿。半身）●六代目團十郎（雲母摺寛政九年頃）●澤村源之助（阿部保名。享和三年頃）●松王の左向き（雲母摺）●其他略。

○國政（初代）の部

●岩井粂三郎（手拭を冠り、庖丁を手にす。女形。寛政十一年頃カ）●市川八百藏といふもの（梅王丸）●其他多し。

〔國貞。國芳等以下略之。〕

豊後節語物集 六種 段目 （上）

宮古路豊後掾一派の語り物は、大抵一段二三枚宛の物が、二十乃至四十迄くらゐの數で合綴せられ、それに宮古路丶丶丶と命題せられてゐる。それを今仮に豊後節語物集と命名したのである。此の類の「宮古路月下の梅」とは、既に國書刊行會本徳川文藝類聚の俗曲九に飜刻せられてゐる。但し此が全部では無論ない。今、自分は類本六種を集めるを得た。「即ち宮古路初音梅」(横中本)、「同花筏」(同)〔以上、石田元季氏より借覽〕。「同祇園囃子」(横小本)、「同紫竹調」(横中本)、「同粧車」(同)、「同桃盃」(同)の六種。此等の中には、彼此重複のものもあり、又既飜刻の「同月下の梅」「同窗の梅」と重複するものもある。が、參考として此六種の全所收段目を掲げておく。尚、我等は、此等の蒐集をより多く重ね、以て未飜刻の豊後語り物全部を集成せんことを期してゐるのである。○下掲六種本、主に年代順に據る。勿論正確なる判定ではないのであるが、中、「祇園囃子」の最も古いものである事だけは、肯ける。即ち「國太夫ふし目錄」と冒頭にあるからである。(國太夫改め豊後掾となりたるは、享保十五年。即ち此本、大坂にて國太夫ぶしとて人氣を得たる享保三年頃より同十五年以前に於ける刊行ならん。)

宮古路祇園囃子。目錄。加賀おきくいもせの中酌道行○三國小女郎玉や新兵衛桶ぶせの段中の巻○同ひよくの初旅道行○おはな半七七刀の銘月同○お梅久米之助女人堂心中同○與作小まん夢路の駒同○山崎與次兵衛藤やあづま壽の門松同○おさん茂兵衛大經師昔暦同○おなつ清十郎笠もの狂ひ同○しのゝめ道行子の日の松同○ふた子狂女すみだ川同○おそめ久松地藏廻り同○お七吉三七枚起請同○百合若大盡野守鏡宮島八景○もやうつくし小袖貰景事○おしゆん傳兵衛十七年忌道行○祝言魚つくし景事○い願

なりやかんつくし同〇三熊野かけろふ反魂香道行〇しまお七みちゆき又四郎ふし。以上二十段。（此本、大坂瀬戸物屋傳兵衛板）

宮古路䊹車「宮古路豊後直傳正本さすでにあり。」目錄。揚屋合戰三略卷道行情關守〇むかし形吉岡染道行芦邊のたつ〇新うすゆき物語道行朧の二女夫〇當世姿柳女道行現のむつごと〇天の網嶋道行名殘橋盡〇男作五雁金道行夢の通路〇黒船一世一代男道行ほし月夜〇敵討出口柳道行かつら男〇女夫星浮名天神道行時雨の柳〇三勝二世絓道行涙の朝霜〇返魂香夫乞獅子朝霞かげらふ姿〇卅三年忌袂白絞道行戀のしがらみ〇嶋原小蝶口紋日道行三人女夫〇ふたつ紋刀の銘月お花半七道行乗合船〇比翼の初旅新兵衛小女郎道行越路の空〇同中之卷桶ふせのだん〇加賀お菊妹背中酌道行旅の着綿〇夕霧阿波の鳴渡伊左衛門紙子姿〇傾城無間鐘うれいのだん〇椀久千代の若緑道行都のけい〇八百屋お七夜老鸎道行大和言葉〇浮名の時花歌金五郎小さんわすれ草〇小町大かゞみ少將みち行〇ふた子隅田川狂女の道行。以上、廿四段。（版元不詳）

宮古路紫竹調。目錄。傾城情の湊彦三頭巾丸二段〇壽門松在所駕の段●おさん茂兵衛仇名の旅枕道行袖屏風〇けいせい無間鐘うれいのたん〇加賀お菊妹背中酌道行旅の着綿〇傾城あらし山くぜつの段〇契情吉原袋道行時雨の烏〇傾城出口柳道行かつら男〇千代の若緑椀久松山道行〇夕霧阿波鳴戸伊左衛門紙子姿〇大和國茜染うれいのだん〇同三勝半七道行〇比翼の初旅新兵衛小女郎道行〇茜染野中の隱井道行涙の手向草〇袂の白しぼり久松おそめ道行〇釜淵双級巴道行街手向草〇山崎與次兵衛あづま道行〇笠物くるひおなつみち行〇雙紋刀銘月道行女夫づゝみ〇すみだ川狂女道行〇小町大かゞみ少將みち行〇紅の染小袖半兵衛おちよ道行〇八百屋お七夜るの老鶯〇けいせい千歳鐘亂髪現の入相〇返魂香夫乞獅子朝霞かげらふ姿〇名古屋土産道行連理の楳〇業平河内通哥念佛道行。以上二十七段。（京、鉄屋町八文字屋八左衛門板）

（表紙裏より）母場の血縁也。又三郎氏現在、一宮市八幡町にありて奉職。即ち四郎五郎の西尾名のり後の親戚にして現在するもの、愛知縣岩倉町の長谷川家、一宮の後繼西尾氏とのみ。養女關係たりし榊原氏、又四郎五郎を祀る。

以上が名古屋を中心としたる四郎五郎の關係事項であるが、大阪に於ける彼の實家は如何。鶴三郎、飛鶴（藝名、中村姓ならん。共に俳優）の二人は、彼の兄弟（恐らく兄か）であつた、殊に飛鶴は天才兒であつたが夭折した。即ち四郎五郎の血統には、代々俳優の血が流れてゐたと思れる。鶴三郎も既に大阪にて死亡といふ。夕霧のゐた青樓（無論吉田屋であらう）の女將は、この四郎五郎の實姉であるといふ。（無論故人）。現中村雁次郎優の囃子方にも兄弟があつた筈といふ。中村雁次郎優も遠縁にあたると傳ふ。

雜錄〕〇此の四郎五郎養父の西尾光藏（嵐三之助）の實家も、俳優であつた。實父は、桐野屋權十郎と稱する役者であつた。〇四郎五郎、折々の演技傳聞。明治二十六年冬、瀨戸町（尾張）榮座で中村傳五郎嵐猪三郎（この猪三郎は名古屋俳優）等と演ず。猪三郎の甚兵ヱに、傳五郎が宗五郎、箱登羅と四郎五郎は敵役。翌二十七年四月、坂東簑助、市川鬼丸等と源平盛衰記を同座にて上演、四郎五郎は平治の僕を勤むと云。（瀨戸伊藤氏より）〇上京中の大好評。明治三十二年四月頃本所壽座にて出演、配役は五段目の定九郎。當時都新聞の評に曰く『四郎五郎丈の定九郎は團洲以上（九代目）とあり、其記事中に若一團洲が演じたなれば何と評するとふ評も有之候、然るに仝年六月二十六日より歌舞伎座の藝題は一番目忠臣藏五段目六段目の二幕中藤五斗兵衛泉館と、二番目長兵ェ權八鈴が森、切左小刀であつた。團洲の定九郎を見競べに行きましたら、成程新聞の評の通り四郎五郎丈の方が良く見えました。故團十郎の定九郎は打たれてから變へ玉で見にくかつた感じがありました。〇當り役は、出京以前新守座で加賀の大槻傳藏、一座は市川右田作『日清戰爭後』、實生座で日清事件で袁世凱を出し、一座は尾上卯多三郎、嵐馬五郎。又實生座にて陣屋の熊谷、一座は中山喜樂（先代）其折彌陀六を演ず〔凡てこれは上京以前、即ち二十九年以前の記錄。久彌註〕當時の辻びら〔上京前〕は左の如く、長らく一座の樣でした。中、知鶴、橘枝、とも名古屋にゐました。

一番目 、、、、、 中村知鶴 、、、、 嵐橘枝
二番目 、、、、、 尾上卯多三郎 、、、、、、、、、、、、
切 、、、、、 澤村四郎五郎

繪番附等は、其頃余り見ぬでした。家號は紀の國屋、中山喜樂が淡路屋等にて、多く其頃は家號を呼ばず。（以上二項、市内荒川氏來信）〇四郎五郎東京より歸京後、〔三十七八年頃カ〕名古屋末廣座の座付となり、末廣座の人氣挽作の爲、東京に役者買出に出かけ、九女八、〔小團次も同道と思ふ〕を迎へ、末廣座に興行、大入を博したといふ。〔尚、此項、次掲淺井氏報告參照〕〇養父光藏は、伊勢山町で、みの屋と稱し宿屋をしてゐた。名の光

（裏表紙へ）

著者より

〇今月は原稿輻湊、御覽の如しです。四郎五郎四代目傳は、東京七戸氏の新著材料にして自分の纏めたものです。何かの御參考になるでせう。〇軟派叢書の『續々膝栗毛』出來、表紙綴糸等今度は自分の好みに先づ近く出來ました。精々御吹聽下さい。自分ではいゝ積りでゐても案外數が出てゐません、少しも食ひ込みで、悲觀の作です。然し好評は得てゐます。〇原稿のやり繰りの爲、寄贈紹介等一切次冊に廻しました。「川柳江戸名物」―源氏物語の研究＝默阿彌世話物の研究」＝官職要解」＝種彥著二葉―柳―等、他雜誌がありますが凡て來冊に。〇―音曲と歌舞伎―と實行未定。といふのは、今月迄に御申込まだ五十に滿ちません。いつそ第一號を出してみようかとも思ふ。いづれ友人と相談の上決します。此の健とも申込御勸め下さい。〇小生方、母子共上在、そろそろ笑ふやうになりました、乍他事御安神下さい。右（三月二十三日記）

定價表
一冊廿五錢 郵稅貳錢
六冊分 稅共 壹圓四拾錢
十二冊分同 貳圓八拾錢
〇郵券貳錢一割增の事
〇照會は返信料添付の事

大正十五年三月二日印刷
大正十五年三月五日發行 〔貳拾五錢〕

名古屋市東區[illegible]通[illegible]百五十七番地
編輯兼發行者 尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者 英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所 扶桑社

名古屋市東區[illegible]通[illegible]一五七番地
發行所 江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

（表紙四の第三段より）追記―四郎五郎がみつとの同棲は、彼の二十歳か廿一歳の頃と云、即ち明治十四五年頃である。尚、四郎五郎の名古屋へ來たのは、十代の頃と云ふ。すれば、先代延若が明治十一年に名古屋へ來てゐるから、即ち同年頃十七歳で來名、[…]もの。すれば、其から助高屋に入門の五年程は、雁五郎であり、實川延之丞〔彼の養父〕などと打つて廻つたらしい。

藏なさりて、通稱みのみつと稱したといふ。
○四郎五郎夫婦の仲人は、先代の中山喜樂たる事前に言うたが、これも、當時大須目の出町(四郎五郎住居の大光院裏に近し)に、宿屋業を副業にしてゐた。葉村屋と宿屋を稱したその男に嵐橋三郎、他に一人まだ役者になつたのがゐた。○四郎五郎は殆ど死亡前三四月までは舞臺に出てゐた。○現在の四郎五郎は兩人ある。一人は活動俳優、これは宗家が許したのであらう。一人は田舍廻りの尾張犬山出の男で、名古屋に住居、これは四代目の弟子で、未亡人から名を讓られた者。○四郎五郎と一座の俳優名。(團片記錄)中村宗十郎の弟子中村歌女太郎と一座、四郎五郎はもたれ(恐らく出京以前か。——久)□大阪の鶴三郎三五郎などゝ一座。□嵐橋三郎(これは例の彼の仲人を勤めた葉村屋の息子)、萩之亟、男升などゝ一座。□名古屋で明治三十七年頃、寶生座?で中村知鶴の盛綱に彼の五斗兵衛を見たと云。時に、四郎五郎は座頭だつた。(これ歸名後の事ならん。久)又同時頃、佐賀の猫怪で、家老役(小森か)に四郎五郎(さにかゝ、此の知鶴は、彼の出京以前、歸名後とも一座したらしいことは、諸報告が合する。久)□明治三十年頃(これ尚以前即ち出京以前の二十九年頃か。久)桑名の中橋座で、嵐璃寛と一座したといふ、時に四郎五郎は書キドメであつた。□晩年、歌舞伎座で、天一坊の伊賀之亮を見たともいふ。□中村知鶴、嵐猪三郎、中村駒太郎(後に梅曉)らと一座。(中、梅曉丈の他は故人。久)□末廣座、寶生座新守座三ヶ所位が多くでした。一座は名古屋出身の嵐猪三郎、阪東籙助、中村雀藏、市川右家三、中村知鶴、中山喜樂(市川中車の弟子)(此の中車は、先代の中車ならんか。喜樂も先代ならん。即ち彼の仲人のならんカ、不明久)、山崎定雄の弟子の山崎河藏、澤村萩之亟中村梅曉で。四郎五郎は栗山大膳、大石由良之助、すべて上下の役が良く」云々。(此項、市内、早川松太郎氏來信)□今より十七八年前末廣座の永らく專屬俳優にて、其頃は四郎五郎及中村知鶴等を頭として座付役者がありき小生の覺にには、延二郎、市十郎、九女八等の鏡山に四郎五郎の劍澤彈正を見たり。其他は見たる事あるも記憶なし。常に敵役をなせり(東西の上置き役者ある時は)(市内、淺井氏報)□十五年程前の演藝畫報に彼の失敗談として、田舍の野天芝居にて梶原の烏帽子を木の枝にかけて置き、其儘かぶりしに、蜂が入りをり、舞臺にて驚きし旨載りをりし。一同氏報に然るに此の演藝畫報は、家藏の初號より調べたるも見當らず。如何にや。久)□死亡以前僅かに、末廣座にて八百藏(現中車)と玄治店を演じ、彼は番頭を勤めたといふ。□土着連さやる時は、座頭格、東京よりの名優が來る時は、中へ割り込み、相當の役にありついた。(彼の人品、風采・印象。1、瘠せて背高く惡面なりき。敵役の柄であつた。瘠の品は相當にあつた。2、主に敵役、惡黨、背の剃り瘠背し、背高し。3、人品は背の高い、五尺三四寸以上かと存候、今の右團次にも少しきつい良。4、髯が濃く、背高し、惡詞の時唾をパッ〳〵と吐く癖があつた。いつであつたか市川鬼丸が來て、石井常右衛門を演つた時、其の敵役をやつた、巧かつた。(以上、略々歸する所同一也)○適り役。前條にも見にてゐるが、其他に於て一致するは甲斐、(彈正)、六助、八汐、定九郎、其他惡。
○確實なる興行日附。明治十九年十一月、名古屋末廣座。喜樂、知鶴、橋三郎と一座。藝題親鸞聖人一代記。四郎五郎は大納言時忠兵司茂道、日野左衛門、後入才坊道延。(一番附に據る)□明治四十三年二月、名古屋笑福座にて、幸十郎、喜樂等。藝題「雲耶雪耶」「一谷生春波浪長濱」、役者は仲間長太後人入長太、井伊掃部守、親父香右衛門。□明治四十三年四月、同朝日座。忠臣藏、幸十郎、喜樂等。(以役名、本藏、藥師寺、定九郎、平右衛門。上二項は、演藝畫報各翌月の前月狂言一覽に所載)
○以上。唯殘念であるのは、延若の弟子であつた彼が、いつどういふ動機で名古屋に來て助高屋に入門したかゞ不明である。
(追記。表紙三の欄外を見よ)

大正十五年三月二日印刷納本
大正十五年三月五日發行
江戸軟派研究 第十二册
定價貳拾五錢 送費貳錢

大正十五年四月二日印刷納本
大正十五年四月五日發行

貳編 第十三册 （通編第四十三册）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十三册
（通編第四十三册）

本文

豐後節語物集七種段目（完）
吾妻男一丁は三人ありの論
娼婦に趁りたるもの
○紙屋治兵衛から京傳へ

柳樽の錦繪と三津瀬川

（前略）さて少し晩蒔きの種になりましたが、研究の前々冊の「浮世繪に現れた歌狂歌」を拜見して、その中の「狂歌若しくは其以上に多量に有りさうな」川柳が事實は「絶無に近い」と仰有ていらつしやるのに、私も正直意外に思ひました。

して見ると偶然私の見た二三の、川柳の記された繪は、珍物なんでせうか、どちらも紐育で發行された「浮世繪」（私の覺束ない英語の知識で知りえたところでは、平河黨吉氏といふ東京の輸出商が米國で賣立をした時の畫集らしく、一九一七年の出版です）の中に載つてゐたもので、其ひとつは、

繪師は春潮

笑ふたび娘手のこうを口へあて

七艸の繪らしく一人は立つて手のこうを口へあて、一人は坐つて、右に摺古木を持ち、左手は袖に包んで同じく口へあててゐます。例の「七艸なづな…」の唄を吟みながら笑つてゐる所らしいのは、膝の前の俎板に菜の葉や取箸の載つてゐるので、合点がれます。

もうひとつも、同じ春潮、

なんとでも言なと床へ引てゆき

寐間著に更へた客と女の立姿。

更に他のひとつは、清長

初戀の口舌掃出す番箒

女二人の立姿、ひとりは箒を手にさゝへ乍ら文を讀んでゐると、もうひとりが覗込んで袖を口へあてゝ微笑んでゐます。

三枚共細長繪です。

それから先日來、三津瀬川のことを題材に芝居を書かうと思ひまして年代記だの忌辰錄だのを少しばかり引いて見て、いろ〳〵異同のあるのに閉口しました。

研究にも轉載なすつた「近世日本演劇史」の「三津五郎に養子二人あり……」と「その娘二人……」といふ説ですが、簑助（四代目三津五郎）は實子ぢアないでせうか、三男三八（幼名三四八 十代目勘彌）といふのがありますところから、さう考へます、しうか幼名玉三郎は養子でせう、これは實父の名もたしか見かけたと思ひました。

それから娘二人が菊五郎と官吉に嫁いだといふのは、その實三津五郎の妻のお貞の妹ではないでせうか、荒川官吉の方は知りませんが、三世菊五郎は三津五郎から見ると僅かに十しか下でないので、なんとなく、そんな氣がします。さうすれば、「年代記四〇四頁に「菊五郎先妻の妹（？姉なるべし）の娘しま新吉原山口巴へ嫁す」とある、このおしまが三津五郎の娘かしらんと迷ひました。

菊之亟を四代目の女婿とする説にも考へさせられました、四代目の死んだ文化九年に彼は十一歳にしかなつてゐません、この説もレキとした出所あつてのことでせうかしら。

又三津五郎と菊之亟の提携の最初を文政二年のことゝなすつておいでゝすが、同性愛の關係の上でなら知らず、舞臺の上では、私が必要上、年代記から書拔いただけでも、文政元年、溯つて文化十一年あたりにも一座したことが見えます上、文政二年以後も菊之亟は屢々三津五郎を離れて團十郎と一座してゐますから、これに同性愛のいきさつを附加して考へるのは少し穿ち過ぎるかとも思ひます。

尚興行年月のことで氣が付いたことは、お傳と欠落ちした文政九年九月河原崎座の金閣寺に雪姫の役が付いてゐます、しかしこれば番付だけで出演しなかつたかも知れません。それから菊之亟は奥州で芝居を打つたのでせうか、それともたゞ旅を廻つただけなのですか。

右心づいたまゝを、——おついでの節お教へ下さい。（松の家伊三次）

○お答へ

右、川柳物の浮世繪、難有う。然し示された三個が共に（自分のと）春潮と清長畫くのものである事はどうしたことであらう。此の二畫家の畫又は此の二畫家當時でなければ、此の柳樽の應用は、版畫にならなかつたのか。繪本柳たるの頻出からいうても、後世（少くとも英泉、國貞、國芳あたりに）ありさうにも思ふが、さて如何であらう。

次に三津と菊とについては、自分は彼らの三角關係を始めて（日本演劇文獻上では始めてかと思ふ）述べてゐる、それに追はれて、彼らの出自は割合に粗、且つ「日本演劇史」程度の物に多く據つた。尚幾重とも是正して頂きたい。唯氣づいた事の二三。

（表紙四へ）

豊後節集 語物七種 段目 （下）

宮古路桃盃。目錄。けいせい都富士道行戀の街○風流桶ふせノ段色町づくし○重井筒ゐけんのだん○中納言行平穿櫻道行夢路芥川○譯湊須日草道行釣あんどう○三勝二世話道行泪の朝霜○黒船一世一代男道行ほし月夜○天の網嶋道行名殘の橋盡○敵討出口柳道行かつら男○陸月連理𢡟おさん伊八相圖のつぶて○女夫星浮名天神道行時雨の柳○男作五雁金道行夢の通ひ路○卅三年忌袂白絞道行戀のしがらみ○嶋原小蝶褙紋日道行三人女夫○ふたつ紋刀の銘月お花や七道行乘合船○比翼乃初旅道行越路の空○同中之卷桶ふせのだん○加賀お菊妹背中酌道行旅の若綿○夕霧阿波の鳴渡伊左衛門紙子姿○傾城無間鐘うれいのだん○襤久千代の若綠道行都のけい○八百屋お七夜老鷄道行大和言葉○浮名の時花歌小さんわすれ草○小草大かゞ見少將みち行○ふた子隅田川狂女の道行。以上廿五段。（此本、大坂南久寶寺町心齋橋角、正本屋□兵衛板）

宮古路初音梅。目錄。今織臺貫嶋道行明日の噂○車街道悴當道行戀の玉ぼこ○敵討出口柳道行かつら男○三勝二世話道行涙朝霜○返魂香夫乞獅子朝霞かげろふ姿○契情吉原筏道行時雨の鳥○傾城無間鐘うれいの段○津國夕霧塚女夫戀現床○陸月連理𢡟上卷うれいの段○女夫星浮名天神道行時雨柳○比翼の初旅おけぶせの段○千代の若綠襤久松山道行○雙生隅田川狂女道行○夕霧阿波鳴渡中之卷○花伊勢曾我十郎の段○壽の門松あづま與次兵衛道行○嶋原小蝶紋褙日道行三人女夫○本調子三筋後帶おしゆん傳兵衛道行○安宅甚平萬山通道行三ッの街○浮名時花哥きくの小三金五郎忘草○唐崎心中小いな半兵へ道行○高野萬年草おむめ道行○紅の染小袖おちよ半兵衛道行○

夜の老鶴八百やお七道行○小町大鑑少将道行○同四段目しのびの段。以上廿六段。（大坂代見両替町天神橋筋、糸屋市兵衛板）

宮古路花筏。目錄。戀淵珈絞染道行妹背書留○敵討難波梅道行浪花鑑○譯淺頃日草つりあんど○里玉子涙八文字おこよの段○大門口鎧襲亂髪現入相○形見鶴浮名與鶴道行くれは鳥○黒船一世一代男道行里月夜○敵討出口柳道行かつら男（）三勝二世花道行涙莿叢○信娘山崎通色里誰が身上○車街道悴心中道行戀の玉にこ○今織臺貫鶴道行明日の噂○讃葛城合戰夕霞姿起請○津國夕霧塚女夫編現床○女夫星浮名天神道行時雨柳○睦月連理戀上卷、戀の段○妹背の中酌かゞのお菊道行○契情吉原筏道行時雨からず○卅三年袂白絞道行夢路のしがらみ○雙紋刀銘月お花半七道行○千代の若綠わん久松山道行○五人女徒髪おなつ清十郎道行○比翼の初旅小女郎新兵へ道行○唐崎心中小いな半兵へ道行○高野萬年草お梅くめの介道行○さかな淨瑠理祝言魚蕋。以上廿六段。（同上板）

宮古路新玉椿。太夫直傳○目錄。今織臺貫鶴道行明日の噂○車街道悴心中道行戀の玉にこ○山[illegible]ふたやあづま在所鶯中いきさ○けいせい出口柳道行かつら男○大和國茜染三勝半七道行○同うれいの段○返魂香夫乞獅子朝霞さげらふ姿○傾城吉原筏道行時雨鶏○昔口說半九郎節新路の清草鞋○傾城あらし山うつゝ女夫日吉ノ段○茜染野中の隱井道行涙の連呼○契情無間鐘うれいのだん○釜淵ふたつ巴道行街の手向草○睦月連理椿伊八おさん道行○加賀お菊妹背中酌道行旅の若鶴○雙紋刀の銘月お花半七道行○八百屋お七夜ルの老鶴○比翼の初旅新兵衛小女郎道行○紅の染小袖八百屋半兵衛道行○小町大かゞみ少將みち行○千代の若綠槐久松山道行○かうやの心中久米之助お梅道行○山崎與次兵衛道行爰れ姿○業平河內通歌念佛道行○かなや金五郎道行忘れ草○唐崎の心中半兵衛小いな道行○嶋原小蝶口紋日道行三人女夫○すみだ川狂女道行○笠もの狂ひうれいのだん○夕霧阿波鳴戸上卷紙子姿。以上三十段。（京。鉄屋町通誓願寺下ル町）（正本屋八文字屋八左ヱ門板）（此の「新玉椿」の一本は、飯島花月氏藏本。同氏手錄を轉載）

吾妻男一丁は三人ありの論

従來、或種の本の作名吾妻男一丁は、梅亭金鵞の別名であると、自分は世間同様信じてきた。つひ最近まで〻ある。それが、實に面白い發見、珍奇な發見をした。吾妻男一丁は三人あるのである。（尠くとも）。その三代目が金鵞であるのである。今、自分は的確なる憑據二個を添へて、此に紹介する。即ち吾妻男一丁なる作名の下に一貫せる「○中膝磨毛」十六冊（初編より二冊づ〻七編まで。別に發端上下二冊計十六冊。）と、及び、「魯文珍報」第二號前島氏の記事と此の二個が、先づ自分の見當つた材證である。然し世間は廣い、殊に「魯文珍報」の此記事に記憶若しくは注意せらる〻諸君にありては「すでに平凡事であらう。（「魯文珍報」の記事に於てすでにその一斑は知られる。然し證據を擧げてはゐない。且つ三代あるとは明示してもゐない。）先づ確證中の確たる「膝磨毛」十六冊に及ぶ。但し此發見の端緒は、友人酒井氏の勞に俟つ事が多い。自分は、その敷衍、及び補正である。乃ち先づ同氏の記文を左に錄する。

○

●吾妻男一丁は梅亭金鵞の専有戯名に非ず

金鵞は三代目一丁也

尾崎文庫本、○中膝磨毛七編（別に發端二冊あり）吾妻男一丁著を通讀中、三編上に至つて、ふと文体の變化に氣がついた。今迄のギコチナイ書き振りが急に樂々と讀まれる様になつた。變だと思つて、二編下の跋を見ると、

前畧……

初代一丁がとぼしかけたる後なるも、癈病

にさせじとて、毫をつぎたる當時の一丁：……後畧

時にあ屋ある政さをあまりひさゝせさいふさしの
卯月のころ斯いふものは唐○の菴中なる勢尺苑

力　　　　　瀍　　　竹

とある。なる程、之れで三編から作者が替つて、二代目一丁が書き始めた事がよく解つた。

〔此の本を讀まれた方は發端、初編、二編、より三編以下が全ての点で上出來な事に氣が付かれた事と思ふ。〕

猶、讀んで行くと、五編上の序を例の女好菴が書いてゐる。

前畧……

假につゞくる五編のまきは、既に當時の一丁ならで……後畧

そして内容も一層我々に親しい物になつて、はつきりと金鵞の匂がして來る。

それで五編から七編（終編）迄、三代目一丁（即ち金鵞）が書いたものと假定してもイヽ様に思はれる。

假定
- 發端、初編、二編　　初代一丁
- 三編、四編　　二代一丁
- 五編、六編、七編　　三代一丁（金鵞）

以上は、まあ私の直感みたいなものだが、次に其の確な證據を擧げて見よう。

編數	發行年號	金鵞の年齢（文政四年生れとする）
發端	不明。	生れず
一編	文化九年。（序に明記す）	仝
二編	文政十一年卯月（二編下の跋、時にあやある政さをあまりひさゝせさいふさしの卯月のころ、とあるに據る）	八才
三編	文政戊子春日（文政十一年）の序	八才
四編	文政庚寅（文政十三年即ち天保元年也。）の序	十才
五編	不明	
六編	仝	
七編	庚戌の年（嘉永三年）と凡例末尾	三十才

右の表を見れば、八才や十才の子供が此ん

なもの書く筈がないから、第四編迄の吾妻男一丁は金鵞でないのは明かだ。

次に、發端、初、二編の作者である一丁と、第三編以下の一丁と違つて居る事は、前掲、第二編下の跋と文体の變化とで推定される。

それで發端、初、二編の一丁が初代一丁。三編以下の一丁が二代一丁とする。

所で問題は、

（一）第三編から終編迄、二代一丁が一人で書いたか。

（二）三代目一丁（金鵞）が果して割り込んで居るなら、第何編から書き始めたか。（三代目一丁が金鵞でない事は前の表で明瞭）

（一）が眞だとすると、金鵞は此の著述には全然關係して居ない事になる。（だが私は、第五編の女好菴（春水？）の序と、金鵞流（イい意味にも惡い意味にも）な文体とによつて金鵞が、どこかで割り込んで居る様に思へてならぬ。）

（二）が本當とすれば金鵞が何編から書き初めたかゞ問題となる。五編の女好菴の序により五編から彼が書き始めたと斷定すると、少々變な事が持ち上る。

まづ、彼が二十二位から作者生活に入つて、其の年に此の第五編を書いたとしても、第四編（天保元年）から第五編迄の間が、十一、二年程ある。此んな種類の本の次編が十年も遲れて發行されたとも思ひにくいし、（これは思へぬ事もないであらうッ適當な補作者、又は板元の事情で中絶と見てもいゝ久運。）二十二位の處女作時代の彼に此れ丈書けるとも一寸考へられない。以上の二理由で第五編を金鵞が書いたと決定する勇氣はない。して見ると、金鵞が

關係してゐるのは六編以下の樣な氣がする。然し前にも云つた樣に五編以下は確に彼の味がある。迷はざるを得ない。

以上の諸点を簡單に列記して見ると、

(I) 正確な事

a 膝广毛全編は同一人の著述に非ず、二人乃至三人の筆なる事。

b 第二編迄は初代一丁なり。〔此項不同意。後說せん。久〕

c 第三、第四は二代一丁なり。〔同〕

d 第四編迄は金鵞に關係なし。

e 初代一丁、及二代一丁は金鵞に非ず。

(II) 疑問な事。

f 初代一丁は誰？

g 二代一丁は誰？

h 二代一丁が三編より終編迄書きしや？

i 金鵞が何編より書き始めしや？

j 或は此の本に金鵞は全然關係せざりしや？

で結局、此の小論の要点は、多くの疑問を呈出しておいて、表題の証明に終つて居る。

　吾妻男一丁は梅亭金鵞の專有戲名に非ず

附記。

書き落したが、どうも五編から金鵞が書いて居る樣に思はれるので猶精讀すると、五編下に確な記事が出て居る。

……… 九二「左樣〻〻わたくしども〻、その女好菴の門人でございます。男「ハア左樣でございますかシテあなたのご色名は九二「わつちやア吾妻男一丁と申やす　男「ハヽア御高名うけたまわりおよびました。　九二ナニごぞんじのはせんの一丁(二代目の非ならん)わつちやア三代目一丁でほんのかけだしサ

………

此れで見ると、やはり第五編から三代一丁即ち金鵞が書いたに違ひない。而も「ほんのかけだしサ」と自分で云つてる以上二十二「三

才、作者生活初期の作と見てイヽ。彼亦平凡者流の作家ではない。之れによると、初代一丁、二代一丁は、春水、金水あたりであるまいか。記して教を俟つ。

以上、酒井潔氏手記。

○

右は酒井氏の予に示された手記の全文である。此本十六冊家藏本に在りながら、嘗てこゝまで精査する機會はなかつた。唯因習的に、吾妻男は金鵞だとばかり單に思ひ込んでゐたからである。それに一々精讀もしなかつた。酒井氏が、家藏本によつて、これだけの手記を物して來られた。その時始めて自分の興味は、正直に此の十六冊に向つた。初めはそんな莫迦な事がと内心、又口に出してもみたが、實物が證據である。予の因習的な解釋は旗色が惡くなつた。勿論それ以前、此の十六冊の或る編が文政の年號記入あり、金鵞の普通人情本の處女作を天保末期の二十二三歳に見る（拙著「江戸軟派研究」貳編三三頁參照）自分の考へから、少々早すぎるな、さうだこれはやはり後に作したものを、そつくり本物の膝栗毛に似せようと思うて、此の編次の年代も本物の膝栗毛のそこらあたりの年號を取つたのだと、その實、本物の（一九作の）膝栗毛と此の膝磨毛と一々年代を比較してもみずに考へてゐた。だから此の文政の記入には、（膝磨毛に）半信半疑ではあつた。（今、一九の正膝栗毛と年代を比較すると、磨の初編文化九年には正膝栗毛は、續の三編に及んでゐる。）

其後、自分は、此の酒井氏の發見を基礎にして、原本十六冊と酒井氏説と比較しつゝ、判斷を重ねた。同時に、此種新説の記載を他書にありやと心がけた。端なく發見したものは、即ち前述明治十年の「魯文珍報」第二號である。此の珍報の記事を先づ、こゝに掲げてみよう。

「（前略）道中膝摺毛の續編は、吾妻男一丁（梅亭金鵞）にて、山〇主人の後を嗣ぎ、（下略）」〔「魯文珍報」第二號。「□本□盡」の流舞を一洗す。（その上）前島和橋。〕〔尚、此の筆者前島氏は、九世川柳氏の事であると云ふ。久〕

である。（尙同記述は、第三號に亘りて、稗文其他の當時作家の匿名作や、及び當時の風習の奇なるにも言及せられてゐる。略く。）とにかく此の前島氏の記述は、膝磨毛が一丁（金鵞）一個の筆ではない事を明かにした、自分の見當つた過去記事の唯一である。然るに此に曲○主人の後を嗣ぎとある。すれば、其の前半は、（編次は明示しあらず）此の曲○主人が作したといふ事になるが、これには、酒井氏の發見が動機となつて、自分の調べた限りでは、一寸首肯しかねるのである。が妥協點は見つからぬでもない。殊に當時末期の此等戲作者の內情に通じてゐたらしい前島氏とも思へるから、これも半面の眞ではあらう。即ち自分は、此の「膝磨毛」十六冊に對して、如何なる考察の結果を得たか。酒井氏と同樣であるか。否、否、大体に於ては、（一丁に三人ありたりなどの）一致はするが、局部に於ては、異論がある。酒井氏說を今一度讀み直して、以下の自分の所說に聽かれたい。

首肯せらるゝ事。イ、一丁には、甲、乙、丙の三人は慥かにありたりし事。ロ、第三次即ち丙の一丁は、梅亭金鵞疑ひなき事。ハ、「膝磨毛」について、金鵞の編せるは、その五編六編七編の計六冊の他に、發端の上下二冊も然である事。（此點、酒井氏說觸れあらず。）ニ、「膝磨毛」は初編二冊貳編（正しくは後編といふ。）の上一冊（?）計三冊は、同一人、假りに甲の筆になりたる事。貳編下の一冊（?）及び參編四編の五冊は同じく同一人、假りに乙の筆になりたる事。即ち此の本の十六冊は、初編及び貳編の半が甲、貳編の半と三編四編が乙、五及び發端、六、七編が丙となるのである。ホ、右の中、乙は、慥かに丙の師系に當りたるものなる事。ヘ尙、乙は、女好庵（作名）と同人たる事。以上は大凡そ確實な首肯事項である。

稍疑問の事項。

イ、右、三人の一丁の中、甲は。不詳。乙の女好庵（匿名）は、金水らしき事。ロ、乙たる女

好庵の二編下（?）三編四編の作は、二代の一丁を自覺する程のものではなかつたらしい事。即ち初代一丁の補作くらゐの意味であつたと思へる事。

さて、大体右のやうに纏めてみたが、尙、その證跡を擧げてみると、

一、十六冊を、甲、乙、丙の右の如くに分つたのは、酒井氏のいはるゝ序跋の關係もあるが又一に文字（その大小、行間の空白の多少。會話を示す「の形の相違。第一には文字書体の相違。）が根據になつてゐるが、一冊一冊較べて內容体裁の類似を見ると、どうも自分の下した分け方が正しく思へて來る。發行年次も：一編（文化九）二編上（同年カ）。二編下（文政十一年二月）、三編（同上カ）、四編（文政十三年）五編、發端、六編、（以上の三編は天保末より弘化嘉永カ）七編（嘉永三年）と自分は見たい。此の年次は、酒井氏說とは、幾分違ふ、即ち二編を上と下に切り離し、作者年代を違へりと見るのと、五、發端、六編を天保末（及び弘化嘉永）にまで繰り下げた點に於てである。何故かなれば、すでにお分りのやうに、二編を上下に切り離し、作者年代を違へたのは、貳編下に附した跋の意味「當時（いま）の一丁」（カ雁竹の跋）を矛盾なしに受け入れようとすると、である。即ち此の跋自身が貳編に交涉を持つてゐる事を事理明白に示してゐるからである。三編以下が二代一丁といふならば三編に此の事をいふべきだが、貳編に之を述べ、乃ちその貳編下それ自身が然りと見ゆるからである。是れ、自分の貳編を前後に切つた譯である。尙、五、發端、六編を（發端に、無論滑稽此點、本作の一九膝栗毛と相似たり。）天保末―嘉永に繰り下げたのは、時經つてからの繼承作と見えるからである。これには、然し確證はないが、一方金鵞の二十二三歲〔天保十三年頃〕を彼の普通人情本の處女作と見る自分の先入觀念からでもあるのと、一に、適當な繼承作家が見當らなかつたのか、又は板元の中絕、新たに今度求板補作して、初編以下も再摺したのかとも見るべきだ　自分の本無論この推量通り、初、二、三、四編は、版が惡い。

自分は、一丁事金鵞の此種の作は、天保末弘化の頃と見たい。現に彼の「春雨衣」（これは全部金鵞一丁の作と思はれる。）に就て、第二編の叙に、志亭口賀（鶴亭秀賀の事か）が、……午の春と年代を記してゐる。これは弘化三年の午であり。天保五年の午ではあるまいと思ふ。若し天保五年とすれば、金鵞なれば、十四才であるからである。で「春雨衣」第三編に、狂訓亭爲永として同じく叙してゐるが、これは「いろは文庫」などの二代春水であらう。右らの關係から自分は、金鵞一丁の活躍を凡て早くも天保末に見てゐるのである。

乙の女好庵たることは確實なりや。

これは確實と見てい丶と思ふ。何故かなれば、酒井氏も示したやうに、貳編終りの跋と、第五編の女好庵署名の叙から考へても、此の中間の一丁が女好庵である事は無論であり、且つ、五編下の文中に現れた女好庵の門人の一丁（これは金鵞を指す）である事から推しても、此の乙位の一丁が女好庵であるとはいへるが、更に證據は、其の第四編上の表紙ウラ見返しに、女好堂（板元やうの所に）とあるからでもある。即ち女好庵と一丁第二位と同人である事は爭ひがない。然れば、此の女好庵の誰人かを決めてか丶れば、所謂二代一丁の誰人かゞよくわからう。乃ちこれは金水であらうと思ふ。それには、一、金鵞の師又は師に近きもの特り金水たる事は定説であるのと、更には此の膝磨毛第四編（三編は畫風異る）に挿畫した好信は、柳川重信の事であつて、重信の挿畫は、金水の後の人情本に多く、當時（この第四編頃、文政十三年）重信とも友としよかつたであらうと思ふからである。即ち從來女好庵は誰かと思うてゐたが、これは金水らしい。（然し多少の疑點はある。寧ろ春水が女好庵とも思はれる事もある。それは、生寫相生源氏などの國貞（三代豊國）筆生の大作本が、女好庵であるからである。が天保十四年に春水は死んでゐる。女好庵署名のものがこれ以後にもあれば、無論女好庵は、金水か、然らずも春水以外といふ事になる。）

偖、この膝磨毛十六冊を、畫樣から區別すると、左の如しである。

初編、二編。三編。畫樣殆ど似たり。○四編は好信（重信）。○五編、發端。不詳。但し此者、初•貳•參と異る。六•七編とも無論。稍、「和合人」などの英泉に似る。英笑の類か。○六編七編。
慶畫、又は慶丸とあり、また喜樂齋ともあり。これ三代豊國の門人國慶の事か。

尙乙の順位の一丁が、予のいふ如く、初代一丁繼承、補作の意味であつて、強いて女好庵と一丁と名を双つ持つたと見るでもないとして、とにかく此の二代目一丁は、女好庵即ち金水であると假りに定めてみたが、この金水と思へる尙若干の參考事項もないではない。それにはこの甲の一丁を春水であるといふ假定から來る。即ち金水は、初め春水の筆耕をやつてゐたといふ傳說からである。即ちこれが、貳編の途中で補作し、且つ初編より四編まで殆ど同一書体体裁に見える理由になりはせぬかと思ふ。イカヾ。

然るにこの甲が、春水か否かは斷定はまだ不能である。が若し果して春水なりとすれば、彼の余程初期の事であらう。〔即、春水として、此の初編の文化九年頃は、まだ普通には、人情本の試作すらなかつた。〔處女作は文政七年〕まだ楚満人にもなつてゐなかつた。當時此の膝栗毛のさんでもない擬ひ物に手をつけた所以ではなからうか。即ち一丁は、此の時に方つて彼の創作假名ではあるまいか。無論原作者一九と音を通じさせて。〕即ち初めこの一丁は、單に膝磨毛のみに使用せられた（春水と金水とに——假りに）作名ではなからうか。それが一丁の名專有者となつたのは、金鵞からではあるまいか。尙、第二の一丁が金水であるなれば、普通金水の人情本（眞面目な）の處女作は、天保四年の「戀の花染」といはれてゐる。それからすると、此の膝毛の二の下、三四などの文政十一年——天保元年頃は早くはないかの議論も起らう。然し是は、自分には、金水が此の天保四年までは正面の作家として現れず、春水などの筆耕の傍ら、この作などに補作をしたのだと、さう見たいのである。これは、普通のまた割合に眞實味のある見方であらうと思ふ。

すると「最初の「魯文珍報」の記事に現れた、金鵞の一丁が曲○主人の後を嗣いだといふのは、

何ういふ意味であらうか。この疑問に答へておかねばならぬ。即ちこれは、曲取主人が初代春水の事ではあるが、（？。とにかく曲〇山人は金水よりは稍古きに居らうと思ふ。即ち曲〇は嬌訓亭の別號としたい。）金鵞の一丁は、春水を繼いだのでなくして、その次の金水の一丁を繼いだのであるが、それを直ちに曲〇を嗣いだといふのは、金水が、他に於ては一丁の名を用ゐず、從つて金鵞一丁の以前の「磨毛」は、凡て初代一丁即ち春水の作と思ひ違へたのではなからうか。現に「魯文珍報」には、初、二、三代の記載はないからである。

がとにかく、此の曲〇の實名と女好庵の本体とは今少し心がけて研究したいと思ふ。（曲〇は曲山人では無論なからうと思ふ）

尙、發端（金鵞一丁と自分が認定した分）の中に、女好庵の作「入船日記」（半紙本、三冊物である。）について、引用してゐる。

尙、五編下に、本物の一丁の話になつて、「東都女好庵先生よりの來狀」云々というて、舌八（北八）の僞一丁を看破る話がある。これなども、第三の一丁と、女好庵とがすでに師弟である立派な裏書、即ち女好庵は金水なりだけは動かぬ所と思ふ。

最後に當にならぬ話であるが、此の本十六冊の梓元を表紙見返しによりて記しておかう。

初編（不詳）二編（實は後編）（不詳）三編（不詳）四編（女好堂とある。但し純正の板元の意味にはあらざらん。女好庵の別號よりの思ひ付きならん。）。五編（不詳）、發端（喜樂堂）、六編（喜樂堂）。七編（喜樂堂あつさ）とある。（この喜樂堂の喜樂は、六七編の畫者喜樂齋麿丸といふのに關係があるか、イカゞ。恐らくこれは一丁の思ひ付きで、それをまた畫者が思ひつき流用したといふのではあるまいか。）

娼婦に趁りたるもの

最近、「紙治變痴氣論」といふものを書いたが、其の中に、言ふべくして徹底しなかつたことがある。それを此の誌面を藉りてはつきりさせておかう。

あの大近松の「心中天の網島」の中では、治兵衛對小春對おさんの所謂三角關係の一に入れてよい此の三つ巴の中で、特り治兵衛對おさんの關係に於て、おさんより治兵衛に對する氣持は、滿たされぬ愛の惱みから起る愚痴、恨みつらみの凡てが十分放射せられてゐるが、然し一方の（寧ろ正反對の）治兵衛からおさんに對する氣持は、十分に現れてゐない。貞婦に對する放蕩亭主としての當然の悔、涙は見えてゐる（然しそれも少量である。）。然しその貞婦の一皮剝いだ赤裸々な女性おさんに對する、此の女性の要求する唯一の相手としての、一個の男たる治兵衛の愛欲上の苦しみ惱みがさつぱりない。ないのは、寧ろ當然なやうに書かれてゐる。勿論上の卷に於て「魂ぬけてとぼ〳〵と」と來てゐるから、小春を前にしては、それが當然であるかも知れない。然しおさんだけ一個を相手にしてゐる時に於ても（中の卷）、尚且、何と言譯しても、八分は小春への未練（二分は、太兵衛に奪られる悔しさであらう）の爲の涙であり、佛神の罰は中らずとも女房の罰がといふあたり、大變女房への愛に自覺したらしく見えるが、中々さうでない。唯この女房の罰といふのは、「恩惠を與へたる者に對する、惠まれたる者の義務心」、かうしたものを出ないであらう。ときまると、（きめなくとも無論斯うであるが）一体相手のおさんは獨りごうなる。恩惠に對して報酬は與へらるゝにしても、而もその報酬は單なる「濟まぬ〳〵」といふ

言葉（無形のもの）に過ぎぬではないか。彼女は、かうした他人行儀な、自分の眞實に讃嘆駭心してくれる治兵衞の言葉よりも、もつと突きつめた物を欲してゐたらう。即ちあの有名な「おさとしの」以下のくどきで知れる。事は前後してゐても、彼女の欲するものは、無論このくどきの中に籠つてゐる。それを見ぬかぬ莫迦でもなかつた筈だのに。（治兵ヱが）。トド「お前は、どうする」で、おさんから「子守か飯焚き」にでもの言葉を得た。こんな殘酷な事があらうか。治兵衞たるもの、上、中、下三卷を通じて、全く小春の爲の治兵衞であつて、おさんの爲の治兵ヱたる、其の半面はない。これでは、彼は近代人の如く、同時に二人を愛しもしなかつたのである。愛の純一な意味からいふと、大に褒めていゝが、然し家婦を娼婦に忘れた痴呆漢だと思ふと、餘りに今日の我々の普通敎養あるものから首肯せられない事實だ。然しかういふ事は謂ひうる。人間の最後は、敎養でも道義でもない。親でも子でもまして形式的な夫でも何でもない。唯だ一個の男である、アダムである。さうして男としてアダムとしての唯一欲求は、その相手の女、イヴを求めるばかりだとも。これが最後で、これを滿足さする方法が、これ一個以外より他になくんば、この一個が如何に不純であらうとも、また如何に自分を毀損する程の世評あるものなりとも、如何に一身及び境遇に波瀾を起すものなりとも、この一個に縋り、この一個の一顰一笑が自分の生命たらざるを得ない。こゝに愛欲の心から起る面白さ（第三者には）と悲痛（當事者には）と眞劍（同）さがあるのである。治兵衞も然りであつたらう。それ程、彼は一個の男性として、彼の肉体、全軀全神經、直ちに小春を追ふ痴夢（彼にとつてはこれが唯一絕高價値夢）に酣醉しつゝあつたのであらう。此のおさんが、單なる男性對女性の交涉に

於て治兵衛を索きつける力の乏しかつたといふ點、或は當初は多少これあつたかも知れないが、小春といふおさんよりより以上の、此の意味に於ける强敵が出現（寧ろ治兵衛が發見した所の）して以後の、落莫たるおさんの位置、逆にいへば治兵衛がおさんよりより以上の小春なる娼婦によつて、おさんに無きもの、又は乏しきもの、又は更に豊かなる催情的雰圍氣又は身魂麻痺的辣腕を發見してからの、彼の夢中、沒家庭的な行動に、あの悲劇が根ざしてゐると自分は思ふ。要するに、あれは、貞實なる利口なる商賈上手の一家婦と、年は若けれど湯女から白人に鞍替へして既に十分娼婦型を形造つてゐた案外深切な情知りらしい一娼婦と、その間に挾まつた三十近い子供の二人ある男が、家婦を棄てゝ娼婦に趁つたその記錄である。更にいへば、或る男が、娼婦美、娼婦肉体の爲に眩惑せられて、凡てを忘れた、そこにあると思ふ。即ち近松は、娼婦美の侮るべからざる、男性に與へる魅力を、我々現下の人生にも反射し、暗示してゐるやうにも思ふ。即ち治兵衛は、最も簡單に、安易に娼婦美を禮讃し、それにひた趁つた可憐兒（ではないが）である。

◇

私は、坪内博士、故綱島梁川氏共編名義の舊刊「近松の研究」を讀み、「天の網島」の合評を見ながら、中、抱月氏の評語に、別に特殊さは少いものであるが、相應に興味を此の戯曲に有つて云爲してゐるのを見て、少からぬ妙な感じに囚へられた。何も今、抱月氏の評語を事新しく轉載する必要はないが、矢張り氏も治兵衛の藹然たる胸中、態度、小春の義理と愛憐との板挾みの苦痛に同感を有してゐられるやうである。こゝが面白い。然しその評語の上には、何故治兵

衞がそれ程まで小春に迷つたか、治兵衞心理の内部を突詰めようとせられたのは、抱月氏の言には殆ど影を見ない。唯、確然これに論を立てゝゐられるのは、これも故人の大西操山（祝博士）氏である。がその操山氏の評と雖も、疑問の提出に終つて、自分の如き、娼婦と家婦との中で、娼婦に迷つた肉体からの細かい治兵衞の移動を露骨にせられたのは、無かつたやうである。深刻な疑問を起されたのは、哲學者の、晩年もとにかく普通人として終られた、一向世評にも（家庭悲劇が）現れなかつた大西博士である事と、寧ろ俗塵なりに戀愛關係、一歩進んで近松物といつた旣成概念より批評せられてゐ、己身的に人間的にこれを反省してゐられなかつた（操山氏に比較して）と見る抱月氏の方に、大へんな晩年と最後があつた、形は變つても小春治兵衞は、抱月氏須磨子ではあるまいかと思はれる所に、運命な皮肉さがある。やはり抱月氏は治兵衞の如く、「肉体愛」の前には、單なる孩嬰に過ぎなかつた。と自分は思ふ。自分は今抱月氏須磨子の論、研究ではないから多言しないが、要するに、須磨子を一娼婦たりし昔の小春に比するは酷かは知らぬ、然し抱月氏須磨子両者の連環には、そのかみの治兵衞小春と同一ものが通つてゐた、と慥かに思ふ。それを藝術の爲にといふは、丁度治兵衞が持つて引つけたやうな「言分が立たぬ」といふ理窟と同様。抱月氏等の場合の太兵衞は、例のあの晩年うるさかつた世評ではあるまいか。最初好配偶の感あつた夫人あり、且つその夫人との間愛兒數人あつたことも、更には意地で始まり意地で終つたやうに見える須磨子であつた事も酷似である。

後の一有島武郎氏の場合も然りである。然し此の有島氏の場合には、抱月氏等程に理解と同感が出來ない。抱月氏の場合は、「天網島」以來同様の形である。抱月氏からあの藝術、學問、

凡て近代意識の多少を取り去つて終へば、直ちに治兵衛その人ではあるまいか。須磨子は、唯舞臺を引去れば直ちに小春であつたらう。

◇

妖艶な肉体の國。男性をしてあらゆる痴夢に耽らしめ、又は趁らしめようとする。悲惨なる哉ではあるまいか。然し此に於て幾多の所謂戀愛悲劇が起り、此に近世文學以來、滔々乎として所謂軟派は滅びないのである。

たゞさうした欲求、それが今日も猶ありうるのは、古い傳統を嗣いでゐる我々としては當然な事である。が我々は、唯かうした危險期に對して如何すべきか。無論我々だつて用心してかゝるものの、いつ如何なる機會、運命のいたづら（又は眞劔さ）に於て、治兵衛たり抱月氏たらざらんとすとも得ないかも知れぬ。さうした時、我々は、如何にして中正な態度をこれに執るべきか。無論これには、我々の家庭が、（諸君よ、姑らく記述が男性本位なるを許せ）人間としても享樂せられ、夫婦關係が原人生活其儘弛緩なきもの充實せられたものであることを要求し、（若しこれが叶はない者にあつては、また別に法あり。それは、我々の轉氣方法を更に度を深め強めたらどうか。然しこれは運命的に貧亡籤を抽いた人である。何とか當事者同士相談して、方法を講ずるなり、又は精神的に全く轉氣するか何れかであらう。）尙、その上の用心には、我々の周圍に蠢動（これはちと苛酷）——否浮動する實形具有の娼婦美に對しては、それを傍觀するも可であらう。（見ざる聞かざるの庚申では駄目だ。どうせ視野に入るに決つてゐる）。然しこれ以上の夢、幻想の尊嚴、絕美、神の如く惡魔の如く、妖艶なる、存在を拒否せらるゝ程の最高

の娼婦美を、自己胸奥のみに描くべきである。廻り冗くいうたが、それが自分の經驗からでは、「江戸軟派」であるといふのだ。――とんだ「江戸軟派」の吹聽やうなものになつてしまつたが、これで眞面目、何も自分の著書を斥してるのではない。一般の軟本近世物の總稱、人間誰しも一度は多少とも興味を感ずべき軟本の中、情癡に於て、幻想に於て、純一無雜に於て、また崇むる妖艶美、絢爛たる豐醇なる性の殿堂美に於て、現代のそれよりは、比較的多種多樣なる、彼等江戸期にありといふだけである。然し此の軟本類の功德に就ては、嘗て謂うた事があるから、冗うは說かない。

◇

作者側で、眞實娼婦に慾り、丹念に娼婦を崇めたものは誰であらうか。言下に、京傳あり矣（とこんな感動詞までつけて）云ひたいが、姑らくそれは後廻しとして、昔を査ねると「近世文學」文藝の上で）小說畠の西鶴、其磧。及び金魚、谷峨、歸橋等無數の洒落本作家、さては喜三二（初世）の類、京傳を通り越して、三馬、一九、馬琴、種彥、春水、曲山人、鼻山人、金水と斯う擧げて來て、どれもこれも好色道には、皆一かどの通人曉士ではないものはなかつた、だらうが、特に娼婦を絕對なりとして、それに價値を認めたものは、どれといつて僂指に苦しむ次第である。西鶴だつて、娼婦と母婦、情婦と家婦との多角關係から來る人生悲劇喜劇に理解はあつた。冷徹な批評眼はあつた。然しそれが爲、自分が体驗家として如何程の耽溺を積んだかは、疑問である。江戸の一蝶の如き純幇間ではないにしろ、多少遊里に春秋を送る經驗は、其の富裕な知己の類から得たとしても、程度は相變らず作家としての觀照さを忘れなかつたらう。

そこが彼の冷たいが然し科學的な處である。其磧の類は、これは冷徹さは無論ない、西鶴の如く(西鶴は自然一種の俳味から出發したのかも知れぬ。)低徊味はない、が彼らは唯さりたて、一娼婦に對する眷戀の情といつたものなく、唯放恣な不純な戀の漁り人だつたに過ぎなからう。酒落本作者は、寧ろ彼らの筆にした癡漢とは正反對。溺れざる事、透徹せる事を以てよしとし、また誇りともしたであらう。即ち理性に於て秋旻の如きもののあるを彼らは最上としたに違ひない。我を守り相手の我をなみする。彼らの書き物（特に教草の類）と同様を以て理想としたらう、したがつて女に誑かさるゝ事を以て最上の恥とした、此方が彼方を誑かしてもである。

三馬、一九もまた此風か然らずんば、比較的に、恬淡なりしか否かの相違のみであらう。種彥は、冷徹水の如き、古への西鶴風がありはしなかつたかと思へる。(贔屓目かは知らぬ。) 春水以下は、寧ろ古への一蝶よりより以上の程度の花街の地廻り連、(藝者と花魁との方向の差は時々ありとしても) 大した熱もなく、受けるが爲に唯書き、著した、要するに中學生程度の戀の体驗であらうと思ふ。その證據には、書かれたものも、中學生程度——せゐ〴〵本銃擴つて、そのくせそれを何處へ忘れて來るかも知れぬといつた靑年團程度を讀者に對象としてゐるに過ぎぬではないか。其他淨るり、歌淨るりを含む）脚本、浮世繪等を通じて、現に近松のやうに讚美はしたらしいが、趁らなかつたといつたものは幾らもあらうが、自分の探してある本當に純愛し單一にこれに趁つたものは余り見かけぬ。唯ありと思はるゝは、自分の謂はんとする京傳を除いては、豐後節の豐後掾と、浮世繪師の或る人々と思はるゝだけである。豐後掾の事については、傳説まじりであるから何ともいへない。浮世繪師では、適例は、歌麿。英泉

であるが、(他は、利用の程度が、他派の書家に比べて、多からうといふだけである。)歌麿は彼等娼婦より轉じて、自分の偶像に醉ふべく急であり、英泉はまた餘りに彼女らを自己の傀儡化し、醜化してゐた。(此の意味は、肉一方に濫過したと云ふ事也。)さうして態度も單一ではなかつた、即ち蕪雜であつた。

そこへ來ると、天下一品なるは、京屋傳藏、山東京傳氏だと思ふ。京傳が、扇屋の番新であつた菊園に岡惚れ、以後菊園に緣み、菊亭、菊軒、あらゆる方面に、楣間に雅號に、時には戯作冊子の間に書入れなどして、自家吹聽した事は人の知る通りであるが、しかもそれは、念願叶つて宿の妻となした寛政二年に始つてはゐない。暗示風ではあるが、彼女―菊の機嫌を得べく、天明六年の自作、「惡七變目景淸」の黄表紙などに、既に現れてゐる如しである。

然し京傳だつて無論初めから此の菊園一人ではなかつたであらう。然し配偶し得てからのあの奉仕ぶりの可憐さに於て、(殊に相手菊の、あの誠實なる怜悧なる家婦風に於て)彼は天下の至幸者。即ち、治兵衞に似て、小春とおさんとを併せ發見した、しかも家婦情婦の難かしい議論も起らない。菊の一身にであるといひたい。

右一篇、病間左脇臥の走り書也。(三月廿五日。夜

寄贈紹介

官職要解　和田英松著

四版の修訂版であるが、何より絶版物騰貴の際、此の廉價提供あるは芽出度い。江戸時代の官職にも觸れてゐる事は勿論である。（菊、四百二十頁。參圓五拾。東京神田錦町一、明治書院）

源氏物語の新研究　手塚昇著

「過去九百年の源氏物語に關する評論考證の研究史を背景とし、而も原作者の創作心理に立入つて研究評論した」ものといふ。金子元臣氏などのやうな定離な逐次の譯も必要であるが、此種の古典の概論も、新人によりて企圖せらるゝといふ事は、大に慶すべき事であらう。（四六判、參圓五拾。東京市赤坂傳馬町、至文堂）

川柳江戸名物　西原柳雨著

「讀賣」（三月十四、十五日）に感想を述べた。仍而略く。好著（四六判。貳圓五拾。東京日本橋通四丁目五、春陽堂）

國文學史總說　藤村作著

いゝ本が出來たものである。同じ物でも芳賀氏の「小さい國文學史」などよりは、勿論量も少し多いが、はるかに信頼に富んだ内容である。「小さい國文學史」でもあくなるのは尤もだが、然しあれでは一寸中學の教科書にも無理な位、中心作者や必要事項の剪採が適當でない。其點此の新著は、巧いものだ。細に趁らず、簡に失せず、總説といふ名に相應しい。圖版も大にいゝ。好著である。（菊判、三七四頁。貳圓五拾。東京市神田區表神保町二、中興館）

古今二葉柳

川柳寺雀羅氏校訂、自費出版本の川柳複製本の第二編である。体裁等第一ぺんより更によし。内容は、種彦選になれるもの、珍と稱せらる（和紙和裝。單式印刷。八拾錢。東京市外野方町池袋一五八〇、能勢久一郎）

書誌　鄕土誌料增大冊

「市史及參考書に就て」から「江戸時代蝦夷關係書目」に至る約二十項、大發展、大活躍大充實と謂ひつべし。但し少々の難は、印植字の不体裁な事だ。（菊一四六頁。壹圓。東京市神田區表神保町十、坂本書店）

國語と國文學（四月特別號）□新小說（三月號）□新小說（明治大正文藝運動大觀號）□性の知識（三、四月）□風俗研究（第六十九）□同（第七十）□文章往來（三月號）□國學院雜誌（二、三月號）□歌舞伎（二、三月號）□川柳喰鈴（二三月號）□やなぎ樽研究（三月號）□峯碑史蹟研究（二、三月號）□サバト（新年號）□歷史地理（二月號）□同（三月號）□早稻田文學（三月號）□新舊時代（二月明治初頭風俗研究增大號）壹圓□淸元研究（二、三月號）□長唄（二、三月號）□延壽情話（三月號）忍頂寺氏個雜□早稻田文學（四月、明治文學增補號）名篇に富む。壹圓□ほん道樂（三月）。

著者より

今月の編輯はこの雜誌創つて以來のひどい目に遭つた。實は、二十二日夜から突然三十八度七分に高熱、どうも本式に流感に罹つたらしく從つて原稿も二十二日までには十二頁分より出來て居なかつた。相變らず三十八度内外の熱であつた二十五日晚、無理矢理に「娼婦に……」の八頁を脫稿した。誠に苦しかつた。材料一つなしで書きつゞけたから、誤あらば來册で訂正する□二十六日に少し熱が下つたので、他にのつぴきならぬ用事があつて外出したら又ぶり返してその後三日間全く臥床、本日午後印刷所からの本文二十頁の校正出來によつて、今晚驚いて表紙裏三頁分をこしらへたわけです。表紙第二の裏は未だ他に豫定がありましたが、丁度あの篇が行數においで適當なので、他の物は後廻しにする事にしました。□今日の最高熱度は三十八度七分それでも夜になると一度は減じました。元氣もあり食物、オットこれだけは流動物ですが、平熱になるまで寢て居らねばならぬといふ無上命令から起つた時間の徒費と仕事の遲延とが悔しくてならぬ。（三月二十九日夜十二時、代筆）

定價表

一冊	廿五錢	郵税貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	税共
十二冊分	同 貳圓八拾錢	

（郵券代用は一割増の事）（前金[illegible]）

大正十五年四月二日印刷
大正十五年四月五日發行
「貳拾五錢」

禁轉載

編輯兼發行者　名古屋市[illegible]　尾崎久彌
印刷者　名古屋市[illegible]　英北貞[illegible]
印刷所　[illegible]　共榮社
發行所　名古屋市東區[illegible]　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七二番

大正十五年四月廿七日印刷納本
大正十五年五月一日發行

貳編第十四冊（通編第四十四冊）

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第十四冊（通編第四十四冊）

本文

蓬萊山人考
○附、猿猴坊紅月成が事
再び「膝磨毛」について
安永の江戸世相一斑
涉獵謾筆

渉獵謾筆

○魯文の二代廣重推奨

二代廣重は、相當な伎倆を有し乍ら薄倖な一生を送つた男である。然し師名襲名當時間もなくは、まだ彼の得意時代であつた。文久三年亥春、魯文の序ある彼の畫本「諸職畫通」初編(松林堂梓)を見ると、彼と寺朋友であつた(魯文の自稱)魯文の序は、彼を褒むる事最も努めたものがある。が此が強ち過褒ではなく、或はこれが當時の彼としては當然な事であつたかも知れない。自分は此の魯文の序に興味を感ずる。一は二代廣重と魯文との交情密なるものあつた一證、一は當時二代廣重の地位評價を知る一證ともならう。其要文、如左。

(前略)茲に立齋廣重先生、亡父の意を繼木の梅。未(まだ)青軸の莊年(わかうど)ながら。其業前(さき)の翁に耻ず家の風をも吹傳え、芳き名を四方にかをらし。出藍の譽いと高かり。(中略)嗚呼此父にして此子あり。(云々)其證人は寺朋友の
文久三亥春　假名垣魯文書之

○甚句は古し

甚句は、人名よりともいひ、(人名說の一說は、嘗て本誌に、名古屋市史よりの孫引を發表した。)其人名にも異說あり、越後の大盡で大阪女郎を買つた甚九(人名)だともいひ、或は神供の歌の訛、又は地句(地ン句となる)の意だとも、諸說紛々たるものあるが、地方的甚句の起原は先づ措き、江戸に於けるじんく(當初は、如何なる文字を當てたか不明)は拗くとも享和二年には、相當な流行を花街其他に持つてゐたらしい。その確證の一を發見したから述べる。即ち一九(初代)作の洒落本「素見數子」である。これは享和二年版であるが、中に「じんくにしよう」といふ所がある。降つて同じく一九の文化戊辰(同五年)版の「賀流人行来」(享和元年版「賀流思外幸」の改版)にも、やはり道樂亭主の主人公が、酒に醉つて、「じんく」を唄ふと書かれてゐる。即ち此の甚句が、享和二年頃或は以前數年(不詳)すでに江戸の市井に流行してゐたことは、疑ない。すれば、江戸に於ける流行唄としては、都々一よりも(都々一は、文化以後)古しと思はれる。以上、不十分ながら、「素見數子」等の發見をその儘。

○新刻圖彙について

自分が嘗て物した「驅蟲のひま」(本誌昨年七月號)の中にとり入れた小松百龜畫作「新刻圖彙」に就て、なほ詳細を知り得たから、お傳へする。先づ此本、家藏本が貼外題遺失のため、序冒頭の名を用ゐて「新刻圖彙」としたが、今善本を某氏より借覽するを得て、貼外題は、「訓蒙好色圖彙」であり、その春夏秋冬の全四冊本であることが分つた。自分の說明した、家藏本は、春の巻即ち第一巻であつたのである。中味は一切自分の紹介通りである。夏以後の三巻の中、借覽の某氏本は秋の巻鈌、仍て夏と冬の二巻の內容一斑をお傳へしておく。

夏の巻。(本文冒頭は、巻の二とある)無色軒纂輯悅歷訂正とある事春の巻と略同様。內容は、分つて人倫、支体、器財の三項。人倫は、男女髮の圖、毎丁の上欄に亙りて數個あり。本文は男、若衆、野郎、女、孃、嫁、姿といつた說明である、支体も半丁、眉、眼、鼻などの圖を入れ、說明、けだかく猥である。器財は、全二面、硯玉章、匂袋伏籠、まくら等の圖があつて、說明はワイ具にも及んでゐる。此の圖の一に、不知足山畫と落欵がある。即ち百龜の自畫たる事を明瞭に傳へてゐる。

冬は、巻之四、木公齋畫と最初にあり、品目五種を示した初めの半丁があり、次に畫ヒラキ九面(惡摺)を載せ、附するに、品目通りの小話五をものしてゐる。その一は幼娘に智惠付て初花見する云々といつた題である。初めの九圖は、成程雪鼎よりは稍軟かく、祐信風であるが、その中に何處かに春信風の艶美な韻を漂はしてゐる(彼は祐信に出途し、春信に親炙したと、此よりも謂はるゝ好標本である。)秋(巻之三)が如何の体裁であるか、知りたいものである。

○鶺鴒臺

前にもいうたが、「艷說秘事枕」上の中本型赤本(末期もの)を見ると、「閑月庵山曉が戯に工夫を以て製する所也。(云々)」とあつた。

蓬萊山人考

我等の知る限りに於て、此の蓬萊山人と稱したもの、數人を見受ける。先づ、黃表紙作家としての蓬萊山人龜遊、同じく蓬萊山人龜遊女。洒落本の初期有數の作家としての（後は黃表紙二部の作家としての）蓬萊山人歸橋、及び二代目焉馬事蓬萊山人、以上の四名である。中、比較的、昔から分解に誰しもが困つてゐるのは、第一第二の、龜遊と龜遊女とである。即ち同人なりや異人なりやの問題である。さうしてそれが未決の問題である。が、自分はそれを何とか斷決して見ようといふのである。是れ、此の稿の成る主なる動機でもある。乃ち此の考、順序として此の難問たる龜遊、龜遊女に就て、先づ愚見を述べ、更に歸橋以下に及ばうと思ふ。

蓬萊山人龜遊として署名せられた黃表紙は、「青本年表」等に據ると、例の『黃表紙百種』にも收められた「敵討女鉢木」（安永六年。自畫）と、「江戶贔屓八百八町」（同。自畫）と、「古々路の鬼」（同八年）の三部を見るのである。然るに、こゝに迷はされて來るのは、「青本年表」安永六年の作者の項に、大久保氏ならん附記に左の如くある。その龜遊、龜遊女同一人說からである。曰く、

蓬萊山人龜遊　此の作者の名稱に就ては大に疑はしき點あり。幷は此以外に蓬萊山人龜遊女といへるがあり。（中略）龜遊と龜遊女との二人に就て考按するに、予は同一の作者なるべしと想像す。其所以は、龜遊の作は、本年に始まり、翌々安永八年に一作あり。又龜遊女の作は、安永八年より一年を隔て天明元年に始まり、同四年には喜三二門人として署名しあるを見ても、始ど同時代に此両名の作者ありとは思はれず、全く同一の作者たるべく、其人は蓋し後の喜三二即ち二世喜三二なるべしと信ず。併し、二世の喜三二は明和五年出生なれば、本年は僅に十歳著作し能はざるは勿論なれど、世に持囃さるゝ本阿彌光悅の愛兒なれば、所謂丹那藝にて此作者は蓋し喜三二其人

なるべしと想像せらるゝも、別に確證なく又牽强附會の嫌なきにあらざれば、玆には予の臆說となすに止め（下略）

といふ項である。さて弱つたものである。龜遊即ち龜遊女、それが喜三二の後の二世喜三二（本阿彌の悴、後狂歌判者として有名な苛藥亭長根と同人。）を引立てる爲の、それも十歲の小兒の爲にの强いての代作といへば、何が何だか分らなくなるのである。殊に、天明元年以後現はれる亀遊女は、事によつたら本當の女性で、且つ初世喜三二の誠の弟子であつたらしくも思へるからである。（後說）

今、自分は、此の龜遊女ならざる安永六年以後安永八年に亘る龜遊について、全くの偶感を披瀝したい。大久保氏流の臆說よりは、まだましとひいき目に思はれるもの。それは、龜遊は全く初世喜三二、無論二世喜三二の爲にする代作ではなくして、初世喜三二自身の假號の數多の使ひ分けと見たい。現に洒落本「娼妃地理記」は、安永六年初世喜三二の作であるに拘らず、名は道陀樓麻阿と洒落てゐる。と同じく、一方同じ安永六年に、喜三二の名で「鼻峰高慢男」其他を發表、同時に別の假名の蓬萊山人龜遊で、「敵討女鉢木」以下、三部の作が（安永八年に亘つて）あつたのであるまいか、といふのである。それには多少の自分の憑據もある。即ち喜三二の別號龜山人といふ事からの自分の思ひつきである。龜山人、その龜遊ぶ處は蓬萊ではないか、即ち蓬萊山人龜遊と。若し別人ありて、しかもそれが弟子身分のものであつて、師の初世喜三二から此の名を貰つたといふなれば、餘りに此の龜山人と龜遊と間違はれ易く、且つ似よつた名をそのまゝに與へる、喜三二のまだ賣り出し當時としては、頗る可笑しいとも思へて來る。それに彼の戲作の發途は、安永六年であるらしいから、（「作者部類」では、安永四年の不詳「吉原饅頭」三二を實は彼の作で、即ち其の處女作としてゐるが、どうか。）

〔尙、滑稽本の「古朽木」は、安永五年の稿ではあるが、出版は遲れて同八年である。即ち彼の正確な戲作界の活躍開始は、やはり此の安永六年の來說に歸しよう。〕同年直ちに弟子が生じたといふのも考へ物である。（名成した後の、讓渡なれば、いゝかも知れぬが。即ち自分の臆說〔後說〕の如く安永八年〔己に喜三二として賣り出した頃の〕に、蓬萊山人歸橋と、喜三二自身の蓬萊山人龜遊との交涉の如く。）とにかく道陀樓麻阿の例もあり、且つ處女作頃の事ゆゑ、何の名で當るかも分らぬといふ商賣上の意味もあつて、「これは然し大分臆說であるが」一人にして二個の名（洒落本其他では數個）で黃表紙を書き同年に發表してゐるのではなからうか。さうして安永八年に、尙龜遊の名に一作あるのは、自分の前段の解釋からは、尙この時これを別用した。然しこれを最後にして、喜三二一方に移つたと見るのである。チン說として參考に資せられたい。

次の龜遊女の正体如何。正体というても枯尾花よりも尙一層分らぬ朦朧たるものであるが、先づ龜遊女の名の下に發表された黃表紙をいふと、

嗚呼不儘世之助噺　三　淸長畫〔天明元〕　●龜遊書草紙　二　歌麿畫〔天明四〕

の二部である、他には出でなかつたものらしい。此の天明元年、四年の龜遊女（悉しくは蓬萊山人龜遊女）は如何の出自にあるであらうか、此の問題である。大久保氏は前揭の如くこれも初世喜三二の二世喜三二引立の意味の代作のやう說かれてゐるが、これは可笑しい。といふのは、どうも初世喜三二ではなく、別人で、全く初世喜三二と師弟關係にあつたものらしいからである。それには、天明四年の「龜遊書草紙」にある喜三二門人といふのを見るまでもなく、それより以前、天明元年出版の草双紙（黃表紙）類四十七部に就て、評語を綴つた「菊壽草」（蜀山人の作）の中にも、すでに、きつぱり別人として、しかも女性に取扱はれゐるからである。初世喜三二事手柄岡持〔喜三二の後の狂名。恐らく淺黃裏成な本阿彌氏に讓つた後、即ち天明末の改名であらう。〕とも親しい交友關係にゐたと思はれる蜀山人

が、〔天明三年版「飛花落葉」に、蜀山、喜三二、菅江等と共に序し、又、喜三二の遺稿「平荷集」に、蜀山人親しく序してゐる。以て知るべし。〕若し喜三二の他に龜遊女なく、或は二世喜三二の爲の代作ともいふべきものならば、これ程にまで一個の別人實在的に書かぬであらうと思はれるからである。曰く、「世之助噺」の評で、

「……喜三次門人、婦人龜遊初舞臺の新下り、……（中略）しんの婦人の氣取ありがたヱ。師匠はよし、段々ひいきも出來ますは今の間」

とある、これである。初舞臺とある點も、これが龜遊の處女作であり、且つそれが女性である事は、再三念を押してゐるのでも分る。全く二世喜三二の代作などとは意味が違ふと思ふ。即ち龜遊女は、女性で、喜三二の弟子で、天明元、天明四年頃には明かに存在した、と自分は見るのである。（尙、以後に其の作を見ないのは、天分これに伴はなかつたか、又は何らの事情であらう。）然らば、前の蓬萊山人龜遊と、此の蓬萊山人龜遊女との名の上の交渉は如何。これには、私としての答は斯うである。曰く、初世喜三二即ち龜遊と見て、喜三二は、別號の蓬萊山人龜遊（それも一時シャレに何が當るかと思うて、一三回使用したに過ぎぬペンネーム）を、今度新入の弟子の或る女性に其儘讓つた、即ちこゝに龜遊女が出來たといふのである。即ち蓬萊山人龜遊は初世喜三二自身、即ち龜遊の別號からは初世、蓬萊山人龜遊女は初世喜三二の門人、蓬萊山人龜遊の號からは二世と斯う見るのである〔尙、龜遊、龜遊女同人說の青本年表と同樣なものには、「小說家著述目錄」（中根氏）の如きもある。〕

以上で、厄介物の龜遊と龜遊女とは擊退である。次は第三の、蓬萊山人歸橋の蓬萊山人號である。

此の歸橋は、洒落本初期の作家として、我等の敬慕する名作家の一人ではあるが、さてその作としては案外尠い。これも初世喜三二などと同じく士分の出身、書くが商賈となつた京傳以

後の純戯作者とは、素地徑路を異にしてゐる爲と思ふ。（然し同じく士分でも初世喜三二の方が黄表紙洒落本等、まだ多作である。が後年、殿から戯作の筆を禁められた事は、喜三二、歸橋同樣である。が、歸橋の擱筆天明六年(?)であるに拘らず、喜三二は、以後の天明八年猶「文武二道萬石通」の名作を出してゐる。が其の喜三二も翌寛政元年には既に絶え、二世喜三二の戯作を見てゐる。畢竟以て境遇相似たりである。）

朋誠堂喜三二ほど通俗化しられてゐない歸橋のため、その洒落本及び他の戯作書目を試みに爲してみよう。（年代順）

〔洒落本〕 安永三年刊、婦美車紫鹿子（天明再版本による。初版本には、歸橋の名なく、浮世遍歷齋道郎苦先生とある。）●安永八年、伊賀越合羽之龍●同、家暮長命四季物語●同、美地の蠣殻●天明元年、通仁枕言葉●同二年、富賀川拜見●同三年、居續借金●同、遊婦里會談。（以上、八種）

〔黄表紙〕 天明五年、間似合噓言曾我、清長畫●同六年、壁見細身御太刀、政美畫。（以上、二種） 計十種。

即ち彼自身、後期は黄表紙に移り、しかも二部の作のみで他は絶えた。これは彼の創作力の涸渇では無論ない。前にも謂うた藩侯の禁に由つたものであらう。洒落本から黄表紙に移つたに就ては、これは洒落本の軟中軟を避けて、諷刺の黄表紙に入つたと見るべきよりも、安永天明へかけて折角洒落本作家有數として賣り出した彼も、（「作者部類」に曰く、「この作者の洒落本毎に出て、小本作者の巨擘と稱せらる」とあり。）後進京傳等の活躍に遭つて自知の明があつて、即ち方向を轉じたと見るべきではなからうか。がその折角方向を轉じた、しかも一時相當以上の評判を得た「噓言曾我」の作あつたに拘らず筆を此の世界に絶つたのは、是は、御同樣彼以上の意志の結果と見るのである。

我等は今歸橋の數種の洒落本が如何に京傳等を生む搖籃であり、殊に「通仁枕言葉」や「居續借金」などは、西鶴などの昔の浮世草紙よりは更に進んだ、如何にそれが体驗を基礎とした露骨なる遊蕩描寫、情痴描寫の元であるかは、此に略く。唯、此の二者を飜刻編入した自分の未刊「洒落本集成」によつて見られたいことを僅かに述べておく。（「居續借金」の實感等については、嘗て、朝倉無聲氏も「江戸趣味」で、幾分紹介せられた事もある。）

其の蓬萊山人歸橋の此の蓬萊山人の雅號である。これに就て詮索して見たい。これには自分の臆斷を加へておく。それは、彼歸橋が、初世喜三二ども、藩は違へ、（喜三二は秋田藩、これは高崎藩。然し共に戯作狂歌に遊ぶ）趣味から、或は直接間接に、當初何らかの縁故にて、（歸橋は、赤良や菅江や燕十や、當時の半戯作の通士（「案外ピンボウ通士であつたらうが」とは戀意であつた。それは「居續借金」にも現れてゐる。）即ち彼の交友たる赤良（蜀山人）や燕十や菅江を通じて、また喜三二とも歸橋の河野某は知りあつたらう。即ち平澤平格の秋田藩士たる戯作名朋誠堂喜三二狂歌名淺黄裏成と、高崎藩士たる河野某後の戯作名蓬萊山人歸橋（彼の狂歌名は、大の鈍金無だつたといふ。）とは、交友上にも容易に握手の機會があつたらう。即ち嘗て浮世遍歴齋道郎苦先生の仮號に戯作を内々ピク／＼もので始めてゐた彼は、恰も安永八年（此の年、喜三二と同人と見ろ蓬萊山人龜遊の名の「古々路の鬼」出づ。）、知りあつた初世喜三二の別仮號と同樣の蓬萊山人を受け、（又は進んで用ゐ）名だけは龜遊と紛らはぬため歸橋と名づけたのではあるまいか。一個文献の確證もないが、歸橋は、當時初世喜三二に私淑、又は直接之を淑しとし、從つて其の別號を其儘受けた、或は、最少限度、交友の彼喜三二の別號にヒントせられて自分もこれを使用したらう、といふのが、自分の臆斷である。（が、一方に於て之を打消す考へ方もある。即ち變名ではあれ已に安永三年に一作をものした彼は、寧ろ作過程に於ては、喜三二の先輩である。私淑も兄事もクソもない、蓬萊山人號は全く暗合ではあるまいか。即ち喜三二のは龜山人から起り、歸橋のは、居住の地其他の意味から來て

はゐないか。然し蓬萊とは、何の地点を斥したかは未考。唯、安永八年頃には、歸橋は「龍の腮」に住んだとは、自著の序にある。）とにかく、安永八年に於ては、一方、蓬萊山人龜遊の名の下に、黄表紙の作、一方蓬萊山人歸橋の名の下に酒落本（伊賀越、四季物語等）があつて、歸橋の酒落本界に於ける大當りは、忽ち、彼をして蓬萊山人の本家たるかの如く、しかる觀を持たしめるに至つたのではあるまいかと見るのである。然し此の蓬萊山人龜遊（自分が初世喜三二と同人と見た）と同歸橋との、此の蓬萊山人號の類似については、まだ二考も三考も之を必要とする餘地がある。が何がなし、自分は、此の二者、全く偶然の類似又は、沒交渉とは何としても見たくない、また見させない、さうした或る見えざる暗示を自分は與へられてゐるのである。

第四の蓬萊山人事二世焉馬、これには問題は起らない。立派に、蓬萊山人歸橋を嗣いだと諸說一致の如しであるからである。一ばん確かと思へるのは、蟹行散人（馬琴なるべし）著の「近世物之本江戸作者部類」の中に、

後の烏亭焉馬

八町堀に住す、武辨の人也（寄騎の弟也と云）名弘會觸の折、初めて對面して實名を聞しかども忘れたり。（通稱山崎賞（イ賞）次郎、父を助左衛門といふ、町與力なりき。（欠補））はじめは松壽堂永年と名のりて狂歌を旨とし、後に六樹園の社に入りて古人蓬萊山人歸橋の名號を嗣て、文政の末古人焉馬の名號を焉馬の門人鱗馬實馬に乞受て、又烏亭焉馬と改めたり（下略）

とあるが、之が定說の元を爲してゐるらしい。とにかく六樹園が、どうした關係で故人歸橋の名を預つてゐたか、（或は芝居道の如く、預つてゐたのでなく、六樹園の單なる諒解か、又は二代焉馬勝手の襲名かも知れない。）或はどうした緣故で此の男（後の二代焉馬）が歸橋の蓬萊山

人の名を特に嗣いだか、それ程この後嗣者たらんとしたか（或は當初彼は、此の名を受けて、軟本の大家たらんとしたものかも知れない。）は、不明であるが、がこの歸橋の後嗣を欲して、これを果した事だけは、同時代、面晤のあつた馬琴の記述ある以上、事實である。さうして二代焉馬の山崎氏が、蓬萊山人を稱したのは、すでに二代焉馬とならざる以前の事で、一方猿猴坊紅月成として盛んに和印本を書きつゝあつた文政頃、すでに蓬萊山人と別稱してゐたらしい事は、その彼が作の丁度此頃（自分の知る例は、文政八年頃）の和印本に、蓬萊山の麓に永年（彼の狂歌名松壽堂永年と何處かに共通があらう。永年と永年。偶然の一致では恐らくあるまい。）をおくると稱して紅月成と署名してゐるのによつて知れるのである。焉馬となつて以後は、相當合卷物其他に作を見受けるが、[illegible]此の蓬萊山人一手の時代は、公然たる戯作は無かつたやうである。書目、年表に見當らない。（唯、此頃蓬萊山人名の下に狂歌本は物したらしい。即ち文政九年「狂歌百將圖傳」（國直畫）の、西來居未佛との共編なる物がある。）當時は、彼自稱の如く、和印本百余種の濫作と及び、例の土器お傳の秋波を受け又は受けようとして、密夫番附の一人に書かれたりしたのであらう。文政末焉馬と改めた。（初代焉馬は、文政五年六月二日年八十で死。）その時期は不明であるが、馬琴の言及び、青本年表が文政十一年「懷中鏡山開」（國貞畫）等を以て彼（二世焉馬）の作の最初としてゐる如く、文政十一年頃であらう。但し蓬萊山人號はこれで捨てゝ了つたのでは無論ない。彼は遙か後の安政四年に、「青樓心得草」の中本洒落本形一冊（署名は、序、蓬萊山人）を出してゐるのでも知れる。

○餘分な事であるが、此の「青樓心得草」は、自分に散々厄介をかけた物である。初め原本を見ないうちは、この本序に丁巳孟春とあると聞いて、洒落本樣といふ以上、それが、丁巳といふのは、無論寛政九年の丁巳と考へた。殊に蓬萊山人と聞いて愈々。然し蓬萊山人歸橋は、寛政初に筆を絶つたとあるが、さて面妖なとも思つた。處が原本を見るに及んで本の体裁に綸の（芳幾カ）樣子、凡て末期本、矢張り六十一年違ひの安政かと思はれてきたのに、搗てゝ加へて、內容を

よく見ると、京傳の「息子部屋」(令子洞房)と全く同一、唯序文だけが新しく、本文は、目錄から何もかも全く同樣、否剽窃、と知つて、呆れたものである。從來紅月成で、相當に敬意を表した末期歡派の一雄星二世爲馬ともあらうものが、當時の不道德、藝術的良心の欠陷には呆れさせられたものである。然し此本、序に蓬萊山人(印に三闇人)とあるのみで、何處にも著とは斷つて居ないから、彼は或は辯解する積りかも知れぬ。

が、とにかく安政四年に、尚彼、蓬萊山人と稱した一證左である。即ち彼の極晩年(文久二年七月二十三日享年七十二歲)、芝居細見の「三葉草」などを出した天保初めとは雲泥の落魄時代である。

以上で、略々、自分の蓬萊山人考は盡きたのであるが、尚、序でに、折々間違へられてゐる猿猴坊紅月成が、二世爲馬(二世蓬萊山人歸橋)である事の自分の從來の斷案をきつかり述べておきたい。事は、二世喜三二(本阿彌氏)にも拘り、初代爲馬にも拘り、又初世喜三二にも交渉はあり、本稿の附尾として當然と思ふからである。

○附り、猿猴坊紅月成が事

紅月成を二世喜三二(芍藥亭長根)だと見る一說は、「增補靑本年表」の寛政元年、作者二世喜三二の項から來てはゐないか。それには、「(前略)明(朋)誠堂喜三二の門に入り蓬萊山人の號あり(此の蓬萊山人の號ありし事既に誤。これは「靑本年表」氏の、蓬萊山人龜遊、同龜遊女を初世喜三二が爲した二世喜三二のための假號と見、結局この號は二世喜三二を意味するとした推定から來た錯誤であらう。芍藥亭=二世喜三二の全著作刊行物を見ぬ以上は斷言は出來ぬが、恐らく此の「靑本年表」以外の示す如く、二世喜三二には蓬萊山人の號はなかつたものと自分は思ふのである。久彌。二)今年(寛政元年)二世喜三二を襲ぐに及び淺黃裏成の號を讓らる。(これも誤りで、淺黃裏成は、寛政元年の喜三二襲名以前既に讓られたものである。)狂名を芍藥亭長根と稱し狂歌の判者たり。(然しこれは、戯作に失敗してからの、轉換後の事である。久彌。)別に花咲乙女猿猴坊月成等の號あり。(下略)」とある、これが僞を爲したものと思ふ。此の折の筆者は、恐らく、猿猴坊月成の存在を知つてはゐたが、それと、初世喜三二の俳名の月成(これは諸說一致、事實である。)とを結びつけ、月成――紅月成、同樣の單なる雅號と見て、二世喜三二(芍藥亭)また初世月成の號を受くとして、即ち紅月成を二世喜三二の

事にしたものであらう。でなくば、何處までも蓬萊山人の雅號を二世喜三二に認めて、一方蓬萊山人即ち紅月成の存在を知り、以て二世喜三二即紅月成と混じたものかも知れない。とにかく初世喜三二の俳名月成と、和印本其他作者の猿猴坊紅月成とは、無論、全く彼此繼承の意味なく、別物である。語尾の類似に過ぎぬ。即ち後者の雅號は、是れ雅と名づくる事も憚るべき、例の婦人月經から來た假名である。猿猴坊すでに其の隱語、まして紅(あけ)の月成と來て、其の意を加層、徹底させたものである。即ち此の二世喜三二即紅月成説は、恐らく月成——紅月成、此の類似から來る混同錯誤たるに過ぎぬと思ふ。（勿論自分の見た限りでは、芍藥亭に此の紅月成の別號があつたというてゐるのは、青本年表の他には一個もない。）尙。傍證として謂ふならば、二世喜三二は、寛政元年に黃表紙の初作あり、同三年迄に六部の作があつて、以後は絕えてゐる。即ち戲作を諦らめて狂歌專門となつたのである。隨つて以後の文政天保期のあの紅月成の無數の和印本は、狂歌三昧の、當初戲作に失敗した男の作とは如何にしても思はれぬ事、また當然であらう。念のため。（馬琴も「作者部類」に、「早く戲作の筆を止めて」と芍藥亭に關し明記してゐる。）

第二、初世焉馬かとの錯誤である。これは紅月成即焉馬だといふ説を鵜呑にして、その焉馬が二世焉馬「否、嚴密にいふと紅月成の存在は、焉馬の襲名以前既に數年よりである。故に正確には、二世蓬萊山人（歸橋）後の二世焉馬と謂はねばならぬ。」である事の詮索を遺れた説である。即ち初世焉馬死亡後に紅月成は猶存在するからである。（文政八年の明記ある紅月成（略して月成ともいふ）の和印本ある事前述。）假に一歩を讓り、初世焉馬も同樣紅月成の此の隱號があつたとしても、初世焉馬の生存中は、何ら二世蓬萊山人（歸橋）の山崎氏とは師弟の交涉もない。然るに初世焉馬の歿年たる文政五年以後、中間の文政八年に於て、同年號明記の紅月成署名の戲作がある。然るに二世蓬萊山人の山崎氏が、初世焉馬の門人に乞うて、二世焉馬となつたのは、文政十一年以後の事である。即ち

此の中途に於て、紅月成の隱號が既に存在する以上、この隱號は、初世焉馬には沒交涉、唯二世歸橋の當初よりの假名と見るは、言を俟たないと思ふ。

第三、初世喜三二を紅月成と見るものもある。此の說初世喜三二の俳名月成を直ちに紅月成と混じたもの。且つ、一方初世喜三二は、その戯作者過程が、安永天明間の短期のみに限られてゐる。即ち此の年代の相違のみからも、直ちに了知せらるべき程の、是は自明の事柄と思ふ。

第四、二世歸橋即ち後の二世焉馬が紅月成だとする自分の說である。これは、前に繰返した事によつて自然と歸結せられる事である。即ち紅月成は、蓬萊山人の本號を有した男の艶本上の假名たる事。文政天保、遙かに降つて安政頃に至り、蓬萊山人と稱する戯作者は、所謂文政十一年後の二世焉馬一個である事、例の安政四年版の「青樓心得草」一個の存在からも容易に直感される事と思ふ。（尙、青本年表二世焉馬の項に、「文政十一年作者の項、彼が初世焉馬の門に入り、浮に二世焉馬を嗣いだやう書けるは、是も亦誤と思ふ。馬琴の記述其他の如く、師弟關係なく、死後其名跡を乞うた者と自分は見るのである。とにかく、此男、よ程氣が多くつて、歸橋を乞うたり焉馬を乞うたりしてゐる。折角初めに得た歸橋でなぜ通さなかつたか。間もなく更に焉馬を乞うたのは。これは、恐らく歸橋ハ名が名跡ではあつても既に世人の耳に疎く、然よりも印象の新しい焉馬の方が、かうした考から更に焉馬を乞ひ之を得て、以後この名を以て戯作名と決めたのであらう。が蓬萊山人も別號として終生使用した、然し歸橋は用ゐなかつた。即ち蓬萊山人事二世焉馬と、慾の深い事をしたものと思ふ。從つて彼が六樹園に蓬萊山人歸橋の名を乞うたのは、初世焉馬歿前の文政五年以前の事と思ふ。）

以上で、紅月成考を終る。

最後に、本稿に關係した初世喜三二及び、二世喜三二、蓬萊山人歸橋、二世焉馬の小傳を、正確と思はるゝ程度に諸說を綜合してものしておかう。婆心に外ならぬ。

●初世喜三二。 平澤平格、名は常富、通稱平角、致仕剃髮後平荷と改む。秋田藩御留守役にして、下谷三味線堀の邸内に住す。龜山人又齡山人と號す。戯作及び狂歌を嗜み、狂名は、初め淺黃裏成後に手柄岡持、俳名は月成、戯作名の中黃表紙は朋誠堂喜三二、酒落本は道陀楼麻阿、其他狂詩に韓長齡、尙、天壽、虎耳窟の別號あり。享保二十年生、安永六

年以後天明八年に亘り、黄表紙作約三十種名作多し。洒落本「娼妃地理記」及び同系本遊里小咄風を輯めたる「柳巷訛言」滑稽本「古朽木」及び隨筆本「後昔物語」、狂文「我面白」等あり。天明末、藩侯の命によりて戲作の筆を絕つ。文化十年五月二十日歿す、享年七十九、深川淨心寺内一乘院に葬る。

●二世喜三二。菅原氏、通稱本阿彌次郎右衛門、(作者部類は三郎兵衛)幼名三太郎、光悅七世の孫。滸亭、別に三橋亭、三橋山人等の號あり。蓋し下谷三枚橋邊に住せるが故也。朋誠堂喜三二の門下に入り戲作狂歌を學び、狂名淺黃裏成を讓らる。寬政元年二世喜三二を襲名、以後同三年に亘り黃表紙數種を出す。(一作、三橋山人の別號を以てす。)間もなく戲作に筆を絕ち、芍藥亭長根となり、狂歌判者として斯界に鳴る。明和五年生、弘化二年二月十日歿、壽七十八。黃表紙「新吉原聖賢誌圖」、「聽從淺黃色事」等六種、他狂歌人物志、芍藥亭文集等。其他同判に成る狂歌本十數種を數ふ。(其の最初は、文化十年版「關東百題狂歌集」(京傳、三馬、一九等畫)なるが如し。)

●蓬萊山人歸橋。河野某、上州高崎藩士、江戸に住す。安永天明の間、洒落本八部及後に黃表紙二部の作あり。天明六年以後、戲作に筆を絕つ。蓋し藩侯の命に由るといふ。生歿年不詳。

●二世烏亭焉馬。山崎氏、通稱を嘗(イ賞)次郎といふ。江戸の人、町與力なり。深川古石場に居り、居、七國を遠望するとにて七國樓と號す。初め伯樂舍に就き松壽堂永年と號せしが、後宿屋飯盛(六樹園)に從ひ、故人蓬萊山人歸橋の名を嗣ぎ蓬萊山人と號す。當時すでに猿猴坊紅月成の隱名を以て、傍ら和印本の作編頗る多し。自稱する所によれば、文政八年にすでに此種百部に上るといふ。文政十一年、初世焉馬の門人に乞ひて、二世焉馬となり、同年より合卷類數種刊行。別に劇に關する雜著あり。即ち三座繪入の評判記ともいふべき「芝居細見三葉草」、及び「俳優畸人傳」、「返吹難波裏梅」其他。及び角力茶番に關する雜著、及び狂歌本、更に「常盤津外題考」、「常盤津年代記」の如きものあり。角力に關するものは、彼一時角力に興味を持ち、現に吉田追風に隨つて行司となりし事もありといふに由るならん。又弘化三年十二月には、近松門左衛門と改名、中村座の淨瑠璃作者となりし事もありといふ。要するに野心ありて藝之に伴はず、最後安政四年には、京傳の「息子部屋」を其儘改版飜刻、自著を裝ひたるが如き惡德あり。唯彼は、一個末期夥多なる和印本の作者として、作名猿猴坊紅月成(或は紅を略す)の下に不朽なりと謂ふべし。文久二年七月歿壽七十一。

再び『膝磨毛に』就て

最近東京某氏の來簡に依つて氣が附いた事である。某氏の來簡の要点は、膝磨毛の初篇は一冊であり、二篇二冊に當るものは實は後編二冊とあるものである、との指示其他であつた。此の來簡によつて家藏本を更に調べると、某氏の曰はるゝものと家藏本とは、別に異本でもなかつた。唯自分のが大部分上下二冊を一冊に合本にしたものであつたが故に起つた、自分の粗漏から來た錯誤である。即ち更に訂正すべき其他氣づいた事を列擧すると、斯うである。

膝磨毛は、初編以下七編別に發端の計八編であるが、（それを一編各二冊と見て十六冊といふたが）各編毎にいへば、初編は一冊、貳編（正しくは後編といふ。）二冊、三編同、四編同、五編同、發端一冊、六編三冊、七編同三冊の計八編十六冊である。即ち初編と發端のみは一冊である。（上下ではない。）六編七編は三冊である。尚、貳編と稱したものは、實は、後編と見返し初めにある。

（これは、初稿の折既に氣づいた事であるが、執筆の便宜上、また全体からは貳編に相當するから、貳編としたのである。）

尚、此の本、各編によりて所々見返しの題名を違へてゐる。如左。

東海道五十三驛膝磨毛（發端）〔以後、執筆の都合上、後年作の此の發端を第一に擧ぐ。〕●浮世〇中膝磨毛（初編）●同　後編全二冊（全揃より貳編と稱するに當る。但し此の本、扉には男女五十三次道中記とあり。）●同　三編全二冊（三編）●開〇膝磨毛四編（四編）●浮世〇中膝磨毛五編（五編）●東海道五十三次膝磨毛六へん（六編。この題名からも、發端は此頃のものと推定せられる。）●同（七編）。

尚、全丁數をいふと、發端一冊（口三、本文四十五。）●初編一冊（丁附、上ノ……といふ）（口五、本文四十二）●貳編上（丁附、中の……といふ）（口一、本文三十一）●同下（丁附、下の……いふ）（本文三

十七。跋二）●參編上（口四、本文廿九）●同下（本文廿八）●四編上（口四、本文三十）●同下 本文廿七）●五編上（口五、本文廿八）●同下 本文廿六）●六編上（口三、本文十八）●六編中（本文十八）●同下（本文十八）●七編上（口四、本文十九）●同中（本文二十）●同下（本文廿一）以上

尙、發端が五編の次、六編の前に刊行せられたるものゝ如きは、自分の確信、前說を譲さない。他に於ても同樣であるが、唯、自分は、前稿に於ては、右に擧げた貳編（正しくは後編）の上下二冊を割いて、その下の跋より推して此の下一冊より二代目一丁の繼承作であらうと云うたが、これは更に一歩を進めて、貳編の上より、即ち正しくは後編の上（本冊丁附によれば、●これは正しくは中であらう。即ち初編後編計三冊を上、中、下に數へてゐるから。）よりに改めたい。といふのは、この初編、後編（大揃よりは二編に該當するもの）の二者を對比すると、初編、後編の單なる名目からも衔りであるし、且尙、ふと浮んだ此の推定の暗示ともいふべきは、後編上（即ち大揃からは二編上）の初め本文第一丁表に、「九口郎兵衞と申す女好（なんにょき）のよたものにて候」とある此の女好の二字からである。それは直感である。理窟はない、唯これが女好庵を指さずやと。他に於ては、此の後編の上下が同一体裁同一文字である事は前に謂うた通り、唯自分の前稿說後編上と下とを分つたのを更に一括、後編全部と變更したのである。今一つ、初編と此の後編との特徵は、初めはこの計三冊のみで終る積りであつたらしく、それが證據としては、初編後編の名もさうであるが、殊に目立つのは、初編後編計三冊で完結完本と豫期したらしい事である。（然し、初編口には、初二編中目錄として、發端日本橋の話より駿河二丁町に至る以上十二回の項目を擧げてはゐる。三編以下引續き出來の意味にとれぬ事もない。）即ち初編が上と丁附にあり、後編二冊が同じく中と下とあるによつても

知られる。即ち此の後編二冊(中と下)〔所謂、二編上下の二冊也。〕が、既に全部女好庵の繼承ではあるまいか。

尙一つの傍證は、てつきり女好庵(二代一丁か)と思はるゝ三編の見返しに、萬葉假名のワイ歌が一首載つてゐるが、と全く同一趣の萬葉假名のワイ歌一首同じく後編(二編)の見返しに之を見るのである。以上が今までに再び氣づいた事どもである。

尙、某氏指示の如く、成程、後編(二編)二冊と三編二冊とは、本文每丁のカコミの大きさに於て相違してゐる。即ち三編は、較べて小である。それに挿繪書家の異つてゐる點とから、第三編から二代一丁ではなからうかと云はれてゐる。成程一應は尤も、且つ三編上には序にも、「久しぶりなる花王木の接木の枝ぶり若やぐ花と口を探れる實生の作者もまた續狂名のお笑ひを、どつと吹出す春風や、そも山出しなる東都子の、吾妻男一丁のぶる、于時文政戊子春日成稿」と、ある。此の語調からも無論三編以後の二代一丁たる事疑ないが、更に遡つて貳編全部も然りと見るのである。それには二編下の跋によつて、(此跋、前冊を見よ)此の推定が起るのである。此の三編上の自序は、改めての自己の吹聽、すでに他人による推奨は、貳編(實は後編中下)に濟んでゐると私は見たいのである。但し此の二編下の跋が、合本の際の綴誤りであつて三編下に附すべきものとの說あり、然る異本出づば、また何をかいはん。旗を捲いて退却の他はないのである。(悲しい事は、此の後編下の跋に、綴目は、戯とあるのみで、中とも下とも又はスリ三とも記してゐない。)唯、本文カコミの大小又は挿畫畫家の相違のみから來る推定は稍危險ではあるまいかと思ふ。(挿畫では、現に三編と四編とはまた變つてゐる。四編は重信になつて、遙かに巧い。)本文カコミの大小異同であることは、今自分が調べた所に據ると、三編上下の此の二冊のみが小さく、四編はまた初編二編(實は後編)とに均しい大きさとなつてゐるのである。即ちこれはさしたる推定の根據とはならぬかと思ふ。以上。

安永の江戸世相一斑

（洒落本「當世爰かしこ」から）

はしがき

洒落本、安永五年正月版「當世爰かしこ」（御無事庵春江作、素云畫。小本一册）は、誠に命題の如く、當世流行世相の大小事を爰かしこ蒐錄、而もそれが、しぜん一種の韻文体を爲してゐる、大に風變りなものである。が、一面、安永初期世相考究資料として、最も貴重な位置を占め得るかと思ふ。隨筆類とは違つた、生きた直面直下の世相記錄たりの意味に於て。本稿は、其の一册全本文の分類抄書である。勿論分類とはいうても、性質上誠に困難で、大体に於ての物であり、細かには彼此相聯關するものと承知ありたい。分類項目十一、最後に、自分としては諒解に苦しんだもの數事を、不明の名に一括しておく。示教を賜はらば幸甚である。同時に、予の此の勞、些少なりとも、當時世相の、或る斷片的影像を諸賢に與へ得るなれば、滿足此の上もない。以上。

（一）衣裳　（髮容を含む）（男女とも）

藤の丸も取次さうな四方髮が多し●油に吟出しあぶら●露取りのふくさは伊達をかざる●松風の道亂は、印傳の巾着を欺き●袖口と革の鼻緒も細くなる。縞縮緬の羽織、一重の伊達と下品ル八丈縞に奥手の袴、帶は博多で足袋は紺淺黄のふんどし、ふすべの鼻緒ばら緒に裏附高原雪駄、お納戸茶のぱつちを蹴破り、紫屋は藤色に夜の目を合さず、麻の葉に入子ひし、青海波の裏もやうに色を含ませ、手一束の灸の跡は鳶色の一粒鹿の子、合羽の襟を懸けず、前帶を結ばず、裾模樣は五寸模樣となり、五寸模樣は江戸褄模樣にかはり、惣模樣を目の下に見くだし、チリケ五寸に五枚の裏附天鵞絨は尻のひづみを隠し、扱帶と平ぐけも丸ぐけとなり、綿帽子は

お高祖、菅笠つゞらも春傘、嶋田に勝山、笄わげかたはづしに本多わげ、燈籠鬢は横へかく。●青梅のかはり縞も氣儘頭巾で鼻をかくせば●足中草履に日和下駄●京草履●銀のかんざし、くじらの鬢さし●細造りの長脇ざし羽織姿はいきちよんの下品たま〳〵の繼上下に、裏付上下歩行姿は芋虫のごとくにして、急用が足りず、紅染襦袢に綾さび紛ひに白煉半襟、天鵞絨半襟、錦のはらかけ。

（二）食物

猪の歯の楊枝は幾世餅を貫き●甘酒を竹の皮に包めば、三國一と香をうつ●心太●かまぼこ●昆布巻の鮒はこはだの魚と變じ●燒麩は初茸の手際をあらはし●海道湯漬は茶で喰はせ●うきふしんこは歯につきまとふ●厂金燒はこげ臭し●金鍔燒はさら燒のうへをゆき●白玉煉は。。。。取つ替べいの浮名たち（〇印、意不明）●間戸下を通る麩賣かんせいに呼び●風鈴蕎麥は夜明まで商うて笊の尻を暖め●座禪豆（花街の部に重出）

（三）器具

唐蠟燭は眞竹八九の竹をあやしみ●薩摩土瓶は五郎八がごとつかせる●箱入温石●鍋と釜とにへそもある、鉄あんごうは手足が付き●藥鑵も陰玉を持ち●櫻張の銀煙管。

（四）商店並に商品　（食物其他參照）

豆腐は本綿で拵へ、山屋も里に出店す●太好庵は油にかう貝●ごうこ庵は蕎麥の名題●樂庵はしつぽく●御所おこしは嵯峨おこしにおされ●鹿の子餅の暖簾は鬼子母神の格天井をかたどり●翁やの千鳥●助惣はいくじなし●日光唐辛子は本所でつくる、飴は唄で賣る、飴を

買ひなよ傭かいなと唄では行けず身振で厚かましいと云ふ物で賣り●めうがやは丸山の輕燒●金山寺は丸山のひしほ●おまんが鮓●おまんが紅●童は白雪香に眠をさます●眞崎(まつさき)の田樂のはやるは甲子屋(きのえねや)のおかげ●飛鳥日暮里の土器はもぐさやの仲間はづれ●瀨川に市川佐野川が油店●味噌は四方久●醬油は冂十豐嶋●絹裝策は中村屋●三嶋町のつかはしめ(以上、意不明)しがらきは茶の立塲●俵屋ふり出しあれば(風邪藥の例の振出しならん(久))●三ッ井が飯臺の柏子木(かな)(下略)●丸角(かく)は呉服店にひさし●白木は呉服、唐木は小間物懸……(下略)●觀學屋は銅佛をほどこし……。

(五)看　板

紙の張拔き家臺へ釣す諸祖達广、尻もなくて經師の障子に腰をかけ、多葉粉屋の障子を別莊と心得、あまつさへ國府を刻に卸し。

(六)雜藝幷に雜職　(音曲、芝居とも)

香は五味を聞わけて●蹴鞠は、一座一暮(くれ)仕切と號し、九損一德の上を行き●湯谷(ゆや)松風に米の食(飯)と落付キ、ワキとツレはしびれて欠(あく)びに難儀をする●大鼓●小鼓●笛●地うたひは、足の大指を組合せ、腰を張つて信濃の上客に似たり。(是れ信濃者の大飯喰といへるものか。否や。(久))●年季やらうも長唄じや●狂言師は雀おどりのまぬきを思ひ出し●幸若の音聲すけなくして、琵琶法師の緣者と思はれ●茶人……●碁●將棊●立花●投入●花に日が暮る風雅の點者は、定連つもりておはなとなり●講釋●土弓●吹矢●草刈笛●眞似藏は、蛙に鷄親猫に子猫をあしらひ●水に繪を書けば、砂で文字を書き●竹細工●酒中花●辻談義●連節(つれ)の道心は觀世音の御利益を面白ふ唄つて道をふさげ●富士太郎は文句と節が面白いとて●源水が一流、筆の命毛糸わたり、梯子渡る迎

ひ獨樂●柏莚、志道軒は、似面の親玉元祖なれど、日々にうとし●團藏死んで海老藏引込む●生田流に八ッ橋流(琴カ)

(七) 花街 (私娼を含む)

夜鷹云々●藝子云々●歌比丘尼は、あたまに熊野の烏を頂き、むく起に出て、晝は高瀨の船へ上り、夕べの事はそら事とたわむれ、夕暮は仙臺河岸の杉形に遊び、是のお庭へ松植ゑてと言捨、あたけ(安宅)の森へとまると豆腐殼が賣れる、爰へもチトチャンナ、しんこの小指は、ぞつとする●五大力菩薩の御詠哥に、物日敷初新造といふ文句あり●惣二惣六の印はいつの頃にや、いにしへ大文字のかぼちやにいさゝか花の咲懸りたる頃より、又近き頃は、連節の道心は……(以下、雜藝に既出。參照)●戸棚に座禪豆もありんす●二朱女郎に廻しの壹分が高直。

(八) 名所幷に名物 (食物、商品等參照。)

花は上野か飛鳥山●藤は根岸●菊は金王●萩寺ははぎ●紅葉寺●大森の麥わらは、笠と笛●駒込竹門の麥わらは、蛇となり●目黒の餅は花になる●目白の下に水車●雜司ヶ谷は風車●椎寺●淺草の簑市は貴賤群集●中店●回向院の德利は……●十軒店に雛市を立●三十間堀は、材木の雲の峰。

(九) 信仰

不動に妙王院動かずして、名聞の護摩を修し●藥師も醫王院、いつしか藪醫の會釋を見ず●地藏の別當も延命院●辨天●お藏前の六地藏●久米の平内は、縁を結ぶの神。

(十) 雜世態 (流行、他を含む)

天鵞絨の牛まで出るに、覺兵衛獅子は何が不足で久しく見えぬ◉四日市は、三ッ星膏◉藥研堀で曲馬◉兼勝先生は寢ぼけて、五尺からだの眞ン中臍をつけばお龜は氣をもみ◉道陸神の再興にお婆〻のおごりはしなもの〳〵◉目盲（やく）〳〵坊主は、あれ〳〵とかしましく◉太皷坊主は、田舍をかせぐ◉後（うしろ）坊主の前すみかづら、鼠口して、しようこともないしやうがの手をもみ、何の事だと門に立◉鐘の供養は、網をすき◉千日參りは、笠の赤（あかき）をかぶとする◉ちよんがれ和尚は、こうもり羽織に小菊のはな紙、本多あたまにさらしの手拭、わつちがすいたる當世風だの何のかのと黃色に聲を引◉細見と年代記、大名附は、夏も聲をふるはし◉鍋のいかけは、伊達に呼び聲長し◉即功紙に得功紙がまちがひ、御夢想の目藥は、覗きの仕かけを見せる◉座頭は上方までも上る◉投壺は投扇興と變じ、◉五德の足も四本となり◉樓船（やかた）は、足をとられて眞（ま）木（き）船となり◉源五兵衛おばゝは、四十九で信濃へ嫁入したりと聞くに、笠森おせんは、何處へ嫁入した事ぞや◉火入は、ちやんぎりとなる◉彌生半の御目見えに、食（まゝ）（飯）は喰へども、飯は焚かぬと奢りが付き、五三の桐に鎧蝶、木綿の仕著に五所、うばも子守も下女まで付ける◉道理で馬糞も路考茶だ、◉長崎屋に泊る阿蘭陀人◉花火は兩國川の夜の雨、うろ〳〵船◉顏見せの赤もうせんは、茶屋への歸帆（此の邊、八景まがひの書き方なり。（久））◉園はれも乳母も金魚も高直◉萬歲の市を立てる新右衛門が町塲◉浪人の編笠は、小袖で通る◉へちまのやうなお端（はし）た女も、御中居と顏を赤めてせりやひ、部屋子もはりやひ◉いてう娘あれば、銀杏和尚もあり◉錦繪さかんに辻や小路にきめ出しの花を咲かせ◉數寄やがゝりに書院の体◉女の義太夫。

（以下次册）

寄贈紹介

○**東海道に關する圖書** 第一

金田晴一氏編である。名所圖會と一目玉鉾の圖版を挿入し、第一、圖會、案內記、地圖類。名所圖繪から道中獨案內に終つてゐる。解題懇切引證妥當。好著。（半紙牓二十頁。定價發行所不詳）

○**岡山の浮世繪** 江戸舜兵衞編

內容、展觀目錄、岡山の浮世繪等。岡山の同好者諸氏の執筆である。展觀は今春催されたものゝ目錄である。一々手頃な解說が附いてゐる。また好參考。（菊判十六頁。コロタイプ二葉附。岡山市上之町七三、江戸屋方岡山浮世繪の會。非賣）

○**文化住宅圖案百種** 第一、第二

能勢久一郎氏新著。印刷体裁一段の進步、內容は、現時都下隨一の新進建築技師、惡からう筈はない。（各四拾錢、東京市外野方町下沼袋一五八〇文化住宅研究會。振替東京六九八八七番）

○**以毛圖流** 四ノ二

春波追悼號。つひ一度も謦咳に接しなかつたが、之を讀んで、愛惜の念に堪へぬ。他ではおかんざけ考面白し。（相州茅ヶ崎其社）

○**愛書趣味** 第四號

圓朝號であるが、他の好記事も多い。純明治文學物研究として、そのジャーナリズムに囚れぬ所、天下一品。印刷用紙亦。（齋藤昌三氏輯、非賣）

新舊時代（二ノ一）■新小說（五月）■歷史地理（四月）■風俗研究（七十一）■歌舞伎（二ノ五）■長唄（十三）■藥碑史蹟研究（三十一）■川柳鯱鉾（十五ノ四）

著者より

先月は酷い眼に逢つた。否引續いて今月の十日頃まではであつた。然し今では、快癒、平素に返つたから御安心ありたい。●寢てゐるうちに、然しぼつ〳〵既製の原稿を整理して「洒落本集成」第一卷分だけは纏めた。全部未飜刻のもの、（最近豫約募集をした大系本などとは、一個も衝突なし、否從來全くの未飜刻物）廿七部をまとめた。中、廿三四部までが成川圭司氏藏本に據つたものである。●實際飜刻は難中の難事業と熟々知つた、が原本が無くては何にもならない。そこへ來ると難有い哉である。即ち快く原本を提供し從覽を許されつゝある成川氏、他數氏の博大な御厚意は、自分を鞭打して此の緒に就かしめるに至つたからである。實際、方々の御厚意は何と御禮申していゝか、辞に苦しむ程である。●第二卷第三卷まだ成川氏本及び花岡氏飯島氏本の豫定。第四卷は、忍頂寺氏本をお願する積り、（然しまだそこまでは、中々進捗しない。）今の處、二卷分丈は出來上つたのである。●お借りした原本から一々淨寫する、それを更に原本と讀直す。本屋へ渡した第一卷原稿の校正が出かゝるに從つて、更に否三度び原本と引合せて校正するさうして出來うる限り完全に傳へたい。文字も御承知の如く中々判斷に困難なものがあるそれらは校正の折再三考しようとまだ未決のものも少くない。一卷を拵へるのに、淨寫校正出來と、恐らく半歲を超えよう。出版される卷數は、春陽堂の出版近刊書目では全三冊と示してゐるが、中々三冊では入りきれない多分六卷にはならう。お借りする範圍の物をなるべく先の卷に集め、其他は、五六の二卷にと考へてゐる。然しその一卷づゝで配合は苦心し、飽かない、ものには拵へる。お借りする分を先にするのは、さういつまでもお借りしておく事の心苦しさを痛感するからです。●每卷約五百頁四六判、原本挿繪は全部入、一卷平均三十部所收。結局百五十部以上の未飜刻物を活字化する積りである。第一卷出來は多分九月頃でせう。尙此上とも大小となく御後援が願ひたい。あゝ難中の難です。

（四、二三）

大正十五年四月二十七日印刷
大正十五年五月一日發行

〔貳拾五錢〕

定價表		
一冊	廿五錢	郵稅貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	稅共
十二冊分	同 貳圓八拾錢	

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

編輯兼發行者 名古屋市東區東區東町百五十七番地 尾崎久彌

印刷者 名古屋市中區南大津町二丁目三番地 英比貞造

印刷所 名古屋市中區南大津町二丁目三番地 扶桑社

發行所 名古屋市東區東町一五七地 江戸軟派研究發行所 振替名古屋九六七二番

●「**音曲と歌舞伎**」**原稿纂集。** とにかく第一號は出すとに決定。ついては原稿、誰方でもよし二十四字詰無制限にて五月十五日までに御送り下さい。（當所宛）原稿も寄らなくては、そこで未練なく斷念しようといふのです。順調に行けば、發行は六月五日頃。右急告。

依託書目

(和)近世奇跡考(京傳)二册二圓●(和)義烈百人一首(綠亭川柳)八十●東京史稿皇城篇(厚册)一册壹圓五十●事實[illegible]編(高野眞遜)九册合本二圓五十●柳樽評釋(沼波瓊音)一圓五十●大日本人名辭書(第九版)三十圓●西行法師傳(梅澤和軒)一圓●芳原沿革史(蒂樂庵主人)一圓五十●淨瑠璃史(寺山星川)二圓五十●(和)淨瑠璃外題目錄(文化三年版)八十●續德川實紀美本五册十五圓五十●旭廓物語三十●(和)北雪美談時代鏡(二代春水、草双紙。上保存)四十册大揃八圓●傳統藝術の研究(小宮豐隆)一圓六十●葵文庫本膝栗毛美本二册一圓六十●高野山千百年史(美本)二圓五十●三百諸侯(戸川殘花)美十二册揃六圓●續々群書類從地理篇二册揃(美)四圓●近松の人々(高須梅溪)美本一圓●書畫骨董大辭典(池田)美二十三圓●日本風俗志(咄堂)三册揃美十二圓●大日本文學史(鈴木暢幸)二圓五十●淨るり叢書(美妙五十三册揃二圓●日本經濟史(瀧本誠一)二圓齋)●雨月物語評釋(鈴木敏也)二圓●自然と文化との諧調(臨風)一圓五十●詞藻類纂(厚册、芳賀等)三圓五十●(和)名人忌辰錄(初版美二册)五圓●新井白石(民友社)八十●川柳雜句選(秋の屋)八十●俚諺辭典(熊代彦太郎)美本三圓五十●世界に於ける日本人(渡邊修二郎)五圓●質屋の研究(小笠原繁夫)一圓五十●祭禮と人間(柳田國男)六十●演藝ひかへ帳(熊谷爲蝶)八十●繪入忠臣藏丸本型一册(初代廣重挿畫)一圓●善惡名所圖會(英泉畫作)五十●糸竹大全(佐々醒雪)一圓五十●口譯本朝櫻蔭比事(西鶴原作)八十●戀愛と文學(岡、初版)一圓八十●井伊大老と開港(中村)一圓三十●他が身の上(山岡元隣、名著文庫)五十●小說史稿(關根)四圓三十●浮世の有樣(江戸風俗隨筆、國史叢書本三欠)四册三圓三十●德川氏刑法七十●古畫備考(美本四册洋)十二圓●家康と直弼(大久保湖洲)美一圓廿●舞之本(上田萬年校)二圓五十●類語大辭典(特製本)四圓●(和)音曲叢書第五篇(美)六十●藤田東湖(川崎紫山)一圓●朝顏日記(葵文庫本、美)八十●スコブル(外骨雜誌)二十七册全揃美十圓●日本復讐實傳(樋口二葉)八十●(和)德川政治錄(稿本)一圓五十●大日本史食貨志二圓●俳諧辭典(武田櫻桃)二圓●匏庵遺稿(栗本鋤雲)美本二圓五十●川柳江戸砂子(卯木、箱付極美本)七圓●川柳吉原志(柳雨)二圓三十●(和本)日本女裝(風俗畫集)七册五圓五十●幕末小史(櫻痴)三册揃二圓八十●(和)田佐實秘錄(田沼騷動秘寫本)二册三圓●風流書簡集(桑田春風編)四十●現代心中話(英朋畫)八十●國史讀本(大森)上中二册一圓●武藏屋本近松丸本(三國誌、蟬丸等)二册七十●地理的日本歷史(吉田東伍)三圓五十●新評戲曲(依田學海。淨瑠璃の譯)合本一册二圓●觸背美學(中川四明、珍)一圓三十●丁髷制度の研究(丸山、今村)一圓●三都見物(岡田)八十●南葵文庫公開式陳列目錄五十●千社札繪馬展覽會目錄八十●箱根(歷史地理增刊)八十●(繪)月耕筆富士三十六景の內十二枚(著色版畫)二圓五十●(和)繪口合瓢の蔓(半山畫初摺)繪本一圓●畫法一斑(博文館日用百科全書本)八十●(和)百富士(俳諧入繪本)一册二圓八十●東京圖書館和漢假名目錄一圓二十●近松門左衛門(塚越停春、民友社)八十●美人號(日本一增刊)八十●劇場壁談義(細[illegible]一)一圓五十●耶蘇教の日本的研究(木村)一圓六十●文化觀日本史(龍居)二圓●長崎の[illegible](玉樹香文房刊)一圓五十●尺八史考(栗原廣太)四圓●長崎學藝一覽(藝苑叢書本)一圓●舊劇と新劇(小山內)九十●(和)ちんてき問答(寫異本)六十●當世樂屋雀(明治三十五年刊、劇道逸話)一圓二十●宮本武藏(同顯彰會)一圓六十●石田三成(渡邊世祐)一圓七十●都々逸の研究(石田龍藏)極美一圓●澤村田之助(矢田挿雲)二圓十●(和)田舍源氏全揃極上三十五圓●紫(紅葉作、原本)八十●袖時雨(同)六十●栗林子戲曲(塚越)五十●新羽衣物語(露伴作、原版)八十●女夫星(天外、初版)八十●古錢展覽目錄六十●新西洋美府(和田萬吉、珍)一圓五十●血痕集(明治十年代、杉田定一詩)五十●(和)專[illegible]筆(洒落本繪入)五圓●名流譚海(乙羽編、閨談文學談等)六十●(和)金の和頁路(山旭亭主人、寛政頃洒落本小册、六圓●(和)風流俄天狗(大坂俄牛紙本元摺一缺)四册二圓五十●游藝起原(博文館、原田芳五郎)一圓二十●曲亭馬琴(篁村、著判)三十●(和)役者必讀妙々痴談(三芝居士、二册上本三圓●(和)古今草紙(仙果作草雙紙、美本大揃完三圓五十●(和)庭訓朝顏譯(京山作、同)揃二圓●(和)口豆樂屋飯茶番(戀悲成元摺上本三圓●骨董協會雜誌(外骨最初)第一第三二册八十●婦人と犯罪(文明協會)一圓●破戒(藤村、元版)一圓●春(同、同)八十●芭蕉の臨終(瓊音)八十●檜(紅綠)一圓●河竹默阿彌(繁俊著、三六判春陽堂)美三圓、

【以上、必ず一應返信附在否御照會相成度候】

大正十五年四月廿七日印刷納本
大正十五年五月一日發行

江戸軟派研究　第十四册

定價貳拾五錢　送費貳錢

大正十五年五月廿七日印刷
大正十五年六月一日發行

貳編 第十五冊 (通編第四十五冊)

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十五冊
(通編第四十五冊)

本文

安永の江戸世相一斑 (完)
枉解物の二著
膝栗毛物のいろ／＼
黄表紙(寛政初期)解題の一
「廓の癖」初版の序跋

「廓の癖」初版の序跋

洒落本傾城買二筋道の二編「廓の癖」—谷峨作、國政畫—の初版には、流布本に見ぬ序跋が附いてゐる。此の二筋道、廓の癖、宵の程の三編續物は、餘程歡迎せられたと見えて、改刻本が自分の見ただけでも二種、且つ製本形式に於ては樣々である。本文には異同を見ぬが、書体、又は輪廓の大小等、色々ある。甚しい例は、再刻以後は、谷峨以外の序一、跋一を全く脫してゐる事である。從來初版(純初版)を見なかつた自分としては、流布を信じてゐた。帝國文庫の飜刻本も、此の流布本のまゝである。今度、純初版と思はるゝものを發見、これによつて凡ては氷解せられた。此の初版本中本、更紗表紙、題簽等は流布本に同じ。但し流布本とは無論版木を異にしてゐる。(本文は同じ。書体一點一劃を相違す。)それに、全くこれのみに見る序と跋を見受ける。今それを流布本の補足として掲げておく。帝文本にも補足せらるべきは無論である。

○

二筋道後篇廓の癖序

いてや谷峩先生の流義は身を直ふする事を主とし手を知つて手を不レ書以迷喩迷の數も未至の危は屏風の中の蒲團の手管せんと或は足らあかい四つたとへ合臥になるもひきわけらるゝのむた骨折に親父の腹立付る種となるを患ひ其手は喰はぬと身かまへさせんと計はいかにと梅暮里親方は能人のこゝろに通し能善に導事側觸の評判にも是を大關とやいはむ予彼が禪した背負へは衆人廓の遊興に怪瑕のなき事をさしほ花に一寸きよめて序ス

文鳥軒　蔦利述　(東鳥)

〔此の次に、谷峩の自序がある。此の自序は、初めに單に序とある。此が再版以下はこの序の代りに、二筋道後篇廓の癖序と入木してゐる。此の谷峨の序、流布本に同じ。〕

跋

○廓の癖の書たるやまわり廊下のごとしひとつゝきにて二筋の道に野夫あり粋あるを舞子が例の書癖ゆゑにすら其癖を見て此一冊をあらわす四方の君子氣を附て直さつしやいといふもまたアヽ老婆心の癖ならんとしかいふ

切筆書惡述　[じれつ亭]

○

壜屋艶二は染物屋主人か

洒落本「南門鼠」、「南門鼠歸」等の作者壜屋艶二は、染物屋の主人ではなかつたらうか。勿論、「鼠」といひ、「鼠がへし」といひ、すべて染色から來てゐるが、此の題からのみの類推ではない。(これは、寧ろ傍證の一にはなる。)享和二年版と稱する「鼠歸」を見ての事である。其の序文を清々老人、例言を自身物してゐるがその序と例言などから來るのである。これに處々染物を述べ、且つ例言には、染物屋云々とある。題名からの思ひつきとしては、餘りに煩瑣、重複である。寧ろ題名は、此の家業からの思ひつきではないか。その二三を要約して擧げる。

○序(清々老人)

……(前略)今や壜屋主人の好には、袖ヶ浦の蒼海を下染として、總房の霞る黑に糊豆墨を截、小紋は上代にかへる八ッ山の櫻ほうぶり乃是を鼠歸といふ、近頃の出來なり、派手にして浮氣ならず、おとなはしくして淋しからず、染地の丈も能みじかからず、工みにして魂膽有(中略)此趣を予に序せよと疊とい足、明後日迄の言延も聞ず褊急故、無是非早染の間に合を上謡の筆を採て細々としるす。

○例言(作者。但し例言と斷りなし)

○前にみなと鼠有といへども染あがりのはな〱敷いとゝかさはりありて既にとめ形(幕禁を斥せる也)となり、其反物世に甚ま

(表紙三ノ欄外へ)

安永の江戸世相一斑（續）

（十一）俚語

かぼちやが唐茄子だ●あの子よい子じや顔ぼちや〳〵よ、豆粉(きなこ)付けたら、なほよからう●どうなんとはどころ（野老）の事、せいなんとは芹の事●柳新葉の枯れるまで祖父(ぢい)が茶がまに鑄が出て、とんだ茶釜はやくわんとはやり●おまんかはいや布さらす●氣の知れぬを麻布といふ●晰に鐵砲●挨拶に長刀●夜目遠目に白芋●笠の内に蕎麥粕●小娘小袋油斷がならず。

（十二）意不明

うごもりかごもりてれめんていこちりめんていこ●竹はつろいに品を飾り●寺澤玉置に石川流も團扇となる●砂糖の蠟燭あれば、銀のごまめも齒ぎしみする●道明寺は强飯(いひ)の挽わり●觀心寺は寒晒の米の粉●淨法寺は館(たて)たばこ●法せんじ留守居かご●天德寺は大べやぶさん●琉球包は、富士に大黑●八兵衞が馬をのめば（これは、何か輸て見たおぼえてはあるが。久彌）、十六兵衞は涙を流し●ほんちきごてれつへんてこの奴（上半てゞ無意味の詞か。久）●五色の鼠が出るさ、七ッ目のゐさが賣れる●鐵(くろがね)の足駄は、頭にしきみの水をたくわへ、長太郎は陣笠をはなさず●まだも長ひが……サンゲ〳〵の提灯に……早染草(そめくさ)に、つんぼの藥、たちまちなほるもこて療治は、革足袋をそしり●俵屋ふりだしあれば（ていまでは明）芝に追出しの鐘有り●田町に鹿鳴、八ッ山は數がたらず、神明前は細工の鷄●大菊は小桶で作つて、物干(ものほし)の珍客をもてなし●茶屋船宿ぞうりは格子へ織助。

枉解物の二著

江戸文學、主に小說を內容上から綜合的に區別すると、創作と摸擬作（飜案を含む）の二個になる。勿論創作の中には、怪しい糊塗せられた剽竊や、前代又は同時代の名著に對する摸倣もあらうけれど。摸擬作とは、前代又は外國（主に支那）の諸書諸作に仮り、その趣向を受けて內容を當世風にしたり、又はその裏を行かうとしたり、（彼等はこれを風流と名づけ、當世と稱し、又、眞實と名づけもした。）樣々である。創作側（摸倣を含む）のものは姑らく措き、摸擬物には、その摸擬せられた原著が樣々ある。和漢であることは前にも述べたが、その內容は、經書詩集、歌集、小說隨筆類、古今樣々ある。我が國の古典では、竹取、源氏、伊勢、落窪、枕、徒然草、方丈記、平家、太平記、曾我物語、以下雜多。支那のものでは、水滸傳、遊仙窟、剪燈新話、棠陰比事、西遊記、（猥書では肉蒲團、和尚奇緣の類）甚しきは、經書の四書の類、飜案には莊列の類、詩集には唐詩選が最も用ゐられてゐる。この風、同じく小說類の猥的なもの即ち和印本には最も多く、それらは露骨にして滑稽皮肉なる摸擬、即ち如上の古典經書類を初めとし、時には和は女今川、女大學の類にまで、又は實語教の類に至るまで巧みに摸擬したものもある。今、我等が一々その書名と原著とを比較列擧に及ばない程、こは周知の事實であらう。今槩說を略くが、（が、時ありて此等の綜觀的分類を作りたいとも思ふ。）こゝに、一個、最も滑稽な、しかも皮肉、前揭の創作・摸倣にもあらず、摸擬飜案にもあらず、寧ろその中間をゆくもの、即ち枉解と名づくべきものを見る事である。是れ誠に江戸時代ならでは生れさうもなく思へる程、時代放れのしたものである。迂曲な、今日我らの思ひもよらぬ所に興味を持つた

所のものである。がさすがに此類は、我等の觸目としては稀である。或は寡聞淺識のせゐかとも思へるが。即ち此の枉解物、二著を先づ我等は座右に發見した。その解説に及ぶのである。

共に洒落本型、寧ろ變態的洒落本とも目すべきもので、勿論純小説側ではない。寧ろ花街に關する漫筆贅言の類ではあるが、また以て當時の好廓、自稱通客どもを喜ばせ、刺戟を與へたものには違ひない。それが一は詩、一は歌であることも面白き對照である。

一、蕩子筌枉解　明和七年六月版　茶釜散人著 門人藥罐子録

二、百人一首和歌始衣抄　天明七年孟陬の序　山東京傳著（自畫）

蕩子筌は唐詩選であり、百人一首は小倉百人一首である。始衣抄は、枉解と斷つてゐないだけ、一層横著である。蕩子筌枉解は、小本、序二、本文五十七、跋二。始衣抄は中本、序五、本文三十四、跋一。枉解は挿繪なし、始衣抄は政演畫と別號を署名せる自畫の口繪あり。

蕩子筌は、陶鉄房(ステツホウ)の序にも謂へる如く、「吾友茶釜先生頃日以二吉原辭(コトバ)一解二毛唐人之詩一」とある如く、唐詩選の本文をその儘に、たゞその解を吉原辭といふべきよりも、寧ろ花柳の巷の事實典例にこれを附會してゐるのである。著者の茶釜散人とは、無論何人かの匿名であらう。序にも仄見えてゐる通り、當時流行の「トンダ茶釜」の俚謠に受けたものであらう。跋は自跋、即ち茶釜散人、卷尾に明和七庚寅六月、　日本橋通三丁目　京屋與兵衛とある。內容、五言絶句（五言絶句のみに始終してゐる。）題袁氏別業より咨人まで、七十五首。一例を擧げよう。

（五）子夜(シヤ)春歌(シユンカ)　子夜は女郎の諱名なり、此女郎の一客何がしとやらいふ人とかくうたがひふかくそこらぢうなくひちらしあるくゆへに、はろは人の氣のうきたつものなれば、あだしこゝろなうらみてつくるあわれふかし、女郎の眞情(しんじやう)とみゆ

陌頭楊柳枝（ハクトウヤウリウノエダ）　ごてのやなぎのえだもそろ〳〵あをみがゝりてくる、わがおもふ人もそろ〳〵わきごゝろが出て來る

已被春風吹（ステニシユンプウニフカル）がありて　はるのかぜのあたゝかなるにあちらこちらへふきまはさるゝやなぎをみるにつけても、おもひがます、いさゞこゝろのおほいものを、いぢのわるいひくてあまた

妾心正斷絕（セフガコヽロマサニダンゼツス）　かれにつけこれにつけおもひたえなんとばかりしてふてゐるに

君懷那得知（キミガチモヒナンゾシルコトエン）　此こゝろもしらず、よその色女とくさりあふてゐるもしらずふかきうらみ言外に見ゆ

○評に曰まぶがあるか手がちがいか、れどうぐがふるいか、きをつけべし。

といつたものである。始衣抄、老人でもない癖に、京傳老人識と記した自叙、及び擬古文的の復序。歷然これを摸倣したと思はるゝは、以後十八年目の「百人一首和歌始衣抄」である。本文は、中納言家持の「かさゝぎの」の歌以下、崇德院「瀨をはやみ」に至る數十首、無論百首ではない。勿論跡著衣抄として後篇を出すべく跋にはあるが、未刊に終つたものであらう。各首、作者名の次に、牽强附會はげしい作者の系圖を記し、以下原歌、次ギ枉解といふ順序、尙、上欄に處々略註補記をものしてゐる。此の中、落語に用ゐられて平凡化してゐるのは、「からくれなゐに水くゝる」の歌、豆腐のからをくれないにひつかけた業平の歌である。勿論此の落語は、我等も嘗て耳に馴れてゐるが、これは、無論京傳の此著より何人かが應用踏襲したものであらう。京傳の奇才の最もその脫線的、荒唐無稽的、人の意表に出づる事縱橫無盡なるは、此の類の著であらう。一例を擧げる。

風土記ニ云

泊瀬(ハツセ)山和州(ヤマワシウ)在(アリ)ニ城(シロ)上郡(カミノコホリ)ニ

此女の名より山の名とす

うち神ニ云は

龍田(タツタ)ノ社(ヤシロ)ナルベシ

和歌八重垣ニ云

源俊頼朝臣(みなもとのとしよりあそん)

俊陰　事は詳ニうつぼ物語ニ也

俊頼　一説ニ此人百人一首ノウチニテ、イッチ年寄(トシヨリ)(マヽ)ヘ名トス

うかりける人をはつ瀬の山おろし

はけしかれとはいのらぬものを

やまとのくにしろがみのほとりに、ひとりの女あり、せいじんのむすめ子どもを、うちへ置はこゝろならぬとて、母すこしのつてをもとめて、かまくら右大將けのおく御てん、まさご御前のおすへにいだしける、此女はたつてきんぴらな生れつきで、もちろんたんきものゆへ、母一しほあんじ、三月の宿下りを幸ひ、うち神へ身のうへをいのりのため、母もろとも娘をともなひまふでける事をよめり

うかりける　○ともにつれし男、うつかりとかの娘のすそをけたる事なり、それをうかりけるとよめり

人を　○そのともの人をなり

はつ瀬の　○その女の名を初瀬(はつせ)といふ、おすへはみな此やうな名をつくなり

はつせの枕言をこもりくといふ
「此女うちにゐたるときは、こもりをしたるゆへ、子もり子のはつせといふなるべし
「くとことは五音相通

八文字自笑作
世間娘氣質 ニ云
此むすめはけしき生れつきにて、下略

儀同三司母
泊瀬紀行
げすぢかなるこゝちして、けおさりしておぼゆ
「かのはつせをさげすみていふ

山おろし ○はつせはきんぴらな女ゆへ、ともの人をいけどんな男だなど、おもいれおろしたる也、山とはうぢ神のお山での事也
はけしかれとはいのらぬものを　○そのやうにはげしく生れつけとは、此うぢ神へもいのらぬものをと、母のじゆつくわいを下の句によめり

女今川 ニ曰
人をめし仕ふ事、日月のこゝごたてらし給ふごとく、心をめぐらし、その人々にしたがひて、めしつかふべきことなりト云々
「これらも此はつせがごとき女を、いましめのけいしよなるべし

草双紙
馬鹿文盲圖彙 中之巻書入ニ曰
せつちんのまへでをろすは、くそおろし、
たてにをろすは、たておろしト云々
「山をろし」も此たぐひ也

短かいものをと選んだから、こんな物になつて終つたが、中には、もつと複雑な、長い架空的文字がある事を云ひ添へておく。但し「枉解」も「始衣抄」も共に、拙編「洒落本集成」最終の巻に、變態物をのみ集むる中に、收載の豫定である。悉しくは、それについて看られたい。

——五月二十三日

膝栗毛物のいろ〳〵（續）

前々稿「膝栗毛物のいろ〳〵」（二編第七）、前稿「華鹿毛と旅枕裏青海」（二編第九）に續くもの、新增補の外題、並びに既出のもの其二三寓目の解題である。前々稿以來、膝栗毛物（即ち一九の膝栗毛に對する摸擬作をいふ）の價値に就て自から考ふる所あり、即ち此の膝栗毛物が、作者としては二番もの、又は地方無名の徒、作も東都文壇の雄たる且つ原本提供者たる一九（初代）には及ぶべくもないが、自から又別個の風格あり、穉拙の所却つてその天眞さを酌むべく、且つ作者が、初代一九の遍歴實見、想像聞知交々混へてのものとは違ひ、各地方生えぬきのもの多く、從つてその描寫も少くとも眞は描いてゐる、たとひそれが子供の自由畫的に描くとも猫ではない、犬は犬だと見ゐる如く、その眞實さだけは、描寫の拙を掩ふに足る程の、我ら鄕土誌並に風俗研究の上に、好資料を數多く與へてくれるものであることは、斷言に躊躇しない。まして中には、名筆、玄人を避けしめる体のもののあるに於てをやである。即ち我等は、近き將來に於て此等の數作を網羅した「膝栗毛擬ひ物集成」を刊行、以て膝栗毛物愛讀者並に、鄕土地誌古風俗に興味を有せらるゝ諸賢の一粲を買ひたいと思ふ。却說、以下の解題は、最近寓目の、二三に就て、その僅かなる輪廓である。

一、膝　摺　木　　上一册中本型　　文化四年版行

〔此本、前々稿「膝栗毛物のいろ〳〵」に無。即ちあらゆる書目にこれを闕くものである。〕

中本一册、三册物なりや、又果して以下の刊行を見たりしやも不明。が恐らくは、上中下三卷

既刊ならんか。作者不詳。韮勢天騰隠士濁々山人の序には、「浪華市上に一仙人あり、名づけて一九といふ。常に雜話を爲して人の塵腸を洗ふ。尤も府に知るす虚話客也、適東武一九の膝栗毛を見て、嘆て曰く、嗚呼世に是の如き輿説客有りや。豈に後世の虚に怕るべし。然りと雖も是説續けずんばあるべからず、則ち住吉街道紀行を戯作て名づけて膝摺木と曰ふ」(下略)(元漢文。石摺風)とあるが如く、大坂、擬ひの一九、即ち逸名の士の餘業であらう。此の濁々山人の次ぎ、戯作(この下に花押、可一の形。)としたる自序あれど、作者の輪廓には觸れてゐない。以上計六丁。以下本文、(上之卷)三十一丁。主人公は彌次と北八、「當時足なしと」なつて、葭や橋築地の貸座敷に窮迫の体より天王寺參詣に至る。富山の印、君山の落欵ある挿繪數葉。挿繪の賛、(狂歌又は句)、凡て体裁原本初代一九本を倣つてゐる。本文中ところ／＼狂歌ある事、また同じ。版元不詳。(無論大坂本)

二、奥九旅人井中水　上下二冊本　文化五年三月版行

これも「前々稿の書目には脱したが、新群書類從洒落本書目には見え、自分の洒落本(五十音別年代順)書目に載せたものであるが、原本を看るに及んで、洒落本とは目し難い。中本、寧ろ膝栗毛物の一たる事を知つた。仍てこゝに挿入するものである。上一冊、序、發端、本文とも二十七、下は三十丁。上卷序は寐寤亭口人識。發端愧然堂夢囈補寫等、(コノ處口繪として、奥州東方風俗、九州南方風俗等あり。)第七丁目、奥九旅人井中水　上　頭陀樂雲水戯作、以下本文である。奥と九州の二人の旅客相互に知つての京見物、以下下卷に亘りての處々の滑稽である。本文には、此の二主人公をきうしう、おうしうとし、名は示してゐない。(但し上の口繪には、奥州莽士、喝坊外濱北ヱ門、九

州葎士、智啞沖右衞門とある。）挿繪上下にて數葉、原始的稚拙。本文の中、狂歌のあることゝ、また初代一九本に同じ。版元、皇都書林永田調兵衞、木村八郎兵衞と、下卷奥附にある。

三、滑稽有馬紀行初編　　三冊半紙本　　文政十年亥春版行

三冊とはあるが、「製本上の都合で、卷數は二である。上の製本二十丁、中、實は同じく上」の製本、上より加算して三十五丁、下の卷新たに本文跋とも三十一丁。上卷製本の分、序文、無著舍のあるじ誌、凡例。第四丁表、滑稽有馬紀行初編卷之上、平安大根土成著、以下本文。下卷尾の跋は、書肆、文暉堂、半丁分。版元は、同奥附によれば、京　本屋宗七、同山城屋佐兵衞、江戸大坂屋茂吉、尾州　美濃屋伊六、大坂　河内屋長兵衞、堺　住吉屋彌兵衞。自喚書數葉。「すべて有馬道中より入湯男女の客又大湯女小湯女をはじめ旅舍の奴婢に至るまで其情を穿て、新しき晒落をあつむ」るものである。（此本、中本型のものもある。何れが初版なりや。此の半紙本は、表紙凡て有馬筆の圖案にして、半紙の大きさである。色は黄。題簽は白紙、文字黄摺。）

四、膝栗毛面白草紙　　中本初篇上下　　嘉永四年版行

草双紙体ではあるが、「内容は中本である。（表紙彩色摺。芳盛畫。著者は、東都　永樂舍一水とある。此本、また前々稿の書目に脱かしたものである。初篇上は、序附言とも二十丁。初篇下は、二十丁。次篇以下ありや不詳。序、作者の一水、「（前略）彼の彌次郎兵衞喜多八が子供のあらまし聞ければ、親に劣らぬ大だわけ、筆にあらわす其馬鹿を四方の君子は讀で見たまへ」とある如きものである。さうしてその道中は、「千住の驛を眞直に草か越谷打こして、

粕壁より右へさり志すのは筑波山裏へくだりて推野山、夫より下館(しもだて)結城へ行址のかきあげなしたるを」云々とある如し。(が内容は、崎房まで、即ち未完である。)處々、狂歌を挿み、挿繪の体裁、また一九本に同じ。主人公は、加二郎と仁太八。此本、新群書「書目」の「中本書目」に初篇記載を見るのみ。次篇以下不詳。版元又不詳。(尙、此本、表紙外題は、右の如くなるも、序、及び本文は、凡て、草履は長刀草鞋は蚰人眞似目覺旅路とある。)

五、滑稽富士詣　中本　初篇以下十篇十冊　萬延元年より文久元年版行

各篇上下二卷通計二十卷十篇十冊である。作は魯文、畫は芳虎。從來の類似本と異り、本文挿繪の体裁、精密。文字も細字にて、十五行、主に仮名、漢字は振仮名つき。第一篇は、序とも上下にて三十一丁。序(富士山開闢起原概略といふ)は作者自身。二篇、序　作者、全丁数三十二。三篇は玄魚の序、三十三丁。四篇は、岳亭春信、三十三丁。五篇は序　秀賀、魯文の凡例、三十二丁。六篇は、序、春亭京鶴、三十一丁。七篇は、序種彦(二世)、口繪狂齋。三十二丁。八篇は、序、小田原人吉岡信之。三十二丁。九篇、序　作者、三十二丁。十篇、序は有人、三十六丁。本文處々狂歌を挿む。凡て膝栗毛物を追へど、幕末の雰圍氣そのまゝ、横濱岩龜樓の洋人素見の姿、さては、洋人道中の姿、さては支那人など描かれ、且つ富士詣往返の描寫、猥雜なるあり。挿繪も温泉の入湯、さては宿々の醜態など、隨分エロチックなり。中には、立小便をせる山出し女の群を描ける谷川の流もある。此本、江都照降町錦昇堂惠比壽屋庄七、表紙の体裁、本文用紙等、從來に見ざる精巧さ也。表紙の如きも、地色は綠、下に松原、上に降り來る寶の小槌さては寶珠の類をカラ押にす。題簽は黃、文字は墨。主人公は、呑好子、我樂(がらく)等の數人、蓋し魯文交遊の實寫ならん。—五月二十三日夜—

黄表紙(寛政初期)解題の一

「三ヶ津色問屋」は、寛政期ではないが、幸ひ目下借覧中であるから、附記しておく。他は一般主に寛政期、蒐集し得た中、活字本なきものの解題である。尙、寛政期以前の物、此の條件に合する十數篇あり、こは別の機會に讓る。

○

三ヶ津色問屋　三卷　惣愚齋於連作 閑德齋春童畫　安永末期カ

作者惣愚齋は、普通「書目」類には、物愚齋とある。意味からしても惣は、筆耕の謬、物が正しからう。於連は、女性なりや男性なりや。此の「三ヶ津色問屋」の筆致を見ると、弱々とした點、且つさほどの皮肉味なく、滑稽も目立たぬ、矢張り女性であらうか。偖、此の於連は、「青本年表」類によつて見ると、黄表紙初期安永期の作者である。即ち安永七郎大福帳 二 春童畫(安永七年)●親父否早學問 二 春童畫(安永八年)●銀世界豐年鉢木 二 秋童畫(イ淸長畫)(安永九年)の三種、尠くとも此だけの數量は慥かに有るらしい。が尙、他に洩れてゐるものもあらう。現にこの「三ヶ津色問屋」も缺けてゐる所のものである。この本、年代不詳、然し体裁内容(その稚拙な處)、無論安永を降らぬものであらう。上中下三卷。上卷は、京の都である。「花の都富の小路に金銀倉に滿ち、何くらからぬ光る屋といふに、源二郎」といふ息子がある。名の如き美男で、往來の人の眼を聳だたしめた。(第一丁表)「源二郎餘り色若衆なる故に仙女が誘つて山へ連れてゆく。此の仙女は、もと江戶の笠森お仙である。(京の舞臺にお仙が現れるのは、窮した趣向か、それともお仙を特に當込んだのか。)仙境で他の仙女とお仙との對局を見て

ゐる源二郎の繪。お仙と思うて他の仙女、――碁の相手を爲した仙女と一夜契る。（第一丁裏第二丁表）「源次郎、あらゆる色里へゆきもてころしける」、まだ二條の惣嫁を知らぬといふので、是三といふ俳諧師と連立つて、或る夕暮見物に出かける。（第二丁裏第三丁表）源次郎、癪に臥した。隣町の小山壽元といふ醫者に藥もらひに行つた所、忽ち落ちた。「此に居候の女ありける、これにうち込」囲ひ者とし名をおむらというた。その醫者の家の体、おむら茶を持ち來る處。（第三丁裏第四丁表）其頃源次郎伯父五十の賀に素人狂言を催す。源次郎一ばんに來つて、三五郎の役を勤める。昔密かに通じたる人の女房の見物に來てゐたを知つて、歌などを詠む。（第四丁裏第五丁表）。源二郎、須摩やどで淋しく暮してゐたが、夢の告で、明石屋より聟にとり、繁昌した。（第五丁裏）。中の卷、江戸である。「月のむさし本郷つちもの店に、昔八百屋久兵衞」といふのがあつて、近年めき〳〵と仕出し御用足の八百屋にも負けぬ程の店になつた。（第六丁表）。夫婦に子が無い。七福神に子授けを祈る。（第六丁裏第七丁表）。そのお蔭で生れた娘をお七と名づけ、十一歳になつた、湯島へ松竹梅の額を懸けた。「茲に湯島の蔭間屋、武（兵）衞といふもの、お七を見初め、女房にせんと思ふ。此の武衞、かげまやなれば、人よびてかまや〳〵といふ。……武べいも久べいも幸ひ駒込の吉祥寺の丹那なれば、これよりたよりとして後々お七を貰ひかける。」（第七丁裏第八丁表）。その頃久兵衞、お七を連れ、下女杉と箱根塔の澤へ湯治に出かける。こゝで、折よく吉祥寺の和尚も吉三を連れて湯治に來り、相宿。お七吉三のねんごろとなる。お七も十六になつてゐた。湯宿店先、和尚と吉三の著いた体。（第八丁裏第九丁表）。武兵衞はこの事を聞き嫉み怒つた。吉さままゐる、七よりの手紙を見せて和尚に談じつける。和尚罪を被て、それは吉祥寺の吉樣といふ事で、お七には愚僧が懸ろとい

ふ。武兵衛「然らばと玉子を出し、玉子酒まゐれと責め、既に飲ませんとせし時、玉子酒の中より三尊の彌陀現はれ給ふ。これよりさんだれいほうもはじまる」といふ。武兵衛と和尙、小姓姿の吉三、弟子一人。武兵衛の注ぐ玉子酒から三尊の現れてゐる体。これを見て、武兵衛も善心に立返つた。(第九丁裏第十丁表)。吉三、久兵衛の養子となり、お七と夫婦、芽出度し〳〵。「お七、吉三を餘り可愛がり、ちつとのことにも燒もちを燒きける故、お七は火に緣ある女と今にいひ傳へて」といふ。(第十丁表)。このお七の終末の目出度さだけが、一寸意表で、黃表紙らしい。下の卷。大坂である。瓦橋の邊り、角やしきに豐かなる油屋、一人娘をお染というた。瓦橋雜踏の体。(第十一丁表)。お染昨夜の風呂の湯上りに腹帶してゐるを母に見つけられ、詮義に逢うてゐる。(下の右)油屋店先、久松と淸兵衛。(上の左)(第十一丁裏第十二丁表)。母親、手代の淸兵衛に、お染の忍男を卜はせてゐる。此の淸兵衛は、阿倍晴明の流れで、阿部の淸兵衛といひ、平澤流のうらなひをする。「いかにも懷胎疑ひなし」が腹の子は松の精であらう」と答へる。襖の蔭で、これを聽いてゐる久松の体。(第十二丁裏第十三丁表)。お染出產の体。取上げ婆も來てゐるが、その取り上げたのを見ると、大きな松笠である。が七夜の前の晚、件の松笠から玉の如くの男の子が生れた、名を松の丞と名づけたといふのである。(第十三丁裏第十四丁表)。久松、此家を駈落せんと思ひ、或日藏の二階へ上り、自からすみを入れてゐると、「不思議やドロ〳〵の音して白雲棚曳、老翁現はれ、善哉〳〵、我はこれ高砂のぢゝいなり。我住の江の松と契り、汝をもうく。今又汝お染と契り、一子をもうく。松之丞は我孫なり。行々高砂の緣あれば、尾上菊五郎が弟子にして、尾上松之丞と名のるべし。いよ〳〵行末守らん」と舊いせりふに消え失せけりと云々。(第十四丁裏第十五丁表)お染久松、夫婦となり、

若き尉と姥、高砂もどき。（第十五丁裏）

三卷ともに目出度しに終つてゐる處が、黄表紙らしい。畫は、中卷、武兵衞の顏など、春章ばりで役者似顏繪風である。他は、體に比較して顏がぼやけて大きく、デリケート味はない。大まかな、弛んだ神經である。

○

孔子縞三篇 淺草の輪馬 磨光世中魂　三卷　竹塚翁東子述 龜毛（京傳）畫　寛政二年作

自序に「前に孔子縞あり、山東京傳なる人の作する處にして、世擧て笑嘆なす。我又生得田舎にて芋を耕る事十有余年其業する間に一冊を手作す（下略）」とある事は、やがて東子の輪廓を自ら示したもので、以て東子の傳捕捉の一材證たり得る。即ち東子は京傳の知己、又は門人、農耕に從つてゐた男といふ丈は確かである。（以上、一丁表）。「誠に聖代となりて文武盛んになり、主に學問はやり、上には申すに及ばず、下はわづかなるさゞれ石も巖となりて、こけな折介殿より丁稚の長松米舂の權八殿まで孔子の曰くと出かけければ、皆〳〵身持も自から堅くなり、奢る事なく儉約を専らとすれば、一年に一両二分の給金は、丸のびにて工面よく、年〳〵豊年續けば、米は安し奉公するはむだと自分稼ぎにする故奉公人」はきつい拂底。奉公人口入相休申候、万兵衞と書かれた口入屋の店先、給金は幾らでも出しますと談じつけてゐる客と、「日本ではモウ出來まい、唐へでも」と斷る万兵衞。（第一丁裏 第二丁表）。酒屋の店先でも、客が書物をかゝへ、ゐる。從つて醉どれの喧嘩も起らぬ。酒屋でも奉公人がなければ、小僧には悴、その悴も本を書んでゐる。折助の客さへ「此間も史記の講釋に參りました時か朝鮮長屋で、七言絶句の狂詩を愚案いたした」というてゐる。云々。（第二丁裏 第三丁表）。以下、此類の様々の、文武奬勵から湧いた滑稽で

ある。

聽從淺黄色事　三卷　二代喜三二作　文橋畫　寛政二年版

上の卷。序の代りに「筋書」として、十目を擧げてゐる。終り「戊の春　三橋正銘　喜三二撰」とある。（第一丁表）大通氣取の秀郷。久しぶりに話に來て、將門でも取付はしないかと、肝を潰して歸る貞盛。この兩人を描く。文に、

此かき出しといふやつが、ものまへで、お覺があらうが、難かしいやつさ。ちよつとつまんでいへば御存の俵藤太、將門をぶつしめて後、……おさまつた世界には俺なぞは用のねへ体だと、ぐつとそけて向島の寮へ引越し、女狂に世を遁れんと思ひの外、いけ高慢な根性にて、今の色事はしねへは損だといふはかねへ色事であやまるの、首ばかり女でもあるめへ、心いきでする色事がねへのといへば、そんな相談に乗る女はなく、大に髭けども、先でいやがるとは氣が付ず、噺話せぬやつと、はした色事で名を汚す氣はねへとまで大うぬで居ける」。

とある。（第一丁裏 第二丁表）。「三上山に年久しく棲むむかで、何でも古くなると化けるに俺が連中ばかり眞面目にいつまでも斯うしてゐるでもあるめへ」と、娘のお百を小詩常にしたといふ道具だてに化けさせ、龍宮の新海原（新吉原のもじり也）へむかで小判百兩で賣る。百足の父親、相手の女衒の百足駕籠舁二人の百足、乗つたお百の体。（第二丁裏 第三丁表）。お百、三上と名を改めて生れついての手あり足あり、大繁昌。龍王までが居續の体とある。こゝに至つて、お百は、人間の相を現して、美女。取卷、藝者すべて、頭に貝を載せて、僅かに海の者をきかせてゐる。すべて擬人に描く。三上は、うちかけ百足模様。「仲の町へ櫻貝をぐつとひくといふ案じはどふだ。」（第三丁裏 第四丁表）。

「龍宮は親王のまぐれにて女世帯同前なれば、うちのおさめかたらりになり、姉娘は性悪にて浦島といふあだな息子をそびきこんで洒落のめすから、妹もおとなしくしてゐるは損だと思へど、難陀龍王や魚であひと痴話る氣はなく、男ならびの何か情のあらうといふたちにて、毎晩両國橋へ出、多くの人をすひ□て見るうち、こつちでは古風だと笑ふ秀郷が長羽織にふるひ

つく。
秀郷、いらぬ色事の懦式だてをしてもて甘せども、今さら氣性を挫きて、こつちから手出しもならず、何處へ行つてもさへぬまゝにて歸り、両國橋へかゝれば、へんなりの艶なる娘、氣ありといふ顏だから、俺が氣取りを尊んで天人が落ちたのだと思へど、又わがりきみにて、こいつも食ひはがりて話せめへと、一當當てゝ見ける。
せたの橋へ出る筈だが、おめへが通りなさろうと思つて、両國とそげたのさ。
おきやアがれだ、おめへたつの性でまきなさるれ。

その体である。(第四丁裏第五丁表)。龍宮。姉と浦島、妹と秀郷、昵近の体、(第五丁裏)。中の卷。淡海公、唐土よりの歸りがけ、志度の浦で海女をおつ轉ばした。ぜひ京へ連れて上れにぐつとあやまり、「新手を出して、海へ落しもせぬ面向不背の玉を取つて來たらおく樣にしやう」と欺して海女を海に入れ、その腰繩を突放し、都へぐひ歸りにする。船中の淡海、繩を手繰る。水に海女浮んで鑿を手にす。(第六丁表)。海女不背の玉詮議のため、ぜげんの手にかかり、新海原へ身を沈めんと望む。魚の形を頂いたぜげんとその女房。畏る海女。(第六丁裏第七丁表)。「秀郷は浦島と心易くなり、立ぬきし氣性も乙姫にぶちこはされた上なれば、何か浮氣にうつり」、此頃ふさぐき(海女の源氏名)といふ妙に美しい突出しがあると聞き、浦島と両人で、素見の樣子。浦島はかねて「龍宮へ來る前これ〳〵なりし志度の浦の海女なれば、何か樣子があらうと遊ぶ氣になりける」。海いせやの店先、三上とふさぐき。素見の浦島と秀郷。(第七丁表第八丁裏)。

『ふさぐきは浦島に逢つちやア一句も出ぬ場なれど、廓の水はきゝ道はやく、わつちをなぜ置去りに仕なさつた、うらみなんだの何のとあるべかゝりの前書すんで、しら化になつていふにやア、旅の公家衆が來て、どのかうのいひした上、玉を取返したら好きな所へかた付けてやらうといひす故、ぬしの所へ行たい斗り、主の行衞と玉の詮議に身を沈めたのでおつす。かう打明けてもふしイすからは、覺悟をして疑ぐりなんし、何をいひすも皆主を存んじイして、されづよきそよみに先を越さ

れ、此方にもこの悪い事があれば、怪しいとは思ひながら、泣きれいりになつてしまひける。「てめへもよつぽど泣きづるだはへ」。はかない相かたがいやだと秀郷、三上をあげしが、又大もてにて氣がはれける。「この炭もゑびの性でおつす。」に

右、浦島と、泣くふさゝき。左、秀郷と火を起す傾城三上。（第八丁裏第九丁表）。「みす紙に包む文の上書ならねど、移り易きは浮氣盛り。浦島はふさゝきが玉さへ手に入れば淡海を操り、二人しつぽり暮すくらいの事は出來るといふに乘り、秀郷も三上としんの事なれば、二人の腹が合つて、兄弟（龍姫乙姫の意）をつき出し、やくしやをさらつて、日本へ歸り、四人面白く暮さうとだん〳〵根性がくさり、こちらとは水臭き仲となりける」、それを嘆く乙姫、姉の龍姫は天の生せる性惡にて、落つき、「あればかり男じやあるめへし」といふ氣でゐる。右、文を讀む秀郷、傍ら寢ころんでゐる浦島。左、龍姫と乙姫。（第九丁裏第十丁表）。浦島ふつと龍姫の玉手箱こそ不背の玉を隱し置きしに違ひなしと、秀郷にふさゝき三上を連れさせ、先へ逃げさせ、龍姫が閨へ忍んで、玉手箱をさらつて逃げる。（第十丁裏）

下の卷。浦島三人に追ひついた所へ「乙姫來り、「三上といざこざを始め、二人とも變な顏になつたから、秀郷三上を置去りにして、浦島がかねて雇ひつけの艪に乘り、ふさゝき浦島、秀郷逃げる。龍顏と百足面になつた乙姫と三上と、濱邊でのいざこざ。（第十一丁表）。駈落してきた三人洲崎あたりへ上るや否や、「乙姫三上、龍と百足となり頭から塩つけて食はんとする。折よく通りがゝりの貞盛、折助にかつがせた弓矢にて射止め、三人の難を救ふ。（百足退治の構想、逆を行つた趣向、それに淡海の不背玉と海女、浦島、なひませてはゐるが、相當に筋は立つてゐる。ドンナもんでいと作者は氣取つたらう。）（第十一丁裏第十二丁表）。

秀郷、異見をする貞盛は愛想をつかし、愈々根性がぐれ、浦島と二人中橋へ店を出し、三上を油に漬け、乙姫を鮓にし、む

かでは油蛇の鮓と看板をかけ、ふさゞきは店にびらしやらして居ければ、色氣と喰氣の世の中にて、以の外流行り、鮓よりふさゞきが評判強く、蛇の鮓といへば人が承知せず、海女が鮓といへば、誰知らぬものもなき様になりける。

「浦島さんは蘭助といふ身の上だ。」

店先、働く両人。竹の皮包を客の青銅のさしと換へ居るふさゞき。客は、勤番らしい。（第十二丁裏第十三丁表）。浦島、いつまでかうして居てもさへぬと、不背の玉を淡海公へ差出して、これ／＼にせんと玉手箱を開けると、例の煙で老翁となる。計る／＼と思つた龍姫に却つて計られたといふの也。なほ曰く、「浦島が龍宮に久しく居たから年がよつたと云ふは空言也。秀郷もふさゞきも年がよる筈を、浦島獨り親爺になりしは、龍姫が操りし玉手箱なれば、そのしかけ知るべし」とある。爺になつた浦島。驚く秀郷、世話女房式のふさざき。（第十三丁裏第十四丁表）。ふさざき、浦島に飽きはて、淡海にもたれかゝらんと都に上り、様子を聞けば、玉の事は万八と分り、疳癪を起し、淡海公の邸に鳴り込む。淡海も仕方なく、先づ客分にして末はどうとも落着する。淡海の胸を攫んでゐるふさざき。（第十四丁裏第十五丁表）

女がしんの事なれば、男が浮氣、男が情があれば女が水臭く、搔きのめしたのか搔かれたのか惚れられたのか遊ばれたのか、ふわかりは色事萬事塞翁がむまらぬやつさ、浦じろし秀じろし、やつさ此のさうしの終ひに見破り、所詮色事の諸分を知らんとし、情を好むから難かしい。これを知るものは是を好むものにしかず、これを好む者は、これを樂しむ者にしかじださ、かきのめす事を止め、色の中に遊び、げら／＼笑ひなしてめでたく暮しける。

遊ぶといふ字が大事な字さ。樂しむといふさうはきの様だが、樂しむとは、その中にあそぶといふ□（事カ）に氣がつきやせんよ

大分老けた、立烏帽子を冠つた秀郷。全く老翁の浦島。二人が一杯やつてゐる体。（第十五丁裏）。その丁左隅に、三橋　二代喜三二作　とあつて、その下に龜山人と印に讀める。すれば、二代喜三二は、師（手柄岡持。初代喜三二）より喜三二の戯作號の他、龜山人の別號までも贈られたの

である。此作、彼が師號襲名後二年目の作である。時に彼は二十三歳の青年であつた。にしては、此作、相當首尾纏りよく、黄表紙としては、中位以上の位置を占めてゐる。殊に、滑稽又は野卑、皮肉の一點張りではなく、當時の通人しやれ者に構想を借りたらしく、（勿論構想は、當時又は前代の諸作又は師よりの說示「或は有つたとして」も力あつたらう。）洒落本猶全盛の當時として、遊里、實不實の香を出してゐる處もそれに近く描かれ、以て洒落本様式の感化も認められ、尚ほ「同じく擬人乍らも、殆ど人間事にこれを書きのめし、他に往々これあるを見る植物。動物。飲食物等の世界の純擬人物、其他雜多な荒唐な趣向よりは、割合に筋が通つてゐる。此等の點から、且つ喜三二二代目の黄表紙の一模型として、特に細かく解說した所以である。

高慢狂訓至無我人鼻心神　三巻　竹塚東子作　政美畫　寛政三年版

自序云々、むつまし月、東子（第一丁表）。竹の鼻に、これ迄餘り鍋釜を割つた罪で今は隱士となつてゐる雷がゐた。此村に慢三郎といふ男がゐて、自ら慢通と號し、富家の息子なるが、家を弟に讓り、其身は隱者となり、大自惚で、我獨り澄めりと屈原氣どり友達を見下してゐたが、此雷先生だけには交際つてゐた。或時いふは、「先生何處ぞ智惠のない國はあるめへか。ちつといつて諸藝をひろめて見てへ」、「あるだんじやれへ、俺が眞先觸をやらう」と雲に送り狀をつける。この雲に乘り、慢三郎無智國に至り、檢見の御役人を迎へるやうな出迎へを受けて逗留。無智國の者たちに、俳諧、生花、茶などを教へる。（以上・下の書）又武藝を教へ、經典の講義を始める。學問ばかりに凝つては毒、ちと保養の爲と、息子でやいを連れて色里がよひ、相手が無智國の女郎ゆゑ、益々鼻高くなる。女に持てゝ夜あけ、田圃道なくはへ煙管、（急に延びた鼻に煙草入れを引かけ）歸る途中、天狗に出逢ひ、懲らしめられ、鼻ぐるみ、樹に縛りつけられる。處へ異人通りかゝり救ひ、俺がちさ鼻を低くしてやらうと、それより音曲諸藝の名人共に引あはせ、俳諧の名人其角嵐雪が定會へ連れて出る。慢三大にへこむ。その時、異人、鋸で慢三の鼻を一二寸切つて、あさへ藥をつけてやる。生花の先生今名に負ふ龍雲齋（當時實在の人物なるべし。久）の所へ連れゆき、一

ツベい拜見と川骨を出されて、是非なく取つていぢり廻し、大きにへこむ。こゝで又、異人少し鼻を切り、切つた鼻を錢さしのやうな物に通し、手に提げてゐる。でもまだ慢三の鼻は長い。（以上中之卷）。異人、今度は、茶の湯の達人遠州流の宗匠戸堀利忠軒の圍へ連れゆき見せければ、一言もなくふるへてばかりゐる。例によつて又々鼻を切られる。次、當時劍術に名高き楠宗雪（由井正雪のもじり）と立合ひ、庭へたゝきつけられ、庭石に鼻があたつて、折角の殘り少なの鼻が折れる。異人氣の毒に思ひちと氣晴らしにと女郎買に出かけ、大坂の揚屋へ京の女郎に江戸の張を持たせ、長崎の衣裳を着せて呼ぶ。さすがの慢三もひきがへるを朱盆に載せたやう五体すくんで、李程な汗を流す。こゝで花魁自ら、慢三の鼻を切つてやる。こゝで作者の樂屋落あり。（即ち東子は、谷峩などと又昵近なりしならん乎。）曰く、「モシおいらんへ、梅ほりの谷峩さんが仲の町までお出なんした。」「おゐらんへぬしの鼻を八丁ぼりの羅月さんにみせてへねへ」とある。なほ、「小指をきんすより樂でおすれへ」とひやかされる。次ギ、當時の大儒山澤常オといふへ連れて行かれる。こゝで到頭、自から鋸で殘りの鼻を切る。（そこで京傳鼻になる。）次ギ、異人と見えたは、天狗であつて、（急にこの異人の鼻が延びてゐる。）左手にかざした三方の上に載せたは、「鳥の町の歸りのとうの芋」といつた形の、串にさしたこれまで散々切り溜めた慢三の鼻である。曰く、以後、安物買で鼻を落した者たちにこの鼻を與へよと諭す。京傳鼻になつて、慢三、ひれ伏して其旨を提る。次ギ、「我なくば余の木にあらず青柳のいとすななるふりを見ならへ」と、二日の書初をした慢三の姿（以上下の卷）。

但しこの卷尾、床の懸物やうに、竹塚翁東子述とはあるが、下に、京傳作とある。是れ京傳が名を貸し與へた意味であらうか。これがため、この本、京傳作と誤り傳へられて、現に外骨氏の「山東京傳」にも、京傳の著として、存否不詳の部に入れられてゐる。拙著として、（以上の筋の通り、餘りに教訓に墮して、平凡、無味である。）流布せられなかつたものか。この京傳作とした所からも、彼（東子）は、京傳に極接近した一人であつたらう。京傳鼻の借用に於ても、これが肯づけられる。

（以下、寛政五年作京傳の「四人詰南片傀儡」他寛政期のもの十二篇は、他の機會に讓る。ちと解説細か過ぎて、紙面を多大に費した事を悔い、且つ詫びる。）

——五月二十五日稿

寄贈紹介

○南方閑話　南方熊楠著

南方翁の著として、我等には最初である。従來渇望久しかりし同翁の著先づ其一部が成つた。本著八篇所收、中、犬が姦夫を殺した話など最も面白く有益である。全体に高雅なエロチック味津々。大方に奬めたい。（四六判一八四頁。東京神田表神保町十、坂本書店。一圓三十錢）

○うきよ繪入札目錄

五月一日二日の入札目錄である。逸品コロタイプ摺數十枚附、例によつて松木氏の蒐集努力を語つて偉大である。裝幀華麗。（非賣品尙美社）

○日本文學史要　飯野哲二著

藤村作氏校といふ。纏まつてゐる、圖版も豐富であり、初學には手頃と思はれるが、唯誤植の夥しいのは難だ。（布裝菊三〇四頁、年表附、一圓二十、東京神田區表神保町二修文館）

○文化住宅圖案百種　上卷　能勢久一郎著

例の文化建築圖集であるが、從來の集大成であり、且これには普通市街居住にも向くやう材料を配置されてゐる。中流住家篇、新住家篇、田園住家篇、市街地住家篇の四篇合本、美本。（菊判二圓五十。東京市外野方町下沼袋一五八〇文化住宅研究會。振替東京六九八八七番）

○墓　　蹟　第一輯　磯ケ谷紫江編

隔月發行、氏の月刊墓碑史蹟研究以外、特別刊行物である。本文泰雲寺と了然尼の墓（鶴田勢湖）○東京市內外に在る名家の墳墓（森潤三郎）○青山共同墓地を巡りて（紫江）等數篇。口繪入葉他挿繪。裝幀瀟洒、斯界の一權威である。（東京府下和田堀內村和泉一七〇同發行所。頒布費五十錢）

○彗　　星　第一の三

三田村鳶魚氏を中心に生れた新誌、每號輪講を卷頭に、以下同人諸氏の雜考の發表。第三號は西鶴五人女八百屋お七の輪講である。此號には講者臨風、鳶魚、春叢樓、剛の諸氏。此號には熊楠翁の寄稿も見られる。當然生るべく豫想せられた好個の研究誌である。裝幀また鳶魚氏好みにてよし。（菊三十頁內外。三十五錢、東京市日本橋通四ノ五春陽堂）

○本　道　樂　第一の一

西ヶ谷潔氏の手許から生れた斯名の如き好雜誌。硬軟諸書に關する雜考あり。但し珍書解題として雪月花（上方洒落本）を擧げられてゐるが、これは活字本がある。聊か命題に副はぬかと思ふ。（三十錢。清水市江尻海岸。茂林修竹山房）

國語と國文學（五月紀念號）●文章往來（藤村號、五月號）●彗星（一ノ一、一ノ二）●國學院雜誌（四月號、五月號）●早稻田文學（五月號）●性の知識（五月號）●清元研究（第十）●集古（丙寅第一第二）●長唄（第十四）●川柳銑鋒（十五ノ五）●やなぎ樽研究（二ノ四）●歷史地理（四七ノ五）●歌舞伎（二ノ六）●墓碑史蹟研究（三十二）●風俗研究（七十二）●以毛圖流（四ノ三）●新小說（六月一幕物號）●國語と國文學（六月號）●集古丙寅第三。

著者より

最近私の頭の一部分にこびりついて離れぬのは、例の龍野の六人殺しです。これが實子たり實父たる者の所爲と果して斷じられるなれば、呆れるの他はない。日本の近代的もここまで痴呆的神經變質的慘虐的に進めば、浩歎久しうしても足りない。先づ未聞の事柄であらう。我等の江戸軟派の世界は、これに比較すると、最も倫常に堅い、穩健な享樂の世界である。大南北の暗い殺伐味も、讀本作家並に挿繪畫家の慘虐味もこれには及ばぬ。私は彼此比較して、我等の夢の國かなる事を祝福したい。○就ては、江戸軟派研究初編の殘本の始末に困つてゐる。諸君に無代お頒ちがしたい。但し不揃故、年月を知らして頂きたい何の號でもよければ、希望だけでよろしい。初編第七册より第二十五册までです。若し發送しなかつたら品切と思うて頂きたい。送料だけは一册二錢を負擔して頂きたい。○「音曲と歌舞伎」は中止。（二十六日）

定價表	
一册廿五錢	郵税貳錢
六册分	壹圓四拾錢　税共
十二册分同	貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

大正十五年五月二十七日印刷
大正十五年六月一日發行
〔貳拾五錢〕 [illegible]

禁轉載

名古屋市東區東車道町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社

名古屋市東區道米町一五七地
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

（表紙二より）れなり、今又風がへしをそめ出して是が跡をおはしむ、しかれども云々、おかしみを專らにして、すごきことをあらはしたるは、染物屋の手がらならん、どなたも一反づゝめしてごらふじろ（以上、例言）といふのである。紺屋は、染屋の屋號、艷二は通稱のモジリ、紫色主は、家業から思ひついた戲作者との類推如何。但し住居は、不明ではあるが、同書跋に、炎丘之寓居とある。

依託書目 (〔廃〕料別)

新撰東京名所圖會淺草區三册(東陽堂)九十●同本所區第三(同)三十●同深川區三册揃(同)一圓●大日本名所圖會京都名所東山二册(同)七十●同同洛中三册(同)九十●同同洛西の上(同)三十●同東京近郊名所圖會十二册(同)三圓●同秋田男鹿島名勝二册揃(同)七十●東京名所圖會上野公園二册揃(同)八十●同淺草公園二册(同)七十●麴町愛宕淸水谷公園一册(同)四十●同深川公園全一册(同)四十●同東京總說並內廓之部(同)四十●同淺草區中(同)三十●同神田區下三册揃(同)八十●同日本橋區之部一册(同)三十●同京橋區之部二册揃(同)七十●同京橋區第三(同)三十●江戸歲事記(風俗畫報增刊)二册揃九十●大海嘯被害錄(同)三册揃七十●洪水被害錄(同)一册三十●御大喪圖會(同)三十●江戸の花中(同)四十五●征露圖會二册(同)五十●風俗畫報百二十七號(同)三十●同第九十三號(同)三十●狂言二十番(芳賀校。名著文庫)八十●よものあか(同)六十●他が身の上(同)五十●流行新歌集(明治四十三年刊)六十●新內集(聲曲文藝叢書本)八十●一中節全集(同)八十●續端唄集(同)六十●淸元集(同)八十●一中と薗八(聲曲全書本)八十五●琴曲(同)七十●端唄(同)八十●長唄(同)八十五●新內(同)八十五●明治の女官(久留島武彥)九十●俳聖芭蕉(岡本默骨)六十●芭蕉翁(一葉庵)一圓●現代美術(笹川臨風)八十●聲曲自在(博文館、極美本)二圓五十●審美綱領(森鷗外、大村西崖)二册二圓●自我の研究(野村隈畔)八十●愁人(小川未明處女著)八十●情死の研究(大道)三圓五十●歸省(宮崎湖處)六十●未亡人の性的犯罪(性增刊、絕)一圓●主婦の性的研究(同)五十●日本全國女評判記(禿氏岳山)一圓五十●芝居改良(寺山星川)八十●西洋畫報舞踏號八十●近世日本史元祿時代義士篇(蘇峰)二圓●東京帝大和漢書目錄增加第一第二二册六圓●巢林子戲曲(塚越)四十●情死の研究(性增刊)四十●栗里先生雜著三册(美本)十三圓●新一幕物(鷗外)一圓●合本一幕物(同)四圓●社會文學辭典(坂本健一)二圓五十●Royal scottish Academy(一九〇七年版)三圓●婦人性學(秋元洸二)十三圓●表象派の文學運動(シモンズ、泡鳴譯)一圓●獨步集(獨步、元版、彩雲閣版)八十●運命(獨步、初版)九十●返らぬ日(三重吉、初版極美)一圓五十●平凡(二葉亭、袖珍)五十●珊瑚集(荷風、極美本箱付)六圓●牡丹の客(同、胡蝶文庫美)一圓●新橋夜話(同)二圓●すみだ川(同)一圓五十●冷笑(同、初版)一圓五十●あめりか物語(同)八十●花鳥集(乙羽)厚一册九十●龍口法難論(田中智學)五十●全國の代表的美人(新演藝增刊)六十●近代劇五曲(小山內)八十●無門關解釋(紀平、美本)二圓五十●日蓮と耶蘇(山川智應)四十●日蓮と親鸞(同)四十●ヴェニスとフロレンス(大類伸)五十●梵和佛教辭典(中尾祖應)六十●累卵の東洋(乙羽)八十●麒麟(潤一郎)八十五●眞書太閤記(帝國文庫卷四、)六十●水滸傳下(同)五十●英國舞會の心得(水交社編明治十六年版。歐化熱當時の好資料)八十●新生活第二(明治四十一年木下尚江雜誌)五十●週刊社會新聞第一號(明治四十年)八十●青年に訴ふ(クロポトキン、桑港出版)八十●(以下和本)攝津名所圖會十二册揃十一圓●人眞似目學旅路寫本一册三十●名古屋見物道中膝栗毛二册揃二圓五十●肉筆漫畫東海道繪卷五十圓●日本木版畫粹三十四輯揃保存極上三十三圓●高尾年代記(綺多)二圓五十●山水畫帖(岳亭極彩色)三圓八十●畫本錦の囊(英泉初摺)一圓八十●諸職畫鑑(政美初摺)三圓●大坂此花一より十八二十四圓●稀書複製會本戲子三十六歌撰櫻色紙(馬學)三圓半●同吉原はやり小唄總まくり三圓●猿蟹後日譚(小波)一圓●猥褻と科學(外骨)二圓八十●此の中にあり(同)一と二揃三圓六十●文明開化(新聞、廣告)二册揃三圓八十●北齋漫畫八編初摺美三圓五十●同初編粗八十●變態智識(外骨)十二册揃三圓八十●東京區分御繪圖(明治九年)一疊一圓●橫濱異人館(錦繪美)三枚五圓●淸親風景畫十八枚廿五圓●飲中八仙歌(不折)二圓●(洋)ハルピン夜話(奧野)一圓五十●百艸(芥川)八十●盆栽培養法生花秘傳集二册一圓●初夜權(新)一圓八十●南方閑話一圓十●寫樂(野口)五十●弦齋著女道樂(粗)三圓五十●同酒道樂上一圓五十●劇と映畫(創刊より本年一月迄增刊一册附計二十七册綴込表紙附十圓●蕪村句集講義四册三圓●繪本通俗漢楚軍談三十●(以下和)風俗文選(寫本)五十●千秋小謠萬歲樂(天明七年版、拾水畫)八十●女訓姿見(天保版、拾水畫彩色入)二圓●袖玉道中細見記三十●諸國順覽懷寶道中圖鑒三十●新版增補女重寶記第四諸藝の卷一圓五十●初心桂立(繪本)一圓●轉愚叢談(明治十四年頃、名古屋團珍刑雜誌)四十四册合本二册一圓五十●江戸生活研究(創刊號。鳶魚等)三十五●春信と淸長(野口)六十。

大正十五年五月廿七日印刷
大正十五年六月一日發行

定價貳拾五錢　送費貳錢

大正十三年八月十五日發行

大阪古書組合月報

大阪古書組合發行

（第一號）

大阪古書組合成立

＝記念すべき大正十三年七月二十六日＝

＝大阪中央公會堂に於て發會式を擧ぐ＝

前記

▲第一回創立委員會

今春來京都及神戶等に陸續として設立せられたる古書同業組合に刺戟せられて、我大阪も多年の宿題たる全市的古書組合の大成案が又もや再燃した、其結果各方面からの要求の下に急に會則を草案し其創立委員會なるものを去る六月初旬日本橋倶樂部樓上に於て開催した。

會する者は各區會代表及各市會交換會代表計二十五名に達し、草案會則に對して甲論乙駁各自其持論を討はして愈々之を印刷に附する事となり東區長谷川、西區小石川、南區藤堂（公立社）、北區松本（正）の各氏選擧されて次回委員會迄の進行係となる然して會則は仝月十五六日頃より發送して後各區創立委員が分擔して各戶別の勸誘を行つた。

▲第二回創立委員會

各區の宣傳宜しきと、機既に充分熟せる爲め全市多大の賛同を得、今迄小區會の折に一時退會の姿にありたる人々も改めて援助を與へらるゝ等締切期日の六月三十日迄には大半の入會者を見たが尚少數の不入會者ある爲め締切を延期したり。

然して七月十三日例に依り日本橋倶樂部樓上に於て前回後の報告と大會の準備を兼ねて第二回創立委員會を催す。來會者計十三名、種々の報告等ありて、會則中各區の評議員四名宛を創立多事の際とて各六名に更改して副議長を貳名に倍す事を提案する者あり異議なく提案可決、發會式當日全會員に諮る事とす。次に發會

式大會日を七月廿六日と決し、其議事及接待方法を議し、當日の係員選擧を行ひしに議事係として松本(正)藤堂、小石川、伊藤(静)、長谷川、森谷、松葉、四方(耕)、村井村瀨の諸氏擧げられ、會場設備及接待係として水野、木村(嘉)中尾、倉地、佐藤(光)、大石川、森村、天牛谷(支)河村、林(富)、仲の諸氏に決定、尚記錄係として井口、伊藤(一)高田、高尾の四氏選せられて當日の會を終る。

▲市會交換會代表者小會

夫れより後七月二十日一部市會よりの請求に依り市會及交換會側の打合會を催し、大阪古書組合成立の曉、之れに加盟するに就ては各市會等より組合へ徴收する金額に就て各會の諒解を得る必要あり之等を打合せ、改めて乙種市會より徴する金額一回金參拾錢とあるを金貳拾錢に變更する事を發會式大會に諮る可く附議して散會。

發會式

幾多の波瀾重疊を經來りしも、遂に其發會式を今日大正十三年七月廿六日大阪中央公會堂に於て擧行するに到れりと當日は炎天下將に九十五度を突破するにも拘はらず、熱誠なる組合員は正午頃より陸續と會場に詰め懸け、さしも曠々とした場も釜中に在る如く蒸著く、何となく緊張の氣分は漲り、來會者は開會前既に百を以て數へられた。午后一時を過ぐる頃滿場の拍手に迎へられて會員森谷清松氏先づ壇に登り開會を宣し、玆に始めて大阪古書組合發會式の幕は切つて落された。

續いて當日特に寄せられた處の京都古書同業組合よりの祝電を朗讀す。

キクミアイノソヲリツヲシクス
　キヨウトコシヨクミアイ

夫れより同氏の所説なる意見を

▲開會の辭

に代へて述ぶる所あり曰く

本日は酷署の中にも拘はらず斯く多數の御來會を得ました事は衷心より感謝する次第であります。就ては開會に先達ちまして少しく私の所感を述べたいと思ひます。

當組合設立の事は既に皆様御承知の事と存じますし、又后刻熱心なる諸氏の御高説を承はる事でもあり、尚今日迄の經過報告もある事ですから夫れに付ては申しあげませぬ。

私の云はんとするものは營業上の革新と反省と云ふ事であります、即ち團體營業の革新であります、是は誰方でも暫く此商賣を營まれますと、直ぐに明らかに、色々の欠點の改革を要すると云ふことが氣付かるゝのであります、皆様方は申す迄でもなく、個人的には充分なる御發展もされて居らるゝことでありましやうがこの團體的即ち同業者が一つになつて革新をすると言ふ事が、今日まで殘念ながら出來て居なかつたのであります、其原因としては申す迄でもなく、お互に御相談申す機會も無く且つ又改革の方法に何の力もなかつ

た慘めさであつたのであります。

今日幸に御熱誠なる諸氏が斯くも、多數御來會くだされたことは、我大阪の斯業界としては、實は始めての出來事であらうと思います、期せず既に、多年營業上の宿弊を除くと共に、茲に內外一致の革新をもつて、飜がへつては社會文化に貢獻あらんが爲めの會合に外ならないかと愚察致します、故に强いて强要せんが爲めのものにあらず、則ち是はやがて國民義務の一端なるはもとより、時勢の發展による、社會改造の一歩ともなり、其まゝが大義の必然ともなることでしやう、徒らにたゞ空名を叫んで生命を亡ぼすことなく、お互に接觸を滋くして、胸襟を披き、各自に心理と立場を理解して、御相談を得ることは、各自の經營上は申すに及ばず、遺憾なきを得ることゝ確信致します。

茲に感を同じうせる同志は、この盛大なる集合を致しました、其れに就て、聊か私の所感を申述べましたのでありますが、何卒充分なる御會談下さらん事を御願ひ致します。是を以て開會辭と致します。

喝采裡に壇を降れば、同じく會員松本正治氏代つて立ち

▲經過報告

を爲す。

私は同業者中では最も後進の部に屬するものでありますから、古き時代の起りは知りませんが、私の新しい記憶に依りますと三四年前の五月頃かと思ひます。

大阪各區の幹事方其他の方々から、各區にまち／＼になつて居る、組合を聯合して、大阪古書組合と云ふ樣な一つの大團結としたならば、相當の勢力も出來、便利でもあると云ふので、先づ其豫備行爲、即ち各區の人々の懇親を計る目的の下に大阪古書組合聯合運動會を堺大濱公園で開かれました。

當日は晴天でもありましたから來會者も非常に澤山ありまして競技會等は中々盛會なものでありました。處が當日會員中に僅かの意志の疏通を欠く方がありました爲に、此聯合運動會が却つて暗礁となつて四區の提携――大阪古書組合と云ふ者は遂に不成立に終つた樣な次第であります其後共、心有る方々は常に全市的の組合設立に關し屢々唱導して居られましたが、機運が來なかつたものか熱心な斡旋者がなかつたのか、遂に無爲にして今日に及んだので有ますが然るに今春京都市に於きまして最も基礎の强固な組合が出來まして、然

發刊を祝して

蛟龍池中に風雲を待ち、然も山雨來らむとして風樓に滿つ、と言ふのが現在の吾大大阪古書界である何れを見ても多士才々、吾三寸の方略と鐵腕一本の努力は美事今日の勢を得て此處に大阪古書組合なる金城鐵壁を築き上げた、愈々軍令發布、本月報は其の第一烽火である、即ち滿を持して放たなかつた第一矢を放つたのだ、幸ひ松本伊藤兩雄の編纂は錦上花を、吾全勝必然は勿論だが油斷は禁物、全勇士の奮鬪を祈つて已まない、敢て發刊を祝して爾言

も其內容は頗る整頓したものであります、(若しもお望の方がありましたら茲に會則を持つて居りますから後程御一覧を願ひたいのであります)此京都の組合成立に暗示を得たと云ふではありませんが、我大阪でも再び機運が熟しまして、此度四區の組合と十をの市會と合して十四組合が發起となりまして茲に會則草案を拵へ全市に檄を飛しました處が、多大の御賛同御援助を得まして多年の宿題であつた、大阪古書組合が芽出度く生れる事になつたのであります。此當然出來るべき大阪古書組合の成立が他地方に較べますと少し遲かつた嫌ひはありますが、夫れは以前に申した樣な、頓挫のあつた爲め已むを得ないとして、先づ〳〵歪みなりにも今日創立總會を開く迄に到りました事は會員一同、共に喜ぶべき階段に到達したと云はねばなりませんそして此度、會則草案を起草して頂きました方とか、勸誘或は今日此會を開くに就きまして、種々の方面に御盡力下されました方々に對して深く感謝する次第であります。

是等熱心な方々の御援助に依りまして、今日迄御加入下さいました組合員は東區が三十一名、西區が四十名南區が五十五名、北區が六十九名、合計百九十五名と云ふ數に上りまして、之を東京の五百七八十名に較べますと實に霄壤の差はありますが、京都の百二十名、神戸の八十名に比べますと、數に於ては尙我國第二の都會たる面目を保ち得る團結かと思はれます。

そこで神戸の如きは、今春京都の組合が出來、大阪も出來ると云ふ話を聞かれてから、急に準備に取掛かられて却つて大阪よりも先へ成立したと云ふ樣な次第で、大阪が一番遲れて居る譯であります。

けれども遲れたと云ふ事が何も惡い事でも、又恥かしい事でもありません、遲がけに出來ても其內容がヨリ以上に充實し基礎が固ければ何にも他に恥ずる處がないと思ひます。

此點に就きまして、今度の大阪組合の會則內容には兎角の非難もあるやうですが、其處は皆樣が此同業者の一員である以上、組合を愛し、同業の爲めに盡すと云ふ考へを、お持ちになるならば、發起者に對する僻見を排して、不備の點御氣附の個所は御敎示御忠告を煩はしたいと思ひます、そして一番遲れて出來た大阪の組合が範を他に示す域に達したいと思ふのであります。

就きましては今日迄各々各役に斡旋下さいました方々及び我等一同は臨時幹事と云ふ格でありまして決して永久的の役員でもありません、一時的組合成立の進行を計つた所謂、膳拵への役でありましたのですから、孰れ后刻更めて役員の選擧がありますから其節は愼重な態度で各區共隱れたる人材を御考へになつて、此組合に對し奮闘盡力される處の、信頼の出來る人を御選擧あらん事を願ひたいのであります。

最後に重ねて申上けますが、以前御送りした會則は草案でありましたのをツイ確定的のもの丶樣に宣傳しましたのは粗漏の爲めでしたが、そう

云ふ譯ですから勿論不備な點は多々ありませうが、然し大体の骨子となるべき精神、或は目的と云ふ點は動かないのでありますから、不完全の點は忌憚なく新役員迄申告を願ひまして今日は暑い折柄でもありますから餘り枝葉の説に囚らはれずに御審議あらん事を希望して已まないのであります。

終りて、森谷氏再び立ち本日の議事を進行せんが爲め假に議長を選びたく、之が適任は是迄の行懸り上藤堂氏を推しては如何と滿場に計れば異議なく賛成、則ち藤堂氏立ちて議長席に就き大要左の如き挨拶を爲す。

諸君私は大阪古書組合創立委員の一人として今茲に假に議長席に就き諸君に御挨拶するに先だち、この炎暑燒くが如きの時候に不拘、斯く多數の御來會を得ました事を衷心より感謝する者であります。凡と何事にせよ創めて事業を起すのは中々困難なものであります殊に同業者組合の如き多數を網羅して同一の鑄形に入れ同一の歩調を執らんとする且つ利益以外に超越する事業は至難中の至難であります、我大阪には參百に垂々とする同業者が四區及接續町村に散在してあるにも拘らず、まだ一の組合なきを遺憾としまして我々同志はこれが組合を設立すべく、多年努力―と云へば大層ですが―相當の焦慮を煩して來たのでありますが、時代が些か早かつた理由もあつたでしようし又よしや組合が設立されても今スグに眼の前へ利益が轉がつて來ると云ふでもなしと云ふ極く簡單なる理由の下に頓と纒らず、一區一區の下に小團結をして其れでマア滿足して居つたやうな次第であります。然るに其内に我等より後に發起された東京や京都や神戸では既に立派なる組合が出來てしまい、所謂先きの烏が後の烏に成つたやうな次第であります、これを見た我々は徒らに座視するを得ず、俄然として起つたのであります、然して今回は同業者諸君も時代の進歩に鑒みられ又他の都市の設立に刺戟され、非常に賛成の意を表せられまして本日までに既に二百の會員を得ましたから茲に中央公

大阪古書組合成立に際し、在來古き歴史を閲し且つ光輝ある内容を有する處の、美奈味會、書友會及び西友會其他各會を犧牲に供し潔く解散せられたる行爲に對し衷心より感謝し、併せて大組合の下に倍舊の懇親を重ねん事を契ふ者なり。

會堂を借りて發會式を擧げた次第であります。

同業者諸君、皆樣の御蔭で立派な發會式を擧げることが出來ました、これから此組合に魂を入れなければなりません。それは皆樣の代表者として將來大に働かねばならぬ役員であります、つまり組合を有意義のものにするとせぬとは役員の働きやうの如何に依るのであります、今日私等創立者一同は此組合を諸君の御手に渡して仕舞ひますから、諸君はこれから新たに此組合を立派に成長させて行く人を役員として選擧して貰ひたいのであります。

選擧方法は先きに差上げた組合規則草案には各區四人づゝの評議員を選出するやうに成つて居りますが只今でも既に二百名の會員を擁し近々三百名に成らんとする勢力を示して居る今日の形勢てば四人づゝでは能率を擧げることは中々困難であるとの理由で去る創立委員會の折りに六名づゝにすることに改めましたから、どうか其意を諒せられて各區から六名づゝの評議員を連記投票の下に選擧して貰ひたいのであります、

これから來會者の卓上演說、會則の審議、評議員選擧と云ふ順序に議事を進めて行きますから何卒諸君が有する淸き一票を最も有效に使用せられんことを願ひます。

夫れからテーブルスピーチ、所謂五分間演說は、これは飛入勝手で御座いますから皆樣には續々と壇上に立たれ、有益なる高說を忌憚なく發表せられんことを希望します、吾人は又之を謹聽さして頂くの光榮を有するのを喜ぶものであります。

と滿場の拍手起る。森谷氏更めて來會者の卓上演說、意見發表を促せば組合員湯川松次郞氏出で

豫て出版組合と書籍雜誌組合のある我大阪に今茲に古書組合が設立された事は私の非常に欣幸とする處であります。されど此設立は寧ろ遲き恨みはないでもない。夫れと云ふも是迄は此團結と云ふものが無くても商取引等は割方圓滑に捗りつゝありましたから團結組合の必要も比較的緊急とされなかつたかも知れませんが、夫れ丈け事が新本業側よりは消極的或は進取的でなかつた樣に思はれます、冀くば今後此組合の力を利用して總べてを積極的に進まれたく、次回の書籍雜誌組合の總會等にも多數の出席者ありて大いに意見の交換其他に努力されたく、就ては今日の役員選擧に當り諸君の有せらるる淸き一票を可成有效に此組合の爲め獻身的に努力を吝まない方且つ隱れたる人材を愼重に選ばれん事を希望いたす次第であります。

と簡傑なる演說を試み、拍手裡に降壇、同組合員野島藤次郞氏交つて

彼の人口に噲炙されたる「七つの鐘が六つ鳴りて、殘る一つが今世の鐘の響きの聞き納め」と云ふ近松の浪花文壇を興隆せしめたる昔より、近世文化の淵源は實に此京阪地方が中心的文化の發達を致したやうに思はれます、其大阪に於て常に文化の先驅を以て任ずる我

等同業者の使命たるや又決して輕からざる事を感ずるのであります然して尚其讀書家否學界研究家の爲めに貢獻するものは出版業或は新本販賣者業ありとするも寧ろ絶版珍籍を常に網羅する所の古本業者の努力に俟つもの多きは即一つの書籍の出版されてより遙か數年後に圖書館の設立される場合の如きは其蒐集は必ず古本に依らざれば目的を達するを得ず斯かる點に於て斯界の發展たるや必ず一國の文化消長に係る處大なりと考ふるが故に今茲に生まるゝ處の古書組合は實に重大なる意義の下に其使命を全ふされ、其組合員は折角蹶起奮勵されん事を望むのであります。聊か愚意を呈して祝辭に代ゆる所以であります。

と是れにて一般の卓上演説も終り。藤堂氏再び議長席に就き愈々

▲會則審議

に移る旨を述べ、伊藤靜三氏會則を逐條讀み上げ石川留吉氏其可否を滿場に計る。此時組合員中より種々の意見百出し其重要なるものを聽取して修正は役員附託となり、即ち別項の如く會則の修正を見る。

▲評議員選擧

夫れより議長評議員選擧を行ふ旨を告げて滿場一齊に投票を開始し、數分の後東西南北の順序に依り開票す結果左の如し

東區（票數十六票）

十四　長谷川健治
十二　鹿田靜七
十一　伊藤靜三
十　村瀨藤吉
九　石川嘉助
六　高田幸次郎

次點
六　中尾熊太郎
六　湯川松次郎

西區（票數十五票）

十四　倉地健一
十三　荒木伊兵衛
十二　石川留吉
十二　林富藏
八　奧田善吉
八　井口公次郎

次點
六　水野吉藏
三　增田和三郎

南區（票數三十票）

廿六　藤堂卓
廿二　四方耕太郎
廿二　高尾彥四郎
十九　木村嘉藏
十七　天牛新一郎
十　谷末吉

次點
九　杉山末吉
七　佐藤光二郎

北區（票數二十九票）

廿五　松本正治
十八　森村接松
十八　村井次郎吉
十八　伊藤一男
十六　松葉重造
十四　森谷清松

次點

八　米原一之

八　國枝佶郎

即ち各區六名宛計二十四名の評議員を擧げ次で別室に於て

▲組長其他の互選

を行ひしに

組　長　鹿田靜七

副組長　荒木伊兵衛

副組長兼會計　藤堂卓

の三氏選ばれたり。森谷氏立ちて其の就任を披露して

先程役員互選の結果以上三氏の就任を見ましたに就て、茲に創立委員一同並に全組合員を代表しまして當組合の御專任を御願ひすると同時に尚一層の御革新を併せて懇願いたす次第であります。

と希望せば、當日代理として出席せられたる鹿田氏の令息文一氏一塲の挨拶あつて後藤堂氏の發聲に依り、滿塲萬歳を三唱す。

最後に森谷氏の

▲閉會の辭

皆樣、此酷暑に際し、斯くも御熱誠なる御會談を得、又京都組合諸氏の懇篤なる祝電を忝ふした事は如何に當組合が盛大であるかを思はしめるものであります。諸君と共に感を同じうせる不肖私は實に感謝に堪へぬ次第であります。是に酬ゆるに今後諸氏と共に其名實を全からしむるに努力したいと存じます。茲に盛大なる今日の發會式を終るに際し一言申上げた次第であります。

と閉會を宣す。時に午後五時、茲に芽出度大阪古書組合も成立して無事其發會式を終つたのである。

▲第一回定例役員會

八月六日午後十時より本組合成立後第一回の役員會を日本橋倶樂部樓上にて開かる。來會役員十八名、劈頭大會席上にて詮衡されたる會則の修正を施し、後月報の發刊を村井、伊藤(一男)松本(正)の鹿田文一の四氏に委囑する件を決議して散會、因みに當分毎月初旬の六日を期し同時刻同所にて役員會を開く事に決す。

▲役員會出席成績

毎役員會に出席役員の氏名を一々明記するの煩を避け只人數のみを記し左表を以て毎月報に報告する事とす

○出席●欠席△遲參

	一回	二回	三回	四回	五回	六回
鹿田	○	—	—	—	—	—
荒木	○	—	—	—	—	—
藤堂	○	—	—	—	—	—
長谷川	○	—	—	—	—	—
伊藤靜	○	—	—	—	—	—
村瀬	○	—	—	—	—	—
大石川	○	—	—	—	—	—
高田	●	—	—	—	—	—
倉地	○	—	—	—	—	—
小石川	○	—	—	—	—	—
林富	○	—	—	—	—	—
奥田善	●	—	—	—	—	—
井口	○	—	—	—	—	—
四方耕	○	—	—	—	—	—
高尾	○	—	—	—	—	—

木村嘉 ●
天牛 ○
谷支 ○
松本正 ○
森村 ●
村井 ○
伊藤一 ○
松葉 △
森谷 ●

▲創立會計報告

△收入之部

組合加入金　壹百九拾七圓
内譯
東區三十一名　三一、〇〇
西區四十一名　四一、〇〇
南區五十七名　五七、〇〇
北區六十八名　六八、〇〇
計金壹百九拾七圓也

△支出之部

通信費　金八圓六拾八錢
内譯
往復ハガキ　六、〇〇
切手ハガキ　二、三八
電報　、三〇

印刷費　金拾九圓貳拾錢
内譯
案内狀　三、二〇
會則　一六、〇〇

創立打合會雜費　金九圓拾五錢
内譯
會合三回ノ茶菓辨當　七、一五
用人心付　二、〇〇

創立總會費　金百三十四圓貳拾錢
内譯
公會堂借入　二五、〇〇
朝日組支拂　六、六五
投票用紙　一、八〇
筆紙墨ピン　二、六五
紀念菓子代　七一、五〇
當日雜支出　二六、六〇

什器　金參圓參拾五錢
内譯
手提金庫　二、五〇
帳簿　、八五

計金百七拾四圓五拾八錢也
差引金貳拾貳圓四拾貳錢　現在殘金

▲組合費の集金

本組合の組合費集金はまだ一般に參つて居ませんが追つて二ヶ月分を一時に組合所定の領收書を持參し集金に參りますから其節御支拂を願ひます

市會だより

▲大阪古書組合成立記念市

去る八月十日南堀江書林倶樂部にて大阪古書組合設立記念市會を催した札元は京都杉田大學堂及大阪高尾書店で十日會と日本橋倶樂部が後援であつた。來會者多數、洋本市としては我大阪に曾て見ない處の大物珍本揃の大市であり且仲々の盛況を呈した

▲八月中休會市會

書榮會市會は八月中に限り四と九の日の中九の日のみは休會する事となり、又古典會は八月廿五日を休會する由

▲村井氏の市會退會

組合員村井治郎吉氏は今回種々の事情の爲め書友會市會及日本橋倶樂部の會員を脱退された、が今後共兩會には大いに聲援はすると云ふ事、因みに其多年の功を謝すため書友會は去る八月四日洛西嵐山温泉にて一日の清遊を試みて和氣藹々歡を盡した

洋本稀書解題（一）

文一郎編

△薩隅煙草錄　一冊　青江　秀著
（TOABCCO Culture ot Osumi & Satsuma）

明治十四年二月出版第一版鹿兒島縣藏版　東京丸屋善七發兌タイトル頁一頁　松方正義題言三頁　渡邊千秋同六頁　岩村通俊同六頁　本文五卷通頁六百頁　圖解八一頁　英文序言、十頁　正誤表五頁　挿圖百五十六圖　四六倍判（八寸×五寸三分）金文字入布裝　定價五圓

著者は明治十一年煙草培養に於て三百年の歷史を有する薩隅二州の郊村を巡歷して老農老圃と論談し苦辛經營此書を著はせるものにして卷一に種子、苗、植付卷二に糞培、昆虫、疾病卷三に採收乾燥、土質等卷四に産額、相場、耕作費用、秋煙草、香味、品評元方買出、商標、輸出の事を記し卷五に於て煙草歷史を説く挿入する所の大小數百の彩圖の多くはすべて實地實物にあたり著者自ら眞寫せるものにして簡撲なる筆致殊に雅味多く單なる一片の研究報告ならざるを覺ゆ

煙草渡來以來既に三百年曩に大槻玄澤の蔫錄ありと雖も其研鑽の深き此書の右に出るものなし著者後に「一驛遞志稿」一卷を著す兩著共に明治の二大著述と云ふを得べし

左に余の調査せる（本邦刊行）煙草關係書目を掲け大方の垂教を待つ（單行本以外は載せず）

○煙草詩二冊　元祿板
明治二十四年七月發行松雲堂月報十五號に見ゆれ共未見

⊙煙草記　一冊（半紙二十枚）寶曆六年序筆者未詳
異號、和語、號評、煙管、時代等二十八項に分ち煙草の由來、詩歌等を詳記す、蔫錄の刊行に先つ四十年既に此書あり內閣文庫外各種の文庫目錄に未だ見えず珍とすべきか

○蔫錄　三冊大槻茂質（玄澤）著寬政八年序文化六年開板繪入
和漢洋書煙草に涉る諸説を悉く採輯し天正慶長渡來以來世人の嗜好形況且その烟具の諸圖を列載し詩文を附載したるものなり

○目さまし草　一冊清中亭淑親文化十二年序繪入
大槻玄澤の蔫錄は漢文なるを以て門人等蔫錄中烟草の來由功能禁忌等の要件を拔萃し及び翁上梓後の説を併せてかなを以て編せし蔫錄の附錄なり

○狂歌煙草百首一冊　橘薰著弘化三年刊
煙草狂歌百首を詠し諸國の出處を詳載し蔫錄を多く引き更に諸國を加へ大槻氏の遺漏を補ふ江戸神田煙草商橘薰三河屋彌平次輯むる所なり

○煙草錄　中本一冊清渚逢椿著刊年及點者未詳
頤素堂叢書中に收むるものゝ翻刻なり

○勸農煙草栽培錄一冊　佐々木忠綱著明治二〇刊

○煙草作改良講話筆記一冊　志賀雷山演明治二五刊

○煙草記　明治二七刊

○歐米煙草製造法秘傳一冊　堀井洌

纂譯明治二七刊

○煙草栽培法一冊　妹尾忠三郎編明治三一刊

○煙草栽培一冊　大畠喜代太編明治三二刊六〇頁

○日米比較煙草栽培法一冊　米バタ・ーウエック著日本煙草雜誌社譯明治三二刊

○最近煙草論一冊　鈴木梅太郎高林盛基共編明治三六刊

○滿州煙草界の實狀と日本煙草の發展必勝策一冊　廣江澤次郎述大正三刊

○内國產煙草の起源及分類調查　專賣局編大正五刊

以上諸書を研究した引用書目は

（增訂日本博物學年表、錦窠翁耋筵誌三、內閣文庫圖書和書目錄、東京帝國大學附屬圖書館の和漢書目錄、大槻文庫書目、農業館書籍目錄、大阪府立圖書館和漢書目錄參考）

▲月報發行と發送

本組合月報は每月一回發行する筈ですが事項に原稿の餘り困難な時は隔月一回位になるかも知れません、尙發送事務の遺漏から不發送の方が出來た塲合は左記最寄の塲所に僅少の殘部が備附けてありますので適宜御申込下さい、以後每號此習慣に御依りを願ます

東區安土町四丁目三七　鹿田書店
同谷町三丁目交叉點角　高田書店
西區京町堀通三丁目一七〇　石川書店
同九條二番道路角　奥田書店
南區日本橋南詰　公立社書店
北區曾根崎永樂町二〇七　松本書店
同西野田亀甲町一丁目　松葉書店

▲落丁本の處置に就て

本組合員は一般顧客及組合員の迷惑を防ぐ爲め、落丁其他の欠點本を素人より買入れたる時、或ひは市會等にて之を發見したる際には左記の方法を以て夫れが欠點本たる事を一見して判明する方法を利用したいと思ひます、其方法は

一、落丁本、欠點本を個人或は市會にて發見したる時は必ず全市共通的の符號を其本の奥附の或個所に押捺して簡易に之が欠點本なるを識別せしむる事

一、右方法を實行せば奥附なき書籍は一種の欠點本と見て各位の注意を促す事を得

一、此方法を京都、神戶等の各組合に諮り三都共通的のものにせば大いに各員の迷惑を減少し得らるゝかと思ひます

投稿歡迎

組合員の御投稿を歡迎いたします、內容は人身攻擊に亘らざるものに限り、何人でも結構です、然し紙面に限りがありますから揭載の可否は編輯係に御一任を願ひます、尙月報內容及編輯上の御問合せは北區曾根崎永樂町二〇七松本書店內宛必ず往復はがきに限り御回答申上げます。

勿論右方法は組合員各位の高潔なる商業道德に訴へるにあらざれば不可能ですが、他に何か宜い方法があれば、月報御利用の上御申告御投稿あらん事を希望致します、就ては右方法の賛否を組合月報を通じて皆樣に御尋ね致します。(城西生)

清風浴後

僅かな編輯でも委かされて見ると頗る肩の凝るものでそれだけ責任觀念が強いけれども何分に餘暇の少ない處へ不適任の微才、無論潑溂たる紙面を拵へる事が出來ない△只だ諸君の投書を纏めた迄の事、考へれば成るべくサボッてヅルけて編輯不信任を訴へられて此任を早く退却せねばならぬと苦慮して居る。それで發刊も斯く遲延した譯△本紙は創刊の際でもあるので頗る緩漫主義を執つて紙面もダラシなくなつたが來月からは極力緊縮方針の下に頁は大抵特別事項のなき限り四頁に限定する△去月廿六日の公會堂に於ける當組合發會式は堂々たるものであつた、就中其會場が美しかつたので誰れかゞ寫眞を撮つて置きたいと云つて居た。又其節書出した處の大會順序書や一般會員名簿は多く高田幸次郎氏の達筆を煩はしたもので實に立派なもので皆感服して居た。

コシヨクラブ

投稿歡迎

▲コシヨクラブ欄を設けて一般會員の機關に提供いたします、一件五行以内は誰れでも御利用下さい。但人身攻擊に亘るものと記事輻輳の場合は採用せない事があります(編輯)

▲舊西友會員に告ぐ　今回大阪古書組合成立致候に付舊西友會は自然消滅と相成候段一々挨拶狀發送可仕處乍略儀誌上にて御報告申上候(西友會當番幹事)

▲蛙も旱り續きで困る、重い荷物を脊負つて街路を蛙のやうに行くのは古本屋と極つた世の中だが聞く所によると一足飛びに、組合から自動車會社が出來てブーッと行くげな、そして蛙が皆んな乘せて貰ふさうな(白風呂敷の蛙)

▲去る頃發行の東京の新聞の研究と云ふ雜誌には當組合の創立發會から其記念市たる去る十日の杉田、高尾の聯合市等の內容批評迄がチヤンと載つて居る、誰れから聞いたものか其早耳筋には感心せざるを得ぬ(某)

▲樹の育たない大阪は、恰度蒸暑い劇場の中のやうだ、いくら煽風器でも樹は育つまい、其下に蠢めいて居る人間共こそ、慘なものだ、頭がフラついて、眼が眩む、同じクラむのなら定期の運動團でも作つて、組合員のくらみやいをしてはどうだ(三角旗)

▲單獨飛行はよく落る世の中じやげな、每時も敎科書と云へば、新本屋のお旦那さんの專業のやうに心得て居る、オカシナとだ、組合敎科書專賣所でも設けて直輸入の古本敎科書を賣るテナ事をやつて新本屋さんに叱られて見てはドゥダ(鳥人)

大正十三年九月十五日發行　　大阪古書組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第二號）

我同業青年諸君に

副組長　荒木伊兵衛氏談

一日、副組長荒木伊兵衛氏を訪問して我月報の爲め何か一般組合員の參考ともなるべき事を發表して頂きたいと願つた處、同氏は謙讓なる態度を以つて私等がとても其麼資格も有しないし又文を練ると云ふ才でもない、然し二三十年前の大阪古本商史とでも云ふものを編みたいと思つて居るから、今暇々に備忘的のものを拵へて居る譯ですが、私の事ですから何時夫れが發表出來得るか確答を申上げる事が出來ない、先づ當てにせずに待つて下さいとの事である。然し編者としては實は第二號月報の冒頭を飾るべき原稿がないので是非何か發表をする心持で、編者の問ひに對し御答へが願ひたい。即ち「如何にせば我業界にて成功し得るや」と云ふ問題を貴下多年の經驗に依つて御解決御指導が願ひたいと云へばさうです、私の店の古い御客に或る專門學校の校長樣でしたが、此古本業を營みたいと云ふ志望の下に勿論充分素要のある方でありましたから種々古本屋になるべき豫備知識の涵養に勉めて居られました、就中佛蘭西あたりの「古本業學」と云ふ樣な原書を五六種も取り寄せて頻りに研究されましたが其結果は之れ程繁雜にして又微々たる業務はない須く大成功を望む者の向ふべき道でない事を感せられましたので多年の宿志を斷念せられた樣な事がありました。目今は然うも行きませんが二十年計り以前は僅かの金額さへあれば露店營業なんかは堂々と出來、夫れで毎晩相當の商内をして宜く一家を支持する事が出來た、夫れ程簡易な商業でありましたから多く之れに向つて來られますが未だに大成功を遂げられた話を聞きません、勿論少數の異例と云ふ事は何の方面にもありますから成功をせられた方も皆無と云ふ譯ではありませんが、要するに如何なる奇書珍籍でも一册宛を販賣して居る樣な事では高が知れて居ます、同じ古物商の中でも他の種類を扱ふ商業とは比較にならぬ程微細な商業でありきす、然し品格と云ふ點では是

れ程又高尚な商業はなからうと思ひます、即ち學者博士にも附合ふ事が出來て折には其高説を居ながらに拜聴する事も出來る、つまり慾を云はず多くの物質を望まず自己の趣味の上から此商業を續けたいと云ふ人は斯業界に於て最も幸福であり又最も適當な人柄であると思ひます、なれ共趣味の爲と云ひしも業界に入れば多くの書籍壽典に接觸は出來ても親しく趣味の如く千卷萬冊を讀破し或は研究せんとするには大いに理想を裏切られるものがあります。それは漸くにして書名を覺え、定價を暗んずる事に於ても尙至難な事でありますから理想を充分にせんとすれば物質を缺き、物質を獲取せんとせば理想を捨てねばなりません、けれ共一歩々々漸進的態度なれば或程度迄の小成功は疑ひなく寧ろ是程氣樂に衣食し能ふ商賣はない小成に安んずる物は執るべき道でせう。

話は古い事ですが茲二三十年前と云ふものは心齋橋通りと云へば北は平野町界隈より南は島の内に入り大寶寺町邊りまで連續的に三十軒餘りも古本屋が軒を並べ實に殷盛を極めたもので恰も今の東京神田に於けるか或は道修町の藥屋に於ける如きものでありましたか、和本形が洋本になる樣に學問其ものが國學から洋學に移つた過渡期時代であつた爲めか何時の頃か自然に凋落して現今殘るのは僅かに指を屈するに過ぎないと云ふのは、其裏面に何か採算に合はない點があつた故か、心齋橋と云ふ通りが斯業者を置くに餘り不相當な街衢に進化した爲めでせうか、是を以ても此商賣が如何に小規模であり、男らしくない業務と云ふ考へを起す所以であります。然し又飜れば德川三百年間の和本は漸次に陰を潜め洋本の前途は益々洋々たるものがあると云ひ得られますから、以前に申した斯業界は凡て小規模なりと云ふ斷定は下せなくなり、此舊例をしてよく開拓し打破すべき使命を帶ぶる者は全く新時代に生れたる青年同業者諸君の努力に俟つ處多しと思ひます要するに現在の業界を小なりとし、大いに社會的地位を得ん爲め燃ゆるが如き大成を望む人は須く出でて一六を賭し出版界に入る事であります自己の出版物が一度巡風に棹せば瞬く暇に大成を得らるゝものでありますが出版界は又夫れ丈け危險味の伴ふ事を知悉せなければ遂に一物をも得ずして終る事が多からうと思ふのであります。甚だ經驗のない私が潜越な事を申し且つ御提案に對する趣旨に副はなかつた事を愧づるものであります。(文責在編者)

□□東京から□□

謹啓今回貴組合創立相成月報規約書等御送附を頂き厚く感謝仕候當市組合評議員會は毎月八日に開催致居り候條御厚意の程當日參考として諸君共閲覽致すべく乍略儀御禮の御挨拶を兼ね益す貴會の御隆昌御發展を希ふと共に御創立に對する敬意を表度如斯御座候　敬具

東京神田
文昌堂書店主
宇佐美精一郎

大阪古書組合御中

大阪古書組合 會旗圖案懸賞募集

去る九月六日の第二回役員會にて協議決定したる本組合會旗の圖案を懸賞募集いたしますから左の條項の下に諸氏奮つて應募あらん事を希望します

規程

一、應募者資格　本組合員に限る事

一、圖案樣式　各組合等に所有する會旗と同樣の據瀨地フサ附のものを作製する筈に付、本組合記章と「大阪古書組合」なる文字を挿入し可成着色を施されたき事（彩色せず共不苦）用紙は隨意、但本組合章は未だ何等制定なき爲め創案されたき事

一、投稿　一人にて數種投稿せらるゝも差支へなし

一、賞金　壹等　拾圓　壹名

一、締切　大正十三年十月末日限

一、審査と發表　審査は十一月六日の役員會に於て嚴密なる審査を行ひ十一月十五日發行月報紙上に發表す

大正十三年九月

大阪古書組合事務所

▲第二回定例役員會

九月六日定刻より第二回定例役員會を日本橋倶樂部にて開催、來會役員十八名、本年秋季に於て懇親會を開くやと問ふ者ありしも創立早々經費多端の際なれば來春まで延期する事に決し、夫れより以前に會旗一旒を調製する必要ありとて先づ其体裁圖案の懸賞募集を次回の月報にて發表する件を決議す、尚本組合員の會員章を各店頭に掲示しては如何と提案する者ありし故其作製方を伊藤（靜）森谷二氏に囑して散會

▲役員會出席成績

毎役員會に出席役員の氏名を一々明記するの煩を避け只人數のみを記し左表を以て毎月報に報告する事とす

○出席●欠席△遲參

	一回	二回	三回	四回	五回	六回
鹿田	○	○	｜	｜	｜	｜
荒木	○	●	｜	｜	｜	｜
藤堂	○	○	｜	｜	｜	｜
長谷川	○	○	｜	｜	｜	｜

氏名						
伊藤静	○	○	｜	｜	｜	｜
村瀬	○	○	｜	｜	｜	｜
大石川	○	○	｜	｜	｜	｜
高田	●	●	｜	｜	｜	｜
倉地	○	○	｜	｜	｜	｜
小石川	○	○	｜	｜	｜	｜
林富	○	○	｜	｜	｜	｜
奥田善	●	●	｜	｜	｜	｜
井口	○	○	｜	｜	｜	｜
四方耕	○	○	｜	｜	｜	｜
高尾	○	○	｜	｜	｜	｜
木村嘉	●	○	｜	｜	｜	｜
天牛	○	○	｜	｜	｜	｜
谷支	○	○	｜	｜	｜	｜
松本正	○	○	｜	｜	｜	｜
森村	●	●	｜	｜	｜	｜
村井	○	●	｜	｜	｜	｜
伊藤一	○	○	｜	｜	｜	｜
松葉	△	●	｜	｜	｜	｜
森谷	●	○	｜	｜	｜	｜

▲谷勘七氏夫人 組合員南區日本橋筋五丁目谷勘七氏夫人は兼て御病中の處藥石効を奏せず御死去九月十日阿部野墓地へ葬送、南區評議員全部、組合員多數會葬せられたり

日本に一冊しか無き珍書
古今四場居百人一首
劇道の第一權威者、伊原青々園先生本書を解題して

本書は元祿六年五月の開板にして鳥居清信が畫くところ稀代の珍本なり現存するものにして予の知れるは東京松廼舍文庫及び大阪雅俗文庫に藏せらるゝ二部のみ未だ他にあるを聞かず思ふに清信がなほ師宣を摸せし壯時の筆に成れるが如きも豪放の氣全幅に滿ちて自から後世「鳥居風」と稱せらるゝ畫風の筆致をほの見るを得べし

本書は始め「古今四場居百人一首」と題しゝが當時賤しき河原者を小倉選に擬するは憚多しとし改題を命ぜられ「古今四場居色競」と改めて出版するや直ちに絶版を命ぜられて印本は勿論板木の全部を沒收破棄せられたるもの要するに一種の役者評判記にして今に於てこれを思へば其絶版を命ぜられたる理由の殆んど解し難きものありと雖も封建專政の制は蓋し止むを得ざりしなるべく、市川團十郎、森田勘彌等名優一首の品隲に至りては當時劇壇の面目躍如たるを見ると雖も其筆者の何人なるかを知らず惟ふに豫め後累を恐れて名を署せざりしものあらんか

松廼舍文庫とは東京安田家の藏書を收むるところなるが昨年九月の關東大震災のため全部祝融の災に遇ひし際此書も其厄にかゝりたれは、現今日本に僅に一本を殘すのみ、然して其一本も既に雅俗文庫宮武外骨氏を離れて渡邊露氏亭の手に歸せりと聞く。（南久太郎）

三十五年前の

▼古本相場▲

大江生

古本の價格は數年前より非常の騰貴を來たし、殊に以前より珍本とか云はれる物は近年愈々品拂底となり茲數年ならずして全く其姿を見る能はざるに到る物もあるであろう、それに就て價格の騰貴も自然の趨勢かと思はれる。今左に明治二十三年（即ち三十五年前）五月（第一號）より同年十二月（第八號）に到る當地松雲堂發行書籍月報中に記載されたるものの一部を摘記して當時の相場を追憶するのも一寸面白かろう。

日本書記　十五冊　七拾五錢
古事記傳　四十八冊　五圓五拾錢
和漢三才圖會八十一冊　五圓五拾錢
攝津名所　十二冊　壹圓貳拾錢
大日本貨幣史卅六冊　參圓五拾錢
本草綱目　四十五冊　貳圓五拾錢
淀川兩岸一覽　四冊　貳拾五錢
浪花の賑ひ　三冊　十八錢
元錄版大阪地圖一冊　貳拾五錢
薩隅煙草錄　一冊　八拾五錢
難波雀延寶版　一冊　六拾錢
一角纂考　一冊　拾貳錢
鮫皮精義　合一冊　拾錢
西鶴好色一代男八冊　壹圓四拾錢
新町廓みをつくし一冊　貳拾錢
島原廓一目千軒　一冊　貳拾錢
万治二年
女しき物語　二冊　拾八錢
還魂紙料　二冊　參拾五錢
ひそめ草　三冊　貳拾錢
寛文四年版
文しやうそうし　二冊　貳拾錢

▲落丁本の處置に就て

——城西生に告ぐ

御説は至極結構です然し奥付に符丁をつける事は駄目でしよう奥付を犠牲にして落丁を儲ける事が出來るから、さりとて從來の本の上部等をインキで汚すのは体裁がわるいから是は本の中央（五百頁あれば二百五十頁の一定場所）の本文へ掛けて符丁をつけては如何です但し必らずしも中央とは限りません何頁目と定めたら……符丁は小さな印で印肉に限ります尚無奥付の本を落丁本と全一視する事は穏當でないと思ひます。（郡部ＦＡ生）

市會だより

▲九月十一日　鹿田書店が札元で堀江書林倶樂部に於て和本漢籍物法帳類等の臨時大入札會があつた。

▲九月十五日　天下茶屋南木氏の藏書中洋本の一部を賣立てるべく高尾書店札元で書林倶樂部に臨時大入札會があつた。

前回の里内文庫程大物は無かつたが全部が珍本揃ひで品が美しいので可なりの値段であつた、後援は十日會

▲九月十八日　西區同友會市會では創立滿五周年に相當すると云ふので其記念の爲めとして同會常設場で一冊壹圓以上のセリ市を行つたが來會者多數中々素晴らしい景氣であつた

新著紹介

B・S生

古版大阪地圖解説

一册南學士佐古慶三編大正十三年八月一日發行和紙和裝帙入竪一尺横七寸三分、三浦博士題簽原、坂口、三浦の博士序文各二頁、目次四頁本文九〇頁自跋一頁玻璃版挿圖二十二葉解説地圖六十九舗實價拾參圓八拾錢

私達の祖先が、永い傳統を享けて住みなれた、古い土地の面影を想起さすものに、古版地圖がある。殊にそれが、私達の郷土のものであるなれば、云ひしれぬ興味と、感慨に打たるゝであらう。大近松が遺した、あの曾根崎心中や、天の網島、さては今宮心中の道行の一シーンを、想ひ浮べるものにとつて、元祿の古地圖は、それを一つの形として、ありくと私達に美しい幻影を造り出さしめることであらう。古版地圖は、私達の過去の忘じ難い夢の領域を擴め、且つ深めしめる。

とは云へ、古版地圖を見るの難きは地誌紀行を讀むの比ではない。其年代と處とによつて、幾度か變遷更改する跡を究める事は、専門外の私達にとつては、容易の業ではないのである。此際古地圖の蒐集と考査に多大の努力を費し「古版大阪地圖解説」一卷を著されし佐古學兄に多大の敬意と感謝の意を表するものである。

装釘の優雅、挿圖の鮮麗、印刷の整美、如何にも「道樂出版」の名に背かぬものとして推賞したい。殊に解説の正確にして資料の豊富なる、總て當時の水帳、圖繪圖、其他の古記錄に考覈し、曩に出でし大阪市史並全志等の誤謬を訂し、最も考證に困難とせらるゝ古町名の名替については毎圖に就て其誤脱を示して、あくまでその眞僞を甄別吟味する所徹底的な態度には少なからず敬服さゝれる。學問の研究は「日新日新又日新」であつて、先人の著作がすべて胡麻化し許りで無い事は論を待ぬ所であるが此點に對して編者が先人を責むる甚だ急にして嘲笑的態度に出られしは私の深く憾みとする所である。

さは云へ、上は明暦の初年より下文久の末に至る六十有餘の古地圖の解説は挿入せる繪圖（これは寫眞版餘りに小で原圖を彷彿さす許りであつて地圖其のものを見やうとする人は少し困難であるが）と共に掌を指すが如く、さしも難解の地圖も、不知裏に私達に古地圖を讀むの面白さを覺えしめる。此書は私達郷土史を繙く者の羅針盤たり北斗星たり得るであらう

佐古學兄は『大阪經濟史の完成を以て自家の使命としてゐる一篤學者』であつて『古版大阪地圖の研究は兄の事效から見れば一つの諸餘に過ぎない』のであるが、にも拘ず少なからざる資財と絶にざる努力を以て此書の完成を見ることを得たのは、實に欣快に堪へない處である。

次で近く、學兄の『大阪經濟史年表』の發表あるをきく、少壯雄偉の學兄必やその出來の日は期して待つべきであらう。終に望んで學兄の『何ものをも理解しやうとする精進』を以て研鑽の益々深きを加へられん事を祈るものである。妄言多謝（九月五日朝記）

▲御斷りと正誤

曩きに印刷頒布いたしました處の組合員名簿中に左記諸氏名を脱漏いたしました事は當事者の失態にて何共申譯無之本誌上に掲載して御斷りを申上げ次回名簿印刷迄御辛棒を願ふ次第であります

南區船出町八一〇　田中信太郎
西區市岡町二一三　港　登
北區西野田江成町福島署前　木村茂輔
北區上福島三丁目二六五　哲學堂　太田彦八

尚ほ組合規約中第十二條三行目の副長兼會計係は副組長兼會計係に同行評議員十四名は二十四名に第十三條一行目の副組長兼會計係云々は副組長及會計係に各訂正す

▲新加入者

名簿作製後入會せられたる新加入者左の如し

東區道修町五丁目一七　石田龍介
西區市岡町四五三ノ一　幸　悟
西區市岡町三五五ノ三　林　隆吉
西成郡今宮町字東田九六六　戸川　清
仝天下茶屋西皿池八一〇　田中ます
東成郡天王寺村天王寺一九四　鳴宮米次郎
南區南日東町四五〇二　小關治男
西區北堀江通三丁目三七　倉地隆二

光風霽月

東都震災滿一年を迎へて各々感慨無量たるものがあつたであらう、それにつけても去年の今日此頃の我大阪同業者は帝都人士の大災厄に深甚なる同情を寄せて聊かなりとも、應分の寄附などと奔走したものだ▲其の傍ら氣早な連中は帝都の凡ゆるものが灰燼に歸した、勿論出版界、古本界共當分は絕滅の形ちだから書籍の相場も必然暴騰するに違ひないとて東奔西走其思想を試みたが▲案に違はず震災後から今年の四月頃迄は素晴しい勢を以て同業界をば頻に賑はした、其好景氣に慣れた反動か急轉直下今年の夏は殊更奈落へでも落ちたやうな閑散さを味つた▲漸くにして燈下可親に一縷の望みを囑して讀書期に入つたが今秋は勿論去年のやうな素晴しさに立ち歸へれない事は當然たる事だが例年の秋迄の復活も如何かと案じられる▲秋風吹いて活氣附く業界が落莫に終らなければ好いが

コショクラブ

投稿歡迎

▲古書月報第一號を拜見して如何に編輯會員の奮鬪努力せられしかを感謝致候清風浴後にサモツテヅルケルとの事又不適任の徹才は餘りに謙遜の事と存候只今の組合員中にては貴兄等の編輯會員を於て他に適任者なき此際一層の馬力を入力を懸け益々月報の爲め吾組合員一般の爲め獻身的に努力なされん事を希望仕候

▲毎月八頁位は幾月殺下度左なくては隱れたる人材、文才を見出す事が出來申さずと愚考仕候

▲淨本何書解題は吾等組合員一般に非常に參考と相成候故毎號引續き掲載されん事を希望仕候

▲役員會出席成績表甚だ面白く存候一見して各役員のサボ程度が分り申候

▲組合事務所を適當なる場所に設け大入札會、大市會、常設即賣會其他會員一般に利益ある樣の仕事を一日も早く實現せん事を希望仕候（城西生）

本紙廣告に就て

當第二號から役員會の贊同を經て廣告を掲載する事に致しましたから奮つて御利用下さい、但當號のみは宣傳か惡かつたので各行數が非常に大き過ぎましたか次號からは一劃七行宛の事、料金當分一劃壹圓宛と致します。

大正十三年九月十五日第二號發行

發行兼編輯人 松本正治

大阪市南區日本橋南詰(公立社書店内)

發行所 大阪古書組合事務所

大正十三年十月十五日發行

大阪古書組合月報

大阪古書組合事務所發行

（第三號）

寄書

予の古本趣味

小野利敎

人生趣味多きが中に、古本趣味程有益な物はなからう。尤も、汗牛充棟しかも和漢洋に亘る廣汎な古本海はあさつても〳〵漁りつくせるものでない、そこで、色本とか、豆本とか或は院曲丸本とかの部類にわけて蒐集する人が出て來るのであるが、此の蒐集家なるものを見ると存外に思ひも寄ぬ人がある、彼の男がそんな事をやるかと云ふやうな事がある。俗に藏書の三德といつて、讀まんとく積んどく捨てとくなどは、殊勝の上を超した道樂だが、單に蒐集したのみで、人にも見せないばかりか、賣りも貸しもせぬ人物が往々ある。自力で文庫を建てる程でもなく、圖書館に保管を托するでもなく、件の三德、否三損に仕てをる人があるやうである。

今でも、こんな人が珍本買〆をやるから、眞の讀書家がこまる。圖書館乃至文庫に通ふ暇のない自家文庫は所謂古本屋である。この古本店は、學究の上にも、趣味の上にもなくて成らぬ機關である。さうして自家文庫、一學究の人に取つては入らぬ本又は飽いた書物は之を估却して更に他のほしいのを買入れることが經濟でもあり、保存にも都合がよい。文庫位を家庭にこしらへ得る家屋の住人でない限はこの方法が最良法である。余の古本趣味はこゝに存するのである、常住坐臥、机邊を離すことの出來ぬ、字書類は別物として、一時の參考や、娛樂的藝術に供したものは、ざし〳〵割愛して更に異なる入用の本に向つて要求するのである。凡ての本趣味は、境遇と一致せなくてはならぬ、余の古本趣味も、亦余の境遇が然らしめるので、若し夫れ、余をして大厦高樓の人たらしめたならば、必ずや私立文庫を造るで在らうが、天は往々惡戲を行つて、つまらぬ人間に大厦高樓を與へてをる。余の如き狹い一室に立籠つて、漸く二三の書架を並べるに軼ぎぬ身でば如何にともせんすべもないから如上の如く、古本集散の主義を執りそれが終に習性となつて仕まつたのであるが、その代ゞに、讀んだ書物の日錄は、ちやんと書留めてあるから、その點に於いては、いつでも記憶を存するわけで、瘦我慢かは知らぬが彼の三德家などとは、大に豊富なる點を誇るのである。

大阪最古の刻版に就いて〔一〕

あしろ生寄

曩年私が大阪書估輯覧を編纂して見たいと思ふて牛歩的に閑のまに／＼筆を執つて居つたが動機となつて本題を是非發見研究して見たくなつた、まだ取り纏まつては居らぬが大阪當業者諸君が是非知り得べからざる事柄であるから大方諸賢の力をかつて社會的に發表して見たいと思ふて茲に未定稿のまゝ掲げたのである

日本に於ける現存最古の刻版は法隆寺にある陀羅尼經である事は識者周知の事であるが、吾人の住むこの大阪に於ける最古のものは未だ世間に識られ否發表して居らないやうに思ふ大阪—堺が近いソウして一種の因襲的のやうに大阪—堺—住吉と同區劃のやうに混同されてヤ、もすれば堺南宗寺の論語を以て大阪刻版のやうに思ふてしまつて居る傾向がある由來堺は古い貿易港で明德足利時代より亨祿時代は商業交通の中心地として唐船蠻舶の入津は頻繁で百貨常に輻湊し京師に比肩して居つたので文化の發展に連れ自然に技藝も進歩し名工も續出したものであらう、當時の大阪を聯想すると實に微々たる市街であつた、平安朝時代に京師へ上る貴族や庶人の交通路として將又天王寺や住吉神社さては熊野權現の參詣路として只相當の賑ひを呈したに過ぎなかつた本願寺蓮如が明應七年に石山—乃ち今の大阪城のある丘地へ本願寺を創立した其後に出來た明應七年十一月の御文章に大阪といふ在所云々とあるに徴して明かである、大阪なる街が既に堺に壓倒され其圏内に卷き込まれて居つたので前に述べたやうに堺の刻版も大阪刻版と混同視されて居るのも偶然ではないのである、

私は大阪最古の刻版を發見せんと淺學菲才を顧ず諸所に奔り諸種の古版に目を曝らしたが不幸にして徳川時代のものより古きものを見る事が出來なかつた、元和元年五月平定と記したあの有名な大阪落城圖の瓦版が最古のものとして假定して居つた、所が偶然にも天文六年、天文二十三年頃のものが發見された、該書は既に或る機會に諸君の前に顯はれて居つたが夫れが最古のものであると云ふ事が氣附かれなかつたかも知れない、左に刻書の体裁を掲げる

一表紙　紺地
一縦　八寸九分、横七寸四分
一用紙　西の内風　キラ〻引
一片假名、楷書（漢字にフリカナあり）
一摺　深黒
一丁數　四五十枚

註　五冊本と一冊本との二種ある（五冊本得難し）奧附肉筆又は板形にて「釋證如（花押）」或は「釋顯如（花押）」とあり

右は所藏者よりの報告で書名は御文、乃ち御文（大派にては御文と呼び本派にては御文章と稱す）である、

果してこれが大阪最古の刻版であるか次號に寫眞を掲げ聊か評論を試みよう。（未完）

▲第三回 定例役員會

十月六日定刻より日本橋倶樂部に於て定例役員會を開く、來會役員十七名前回伊藤(靜)森谷二氏に委囑したる組合員店頭標札の件及其他二三の件を議して散會、例に依り其出席成績は左の如し

○出席●欠席△遲參

	一回	二回	三回	四回	五回	六回
鹿田	○	○	○	—	—	—
荒木	○	●	●	—	—	—
藤堂	○	○	○	—	—	—
長谷川	○	○	○	—	—	—
伊藤靜	○	○	○	—	—	—
村瀬	○	○	○	—	—	—
大石川	○	○	●	—	—	—
高田	●	●	○	—	—	—
倉地	○	○	○	—	—	—
小石川	○	○	○	—	—	—
林富	○	○	●	—	—	—
奥田善	●	●	●	—	—	—
井口	○	○	○	—	—	—
四方耕	○	○	○	—	—	—
高尾	○	○	●	—	—	—
木村嘉	●	○	○	—	—	—
天牛	○	○	○	—	—	—
谷支	○	○	○	—	—	—
松本正	○	○	○	—	—	—
森村	●	●	○	—	—	—
村井	○	●	●	—	—	—
伊藤一	○	○	○	—	—	—
松葉	△	●	●	—	—	—
森谷	●	○	○	—	—	—

冠省　貴組合月報第二號拜見仕候處內容倍々充實に唯々感心の外御座なく候、近來御地の古書籍業者の御發展振實に、目醒しきもの有之吾々同業者の驚異の的と相成居り候。文化の進展と吾々の業務も一層責任を感じられ候折柄、增々御發展、末永く御成長の程を偏に祈上候早々

京都三條　杉田大學堂書店

人事

南區高津三番町五金星社大川金次郎
同　金星社竹內　米造

右二氏は當古書組合員にして同町同番地にて營業の處全然無關係にも拘らず商號同一の爲應々同一店舖と看做し相方迷惑等有之由自今御通信及び取引は大川金星社或は竹內金星社等の區別有之事を謹告致し置候

古書組合評議員

▲新加入者

九月中に入會せられたる新加入者は左の如し

南區茶臼山町五一　中西高野
同久左衛門町一五　大島藤三郎
同北桃谷町一六　乙宗文之助
同鰻谷仲ノ町二三　井川喜一
東區北久寶寺町二丁目四八　平林縫治
西區幸町四丁目八　田中理市
南區日本橋筋五丁目三　戸川春市
同北山町四　浮田現衛
北區西野田草開町四二　富井豐重郎

▲廢業者

西成郡鷺洲町浦江五六二　出口幸太郎

▲正誤　組合員名簿中南區天王寺堂ケ芝町いろや豐村喜一とあるは玉村貞一の誤り又月報第二號「古今四場居百人一首」中末文渡邊霞氏亭とあるは渡邊霞亭氏に、同二號廣告欄下段藤堂生文中四行目一本を組合のため云々は紀念のために孰れも訂正

『天變地異』

わたくしは、先き頃私の貧弱な梁城文庫の曝書を行つた際、多年仕舞ひ込んであつた此『天變地異』を圖らずも見付けたから、何とは無しに些か所感を述べて見やうと思ふ、

天變地異は明治元年戊辰初冬（序文は改元されぬ以前慶應四年戊辰である）東京慶應義塾で出版されたもので、福澤先生第一の高足小幡篤次郎氏の著である。

年表を繰つて見るまでも無く、明治元年は、鳥羽伏見の戰、彰義隊の戰、箱館戰爭、江戸を東京と改めた年、明治天皇御即位の年、王政復古のドザクサの年である。

わたくしは福澤先生の書を讀んだ中に、未だ頭に殘つて居る一項がある上野黒門の戰爭、寛永寺の燒討、今にも江戸全市が焦土にならんとする時、泰然自若たる福澤先生は慶應義塾で北天に燃ゆる火焔を眺めつゝ平常通り生徒を集めて學業を授けつゝあつたことを、今この天變地異を見て全くそれが實際事であつたことが了解されるのである、

天變地異は元より小冊子に過ぎないされど其時代に既に天文地文物理化學などの科學知識を吾人に授けて居る、慶應義塾は一福澤―小幡先生は先覺者として實に偉大なるものである。

我等後進者はこれを見て時代に後れたやう更に大に勵まなくてはならぬと思ふ、殊にわたくし等は、世間の人に生きた知識を供給する書籍業者である、怠けて居つては社會へ對して濟まぬではあるまいか、

ついでに書き添へる、大正十三年六月大阪毎日新聞社より石井重美氏の著した『天變地異』と云ふ同名の書が發行されたことを、此書も矢張、天文地文等に關した知識を吾人に授けたものであつて、小幡氏の著に後るゝこと五十七年目に皮肉にも同一の名によつて顯はれたものである。

（梁城生）

三十五年前の

▼古本相場▲（續）

大江生

前號掲ぐる處の書名甚だ尠きに失したやうに思はれるので其續きとして御紹介します之が引用は矢張明治二十三年（即ち三十五年前）五月（第一

締切 本組合會旗意匠圖案募

組合會旗意匠圖案募集の件は前月報第二號に於て詳細說明して置きましたが愈十月末を以て締切ますから至急御投稿あらん事をお願ひ致します

投稿及御問合せは
南區日本橋南詰

號より同年十二月(第八號)に到る當地松雲堂發行書籍月報中に記載されたるものからであります。

延寶版
一河内名所鑑　六冊　六拾五錢
延寶九年版
一大和名所記　八冊　壹圓貳拾錢
一攝陽群談　十七冊　八拾八錢
一山城名所志 附圖十二枚付 三〇冊　貳圓五拾錢
一芥子園畫傳大形五帙　二十三冊　參圓貳拾錢
石川丈山遺蹟
一詩仙堂志　四冊　五拾錢
一清俗紀聞　六冊　七拾錢
一長崎聞見錄　五冊　參拾錢
一南坊錄　七冊　壹圓五拾錢
一熊野名所遊覧圖會　三冊　四拾五錢
一近世奇人傳　十冊　九拾五錢
八文字舍享保十七年版
一狹衣　活字古版　八冊　九拾錢
一旭太平記　五冊　六拾五錢
同
一風流東大全　五冊　六拾五錢
萬治二年版
一風流俄天狗　十冊　參拾五錢
一女じんき物語　二冊　拾八錢

嵯峨本雲母摺
一つれ〲艸　二冊　壹圓貳拾錢
一貝盡浦の錦　二冊　參拾貳錢
一女重寶記　寛永版合本一冊　貳拾五錢
一男重寶記　元祿版合本一冊　貳拾五錢
一武具訓蒙圖會　貞享版五冊　六拾五錢
一當流雲のかけ橋　享保版五冊　四拾錢
一けいせい國土產　八文字屋享保版　五冊　四拾錢
一戀つか物語　二冊　貳拾錢
一紙漉重寶記　一冊　拾壹錢
竹本筆太夫
一淨瑠璃大系圖　三冊　拾七錢
一俳優系圖世々の接木　五冊　卅五錢

朝日內案廣告特約

今回大阪朝日新聞の五行三行案内廣告欄を當組合全体から月極め掲載の事を契約致しましたから、組合員中掲載御希望の方は月一回二回の小數でも御申込下さい、便宜御取扱をいたします、値段其他の御照會は北區曾根崎永樂町松本書店へ御問合せを願ひます

▽奇名小說三幅對△

一見・切・物・　正直正太夫著

發行當時の廣告文に曰く、是亦紙屑の上へ繪具皿をぶちまけたるもの題して見切物と云ふと雖も夜店の芋大根にあらず一山百文と申しては本屋冥利に盡ることゝあるべし依て餘義なく實價參拾錢を申受く郵稅六錢なり

一春・雨・傘・　福地櫻痴著

今ならば別に奇と稱するほどの題名でないが、此書の發行された明治三十四五年頃には世の中萬事ウブなりしにや、ほんものゝ雨傘と間違し人もありしと見へ、齋藤綠雨著「みだれ箱」に左の一節あり櫻痴居士の作なる春雨傘を眞にさすべき品なりと思ひて上製三十本を誂へしは可笑しけれ云々

一不・必・要・　矢野龍溪著

題名既に不必要と云ふ、確かに世の讀書子にも不必要なりしにや、頓と賣れず、後に版元春陽堂より投賣せられたり

進む…集に就いて
…るものなき場合は選外佳作者に薄謝を進呈する事に致します。
大阪古書組合事務所

洋本稀書解題（二）

文一郎編

橫井時冬博士著作考（其一）

近時經濟史的研究の發達著しきものあり。日本經濟史に關する著作又枚擧に暇あらず。中に於て橫井時冬博士の諸著は、實にこれ等幾多の類書中最も權威を有し、劃期的著述たらずんばあらず、明治の初期研究資料の完からざる時、博學治聞よく諸種の事蹟を調べ、群籍舊記を涉獵し、研覈倦まずして大日本不動產法沿革史、日本商業史、日本工業史等の有用なる名著を數年ならずして續々發表せられし功績は、誠に特筆大書に値すべきものと信ず。

然して今や博士の著述の殆んどすべては稀覯に屬し、坊間時として書肆の店頭に出るあるも法外の値をさけぶ。眞の學徒は今や一讀の望みすら得難くなりぬ。吾人はこれ等名著の世人に忘れられんことを怖れ、こゝに博士の小傳並に著述の有樣を稽へ諸君子の高敎を仰がんとす。

小　傳

文學博士橫井時冬號年魚市人、安政六年十二月舊名古屋藩士橫井猪右衛門の三男として生る。『五歲の時父に別れ、その後母に養はれしかども母も亦多病にてついに十一歲の時身まかられしかば、家を名古屋城下より小木曾川のほとりなる祖父江の里に移し』そこにて生長せられしなり。祖父江の里は博士の先考に緣深き所なればなり『片田舍のことゝて碩學鴻儒のあるべうもなければ只橫井千秋（宣長の高弟享和元沒）が家學をつぎたる人々についていさゝか敎をうけ』られしのみにしてこれと云ふ學問を專攻せられしことなく家に傳はる書を讀み獨學せられしなり。明治十七年（二十四才の時）笈を負ひて東京に上りはじめて小中村清矩、栗田寬等の師につかれ和漢の學を修めらる。『おのれの東京留學を思ひ立ちたるは、其頃祖父江の里に隣れる山崎の里に住はれし佐藤楚材先生のすゝめと、外に聊か感ずる處ありしなり』と博士は述べて居られる、尋で早稻田專門學校に入り、世のなみ／＼に西洋の學問の一端をも窺はれたり、明治廿

大日本不動產法沿革史のタイトル頁（編者藏）

一年（この年かの大日本不動産法沿革史を著はされしにて年二十八歳）高等商業學校の教授に任ぜられ、又高等師範學校の教授ともなられたり文學博士の號は明治卅四五年の頃授けられしなり。明治三十九年四月十八日病を以て逝かる、享年四十八歳（大日本人名辭書、大日本不動産法沿革史小中村清矩序及芸窓雜載自序等參照）

著書

大日本不動産法沿革史 一冊

常陸栗田寛校尾張横井時冬編明治二十一年四月出版九春堂丸谷新八發兌本文四一三頁四六版布裝

博士最初の著述にして土地制度法の發達を述べしもの、第一編總論第二編制度、第三編土地の賣買及典質、第四編土地の讓與及相續法第五編借地及使用法、第六編土地に關する訴訟及沒收、附刑名一覽表の部に分ち、上代の口分地子の田制より鎌倉以降德川時代迄の土地の賣買典質の變遷を考索されしもの、引證該博、博士苦心の處女作なり

園藝考 一冊

小杉榲邨校閲横井時冬編述明治二十二年十二月大八洲學會刊本文一四六頁挿圖五葉四六判假綴

園藝術の本邦に於ける古往今來盛衰變遷の狀を記せるものにして、遠く橿原朝より以て今日に至るの作庭を叙せり。博士趣味の赴く處考徵至らざるなし

▲古本と云ふ字に就いて

我國に古本と云ふ語は誠に不適當である何故なれば古い本而已が古本でない古本屋と云へは新本もあるではないか此點に掛けると流石に英語である、Second hand book. 等と云ふ御誂通りの語がある是こそほんとに善い語だ、ソコダテ古書と云ふと古色蒼然たる古文書を想像する況んや素人においておやだ古本屋と古へば頭から古い本許……てな思想が先入主と成つて居る此處に於て我輩は主張する古書だとか古本等と云ふ字の代りに**セコンドハンドブツク**に適當なる新譯語をこしらへては、賢明なる諸君以て如何となす。

市會だより

▲**書榮會特別市會** 書榮會では十月九日秋季特別市會を催した、某書店の店仕舞を加へて可なり盛會であつた。

▲**永田有翠文庫** 先年賣立てられたる關西有數の藏書家永田有翠氏の文庫殘部を今回鹿田書店、玉樹香文房主催の下に書林倶樂部に於て十月十二日下見十三日入札賣立を開催中々盛會であつた。

▲**和本珍品賣立** 永田文庫入札に引續き翌十四日同倶樂部に於て市內某氏藏書の和本珍品揃を古典會主催にて入札會を催した前日に增した盛會で近來になき逸品揃であつた。

▲原稿締切期日

每號各方面から澤山の御投稿を下さいまして編輯者及び一般役員も大いに感謝する次第であります、就きましては印刷所の都合も有之原稿締切を每月七日迄と致しますから何卒確守下さる樣御願いたします。

林間暖酒

▲月報も三號を迎へて原稿が輻輳するやうになつた大分次號へ廻した樣な始末で投稿せられた方には諒解が願ひたい ▲此熱心が何處迄も續けば結構だがチト熱狂に走り過ぎはしないか龍頭蛇尾に終らないやう一般に祈つて置く▲夫れから月報を一部組合員の趣味の爲めとか或る店の機關紙の如く惡用されて居るとて色眼鏡を以て見られて居るやうだがそれは編者としても斷じて許さぬ事であるけれ共月報紙面を會の報告計りで埋めると誠に乾燥無味のものになつて各員の手許で何時迄も保存されないから此點を聊か緩和する目的で月報の性質上軟派とも看做すべき趣味欄を拵へて居るのであるが▲決して一部組合員の趣味の爲めの發行ではない、誰でも構はない全組合員に訴へて首肯し得られるやうな名論卓說を物して大いに組合の爲に氣焰を揭げられたいのである、即ち軟派(趣味研究文)に對して硬派たる組合の事業設備或は發展要素ともなるべき論談の多からん事を望む者である▲最後に私は組合員各位の御投稿が紙面に現はれた時は夫れを以つて自家の顧客に進呈するのも苦しくないと思ふ此問題の爲めに物議を釀したのであらうが共點に於て希望者には實費を以て月報を頒布したい事である。

コショクラブ

(投稿歡迎)

▲月報の事で何時も御骨折を有難く思ひます是は單に私の意見のみでおこがましいのですが御參考にもなれば幸甚です

▲月報は雜誌と違ふて何處までも單に月報のみの働きとする事が凡ての上に於て完結を意味します組合の本質上からしても三號雜誌式に終らしたくないのはよく御承知の點かと思ひますがどうか記事の凡ては組合の責任なる事は勿論、以後姓名又は其他を用ゐる組合の純なる報告にあらざる投稿は月報の使命上よりして不揭載になし下さる樣願ひます

▲一部書店の機關紙の如く利用される事は面白くないと思ひます、失禮ではありますが組合を育つる上からして單に私の意見を申述べました

▲編輯者は專任業務にあらざる故に多謝すべきも、何卒情實に囚はれず、賢明なる御裁決に依つて原稿の可否を識別せられ惡例の殘らぬ樣願上げ度く敢て苦言を呈し一考を煩す次第であります(大阪古書組合の一員)

▲各市場に賣買告知簿を備付け一般市會以外の便宜を計ればどうだ、さすれば客の注文に應ずるも容易だ又珍本の出物等は市會以外に賣買簡便だ試驗的に實行して見給え(熱心生)

大正十三年十月十五日第三號發行 發行兼編輯人 松本正治 發行所 大阪市南區日本橋南詰(公立社書店內)大阪古書組合事務所

大正十三年十一月十五日發行

大阪古書組合月報

大阪古書組合事務所發行

（第四號）

古物取締法に就て

我が全組合に望む

我等同業者が事ある毎に嫌な感じのするのは警察事項の發生である、單に警察事項では莫として判らないが即ち贓品を知らず買入れ、後日其犯人が檢擧され、或は他の事情に依つて夫れが判明して來た時の始末である。此場合主務署は其物品中賣殘品を提供せしめ並びに始末書を差出さしめて、業者には叱責、或は注意を與へるを以て例としてゐる。が其買入者の不注意に依り單なる注意叱責位では事濟まず遂には罰金にも科せられる事が間々出來するのである。

買入者の不注意とは何か。一、物品賣主の住所姓名を聞かず買入れた場合。二、其住所姓名を聞きたるも規定の帳簿に記載を怠りたる場合。三、買入記載を濟ましたるも賣消を怠たる場合。等であるが是以外に不注意ではなくして、慣習上爲し能はさる事柄が一つある。それは自店に於て度々買つて與れた客で、顏は見知つて居ても住所姓名は知らない、其人が返品的に賣りに來たとする此場合强ひて其住所姓名を聞かんとすれば出來得るかも知れないが、大抵誰しも强いて聞く丈けの勇氣を持たない强いて聞くとすれば其客に對して失禮に當る。若し敢て此行爲を遂行しやうとすれば客も非常に立腹するだらう。『現に此物品は君の店で相當の代價を拂つて買つたもの計りではないか、夫れを相當の損をして又君の店に拂下げるに何を不權式にも住所姓名を聞かれるか』と恐るに違ひがない。

茲に於て起るのは右樣性質物品たる事の闡明である。云ひ換へると斯ういふ品物を如何に處置して店頭に置くかである。犯人檢擧に依つて贓品たる事が判り夫れを知らず買入れて叱責を喰ふは已むを得ないとして、隨時係官の臨檢を受けて店頭に陳列してある右樣馴染客、常華客より返品を受けたる物品を指摘して『是れは何れの帳簿に記しあるか』と尋ねられ、其記載漏れを理由に古物商取締法違反として處罰される如きはチト苛酷に過ぎないだらうか。

某氏は此事件に付、起訴され遂に裁判所よりの呼出を喰つた、其時主任檢事との對話に如上の內容を詳述した處、檢事は大いに同情的口吻を漏らして『二年三年も連續的に買つて呉れる常華客に對して其返品的買入の場合改めて住所姓名を聞くと云ふ事は事實に於て爲し難い行爲である現に僕（檢事）がさう云ふ立場（賣手客）になつても立腹する、故に情狀は充分同情すべきも、法文は如何とも爲し難い、矢張り記帳漏は違反に相違ない、法文の改正なき以上、此法文が如何に古く（現行古物商取締法は明治二十八年九月一日に制定せられしもの）現今の社會狀態或は商習慣等と對照して添はない法文であつても之を無視する事は出來ないのである。此法文の改正されない以上は矢張り現行法文の下に束縛されなければならない』との挨拶であつたそして遂に或る罰金に服したのである。尚我業界の慣習として從來、店頭に於て一現の物品買入を行つて居る。是れも實際は宜くない事乍ら當局は或程度迄は寬大の處置の下に默認して居る、又事實是れをしも絕對『ならぬ』とあつては我々の業務上敏活を缺き殆ど商賣が出來ない事になるから、我等は自發的に充分注意して玉石を識別判斷し無暗に買入れないやうにせねばならぬ。就ては頻々と起る警察事項は畢竟業者の不注意から起る問題であるから其豫防法として買入品に對する代金は卽刻に拂渡さず全額の一割或は幾割を支拂ひ殘金は手控へたる住所姓名に宛てたる左記形式のはがき

> 拜啓本日御賣拂相成候處の何々以下何册の買受代金に對する殘金御拂可申上候間此書御持參御來店相成度候
>
> 大正十三年十一月　日
>
> ○○書店

を發送して先方へ到着の上之を持參したるものに支拂ふと云ふ樣な申合せを同業者一般に規定せられ、必ず之を遵守する、若し同業者にして之を守らなければ組合の名の下に警告を發する。それでも尚悛めなければ今度は組合の裏書附で主務署に告發すると云ふ樣な事を希望して居る。是は決して窮屈な事ではない現に是迄も此方法を實行した人も二三あつたけれ共少數では好果が見へない、絕對全組合的に執行したならば確かに好果は現はれる事でもあるし。若し其買入品が前記贓品である事が後日發見せられた時でも此一葉のはがきを保存して置けば主務署でも餘り苛酷な取扱もすまい寧ろ其周到なる用意に對し好感を以つて迎へて呉れるだらうと信ずるのである。

斯くの如きは只概略のみであつて自分はまだ最少し其內容に就て詳細的な事を考へて居るが餘り長文に亘るから省き、幸ひにして多くが贊同せられるならば更めて詳述して見たいのである。

同業組合と云ふものが會旗や、運動會の相談をする計りが仕事でない。煩はしい事ではあるが以上の樣な事も硏究せられたいのである。そして健全なる組合の發展と共に全國的組合聯合をも促進せしめ大團結の輿論と力を以て業界取締法の改正を當局に請願したい一事である。

敢て駄文を草して各位の一考を煩はした次第である。（十一月五日某評議員記）

落丁本の處置に就て

替もするが、中には何處吹く風と云ふ態度の發行者もある。元來是等の

此問題を提げ責任觀念の薄い發行者を責めねばならないと思ふ。

▽藏書票の趣味△

日本藏票會　豊仲　末迷

我國に古來より藏書印と云ふものが一般の藏書家に流行して現在に至つたもの丶、洋本出版物の旺盛なる今日、藏書印が傳統的に使用されつ丶あるに係らず、趣味的藏書票の世に行れなかつたのは歐化萬能の我國に於ける奇蹟の一つであつた。

藏書票の歴史に就いて某先輩の考察大要を左に拔萃して參考資料にもと紹介する。

藏書票由來

今は萬國通用語になつてゐるエキス、リブリスは「予が藏書の一」といふ羅典語である。

十五世紀の頃伊太利のエルハルトラットールといふ人が、初めて木版に附して發行したのが、明になつてゐる程度の最初の流行であるといふ當時は書籍の所有主の紋章、徽章とと裝飾的周縁との圖案から成つて主として表紙の裏又は本文の第一頁に貼付するので、此流行を見たのは獨逸で、矢張り十五世紀末で、追つて十六世紀の初期に至つては有名な藏票家が續出して、今日に傳へられておる數多の意匠が創案されたのである佛國でも千五百二十九年に既に用ひられ、英國では同七十四年に贈與者の紋章入の木版を貼付して劍橋大學へ贈られたのがあり、個人の姓名を明記したものでは、同八十五年六月二十九日日附のあるサー、トーマストレシャムのものが有名である。

EX LIBRIS

HK

邪宗門　白秋著

かくて此流行も十七世紀の後半には、各國共衰微を來したが、代つて藏書家の紋章を、革表紙の一部にスタンプする事が流行し出した。然しこの十七八世紀の境の十一二年は又又復活の機運に入り非常の流行を來しアッサリとした作が賞美されるやうになつた引續いて幾多の變遷と流行とを經て今日に及び、此の間には日本に於ける納札の如く集會や蒐集の過渡期を過ぎて、十九世紀に入つては益々盛況を見、終にヱキス、リブリス會なるものが、英國及び獨逸は千八百九十一年に、佛國は同九十四年に、米國は同九十六年に、墺太利は千九百三年に設立され、倫敦、巴里、伯林其他の都市では、今日猶是等の機關誌が發行されて居るのである。

右は甚だ概略であるが、紙面に餘白がなささうだから次回には歐米の現在のリブリス界及び我國に渡來された歴史、藏書票の使用との趣味等を詳細に記述してみようと思ふ。

人事

▲新加入者

西區市岡元町九丁目六七　太田　スヱ

▲移轉

西區西九條朝日橋通三丁目一四　芝原末吉

▲廢業

東區北濱四丁目三五日進堂大塚覺二氏は震災以來新本不廻りの爲古本を兼業ありしも今同其古本部を廢業

大坂最古の刻版に就いて〔二〕

あしろ生寄

左に掲げたのは乃ち證如（蓮如の曾孫）の奥書がある、板行であるが又肉筆自署のものもある、この御文章開版の事は御文明燈鈔巻一にも載つてあるが證如が始めてゞある、舊刊本叢林集巻八にも又法海の御文玄義にも出て居る、天文年中に興正寺から新刊して授けた事を聞いて蓮淳が證如に告げたので從來代筆で（本文のみを）書いたものを廢して天文六年二月二日御法事の砌其披露をして門徒の望みに任かせて授與したものである、これは一種本願寺への冥加金＝寄附の代償的のもので財政の一助たる事は瞭で紫雲殿由縁起にも載つて居る、筆寫では到底要望に應ずる數も出來なく又廣宣の上よりして印刷の必要を認めたのであろう、尤も本帳の版木は加藤源左衛門氏の寄進であつた、併如何にせん加藤氏が何地の何物であつたかを知る事が出來ないのは本帳確證の上に於て實に遺憾である、天

勸化スヘキコトニイツハ王法ヲモテノ本トシ
仁義ヲサキトシテ世間通途ノ儀ニ
順シテ當流安心ヲハ内心ニフカク
タクハヘテ外相ニ法流ノスカタヲ他宗
他家ニミエヌヤウニフルマフヘキコトノコヽロ
モテ當流眞實ノ正義ヲヨク存知
セシメタル人トハナツクヘキモノナリ
アナカシコ〳〵
文明八年正月廿七日
[illegible]

文二十年頃からは村井庄兵衛と云ふものゝ本刹の許可を得て印行し其判代として三百銅づゝを納附したと云ふ事である。

さて本問題の解決に先つて當時の大坂の街はどうであるかを觀ると、前號に述べた如く實にさゝやかな一村落であつたが、石山本願寺創建と共に非常に繁華になつた、加賀から城作りの工を召寄せ、堺の信徒を募つて廣八町の要害無双、一種城廓的の構へを造つた、寺の前は門前町と稱し（一に寺内町とも書す）六箇の街を（西町、北町、南町、清水町、新屋敷町、檜物町）を拵へた、廓内は城下町である、百貨整はざるなく諸國の名工諸職を迎へた、堺の繁華を奪つたので此街へ移住するものは日増に繁くなつて、集ごふものは信徒が多きを占めた事は論を俟たない、宗教の力によつて作られた街＝この大大坂の前身は本願寺信徒の凝結の力の街と謂つても過言ではあるまい、京師や堺より版工を招いたと云ふ事が本願寺の記録にある上より見て本帖が大坂刻版最古のものである事は天文六年二月二日以前のものを見出す迄は

會旗當選

曩に懸賞募集したる本組合會旗の圖案は熱心なる組合員諸君に依り夫々特色ある意匠圖案原稿を寄せられ、一人にて二三點も應募されし方もあり都

壹等當選　高田幸三郎君

確定せねはならぬ、信仰の力によつて出來上つたこの帳、當時の大坂、夫れ以前の大坂の街を想像して…：假令奥書や其地の事柄によつて其地版としても他郷に於て刋行する例があるから即斷を許さぬと云ふ說も出でやう、先年私が京都帝國大學へ納めた平治物語木活本も奥書に板行で紀州新宮某と署名してあつたが本は確かに嵯峨木活本である事は一目瞭然であつた、只本帳に奥附の年月と版行者の署名などが無いので立證する事が出來ないのは遺憾である、本帳が普通賣品的のものでなく頒布本位のものであるから板行者が載つて居らないのである、前陳本願寺の記錄を綜合すれば又首肯する事も出來やう、

敢て大方諸彥に問はんとす。（完）

本編に關し京都龍谷大學禿氏祐祥先生の高說を受けし事多大なりしを茲に深く謝謝して止まないのである（大正十三年十一月七日夜記）

▲第四回定例役員會

十一月六日定刻より日本橋倶樂部樓上に開催、豫て懸賞募集中なりし組合會旗の意匠圖案に就ては熱心なる會員諸君に依り合計十六件の應募あり、之が審査を百點、八十點、六十點、四十點の四種の採點法に依りたるに欄外發表の如く高田幸三郎氏の意匠になるものゝ中より當選せり、次に組合員森谷清松氏の動議にて是迄襲用し來りたる『大阪古書組合』たる名稱は嚴密なる意味よりしては將來必ず改正を要する點ありとて『大阪古書籍商組合』と改正したき件を投票に問ひたるに現行『古書組合』の簡單なる字句にて充分事足れりと爲す說多く從前通りとなりて終る。

○出席●欠席△遲參

	一回	二回	三回	四回	五回	六回
鹿田	○	○	○	○	｜	｜
荒木	○	●	●	●	｜	｜
藤堂	○	○	○	○	｜	｜
長谷川	○	○	○	○	｜	｜
伊藤靜	○	○	○	○	｜	｜
村瀨	○	○	○	●	｜	｜
大石川	○	○	●	○	｜	｜
高田	●	●	○	○	｜	｜
倉地	○	○	○	○	｜	｜
小石川	○	○	○	●	｜	｜
林富	○	○	●	○	｜	｜
奥田善	●	●	●	●	｜	｜
井口	○	○	○	●	｜	｜
四方耕	○	○	○	○	｜	｜
高尾	○	○	●	●	｜	｜
木村嘉	●	○	○	○	｜	｜
天牛	○	○	○	○	｜	｜
谷支	○	○	○	●	｜	｜
松本正	○	○	○	○	｜	｜
森村	●	●	○	○	｜	｜
村井	○	●	●	●	｜	｜
伊藤一	○	○	○	○	｜	｜
松葉	△	●	●	○	｜	｜
森谷	●	○	○	○	一	｜

會と催

▲和・本・展・觀・即・賣・會・

十月廿六七日二日間堀江書林クラブにて杉本、中尾だるまや、平野町柳屋、中村各書店聯盟主催にて和本展覽即賣會を開く、暫く此催がなかつたので盛會であつた

▲洋・本・展・覽・即・賣・會・

十一月十六七日二日間圖書館週開を利用し大いに讀書趣味鼓吹の爲め十日會、日本橋俱樂部會聯合の下に日本橋一丁目浪速クラブに於て前會同樣の即賣會を催し頗る盛會であつた

案表

…と共に其名譽を永く記念せんとす（就…

餘白甚だ少なき爲め圖案寫眞は次號に讓る

同（四）　高田幸三郎君

洋本稀書解題（三）

文一郎編

横井時冬博士著作考（其二）

著　書（つゞき）

こゝには博士の校定或は校閲に係るものも併せて載せ識者の是正を俟つ

帝國商業史講義錄　一冊

横井時冬述初版（明治二十五年五月刊）再版（明治二十六年三月刊）三版（明治二十八年五月刊）本文五編七十章二九一頁三版に至り改正第七章朝鮮の交通附渤海四頁を加ふ

明治二十一年の冬、文部省の高等商業學校、新に内國商業史取調係を置き、横井氏は文學士土子金四郎、菅沼貞風の二氏と共に、專ら其事に與らしめられたり。然るに幾許ならずして、土子氏は歐米に留學し、菅沼氏は南洋諸島にて不歸の客となり、其後は博士獨り勉勵事に當り、幾多の典籍、古記錄等を檢覈し、二十五年始めて講義錄として此書を試刷に附し、學生に課し、兼ねて先輩知友の間に配られしものにして、實に日本商業史の最初の未定稿本とも云ふべく、其初刷本は最も稀覯に屬すべきものなり。

萬葉長歌類聚抄　一冊

小塚直持輯横井時冬校明治二十六年一月刊本文二〇四頁稽照館發行四六判假綴

博士が同村且幼時しばらく教をうけられたる好を以て、直持大人の手づから撰り出でおかれたる草稿を校正されしにて、萬葉集中の長歌を四季相聞等に分類せしものなり。

商人鏡　二冊

明治二十六年十一月刊六合館發行和紙和裝半紙本

古來傑出せる商人の列傳にして日本商業史の側面觀なり。此書に類似するものに、切山聽松氏の實業史談一冊（明治二十年六月刊）あり農工商古今の名家を列敍す。

消息文變遷（一名かりのゆくへ）一冊

明治二十七年三月刊金港堂發行口繪十頁本文二二六頁菊判布裝

上古より江戸時代に至る消息文の變遷を述べ、併せて文例を掲ぐ。附錄として「消息文に用ゐる俗語の解釋」あり

工藝鏡　二冊

明治二十七年十二月刊六合館發行本文上卷四四丁下卷四八丁和紙和裝半紙本

（上卷）刀劍工、佛像彫刻工、假面彫刻工、裝劍具彫刻工、根付置物類彫刻工、人形彫刻工、甲冑工、鑄物工、七寶工（下卷）陶器工、漆器工、蒔繪工、織物工、染物工附錄（小堀遠州）の各部に分ち各時代に於ける名人大家を列傳体に記述し系圖をも掲ぐ。

小堀遠州、本阿彌光悅　一冊

年魚市人著偉人史叢第七卷初版（明治二十九年十一月刊）再版（明治三十年　月刊）裳華房發行口繪三葉本文一一三頁（遠州）、口繪四葉本文五九頁（光悅）菊判假綴

日本工藝史上の二偉才遠州、光悅の傳記にして、犀利なる博士の考證はよく二人の藝術を紹介す。德川三百年史中卷に又これを收む。

日本工業史　一冊

初版（明治三十一年二月刊初版は非賣品なり）訂正再版（明治三十一年十月刊本文三六〇頁）訂正增補三版（明治三十五年七月刊本文三八八頁）吉川弘文館發行菊判布裝

六編四十五章に分ち、上古より明治の前半に至る各種工業の發達を說く、博士畢世の名著なり。(史學雜誌第九編第三號明治三十一年三月十日發行九五頁批評參照)

日本工業史對照圖　一帖

初版(明治三十一年十一月刊)訂正再版(明治三十六年三月刊)繪圖四十八吉川弘文館發行和裝折帖今は京都芸艸堂の藏版なり

日本工業史の參考圖なり　(未完)

▲煙草錄に就て

「煙草書解題」補遺

月報一號所載煙草書の解題は、諸君の多大の好評を得、編者の甚だ喜びとする所也。倘好事家諸君のため左に遺漏を補ふべし

德川の後期に至り、文藝的作品にして外題に煙草の文字を冠するもの頻出するに至れり。その中にも

○春宵一服煙草二抄一冊(滑稽本)文化七年刊山東京山著歌川豐國畵

○滑稽隨筆煙器蛇話二冊(同)文政九年刊恐癡探齋著

○煙草戀中立二冊(黑本)鳥居清倍畵

○談笆菰譽詞三冊(黃表紙)天明二年板市場通笑作北尾政演畵

○一體分身扮接銀煙管三冊(黃表紙)天明八年板山東京傳作喜多川行麿畵(一書政演畵とあり)

○俳諧煙草集一冊(俳書)慶應元年刊枕流亭一澄編

等を主なるものとす、近くは芥川龍之介氏の「煙草と惡魔」あり。此類尙多々あるべし

倘タバコの綴字につきFA氏より注意を受けしが、原本背表紙に TOABCCO と誤植なしあり、舊態を留めん爲め敢て改めざりしのみ(挿圖參照)

因云Tabaco(西), Tabacco(伊), Tobacco(英), Tabac(佛), Tabak(獨), 等各國語原を一つにす。最近外骨氏川柳叢書第一編として『川柳や狂句に見はれた外來語』一冊(九月一日發行和紙和裝繪入小本本文九一頁)を著し**タバコ**其他の外來語を趣味深く說く諸君の一讀をすゝむ。(九月十日文一郞生補記)

深山時雨

大正十三年も餘す處數旬となつた、月報として諸君に會するのも本號を以て今年も終るのである▲それにしても今年程業界の波瀾重疊、變化の多い年はなかつた、四五月頃を分水嶺として恰度日當りのよい山陽から日廻りの惡い山陰へ越したやうな感じがする、夫れ以來業界は頓に沈退して仕舞つた▲又組合成立と云ふ特筆すべき年でもあつた、過去を顧みても仕樣がないが、記錄が後世迄幸ひに殘るものなれば十三年業界史を綴つて誰かが投稿されん事を望む

同業者間の

年賀狀節約

紙上名刺交換會

何も節約の昨今、十四年劈頭に於ける同業者間賀狀の交換を一切廢して**之**が代用に新年號月報紙上に名刺交換欄を設置いたしますから、盛んに御利用下さい、料金は五行一欄五十錢、内容は住所と姓名或は商號位の簡單なものが宜からうと思ひます、締切は十一月中に月報編輯所宛御申込を願ひます。

本紙新年號增頁

一月元旦發行

十二月號休刊

コショクラブ

（投稿歡迎）

▲月報第二號を讀んで……さなくて隱れたる人材文才を見出す事出來ずと愚考仕候……てな迷文を投書した者がある大方文章倶樂部と間違へたんだろー、察する所奴さん多少の文才があると自惚れて居るな……天下は廣大だぞ出過ぎ者めッ！　下がれッ！　下がれッ！（郡部Ｆ凡生）

▲公休日がいまに一定しないのはどうしたものか、景氣がよくば實施してもいゝと寢る間も無いやうに**ハタラク**聲をも聞くから同情もさすがにするが、主義に妥協は禁物だ（三角旗）

▲問題が小口に片付て行くのは役員諸公の努力の他はなからうが泣いて居てもらちあかず、笑つて居てもまが惡い、組合も初戀の身の上てなものだらうけれど危なくはないか（鳥人）

▲金の切れ目が緣の切れ目、市場の整理も景氣からだとなかく＼鼻息が荒らい、組合は此上數物や落丁の整理もするやうに願います（石幸生）

▲次號豫告

○大藏經の話　大江生
○洋本稀書解題（四）　文一郎編
○書籍解題書の必要　淀川生
○古本屋の餘德　珍糞漢生
○書籍に孔を穿つ蟲　矢野宗幹

十日會入札會 洋本 定期開會

毎月十日午前十一時ヨリ會場西區南堀江壹丁目　書林倶樂部精々御出品御來場被下度多數の品有之ば臨時入札可致候御用向は東區島町二伊藤書店淡路町五長谷川書店へ

書籍店讓受け度し

新古何レニテモ可店構ヘ小ナルモ不苦人通リ多キ場所ニ限ル

右安價讓渡し御希望の方は價格と場所とを左記御申込み下さい。

大阪船場局私函第四三號

店員入用

十四五歲　二名

南區日本橋筋四丁目

高尾書店

電南二〇六〇番

古本病院

如何なる珍本奇籍でも表紙の汚れ剝落丁等は値打がありません當病院は見違へる程健全に直しますす其他雜誌の製本綴直し等迅速丁寧に取扱ひます

南區河原町二ノ一四三

中林製本所

▲欠本入用 有之候はゞ御通知乞

徳川實記　六七經濟雜誌社
眞淵全集　五
大阪市史　五
國譯大藏經　經部　附錄　日本紙の分
益軒全集　六
人情本刊行會　二十二、二十四
丹鶴叢書　今昔　上
三才圖會　洋綴　大本　上
工業大字典　索引
日本文庫　十
墟　尻　上
岷江入楚　上
草書大辭典　上
詩話叢書　一、二、四、五
佩文韻府　洋トジ　上聲入聲の分
漢籍國字解　文章軌範　正
從容錄　上　帙

大阪市西區江戶堀南通三丁目二番地

荒木書店

電話土佐堀一四六三番

大正十三年十一月十五日第四號發行
發行兼編輯人　松本正治　發行所　大阪市南區日本橋南詰（公立社書店內）大阪古書組合事務所

大阪古書組合月報

迎歳之辭

瑞祥靄々たる大正拾四年乙丑の新歳は今茲に迎へられ生氣潑溂たる吾が古書月報も亦新裝して第五號を刊す、內容號を逐ふて益々充實し才氣煥發せる同人の玉稿紙上に溢る、實に斯界に益する蓋し偉ならん、洵に懌ぶ可き事と謂ふ可し

抑も我國文化の淵源はこの難波の地に發祥せられしは國史既に瞭なり、應神の朝百濟王仁來たりて論語、千字文を献ず、後ち佛敎の傳來と共に美術文藝の新智識を輸入す、聖德太子之れを收め以て學び我國の文化に貢献せらる、彼此回顧すればこの浪速の地こそ實に我大日本帝國文化の中堅にあらずして何ぞや

菅相公梅を愛せらる、公の生誕や承和十二乙丑の年也今より數へて壹千八十年

昔秦始皇の時文學旺んならば梅花の莚繁く榮ゆ爲めに好文木と稱せらる、王仁この花の國歌を詠ず

梅は江南の稱あり、江南又難波に通ず、古來難波の地を梅都と呼ぶ意や深長、想へばこの大阪に對し因緣の最も深き新歳ならんか

吾等幸ひにして聖賢の書を鬻ぎ國家文化風敎の導きに先つの業、光榮亦甚しからん、よつて吾人は須らく誠意誠心斯界に努力業を勵み此の古書組合を尊重し互に親睦共力一致以て發展を期成せざる可からず、之れ勗む可きのみ他あらんや

茲に年頭の所感を蕪し同人に愬ふ。

大正十四年一月一日　大阪古書組合事務所發行

（第　五　號）

寄書

古本屋の余德

珍糞漢生

洋の東西を問わずその新古を論せず世の碩學文豪、三文小說の作者よりお伽繪本の印行に至るまでそれを弘く傳ふるには皆これ書籍の力を藉らざるべからず又讀者はその書籍によりてあるひは先哲の人格に接し或ひはつれづれを炬燵と猫を相手に冬の夜長を慰むなど小にしては小供の寢物語の材料に大にしては世界文化の進運の上よりその貢献あるところ甚だ大なり。

余はその世に貢献するところ甚だ大なる書籍を扱ふ古本屋に生れしが生來の不精者。

論語讀みの論語知らず。本の表題だけをうろおぼえ、とかく浮世は金、金と、拾錢で買ふて五拾錢に賣るならまだ神妙なり。甚しきは掘出物と稱し百圓二百圓のと先みての商ひもその書の眞價も知らずそれ慶長本の光悅本のと題目だけの學者ぶり。

獨乙が戰爭すりや**ラウベル**の解剖書が七拾圓に飛上り、**ロンドン**の本屋が廉賣したと聞けば露西亞の小說までたゝいて買ふといふ古本屋、表から見たら世界的、**マーク**相場がどうの爲替が下つたのと知らぬ人が聞けば一かどの實業家、**トルストイ**や**ドストエフスキー**を友達にし、**ルノアール**や**ゴツホ**の復寫をみては印象派がどうの立体派がどうのとまるで美術家をきどり。時には泰西の劇壇を評し時には歐米の政治を論ずるなど世に貢獻するところ甚だ大なる古本屋の余德と知るべし。

しかしその反面に於てあまりに住友岩崎に遠き事千萬億土。丸善は文具雜貨でもふけて本で損をし。博文舘は本より家屋敷での金もふけとは本屋仲間の陰口、うそかまことか知らず。

凡そ古來より書籍を扱ふものにして成功せしを聞かず、とは昔から本屋の言草。か又金持ちにようならぬ者のあきらめか知らず。

されぱとて本も店も賣つて汽船の一艘も買ふ事ならず鳥の子は鳥で先祖代々古本屋が一番の幸福者間違つて故買犯にならぬ限りはこれ程面白く暮せる商賣外になし。これも世に貢獻するところ甚だ大なる古本屋の余德か、穴かしこ。

書要解題書の必籍

淀川生編　B・S生補

「國書解題」一册あれば事足るやうに思つてゐるお芽出度い人達にはこんな話をする**必要**もないが、又藤原佐世の時代ならとに角、**少く**とも日本現在書目解題を編まんとするものにとつては國書解題などは九牛の一毛にも足らないことを知るだらう。だが今此等總ての書籍の整正せる解題書を欲求することは、一ツのユトピアであつて、**到底實現**はむつかしい。

然して吾等は今や書籍の洪水に出會ふてゐる、そしてそれはある意味に於て**ノア**の洪水よりも恐ろしいも

のであるかも知れない。實際私達は日に何冊と知れない書籍の出版を見月に何十種とも知れない雑誌の發行を示されてゐる、だが例へ此等のもの丶十分の一が吾等に有益な物としても夫等を悉く讀破して行くと云ふ事は吾等として到底出來る事でない

こ丶に於てか世の讀書子に書籍の解題書は自ら必要となつてくる。吾等は解題書によつてのみ總ての書籍のよき内容を知ることが出來るのである。左に我國解題書の一般を示し諸君の參考に資せんとす。

・・・・・一般書籍史に關するもの・・・・・

○訪書餘錄　六冊　和田維四郎編
大正七刊
慶長以前の古版本、古活字本、五山版、舊鈔本、古寫經等について精細なる解說を加へ各實物大に精巧なる寫眞版が數百枚挿入せられてゐる、本邦書史學上空前の著述である。

○日本古刻書史　一冊　朝倉龜三著
明治四二刊
百萬塔以下慶長前後迄の古刻本史で木版摺の挿圖がある。

○古文書學　一冊　久米邦武著早稲田大學講義錄
古文書の種類、歴史を說いた七百頁の大著である。

○史籍年表　一冊伴信友著　文政一一

○日本史籍年表　二冊小泉安次郎　明治三六

○日本小說年表　一冊朝倉龜三　明治三九

○活版經籍考　吉田篁墩　(百家隨筆三所收)

○古經題跋　二冊鵜飼徹定(解題叢書所收)

○古刻書跋　一冊近藤、栗原編文政二

○國朝文籍考　一冊　明治三六

○典籍考叢　二冊　甫喜山景雄　(我自刊我本)

○德川時代幕府書籍考　一冊　牧野善兵衛編　大正元
附關係事項及出版史

○日本文學者年表　一冊　赤堀又次郎　明治三五

○同　續編　一冊　森洽藏　今園國貞補　大正八

○從吾所好　一冊　明治四五
玉屑會に持寄りし珍籍類の解題にして寫眞、木版等を挿入す

○筆禍史　一冊　宮武外骨　明治四四刊
江戸時代に於ける絶版、禁止等に會ひし書籍についての話

○近代文藝筆禍史　一冊　齋藤昌三　大正一三刊
明治大正時代に發賣禁止になつた書籍雑誌についての話、尙遺漏があるやうに思ふ

○高野版の研究　一冊　水原堯榮　大正一一

○寧樂刊經史　一冊　大屋德城　大正一二

○圖書學概論　一冊　田中敬　大正一三
書寫、印刷、材料、形態の各篇に分ち書籍の一般的智識を詳說せるもの、内外古今のあらゆる典籍を引用し、考證該博、挿圖豐富近來の快著である、我等古本屋としても是非共一本を備るべく、これ位な事はこれからの本屋は誰でも知つてゐなければならないことだと思ふ、正に恰好なる古本屋學校の教科書である
著者に注文は卷末に是非とも索引を掲げて頂きたいことだ

・・・・・各種に關する解題書・・・・・

○日本書籍考　一冊　林道春　寛文七
我國に於ける書籍解題書として最も古きものの一つである

○倭版書籍考　五冊　幸島宗意　元禄十五

○蔵疑書目録　三冊　中村富平　寶永七
書の疑似すべきを以て和漢の典籍を捜索しその眞僞の混淆を審判せるもの

○群書一覧　六冊　尾崎雅嘉　享和元刊

○國書解題　一冊　佐村八郎　明治四二（増訂三版）

○國文學書史　一冊　永井一孝　早稲田大學講義録

○國文註釋書解題　一冊　同　同

○國文學書解題　一冊　多治見武雄　同
明治三六

○朝鮮國書解題　一冊　總督府　大正四刊

○國語學書目解題　一冊　東京帝國大學編　明治三五

○近古小説解題　一冊　平出鏗二郎　明治四二

○古今歌文書綱要　一冊　金子、花岡　明治三六

○萬葉集書目提要　二冊　木村正辭　明治二一

○嵯峨本考　一冊　和田維四郎　大正五

○お伽草紙　二冊　水谷弓彦　大正九

○繪入淨瑠璃史　三冊　同　大正五

○西鶴本　二冊　同　大正九

○俳書解題　一冊　角田竹冷

○古版地誌解題　一冊　和田萬吉　大正五

○古本節用集の研究　一冊　東京帝國大學文科紀要　大正五

○鐵研齋輶軒書目　一冊　齋藤正謙　刊年未詳（文明源流叢書三所收）
事海外に關する圖書約六十種を解題す

○國史學の栞　一冊　小中村清矩　明治三六
國史についての主なる書籍を親切に批評紹介す

○古事記考　一冊　井上頼圀　明治四二
古事記の異本、注釋書を解題せるもの

○佛書解題　二冊
日本大藏經の解題書なり

○禪籍解題　相澤惠海（禪學要鑑附載）

○躋壽館醫籍備考初編　二冊　高島幽啓、岡田昌春　明治一〇

○日本醫籍考卷一　呉、富士川　明治二六

○皇朝醫籍便覽　一冊　鈴木總次郎　明治二六

○農書要覽　一冊　勸農局編　明治一一

○農事參考書解題　一冊　農務局纂訂　明治二四
大日本農史の書錄なり

○番外雜書解題　五冊　戸田氏德編（續史籍集覽）
文政八年以前に幕府の官庫に收藏せる近代の雜書を撰んで解題せるもの

○帖史　一冊　山中献　明治一三

○印籍考　一冊　僧學川輯　享和二

○印譜考略　一冊　郷純造　明治三〇
慕古、存古、集印、自製、日本篆述印譜、等に類ち古今の印譜の解題

○日本經濟史研究參考書　内田銀藏
（國民經濟雜誌七卷三號より十一卷六號に至る迄連載されてゐる）

○法律史考究書目　小中村清矩（法制論纂）

○日本法制史書目解題　二冊　池邊義象　大正七

○經濟學、財政學研究參考書調　一冊　松尾勇四郎　明治三七

○群書備考　一冊　村井量介（國書刊行會本）

○解題叢書　一冊（同）（以下次號）

カズオ書店
伊藤一男
北區老松町二丁目

伊藤書店
伊藤靜三
東區島町二丁目

丸三書店
木村五郎
京都市丸太町三本木角

進文堂書店
木村德太郎
京都東丸太町橋詰

清和堂書店
石川留吉
西區京町堀通三丁目

三五堂書店
木村嘉藏
南區日本橋筋二丁目

紙上
名刺交換會

謹賀新年

本年は乍勝手同業者諸君への賀狀を廢し月報紙上にて御挨拶申上候

大正乙丑元旦

大盛堂 森村接松
北區上福島北一丁目一一九

小ますや書店
増田和三郎
西區阿波座下通一丁目

文林堂 林富藏
西區北堀江上通三丁目八

淺井勘次郎
南區天王寺勝山通三丁目五八一

四方耕太郎
南區北日東町四七

民衆閣 山西孫兵衛
天下茶屋

他山の移誌（一）

和本を害する蟲　洋書の背革を食ふ蟲｜之が簡便な驅除法

理學士　矢野　宗幹

夏より秋にかけて宛も茶をたてるが如き微かな妙音を發する蟲がある、其名を茶柱蟲（**チャタテムシ**）と云ふ體長僅に一分古への俳人は此蟲の音を聴くを喜んだといふが焉んぞ知らん此蟲こそは書籍の表紙の糊を甜めて散々に穴をあける害蟲なのであつた。書籍の糊を甜める害蟲には此外に『ごきぶり』一名（**アブラムシ**）がある。長さ四分位より一寸餘まで、黑褐色又は褐色を呈し體は扁平にして楕圓形をなし惡臭あり、書籍を害するのみならず、臺所に來つては食物を害し、其惡臭を殘すので大いに嫌惡される。

又和本に孔をあけるものでは『書蠹』（**シヨト**）と稱する者がある、英國では書籍と共に麵麭を食ふが故に之を『**パン食蟲**』ともいふ。成蟲は長さ一分許りの甲蟲で、淡褐色を帶び、縱に線條あり、全身に短毛を生ず、卵は紙の縁の間、或は背革の糊付の不充分な部分又は疵口等に産附する、日本の書籍では主に綴目に産卵し五六日目に孵化する。幼蟲は圓柱形にして少しく腹面に屈曲し、淡く褐色を帶びたる白色にて頭は褐色である此幼蟲は紙を食うて長い隧道を造り其中で蛹化し、軈て成蟲となつては穴を出でゝ他の書籍に移り又孔を穿つに到る。外國圖書の背革を食ふ者は、鰹節に附く『鰹節蟲』の一種で、革質、角質を食ふので皮革の害蟲である、我邦でも近來多少此害を認めるやうになつた、併し此爲めに書籍の害された例は未だ知られて居らぬ其他書籍の間に棲んで紙の糊氣を甜めて害するものは『衣魚』（**シミ**漢名）『蠹魚』（**トギヨ**漢名）、『しみ』（和名）『銀魚』（**ギンギヨ**英名）等で何れも羽を有せず、變態をなさず、長さ二三分、三本の長尾があり、全身に銀色の鱗片を被り、之に觸れば容易く脱落する。

是等の害蟲の驅除法は、先づ密閉し得る箱を造り、此中に書籍を入れ其上に小皿に硫化水素（液體）を入れ蓋を密閉して紙で二三重に目張りをし、一晝夜其儘置けば書籍中の蟲は全く死滅する。此方法は最も有効であるが、唯藥液より生ずる瓦斯は有毒で且つ火氣を近づくれば燃え立つ憂ひがあるから注意を要する。外國の圖書館等では古本を需めた時は最初に此方法で害蟲を驅除し然る後書庫に入れる、（一**オンス**の液にて五六十立方尺の箱の中を驅除する事が出來る）。其他の方法としては常に書籍の乾燥を保ち、毎年數回蟲干をする事又書籍の間に**ナフタリン**、樟腦等を入置くも可なり『衣魚』『茶柱蟲』等を防ぐには殊に乾燥に注意せねばならぬ『書蠹』の類は乾燥した中でも發生して害を與へるから矢張り硫化水素の薫蒸法を用ふるがよい、和本には綴目の部分に多く『書蠹』は這入つて居るから書籍を只開いて見た丈けでは之を發見することは出來ぬ。充分の事を言へば一度絲を切放つて害蟲を拂ひ落し然る後綴つて置けば大丈夫である。

此稿は大正五年五月發行弘道館の「通俗講話花鳥風月」と云ふ書籍の中に載つてあつたもので編者は枝元枝風氏であつて茲に其全文を轉載する

謹賀新年

初市御案内

一々賀状發送可仕筈の處乍略儀月報紙上を以て新年の御慶申納候

初市 四日
書榮會市場
南區北日東町四七（四方內）

初市 五日
書友會市
北區曾根崎上二丁目七四（梅田屋書店內）

初市 六日
日本橋倶樂部
南區道頓堀辨天座西横

初市 六日
西野田倶樂部
北區西野田龜甲町二丁目（國技書店方）

初市 七日（當日某書店上物澤山出品）
佐藤會
南區御藏跡公園南

初市 八日
古典會
西區南堀江（書林倶樂部）

初市 八日
同友會市場
西區九條中通一丁目（奥田書店方）

初市 十日
十日會
西區南堀江（書林倶樂部）

初市 十三日
五友會
南區上本町七丁目南入西側（菊田書店方）

懸賞當選會旗圖案

予て懸賞募集中であつた、大阪古書組合會旗圖案の第一等當選者は前號に發表せる如く高田幸三郎君であつて今其中央部の意匠を寫眞として茲に掲げます。就ては之が調製に關する詳細な件は追て御報告申上げます

因に前號發表選外佳作第四位高田幸三郎君とあるは堀尾安太郎君の誤に付訂正

▲第五回定例役員會

十二月六日第五回定例役員會を日本橋クラブにて開く、前號月報劈頭に掲載せし『古物取締法に就て』の一文に刺戟されたると、時適ま最近戎署管内に執行されつゝある帳簿隨時點檢中、市會及返品的買入品の無記載を指摘され細則違反の廉に依り起訴せらるゝ者四五名に及ぶとの事に付斯くの如く時々此不安を蒙りては業界發展上非常の障害を招く故に、何とか之が對策を樹て、一般買入品に對しては各自特別の注意を拂ふと共に同業間の申合せ規則を作り自治的方法の下に業者の人格を高めん事を圖り旁其諒解を得ん爲めには一應專門家に就て研究する所あるべしとて其道程を二三氏に託して散會せり

○出席●欠席△遲參

	一回	二回	三回	四回	五回	六回
鹿田	○	○	○	○	○	|
荒木	○	●	●	●	●	|
藤堂	○	○	○	○	○	|
長谷川	○	○	○	○	○	|
伊藤靜	○	○	○			|
村瀨	○	○	○	●	●	|
大石川	○	○	●	○	○	|
高田	●	●	○	○	○	|
倉地	○	○	○	○	●	|
小石川	○	○	○	●	○	|
林富	○	○	●	○	●	|
奥田善	●	●	●	●	●	|
井口	○	○	○	●	●	|
四方耕	○	○	○	○	●	|
高村尾	○	○	●	●	○	|
木嘉	●	○	○	○	○	|
天牛	○	○	○	○	●	|
谷支	○	○	○	●	○	|
松本正	○	○	○	○	○	|
森村	●	●	○	○	○	|
村井	○	●	●	●	●	|
伊藤一	○	○	○	○	○	|
松葉	△	●	●	○	●	|
森谷	●	○	○	○	○	|

▲廣告料改正

毎號掲載せる月報終頁廣告料金を新年號より左の如く改正致しますから盛んに御利用下さい

七行一割 一圓　七行二割 一圓八十錢
全 三割 二圓五十錢　全 四割 三圓

谷三文庫
高田幸三郎
東區谷町三丁目交叉点

松雲堂 鹿田靜七
東區安土町四丁目

松葉重造書店
北區西野田亀甲町一丁目

荒木書店
荒木伊兵衛
西區江戸堀南通三丁目

玉樹香文房
市外天下茶屋松原通一丁目

公立社書店
藤堂卓
南區日本橋南詰南入

紙上名刺交換會

謹賀新年

本年は乍勝手同業者諸君への賀狀を廢し月報紙上にて御挨拶申上候

大正乙丑元旦

長谷川書店
長谷川健治
東區淡路町五丁目一

森谷清松
北區上福島中一丁目二七

文々堂店書店
村井治郎吉
北區曾根崎中一丁目一四二

中林製本所
南區河原町二ノ一四六三

高尾書店
高尾彦四郎
南區日本橋筋四丁目

中央堂書店
松本正治
北區曾根崎永樂町

七福神に關する文獻

文一郎編

辨天をのけるとあとは片輪なり

古川柳は面白いことを云つてゐる。七福神は今では壽老人、大黑天、福祿壽、恵比須、辨財天、毘沙門天、布袋和尚ときめてしまつてゐるやうであるが、この福神達は徳川の中頃になつて殆ど完全に成立せられることになつたものらしい。そしてその信仰は始め京に起つて徳川時代には江戸にも及び、七福神詣等が流行しだした。併し七福神のメンバアは徳川の中頃迄は一定しないで、毘沙門天の代りに多聞天、辨財天の代りに吉祥天を加へるように、殊に鐘馗だとか猩々等が七福神の中に入れられてゐたこともあつた。現に元祿十一年板の大心義統の著した日本七福神傳には蛭子神、大黑天、多聞天、辨財天、布袋、南極老人、吉祥天を擧げてゐる。併しこれ等に先つて、室町時代に狂言七福神や七福神賦の話等が傳へられ、或は書幅として流行してゐることから察しても、すでに此時代には世人からこれ等の福神達の多くは認められてゐたものであつた。

そしてこれが七福神成立の源流を探ぐることは民俗學、土俗學史上最も興味多き點であつて、私等はこれ等福神の研究によつて印度、支那、日本の思想傳説が關聯して如何に根强く我國民思想の上に現はれてゐるかを知ることが出來るのである。年頭慶賀を述る辭に代へていさゝか自分が調べて見た所の所謂七福神に關する諸種の文獻の主なるものを左に解説する。

狂言七福神

七福神成立に最も早く貢献してゐるのはこの狂言記である。此外にも福神が屢々狂言の材料として用ひられてゐる。夷大黑、連歌毘沙門、福渡(鞍馬詣)、禰宜山伏など頗る多い。

日本七福神傳　一册　大心義統著元祿十一年板

此書以前福神中の個々について其由來功徳を述べたものは少くないが七福神をまとめて説明したものはこれが始めらしい、殊にこの書は福祿壽、壽老人を合して南極老人一体とし吉祥天を加へて一福神の欠を補ふてゐる。

七福神傳記、同附錄　二册　增穗殘口著元文二年板繪入

世間流布の七福神が蛭兒以外何れも異國の希れ人であることを憤慨して新に大己貴尊、事代主命、嚴島大明神、天穗日命、高良大明神、鹿島大明神、猿田彦大明神の七神を編出したもので殘口一流の説明を加へてゐる。

七福神考　一册　山本北阜(時亮)著寛政十一年板

狂言記以來の世間流布の七福神を祖述し、和漢の書及佛典等につきてその名義緣起等を論述してゐる

七福神　一册　鶴岡專念、富田豐春編明治四一、七刊

隅田川七福神の標碑建設紀念として出版されたもので七福神の由來緣起を述べ、隅田川七福神の沿革を附してゐる。

寶船と七福神　一册　石橋臥波　明治四四刊

七福神古事來歴物語　小本一册　外狩龍南著大正五刊

七福神の研究　樋口二葉　歴史地理百號紀念號二一一頁（明治四二）

淫祠と邪神　一册　和田徹城大正七刊
聖天、稲荷、鬼子母神等と共に大黒天、辨財天、毘沙門天の事を記してゐる。

福神研究號、續福神研究號　二册　民族と歴史增刊　大正九、一刊
所謂七福神を始め古來福神として祭られた宇賀神、摩多羅神等の事迄詳述せる福神研究の大集成で喜田博士獨自の編纂になる。

福神研究惠比須と大黒　一册　長沼賢海著大正十刊

此外「毘沙門の本地（お伽草紙）」だとか「大辨財天秘訣（淨嚴記）」だとか「大黒天神像考（日和佐玉英、安永七刊）」等一つ一つについての文獻は數多あることゝ思ふがこゝには贅説することをやめる。

併し徳川中期頃七福神流行につれて小説戯曲等に外題及内容に七福神にちなんで書いたものが甚だ多くなつた、これは一つは多く書籍の出版が正月に發行せらるるので縁起を祝つてお芽出度いこれ等七福神の事を書くやうになつたものと考へるが、ことにこのことは黄表紙に多く見うける。

初日影七福即生（黄表紙）十返舎一九畫作

えびす大黒目出度春　二册　谷久和畫　安永七年
七福神親方　三册　同　八年
七福人大通天　二册　伊庭可笑作　天明元年
七福人大通傳　二册　同　同　二年
流行七福參り　三册　四方山人作　天明五年
七福神伊達船遊び　三册　萬象亭　天明六年
花笑七福參詣　二册　山東京傳作　寛政五年
初日影七福即生　二册　十返舎一九作　同　八年
七福今年咄　二册　櫻川慈悲成　享和二年
七福神府龍　二册　一九作　文化三年
春遊七福曾我　春英畫作

等仲々多く、赤本でも「福神大ふるまい」合巻もので「七難即滅七福譚（三文）文化六年」「寶人船七福大帳（鬼武）文化五年」等があり、此他書本、敎訓ものでも左のやうなものがある。

七福入繪抄　一册彩色本
繪本福神推遊　二册貞信紙摺ほうさう繪
福神教訓袋　五册鈴木以敬
吉原七福神　小一册正德板太夫格子等を七福神に見立しもの

これ等七福神に關する諸種の文獻を蒐集することは仲々面白いことで一大七福神圖書館（ライブラリー）を作る奇特なる物好があるなら、私達は大いに賛成したいものである。

因に前號の續きたる「横井博士著作考」は次號を以つて完結する筈である。

壹　圓　同　浪六全集一
同　日　右　同　人
○壹　圓　二號　超　克一
壹　圓　同　三　四　郎一
以下同じ

（一）右之書式番號一は一軒より買求めし分全部とす但し自分は見安きように數多き時は十部づゝに分割して第二段の如くに行ふ。

（二）右之書式に對し賣上帳に附上ぐる際は筆の尻にて朱肉を附して一見分明ならしむ（第三號超克參照）

（三）交換品等は凡て買入と同じく勉めて帳簿に記入さるゝを可とす

（四）小説の如く高等貸出式の書籍は暫く賣上帳に記入するを差扣へ適宜の所置を取るを可とす。

（補記）以上は當地從來使用し來りたる舊式賣買二册に分れたる帳簿を根底として論じたる話しであるが東京警視廳で認可した處の賣買共一册に纒めた明細帳を近頃當地同業者中にも大分使用して居る、此賣買一册に纒まつた帳簿に依ると手數が又大分省く事が出來る。其帳簿及記帳法等に付ては古書組合事務所に御照會下されば直ぐ判る事である。

あしろ生

寄書

本月報第三號第四號に連載した生の「大阪最古の刻版に就いて」に對して京都龍谷大學教授禿氏祐祥先生から左の玉稿を給つたから茲に掲載して大方諸賢の參考資料とせん

◈大阪の古版をモ一一つ

禿氏祐祥

本誌の前々號に大阪の古版として蓮如上人御文のことが紹介されたから序に同じく天文版の和讃に就て大阪人士の注意を喚起したいと思ふ。眞宗で用ひてゐる和讃即ち三帖和讃は文明五年に始めて越前の吉崎で開版された。次の跋語が添へてある。

右斯三帖和讃並正信偈
四帖一部者末代爲興際
板木開之者也而已
文明五年癸巳三月　日（蓮如花押）

二度目の開版地が大阪であるらしい私心記（蓮如上人末子實従の日記）天文二十年五月以下の條に次の記事がある。

十四日　和讃ハン木開候者參候
二十日　和讃板木ホラセラレ候　堺者也
廿一日　和讃ハン木京ノ者ニ被開候
（十月）十二日晝　松木ミル也
（十二月）十五日　板木乘賢ニスラセ候
二十一年正月廿日　和讃板木字ヲナヲス也

文明版の和讃は龍谷大學、大谷大學

落丁本に就て

不信なる者と假定して完全な物と同樣に又は其れに近い價格で賣つた場合を指すもので誤解も

聊か形式に偏重した嫌ひがないでもない落丁本に眞實死刑的宣告を與へるならば何故開卷第一

東洋文庫に現存してゐるが天文年間の跋語を附した和讃はまだ吾人の管見に入らない。或は文明版の跋語をそのまゝ存したかまたは全然跋語を附せなかつたかも知れない。紙質なり墨色なりから考へて天文頃の開版かと思はるゝ和讃の零本を稀に見ることがあるからこの種のものを集めて比較研究しる見ると上記に相當するものを見出し得るであらうと思ふ尚ほこの和讃開版の史實を傳ふる年堺版論語の天文二年より十八年後であることを注意したい

あしろ附記　先生高說の和讃は不幸にして自分も未だ嘗つて見た事がない、私心記に載つて居る以上必ず坊間に傳へられて居るに違いはないが、曩きに述べた(前々號)通り奥附などがないので容易に發見せられないのと、具眼者に發見されぬ結果只普通の古い御和讃として秘められて居るのであらう。是非大阪版古版としてこれ等のものを發見研究するのは啻に印刷文化の上のみでなく大阪文化史上を飾るものであらうと思ふのである(大正一四、一、二記)

新領土に於ける古本屋の分布(一)

神戸　古家實三

十日會が果てたあとで島町の伊藤君と雜誌の飛沫が古書組合月報のことに移つて、伊藤君から新年號に何か書いてくれろと仰せ付かつた。ろくなことは書けやしませんが何か書いて見ませうかと安請合をして新領土に於ける古本屋の分布といふやうなものでも書いて見ることを約して歸つたが健忘症の私はけろりと忘れてゐた。今日は高尾君に書物往來を持つて來て貰つたので二三頁繰つてゐると原稿といふことから聯想して伊藤君との約束を思ひ出した今高尾君が頻りに本棚を漁つてゐるのを橫目に見つゝ此の原稿を書く。

大正七年北海道を旅行して途々都市の古本屋を漁つたがその頃北海道の古本屋はまだ開拓の途上といふやうな感じがした函館に三軒ばかり小樽に二三軒、札幌に四軒ほどあるにはあつたが札幌の某書店（今一寸その名が思ひ出せない）を除いては何れも頗る貧弱なものばかりであつた某書店はその當時でさへ十日物語（デカメロン）を四圓五拾錢と東京以上の値を吹いて「北海道の古本屋も素人ばかりではないぞ」と言はぬ許りの態度で威嚇するやうな氣配さへ見せたがそこの主人といふのは土地成金で古本は道樂半分でやつてゐて年に一二度は東京へもゆくといふ話だつたのでさてはと合點が參つた、面白く思つたのは舊松前地方から時々和本の珍らしいものを函館の古道具屋に送つて來るとの事であつたが僕が訪れた時には經書や軍記ものなど一向誕の出さうにないもの許りだつた。樺太のことは知らない。

朝鮮と滿洲とは昨大正十二年の旅行によつて畧其狀況を詳にした。

滿洲は新領土とは言へないが朝鮮を紹介する序に書いて見ることにした。（此旅行には北京天津の古本屋も一瞥したが、北京の記事は鹿田氏にでも讓つて置く方が賢明な態度と思ふ別段書いて見る氣にもならない）

釜山大廳町の南山堂は開店以來より十年餘りにもなるさうだつた。大阪の三流ぐらゐの店である。釜山に

は此の外極めて貧弱なのが一軒あるきりである。去年僕の行つた時にはは東洋歷史大辭典が正札金貳圓五拾錢也であつた。大邱には小さい店が一軒あるさうだつたが見落して來た。

京城はさすがに朝鮮の主府だけに可成り盛んなものである。京城の古本屋は大抵內地人街であるところの本町附近に集つてゐる。本町二丁目の森田文光堂、群山堂、東京堂、明治町の勉强堂などは內地にも少い位の大店舖をかまへてゐる、尤も內容はそれ程豐富ではない。何れも東京出身の人々で腕一本から十年ばかりの間にたゝき上げた奮闘家のお揃ひである。群書堂は洋裝本の外に唐本を大分持つてゐるし、文光堂は朝鮮本を持つて居る。取引は森田文光堂の方がしやすいやうである。店員に鮮人の小供を使つてゐるのは古本屋間での流行である。周圍の事情が自らさうさせるのでもあらう。此外に古本專門の店が二三軒あるが大阪の三流どこの程度である、京城第一の新本屋大阪屋號は傍ら古本も少しは取扱つてゐる。朝鮮人の經營にかかる古本屋は十軒ぐらゐもあるが、白斗庸(はくとうよう)の營む翰南書林が朝鮮本の良書を少しく有する外は概して貧弱である。

是等の鮮人古本屋は朝鮮本の外に唐本(主として經書と初步の史書類)と少許の日本版洋裝本とを持つてゐるが殆ど問題にはならない。朝鮮人の若い學生達も大抵本町邊の內地人の店を漁るのが多いやうに見受けた

▲書籍解題書の必要(二)

淀川生編 B・S生補

漢籍に關する解題書(特に我國にて刊行せるもの)

○漢籍解題 一冊 桂湖村 明治三八
○靜嘉堂秘籍志 六冊
○漢書解題集成三冊 佐村八郎 明治亖
○經史解題 一冊 中山久四郎
○論語年譜 二冊 林泰輔 大正五
○古文舊書考 四冊 島田翰 明治三七
○經籍訪古志、補遺共 澁江抽齋 森立之編 (解題叢書所收)
○八史經籍志 十七冊 清張壽榮校 文政八飜刻
○唐本類書考三冊 向榮堂主人 寶永四
○正齋書籍考、經部 三冊 近藤守重 文政六
○經史考 一冊 井口文炳 明和三
○經籍答問 松澤老泉(解題叢書所收) 江戶の書僧慶元堂主人が書籍に關する問答

日本に關する洋書の解題

ウエンクステルン
大日本書志 二冊 一八九五、一九〇七年刊
アンリ、コルヂエ
日本書志 一冊 一九一二巴里刊
サトウー日本耶蘇會士刊行書志一冊
一八八八刊 及同增補

此他各種の書目江戶時代の書籍目錄類及び寫本等につきて記すべきもの數多あれど今は解題書にとゞめる尙これ等に就ては後日改めて述べる機會もあらう　(完)

▲廣告料改正

寄書

▽藏書票の趣味△（二）

日本藏票會　豐仲　未迷

藏書票の日本に紹介されたは明治三十七年墺國畫家**ヱミール**氏が「明星」に四種の**リブリス**を載せられたに始まる。また個人的には歸朝藝術家の一部に流行してゐたし、古い**リブリス**貼付の古本蒐集家も間々あつたのである。

公刊物の裝幀を飾る爲に利用されしは、漱石著「漾虚集」に始り、夢二氏の著書にも二三種有り。橋口五葉織田一磨氏等は相當應用されてゐる丸善では魯庵氏の考案で**リブリス**の圖案化された、團扇が配布されたこともあり、丸善としても宣傳はしたものらしい。

ヱキス、**リブリス**を英米國にては**ブツクプレート**とも稱されてゐる。自己の藏書の見返しに貼附されるものである、これが本來の使命は自己の姓名、紋章を表示せるものでなければならない。公刊物に利用することが、圖案的に應用されたもので、**リブリス**としての價値はないものである。

世界的に獨逸の發達が著しく、有名なる文士、名士の**リブリス**を珍重され、**リブリス**貼附の有無で古本漁りとなり、**リブリス**蒐集の爲古本相場の高低を生じるとは面白い現象である。獨逸あたりより輸入される專門書にも貼附されて居り、大學の講師で**リブリス**を蒐集されてゐる向もある。

趣味として英米佛獨各國に**リブリス**會の團體が有り、自己所有の**リブリス**と交換又は古い複製を配布されこれ等の團體より年報**パンフレツト**などが發行されてゐる。印刷術の發達せる歐米では、彫刻銅版、洋木版が主に利用され、石版三色版凸版等は藝術味の薄い點もある。淡彩の密畫が多い物で舟、木兎、裸體等の圖案が多く見受けるが、やはり讀書を主にせる圖案の方が相應しい。

吾國の印刷術はまだ／＼幼稚なもので有り、この點にも從來の木版畫を利用することが肝要であるし、趣味的にも外國物に劣ることも有るまい。我藏票會もこゝに三回交換會を開き今や會員百餘名を算して居る古書組合の公立社氏高尾氏、森田オツサン堂氏など皆會員である。

一般的に宣傳の意味より、製作の引受、作品交換等を催し着々實行はされてゐるものゝ、まだ／＼普遍的に藏書票の意味が了解されない、趣味的にも利用の點にも藏書印より一歩進んだ高踏的なもので藏書家になくてならないものであると信ずる。

私はこゝに藏書票を作らんとする人々に紹介の一助にもと、藏票會の作品を二三種見本に送呈する。希望者は貳錢切手封入公立社まで申込れたい。

こゝに挿入した藏書は米國で賣品として組賣されて居るものゝ一つである。

洋本稀書解題（五）

文一郎編

横井時冬博士著作考（其三）

著書（つゞき）

日本商業史　一冊

初版（明治三十一年十二月）再版（明治三十二年七月）三版（明治三十五年九月）四版（明治三十八年十月）五版（明治四十年四月）六版（明治四十三年十一月）十版（大正十一年十月）本文三四二頁挿圖十二葉金港堂刊菊判布裝

博士が心血をそゝぎし大著にして該博なる材料と正確なる考證によりて事象の要綮を捕へ、統一整備を計りて巧みに其綱領を講述せる處他の追従を許さず。

日本商業史要　一冊

初版（明治三十二年四月刊本文一三八頁）訂正再版（明治三十九年四月刊本文一四二頁）増訂版は本文を訂正し維新後の一篇を増加す、金港堂發行挿圖菊判日本商業史を母書とせる商業學校用教科書として編述せられしもの

日本工業史要　一冊

明治三十二年二月刊本文一七〇頁吉川弘文館發行菊判挿圖

日本工業史を母書とせる工業學校用教科書として編述せられしもの

維新後日本商業史　一冊

明治三十三年十一月刊本文二二二頁金港堂發行菊判

日本商業史の續編にして第六編五十四章より七十一章迄の十八章より成る。附錄日本商業史略年表維新後（七頁）あり

日本商業歴史　一冊

高等商業學校教授横井時冬述大日本實業學會講義錄本文三編四十四章一三五頁菊判

日本商業史　一冊

同上講義錄本文四編五十二章一六〇頁

後者は前者の増訂版にしていづれも述作年月未詳なれど明治三十二年調の貿易統計表あれば、維新後日本商業史の後に來るものならん何となれば維新後日本商業史は三十一年度の統計を採ればなり

大日本美術圖譜　八冊（内解說四冊）

文學博士小杉榲邨同横井時冬共著明治三十四年刊吉川弘文館發行和紙半紙本彩色摺圖七十

本書は法隆寺正倉院等の御物を始め、全國古社寺名刹の名器、名門勢家の珍什を採錄し藤原、鎌倉、室町、桃山、德川時代に於ける織物、染物、刺繡、陶磁器、蒔繪、漆器、佛具の裝飾、建築物の莊飾り等の意匠を各種の方面より網羅せり

日本繪畫史　一冊

初版（明治三十四年十二月刊）再版（三五、九）三版（三六、七）四版（三八、九）五版（四〇、三）六版（四二、一〇）本文一九八頁挿圖菊判金港堂發行

國史學要　二冊

文學博士横井時冬編初版（明治三十六年九月刊）訂正再版（明治三十七年一月刊）金港堂發行挿圖菊判

中學校歴史科用教科書として編述せられしものなり

日本殖產史　一冊

横井時冬述早稻田大學明治三十七年度歴史地理科講義錄本文五編二十二章七三頁菊判

農工商其他產業の變遷を略述せるもの

日本商業史　一冊

文學博士横井時冬閲武田英一編初版本文三一四頁、増補訂正版本文三二六頁明治大學出版部發行菊判刊行年月不詳

明治三十七年博士は早稻田大學商科及明治大學の講師を嘱託せられしを以つて此書同年或は同年以後の著作なるべし。増訂は專ら德川氏時代商業の部分に加へらる。

商業修身教科書　一冊（△）

井上博士と合著にして明治三十七年刊

芸窓襍載　一册

文學博士横井時冬著明治三十七年三月刊明治書院發行本文四〇四頁菊判

博士が大八洲學會襍誌、史學雜誌皇典講究所報等に載せられし論文のかず〳〵を集められしものにして本朝の入木道以下六十五章すべて博士得意の研究論文なり

國史撮　一册

明治三十八年刊

大日本能書傳　一册（△）

横井時冬博士遺著明治三十九年八月刊本文一〇二頁吉川弘文館發行和紙和裝本

本書は故博士の遺著にして十餘年以前一度鉛版に附せられしことあれど世に公にするに至らざりき今博士の百日祭を營まるゝに當り更に之を印行して生前の知人に記念として贈られしものにして、朝野宿爾魚養以下本朝能書家五十一名の傳記なり。卷頭博士の遺影をかゝげ、尙横井時冬年譜四頁を添ふ（前揭△印の書は予の未見のものなれど年譜に見え、又明治十五年愛知縣中島郡地志の著あり併せてこゝに附記す）

此他各種の雜誌に發表せられ芸窓襍載等に未載の諸論文あれど、こは未調査の點多ければ稿を改めて諸君の是正を請はん

尙小傳の內博士の上京は明治十七年（二十六歳の時）にして、從て大日本不動産法沿革史を著されしは三十歳の時、博士の號は明治三十五年（四十四才の時）に授けられ、逝去の月日は明治三十九年四月十九日なり、以上年譜によりこゝに訂正す。

參考書目

商業及經濟研究第三十二册希有三氏日本經濟史に關する一般的研究文獻、內田銀藏氏日本經濟史研究參考書、松尾勇四郎氏經濟學財政學研究參考書調、本庄榮治郎氏日本經濟史原論、池邊義象氏日本法制史書目解題、小中村清矩氏國史學の栞、佐々木信綱氏萬葉集選釋三六一頁、出版月評三十號、森洽藏氏續日本文學者年表等及既揭横井氏諸著參照

特に希有三氏の既揭論文に多大の稗益を享く、こゝに感謝の意を表す、但し二三重要なる個所に於て予の訂正を加へおきぬ。

（大正十四年一月十日）

▲組合顧問辯護士決定

第五回役員會席上提案の一事件たる明細帳隨時點撿及是が對策さして自治的申合規則等を作るさか、是等に關し專門家に就きて大いに研究する處ありさして其指導を仰ぐべき適當なる顧問を物色中の處、今回我業界の內容習慣等に精通し又同業組合法等に關し特に熱心なる研究家さして令名高き、辯護士法學士（前判事）井上正義氏が我大阪古書組合の顧問辯護士たる事を快諾せられたるに付き不取敢全組合に披露するさ同時に氏の熱誠なる厚意に感謝する者である因に同氏の事務所は東區東高津北ノ町九〇（電南二七四八番）である。

人事

▲新加入者

北區東野田町四丁目二一〇　立志社　北折駒吉

▲移轉

西區九條新道四丁目　萬眼堂　下津秀勝

北區天神橋筋三丁目五夫婦橋南詰角　活文堂　伊東市太郎

▲廢業

北區西野田江成町　木村茂楠

第六回 定例役員會

十四年一月六日第六回定例役員會を日本橋クラブにて開催、劈頭第一舊臘懸賞募集中なりし我會旗圖案の第一等當選者高田幸三郎君に對し豫て規定したる賞金の授與あり、次に會旗調製に就て是が財源を會員中の有志者より専ら寄附を仰ぐ事に議決し、先づ當日出席せし役員及其他の役員連より次項記載の如き寄附金を得たり。尚別項の如く辯護士井上正義氏を本組合の法律顧問に囑託する件を議して散會す

	鹿田	荒木	藤堂	長谷川	伊藤靜	村瀬	大石川	高田	倉地	小石川	林富
一回	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○
二回	○	●	○	○	○	○	○	●	○	○	○
三回	○	●	○	○	○	○	●	○	○	○	●
四回	○	●	○	○	○	●	○	○	○	●	○
五回	○	●	○	○	○	●	○	○	●	○	●
六回	○	○	○	●	●	●	○	○	●	○	●

	奥田善	井口	四方耕	高尾	木村嘉	天牛	谷支	松本正	森村	村井	伊藤一	松葉	森谷
一回	●	○	○	○	●	○	○	○	●	○	○	△	●
二回	●	○	○	○	○	○	○	○	●	●	○	●	○
三回	●	○	○	●	○	○	○	○	○	●	○	●	○
四回	●	●	○	●	○	○	●	○	○	●	○	○	○
五回	●	●	●	○	○	●	○	○	○	●	○	●	○
六回	●	○	○	○	○	●	○	○	○	●	○	●	○

組合會旗寄附金

前號月報に發表した通り本組合會旗の意匠圖案も既に立派に出來たのであるから、一日も早く是が調製に着手すべく、其財源に就き第六回役員會に謀りたる處全組合員中の有志者に依り寄附を仰ぐ事に決定し甚だ借越ながら先づ當日出席せる役員連より左の通り寄附申込があつた。

金五圓 鹿田靜七
金五圓 荒木伊兵衛
金五圓 藤堂卓
金參圓 長谷川健治
金參圓 伊藤靜三
金參圓 村瀬藤吉
金參圓 石川嘉助
金參圓 高田幸三郎
金參圓 倉地健一
金參圓 石川留吉
金參圓 林富藏
金參圓 奥田善吉
金參圓 井口公次郎
金參圓 四方耕太郎
金參圓 高尾彦四郎
金參圓 木村嘉藏
金參圓 天牛新一郎
金參圓 谷末吉
金參圓 松本正治
金參圓 森村接松
金參圓 村井治郎吉
金參圓 伊藤一男
金參圓 松葉重造
金參圓 森谷清松

小計金七拾八圓也

大正十四年二月一日第六號發行 發行兼編輯人松本正治 發行所大阪市南區日本橋南詰（公立社書店內）大阪古書組合事務所

大正拾四年三月一日發行

大阪古書組合月報

大阪古書組合事務所發行

（第七號）

此頃の事

城西生氏に依つて『落丁本の處置に就て』と云ふ記事か發表せられてから、是れに關する賛否の說が各方面から寄せられ、毎號殆んど絕へ間なく紙上を賑はして居たやうであるが、もう此邊で第一提案者たるものが、各方面の意見を比較研究して一致點に近い良案を綜合發表しても宜さうなものである、そして斯る問題は組合事業中最も可能性を帶びた仕事であるから、ズン〳〵實行して貰ひたいものである。

近頃各市會を見ると未だ組合へ入會もして居ない新顏の人々が多く立寄つて居る事を見受ける、夫れ等の人々は誰からか市會の場所や日取を聞いて來たものだらうが、一般に顏が賣れて居ないので會主側でも猜疑の眼を放つ、然しそんな事は平氣で本名も名乘らず金丸だとか、角一だとかの符號名を使つて買方に立つて居る。果して是等の人々は古物商の認可を受けて居るものか、素人の數寄者であるのか譯が判らない事がある。市會の方でも取引上不安を感じつゝ、勿論或る市會は時には住所姓名を聞き糺して首肯かれるものは入席を許し、他は拒絶して居る場合もあるが、今の組合規約から見ると之を絕對的に拒絕し得られない立場にある。決して組合員以外の人々を排斥する譯ではないが、苟しくも一國文獻の先驅者を以て自任する人々が組合の成立し居るにも拘はらず、半永久的にもせよ其業界に足を踏み入れやうとするに際し組合員に籍も入れず、一場の挨拶もなく、ヌッケリこれ市會に現はれて同業者顏をするのは實に沙汰の限りでない。

何商に拘はらず近頃は皆夫れ〳〵組合締結下に親睦並に業務の啓發を計つて居る折柄、僅かな入會金を吝む如きは折角の人格を傷けるものである。斯る人は或ひは云ふだらう、市會にて買へば、卽ち客である、市會にも儲けさして居ると、又古物商の認可を受ながら何の斟酌遠慮があらうかと。私はさうでないと思ふ。素人から買つて素人に捌くなればこれだけで濟んで居るだらうが、仲間と附合ひ、市會に接近をしやうとするならば古物商の認可丈けでは事が濟まない。例へばあの米株取引所仲買のやうに、農商務大臣の認可を受けながら莫大な保證金を納め更に取引所組合員會にも入會して月々或る額の組合費を徴收され、尙其上取引物に對しては一々取引所へ手數料を拂

つて居る、此二重三重の掛り物は一見過重なやうであるが、夫れあるが爲に自己の立場は闡明され、誰れ憚からず業界を濶歩する事が出來るのである。即ち市會は取引所である、最も公平に圓滑に迅速に且つ確實に取引の媒介者たるものは市會である飜つて考へると又我等の學校とも言へる、そして教師でもある。我々は此學校に出入するに依つて不知不識の間に種々の智識と經驗を得た。此取引所あるが爲めに複雜な相場を覺える事が出來るのである。斯る意味に於て我々は市會を一層尊重し一日も是れと離れる事が出來ないと思ふのである。であるから大いに市會を利用し或は同業者と取引しやうとする人であつて未だ組合へ入會して居ないのは一種の脫稅を敢行し居る事になる。僅少なる組合入會金の如きは二百餘名に對する最も安價な顏つなぎ料に過ぎない。斯る人々同至急に組合入會の手續を執つて、同業者たる一個の人格を造られたいのである。それと同時に次期の總會には是非此一文を組合規約中に編綴して確定的條文を表示して貰ひたいのである。

寄書

古本屋の話

珍娼嫌生

古本屋はぼろい（うまい）商賣だと私の本顏をみたら人は云ふ。そのぼろい古本屋がそのうまいわけを考えてみる、なる程ぼろい商賣だわいとうなづかれるがよく考え直してみるとあまり割の好い商賣ぢやない。しかし仕入も賣るのも素人だから古本屋はぼろいと又人がいふかも知れぬ。ぼろい〳〵古本屋はぼろいと私はやけにそう云つて置く。『古本や書生の方も噓を言ひ』なんて川柳もある通り素人から仕入れるから必ずしも儲かるといふ理由にはならない。だが人がぼろいと云ふ商賣には又云ひ知れぬ苦勞がある、僅か貳拾錢や參拾錢の本を買つてもらつてもお客はお客だ『毎度有難うございます』が度重なれば心安くもなる、心安いが故に一冊の本も『お宅えお伺せねばいたゞけませんが』とは云えず顏を知つても名前はわからず。所も知らず。知らず〳〵に一冊買ひ二冊買ひがちや〳〵と洋劍の音であつと思つたが後の祭り。輕いところで古物商違反惡く行けば故買犯なんて聞いても恐ろしい告發と來る、たまつたもんぢやない。

ごめんなさいと二人の客が來た『何にか面白い本がないかね』と一人が言つた。主人が留守で家内が一人『へいごんな本で』『枕畵の本がありませんか』と今度は他の一人が小さい聲で云つた。私の方は漢籍の本ばかりで誠に御氣の毒ですがと云わぬ先から

『わしは○○署の刑事だか』とおごそかにしつけられる二人は思い〳〵に家の中を捜索したが洒落本一冊出なかつたとはある路地で店を出さずにゐる古本屋の話。

此頃この話ぢやないがある地方の警察からこんな本が盜難にかゝつたから氣をつけろとしらせがあつた、それと同時にその本を買つて呉れと來るこうなると面白い、買ふのを斷る、その跡をつける、刑事が來る、ごろぼうは走る、主人も刑事も一生懸命その跡を追つたが泥棒は逃場をうしなつてある餅屋え逃げこんだ。さあ

しめたと二人も後から飛び込んだが折悪く搗きたての餅が三人の顔と云はず手と云はずむやみやたらにひつついたとおぼしめせ。結句泥棒はつかまつたが一臼の餅代を辨償さゝれた。古本屋も時にはこんな氣保養が出來ますとはある強そうな主人の笑話であつた。

此頃は絶版物がむやみにふえたこれも地震のおかげだと氣の早い連中は被服廠の跡へでもお參りに行つたかどうか知らないが四五年前までは絶版物といへばせいぜい博文舘の西鶴全集の位いのものだつたが此頃ではなんでもかんでも「史」といふ字がつけば定價より高く賣るものだと思つてゐるらしいだがさすがに參謀本部の日露戰史だけは敬して遠ける方でこれはごめんをこうむる向が多いとみえてある將校の未亡人が屑屋に拂つたのを買つた古本屋がある、しかし買手次第でこれは中々口錢が取れるとある古本の市會での内證話をそのまゝ。

訪書餘錄をいつもはさなず嵯峨本や五山版を研究(研究といへば語弊がある實は萬一そんな事にぶつかつたら安く買つてしこたま儲けようといふ下心)してゐる本屋が、ある時田舍へ買出しに行つた(いつでも田舍から藥書が來るとどんな所へでも喜んで行くそれも古本屋の樂しみの一つだ「今度は何にかうまい堀出しがあるような餘感がしきりにする、光悦かいや此地方ではひよつとすると昌平版の論語位ひが反古の中にまじつてゐるかも知れない」なんだか其麼氣がする。昨夜みておいたゴツ〳〵した木活が眼にちらつく。汽車のつくのもどかしくそこ〳〵かけつけたはたして餘感の通り古い本が本箱に四五はいぎつしりと積まつてゐる、そうと一冊手に取つてみる、なんだかわからないが古茶けた美濃紙に昨夜一生懸命みて居た慶長本そつくりである、とにかく値をつけてみたが先方が賣らないのを無理な高値で買つて歸つたものだ。後で開けば古いお寺にあつた佛書の端本で慶長版でも五山版でもなかつたとはある古本屋の失敗談、損すればこそその道に賢くなるといふあきらめもこうした面白い失敗談を生むものだが又思はぬ儲け話もある。

これは極く最近の話だが、大阪からあまり遠くないある田舍の古道具屋(古道具屋といつても古道具が專業ぢやない秋のとり入れには稻もかる夏は草取り水くみ、百姓がひまになれば近郷の古そうな家をたづねて紙屑も買へば時には古本の買出しもするといふ中々すみにおけない人)がある日古本屋の店先でいつものように眞しめたような風呂敷から一冊一冊出しては主人の顏を見、これはどうです」とやつてゐたがその中に横本で「破提宇子(はでうす)」といふ本があつたがその時その主人も古道具屋も氣がつかなかつたとみえて十八史略や古今和歌集など十幾冊を參圓何にがしで商ひが出來た。その幾日かの後その中にあつた横本が日本に三冊より現存してゐないハビアンの破提宇子(元和六年版)であつた事がどれだけその古本屋の主人を喜ばした事か後できけば京都大學の新村博士が秘かに手に入れられたといふ話、だから古本屋は面白うてやめられぬらしい「いや「らしい」ぢやないやめられぬ事を私は斷言する。

新領土に於ける古本屋の分布（二）

神戸　古家實三

東京の村口書店が今日の大をなしたのは併合當時朝鮮に出かけて唐本の珍書を集めたのが基礎になつたのださうだ、當時京城は全く古本界の未墾地であつて、鮮人の古本屋には元版や宋板がころがつてゐたさうで大抵の本が一冊六錢といふ標準だつたので元板宋板などの希覯書や印譜古法帳などを殘らず買集めて東京に持つて歸り原價二三圓の宋版六臣註文選を何百圓だとか中には三圓六十何錢のものを千五百圓といふやうな想像もつかぬ大儲けをやつたさうで三度ばかり引き續いて渡鮮する中に東京での第一流の古本屋に成りすましたのださうだ、本人が言ふのだから是程確かなことはない、其中堂の先代や、東京の磯邊屋も少し後れて渡鮮したがもう餘をすくひ上げたあとには柳の木が淋しく立つてゐるばかりの光景を見て歸つたに過ぎなかつた、實はかく言ふ吾輩も古本屋をはじめた翌年卽ち明治四十五年の三月から四月にかけて向ふ見ずに出かけて、釜山から京城まで百二十里を徒歩でやつつけたといふやうな逸話を殘したばかりで空しく歸つて來た斷つて置くが僕は村口氏の儲け話しを耳にして飛び出したのではなく只朝鮮見たさの好奇心から出たことであつて村口氏の成金物語はずつと後にきいた話である。

京城は此位で切り上げて次に移る金剛山行の途中元山の街に足をとゞめた序に古本屋を物色して見た、東といふ新本屋に少しばかり古本の持合せがあつたが僕が買つたのは七冊此金額が三圓八拾錢といふから大概察しはつくであらう尤もその中には横井の日本商業史や、芸窓襍載日本文學者年表などがあつたのだから今日なら少しは儲かつたかも知れない外に小さい古本屋兼業の赤本屋が一軒あつて二冊だけ買物をした。

ところが歸りに元山の街を再び彷徨く中に過然にも、或る洋品屋の店先きに古本が澤山並べてあるのでその中から國史大系、五經集註、本朝文粹などを買つたが主人にきくと是は自分の藏書を始末してゐるだけで別に古本營業といふ程ではない、大阪の鹿田などへも時々註文するとの事であつた。平壤は朝鮮第二の大都會で人口六萬を擁するが古本屋は一向發展しないやうだ、大和町の中村といふのが新本と兼業で古本を少し取扱つてゐる位の程度であつた、新義洲にも昨年から群山堂支店の名義で小さい古本屋が一軒あり、對岸滿洲の門戸安東縣にも赤本屋貸本屋兼業の古本屋が一軒あるのには少々面喰つた、人間といふものは生活の爲には何處でどんな事をやり出すかわからないものだと思つた。

奉天春日町には宮本文古堂といふ一寸した專門の古本屋があり百貨店內にも一軒古本店があつた。大連には十二三年前から經營してゐる藤原文華堂と新進氣鋭の千山閣書店とが雌雄を爭つてゐる、大阪でも二流と

は落ちない程の立派な店である、吾輩に先んじて此等古本屋を訪れた親切者は巖松堂と一誠堂とであつた。

今年の五月臺灣旅行の小使とりに臺灣の古本屋を歴訪した、臺北には日臺堂、東洋堂、谷澤本支店、平光書店の五軒がある大阪の三流位の程度であるががらくたでも冊數だけは澤山ある店がある、暑さが酷烈なために讀書の季節が非常に短く隨つて餘りむつかしいものは讀まれないと言つてゐるがさもあらう。

臺中には古道具の傍ら少し許り古本を取扱つて居るのがあるが殆んど問題にならない、臺南と來ては古道具の兼業でやつてゐるのが二軒あるが更に貧弱で殆んど目もあてられない要するに臺灣は未墾地といふよりも古本屋の殖民地としては不毛に近い瘦地と言つてよからう、琉球及び**マーシヤル**群島**カロリン**群島その他委任統治區域の古本屋は追つて調査の上報告することにしやう。（完）

▲其後の會旗寄附金

古書組合會旗の財源として前號發行以後寄附を申込まれたる芳名及金額は左の如く茲に揭げて其深甚なる厚意を謝す

金五圓宛（順序不同）

南區八幡筋　柳屋畫廊
全　高津　竹内米造
北區上福島　小谷孝一

金參圓宛

大寶寺町　楠本正春　難波　松浦德次郎
上本町　杉本要

金貳圓拾錢也

今宮　高谷楠治郎

金貳圓宛

福島　安藝書店　中之島　いろや書店
日本橋　栗本文化堂　福島　野島藤次郎
全　杉山書店　京町堀　水野吉藏
幸町　鈴木政吉　御藏跡　佐藤光次郎
平野町　杉岡文榮堂　日本橋　中村芳文堂
日本橋　越村大集閣　福島　長田書店
全　末廣書店　市岡　岸田松藏

金壹圓五拾錢宛

市岡　朝倉巖　曾根崎　稻山晴一
樂天地　オツサン堂　九條　龜川常三郎
北新地　藤野喜三郎　梅枝町　藤野德次郎

金壹圓宛

中津町　山本源次郎　樽屋町　藤野德兵衛
市岡　宮川長之助　大仁町　和田朝陽堂
全　太田スヱ　曾根崎　山口菊次郎
東平野町　平井一之　空心町　松本亥三郎
勝山通　淺井勘次郎　千日前　佐々木書店
堂山町　神谷穗藏　南堀江　岩永久太郎
東平野町　井上書店　天王寺　山野元治郎
浦江　村上政七　神山町　吉村長七
空心町　中谷政吉　市岡　藤田捨造
西野田　富井豐重郎　中本町　上藤淺次郎
天下茶屋　田中マス　新町　河村豐藏
八幡屋町　鈴木書店　阿波座　增田和三郎
南堀江　小野宇吉　市岡　長尾吉次
市岡　幸悟　平野町　中村正兵衛
北桃谷　乙宗書店　北堀江　竹野政二郎
久寶寺町　平林縫治　高麗橋　淺野勝之助
内淡路町　岩田書店　平野町　柳屋支店
備後町　中尾熊太郎　神山町　川端健三郎
空堀町　原野實太郎　市岡　千野勝太郎
東平野町　葵屋書房　大國町　川本龍平
天満橋　堀尾安太郎　芦原町　谷田龜太郎
大寶寺町　小野書店　日本橋　藤吉武一
南日東町　小關治男　天王寺　石井田書店
鰻谷　井川書店　豐崎町　泉谷安次郎
玉造　北野書店

小計壹百拾貳圓拾錢也
累計壹百九拾圓拾錢也
尚該寄附金未收分は追つて本組合領收證を以つて集金可仕候

古本雜話噲聞書 (一)

文一郎述

内外古今に涉ると云へば少し大袈裟なれど見るにつけ、聽くにつけ讀むにつけ、私の思ひ出すまゝに、古本及古本屋に關する、凡談愚話を書きつゞけゆかんとす。讀む者幸にに怪しむこと勿れ。

心齋橋街

武編文帙利頻鋤　戸戸乘レ晴曝ニ白魚一
肆上老商私託レ我ニ　今朝交易得ニ珍書一

田中金峯が『大阪繁昌詩』で心齋橋街の古本屋を詠じた絶句である。昔日の心齋橋街は、書肆軒を並べ、其盛觀は今日豫想すら許さない所である。北は平野町邊りより、南は心齋橋詰に至る、兩側に櫛比した本屋は數十軒を下らない。東京の神保町にも劣らず、北京の琉璃廠にも負けなかつたであらう。文化文政頃を中心として前後百年間は、京阪地方へ墨客文人が雲の如く集つた。懷德堂の中井竹山、履軒、洗心洞の大塩中齋、混沌社の片山北海、賴春水一派それに篠崎三島、小竹父子、廣瀨旭莊等は、この時代の大阪で最も名高い人達である。そして是等學者詩人は、朝に夕に本屋の店頭を賑やかしたに違ひない。次の詩が『浪華四詩雜詞』に載つてゐる。廣瀨旭莊の作である。

架上清風走ニ蠹魚一　牙籤萬卷毎レ家儲
孰爲ニ陳起一孰毛晋　近日書林亦讀レ書
（南宋書林陳起善レ文　毛晋即汲古閣主人）

西鶴の『一代男』の大阪板の板元は秋田屋大野木市兵衛である。そこは元祿前後から維新前後迄心齋橋筋で店を開いてゐた。何代もつゞいた老舗もその頃迄は數多く營業を續けてゐた。が御一新は急激に過去の總てを破壞した。『四書五經』や『資治通鑑』を聖書のやうに取扱つた時代はすぎて『萬國一覽』『格物入門』等の書でなければならなくなつた。二酉五車藏レ庫、汗牛充棟列レ肆した舊家は、忽ちにして『スペルリングブック直譯』や『西國立志編』等を店頭に陳列せなければならなくなつた。昔時の盛大な出板物はこれ等新時代の書物におされて最早見る影もない。

心齋橋街の繁華も維新前後を最後として徐々に寂びれて行つた。明治八年板の田中內記の『大阪新繁昌詩』に次の詩がある。

書肆心齋橋北ニ連ル　驚キ看ル二酉五車傳ルヲ
知ルレハ非ニ小學童蒙ノ本ニ　多クハ是レ西洋飜譯ノ編

時勢の推移が見えて面白い。

木公雜記 (一)

見佳壽子

△初期の文學雜誌

藝術に個性を重んずるといふことが、雜誌の上に現はれて、文學雜誌の數は次第に多くなるのみで、現今では個人雜誌の流行にまで及んでゐる。その間に一起一倒、盛衰も甚だしいものであるが、その源といふべきものは、明治十年に創刊された「花月新誌」又は「同人社文學雜誌」「團團珍聞」等であらう。だが、文學雜誌らしい文學雜誌の生れたのは、「國民の友」「日本人」等の創刊された明治二十年からであらう。國民の友には當時若手作家である、坪內春の家尾崎紅葉、幸田露伴、山田美妙、森

鷗外などゝいふ人々が、若々しい血氣盛んな氣持で活躍したもので、坪内逍遙の一生を通じて傑作といはれる細君も、紅葉の枯華徴笑、露伴の一口劍、美妙の裸体畵の創始を作つた挿畵を入れて有名な胡蝶（書物往來二號參照）なども皆この國民文學に發表されたのである。紅葉一派の「我樂多文庫」金港堂の「都の花」春陽堂「小說萃錦」博文館からは「やまと錦」と、相前後してその後創刊された。そして前記の人達がその雜誌等に依つて次第に地位と名聲を高めて行つた。「小說萃錦」は今の「新小說」の前身である。「我樂多文庫」は江戶文學の脈が流れて、まだ戲曲者風の態度が拔けてゐなかつたが、紅葉以下、川上眉山、石橋思案漣山人、江見水蔭等の諸氏が立こもつてゐたことは、國民の友と共に、明治文學史上重大な雜誌である。「我樂多文庫」はその後「文庫」と改題し「文庫」は又「江戶紫」となり最後に「千紫萬紅」となつてやんだ。

「都の花」等は純小說雜誌であつたが、讀切ではなかつた。一つの小說が幾號もつゞいてどこか暢氣な調子があつて、當時の風潮がしのばれたその反動ともいふべき「新著百種」は現今の中篇小說叢書の樣に一冊讀切の月刊が出た。その第一篇は紅葉の色ざんげで、露伴の風流佛もこの中にあらはれて、評判が高かつたのである。その露伴氏の傑作對髑髏の出た「日本の文章」（博文館）や後年「めざまし草」と改題した森鷗外主筆「しがらみ草紙」と云ふ表紙の眞黑な雜誌が相續いて出たが、二つとも流行の水準に出なかつたもので、今ではそう云ふ雜誌があつたことを知る人が少ないであらう。かくして二十四年「早稻田文學」「帝國文學」があらはるゝに及んで、文學雜誌の地位と使命が重大となつて來た。明治文學第一期の全盛時代とも謂ふべく、小說では紅葉、露伴、評論では逍遙、鷗外と折紙もついて來た。時は明治二十六年、その時である。極めて清醇な、極めて純白な文學雜誌があらはれた。それは島崎藤村、田山花袋、樋口一葉、平田禿木、北村透谷等の「文學界」である。同人雜誌としての理想を如實に示したもので、上記硯友社派の大家連の人生觀に滿足せず、傳習的道德に服從せず何等かの理想を追ひ、藝術美に生きむと試みたものである。ロマンチックであつても、センチメタルであつても、若い新らしい氣概は一步も大家にゆずらず。

第二次の文壇に力を押し進めて行つたのである、嚴密な意味で同人雜誌の最初はこの「文學界」だと私は言ひたい。

原稿締切が非常に迫つてゐるため、年代の考證は極めて粗漏で間違ひも多いことゝ思ふが後に訂正するとして許して戴きたい　因みに、有島武郎の「泉」の如き個人雜誌の最初は明治二十五年大阪岡島より發行した宇田川文海氏の「貝よせ」であらう。

コシヨグラフ

（投稿歡迎）

◆「月報」に投書が少ないと其は有用なものか無用長見のものかしらぬが、何んと言ふなさけなさであらう。そんな手合には月報の配達でもさせてはどうだろー▲古本屋の議員さんが四人できたとそこらの鼠がチュー／＼言ふまさかペストの禁厭でも無からう▲××會とが言ふ秘密結社が出來たとか共處には奇書珍籍を甜めるとか嗅付くとかなさるのだとしかし大いした怪我もないから安心してくれといふ手紙が今朝到着した▲明細帳の記入に付て「是は難中の難で餘程の努力を要するが……その儘に打捨て置く時は更により以上の難である」と用意周到の難をうけたまわる▲打降ろされた緞帳にも人は傷付くことがあるとは御無理ごもつとも瞬間だけでも差して惡くはないが變つた形式によつて始終傷くことはたへられない▲たゞひとつ時代を入れて行く方法人を傷けない方法などを考慮すべきだ利をむさぼる爲めに喰いものとなつてはいけない今に覺醒しなければ古本屋はパチルスのやうに消毒されるであらう▲組合員の中から四五人博士が出來ると飛込で言つて見たが少々耳が遠いかちつとも返事をしない、暫く手まね足まねでやつて見せると、うるさいと言つたやうな顔をする、そしてモ少し飯があればナーと獨言のやうに言ふていた▲毎日ひにち咲いてゆく梅の花はほんとうに愛らしい

▲大阪書籍雜誌商組合定時總會

古書組合より新評議員四名の當選を見る

大阪書籍雜誌商組合の定時總會は毎年一月中旬を以て行ふ例であるが今年は決算等の遲延から去る二月六日漸く之が開催を見た、當日は雨中にも拘はらず熱心な組合員は定刻より書林倶樂部へ詰め懸けて、場内は何となく暴風來か、暗雲の低迷する如き感があつた。然し割合事なく議事の進行を見て評議員（三十名中卸屋側十五名小賣尾側十五名選擧の結果古書組合側より

湯川松次郎（再選）河村豐藏（新選）野島藤次郎（再選）淺井勇助（再選）石川留吉（新選）松本正治（新選）木村嘉藏（新選）

諸氏の當選を見た、尚評議員互選の結果組長に鈴木常松（再選）副組長に矢部外次郎（再選）家村吉兵衛（新選）の三氏當選して芽出度く當日の總會を終了した。

大正十四年二月一日第七號發行　發行兼編輯人松本正治　發行所大阪市南區日本橋南詰（公立社書店内）大阪古書組合事務所

大正拾四年四月一日發行

大阪古書組合月報

大阪古書組合事務所發行

（第八號）

『本を愛する心』

神戸　白雲樵夫

純なる愛に滿たされてこそ人生は美しく輝かしい。深い愛から出發した事業でなくては眞に偉大であるとは言へない、愛の缺けた社會は殺風景であり、愛を基礎としない事業は外觀は如何に立派であつても内容は何の價値もないのだ。「本を愛する心」があつてこそ古本屋といふ小さい仕事にも大なる價値を見出すことが出來るのだと私は信じてゐる。

「本を愛する心」がないならば古本屋のやうな爺むさいけちな商賣は餘りに感心した仕事ではない、吾々古本屋は何よりも「本を愛する心」を失つてはいけない、「本を愛する心」にもいろ〳〵あるやうだ、内容にのみ趣味をもつもの、本そのものを骨董的に愛するもの、讀書家、藏書家蒐集家といつた風に多少の區別があるが古本屋と雖も本の内容にそれ〳〵趣味を有し得るだけの素養と熱心とが欲しいものである。豐富な趣味と相當の識見とが欲しいものである。絶版になつて値段が眞價以上に高くなつたからとて盲目的に珍重がるばかりではいけない、賣れ行きが惡い本だからといつてむやみに粗末に扱つたり、むやみに反古に落したりすることは餘りに心なきわざである、零細な一冊子と雖も著者の苦心を考へる時は決して粗雜には取り扱へないものである、賣れゆきが惡くて所謂數ものとして冷遇された本が絶版になると漸々騰貴して定價の數倍を拂つても猶ほ且つ容易に手に入り難いものもある、國書解題が五圓そこらで何處の本屋にでも轉つてゐたこともあり、支那人名辭書が三圓五拾錢でも賣れなかつたこともあり、草書大辭典が二圓八拾錢で見切られた「こともあり、鏡と劍と玉が八拾錢位でいくらでも買へた時代があることは古本屋の記憶に新らしいことだがその頃と今とでは書物の本質的價値には何等の變りはない筈だが、古本屋が是等の本に對する敬意の拂ひ方は滑稽なほど違つてゐる。古本市で廢物のやうに虐待されてゐる本でもその道の人には相當役立つ本はいくらでもある、尤も著作の動機とその内容に於て毫も敬意を拂ふ必要のない駄本も少くはないが、相當に充實した内容を持ち乍ら賣れ行きが惡い

ために虐待されてゐる本も隨分少なくない、それ等薄命の本が次第に古本屋の手から屑屋の手に渡つて、何時の間にか市場に影を潜めてしまふと偶然の機會にその眞價が世に知られて今度は血眼になつて探し廻つても容易に手に入らないといふやうな現象はよくあることである、西鶴ものをはじめとして、古地圖や俳書の類や蘭學ものなどにはそんな例がいくらもある。

明治初年の文化を語る當時の刊行物が一部の人々の注意を喚起しだした此頃になつて見ると、今までざらにあると思つてゐたやうな本でもなか〳〵ないものである。一冊の雜誌でも內容のあるものは今賣れないからと言つて粗末に取り扱つてはならないそれが貴重品になることがないとは言へない。現に私は考古學雜誌の創刊號があつたら三圓でも五圓でも欲しいと思つて同業者に依賴して居るがなか〳〵手に入らない、明治二十年前後の文學雜誌その他の雜誌類はもう探すのに非常な苦心を要する、動物學雜誌、植物學雜誌、地質學雜誌、人類學雜誌等、學術雜誌の初期のものは探すのになか〳〵困難であることは誰でも經驗のあることと思ふ。

それから本の扱ひ方に就ても一言を費したいと思ふ、藏書家の中にも本を粗雜に取り扱ふ人が少くない、不うつりな藏書印をべた〳〵と押したり、惡筆で姓名を書き込んだりすることはよろしくないことは勿論だが書き入れなども有用な參考資料を名筆で書いてあるのは嬉しいけれども、惡戲半分のなぐり書きや和本に鉛筆又はインクで書き入れたものは殊更いやな氣持がする。古本屋の中には實に情けない程粗末に本を取り扱ふのが地方などにはよくあることだ、裏表紙の見返しに大きな拙い字で値段を書いたり明細帳番號や元價符牒を記入したり、價を書いた紙片を濃い糊で貼り付けたりしたのを見ると情けなくなることがある。香川縣や廣島縣では警察が嚴しく取り締つて古本をすつかり消毒させ消毒濟の印がなければ賣らせないといふ苛酷な法令を布いて紫スタンプを和本の珍書であらうが貴重品があらうが一切おかまいなしにべたべたと押して居るのは憤慨に堪へない、それ程にする位ならなぜ紙幣も一々消毒しないのかとその矛盾が腹立たしくなる。ほんとうに本を愛するものは題簽一つでも綴ぢ糸一筋でも大切に保存する位に本をいたはらなければならないと思ふ。

近頃同業者の間に藏書道樂が流行ることは嬉しい、荒木君のやうに特別の趣味から蒐集されることは望ましいことである、が單に絕版物を集めるとか系統もなく珍書稀覯書を集めるとかいふことも絕對に惡いとはいへないが一種の思惑のやうに見へて淺ましい氣持がする、却つてほんとうの研究家にとつては禍するやうな結果になる、むやみに値段をつりあげるといふやうな傾向になり易いからである。やはり自分の趣味から出發したものでなくてはほんとうのものではない。只一生本の賣買をして金を儲けてそれで滿足して死んでゆくといふのではあまりに淺ましいことではないか。「本を愛する心」は吾々が意義ある生活に入る一つの機緣であらねばならぬ。

（大正十四年三月七日稿）

▲新加入者 追加）
東區空堀通二丁目四四七

▲霞亭氏愛藏品賣立 二月廿七八日下見 三月一日入札にて南堀江書林俱樂部に於て渡邊

寄交換會が堀江書林俱樂部で開かれた
▲寄伐の家覗割會 同業者中の創作家ト

業界時言

◎

私が常に考へて居る二三の事を月報を通じて諸君に愬へて見たい。それは毎月報を見て感じる事で、いつも趣味的の記事が餘り多い爲めに、組合員の向上發展に關する有益な說話を觀る事が出來ない。實際此方面の筆陣を張る人がないのかも知れぬ、兎も角月報に對する組合員の態度は頗る冷淡である。尤も少數の努力者には感謝して置くが、大部分は評議員と編輯員の玩弄物位に「月報なんか在つても無くてもどうでも好い」更に痛痒を感じないと云つた態度である是れは實に間違つた事と思ふ。我大大阪に文化の先驅者たる同業者なれは今少し着眼を擴め、範を全國的に示し、理想の實現に努力したいのである。夫れには大多數の熱心なる努力に俟つものが多いと思ふ。然るに彼の月報第四號の「古物取締法に就て」の一文に對しても今日迄何等の反響共鳴もなきは甚だ遺憾である。尙ほ我大阪古書組合員一般が月報第四號の古本買入方法の「總て古本買入は葉書を發送し右葉書持參の場合現金を渡す方法」（詳細は同號參照）の實行を組合評議員會に質したいのである。

◎

次に古書組合事務所設置に就て、新本に於ける書林倶樂部（堀江橋）の如き物を設け樣と思ふと少なくも五萬圓位の金が必要であるが今の古書組合の財政では中々の大事業であるから當分の內は借家で辛棒する事である、（成るべく全市の中央に設ける事）市場關係の人々は痛切に其必要を感じつゝあるから事務所設置には大賛成だらうが他の人々は直接利害關係を及ぼさない爲め從つて此問題には冷淡である。私も今是と云ふ具體案を持つて居ないが、

一、借家で濟ますなれば茲に五千圓位の金があれば直ちに實行し得られる。また

二、地所附の家を買はんとするには先づ五百圓坪として（百坪）五萬圓の金が要る、假に一人當り千圓宛出資して五十人の賛成者を得なければならない。然し應募者は中々ないだろうと思ふ、若も應募者少數の場合は眞の賛成者だけの出資金と外債資金を借入れる事である、即ち農工銀行か其他の金融機關を利用する事で、勿論此場合賛成人とか株主は全部が連帶責任を以て右事業の進行に當らねばならぬ。

然し此事務所の權利は右人數のみで引受けるか或は全組合員の所有物とするか、此等或は右借入金及び出資金に對する負債の消却方法及び利子の生ずる樣事務所を有利に使用せしめる事等研究する問題が種々起つて來る。

◎

今一ツは從來の古物商取締規則は明治二十八年に設定せられた極めて古い法律で此法律の中には改廢すべき個所が多々あると思ふ、私は又多數の全國同業者諸君が痛切に改廢を希望して居る樣（生の見聞では）に考へ

る此法律改廢を具體化せんとするには唯に一都市位の同業者の勢力ではトテも物にならない、須く全國的に同業者なり、組合なり、專門家等に就ても比較研究の上、詮衡に詮衡を重ねて當局に請願することである。右條例改廢の事を當局に請願する準備として、全國の津々浦々迄も古本屋のある限り一都市町村に一個宛の組合を設立せしめて少くとも全國に四五十位の組合が設立したならば東京に聯合本部（目下新本の聯合本部の如き）を設けて、大々的團結の力を以て右の目的を達成せん事を望むのである。（域西生寄）

會旗寄附金（三回）發表

前號締切後會旗寄附金として御申越下されし芳名を左に錄す

金貳圓五拾錢也　日本橋　谷　本店

金貳圓宛
高津　白神鋭雄
幸町　田中理一
玉造　林春三郎

金壹圓宛
鯰江町　山内書店
天下茶屋　玉樹安造
鶴橋　加藤牧之助
大國町　大石繁太郎
福島　別所書店
市岡　正井增造
仝　藤野惣一郎
立賣堀　松山福松
泉尾　佐々木書店

小計金拾七圓五拾錢也
累計金貳百七圓六拾錢也

大阪古書組合　第一回懇親會豫記

懇親會は四月二十日
總會は五月中旬開催

（三月二十日日本橋倶樂部にて臨時役員會を開き出席十八名左の如く決定）

規約上に懇親會は毎年秋季に催すべき筈なるも、一般組合員の要望多き爲め本年に限り時日を聊か繰上げ擧行する事となり、尙前役員會にて總會及懇親會を共に開催することに議決せるも、それにては折角懇親會の團欒も長時間を要する總會の爲めに興醒めとなるやも計られずと、總會は五月中旬更めて開催することに決定せり

懇親會開催順序

一期日　四月二十日（晴雨不論）
一會場　寶塚（舊温泉寶山閣）
一集合　阪急電車梅田驛集合午前九時（勵行）以後は車賃御自辨
一晝餐　組合員御一名宛に限り用意す
一餘興　當日〇〇〇社中の餘興等あり
一家族　御同伴は乘車賃に限り割引の便宜あり、辨當は御携帶、

追て案内狀は改めて發送致すべくも大略以上の如く、懇親會に關する詳細御問合せは最寄各役員方へ照會ありたし

尙當日の部署は左の如く決定せり

受附係　村瀨（東區）倉地（西區）天牛（南區）松葉（北區）
案内係　井口、谷支
接待係　長谷川、林富、高尾、村井、奥田、森村
記錄係　高田
設備係　松本、木村、大伊

雜誌『難波津』の上天祭
一同參拜の後社務所樓上で神饌神酒等を授與、有志寄贈のパン（淺太りを祝福）を各自に分與し
嬉ぶべき原因と云つた事は稀であると」古今和漢淨に通じ書を披いた事に就ての興味ある講話

人事

▲新加入者

南區日本橋筋三丁目　外山與次郎

北區中之島三丁目大阪朝日新聞社内
朝日信用購買組合專務理事　遠藤文一郎

西成郡南濱一九二　吉竹安次

▲移轉

南區日本橋筋五丁目五二（たぬき書店）（元海老江）　高谷清

臨時立退　港區八幡屋町二〇八地
市電八幡屋元町停留所　村井文々堂

▲死亡

舊東區南農人町二丁目二四　田里淳三

氏は昨秋來宿痾の爲め郷里兵庫縣城崎郡日高村東構に於て專心養生されつゝありしが藥石遂に効なく去る二月末望み多き春秋を遺して長逝せらる年三十四哀惜の到りなり

▲類燒

南區南炭屋町（だるまや）木村助次郎

氏方では去る二月二十八日夕隣家某家より出火し、だるまや二階の一部を類燒せしのみにて大事に到らざりしが持退き防火の爲め商品は散佚或は水濡れとなりて被害は少なからず就中惜むべきは郷土趣味研究として氏が心血を濺がれたる「浪華津」は初號より合本せんと保存中の物全部を焦がして遂に或號迄は絕版となりたりと

▲第八回定例役員會

進行係　小石川、四方、島 伊
會計係　藤堂、森谷
餘興係　大石川、天牛

（三月六日）　於日本橋倶樂部

本年度に限り總會及び懇親會を合併し且つ春季に催すことに議決し、その期日を四月二十日とする。

寄附金に依る會旗はなるべく節約すべしとの説があつたが、本組合の標なれば出來るだけ立派なものにすべしとの説強く、前記懇親會までに作成せんことを、長谷川、倉地、高田木村の四評議員に托す。

第四回役員會に於て問題となりし、本組合の名稱變更説再燃し前記會旗及び門標等の作製については是非略稱に似たる從前の本組合名稱は不可なりとて、字句の穿鑿、常識、慣例等の種々議論百出討論の上、會旗門標等の公けの場合は「大阪古書籍商組合」の名稱を附し他の場合は、言ひよき「古書組合」の從前にしたがふことやうやくにして決す。

懇親會についての役員會は三月二十日として散會。

○出席　●欠席　△遅刻

	一	二	三	四	五	六	七	八	九
鹿田	○	○	○	○	○	○	○	○	｜
荒木	○	●	●	●	●	○	○	○	｜
藤堂	○	○	○	○	○	○	○	○	｜
長谷川	○	○	○	○	○	●	○	○	｜
伊藤靜	○	○	○	○	○	●	○	○	｜
村瀬	○	○	○	●	●	●	●	○	｜
大石川	○	○	●	○	○	○	○	○	｜
高田	●	●	○	○	○	○	●	○	｜
倉地	○	○	○	○	●	●	○	○	｜
小石川	○	○	○	●	○	○	○	○	｜
林富	○	○	●	○	●	●	○	○	｜
奥田善	●	●	●	●	●	●	●	●	｜
井口	○	○	○	●	●	○	○	○	｜
四方耕	○	○	○	○	●	○	○	○	｜
高尾	○	○	●	●	○	○	○	●	｜
木村嘉	●	○	○	○	○	○	○	○	｜
天牛	○	○	○	○	●	●	○	○	｜
谷支	○	○	○	●	○	○	○	○	｜
松本正	○	○	○	○	○	○	○	●	｜
森村	●	●	○	○	○	○	○	●	｜
村井	○	●	●	●	●	●	●	○	｜
伊藤一	○	○	○	○	○	○	○	○	｜
松葉	△	●	●	○	●	●	●	○	｜
森谷	●	○	○	○	○	○	○	○	｜

再び落丁本の處置に就て

月報第一號に落丁本の一文を掲載したるに其後郡部FA生京都謹爾生、京都SA生諸氏の御意見を寄せられ依て私は右三氏其他各方面同業者諸氏の意見を比較研究し良案と看做す左記の案を以て大阪古書組合側より卒先して實行せられたいのである大阪古書組合が之を實行すれば軈ては東京、名古屋、京都、神戸等の各組合へ通告を發し全國的に勵行されん事を勸告すれば宜いと思ふ

提　案

一、落丁本、缺點本を發見したる時は該品の奥附、發行年月日の左右上下の或個所を定め【落丁】たるスタンプを押捺する事

(註) 奥附頁に捺印する位置に就ては組合にて豫め定め置く事
又目次第一頁に押捺する說もあつたが我等同業者は書物を手にすると開卷第一に奥附を見る事が多いから目次第一頁や、本文第一頁よりも奥附の方が勝手がよい

二、右方法は各市、入札會等の出品より勵行せられたき事

個人にて發見の場合は各人の高潔なる商業の道德に基き必ず一冊たりとも勵行を缺かさぬ事

(註) 若し市會へ出品した自己の物品が落丁であつて市會側から右符號を捺印せられても不服は云へぬ事 (以上)

追て私は該問題を何日か評議員會に諮る心算であるが、評議員は僅か廿四人に過ぎない、直接に利害關係のある人は他の組合員全般である、其全組合員の多數が紙上に何等其贊否の說をも寄せられず、サテ實行となれば種々な紛糾も持ち上るだろう、夫れでは月報の使命を善用してゐない事になる。月報は各員の意見を忌憚なく披瀝する所である年一回の總會が待てない爲めに、月々起つて來る所の問題を處理すべき所論發表の機關であるから、徒らに趣味的文辭の領域に計り開放せず過半以上は會務の爲めに埋められん事を希望する終りに是迄御高說を賜つた、FA生謹爾生、SA生諸氏に對し謹で謝意を表して置く。(城西生)

大藏經の話 (一)

大　江　生

釋尊の五十年間機に應じ緣に隨て開道觀說せられし說法一切の經文を御入滅後佛弟子達が結集せられたる經文を網羅せる一大佛敎經典を大藏經と云ふ初め後漢の明帝永平七年(西紀六四)使を印度に遣し佛法を求めせしめらる仝十六年印度の僧等多數の經文を齎して洛陽に來れり、此れ支那に經典の到來せし始めなり以來歷朝の佛敎學者相次て飜譯に努力せられしが唐の大宗の時貞觀四年(西紀六三〇)玄奘三藏法師を印度に遣して貞觀十八年まで留學し佛敎を研究して莫大なる經文を得て唐に歸るこれより飜譯發刊する物續出して唐の玄宗帝の時には佛法益々隆盛となれり唐の開元十年(西紀七二二)僧智昇經論章疏を詮次し五千四十八卷の大敎を蒐集し世に發表す是れ大藏經定數とする初めなりと云ふ其の後譯出するもの著しく增加し來り宋の太祖開寶五年(西紀九七二)より仝十四

南區廣田町八九一　中村萬次郎〔治奇聞、新舊時代の材料とも看做すべき古書持へりき

年にして始めて大藏經を刊行すこれ大藏經として刊行の最初なりその後南宋嘉熙三年（西紀一二三九）安吉州思溪にて雕刻しこれを宋藏思溪版といふまた淳祐年間（西紀一二三九）高麗王高宗六千五百八十九卷を開板す今朝鮮に現版存す後ち元の世相至元十六年（西紀一二七九）六千十七卷を開版してこれを元藏と云ふ更に明に至り明の成宗永樂十八年（西紀一四二〇）南京北京に於て刻成せしむこれを明の南藏北藏といふまた明の達觀德清の人々は明の萬曆十七年（西紀一五八九）六千七百七十一卷刻成刊行すこれを方冊藏といふ我國にては早くより佛法渡來して寫經を行はるゝ者ありしが經文の刊行は永延元年（西紀九八七）宋本渡來したるより續出刊行見るを得たり以來各地に佛敎書の刊行有りしが我國にて大藏經を始めて刊行せしは三代將軍德川家光公が天海僧上に命じて木活字を以て慶安二年（西紀一六四八）刻成發刊せしむこれを天海版大藏經六千三百三十三卷なり

木公雜記（二）

見佳書子

◎

四書注釋異本書類の數が四百十一あることを知つてゐますか。四書現存書目を見ると、四書の內、大學のみの注釋書の古本異本が二百二あり中庸は九十九、孟子が百四十九、そして論語が三百四十一の多きに及んで居ります。その合計七百九十一に前記四書注釋を入れ、更に合刻古寫本等の百八十五を入れゝば實にその數は一千三百八十七種類の多數にのぼるのであります。

私達の商賣が如何に多岐多端であるかは思ひ半ばに過るのでありますす趣味の上から言つても深々として盡きざるものがあるかはりに學び究むるべきものゝ幾多存せられてゐることを知るのです。入り易くして達し難しとは蓋し、わが古本屋のことを言ふのでせう。

◎

古本屋用語の中の「ヒネリ本」のヒネリの語義は、ヒネクリ。ヒネクリの變化、卽ち一冊の本をヒネクリつゝ賣る意（N氏の說）と、ヒネリは捻りで、顧客の購買心を捻出する意（T氏の說）といふ兩說を去る席上、かたはらにゐて面白く拜聽しました。だが、私の愚考する處では、尋常でない、あたりまへでない本といふ意味だと思ひます。古い小唄の中に

あじよだか當世ひねりがはやる客と女郎衆の機嫌きづまも逆さ竹。（長唄、角兵衛）

〇〇〇

女郎衆が機嫌をとるのがあたりまへだのに、客が女郎の機嫌をとる逆さことがはやるといふ意味で、こゝでもひねりといふ言葉が、普通でないあたりまへでない意を證してゐます

次號豫告

〇古本雜話噂聞書（續）　文一郎生
〇大藏經の話（續）　大江生
〇書店と古本屋　乙宗生
〇古本市會の今昔　永樂町人

コシヨグラブ

（投稿歡迎）

▲第七號所載「この頃の事」この頃になく欣しく拜見仕り候。とりわけ市會のことについては同感の至りに御座候、もう少し市會と古書組合との提携あつて市會を我々のみのもの、即ち古書組合員のみのものに致したきものに候、從前なれば「何故の古書組合員ぞ」の感が市會へ出かける度に思はれることにて、秩序きな狀を嘆き申し候（松の人）▲本紙も號を逐ふて益々堅實に、記事の精選、内容の充實、歴然たるものあり深く編輯諸兄の勞を多とす▲市會に出席し得る者は同業者のみと思ひしに然らざる事る前號「此頃の事」によつて始めて知る、吾乍ら迂濶なりしかな同業者以外の者を市會へ出入せしむるてふ事は市價の攪亂を意味せずや先月北區某市會にて不當價格にせり上けたる紛爭事件はそも何を語る▲「よらしむべし知らしむべからず」是昔の政治の要諦なりきされど又以て商道の眞髓たらずんばあらず古書月報を顧客へ配布する事に反對する所以此處に存す▲吾等の斯界に入りし當時市場への出席すら尙皆鑑札を携帶したり、（露天商入ッ…）落丁本は惜し氣もなく不細工なる記號を捺して堂々周知せしめたり然も今何の態ぞ！須らく市會共通の嚴密なる規約を制定して斯界道德の向上發展を計ると共に組合員諸氏の反省を望むもの也（以上五稿FA生）▲ふとした事から病魔に襲はれた田里君は六ケ月前から專心に故國に於て加養に勉めて一時快方を傳へられたが春寒い二月の下旬に卅四歲を名殘りにして長逝した君を知る同業者の人々は餘りにその短かい生を憐んだ僅か五ケ年間に五千有餘の金を貯めて他日の雄飛に供へた手腕も遂に空しくなつた、聞けば老祖母の最愛の孫らしかつたが君の訃は祖母の天壽を短かくする事だろう……

▲古書月報の卷末に記載せる役員會の欠席簿初めは面白いと思つたが今日に到つて見ると頗る面白くない。白點黑點が殖えてくると丸で角力の勝負付を見ているようで厭味がある、別けて連續欠席者の何かの事故の爲めに心ならずもその意を果さざるとすれば誠に氣の毒の至りだこう云ふ事は陰に供にて公表せざるを宜しき樣に思ふが如何にや、却て編輯者諸氏の一考を煩したい▲古書月報も號を重ねて頗る面目を一新したは嬉しい每號執筆さるゝ各員の努力を感謝すると共に尙此有益なる記事を續載されん事を希ふ（以上三稿乙の字）▲前月の月報「此頃の事」に市場は古本屋の學校だといふ言葉がありますが、今日、その市場を學校としての眞劍な氣持で來てゐる人が幾人あるかをうたがひます。且つ。市場の主催者が果して、學校として教師としての立場にゐることを自覺してゐる人が何人あるかをうたがひます（M）

大正十四年四月一日第八號發行 發行兼編輯人 松本正治 發行所 大阪市南區日本橋南詰（公立社書店内）大阪古書組合事務所

大正拾四年五月一日發行　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第九號）

大正十四年四月二十日

大阪古書籍商組合　第一回懇親會

於寶塚（舊溫泉）寶山閣

大々的盛會裡に擧行

大正十四年四月二十日……それは組合員一般が期待した我大阪古書組合第一回懇親會當日であつた、惠まれた天候は春光麗らかに午前九時阪急梅田驛集合と云ふ發表であつたのに定刻前から三々伍々家族或は同業を誘ひ合した組合員は驛頭に現れた、準備整ふや各自に乘車劵等を手渡して順次に寶塚へと繰込んだのである

沿道各所 では桃も櫻も今を盛りと咲き亂れて、野も山も里も今春の酣である、肌の輕さを感じつゝ爽快なる心地、醉へる思ひで寶塚の人となつた。武庫川の清流を渉つて舊溫泉前

寶山閣 が當日の懇親會場である玄關には新調の組合旗翩翻と會員高田君の「大阪古書籍商組合懇親會場」の張出が墨痕鮮かに人を引附けるやうである、階下大廣間を開放して正面には餘興場として舞臺が設けられてある。片方の欄干に倚ると清流を隔てゝ新溫泉の白煙がクッキリと松林の中に聳へ恰も寶塚の町を睥睨するかのやうである、遠く近く中山、池田、箕面の山々は淡靄に模糊と霞んで、礒を亘る微風は蕩然と吹くのであつた。時移る程に、さしも曠々とした會場も立錐の餘地なきまで老若男女、色とり〳〵に百花繚亂たる如く埋められて仕舞つた。時はよしと鳴物の音と共に當日特に招聘した某社中の落語、手品、輕口等の

餘興數番 が開かれた。其半ばにして組合長鹿田靜七氏壇に現れ挨拶を述べられた、即ち

本日は御多忙中にも拘はらず斯く多數の御來會を得ましたは我々役員一同誠に光榮とする所であります。
當組合も昨年八月設立以來熱心なる組合員の努力に依りまして今日では既に二百有餘名の組合會員を擁し最も親密なる態度を以つて各方面の事業も其緒に就き漸次完備せんとするものがあります、今後益々此態度を持續して當組合の爲めに盡されん事を只管御願する次第でありま す、又本日は準備萬端甚だ不行屆の點ばかりでありますが、御寛容を願ひ、好天氣でもありますから此一日をゆる〳〵御清遊あらん事を祈ります、聊か述べて御挨拶に代へる次第であります。

と滿場の喝采裡に降壇、次に副組長藤堂卓氏は

曩に皆様の熱心なる御盡力御寄附を仰ぎました所の本組合會旗も此程漸く出來上りまして、今日此意義ある記念すべき我大阪古書組合第一回の懇親會席上に錦上更に花を添へる事を得ましたに就ては我々一同衷心より謝意を表するものであります、それから曾て本組合の顧問辯護士として御願を申した井上正義氏を御照會いたします。

と氏を麾くと、井上氏登壇して一場の挨拶があつた。終つて役員幹旋の下に來會者一同に晝餐を供し、和氣靄々の裡に酒盃の交換が始

第九回 定例役員會

（四月六日） 於日本橋倶樂部

前回決定したる懇親會の件につき、會場調査委員の報告を受け、且つ各部の打合せ等を爲す、尙別稿記載の會旗及門標等の竣成報告等を聞きて散會、例に依り出席者は左の如し、因に左の出席表も紙面漸く狹隘を感ずる折柄今回限徹廢する事にせり。

○出席 ●欠席 △遲刻

	一	二	三	四	五	六	七	八	九
鹿田	○	○	○	○	○	○	○	○	○
荒木	○	●	●	●	●	○	○	○	○
藤堂	○	○	○	○	○	○	○	○	○
長谷川	○	○	○	○	○	●	○	○	○
伊藤靜	○	○	○	○	○	●	○	○	○
村瀨	○	○	○	●	●	●	●	○	●
大石川	○	○	●	○	○	○	○	○	○
高田	●	●	○	○	○	○	●	○	○
倉地	○	○	○	○	●	●	○	○	○
小石川	○	○	○	●	○	○	○	○	○
林富	○	○	●	○	●	●	○	○	●
奥田善	●	●	●	●	●	●	●	●	●
井口	○	○	○	●	●	○	○	○	○
四方耕	○	○	○	○	●	○	○	○	○
高尾	○	○	●	●	○	○	○	●	●
木村嘉	●	○	○	○	○	○	○	○	○

『大阪に關する書籍展覽會』

などゝ云ふ珍書もあり、「なにはどら」「葵氏艶譜」等新町の游里については最も貴重にして稀み得た近來稀に見る雅會であつた、來觀者數百名知名の學者文人も多く見にてゐた。

まる、此間餘興は引續いて開かれて笑聲竭くる事なくかくて午後一時過ぎ漸くにして餘興終ると共に、森谷氏再び立ち、懇親會閉會の旨を告げて各自の自由行動を宣し茲に芽出度く今日の會合は十二分の歡を盡して終つたのである。

それから新温泉の**一大樂園**に菊五郎を觀る者多く、或は箕面方面に回遊する人もあつて、永い春の一日を心行くまでに行樂の爲めに利用されたのである。因に當日**寫眞班**として組合員トミヤ書店主楠本氏が別載の寫眞數葉を撮影せられた。第二面は會場寶山閣の玄關前で（右から林富藏氏、高尾彦四郎氏）第三頁の分は會場大廣間の一部で餘興開演中の光景である

天牛	谷支	松本正	森村	村井	伊藤一	松葉	森谷
○	○	○	●	○	○	△	●
○	○	○	●	●	○	●	○
○	○	○	○	●	○	●	○
○	●	○	○	●	○	○	○
●	○	○	○	●	○	●	○
●	○	○	○	●	○	●	○
○	○	○	○	●	○	●	○
○	○	●	●	○	○	○	○
○	○	○	●	●	○	●	○

▲組合會旗收支報告

本組合の會旗調製の議起るや各方面より多大の御芳情を寄せられ曩に漸く是が調製を見、去る懇親會席上に燦然たる光輝を放ち我組合の前途を祝福するかの觀があつた、記して大方諸彦に謝意を表するものである、今其收支決算を報告せば

▲收　入

一金貳百拾參圓六拾錢也　寄附金總計

▲支　出

一金壹百四拾壹圓八拾錢也　會旗一組附屬共

一金拾貳圓五拾錢也　小旗十本

一金六圓六拾錢也　法被二枚

一金八圓七拾錢也　はがき百九十枚印刷共

合計百六十九圓六拾錢也

差引金四拾四圓也　殘金

追て此殘金は本組合一般會計へ繰入るゝ事となつた

日本古記錄の歐譯年表

一八五一　佛像圖彙　ホッフマン氏
此中の諸佛に關したる記錄を獨逸語によつて翻譯せらる。

一八五五　繪本豊臣勳功記　ベー・ド・フオサリユー氏
本書をフランス語にて解說し、之れに分解的標註を施した。

一八七一　平家物語　ツレワチニ氏
本書の一部をフランス語に翻譯した。

一八七三　神功皇后紀　サラヂン氏
フランス語に翻譯す。

一八七三　萬葉集　フヒツマイヤア氏
第四の一部を獨逸語に譯したものウイン出版。

一八七三　繪馬の手本　プイニ氏
伊太利語に譯せられた。

一八七五　國史略　バーヌッフ氏
フランス語に譯せられた。

一八七五　日本百將傳　ヴアランチヱニ氏
フランス語に譯せらる。

一八七五　太閤記　レオン・ド・ロニー氏
フランス語に譯せる。

一八七五　太平記　ヴアランチエニ氏
イタリー語に譯せられた。ヴアランチエニ氏はこれを「十四世紀に於ける日本歷史」中より拔萃せらる。

一八七八　今は昔物語　ノチエンチニ氏
イタリー語に譯せられ、圖表を添へてその解釋を容易ならしめてゐる。

一八七八　日本外史　小倉氏
本書は一八七八―一八九〇に至る間にフランス語に抄譯せらる。

一八八〇　日本上代の詩歌　チヤンブレン氏
萬葉集の長短歌を主として、古今集謠曲等を英譯したもの。

一八八〇　古事記　メチニコッフ氏
古事記の一部をフランス語に譯されたもの尙同氏の註釋及序論が添へられてある。

一八八一　前賢故實
本書の拔抄を英譯して、一八八一―一八八二に至る間のクリザンテーマム第一卷、第二卷に出づ。その人名は第一卷、藤原隆房「一九一頁」小野篁「一〇九頁」藤原保昌「一七二頁」源賴信「三〇三頁」畫師良秀「三九一頁」第二卷、菟道稚郎子「三〇九頁」

一八八三　古事記　チヤンバーバレ氏
英譯、この翻譯には最重要なる同氏の序論及多くの註釋がある。

一八八三　古事記　レオン・ド・ロニー氏
佛譯。

一八八三　徒然草　エビー氏
英語に依つて抄譯さる。

一八八五　和泉式部日記　ブッツマイエル氏
獨譯、本文は片假名及羅馬字を用ひ、且つ處々に註解を入れたもの

一八八九　蓮如上人御文書　ツルーブ氏
蓮如上人の傳記と共に英譯されしもの。

一八九二　日本紀　フローレンツ氏
獨譯。

一九〇四　最明寺　ファロット氏
獨譯。

會場變更披露

新會場　日本橋一丁目交叉點北辻東　日本橋倶樂部

出品　一點壹圓以上の品に限る事

たします

大藏經の話（二）

大江生

又鐵眼禪師は黄檗山寶藏院に於て寛文四年（西紀一六六四）より工を起し苦心の結果淨財を得て元和元年まで十八年間を費して卷數六千九百三十卷冊數二千〇九十四冊を刻成獨力刊行し廣く世に行ふ此の大事業を遂行せし鐵眼禪師も偉大なる哉、次に明治十三年より五ヶ年を費して東京弘敎書院に於て靖國紀念として活字を以を發刊し縮刷大藏經と稱す、更に明治三十三年京都藏經書院に於て明版大藏經を非常なる努力を以て改刻し訓點大藏といふ、又東京國民文庫刊行會は大正十年國譯大藏經刊行せり尤も重要なる經文全部網羅す、次に東京高楠順次郎氏は梵文對照大藏經を大正十二年より發刊しつゝあり。

目下現在せる漢字一切經は左の如し

宋藏　南宋嘉熙三年　安吉州思溪宋刊　卷數五千九百十六卷　宋板

麗藏　南宋淳祐元年高麗國王高宗刊　卷數六千五百八十九卷　高麗板

元藏　元至元十六年　元世相刊　卷數六千〇十七卷　元板

方冊藏　明萬暦十七年　明達觀德清刊　卷數六千七百七十一卷　明板

天海版藏經　慶安二年　德川家光刊　卷數六千三百三十三卷　木活版

黄檗藏經　天和元年　寶藏院鐵眼禪師刊　卷數六千九百三十卷　冊數二千〇九十四冊

縮刷大藏經　明治十七年東京弘敎書院刊　卷數八千五百三十四卷　活字版　冊數四百十八冊外目錄

訓點大藏經麗明對校　京都藏經書院刊　卷數六千九百九十一卷　活字版　冊數三百四十七冊明治三十三年刊

國譯大藏經　大正十年東京國民文庫刊行會　和裝百十六冊　洋裝二十九冊

以上この處に大藏經は巴利語、西藏語、滿州語、蒙古語、あり梵語は湮滅してなし。

以上大藏經の梗概なり足らさる所大方識者に御敎示を待つ。（終り）

人事

▲新加入

東區清水谷西ノ町三一〇　上田松之助

東成區猪飼野町八二五御幸橋西詰　伊東龍雄

北區天神橋六丁目阪神電車終點西入　黑部音次郎

南區日本橋筋五丁目二十五番地　上田爲助

住吉區天下茶屋町巽天阪谷支店　武内善一

天王寺區勝山通三丁目（のけし）　池田十良

港區石田町二丁目一四文泉堂　中川みち子

住吉區天王寺町七六　堀田與一郎

▲脱退

西區九條通三丁目角　山中政二郎

▲廢業

港區三條通三（フミヤ）　中村清三郎

氏は去る三月限り古本部のみ廢業

▲其後の會旗寄附金申込

前號締切後に於ける會旗の寄附金申込は左の如し

金參圓　九之助橋　森　俊雄

金貳圓　西區三條通　中村清三郎

金壹圓　西區三軒家　高橋　要

小計金六圓也

累計金貳百拾參圓六拾錢也

古本雜話噂聞書（二）

文一郎 述

露肆

私は北京に於ける或る日の隆福寺の縁日の露肆の賑ひを想起する毎に未だに異國的な回想にひたるのであつた。廣くもない隆福寺の境内にぎつしりとつまつた露肆は、呉服、織物、雜具、飲食類の日用品から、古道具、古器類の種々の店がならべられる。それがすべて國特有の色を出して、私達エトランゼにとつて好奇的な心持を誘はずにはおかない。元來、この隆福寺街は外城に於ける琉璃廠に等しく、古本屋の數多く集つてゐる所で、文奎堂、鏡古堂等と云ふ北京きつての古本屋もあつて、隆福寺の縁日の日など、殊更賑ひを呈するのであつた。

國が異つても人の心は同じである南歐の古都羅馬の露肆の有樣を知りたい人達はアンデルゼンの「即興詩人」を繙くといゝ

「或る日ピアッツァ、ナヲネを漫歩して、積み疊ねたる柑子、地に委ねたる鐵の器、破衣、その外いろ／＼の骨董を列ねたる露肆の側に、古書古畫を賣るものあるを見き、こゝに畢しき戲畫あれば、かしこに及を胸に貫きたる聖母の圖あり、似も通はぬものゝ伍をなしたる中に、ふとメタスタジオが詩集一巻我目にとまりぬ、――幾個の銅錢もて買ふべくば、この一巻見逃すべきものならねども「パオロ」一つ手離さんはいと惜しとおもひぬ。價を論ずれ共成らざりしかば、思ひあきらめて立ち去らんとしたる時、一書の題簽に「デ井ナ、コメヂア、デ、ダンテ」(ダンテ神曲)と云へるあるを見出しつ、嗚呼これこそは我がために、善惡二途の知識の木になりたる、禁斷の果なれ。われはメタスタジオの集を擲ちて、ダンテの書を握りつ、さるに哀きかなこの果は我手の屆かぬ枝になりたりその價は二「パオリ」なりき。露肆の主人は、壹錢も引かずといふに、わが銀錢は掌中に熱すれども、二つにはならず。主人、こは伊太利第一の書なり、世界第一の詩なりと稱へておのれが知りたる限のダンテの名譽を說き出しつ、ハッバス、ダァダァには無下にいひけたれたるダンテの名譽を。露肆の主人のいふやう、この巻は一葉ごとに一塲の說教なり、これを書きしは、かう／＼しき預言者にて、その指すかたに向ひて往くものは、地獄の火焰を踏み破りて、天堂に抵らんとす、若き華主よ、君はまだ此書を讀み給ひし事なきなるべし、然らずば君一「スクウド」をも惜み給はぬならん、二「パオリ」は言ふに足らざる錢なり。それにて生涯讀み厭くことなき、伊太利第一の書を藏することを得給はゞ、實にこよなき幸ならずや。(歐外譯初版上巻七七頁)

糸されていとゝ古本まけしやされ
ひやうしぬけては買もかはれず

これは順慶町の夜店の古本屋を詠んだ一首で「狂哥夜光玉」と云ふ小形一冊本に載つてゐる。一名「順慶町夜

類にして、大阪の地誌書として最も古き「芦分船」「難波雀」の類から、前人未見の「難波十觀」
ひかぬものなく／＼ぎし昔の郷土に朱にそして亡んで行つた浪華情調を、心行くまでなつかし

店百首」一如棗亭栗洞翁遺詠、棗内亭眉米補助追加、文化十二年十月吉旦狂哥書林浪花中橋筋瓦町南江入千里亭扇屋利助板、繪九圖入、畫者は敬之、翁遠、孔寅等である。

攝津名所圖會に「順慶町の夕市は四時たへせず、夕暮より萬燈てらし、種々の品を飾りて、東は堺筋、西は新町橋まで、兩側尺地もなく連りける、これを見んとて往かへりて群をなす」とある。

序に一二この中にあるエキゾテックな歌を抜いてみやう

黑船や庄兵衛もなき新町の橋詰へちよといつるたはこや

ともし火に一しほ夜のひかりそへたまとあさむく硝子(ビードロ)や見せ

書店(ふるみせ)と古本屋

乙宗生

店番の徒然に古い日記を繰つて見た霜の厚い冬の朝、まだ明け切らない夏の曉、時候のよい春や秋、市の立つその日、三々伍々に天王寺の書店に買物の爲めに集う人々は、古本屋を初めとして古帽子屋、古鐵、古着古服、古傘さては古い靴屋の類まで…………。

近くは市内の各所から遠くは八尾平野、住吉堺邊から、屑屋が日頃買集めた品の大販賣所まだ夜の明け切らない内から車に滿載して流れ込む、五臺六臺と車の着く度に待構えた一群が。まだ荷物をほどかない内から山の如に集まつて僅かな者でもあれば喧嘩でもしかねない勢で……氣の弱い者は一寸手出しも出來ない始末時間の經つに從つて、天王寺南門外から道路に沿ふて庚申樣の境内まですきまもなく並んだ大百貨店、汚ならしい古着、古シャツ、古タビから百般の器物その間を馳せ廻つて右に左に何か掘出し者をと血眼の各商人物凄くも亦珍らしい光景である。

大道を中心に南北の此廣場に渦を卷く古本屋の數がざつと十四五名、土屋、富山、四方、村瀨、中村、藤井、小嶋のおつさん田中、佐々木と云ふお定連に見知らぬ人が七八人時々松屋町の谷川の爺やら鹿田の熊はんの顏も時に見えた、早い者はもう風呂敷に七分方、運惡くまだ一冊も手に當らない人もある、連中の內で田中は隨分古くから此ひる店にきて居るので競買の渦中にも平然として、常に優秀なる手腕を發揮した。

帝文十二三冊、和本一口、洋書一山等シバ／＼彼が手中に收められて、さすがに古き歷史を有する丈と感嘆せしめた、いつ頃だつたか覺えないが私は南門を下つた斜路の處で初めて見出した、歌麿の彩色繪本上下、少しキズがあるが七圓と云はれて本は兎に角、その價格に驚いて手放した。

今は本屋を止めている小林が我事のやうに惜しがつて馬鹿やな……馬鹿やな……と幾度もなく罵つた、悲慘な滑稽もある。

藤井が西鶴の(題忘る)五冊本を驚くような安價で買ふたのもまだ記憶に新らしい、奈良繪本で味を〆た、私は扇地紙に書いた奈良繪を買ふて四苦八苦の末危く損失を免がれた事もあつた。

梅嶺の百花畫譜や木活版、コロタイ

フの美術書、古い江戸や大阪地圖等一市毎に誰れ彼れの手に渡つて笑つたり笑はれたり、怒つたり惜しまれたり、種々な滑稽が演ぜられた、人が一度調べた後から意外の古書が掘出されたり、山と積れた本の內に一部も此と云ふ物が出なかつた事も時時目にし耳にした。

日覆の綱が蜘蛛の巣の如に道路上に交叉されて道傍の安うなぎ屋のくし燒が油こい匂を漂す時分になると、一人去り二人去りて黒人の一團は瀬次に引上げて行く、意外な獲物にはしやぐもの、豫期せぬ不漁に呟くもの……………。

仁王門の前で荷物を整理して買つた品を品評していると同じ方向に戻る同業者の人が集まる、やがて連立つて色々な談しに大笑しながらお極りの如に六萬躰町の虎の餅へ這入る、これはいつの市でもお極りだつた。

その後、いつとはなしに私や村瀬は行かなくなつたが品物はめつきり少くなつたらしい模樣だ、四方君は相變らず月四回の市に行くそうだが近頃の景況を聞いても見なかつた(終)

大正十四年五月一日第九號發行 發行兼編輯人松本正治 發行所大阪市南區日本橋南詰(公立社書店內)大阪古書籍商組合事務所

約三十年間無病に暮した健康法

毎朝十分間の冷水摩擦で――

組合員 田中信太郎寄

本誌に衛生思想の如き事柄を掲げるのは聊か脱線的の感があるが、是れは自分が三十年間無病健全に經過した實驗談であるから、餘白を藉りて同業者諸氏に此福音を頒ちたいと思ふ。

第一 毎朝必らず冷水摩擦を行ふ事

右は起床後夜着の儘で小形のバケツに水を容れ洗面しつゝ頭部に濺き之を布きとり直ちに肌を脫ぎ兩股首筋胴部脊中等を擦摩し後ち片足づゝバケツに浸して足裏から腿裏の(約一尺四五寸の間)間を幾回となく痛く摩擦する但し腹部から腰廻りは略してもよい然し酒を好む人、三十歲以下の青年、生來持病ある人等は實行不可能かも知れぬ、尙是れを初めて着手するには五六月の頃から始めるがよかろう、餘り炎暑の時からでは後日の繼續が至難である。

第二 昨日來下腹(腸內)に蠢動しある物質を翌朝必らず排泄する事に勤める

右は起床後摩擦の先き必らず厠に行くべしである然るに生理上体溫の高低又は飲食の加減にて或は秘便し又は下痢等を催す事がある若し秘便する時は一寸横に臥て臍下左側(小腸)の上部を左の手を延はして何回となく押へてその用をするがよい又た下痢を催す時は唯減食して体溫を保つ事である。

第三 過飲食房事に注意「夕飯後は必ず步行する事」眼病及び腫を未然に防ぐ事

眼は毎朝洗面の時何回となく手早く洗滌する又た腫の芽しあると思つた時は入浴中に潰して置く事を常に心懸けると宜い。

さて同業者諸氏も知らるゝ如く自分は齡ひ已に六十歲であるが前半三十歲迄は誠に虛弱であつたが右勵行後今日迄は未だ壹服の藥餌を用ひた事なく至極健全に暮して居る事は自分として欣喜に堪へない次第であるから諸君も之の無價な無酬の自然の藥石健康法を勵行せられて健全なる天命を完ふせらるべしである。

大正拾四年六月一日發行

大阪古書組合月報

大阪古書籍商組合事務所發行。

（第十號）

店頭の買入は須く人物の觀察にあり

乙宗生

古物商取締規則と云ふ、法文の範圍中に店頭の買入を制せられつゝある我業界に對して、それが救濟策として月報第四號に「古物取締法に就て」の論文を發表せられ、更に第八號に城西氏が組合員の冷淡なる態度を難ぜられ、今日に到るも何の反響共鳴もなきを遺憾とせられた、

實に發表以來四ヶ月に渡る今日、未だ何等の反響もなき事を思ふと、此方法の尚不十分である事が想像される、店頭での買入と盜難品の報告等に就ては商會設立以來の懸案である私はその事に就て斷へず相當の注意と其方法を考究しているが今に何等の良策も見當らない、時偶ま第四號の一文を讀み此方法が專ら東京方面に於て演ぜられつゝあるとの事を聞き一書を本鄕の是公氏に飛して尋ね合した。ところが、その返翰は私をして失望せしめた。その文に……

此方法よりも人物觀察を先にして大抵それにて濟すを常とし賣客も當業者も葉書持參の煩雜を故意に避けつゝあり云々

こ文中の人物觀察はすでに一般同業者の執りつゝある人を見て買へとの事であるが、これとても見解によつては頗る至難の樣であるが、相當なる修練を積む時は却つて容易に行はれて效果はむしろ確實なるを覺へしめる、過去七年間未だ一回も警察の門戶を潜つた事がない私はその確實と自身が思つている人物觀察の方法を以て、買入を行ふている。

事實葉書持參の方法は未だそれが爲めに使用した事がないので何等是に對して可否の論は下されないが人物の觀察には相當の努力を拂つている

一、凡て盜難品は一二部より三四部迄の處が多い
二、本は比較的に美しい
三、新刊雜誌は顏馴染以外の人には謝絕する事
四、品物に對しては最も淡泊たる

べき事

五、出來得る丈け注意をする事

右之五項の内別して四と五を確守すれば危險の度が比較的に少い。

四五年以前に某知名書店の工業書を萬引して、市内の古書店を軒別に賣歩いた四十未滿の男があつたが、容貌と云ひ服裝と云ひその態度と云ひ一點の疑問をはさむ餘地ないにも係はらず、その書が僅か一部であるに疑ひて買はなかつた、當時私の人物觀察眼の可なり發達して堂に入れるものとして友人と共に笑つた事があつた。

私は藥書持參現金引換の方法、實行談の報告を乞ひ、更に人物觀察を益々修練して併せ用ひるの日あるを會員諸氏に希ふのである。

懷德堂の概要

大江生

德川時代に於ける大阪唯一の町人學校なりし懷德堂は中井甃菴先生が大阪商人(三星屋)中村睦峰(道明寺屋)富永芳春(舟橋屋)長崎克之(備前屋)吉田盈枝(鴻池)山中宗古の五有志と相謀りて諸同志を糾合し三宅石菴先生を聘し尼ヶ崎町一丁目北側(現に日本生命のある地)に創立せし者にして時に享保九年なり仝十一年幕府の許を得てより大阪學問所とも稱せられ石菴先生の歿後は中井甃菴先生學主となり五井蘭洲先生教鞭を執ること前後二十年なり甃菴の子中井竹山懷德堂學主となり中井履軒(水哉館)塾主二先生崛起してより大阪の文學は雄を海内に示し文化の淵原として學業も盛んなりしが維新に際して世態一變し學校も亦廢したりしが創立より廢校に至るまで絃誦の聲を絕えざりし明治元年山階宮晃親王台臨あらせられ明治二年政府の學制改革と共に廢校まで實に百四十六年なり竹山履軒二先生の門人多數出でて海内に擴り一世の文化を振興せり斯る大儒を我が大阪に出だしゝは豐太閤の大阪城にも讓らざる偉蹟と謂ふべし依りて我々後人は最も深く懷德堂に感銘せざるべからず。

其後四十一年を經て明治四十三年一月十九日大阪人文會に於て懷德堂師儒先生のために公祭を擧行すべしとの議を決し仝年男爵住友吉左衛門氏を會頭に小山健三氏を副會頭に推し懷德堂記念會成立す仝四十四年一月五日懷德堂記念祭を執行し尙併せて記念刊行、學術講演、遺物展覽の三事を行ふ、翌四十五年剩餘金を基本財產として法人組織の懷德堂を創立し天囚西村時彥、永田仁助其他の人を理事とし仝年八月財團法人懷德堂記念會を許可せらる、偶ま此事天聽に達し大正三年三月金貳百圓を下賜せられ仝四年六月大阪府より府立博物場西北隅の地をして無償貸與を受け仝五年九月工を竣り十月十五日開堂式を擧行す以來日夜聖賢の書を講義せり大阪人たる我々は此學校を利用し德性の涵養學術の研究に勤むべきなり。

懷德堂は文科講義、定日講義、定期講演の三種あり即ち

▲素讀科　課　目

毎週月木土曜日午後一時より六時迄　孝經　四書

▲定日講義課目

韓非子　詩經
毎週月曜日午後七時より午後九時迄
先哲叢談　理學宗傳
毎週水曜日午後七時より午後九時迄
萬葉集　周易程傳（易經）
毎週木曜日午後七時より午後九時迄

▲文科講義課目

カントプロレゴメナ（ハックス英記）
朱子學節要
第一第三金曜日午後六時より仝九時迄
レーベンウンドビルワケイ
杜詩偶評
第二第四金曜日午後六時より仝九時迄

▲定期講演現行題目

家庭教育　野上文學博士
日本に於ける社會生活の發達　西田文學博士
毎土曜日午後七時より仝九時迄　聽講隨意
論語講義　松山教授
毎週日曜日午前九時より仝十時迄　聽講隨意
所在地東區豐後町府立博物場内懐徳堂（完）

▲緊急報告▼

▲組合費集金に就て・・・・・・　隔月一回宛其他諸種の集金に參上いたしますが、其節店主御不在の爲め早速と集金の出來ないやうな事がありますが、それでは手數が懸つて困りますから、以後は御主人が居られずとも集金出來得るやう御傳聲を願つて置きます

▲名簿作製に就て・・・・・・　大都市編成に依り新區名町名番地の變更其他移轉、電話架設等前名簿作製以後に於ける諸種變更の向は來る六月末日迄に御一報下さるやう若し御申出なき分は變更ないものと看做して舊名簿通りを掲載いたします

▲組合員章看板配布・・・・・・　今回新たに制定調製せる金屬製組合員章看板を全般に配布いたしましたから店頭又は軒先きの判り易い場所へ御掲示を願ひます。

▲第十回定例役員會

（五月六日）　於新日本橋俱樂部

道頓堀に面した舊日本橋俱樂部の會場は四月限にて引拂ひ、新に得たる俱樂部に於ける役員會は當日を以つて嚆矢とされた、第二回定時總會準備打合せと云ふので役員大半の出席を見た、劈頭第一先づ我古書組合の第二回定時總會の日時を五月十五日會場を新日本橋俱樂部等と定め、議案として組合員に非ざれば定期市會に立寄り賣買する事を得ずとなし、評議員選擧區域を增區の爲め第一區として東區、東成區、住吉區、第二區として西區、港區、第三區として南區、天王寺區、西成區、浪速區、第四區として北區、此花區、東淀川區、西淀川區の以上四分割として選擧する事、其他二三を協議して散會した、出席者二十名

定例役員會は今後毎月十日午後六時新日本橋俱樂部に於て開催いたします。

五月十五日＝於新日本橋倶樂部

大阪古書籍商組合

第二回定時總會

出席者僅に五十四名＝頗る平靜なりし

五月十五日我大阪古書籍商組合では創立以後初めての組合總會を開く事になつた、會場は前回役員會から變更した日本橋一丁目交叉點北辻東入新日本橋倶樂部に於てゞある。

午前十時頃から役員が參集して會場周圍の壁間に當日討議すべき規約の改正やら、諸種の協議事項を貼出し全市の組合員名簿を書き連ね、增區に依る役員選擧區域說明の地圖等を掲げて一般組合員の來集を待つた

▲總會開會

午後二時近く漸く組合員現在總數二百二十一名に對する五分の一以上の出席を見たので、總會開會を宣し、先づ組合長鹿田靜七氏の挨拶より始まる。

本日開催いたしまする組合總會は元來滿一ヶ年とすれば來る七月に開催すべき筈なれど昨年の創立期が遲かつた爲め、多少繰上げて本年は五月、來年は一月と順次繰上げ以後規約通り毎年必ず一月に開催する事にいたしたいと思ひます。

本組合も創立以來日尙ほ淺きにも拘はらず萬事着々と共緒に就き漸を追ふて整頓に赴きますは實に各位の深甚なる御聲援と役員方の熱誠なる努力の賜と感謝いたす次第であります就ては月報編輯の事につきましても毎號多大なる努力に依りまして號を重ねる事既に十號組合の一機關として各方面に非常なる便宜を得て居ります、之が衝に當られる方々に對して厚く御禮を申述べると同時に今後益々發行編輯上に盡瘁あらん事を希ふ者であります。

次に松本正治氏會務即ち第一回より第十回に到る毎會役員會の協議及決議事項等を報告し終りに月報編輯につき各位より今一層の御後援を得て組合に對し有益なる意見を發表せられん事を祈り組合の前途をして益々光輝あらしめたいと希望して、副組長藤堂卓氏と交る。藤堂氏は即ち會計報告として、當日投票用紙に連讀して印刷したる會計報告を更めて朗讀する所があつた。

▲會計報告（第二回）（自大正十三年八月十六日 至大正十四年五月六日）

▲收入之部

項目	金額
前期殘金	二二円四二
組合加入金	一一二、〇〇
會費	七七三、五〇
市會々費	六一、三〇
月報廣告料	三六、〇〇
會旗過剩金	四四、〇〇

計金 壹千〇四拾九圓貳拾貳錢也

▲支出之部

項目	金額
會員名簿印刷代	四〇円〇〇
月報印刷及郵送料	二二〇、一五
集金手數料	五七、三六
會旗圖案賞金	一〇、〇〇
懇親會入費	六二九、二一
雜費	七一、四三

計金　壹千〇貳拾八圓拾五錢也
差引金貳拾壹圓〇七錢也　現在殘金

然して森谷清松氏、之より諸種の協議を開くにつき議長を役員より推擧するか、一般投票に仰ぐかを諮りたるに、役員に一任する旨に依つて組合長鹿田靜七氏を擧げたるも辭退して肯かれず、副組長荒木伊兵衛氏又同じく、遂に副組長藤堂卓氏を推して議長として議事を進行した。

▲組合規約改正の件

（イ）第八條ニ左ノ一項ヲ加フル事
　組合員ニ非ラザレバ書籍定期市會ニ立合ヒ賣買ヲ爲ス事ヲ得ズ
　　但シ他府縣同業者ハ此限リニアラズ

右の條項に就ては既に入會せる一般組合員に對しては吾人を擁護する爲には右の條項を設くるを可となし又夜店業者及極めて短期間此業界の人たらんとする如き人の爲めには餘り束縛に過ぐるとなし、議論百出容易に決し難く、遂に條文を設置して内容細目の活用及猶豫期間等は新役員に附托とした。

（ロ）第十六條評議員選擧區域中區分ヲ增區ノ爲メ別表ノ如クス
　即チ第一區東區、東成區、住吉區
　　第二區西區、港區
　　第三區南區、天王寺區、西成區、浪速區
　　第四區北區、此花區、東淀川區、西淀川區

右案件は殆ど異議なく可決、次に

▲協議事項

（イ）店頭買入方法ヲ今一層嚴重ニ取扱フべキ事

該案は所謂内面的協約にして同業者中の申合せに過ぎざれど、是れを實施するには全般的に徹底せしめざれば効果なく、又或る方面に於ては死活問題とも看るべき重大案件なればとて種々討論折衝の末　是又新役員に附托して進行。

（ロ）組合員弔事ノ際ハ會旗ヲ貸與シ弔意ヲ表スル事
　（註）家族ノ場合ハ御申出ニ依リ會旗ヲ貸與ス香奠ハ兩者共贈ラズ

（ハ）組合事務所ヲ以後當日本橋倶樂部内ニ置ク事

以上二件は異議なく通過して、最後に一般組合員よりの希望事項を聽く
一、落丁本始末ノ件（役員附托）
一、支店及出張所ハ經營者ガ同一人ナリトモ又同區ニ開業スルトモ一戸毎ニ一人格トシテ組合ニ入會スべキ事（役員附托）

以上二項の決定希望ありたるに依つて協議の結果總べて役員附托となり次に

▲評議員の改選

に移る、選擧は前記揭示の通り四區制となし各員投票即時開票の結果左の如し

第一區（東區、東成區、住吉區）投票數　六　票
六票　長谷川健治　　五票　高田幸三郎
五票　鹿田靜七　　五票　伊藤靜三
五票　石川嘉助　　三票　村瀬藤吉
次點　　三票　中尾熊太郎

第二區（西區、港區）投票數　八　票
七票　石川留吉　　六票　井口公次郎
六票　荒木伊兵衛　　五票　林　宮藏
六票　倉地健一　　四票　千野勝太郎

次點　四票　下津　秀勝

第三區（南區、天王寺區、西成區、浪速區）投票數三十票

廿三票　藤堂　卓　十七票　四方耕太郎
十九票　高尾彦四郎　十七票　天牛新一郎
十八票　木村　喜藏　十六票　杉山　末吉
次點　十二票　谷　末吉

第四區（北區、此花區、東淀川區、西淀川區）投票數十四票

十三票　森村　援松　十二票　森谷　清松
十三票　松本　正治　九　票　村井治郎吉
十三票　伊藤　一男　五　票　松葉　重造
次點　四　票　黒部善次郎

終つて役員の互選を行ひたるに

組　長　鹿田　靜七　副組長　荒木伊兵衛
全　藤堂　卓

の三氏再選せられ、此間前役員と變りたる顔振れは西區の千野氏と南區の杉山氏のみ他は全部重任となつた。それから

▲組長の就任挨拶

等があり、副組長荒木氏等も御辭退申し居るに拘はらず又々此椅子に留るを心苦しく思ふ旨述べられ。最後に森谷氏立ちて是れにて本日の總會を閉會する旨を告げて芽出度茲に第二回の總會を終る。開會前多少の波瀾を豫期せられたるに反し頗る平靜裡に散會したのである。

大藏經の話（補遺）

大江生

前號締切後訂正原稿を寄せられたるも間に合はず遺憾ながら本號に掲げて補遺となす（編者）

▲文章の部黄檗山藏經の次に挿入

又清の高宗乾隆三年（西紀一七三八）我國の元文三年支那北京にて重修大藏經七千二百四十五卷を刊行せり清の大藏經と云ふ　龍記直解序

▲文章の部にて最終の訓点大藏經の次に挿入

尚又中華民國紀元二年（西紀一九一三）支那上海版頻伽精舎刊行卷數八千四百十六卷册數四百十四册發行せり

▲總括した部の内黄檗山版大藏經の次に挿入

重修大藏經　清乾隆三年北京於て刊
龍記直解序卷數七千二百四十五卷

▲總括した部訓点大藏經の次に挿入

大藏經支那上海版中華民國紀元二年
頻伽精舎刊　卷數八千四百十六卷
册數四百十四册

▲大江生君へ　藏經はまだ文政頃に芝增上寺で木活版に組まれし事（未完のまゝ）▲東京博文館にて六號活字にて發行三册刊行（未完）▲上海商印書館の續藏再刊中のものも有之候（名古屋其中堂生）

人　事

▲新加入者

住吉區天王寺町二〇〇五　中川　正一
東區空堀通二丁目四九ノ十一　松葉　貫次郎

▲弔　事

組合員西區南堀江一番町岩永久太郎氏厳父久吉氏去る五月十六日御死去同十七日葬送せらる組合よりは會旗を捧げて弔意を表せり

▲大毎案内廣告特約

曩に大阪朝日新聞社廣告部と特約したる本組合は今回更に大阪毎日新聞案内廣告欄掲載方及其料金の割引を左記の如く西區京町堀三丁目倣蟻社廣告係と特約相成りたれば御用の方は本組合員なる旨を表示し直接倣蟻社へ御申込ありたし

三行案内廣告　五分引
五行案内廣告　一割引

▲會旗寄附金追加　其後申込まれたる分は

金壹圓五拾錢　松屋町　京林　藤吉

きの櫻も春の名殘を惜むかのやうで、午後に入り快晴になつたから落附いて名勝舊蹟を探

△倶樂部十日合併
日本橋倶樂部とが豫てから合併談が進行して

古本雜話噂聞書（三）

文一郎述

古本相場

古本の相場について、少しでも興味をお持ちの方には、次の一章は、大變面白くお讀み下さる事が出來ませう。殊に日々そのものを手にかけてゐる私達には、愈々今昔の感を深くする所であります。今この一文を特に掲載さして戴きまして、騷々と騰貴して止まない今の古本界についての御感想を皆樣から承りたいと存じます。

全文は載せて明治二十三年五月二十一日の國民新聞紙上にあります執筆されし人は元祿堂主人

○

いつとなく古本の値高くなりて、此頃は金乏しきが常なる我等に買へなくなりたり。近松の「關八州繫馬」は杜撰な活版本なれば五六錢なれど原本は貳圓五拾錢なりと。例の名代の「五枚羽子板」は參圓位にて其他「國性爺」「曾我會稽山」等は壹圓前後なりとか。西鶴ものはそれほどにあらねど、男色大鑑は六圓位にして一代女は過つる日五圓にて求める人ありき。通貨の相場違ふ今日なれば昔日に比ぶるは無理なれど對照して知り給はぬ人々に示し參らす。

	元の値段	今の相場
御伽婢子六冊	四匁五分	一圓位
西鶴置土産五冊	二匁八分	一圓六十錢
俗つれ〴〵五冊	二匁八分	二圓
擧白集八冊	八匁	一圓
七人比丘尼三冊	一匁八分	一圓六十錢
人倫訓蒙圖彙七冊	四匁	六圓位
江戸名所記七冊	五匁	二圓六十錢
江戸惣鹿子八冊	五匁	三圓位
醒睡笑三冊	二匁	一圓三十錢
好色三代男五冊	三匁	六圓位
好色訓蒙圖彙三冊	一匁二分	二圓五十錢
諸國五代女五冊	二匁六分	三圓位

以上は元祿前後の板なるが近き時にては春町の「金々先生榮華夢」或は「高慢齋行脚日記」等は五拾錢、京傳の洒落本は參拾錢前後、源内の「褥合戰」初刊は壹圓五拾錢位との事、北齋歌麿の錦繪を五拾錢も出して欲しがる世間なれば、斯る法外なる相場にも關はらず買ふものあらんが、實傑作とも尊むべきは人の知らざるものに多し、全じ作者にても評判高きものに秀逸なるは少なし、左れば盲目千人目明千人の珍重する書物欲しきにあらねば、法外の値段も更に恨まねど、元祿の南風に吹かれて蒸せたる人の多きに驚きぬ。西鶴門左の有がたき處かある「一代女」買ふ錢あらば、ダーウヰンの人種起源論かカントのクリチック、オブ、ピユア、リーズンでも求めて讀むべし發明する處「一代男」や「五枚羽子板」の比ならんや。流行に浮かされて机の上に解りもせぬ元祿本並べて諸事西鶴と近松ぞかしなぞと首を振つて「西鶴冥土物語」や「小夜嵐」に感服する方樣も多し兎角浮世は斯うしたものか、思切て高くなれ古本相場！

毎號原稿締切を十五日限りといたしますから奮つて御投稿あらん事を

左記欠本（御持合セノ方御通知ナ乞フ）

漢籍國字解　戰國策　上
國文叢書　竹取物語
日本鑛石學　銀篇
大英百科全書（十一版）インデアンペーパー第四卷
英文學叢書　第二期
大日本隨筆索引
山田孝雄著　日本文法論
國文註釋全集內祝詞講義　下
有明堂文庫、膝栗毛、三國志中、狂言記上
支那省別全誌　十、十一、十五、十八
本居全集　三卷
興亡史論　近代建國史、歐州思想史

▲雜誌

外交時報　大正元年二年三年
史學雜誌　明治二十四年
工業化學雜誌　初號ヨリ明治三十四年迄
鐵と鋼　大正十一年6、9
思潮　三年全部　四年　十二號
經濟論叢　六年　七月　八月
社會問題研究　十七卷２６十八卷１２３５６
斯文　二十四冊目
第二編　２、６

法律評論　四卷　11　14　16　23
五卷全部　七卷　9　12　13　14　15　16
八卷全部　九卷　10　25　十卷　24　十一卷　30
大審院判決錄　第一輯第二輯第十九輯　7　21　25　26　27　28　29　第二十輯ヨリ第二十三輯總括目錄第一卷
官報　初號ヨリ揃

東京市神田區南神保町十
北澤本店

大正十四年六月一日第十號發行　發行兼編輯人松本正治　發行所大阪市南區日本橋南詰（公立社書店內）大阪古書籍商組合事務所

大正拾四年七月一日發行　　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第十一號）

梅雨窓漫言

近頃の醜聞

極く最近の事、某官廳の圖書館とか或る大會社の文庫とかの藏書が頻頻として盗難に罹る、それで被害者が氣附いて大阪の警察本部へ此由を訴へた處が、本部でも對手は官廳でもあり、是を不問に附する譯にもならぬ、寧ろ威信にも拘はる事であるから、草を分けても搜し出さんと、被害品の謄寫版摺何百枚かを用意して市内の本屋と言はず市會までも虱殺しに徹底的調査を始めた。

すると各方面から追々に此贓品買入の端緒が開けて其過半はハキダシに依つて品物が揃つたさうであるが、何しろ百科が二組に高値の法律判例學説總攬が十冊とか其他大部の特殊な物で、各冊に大きな藏書印を消した痕があるのを店頭に於ていとも易々と買つた店もあるのらしい。聞けば取調べに際して百科の如きものを徹頭徹尾店頭にて賣却したと言ひ張つたので、頭を擲られたとか擲られないとか。醜い沙汰ではないか、一冊拾圓で買つた百科の端本が二十圓にも三十圓にも將た五十圓にも翼が生へて賣れるのであるから北叟笑んだであらうが、それはホンの束の間問屋はサウ安くは卸ろさない。威嚇された上に、轉々と渉り歩いた百科の端本の行方、それを血眼で以つてさがし歩く時の氣持は何んとも云へぬ悲哀さを感せずには居られない。何もコンナ危ぶない橋を渡らなくとも金儲けは正々堂々と出來る筈だ。其上に第三者第四者に對しても各市會などにも尠からず累を及ぼして、實に醜態の極みだ。

然し他人事ではない、明日は我身に振りかゝる問題かも知れぬ、これにつけても一日も早く過日來問題となつて居る店頭買入制限協定を決行されなければならぬ筈だ。

目錄の流行
附變態市會

震災直後の古本界スバラしい景氣の頃は、買つてさい置けば儲かつた本の形ちさへ備へて居れば猫も杓子も賣れる事に味をシメて、誰れもが飛附き買ひをやつたものだ。我等もその御多分に漏れぬ一人であるが、

各自が背負ひ込んだ高値品が今に於て悲ひを爲して二進も三進も動きが取れなくなつた。今是れ等の本を金に替えるには一方ならぬ苦勞が必要だ。それのみならず世間の各方面が死んだやうな不印と來ては堪まらない、トテも店に蹲まつて居ては商賣にならない、コチラから出懸けて行かなければと考へた末の古書販賣目錄で、此頃はハヤるはハヤるは東京では三十軒大阪でも既に十指を以つて數へられるだらう、然し此目錄も到底是れで停止すべくもない、まだ續々其邊で發行に取懸てつ居る人もあるから。それから目錄ではないが即賣會とも市會ともつかぬものに素人を混せでの交換會が出來て居る、聞けば却々の好景氣ださうな、素人に便宜を計る爲だと御逃げにならうが此れも畢竟ずるに不景氣不賣の副產物と見て大過なしだ。

素人賣立會

茲に言ふ素人は本に不明な意味に於ける素人ではない、寧ろ玄人ハダシと云ふ或る部門に對しては精通し過ざる程精通した御人だが、未だ本屋としての列に這入つて居られない點に於ける素人樣である。其人々が多年の蒐集品を此頃續々として個人賣立會の名の下に、先の顧客は賣手となり、賣込んだ商賣人が今度は客となつて、御馳走政策に釣られ、何んだか主客顚倒の怪態なものが出來上る。曾つては仲間同志が皆其人を宛て込んで金魚か鯉が一つの麩をコツクやうに、其人宛の本が一度市場に現はれるや、寄つてタカつて競り合ふた、マアそれでもよい一時は我々社會を霑はして臭れた事もあるのだから餘り惡口も云へまいが、何んだか氣ザだね、其我々に儲けさした口錢を一度にアベコベに利子を附けて自分の方に撒き上げやうなんて、先生達はいふだらう都合があるから賣り立てるのだと又た讀んで了つたから、或は飽きが來たからと、然し一カドの權威ある藏書家とか蒐集家を以つて任ずるあの御人がソンナ薄弱な理由で世の中は通用するだらうか。實際にコンな理由なれば承知も出來ようが。讀む爲めの本でもなく愛玩の意味でもなく、書籍そのものを御素人からも一種の商品として思惑買をせられて、揚句の果てには逆捻ぢの口錢とはやりきれない、モ少し品位ある藏書家が欲しいものだ。然し何も其人達は儲けやうと思つて賣立てないと云ふかも知れないが、マサカ損を仕樣とも思つて居ないだらう、可成なら儲けたいのが心理だそれを高く買つてコナす腕もないのに徒らに雷同するから自然に値が狂騰するのである、戒めよ同業者！罪は寧ろコチラにあるかも知れない。

▲▲組合宛郵便▲▲
▲▲物は左記へ▲▲

總會決議に依り大阪古書籍商組合事務所を左記へ移しましたから今後郵便物等の御發送は同所宛御發送を願ひます

南區日本橋一丁目交叉點北辻東入

大阪古書籍商組合事務所

盗難品に就て

乙　宗　生

時候のせいか、不景氣の原因か、いづれの店でも頻々たる盜難に悩まされている。私の店では五月のかゝりから、印度哲學宗教史、近世商業簿記精義、ギルムヘルムマイスタの菊版、小說螢艸、六月の講談倶樂部、更に六月二日に言志四錄詳解全く堪つた者でない。

尙氣の付かぬ被害は若干あるだろうと思ふ。店頭の買入に頭を悩まし、連續的な此被害に氣を遣ふ、昨年の秋山田美妙の大辭典を上卷だけ盜まれ四五日置て御叮嚀にも亦下卷を持つて行かれた。

あの厖大な書籍をと、友人に笑はれたが、いつのまに盜んで行くのか、その姿どころか影さえも見出し得ないに到つては馬鹿らしさを通り越して滑稽な感がある。

店頭の買入に就ては（古物取締法には違反である）前號に發表した案で豫防なし得る自信があるが、この頻々たる盜難に就ては全く手が附けられない、盗らるゝと云ふだけどこかに陷缺した處があるのではないかと云ふ問ひがあるとすれば殘念ながら私は十分注意していると云ふとは斷言なし得ない、買入の時と違ひ却つて先方から一擧一動を注意せらるゝと云ふ妙な立場になるので、とてもやないが助からない。

要するに盜者か顧客かの觀察の未だ十分でないのは事實である、これが豫防法としては遺憾ながら今の處何等の對策もない只僅かに尙一層の注意を加ふる位のものだが、こんなと位ひで滿足し得べきでないのは勿論である。

盜んだ品は自分の讀書慾を充たすと云ふより、胃でも滿たす方がよいかすぐどこかへ賣飛してしまう物が多い、コウした品を買つた、同業者こそ災難である、發覺と同時に呼出し狀に接するは周知の事實である、故に盜難品を全市の同業者諸氏に迅速に報知する方法を取らば買入の豫防ともなり、同時に犯人を知る事が出來て一擧兩得であるが、是が報知の困難なるは云ふ迄もない。

私は全會員に此事項を計つて最も簡單なる方法を共に研究して見たいと思ふ

それに就て私は古書月報の欄外に盜難品報告欄を設けてはどうかとも思ふ、只遺憾な事には全會員がこれを知るには十五日乃至一ケ月半後の事である、是が爲めに果して効果あるや否やを疑問とするのであるが……全然無効と云ふ譯でもなかろうと思ふ、尙ほ盜難報告を市場に掲示する案もあるが、（はがき）一枚書くのでさへ面倒なるものなれば、是が掲示取扱の忠實を期す事は到底出來ないだろう。

更に盜難品の發見せる場合に相互間辨償の論等もあるが他日に讓り取敢へず此稿を起して諸氏に訴ふ所以である。

原稿の締切は毎月十五日限りでありますから精々早く御投稿を願ひます

人事

▲新加入者

港區市岡町二六三　石川松二郎
南區日本橋筋五丁目三五　八馬英一
港區北境川町四丁目九　日野信一郎
西區北堀江上通二丁目三五　松永總之助

▲移轉

南區日本橋筋五丁目二七　小關治男

▲廢業

天王寺區吉野通二丁目　石井田勘三

▲死亡

天下茶屋　民衆閣主　山西孫兵衛

氏は昨秋來胃腸病に惱み自宅療養中であつたが捗しからず六月初旬今橋湯川胃腸病院へ入院最善の加養を試みたが効なく同月二十日病遽かに革まり同院中にて長逝せられた年二十六、君や再起の念切なるものがあつたらうに遂に歸らず哀惜の到りである、葬儀は翌二十一日午後三時阿部野にて執行せられ組合よりは會旗を捧げて弔意を表した

▲第十二回定例役員會

（六月十日）於新日本橋倶樂部

十日會閉會後午後七時から役員改選後第一回の役員會を開く、二人の新顏評議員も見へて先づ總會に役員附託となつて居た。

一、組合員ニ非ラサレバ書籍定期市會ニ立合ヒ賣買ヲ爲ス事ヲ得ズ但シ他府縣同業者ハ此限ニアラズ

の一文を組合規約第八條に追加する件を議したるに最早既定の事實となり居る件なるを以つて深き異議もなく、此際各員が未入會者を一人でも多く入會勸誘する事に申合せた店舗を有する者入會金五円同有せざる者及支店出張所の場合は金三円に決定次に重大案件と目されて居た、

一、店頭買入方法ヲ今一層嚴重ニ取扱フベキ事

に就ては其趣旨には殆ど大多數が賛成し居るも、其實行方法に就て種々議論を戰はしたる結果曾て月報第四號にも理想案として掲げたる、左の如き書式のハガキを發送し

拜啓本日貴殿より御賣拂ひに相成候處の○○○以下何冊買受代金御支拂可申上候間此書御持參御來店被下度右通知申上候也

○○書店

證

一金　也

○○書外　何冊

右は拙者所持品に候處貴殿へ賣却仕り其代金として正に受領仕候也

住所

姓名　印

と云つたもので書式には尚改善の餘地もあるが、此ハガキ持參者に始めに應對した金高を云はしめた上（でないと他の人物がハガキを持參して代金を騙られるやうな事があつてはならぬから）代金を支拂ふ、そして持參したハガキはカードとして保存する、事件が發生したならば其カードを調べれば本人自筆の證據が殘つて居る譯である、此外に店頭に掲示すべき貼紙を拵へ、組合規定に依りとか、其筋の嚴命に付とか云つて零細なる買物を回避し少し纒まつたものなれば前記のハガキを用ゐるか出張して住所を確かめた上買へば安全

である。最も自店で賣つものとか、住所の判然して居るものは適宜に處置すればよい筈である。大体斯くの如くに決定したが、尚此方法を實施する以前に一應官憲の諒解を得る必要があるので次回役員會までに組合辯護士をして其筋に申請する事に決めて十時頃散會した、近來にない緊張した役員會であつた。

次回役員會時日變更

次回七月役員會は暑中の事とて七月十五日午前九時（勵行可成涼しい中に）より新日本橋クラブに於て開催いたしますから御承知置き下さい

復興の神保町より

BS生

M兄

羅馬の廢趾をまのあたり見るやうなニコライ殿堂を右に眺めて、復興の神保町をさまよふ時、足はおのづから古本屋の前にたゝずみます。震災前の東京で永らくこゝら邊りを朝夕となく、徘徊した時を思ひ、今の變りはてた有樣には常に同情の心持を深めます。殊にその献身的な復興の努力の跡を見れば涙ぐましい迄の氣持に誘はれるのであります。

M兄

神田は元通り復興したと云ひます成程一寸表通を通つた丈では如何にも花々しく營業してゐます。併し私達が仔細に一軒宛その店内をのぞいて行くと深い痛手はまだ〳〵癒えさうにも見えません。店につめてゐるものを見ても新刊の古か、例の絶版だと稱ゐる程度のありふれたものが大部分で、豊富な藏書を以て全國の本屋を羨望さしたのは昔の夢となりました。

M兄

然し神保町通の兩側に軒を並べた數十軒の古本屋はとにかく偉觀たるを失いません。中にも松村、北澤、一誠堂等と云ふ一流どこは前にもまして盛大にやつて居られるのには感服させれずには居られません。

一日私は一誠堂の御主人に案内されてその横丁に新築された別館（陳列館）を見せていたゞきました。今度近々に又例の展覽會を開きますと云つてその準備に二三人がつききりで働いてゐられます。階上一杯につまれた和洋書の夥しい數には何處からどうして斯うも寄せて來られるものかと感心させられるのであります震災當時燒けた財布を懐ろにして大阪へやつて來られた時を想起して、今のこの盛大なる有樣を見ると、その必死の努力には少なからず敬さゝれる處があります。

M兄

神田の神保町が元の神田の神保町に復するのも決して遠い將來だとは思はれません。山の手や本郷邊りの古本屋に比して矢張り何處か潑溂たる氣風を見せてゐる神保町を一日も早く又東京の一名物たらしめたい願は私一人許りでないと信じます

もつと書きたい事は澤山ありますが長くなりますから次便に讓ります。

ではさよなら

（大正十四、六、十二）

古本雜話喰聞書（四）

古本目錄

文一郎述

由來愛書家に取つて堪らない程面白いものは古本——Second Hand Bockの目錄(カタログ)である。古本の目錄を讀むと色々な方面からの感興が湧く、好きで遣つて居る仕事や娯樂に關することで、記憶を喚起したり、想像を唆つたり、種々樣々な方法で其正直な貪慾心を如何にも氣持よく動かす。其の中には舊友があり、舊知があり、親しい題號があり、大變な履歷を持つてゐる本——有り振れた群小書籍の間に、獨り嶄然として群を抜いて居る高山を思はせるやうなものもある。さうかと思ふと、居候か乃至は足手纒としか見えないやうなヤクザなものもある。時間を經ても凋落しない本もあれば、時間を經ても成熟もせず、エラクもならないやうな本もある。生く可きの名を持ち乍ら、今も人から讀まれず、何時になつても讀まれさうにもない本もあれば、何處かに打消し難き活力あるが爲に、幾時代か續いてその生命を新たにして生きて居る本もある。そこには愛する本があり、好きな本があり、嫌ひな本があり、青春時代の伴侶であつた本もあれば、怖毛を振つて恐れた本もあり、それからやゝ年月を經た後の時代に於ても、教師であり、友達であつた本もあれば、何より嫌ひであつたやうなものもある。あゝ、古本目錄のページをめくつた時に喚起せらるゝ聯想のいぶかしさよ！ 苟くも歷史を知り、人間の思想を知るの人は、何人と雖もその瞬間に感動せられぬものはあるまい。多くの見慣れぬ、異樣な題號がある。是等の題號が、過去の世界の學問や、叡知上の方法や、忘れられたる事件や、今はその燃えた灰も冷えて仕舞つた辯難攻擊の火や、一致しなかつた哲學や神學や、信用を失つた歷史や、朽廢に歸した科學を如何に暗示するのであらう。その散文は、今日になつてはもう讀めないものであり、詩も我慢しきれないやうなものであるかも知れない。だがそれらの書籍は、一世紀、二世紀或は三世紀の星霜を經て、今は古本目錄の中に罷り出でゝ、殆ど諸君の云ふがまゝの値で、一言の下に直ちに諸君の所有とならんとして待ち構えて居るのである。

書籍目錄には多數の種類部門がある、蓋し書籍の世界にも、地方に國郡の區別があり、時代の區劃がありいろんな類別と、更に又それ等を細別したものもあり、これに應じて其目錄も區々であるからで、一目して諸君は其の導かれつゝある地方を知り、行く〳〵どんなものに出遇ふかを知ることが出來る。或は專ら印刷の古い書籍ばかりを集めたのもあり或は神學に、或は流行に、或は藝術に關するものばかりと云つたやうにこゝにも亦他の色々な場合に於けるが如く勞力の分配が行はれ、經驗と熟練とが、これなりあれなりの書籍

の一部門に向つて集中せられ、その結果往々にして一の目錄が優に重大な書史學的の價値と興味とを備うることがある。蒐集熱のある人々は、一の目錄と他の目錄と、其内容の區別のみならず、更に其の本の感じと知識とをも目錄によつて豫知することが出來る。同じ文學物の目錄の中にも、最近に流行つた小說の殘物の目錄だとか、乃至は常に見慣れ聽慣れてゐる何でもござれといつた賣物の目錄などゝはまるでかけ離れた別樣のものがある。予は始終そんな目錄を受取つて居るが、その中には本の解說が間違つて居るのもあり、言葉の綴りが間違つて居るのもあり、特に外國語などは滅茶〱になつてゐるので、どう見てもこの編纂者などは金物屋か農產物の目錄でも作つて居た方が柄に嵌つて居ると思はせるやうなものもある。最良の目錄になると恐しく精確なもので、いろんな點に於て專門家で熱中者である人の精神が現はれてゐる。其の人の、この仕事に對する特有な知識と、蒐書の事業を高めて藝術を献身の世界にまで擡げずんば已まざらんとする高潮せる感激とが見られるのである

（つゞく）

古本市の變遷とその環境（一）

永樂町人

（一）創成時代

古本の市が今日のやうに盛大になつて來たに就て、私等はいつ頃からこんな集合があつたものか、何う云ふ風に變遷して來たものかと云ふ事を温ねて見たいと思つて居る。

ある先輩の話によると、南久寶寺町心齋橋筋の前川善兵衛方で催して居たものが最も古い市會であるらしい、それは明治初年頃から始まつていつ頃迄續いたものか判らぬが。其頃心齋橋通りに殷盛を極めた古本屋連を土臺として、交換賣買の唯一の機關とせられて居た。此市會には古本屋は勿論新本屋も問屋も小賣屋も何等の差別なく集つて來たものらしい。今日は市の日だと云ふと朝から前川の番頭や小僧達が心齋橋筋界隈の同業者を片端から戸別訪問して出品を集めに廻る、そして夕方前に更めて『是れから市を始めますから早う御越しを』と云つた風に督促に歩いたもので、市は多く灯の點く頃から始められて、夜間に行つたものである。

其時分ランプはもうあつたが、電氣はまだ無かつた頃で、淨瑠璃をソリで語るやうに、セリ臺の兩脇には百目か五十目位の蠟燭を立てゝ市を羅つたさうである。市がハズんで買方が熱狂するやうな場面は今も昔も大した變りはないだらう、品物を放つたり受けたりするにはランプは危險じあるから蠟燭を使つたものか。

取引は總て次回市までの延取引で今頃こんな緩漫な習慣があつたら私等は一番に借大將になつてやるがと思ふ、それで場合に依つては賣方へは會主（前川）から立替へて先拂にして呉れるから、出方にも買方にも

便利で是れを見ても當時の前川の舞臺も大抵察し得られる、が勿論今から見れば金の高も低くかつた、一ト市に二百圓も出來れば大騷ぎをした頃の話である、斷つて置くが此話は明治二十年頃の話であるから。

此前川の市と相前後して存立して居たものに鹿田の市がある、心齋橋安土町南入、今の祭原食料品問屋の向い側邊りに鹿田松雲堂(今の組長)があつた。前川でも鹿田でも其頃の市は皆個人經營で今のやうな會員組織の市が出來たのは日清戰爭前後から生れた古典會でつた。

古典會は會員組織としての市會の嚆矢であつて、又現存大阪古本市中の最古のものである、其今日に到る間には多少の波瀾曲折もあつて、或時は脈搏のいさも稀薄に頻したやうな事もあつたが、兎にも角にも三十年間の歷史を有する記錄保持者である。古典會の創成時代は大石川、荒木伊兵衛、島町の伊藤(先代)長谷川熊造(今和歌山に在)田中貫(今空心町骨董屋)の五氏等が組織されたもので、會塲は安土町心齋橋東入北側今の伊藤萬の處に書林倶樂部があつて、それを使つて居たのである

前川の市と鹿田の市は共にセリ市で古典會は昔から椀伏せ、入札等の式を用ゐた、市と云ふよりも交換會であつたので、今も尙ほ入札式を廢さないのである。

コショクラブ

（投稿歡迎）

▲近頃或る方面に投ぜられた一石は意外に大なる波瀾を作つて宛も努濤の澎湃たるかの如きものがあつた、果然其渦中に捲き込まれたものは關係のあるものもないものも殆ど全市に亘る同業者であつて皆江之子島通ひをやつた、實に迷惑千萬な事だ▲然し物も取りやうで、さう腹も立つまい一時の迷惑は雨降つて地固まるとでも云はうか、此れに依つて普選促行ぢやないけれども店頭買入制限ハガキ發送の斷行が促進される譯だ▲聞けば震源地方面からは今迄多少の反對もあつたものが此ハガキ發送を至急に斷行して呉れ、全市が出來なければセメて日本橋界隈だけでも實施したいと訴へてゐるさうで笑止千萬▲それはよいとして大風一過、嵐の後に殘る面倒な問題が一つある、轉々當事者から第二第三第四と廻り歩いた品物の取戻し、或は無償提供とか、是れが賠償問題に就て暫くは又モメる事だらうと今から神氣に病んで居る人もあつた希ふらくは圓滿公平な解決に依つて惡例を後世に殘さないやうにして欲しいもの▲それから今度の一大事件紛爭の爲め自滅既に危ぶなかつた人もあるさうなが、それが事なく穩便に納まつたと云ふ處に光つた偉大な人々が動いて居る事を忘れてはならない、當事者たるもの大いに感謝すべきである。（六月廿六日ER生投）

大正十四年七月一日第十一號發行　發行兼編輯人　松本正治　發行所　大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東入　大阪古書籍商組合事務所

大正拾四年八月一日發行

大阪古書組合月報

大阪古書籍商組合事務所發行

（第十二號）

をり〳〵草

○七月十八日讀賣新聞の記事に東京古書籍商組合では古物取締規則（明治二十八年七月發布が餘りに古き法律で現今の時勢に適せざる故顧問辯護士と共に極力取締令の改正を運動して居ると云ふ事である。我大阪古書籍商組合も關西で右運動の先驅者となり近畿同業者を促して大いに此運動に參加（各都市の組合を）せしめ、東西相呼應し以て目的の貫徹を期せん爲め各評議員諸氏の活動を冀ふ次第である。由來該問題は我等同業者に取りては痛切なる利害關係の伴ふ問題であるから。

○店頭買入方法も評議員會で葉書買入の方法を以てする事に決したが組合員全般が此方法を極力勵行せん事を切望して已まない一方の店で確實に勵行して居つても他の店で勵行せなかつたならば所角の名案も反古になつて仕舞ふ。同業者の多數集合せる個所なご、は是非同一の歩調を取つて貰ひたい、尤も從來の習慣も有る事だから馴染の客等に就て（絶對的にも行くまい）臨機應變に一現の場合等は絶對に右方法を活用して貰ひたいのである。

○月報十一號所載の素人賣立會に就いて聊か申述べたい。古書月報と云ふ物は吾等同業者間の機關紙で素人には關係のないものだ、素人は即ち御客樣である、其御客樣の惡口は餘り感心しない。同業者の機關紙を素人に見せるのも惡いが月報を絶對的に同業者丈が見るものと思ふて左樣の記事を投稿した人も如何かと思ふ。素人樣が儲けて同業者が損をした樣に云ふか右の賣立で買つた品物は又同業者が儲けて賣て居るのだ、同業者が何の損をして賣るものか。又直段が狂騰云々と云ふ事は決して徒らに雷同して買進むのではない、大いに自信があつて買つて居るのだから。

○月報八號に「業界時言」の一文を投稿してから凡そ四ヶ月を經たが右に對する反響が何等月報に發表されないには驚いた。思ふて居ても文を草する事は不可能の人もあらう、又投稿が面倒で組合の總會や、規約や申合せが如何樣になるとも吾は關せず焉と極め込んで居る人達もある。自營に吸々たるのも宜いがチト組合を愛する心も持合せて欲しいものだ。此樣な有樣では組合の向上發展はトテモ難かしい。吾等の理想は中々前途遼遠と云ふべしである。（城西生）

店頭取引の可否に就て

組合の一分子

先般の總會に於て將た又組合機關月報に於て有爲なる先輩諸氏が多くもあらぬ腦漿を絞つて左思右想議論に議論を重ね愼重審議の結果店頭にての書物買取りは違法なり依つて端書を出して住所氏名を確めたる上代金を渡す方法にせよとかの事に大体決つたそうな。これが顧問辯護士迄の參加決議だとすれば其無爲無能に呆れざるを得ない。そんな事が發表せられて其れが實行を會員に强制履行せしむるとしたなれば自分で自分の首を絞める事になつてさなくても不振の業界を一層慘烈たらしめ惹いては古書組合の盛衰に影響しはせぬかと杞憂されるので聊か卑見を述べて隱れたる賢者の示敎を仰ぐ所以じある。

古本屋が店頭に於て商品を賣買するのは不法であらうか、免許營業として官廳から許可を受けて營業し古物商取締法及諸規則に依つて行動したる以上は何等其以上の手數をかけて端書云々のッラブルは其必要がないではなからうか。營業所たる店舖に於て書物を賣る事は何等差支ないとして其商品買入の一段になつて法文には住所氏名の分らぬ人、又は其品物の處分權のないものより買取りは禁止してあるが、住所氏名の分らぬ人でも其人をよく知つておる保證人あるとか又は警察官の口添へでもあれば買つて宜しいと條件的事項はあれど場所が必ずしも本人の住所に就てとか又は其住所に全行した上でなければとの禁止的條項がないではないか。よし念の爲めに葉書を出すとすれば、其れは持參者に處分權なきか又は住所氏名の不明の人だからと言ふ事になり此の原因あるに係らず取引すれば其れこそ法の違反を敢へてする事になり其副産物として其端書を拾つた人が持參すれば無權利者に金を支拂ふ事になりつまらぬ損失を蒙らねばならぬ。要するに吾人は古物商取締の諸規則にさへ違反せねば何等耻づる事はないではないか、それから吾人の遺憾に思ふのは此日新月歩の世に明治廿七八年頃に制定された古物商取締法其儘で現今迄維持されて居る事である、須らく新時代の要求に應ずる法令を作つて貰い度い事である、尙法文は其文字ゝ形式のみを以て論議す可きではなく其精神を沒却せない樣にして活かして働らかしたい、其れには此の法文の精神は成る可く故買、收受、牙保等の犯罪行爲なからしむる事と他面根本的に竊盜等の不正品の賣れ行きをなからしめ不正者の根絕を期するさ其に假りに不正品のあつた際には其道行徑路を分明ならしむる政策に外ならぬと思ふ、依之思ふに當局者に於ても枝葉の文句とか行爲よりも根本的に古書組合員各自の人格の向上を必要とし取締法第六、第七條は勿論帳簿等の整理を履行すれば萬一違反行爲あるとも其は些々たる手續上の錯誤に外ならずと思惟せらるゝではないか、要は人物本位にして商業道德の本義を尊守するのが第一肝要と思ふ。（大方諸君の待叱正）

夏枯れや秋冬を待つ古本屋

迎壹周年の辭

顧へば一歳の光陰夢の如く去つて七月廿六日は實に我組合成立滿一周年に相當す。成立以來組合員の熱誠なる庇護に依り、會務徐々其緒に就き、漸次整備せんとするは我々同人として誠に欣快に堪えざる次第なり。されど人間萬事塞翁馬の古諺の如く禍福時なく交々來り、我組合も動中靜あり、靜中又動なくんばあらず。個人的の得失と團体的の利害と、絶へず爭闘して停止する所を知らざる今の世に、猥りに大成の安逸を許さざるものあり。此時に當り先輩諸賢、些々たる少事に拘泥せず、慮を大局に廻らし、不備を改善し、我組合をして益々强固なる基礎の確立に勗められん事を祈りて已まず。

▲第十二回定例役員會

（七月十五日）於日本橋倶樂部

午前十時より役員會を開く、出席者二十名、前回決議したる店頭買入法に付き其筋の諒解を得る爲め組合顧問辯護士を煩はし申請方を依頼し置きたるに、大体其趣旨を賛する旨に接したれば、本日役員會に是等を報告し、時恰も某方面より頻りに店頭買入ハガキ發送方法の實施を慫慂し來る折柄、一日も早きを可とすとの説出で、愈茲に懸案解決して即時實行する事に決し、其準備を急ぐ事として散會、因みに之に關する組合規定ハガキ及び店頭貼出の組合申合狀等は印刷中なれば出來次第配布する事とし、其活用上に就ての疑問等は夫々最寄役員迄御問合せ願ひたし。

尙前號役員會記事中、新加入者の入會金を店舖を有する者五円●店舖を有せざる者及支店出張所の場合は金三円とありしは金貳円の誤植に付訂正す

次回役員會は暑中休會仕り重要事項あれば改めて其節通知可仕候

▲取締法改正運動

東京古書籍商組合にて

東京古書組合月報の報ずる所に依れば同組合は過日來屢々現行古物商取締法の現代に適せざるを難じ其改正運動に就て研究する所あり去る六月八日之が委員會を開き、

古物商取締法明治二十八年法律第十三號に於て一條乃至五條は異議なく、六條「古物商物品ヲ買受ケ若クハ交換セントスル時ハ賣主、讓渡主ニ於テ其物品ヲ有スル事ヲ確認シタル後之ヲ爲スヘシ」の項に於て樋川氏より用語の不適當實行不能、空文的規定に過ぎざる理由を以て改正必要說出で衆議一致、次に七條乃至十六條、第十八條乃至廿五條は異議なく第十七條「古物商買受ケ又ハ交換シタル物品ニシテ遺失物若クハ贓物ニ係ルトキハ營業者ヨリシタルト否トヲ問ハズ警察官ニ於テ之ヲ徵收シ被害者ニ還附スル事ヲ得云々」は全く善意にて買受けたる場合にも惡意又は情を知つて爲したると同様沒收せらるゝは條理に反するを以て最も改廢を要すべく更に取締法細則第十二條の規定の如き固より舊時代の成法にて現代の世情に適するものに非ず是亦大に改廢の要ありと述べ（以下略）

等種々審議研究する所あれど未だ具体的成案を得ざる模樣にて孰れ其中何等か確定的詳細を聞合せ改めて報告する考へなり

古本體讀（一）（禁轉載）

文一郎生

富士關係書目

日本之(ひのもとの)、山跡國乃(やまとのくにの)、鎭十方座神可聞(しづめともいますかみかも)、寶十方(たからとも)、成山可聞(なれるやまかも)、駿河有不盡能高峰者(するがなるふじのたかねは)、雖見不飽香聞(みれどあかぬかも)。（萬葉集卷三）

富士の靈峯は古來多くの詩歌傳説を殘した、萬葉人の和歌は千古の昔既に靈山の秘鑰を解いたものとして有名である。富士を吟じ、富士を描いた詩畵は數限りなくある。從つて富士に關する典籍類も多く殘存してゐる。これ等の解題を一册子とすること又容易であらう。こゝにはその中で刊本になつたものゝ主なるものを紹介したい。富士山愛好者の一讀を得ば幸甚

（一）富士の人穴草紙 一册 繪入寛永板、明暦四年板萬治四年板其他數板ある如し私の一見せしものにゑどり本あり京大所藏本は明暦四年板也

（二）富士山 二册 寛文頃板繪入假名草紙の一種

（三）諸國富士根元記 一册 一名國鎭記高田與清

（四）富嶽圖記 一册 村田允益

（五）富士野往來 一册 慶安五年板、正保板、天明四年板

（六）大山廻 富士詣 一册 十返舍と一九作 文政五年板

（七）富士山記 一册 林呂亮 文化中板

（八）富士山道しるべ 一册 玉蘭齋畵繪入横本

（九）富士淺間年中行事 一册

（一〇）不二の眞すかた 一册 蓬山亭板 奉書横大形

（一一）不盡、嶽志、駿城記 一册 羽倉用九漢文

（一二）富嶽游草 一册 筑前末永、活版大形本

（一三）富士餘飽 一册 池田喜太郎活字小本

（一四）百富士 四册 河村眠雪畵 明和四年板

（一五）富嶽百景 三册 北齋畵 天保中板

（一六）富士一覽記 一册 梅月堂宣阿 天保五年板

（一七）富士日記 一册 加茂季鷹 大家繪入

（一八）富士百首 一册 岩田宗祐

（一九）不二百首 一册 小林茂雄

（二〇）富士百首 一册 鳥越常正

（二一）狂歌百富士三郎 一册 夫丸富士詠

（二二）富士山百景狂歌集 一册 百景圖狂歌入小本

（二三）狂歌富士贊 一册 繪入小本

（二四）富士詣 一册 三千風 貞享三

（二五）不二紀行詩 一册 甲斐大藏快菴

（二六）富士兩道一覽圖 一折 貞秀彩色大圖

（二七）富士見十三州輿地全圖 一折大形

（二八）富士史 一册 三輪義照 上卷

（二九）富嶽史 一册 靜觀道人（曾田文甫）明治四一

（三〇）富士と足柄 一册 横井春野 大正二

（三一）不二山 一册 小島烏水 明治三八

（三二）富士山大觀 一册 同明治四〇

（三三）富士一周 一册 國府犀東、平福百穗明治四〇

（三四）富士山奇觀 一册 北隆館

（三五）富士案內 一册 野中至 明治三四

（三六）富士百景 一册 實業日本社 寫眞板大形 明治四五

（三七）富士登山の栞 一册 靜岡縣駿東郡教育會編 大正二

（三八）富士登山案內 一册 伴野孤月

（三九）靈山富士 一册 中谷竹藏

（四〇）富士山スケッチ 二帖 杉浦非水畵 附登嶽日記 明治四一

（四一）不盡畵集 一册 諸大家 富士山畵 影印

（四二）富士植帶論 一册 早田文藏 英文

（四三）富士山植物目錄 一册 梅村甚太郎明治三五

（四四）富士山植物誌 一册 同

（四五）富士山の自然界 一册 山梨縣編

（四六）富士行 一册 大町桂月

（以上）

古本市の變遷と（二）その環境

永樂町人

(一)即賣會濫觴

會員組織の市會（嚴密に云へは交換會だが便宜上市會と云ふ）としての嚆矢たる古典會が創成されたのは、前號に日清戰爭前後と書いたがそれは多少誤聞で、實は明治三十三四年頃から始まつたさうである。そして少なくも五六年の間は割方盛大に、安土町の舊書林集會所を借りて會場として居た。

其頃の一回市の出來高は前に云つた通り二百圓は出來なかつた。月四回位開催する爲めに借りる席料（四回にて）が僅に參圓と云ふから一回は七拾五錢にしか當らない。何事も今は十倍其時分は十分の一の懸隔のある事を思はねばならぬ。

それから間もなく日露戰爭が起つて一時は浦擣艦隊が津輕海峡を拔けて東京灣へ來襲したり、初瀨が沈んだとか、遂には皇軍に利のない某艦沈沒の報道などは士氣に拘はると云ふので發表せずに終つたり、日本人の氣は死んだやうになつて、旅順陷落の一日も早からん事を鶴首して待つて居た。其効あつてか三十八年の一月には旅順も漸く我軍の手に歸し、次いで、日本海々戰にも大捷して三十八年の秋頃から講和が提唱されたのである、―こんな事は何等本屋に關係のないやうな事ではあるが何商賣でも其時々の此世間の景氣につれて消長するものであるから本屋の景氣だつて矢張それに附隨して伸縮したのである。三十九年四十年と漸次世間は好景氣に回復して所謂泰平を謳歌した時代であつた。

恰度其頃此戰後の好景氣を利用して――と云ふと大層らしいが、古典會は其主催に依つて即賣會を開く事を世間へ發表した。何しろ即賣會といふものが始めて催されるのであるから、前景氣の素晴らしい事。日は何日であつたか、午前八時開會と云ふ通知なのに、當日は朝の夙うから會場（安土町書林集會所）前なる鹿田書店へ腕車が八九臺も横着けにせられて蓋開けを待つ數寄者が店頭に溢れて居た。

店頭夏枯

見住書子

朝夕にテントを深く下ろしめて店の閑なる夏となりにけり

夏さればいでいる人のうちたえて昨日も今日も賣れぬ店かも

店守りて疲れ覺える閑なれやただ目の前の扇風機の音

所謂警察事故あり江之子島にゆく

いちにんのぬすびと故にあまたなるひと通ふらし暑さを忘れて

いちにんのぬすびと故になりはひの弱さを知りて島に通ふも

いちにんのぬすぶと故によしもあしも帳面もちて調べられけり

出品者は大阪では鹿田、橋本、石川、島伊、荒木、長谷川、倉地、京都では山田、佐々木、若林、細川大島藁文堂と云つた顔振れで其中堂

京都店はまだ生れて居ない頃である。お客さんには北銀の小塚正一郎、宮内省御用掛になられた西村天囚、富岡鐵齋翁、永田有翠の諸氏等が故人の部で、木崎好尚、磯野秋渚、渡邊霞亭、團十郎の養子堀越福三郎氏等が今殘つて居る著名な人であつた。出品中に西鶴本などはザラにあつて、永代藏が三圓五十錢位の相場であつたさうな。京の若林出品の正平版の論語が百八十圓の札を附けて正面の床の間へ麗々しく飾つてあつたが遂に賣れず、あの名高い『戀のみなかみ』も同店から出品してあつたやうに覺えて居る。それから同じく京の佐々木と細川の組合かで出品してあつた集古十種八十冊の原本が百五十圓で八幡筋の丹平へ賣れたのが破天荒で、倉皇として御意の變らぬ中にと配達されて居た事も氣憶する。最も其頃如何にヒイキ眼に見ても八十圓前後の値打しかなかつたものであるから――。

大阪側出品の代表としては、西川祐信の三冊揃繪本が三十五組、合計百五冊、イキと云ひ時代と云ひ喉から手の出さうな品物だつた、それが三冊宛仕切つてある立派な箱に入れがて賣値が僅かに五十圓、出品者は先代倉地書店であつた。今から思へば金が降つてあつたやうなものだが遂に其祐信の繪本も賣れずに終つた此時に倉地書店からは割方面白いものが出て居たと云ふ事であつた。

以上は實に我大阪古書即賣會の濫觴であつたのである。

斯うした盛況で、二日間開催した賣上が總計千八百圓、餘り驚く程でもないがねと云ひたい、が千八百圓に十八九年乃至二十年の星霜を加乘したら其答は意外な金高に昇るだらう

本屋 クロスワード・パヅル

B・S生案

最近**クロスワード**の流行は世界的であると聞きまして私も驥尾に附して夏の晝寢のおなぐさみにと次のやうなものを作つてみました。

正解者八名には有志の寄附にかゝる賞品を進呈するさうですから振つて御答へ下さい、正解者多數のときは嚴重なる抽籤によつて當選者を定めます。

たて、よこの鍵は左記の通りですが文法上の約束通り假名遣は使はれてゐない所もありますから意味がわかれば結構です。

締切は八月十日限り、正解者は次號で發表致します

答案紙は隨意（なるべくはがき使用のこと宛名は公立社書店内**クロスワード**係宛

賞　品

壹等賞　市内乘合自動車　參圓券　壹名
貳等賞　仝　貳圓券　貳名
參等賞　濱寺海水浴行　乘車券（一往復）　五名

人事

▲新加入者

天王寺區東平野町十丁目七八　谷　龜三
南區日本橋筋三丁目八〇　山田光信

▲名義變更

西成區今宮町東田一〇〇三　中井年一
は同所にて小川菊太郎と變更

▲廢業脫退

此花區今開町三丁目六〇　中西平

よこの鍵

1 定價以上に賣る言草
4 世界第五の大都會
7 腰かける具
9 獸の王
10 肉食する猛鳥
11 物を知る意識
13 神に仕へる女
15 日本畫の一派
17 天皇の尊稱
18 詩を作る人
19 玉座の別名
22 ××の勢ひ止みがたし
24 はだしのシノニム
25 色即是×
26 アメリカで禁止してゐるもの
28 殺された總理大臣
29 めづらしい本
30 クリスチャンの虎の卷

たての鍵

2 「新編××」足利時代の式目の一つ
3 回數券
5 「×より星への通路」
6 つくり
8 我々同業者の團体
10 室町時代の有名なる軍記もの
11 府の最高官吏
12 漢方の手術の一つ
14 我國最初の勅撰詠集
15 組長
16 家屋になくてならぬ物
20 借りるの反對
21 髪を梳るもの
23 日本一の落語の名人
25 トランプの札の一つ
27 阿片の原料
28 火吹いて××のこる

1	2	3		■	4	5	6	
■	7		■	8	■	9		■
10		■	11		12	■	13	14
	■	15				16	■	
17			■		■	18		
	■	19	20		21		■	
22	23	■	24			■	25	
■	26	27	■		■	28		■
29				■	30			

（投稿は此用紙を使つても他の用紙でも差支ありません）

素人賣立會の記事に就て

拜啓　前號月報所載に係る小生投稿『素人賣立會』の記事は心にもなき過激の言辭を弄し候爲め一部顧客の神經を過敏ならしめ悲いては組合長其他二三同業者諸君の責任を問はれ非常なる御迷惑相懸け候由風聞に接し何共申譯無之儀と感じ居候斯は全く小生一人の罪に歸し其全責めを負ひ候條茲に月報紙上を通じ是等顧客及關係同業者諸君並に組合長等に對し衷心より陳謝致度如斯御座候　敬具

七月廿五日

某投稿者

同業者を毛嫌ひ

突然の所用を帶びて、私は汽車にてA地に到着したが案外に用事が早く片附いて、四時間許りの餘猶を得たのでB町の○○書店を覗いて見た。自分を同業者と見た、主人の御機嫌は頗る惡い、或る二三種を問合せたら、或は注文と云ひ或は賣約濟などと言を左右にして賣惜みをする、素人ならば喜んで賣るが同業者は毛嫌していゐるらしい。

私は滑稽にも感じたが呆れもした。こうなれば意地である、店内の品が悉く賣約濟でもなかろうと二三を拔いて見た、處が幸か不幸か正價を附してあるので、その正札付で買取る事に決心したが一寸汚れた、品は格安な代りに自分の氣に染まず、美しい本は價格が合ひ兼ねる。年頃の娘を嫁にやる親の氣苦勞と同じで、帶に短かし、たすきに長しで思ふように行かないそれでも八九册……賣らぬと云ふ譯にも行かないので彼は澁々計算をした。

元々買物に行つたのでないから風呂敷もないので古新聞を一枚と若干のシデ紐に對しても半ば虐待して投り出した。

隨分妙な性格を持つた男だなと思つた。私も面白半分に一寸でも永く店に居て嫌がらして遣らうと、亦種々な本を引出したり、高い處にある棚の物を下ろし、そのまゝにしてやつた。

それが爲めに時間を空費する事二時間何か物を言ひたいようないま〱し相な主人の顏を斜めに見てそこを辭し去つた。

その後三ヶ月程を經て再度寄つて見た時にも以前と少しも變らぬ態度であつたのはお可笑しくもあり憐れにも見へた。

同地の△書店について○○書店の事を話しもし聞いてもも見たら、つい最近に佐伯氏の大日本神祇史を學校の先生とかに五圓で掘出されたと云ふ事を聞きましたと云つて居た

（乙宗生）

組合名簿作製に付區町名番地變更移動の向は至急組合事務所宛御通知ありたし

大正十四年八月一日第十二號發行　發行兼編輯人　松本正治　發行所　大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東入　大阪古書籍商組合事務所

大正拾四年九月十日發行

大阪古書組合月報

大阪古書籍商組合事務所發行

（第十三號）

葉書買入法に就て

乙宗生

毎月報誌上を賑かした葉書買入法が漸く促進可決した、役員諸氏の勞を多とするが尚その効果その方法等の不完全の範圍にあるを疑問とするのである。

月報第十二號の組合の一分子氏の所説を讀んで、その無爲無能を痛快に罵れたのに對して亦一の理ありと思ふ。この葉書買入法を以て六月に起りし大事變やそれ以前以後に、しば〳〵起る反則が救はれると思ふ人が若しありとすれば大なる誤解である葉書買入だからとて何の思慮もなく何の考へもなしに使用せられんか、危險の度は更に使用せざるより甚だしさを以て襲ふ事を覺悟せねばならない。

若し葉書買入を行はんとする時あらば、むしろ自分が尻を輕くして先方へ金を持參するか近所の保證人の宅を聞糺して證明せしめることが肝要である、兎に角無精が一番間違が多い、聞く處によると〇〇事件の犯人も事實住宅は現在して居つたと云ふ事だが、よし先方え行つたとてよし保證人があり、また葉書を持參すればとて、盗品は矢張り盗品である。只發覺に際して官憲が明細帳を點檢する節に正規の手續を踏んであるのと無いのとに幾分の手心を加ふる丈は知れ切つた事實である、要するに盗品でなければ店頭に於て取引をなすも別に差支へはないのであると自分は信ずる、然らば此葉書買入法は如何なる塲合に使用さるゝかと云えば……自分もまだ使用せないのでこれと云ふて確言も出來ないが、最近神戸の某署に捕はれた犯人が店頭にて賣却した塲所は南大阪方面の四五軒を數へたそうだが聞く處によると容貌風采共に少しも怪む點がなかつた由、所謂自分が主張せる人物に觀察及第せるものであるが、尚一歩細心の注意を加へて此際にこの葉書使用をなせば十中の八九、この危機を脱せしならんかと思ふ、敢て附記して他日の參考とする。

葉書發送は惡策に非ず

店頭買入につき葉書を發送して住所を確めたる上代金を支拂ふと云ふ方法は決して理想的萬全の策とも思へないが、然し是迄多くが執り來つた住所姓名を聞いて店頭に於て即刻代金を支拂ふと云ふ方法もまた餘りに輕卒で亂暴極まる行爲である。大体店舗は營業所に違ひはないが、書籍店の店舗は多くの場合一種の路傍の延長とも解釋が下せる。其路傍にも等しき場所に於て、一面識もない人物が假りに書物位と思ふから無謀な大膽な買振りも仕て居るが、之れが貴金属とか寶石類の如きものであつて見給へオイソレとも買ひ得ないだらう、其處に多少の逡巡もあり自重もあり、代金はお宅へ届けますと云ふに違ひない。取扱ふ商品の貴賤は問題でない。最も盗み易く、最もバラシ易く金に替へる事の容易である古本賣買が、之れに伴ふ裏面の種々な犯罪行爲に思ひを廻らす時、我等は餘りに輕卒であつた事に戰慄せざるを得ないのである。

昨今漸増しつゝある制服制帽の學生の本泥棒――それも一人で遣る事か二人も三人も團を組んで其中の一人は書肆主人に會話を求め油斷を作らし、一人は人垣となり一人は目的物の窃取に懸る。此組織的な手段を見ては單なる出來心とのみは許す譯にも行くまい。

斯くの如き犯罪行爲を平氣で遣る程度に助長せしめたるは誰れであらうか、畢竟盗み易い事情もあるが、また他店で何等怪しむ所なく心易く買ふ習慣ある爲ではないか。そして此儘放任する時は愈々是等の徒の跋扈横行を逞うせしめ唯々しき社會問題を惹起せねばならぬ事になりはすまゐか。

實際を云へば面識紹介のないものからは店頭買を絶對に廢止した方が良い、餘り利益率の良くない店頭買を危險を冒して迄も敢行しなくても商品供給の道は幾らもあると考へる。若し全般が店頭買を廢止するやうになれば結局は必ず客の家に出張して買ふ事が殖ゐるに違ひない、さうなれば利率もよし安全第一である、が之れは少し極論に過ぎて今日迄の習慣を遽に覆へすには餘り隔り遠き問題であるかも知れない。

其處で中庸策とも見るべきハガキ發送買入法が完全無缺な良案でない迄も、前述の問題を未然に妨ざ、幾らか緩和せしむる意味に於て又我等の執るべき自治策として強ち徒勞の策でないと信じ得るのである。

怪しいと思ふものでもハガキを發送して買入れゝば安心であると云ふ意味ではない、半信半疑のやうな品物は絶對に相手にならぬ方がよい、誰れかの言はれたやうに人物觀察の常識も働かして、然して信じるもののみに尚且つハガキを發送して買入るべきである。敏活を缺くとか、ヨリ以上の不振を來すと云ふのは畢竟邪魔臭い面倒なと云ふ代詞であつて、ハガキ發送法は決して無用の長物ではない、場合に依れば斷り樣の種にもなるし、活用の範圍は可なり廣い此方法がないよりもある方が寧ろ勝手のよい場合が出て來るに相違ない此方法あるが爲めに窮屈な考へを起さないで、拘束されずに大いに善用する事に勉めたいのである。

古本市の變遷とその環境（三）

永樂町人

（三）維新以前

大塩氏藏書賣立の事

或る日、大塩平八郎は書賈河内屋喜兵衛等數人を呼寄せて謂ひました、自分が文學を好んで書籍を購ふに曾て其費用を惜まなかつた事は諸君のよく知る所で、常に衣食を節して購書の資に供した、是れを以て文庫に藏する所の書は、ありふれたもののみでなく稀書珍籍もまた少くないが、書を擁するの樂みは今飢えに頻する民の苦みには代へ難いから、自分は此際一切の藏書を賣拂つてこの窮民を救ふ資と爲したい、君等適當の價を定めて購ふべしと、――是は實に天保八年二月初めの事でありました。史書傳ふ所に依りますと、文政十一年九州に洪水あり、天保元年三年四年及七年は風雨時を得ずして諸國凶作となり、其中でも四年と七年は殊に激しかつた事が見へて居ります。其爲に天保四年秋から翌五年へ懸けて此大阪では米が最高一升に付二百文に昂り、市民は大根飯豆飯芋飯の類を喰ひいろ／＼と喰ひ延ばし法を工夫して暮らさねばならぬ世の中でした。一方當時大阪の名奉行矢部駿河守は買占め等に依り人爲的に米價の釣上げを策する奸商輩を取締る事嚴重に、又鴻池、加島屋の豪商は此間莫大な金米を寄捨して幸に此難關を切拔ける事が出來ました、が天保七年夏又大雨屢々下り、爲に本年の米作不凶との見込が早くから豫感され其年の六月下旬には米價既に百文臺を拔き、十一月には百五十文を超に、年末には遂に二百文になつて仕舞つた。人々寄れば必ず喰物の話ばかりであつたと云ひます。時遇ま名奉行矢部駿河守は勘定奉行となつて江戸表に榮轉するに臨み、閣老水野越前守は自己の弟なる跡部山城守をして其後任を命じました。其頃大塩平八郎は隱居の身分となり役所の方は息子格之助をして勤めしめて居りましたが、以前の矢部駿河守は政治向きの顧問として絶にず平八郎の意見をも用ゐ大いに優遇して居たに拘はらず、新任跡部山城守は却つて平八郎の英名を猜み事毎に其反對的行動に出で、其上に堪へ難ひ惡政を敷いた爲め愈よ默止する事が出來ず、搗て加へて世は極度の凶年にて京阪の間、餓死する者數を知らずと云ふ有様で、平八郎は度々奉行へ救恤方或は富豪連から救濟金として金子六萬兩の一時立替を目論見これを年賦で償却する方法等を進言したが、どれも是も容れられず憤激の餘り、遂に恐ろしい一種の社會主義めいた暴動を劃策したのであります。そして其準備は極力秘密裡に天保七年秋頃から進められて居りました。明くれば天保八年二月初旬愈よ決する所あり前に云ふた、書肆河内屋喜兵衛等に命じて其愛藏の書籍を賣却せしめました。

私は少くも近世に於て藏書賣立てと云ふ事が史實に見へて居るのは之を以て嘯矢とすべきであらうと思ひます。然し惜むらくは如何なる方法で之れを賣立てたかと云ふ事が判明しませんが、恐らくは只今の賣立ての如く某氏所藏書を何日何時より某所に於て賣立てるからと云ふた風に目錄を拵へて同業者を集めて行つた事だらうと察せられます、そして其折の會場は安堂寺町五丁目御堂筋南入東側に其頃の本屋の會所があつて其所で此賣立會を催した事が略ぼ察せられるのであります。實狀が飢民救恤の資に充てたいと云ふのであるから隨分と同情も集り、義學的觀念も手傳つて其賣立會の値段は高く躍上つた事と思はれます。即ち是をして維新以前の市會の史實とでも云ひた

く、又た有意義其金の使途につき兎角この批難もあるが)な市會であつた事と信じるのであります。斯くして得たる金は總計六百貳拾両餘(或書には藏書凡そ五萬卷千餘両を得たりとも謂ひ)となり、物の安い頃とは云へ兎に角夥しき部數冊數があつたと思はれます。河內屋喜兵衛等は元々大塩はお顧客でもあり學事に於て其門下生と云ふ關係もあるので其金を以て窮民に施す事は一切自分等の手で世話したいと云ひ出ましたから平八郎も喜んで之れを托する事になり即ち喜兵衛等は挿圖の如き施行引換券一萬枚を摺りました。其文句は

口上

近年打續米穀高直に付困窮の人多く之有る由にて當時御隱退大塩平八郎先生御一分を以て御所持の書籍類殘らず御賣拂なされ其代金を以て困窮の家一軒前に付金一朱づつ急度なく都合に家數一萬軒へ御施行有之候間、此書付御持參にて左の名前の所へ早々御申請に御越し可被成候

但し酉二月七日安堂寺町御堂前南入東側本會所へ七ツ時迄に御越可被成候

河內屋喜兵衛
同　新次郎
同　記一兵衛
同　茂兵衛

以上の通りのもので是れを豫め窮民に配布したのは書林側ではなくて平八郎直門の學兵の秘密を知り抜いて居る者計りに爲さしめたので其配布方が頗る不公平であつたが二月六、七、八の三日間以前の場所で施行を行つたが、その及ぶ所、凡そ大阪三郷外三十三ヶ町村に及び、官民の施行未だ曾て斯くの如く盛なるは非ず、窮民雲集施を得るもの歡呼雷の如く盛に其德を稱へ、先生の邸門に到り禮拜涕泣する者があつたと書物に書いてあります。

幸田成友氏の著書「大塩平八郎」には此慈善が學兵決意前なれば一大美擧と云へるが人心收攬の目的に出でたと考ふると駁し、石崎東國氏の著「大塩平八郎傳」には極力是れを辨じてあります。又中村吉藏氏が曾て日本及日本人增刊「想と國と人」號に寄せた悲壯劇の主人公としての平八郎には明治維新の唯一の先驅者、穩健なる社會主義的革命家のやうに稱讃して居ます。

斯くして其月の十九日平八郎は遂に大阪市中を焼いて廻りましたがそれは話が長くなりますから省きます。

それから河內屋は書林の黨で喜兵衛と云ふのは其頃北久太郎町五丁目(今の栁原書店で)新次郎は同四丁目(岡田新次郎と云つて岡田の別家が今の鹿田書店の先々代であり、今京都二條寺町下ル松田庄助書店の先々代も岡田の別家に當る)記一兵衛は南本町五丁目(天保頃からあつた)茂兵衛は博勞町(岡田と云ひ享保から明治迄存)に住して居たさうです。

尚ほ引札の寫眞については大抵の書物には使用濟みのもの計りで右上の方に「渡濟」と云ふ印があつて施行の金と交換濟みを意味して居ますが茲に掲げた寫眞は未使用に終つた渡涌の捺印のないものであります。そして此施行引換券は今でも各方面から時折出て來ますが、平八郎が擧兵の二日前即ち二月十七日夜に各方面へ飛ばした激文の摺物は中々見附からないさうで若し出て來たら今までは非常に貴重なる資料とされて居ます。因に此稿を草するに當り參考書として幸田成友氏著大塩平八郎、石崎東國氏著大塩平八郎傳、中村吉藏氏稿悲壯劇の主人公としての大塩平八郎、國府犀東氏著大塩平八郎等を見ました。

(完)

クロス・ワード・パッヅル

懸賞當選者發表

ゼ	ツ	パ	ン		オ	ホ	サ	カ
	イ	ス		コ		シ	シ	
タ	カ		チ	シ	キ		ミ	コ
イ		シ	ヂ	ヨ	ウ	ハ		キ
ヘ	イ	カ		ク		シ	ジ	ン
イ		タ	カ	ミ	ク	ラ		シ
キ	コ		ス	ア	シ		ク	ウ
	サ	ケ		ヒ		ハ	ラ	
チ	ン	シ	ヨ		バ	イ	ブ	ル

八月一日の月報で募集した懸賞クロスワード・パッヅルの應募者は總數五十二名中正解者三十六名失格者十六名であつたが、去る八月十六日、日本橋倶樂部市會の席上で正解者の抽籤を行なつた結果其當選者は左の通りで即刻それ〴〵賞品を發送した。

一等當選（乘合自動車參圓券）一名
いろや書店

二等當選（全貳圓券）二名
河村書店内 河村博
備後町 中尾堅一郎

三等當選（濱寺行一往復乘車券）五名
天牛書店内 柏田義春
北區神山町 川端健二郎
市岡町 トモエ書店
河村書店内 高橋豊
天牛支店 藤吉武一

八月の（評議役員會は暑中の）折柄重要協議事項もなく休會いたしました從て記事もありません

古本禮讃（二）

文一郎生

酒落本の外題について

德川の後期に流行した小説本の一種に酒落本若くは蒟蒻本と稱するものがある、寳曆前後に起つて明和、安永、天明頃に最も盛んに刋行せられてゐる、酒落本作家として最も名あるものに田螺金魚、唐來三和、山東京傳、振露亭、十返舍一九、式亭三馬、梅暮里谷峨、鼻山人等がある、酒落本の內容はその外題によつて推知せらるゝが如く、すべて遊里の有樣を描寫せるもので、その多くは吉原に於ける寫生である。遊女對遊客の交涉、遊廓の風習、年中行事等は最も微細に描かれてあつて本書は遊里、遊女の硏究上最も貴重なる資料となされてゐる。

普通滑稽本、人情本もしくは黃表紙に於ける外題の附け方に彼特有の附け方があるやうにこの酒落本に於ても又一流の附け方があるその內でも他の書名をもぢつて附けたのが多く目にとまる、これは他の小說類にあまり見受けない點で興味のあることだからそれ等の二三について左に列記して見よう。

○明和伎鑑　淡海三鷹作明和六年板
　これは武鑑をもぢつたもの內容もすべて武鑑式に作つてある禁止本として有名なるもの

○無益痴禁抄　阿宇齋作安永元年板
　本草書の廣益地錦抄をもぢつたもの

○大抵御覽　朱樂菅江作安永八年板
　唐本の大平御覽をもぢつたもの

○三敎色　唐來三和作天明三年板、弘法大師作の三敎指歸をもぢつたもの

○卯地臭意　種木庵主人作同年板、平安朝の物語本宇治拾遺物語による

○彙軌本紀　島田金谷作天明四年板
　漢書の史記本記による

○小紋新法　山東京傳作天明六年板
　古文眞寶による

○通氣粹語傳　山東京傳作寛政元年板忠義水滸傳をもぢつたもの

○京傳餘誌　山東京傳作寛政二年板
　四書五經等の經典餘師をもぢりしもの

○格子戲語　振露亭作同年板孔子家語による

○娼妓絹篩　山東京傳作寛政三年板
　將棊絹篩と云ふ本による

○倡賣往來　十返舍一九作寛政五年板、往來ものの商賣往來によつてもぢる

○大通契語　鈴々成作寛政十二年
　服部南郭の大東世語をもぢる

○遊子語言　享和三年板、郭璞の揚子方言による

○廓中掃除　玉水館作文化四年板、郭注荘子による

○船頭深話　式亭三馬作。支那の小說剪燈新話をもぢる

○世說新語茶　山手馬鹿人作明和板
　世說新語補による

○華里通商考　遊里軒作。西川如見の華夷通商考をもぢる

○甚孝記・鳥亭焉馬作。算術書塵劫記・をもぢる

○賣花新驛・玉川常水作。易書梅花心易・による

倘此他地名人名をもぢつたもの等がある。此等小説外題について研究すれば種々各々の特徴が見えて仲々面白いものである。

人事

▲新加入

南區谷町七丁目二八　桝井三四郎

北區兎我野町一番地　黒崎丈一

住吉區阿部野町一一八　南北堂　鈴木貞一

湊區大正通五丁目一〇〇　好文堂　萩原好信

東成區猪飼野町四六七　稲田彌三郎

此花區龜甲町一丁目二九　松葉支店　廣野

南區日本橋筋四丁目四六　盛文堂　高橋靜

▲移轉

南區日本橋筋五丁目四三　松葉重藏

▲廢業

港區九條中通三丁目三五　久保美佐代

全　九條南通三丁目五九七　龜川常三郎

ある書籍から（一）

書名雜談

文學博士　芳賀矢一

日本の一番古い書物は古事記であるが其の名が支那の書物の名によつて命名せられたことは察するに餘りがある、それがフルコトブミと訓まれたか、或は風土記のやうに音でよまれたかは疑問である。日本書紀はどうも音で讀まれたのであらうとおもふ。萬葉集も音でよんで居るのを見ても、古事記もやはりコジキでは無かつたかとおもふ。一切の漢風を排斥した本居翁が古事記傳と支那流の命名をせられたのも變だ言葉の玉の緒、玉がつま、玉あられ、葛花などは純日本式である。

古今集以下の二十一代集も中身は純然たる大和詞で表題はやはり漢風である。其の他歌集の名は金槐集といひ、拾遺愚草といひ、隣女集といひ、草庵集といひ、雪玉集といひ、慕景集といひ、皆漢語を以てあらはして居る。春葉集、漫吟集など徳川に入つても同じである。

註釋書にても萬葉代匠記を始として萬葉歌林、萬葉緯、萬葉略解、萬葉古義に至るまで徒然草文段鈔、百人一首改觀抄勢、語臆斷、源注餘滴といふやうに、どうもやはらかい國文の書物で無いやうなのが多い、尤も古い所には泯江入楚などといふむづかしいのもある。

併し概して言へば佛書は佛書、漢書は漢書、歌書は歌書と自ら其の性質を表題にあらはして居るので、徳川時代の人の歌集などは大體に於て何の舎集といふ風になつて居る、東歌とか、うけらが花とか、杉の下枝とかいふ風に命名して來た。隨筆でも同樣で、歌書には歌書らしい名、俳書には俳書らしい名が附いたのである。御傘、油糟、猿蓑、炭俵などは俳書以外には出て來ぬ命名である。

俳書や歌書や乃至は隨筆の書となると一寸表題だけで内容の如何なものかゞ分らぬ。日本人は書物の表題までを文學的にしたので書名の解釋が百科全書の一部分を形造る必要があるのである。一種の固有名詞として最も分らぬものゝ一つである。翁草わすれ草、しのぶ草、おもひ草、の名だけでもいくらもある。しづの苧

環、さゞれ石、さゞめ言などの類、見當のつかぬものはいくらでもある。書名といふ譯ではないが謠曲では業平とか紅葉狩とか、橋辨慶とか、簡單に言つたものを淨瑠璃では、やはり表題までを文學化して、日高川入、相花玉、松風村雨束帶鑑、行平磯馴松、祇園女御九重錦などと洒落れて來た竹取物語、源氏物語、狹衣物語から清水物語、とりかへばや、岩屋の草紙、一寸法師、鉢かづきの草紙が後になつて緣櫻春蝶奇緣とか青砥藤綱模様案とか浮世繪姿六枚屛風とか時代により種類によつて新しい名を求めて來る。

をかしいのは洒落本の名で、しかつめらしい漢書の名を直ちに語呂合的にもぢつて附けたので（別稿古本禮讃にも揭げてあるが）書名に於て已に其時世を茶化して居る趣が見える揚子方言に對する遊子方言、郭注莊子に對する廓中掃除、太平御覽に對する大抵御覽の類で南郭先生の行はれた時代として南客先生文集などがあり、名所圖會には內所圖繪、忠臣藏には通人藏がある等、すべて世の中を馬鹿にしつきつて居るのである。明治の文學を見ても胡瓜圖解の洒落などはつまり其の類であるが、經國美談や書生氣質や伽羅枕を經て、魔風戀風、我輩は猫である、蒲團、家、春生といふやうに其の表題を見ても文學の變遷は何となく目に浮んで來るやうな心地がする。書名に就いて色々の方面を話せば際限が無い。

（『筆のまに〳〵』から）

文化移入に關する古書展覽會

來る九月十九、二十日の兩日大毎樓上に於て開催せられるといふ古書展覽會は我國今日の文化の基礎を成してゐる、洋學の系統を慶長以來明治十年までに出版された書籍によつて說明せんとして、その資料を蒐集して展覲に供せられるもので出品者は東京、大阪、京都等に於ける斯界の藏書家が網羅されてゐるといふ事である、此種の展覽會は嘗て明治四十五年早稻田大學圖書館に於て催された、文明源流表彰展覽會以來初めての催しであるから各方面より非常に期待されて居る、當日二日間共入場隨意であるから、我等も是非一度見て置きたいと思つて居る。

『愛書趣味』の發行

近頃流行する書籍研究雜誌が何れも有料であつて然も商品廣告の宣傳等に悪用せられるやうに見へるのが慊らず、純趣味的の基調の下に「愛書趣味」と云ふ雜誌が生れるさうな、內容は名著の紹介や古書の噂、愛書家の消息と云つた風に菊判二十頁內外隔月發行一定の申込者にのみ絕對無料で配布、但配本中共鳴なさゝうな人は配本中止とある、投稿は歡迎するが謝禮はしない、其かわり金錢物品の寄贈も受けないと云ふのが「愛書趣味」の淸規である、創刊は十月中旬で編輯は主として齋藤昌三氏が担任せられ發行者は例の愛書家青山督太郎氏である、大いに期して待つべきである。

▲本紙廣告料

毎號揭載せる月報終頁廣告料金は左の通りでありますから盛んに利用下さい

七行一割 一圓　七行二割 一圓八十錢
全 三割 二圓五十錢　全 四割 三圓

大正十四年九月十日第十三號發行　發行兼編輯人 松本正治　發行所 大阪市南區日本橋一丁目 交叉点北辻東入 大阪古書籍商組合事務所

大正拾四年十月二十日發行

大阪古書組合月報

大阪古書籍商組合事務所發行

（第十四號）

古本價値の定め方に就て

近頃我古書界では書物禮讃と云ふ言葉が頻りと流行して居るやうであるが、それは恰も善男善女が大德和尙の法話を聽いて、彌陀如來の廣大なる功德の有難さに隨喜喝仰の涙に咽ぶやうなものである。古本屋が繩で括り上げて、ツブシに出さうと突ッ込んである零本或は雜誌の中からイヤ是れは明治初年の何々文典だ、是れは二十年頃の萌芽時代の小說だとか云つて勝手な解釋に勝手な說明を附けて黄金の茶釜でも掘出したやうな心持で喜悅して居る讀書家、蒐集家が殖ゑて來たやうだ、之れは實に古本屋に對する結構な現象の一つである。

由來如何なる趣味でも、凝つて居る人を看れば馬鹿げて居るやうなものだが、其處には門外漢の敢て窺知し得ない樂しみもあり面白味もあるものだから迂濶な批評は許されない。又實際に、つまらぬと思つた一冊の雜誌上にも捨て難い貴重な文字章稿を發見し、後世に於ける立派なる單行本の上梓は過去に於ける或る雜誌に發表された名論卓說の再刊燒直しのやうな塲合が間々あるのである。

斯るが故に新刊本に比べて古本が割合に賣れると云ふのも敢て不思議な事でもない。

今是等の古本を漁る人々が古本屋を訪ねて、ツブシの中から薄ペラな一二冊を抜いて價を聞くと、縦へそれがツブせば一貫目拾錢か拾五錢しか賣れないものであつても、古本屋は隙さず一冊を拾錢貳拾錢或は五拾錢壹圓と口から出放題に吹いて俄に居直はるやうな事があつて、實際それほどでもない安い本を無暗に高く云ふから折角の客を怒らして仕舞つたり、又得難い稀覯書を拾錢か貳拾錢の端した錢に呉れてやつて蔭で笑はれたりして居る本屋もある、さうかと思ふと掘出防遏策として片ッ端から何んでもかでも高く云へばよいものと心得て居る主人もあるが、是等はつまり相手の口裏を見て値を左右しやうとする、極めて根底のない頗る不確信な値段の附け方であつて掘出されながらも堂々と自己の確信から生じた處の眞面目な價値とは自から運を異にして居るのは勿論である

茲に於て我等は常識のある價値を定めたいのである。たづねてもたづねても與の知れない、多種多様な我古本の個々に就て一々の精通は出來ない相談であるが、各々の持つ相當な趣味を基調として其中の何んなり共一種目でもよいから、其事柄だけは他よりも比較的に精通して居る、幾らか明るい點があると云はれる程度の趣味の涵養に勉めたい、其種の本に對する理解、研究を進め、惹ひてはそれを蒐集するならば、同氣相需めて又其種趣味の客の蝟集し使るものである。

趣味と金儲けは同一歩調に進めないとは度々先輩より聞く言であるから大なる金に憧れるの士は趣味とか研究とか云ふ事は、間泥息くて足手纒ひにもなるが、此業界に足を入れ多少なりとも意義ある本屋として行きたいならば、本に對する研究或は趣味を感ずる事は本屋として心懸くべき一條件であらねばならぬのである此點に於て一冊の雜誌たりとも猥りにッブす事は誠に勿體ない氣にもなる。著者や編者や將た發行者の苦心を思ふ時は決して殘酷なる取扱ひは出來ぬ筈である。會て古家君の云つた「本を愛する心」は實に茲に存在するのである。

私は聊かなりとも本を愛する心あるが爲めに、本や雜誌をッブしたり處分する前に先づ手數だが目次內容を概觀した上で餘り價値を認めないものは已むを得ず處理し、ッブしの宣告を與へるが、一言半句でも趣味とか研究の文字があれば自分で讀んで見たり同趣味な客にも薦める事を怠らない、無論相當の價格は頂いて居る!!でも決して捻ねるが爲めに方外な金は貪つて居ないつもりである要するに古本に於ける常識ある價値を定めるには不斷の研究が必要である。顧客の購買心を唆るものは內容の指摘說明である。それらには自己が其の內容を理解し得らるゝ素地を多少共作つて置かねばならぬ心懸けである。けれ共注意すべきは研究も餘り多岐に亘つては却つて神經衰弱を惹起する因である。よく考へねばならぬ、此頃古本屋のある一部の人々は確に神經衰弱症に患ひされて居るからである。

木公雜記（三）

見佳書子

○

十九、二十日に開かれた「文明移入に關する古書展覽會」を見にいつた大阪每日新聞社樓上の廣間に一杯ならべられた本については、本屋をしてゐながら殘念にもひとつとしてその價値が判らない。この本が天下に二冊しかない珍本だ、あれが何百圓する奇書だと案內して貰つてゐながら判らないのである。しかし此無智な私にも、遠くは京都東京よりわざ〳〵來阪してみてゐられる名士の方方や、會場一杯につめかけた人々の驚異のまなざし、さては熱心にノートしてゐる人をみかけては、この企の大きな意義を感ぜずにはゐられない。尙千數百點といふ澤山な品をかく一堂にあつめ得た努力はどうだそれをいち〳〵解題して、後に殘こすべく出版された展覽會目錄（半紙版二百十頁）を編輯せられた努力はどうだ。それがみなわが同業者荒木

幸太郎氏ひとりの努力である。わが業界のために大いに氣をあげたもので私はかたぢけなさに頭を深く下げ感謝の意を表する次第である。しかも一言半句荒木書店としての宣傳文字のなかつたことは奥床かしくも美しいことであつた。

○

典籍の研究第二號に玉樹氏は「由來古本屋の因襲的性行とでも申しますか殊に當地では一種の癖があつて偏狹性が本能的色彩を帶びて兎角他人の仕事の成立―成功を羨む傾向がありまして毀譽―否誹謗の言葉を放つ……マア水に渴へた雨蛙のやうにガヤ〳〵と風評やらいろ〳〵と囁きたがる―」が、本誌の出現については御讃辭を戴いたと云つて玉樹氏はよろこんでゐられるのであるが、我同業者の常態を描寫してかくも醜惡を極めた言辭があるであろうか、勿論同業者のある一部をさして言はれのであろうが、かく嫌惡の情を催すまでに言及されたのは、かへつて典籍の研究の清楚さを汚すものである。典籍の研究が顧客に及ばす力の凡ならざるを思ふて劍討する所以である。

（九月二十一日）

絶版書復活譚（一）

題して絶版書復活譚と云ふが餘り變つた話を書くわけでもありません、只だ絶版中であつて舊定價以上に賣れた本の復興したもののみを私が知れる程度に紹介するだけであります洋裝本に類する事は勿論で、何かの參考になるかも知れないと思ひまして。――

▲動物學提要　理學博士 飯島魁氏著

四六倍版、背皮金文字箱入、紙數一千餘頁、挿圖千百餘個、定價貳拾圓、大日本圖書株式會社發行

以上が最近復活したものゝ說明で、該書は大正七年定價十二圓を以つて初版を出したきり以來永く絶版となつて居たもの震災直後の最高潮時代にはこの邊まで突飛したものか、多分貳十圓以上三十圓も稱へた事と推察する。今新舊版の對比は判らないが初版ノ内容を見ると一頁平均一個以上の詳細な挿圖あり、全卷の三分の一迄は六號活字を使つてある點など、絶大なる努力を費されたもので實に斯界の一大權威書たる事は素人の我等が見ても否定し難い事實である。今度の復興版は初版を寫眞凸版として印刷したものださうなから多少印刷の鮮明を缺くかも知れないが軈て又絶版となつて市場定價以上を稱へる時が來るだらうと考へる。

▲東洋讀史地圖　箭内亘氏著

四六倍版、新版定價七圓、富士房發行

是れも隨分名高かつた本で、文撿を受ける人などは必ず欲しかつたもの一時は自分等も拾八圓位に賣つた記錄を持つて居るが、東京あたりでは頂上貳拾五圓もしたか、然し復活して見るともうそれ程有難くもなく頓に聲價を落したやうである。

コシヨクラブ

（投稿歡迎）

▲苦熱百日の長きよりも店頭の寂寞に氣を病んだ古本屋が秋冷讀書の好期に入つたのにも係はらず、依然たる淋しさに驚いてゐる、往年の好況を顧り見て、亦多少の感慨に堪へない盛衰は相互的の者我等は壘を堅くして、持久戰に入るの覺悟が必要だ

▲古書月報月を追ふて、益々整頓し來る亦喜ぶべし所謂いさゝか堅きに失して、書生日報を見る心地す、願はくばコシヨクラブ欄、再設を願ひ時に寸鐵警句に微笑の文句に接するの快あるを希望す

▲會員よりのハガキにての古書價格の尋ね合せ絶版書の價値等を誌上に明答せらるゝの雅量がありたい者だ、編輯諸氏并に幹部諸公の賢察を仰ぐや切である

▲毎月報を悉皆眼を通す會員は約半分は覺束いなだらう、右の注文を容れて、圈外に記載の勞を取られんかそのまゝ紙屑籠に投ぜらるゝを防ぎ永く保存さるべし、並障な措して、是が設立を祈る

▲第十三回定例役員會

（十月十七日）於日本橋倶樂部午後一時より久方振りの役員會を開く、來會者十三名差したる協議事項もなけれど、來るべき總會及役員選擧區の件等を研究し月報紙面多少の更改等を議して閑散裡に散會

組合員移動

▲新加入者

港區九條南通二丁目一六二　嶋　秋男氏

▲移轉

東區船橋町（市電下味原町交叉點東）　井口公治郎氏

▲廢業

南區稻荷町三丁目八六三　寺田信治氏

▲組合指定ハガキ取次所

曩に制定された組合指定買入用ハガキは便宜上左の四個所にて取次いたします（實費百枚三十錢）

谷町　谷三文庫　九條　奥田書店
日本橋　公立社　永樂町　中央堂

古本市の變遷と其の環境（四）

永樂町人

（四）石川の市（上）

唐物町が今のやうに軒切りをやらなかつた頃は兩側の家の屋根が相抱くやうに迫つて細い細い街であつた――それはツイ三四年前まではさう云ふ狀態であつたが、今は見違へるやうに美しい廣い通りに變つて仕舞つて居る。其細いどちらかと云へば舊式な陰氣な家が建ち並ぶ唐物町時代に、其處に石川の市會があつたのである。

云ふまでもなく、今の大石小石の兩氏が主なる經營者であつた。始めて此處に市が出來たのは明治三十三四年頃で、此市に集合した人々は荒木長谷川（和歌山在）、伊藤丑松（島伊先代）水野（先代）、藤德（橋本德兵衛）、鹿田（現組長）、松要（先代）、羽間、谷（現神戸組合長）、森敏雄、松谷（先代）仲、京林、中正、だるまや、福井（文德堂先代）村上等の諸氏が主なるもので多少の遺漏もあらうし、順序の不同も御斷りして置くが、右の中先代としたのは皆故人に屬する人々で殘つて居る人でさへモウ相當の年輩であり大家の格に入る人ばかりである。藤德氏は今本屋を廢めて天下茶屋邊で荒物屋と云ふ素晴らしい商賣替へをして居られると云ふ。又羽間氏は其頃小谷書店の番頭であつて、隨分と逸話奇行の多かつた人と聞いて居る。親分肌の人で金があつても無くつても人に賴まれゝばイヤとは云はぬ、二つ返事で何んでも引受けると云つた性質の人で、其の福島の梁山泊時代には隨分と面白い話もあるが又更めて書く事にして、此人がズット斯界に活躍を續けて居るならば、今頃は元老重鎭株であるべき筈だが、何時とはなしに此社會を遠ざかつて居るやうな有樣である。

谷氏は今は神戸で組合長として納まつて居るが、當時は矢張加賀善（心齋橋安土町北入謠曲本專門店）の店員であつたさうな。羽間氏と殆ど同

タイプの人物かと思ふ、矢張梁山泊の同人の一人で其前半生は波瀾重疊の人であつたし、彼の守山又三氏藏書賣拂ひの折には、其中心的人物となつて我古本界史の一頁に特筆せねばならぬ大事件が惹起されたものだそれも尙ほ稿を更める事にする。

そして市の始まる時間は以前の前川にあつた市のやうに夜間に開かれて蠟燭を點じて市を糶つて居たのは同樣で、それがランプに變つたのは何程後の事である。市の終るのは何時も夜の十時から遲くなると十二時にもなつたのである。

石川書店の二階と云ふのは極く舊式の建物であつたから天井が低く、端の方へ寄ると頭を打つやうな、自分等もタッタ一回其二階を踏んだ事はあるが、それが始めの仕舞ひであつたのだから、此市の解散したのも大正六七年の頃であつたらうと思はれる。

例會は毎月四日、十日、十八日、廿四日の四回で、取扱つて居た本は始めの頃は和洋相半ばして居た樣だが、漸次和本よりも洋本の勢力が濃厚となつて行つたらしい。金の單位は一寸覺え兼ねるが一りよう四錢三厘位ひから追々進展したのだと云ふ。

積德堂中正書店は其時分心齋橋平野町南入東側、吉野ずしの隣りあたりに新古兩方の營業をして、盛んに古本を買つては市へ出品をした又文德堂の先代福井氏も割方ウブな出品を絕へずして居たものである。

或時中正からの出品で飯沼欲齋氏の植物圖說の原本、之れは何んでも岐阜で出版されたもので、明治二十四年の濃尾震災で本がスッカリ無くなつて居たから、當時でも既に品薄であつたそれが後には成美堂から洋本一册となつて出來て居るが、此原本と云ふのは黃表紙大版彩色入二十册の美本で、其日中正の止値が僅か三圓と云ふのに、先代伊藤(丑松)氏は大枚卅八圓五十錢かに入札した、チヨット言ひ忘れて居たが、何日も石川の市はセリ市が常例であるのに、此日に限つて入札をした――元々伊藤ハンは時々買かぶる名人であつたさうなが、此植物圖說に就いては實際買かぶつたのかそれだけの値打があつたのかそれは知らないけれ共中正は客から二圓に買つて三圓の止札を入れて置いたのが、卅八圓餘に賣れたものだから其懸隔の甚だしい事に當時評判であつた、けれども其本も後に谷氏の周旋で東京の岡崎屋へ五十圓かで身受けされたさうな。

又或る時は先代水野ハンが芦分船の合本一册を市へ持つて來たから、これは善いものを持つて來た、止札を入れて置かねばと言ふので、水野ハンが入れた止値を開けて見ると驚く勿れ金五十圓、皆は噴き出したくなつたが、トウ〱だるまやサンに只の九圓餘りで買つて貰つた。一遍に其値開きが大きい、言ひ値からと云ふに然しそれも其筈此本は半年餘りも五十錢の附札で店に曝らしてあつたものが、誰れ一人値を聞く人もなかつたと云ふのだから、――斯う云ふ話は當時の挿話の一つとして絕へず仲間の話題に上つたものである、

(此稿未完)

古本禮讃（三）

文一郎生

西洋もの

新井白石の西洋紀聞は寶永五年和服を纒ふて屋久島へ上陸した紅毛碧眼の漂流人ヨワン、バツテスタ、シロウテとの答問によつて編まれたものであつたが南蠻、紅毛、和蘭、など、僅に長崎にその俤を偲んで一種の恐怖を感じてゐたその時代の人々に正確なる西洋の智識を移入したのは白石が最初とも云へよう。享保五年八代將軍吉宗が宗敎に係る以外の洋書輸入の禁止を解いた時天文、窮理、醫學と西洋文明の波はみなぎる潮の如く滔々と移入し來つたのであつた。この風潮は我國諸科學の著しき發達を促がしたことに止まらず遂に鎖國の陋習を破り開國の期を早め、あらゆる總てのものに驚天動地の革命を齋らしたのであつた。明治維新の前後數十年間が西洋文明の輸人に急にして一に西洋二にも西洋の事實の如何に著しかつたかは直に次の書目の一般によつて明瞭なることゝ信じる、こは單に西洋文明移入の一局面を示すに過ぎないが又以て全般を想到する便りともなるであらう。

西洋錢譜 一、 朽木昌綱 天明七
西洋畫談 一、 司馬江漢 寛政十一
西洋雜記 四、 山村才助 嘉永元
西洋砲術便覽 一、 上田仲敏 嘉永六
西洋度量考 二、 青山幸哉 安政二
西洋行軍皷譜 一、 上原寛林 同三
西洋兵學訓蒙 一、 中西喜一郎譯 同四
西洋兵書百幾撒私 四、 聚星堂刊 同四
西洋事情 三、 福澤諭吉 慶應二年
西洋旅案内 二、 同 同三年
西洋紀行 二、 中井櫻州 同四年
西洋經濟小學 二、 神田孝平譯 同四年
西洋往來 一、 明治元年
西洋將棋指南 一、 喫霞仙史 明治二年
西洋易知錄 八、 河津孫四郎譯 同
西洋蒙求 一、 明治三年
西洋道中膝栗毛 廿二、 魯文 同三年
西洋夜話 一、 石川寧靜 明治四年
西洋勸善夜話 三、 梅浦元善譯 明治五年
西洋料理通 一、 魯文 同年
西洋算法開諸法 一、 岸俊雄 同年
西洋今昔袖鑑 一、 糟川潤三 同年
西洋百工新書 五、 宮崎柳條 同年
西洋英傑傳 六、 作樂戸痴鶯譯 同年
西洋書引節用集 一、 同 年
西洋千字文 一、 田中内記 同六年
西洋禮式 一、 河野盛之進譯 同年
西洋果樹栽培法 一、 開拓使板 同年
西洋養生論 二、 横瀬文彦譯 同年
西洋言行錄 二、 矢野文雄譯 同七年
西洋童話 一、 今井史山譯 同年
西洋開化史 二、 飜譯局譯 同八年
西洋諺草 一、 岩見鑑造譯 同十年
西洋時計便覽 一、 柳川春三
西洋聞見錄 八、 村田文夫
西洋武功美談 一、 南文[illegible]刻

（以上）

西洋千字文
日本田中内記著
西洋欲遊東溟亦浮
因知世界究如全毬

『コシヨクラブ』

▲月報前々號の素人賣立の記事に就てこの投稿者が前號に頗る丁重なる謝罪文を寄せられた餘りに叮嚀なる文に驚かざるを得ない、恰も特許品の侵害に對する謝罪文と同一たりしな憾みとする只單に事實無根にて、全文を取消す丈にて可なりしと、思ふが如何にや

▲秋いよ〳〵深くして、清爽の氣天地に滿つ一日の清遊亦可なるべし、野山に願くば諸公の健在を祈る

ある書籍から（一）

僞書

薄田泣菫

小說家芥川龍之助氏がいつだつたかの三田文學に「奉敎人の死」といふ短篇小說を書いた。そしてこの小說は自分が秘藏してゐる長崎耶蘇敎會出版の「れげんだ、おれあ」といふ西敎徒が勇猛精進の事蹟を書きとめた稀徒書から材材を取つたものだ。此の書物は上下二卷美濃紙刷六十頁草書體交りの平假名文で、上卷の扉には羅甸字で書名を横に書き、その下に漢字で

「御出世以來千五百九十六年慶長
元年三月上旬鏤刻也」

の二行が縱書にしてある。序文は間々歐文を直譯したかのやうな語法を交へ一見して伴天連たる西人の手になつたものだらうと思はれるやうなところがあると斷り書まで添へたものだ。

これを讀んで一番に物好きの眼を光らせたのは、文壇の老大家U氏だつたU氏は人に知られた珍書通だけに自分が今日までこの書物の存在を知らなかつたのを何よりも恥しい事に思つて、掌でそつと禿げ上つた額を撫でた。

「れげんだ、おれあ—名前、からして珍らしい書物だ、是非一つ借りて見なくつちあ。」

U氏は直ぐ芥川氏あてに手紙を書いて、その珍本の借覽を申込むだ。

芥川氏はその手紙を開けて見た。そしてにやりと皮肉な笑を洩してゐると、丁度そこへ東洋精藝會社の社長某氏の手紙を持つた、若き男が訪ねて來た。その手紙によると、三田文學で御紹介になつた「れげんだ、おれあ」あれは珍しい書物だと思ふから上下揃つて三四百圓で讓つては吳れまい、かといふ賴みなのだ。

芥川氏は雀の巢の樣にくしやくしやした頭の毛を搔きながら、若き男に言つた。

「此の本だと今Uさんからも借覽を申込まれては居るが、然ういふ達ての御希望なら、お讓りしてもいゝんだが、………」

「それぢや何うか然ういう御都合に—」若き男は刈立の頭を叮嚀に下げた。

「社長もどんなにか喜ぶでせう。」

芥川氏は當惑さうに手を拱んだ。

「ところが、あいにく其の本が手許に無いんだ。」

「誰れかにお取り替へにでもなりましたんで。」

「いや、そんな本は僕も讀んだ事が無いし、また誰一人見た事はあるまいと思ふんだ。」芥川氏は斯う言つてくすくす笑ひ出した「君あんな本が有る筈がないぢあないか、あれは唯僕の惡戲だよ。」

「惡戲なんですか、それぢや僞書という譯ですね。」若き男は呆つ氣にとられた顏をした。芥川氏はその一刹那、若い男の懷中で百圓札が幾枚か南京虫のやうに身を縮かめてゐるやうに思つた。

『茶話』から

モヨホシ

▲同友會臨時市

去る十月十五日九條奥田書店樓上で同友會の十四年度特別市が開かれた、一品一圓以上と限定された一口物に幾らかの持寄品を加へて、中々の盛會であつたが、昨年九月に同所に開かれた特別市に較べると品物が落ちるのか世間の景氣が、惡るいのか今一息の奮張が續かなかつたやうに思はれた。

▲和裝本聯合即賣會

來る十一月一日二日の兩日南堀江書林倶樂部に於て古書聯合即賣會を開く、和本類錦繪一枚物等を主として出陳する由、主催者は杉本、中尾中正、金澤、玉樹等の諸氏にて每年の恒例として顧客も期待するものなれば相當に賑ふ事だらう。

▲洋裝本聯合即賣會

前記同樣洋裝本を主とした即賣會が十一月十四五の兩日間、第一會場を日本一東浪速倶樂部に第二會場を日本橋倶樂部に於て開催される、主催者は日本橋倶樂部で出品は汎く全市の有志から募つて、大々的宣傳の下に總ゆる方面の珍本を寄せると云ふから西に和本東に洋本と此秋の即賣會は相當賑ふ事であらう、因に點數に制限があるので出品は成可早く公立社書店迄申込まれたい、締切は十一月五日

廣告

大阪古書籍商聯合大即賣會

來ル十一月十四・十五兩日開催

第一會場
浪速倶樂部

第二會場
日本橋倶樂部

十一月十四、十五兩日前記の場所に於て日本橋倶樂部主催の下に大阪古書聯合大即賣會を開催致しますから御賛成の同業者諸君は左の規定に依り御出品下さい

一、出品點數は一店五十點まで出品中餘り重複するもの及賣價の差違甚しきものは協議の上出品の變更、價格の協定を請求する事あり
一、賣上高の一割を經費として申受く
一、出品場所は前日抽籤を以て定む
一、賣殘品は閉會後直ちに各自御引取の事
一、滿員の節は御斷りする事

追て各書店へ一々御案内は申さず此廣告を以て御通知に代へます

主催
日本橋倶樂部

出品申込所
公立社書店

申込締切は
十一月五日限

大正十四年十月二十日第十四號發行
發行兼編輯人 松本正治
發行所 大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東入
大阪古書籍商組合事務所

大正拾四年十二月五日發行

大阪古書組合月報

大阪古書籍商組合事務所發行

（第十五號）

組合員移動

△新加入者

東成區專左道町三番地 協文堂 關 祥三氏

住吉區天王寺町三〇一ノ三 小倉 撲一氏

此花區上福島北一丁目六三番地 小谷 政子氏

西淀川區大仁町四八番地 小谷 俊三氏

南區鰻谷仲ノ丁三七番地 福田 久吉氏

南區日本橋筋五丁目五二 加藤伊之吉方 須佐見榮一氏

△第十四回定例役員會

（十二月三日）於日本橋俱樂部午後早々定例役員會を開く、出席者十四名、先づ新加入者の件を承認し、次に今回屆出に接したる日本橋聯盟に依つて開かるべき市會毎月三日の三回新設の件及南區佐藤市會に於ける毎月五の日三回増設の件を審議したる結果則項記載の如く兩者共其一部訂正變更を求めて承認する事に決議す。尚ほ是等諸問題及今後益々煩雜ならんとする市場關係に對し囂々に提唱されつゝある市場細則の設定を必要とし、詮衡の結果各市會より一名以上の出席を求め十二月六日其協議會を開く事となれり。

次回評議員會は十二月廿日

△二市會の新増設

前項記載の如く今夏頃より寄々協議中であつた日本橋筋三丁目以南二十幾軒かの同業聯盟下に催さるべき甲種市會毎月三の日三回及び既設市會たる御藏跡佐藤市會が從來七の日三回の外に毎月五の日三回増設の件を相前後して組合事務所へ正式屆出があつたので評議員會に諮りたる處前者屆出書には毎月七の日三回當分保留をも併せ承認を請求せられたが既設七の日との交渉を求め三の日のみを承認し又後者には五日十五日は差支へなきも廿五日だけは古典會と重なる故を以て之れを削除の上共に承認された。因に兩者の會場及日時は廣告文にある通りである。

新年號記事豫告

一大阪の文藝雜誌（一） 梁城生

一日本交通史書目解題（一） 芳水生

一本屋索引（二） 文一郎編

一古本市の變遷とその環境（十六） 永樂町人

▲大阪同業者へ不賣同盟

高知の古本業者が

最近當市の某古本店へ高知市の或る古本店からの來信に大阪某書店等二三店が旺んに高知地方の新聞紙上へ古本買入廣告を發表し剩へ値段迄公表されるので、同地古本業者は營業上非常に迷惑を感じ大恐慌を來して居る、何等か之が對策を執り相場も大阪以上に買入れるか左なくば大阪方面の同業者が來高しても不賣同盟を斷行しやうかと目下其相談中であると、因に該報は公式のものではないが孰れ何等かの形式に依つて發表されるらしい。

月報の二文章を讀んで

思ひ出したまゝ

乙宗生

我が古本界が大震災と云ふ一區劃に逢ふてから只さへ變動の多い稀本と絶版物に大なる影響を與へた、和本は兎に角洋本の或一部の書が品不足と共にその價格も鰻上りに登つて停止する處を知らない、從つて明治時代から晩年を經て大正十年位の出版物に對し異樣な眼を見張つて、薄いつまらぬ本にさへ細かい注意を拂つて賣買さるゝようになつた。

その間にあつて、やれ即賣會だ、珍本の展覽會だと矢つぎ早に人の心をあほつた結果前々から多少氣のあつた素人の好者連が豆本の蒐集や一號雜誌、初版物と棚の下積を氣にしながら埃にまみれた汚れた本を引出して買ふて行くが古本屋も近頃その好者連にかぶれて、素人以上に持てはやしている。前號古本價値の定め方に就ての文にある一部の古本屋が神經衰弱に懸つていると云はれたがそうかも知れない、かく云ふ私もその一人であるらしい。

それかあらぬか近頃出版元に代つて價格の改正をなす人がある絶版でもない本を絶版と云ふのはその本の價値をより以上大ならしめて別にとがむべきでないが舊定價であるにも係らず定價を改正するのは全く宜しくない、如何なる書物でも價さへ上げたらと云ふ調子でぺた〳〵と改正をほどこす店もある巧みなる方法ならばまだしも鉛筆で舊定價を擦つてあたら名書籍もこれではと眉をひそめしめる。

私はこう云ふ人々に古書月報に曾て掲載された「本を愛する心」を再讀して頂きたいと思ふ。

尙奥附を引外して終つたり、下卷の字を唾で擦つて下まで破損を生じさせたりするのを地方で見受けた。過日某店で客の注文で源氏物語を買ふたら卷中半ページ切斷されあるを中央にして前後のページにのりを附けてごまかしてあつた、知らずに買つてそのまゝ先に渡して後で客から注意せられて非常に赤面した、無形の損害を受くる事の大なることより甚だしいはない。斯くなる事は只に本を傷けるのみでなく、自分の人格をも傷ける心ない業である。いつ頃の事か忘れて終つたが東京の銀座の露店に出して居る一人の本屋が奥深い所に陳列してある本を客の望みによつて取るのでさへ足の踏み入れる本を他に除けて本を客に見せたと云ふゆかしい話しを聞いている、今私は露店時代に於ける亂暴と無智を悔いて本を扱つているのは事實である。

モヨホシ

▲洋本即賣會の成績　同十四、十五日の兩日南區浪速倶樂部と日本橋倶樂部の二會場

▲市川新升氏の賣立　十一月十一日堀江書林倶樂部で古典會主催 [illegible]

本屋索引（一）

（禁轉載） 文一郎編

第一 地誌篇

(A) 名所本

書名	冊數
都名所圖會 拾遺共	十一冊
都林泉名所圖會	六冊
扁額軌範 一名都繪馬鑑	五冊
大和名所圖會	七冊
河內名所圖會	六冊
和泉名所圖會	四冊
攝津名所圖會	十二冊
住吉名勝圖會	五冊
五畿內產物圖會	五冊
紀伊國名所圖會	二十三冊
野山名靈集	五冊
東海道名勝圖會	六冊
近江名所圖會	四冊
伊勢參宮名所圖會	六冊
神都名勝志	七冊
尾張名所圖會	十三冊
木曾路名所圖會	七冊
善光寺道名所圖會	五冊
江戶名所圖會	二十冊
成田名所圖會	五冊
鹿島名所圖會 一名鹿島志	二冊
利根川圖志	六冊
日光山志	五冊
上野名跡志	七冊
東國名勝志	五冊
甲斐叢記	十冊
信濃奇勝錄	五冊
北越雪譜	七冊
播州名所巡覽圖會	五冊
備中國名勝圖會 一名名勝考	二冊
嚴島圖會	十冊
嚴島繪馬鑑	五冊
八江萩名所圖畫	七冊
淡路名所圖會	五冊
阿波名所圖會	二冊
讚岐國名勝圖會	七冊
金比羅參詣名所圖會	六冊
愛媛面影	五冊
三國名勝圖會 薩隅日	二十冊
西國三十三所名所圖會	十冊
二十四輩順拜圖會	十冊
日本山海名物圖會	五冊
日本山海名產圖會	五冊
日本名山圖會	三冊
唐土名山圖會	三冊
唐土名勝圖會	六冊
清俗紀聞	六冊

(附記)

本屋索引は私の手控にすぎませんが、併し皆さんも煩雜な書名冊數に對して何かしらうろ覺えでこの索引やうのものを必要としてゐられることゝ信じますから之の發表も無意義に終りはしないだらうと思ひます、號を重ぬるに從つて追々と皆樣の御期待に背かぬやうになるだらうと思ひます、著者刊行年月はわざと今後共省きます、次號には大阪に關するものを掲げたいと思つてゐます。

絶版書復活譚（二）

▲・・・・・萬葉集代匠記　文學博士 木村正辭校訂

菊判全六冊總クロース製、天金、背入、每冊平均六百餘頁、定價三十、十四年十月卅一日迄ニ特價一時拂　分納　十六圓、東京早稻田大學出版部發行

契沖阿闍梨の撰した事は誰しも知る所、久しく絶版であつて、舊版は紙表紙、十六冊に分れて居たものを復興してクロース裝訂六冊にしたもの、內容は少しも變つて居ない、それも其筈紙型が震災に遭はなかつたので摺直したものであるさうだ。新版の第一輯は代匠記卷の一より四まで第二輯は卷の五より九まで第三輯は卷の十より十四まで第四輯は卷の十五より二十まで第五輯は目錄代匠記、總釋（雜說、枕詞、人名、地名、物名等）及拾遺（注釋の補遺）第六輯は附錄、萬葉集三辨證（訓義辨證、字音辨證、文字辨證）以上である、只五輯の中に總目錄としてその記事所在の卷數丁數を附記して檢索の便に供した事が新らたまつて居る位である。

紙型で摺つたので幾らか鮮明を缺いて居るらしい、大體此本は絶版中三四十圓の間を稱へられたのが復活版で三十圓と云ふのであるから餘り安くなつたやうにも思はれないが、假綴をクロース裝訂美本にした所に變改低廉になつたやうである。然し近く大阪朝日新聞からモット完璧した代匠記即ち契沖全集十一卷が出版されその中に下河邊長流の遺稿も含まれるさうである。

▲・・・・・工業大辭書　東京 同文舘發行

四六倍判天金總クロースコーネル製、六號三段組四千七百餘頁全五册定價百圓一時拂特價八十二圓締切十月二十日

絶版中でも定價より上廻りした例はなかつたらしいから、新版が出來て見れば古本市價は尙安くなる勘定である兎に角陸續として復活される絶版書に就ては餘程注意を拂はないとヒドイ眼に遭はされる。

▲・・・・漢文大系（金色本）　東京 富山房發行

撰範覆刻全十二卷、各卷八百頁乃至上頁、天金布製薄形美本、定價各一册六圓特價五圓五十錢

最近發表せられた新聞廣告を見ると金色裝訂の漢文大系が復活されさうに書いて居る。今迄の分は多少厚過ぎたので取扱の便利の爲め薄形高雅に然も艶消金クロース裝訂としてあるので金色燦然たるものか金を含んだ白いクロースかゞ判明し兼ねる先づ十二卷迄を上梓するので二十二卷を完成さすには餘程時日を要する事であり以前の金クロースのやうな立派なものが出來るかどうか。

▲・・・・・・・・・・木公雜記の見佳壽子氏に（該月報十四號に對し）答ふ

典籍之研究第二號香文私記に書いた文意に對して劍討された事によつて茲にお答へをする「我同業者の常態を描寫してかくも醜惡を極めた言辭云々」と麗文で眞向正面から斬り込まれたのには恐縮したお說の如く一部の人々、と附記して居らなかつたのは私の失態で粗忽であつた、此点は平に陳謝お詫をする。

私の眼界が狹い故に舊習の腦味噌で襲套的に青い眼鏡（？）で見たから古物を取扱ふものゝ因襲性行否――自然的本能を解剖したので「かく嫌惡の情を催すと」大きく且ついたくヒボコンデリー式に直覺否直感され

たのであらうと想ふ、私の頭の古いのと、尤も新らしい所謂新進氣鋭の潑溂たる鮮かな頭の見方感じ方が茲に天地月鼈の差が生じた、私は古書を扱ふ日が余りに古くないから元の新本屋の考へ――感じを率直に述べた、夫れが忌諱に觸れたのである。夫れ等の性行を一掃されたのを懽ぶ文章が菲才拙文のために不圖も筆禍したのであらう、風なくば波も立たずだが、風もなくば蟲害もある、五風十雨と云ふこともあるでナァ、、オット又筆禍にかゝる恐ろしや〳〵典籍之研究を編輯して居る時は全くはんや氣質を離れて居る、氣分丈けは操觚者の積りになつて居るので商人根性を離脫したからツイ脫線もする。

私は現在の同業諸氏がその偏狭性(因襲的)が全く消滅して商業道德も行はれ、德義も他業に誇るに足るやうに宏量になられて居る事をこゝに附記して歸稗の終りを告げる事にしやう。(芦城生)

▲本紙新年號增頁▼

各位の御投稿を特に切望致します

▲締切十二月十日▼

同人の著書と休刊雜誌

▲公立社書店主藤堂卓氏は其梁城文庫に收められた明治大正年間の俳書を土臺として「俳書目錄」なるものを過般發行した、小本和裝四十頁程の瀟洒なもので、定價五十錢、氏曰く「明治俳書に珍本なし」と、さうでもないだらう少さな本ほど今日却つて散逸して仕舞つたやうなものがあるだらう。兎に角參考の爲め座右に一本は備へ置くべきであらうと思ふ

▲森谷書店主森谷清松氏は又右と前後して「富士」を發行した、古今富士山に關する文獻の凡ゆるものゝ書目らしい。袖珍本四半截位の四角な可愛らしい本で所謂豆本に屬する型三十六頁、奥附には珍聞閑文舍發行とある氏の凝り性が總てに顯れて居る床しいもの、但し其の書目の全部が氏の藏書でない事は勿論で藤堂氏の俳書目錄とは行き方が違ふ、方々の圖書館目錄や自己藏書や是迄見聞したものを收載されたものであるが富士山に關する記事の登載された各雜誌に迄及んで居るのはチト煩雜に過ぎて却て苦勞の種ではないからうか。妄言多謝

▲だるまや發行郷土趣味雜誌「難波津」一は號を逐ふて益々整備の域に入らんとして居たが、今回其第二十號に當り一時休刊を宣せられた、惜しい哉、此種雜誌の存在を他に見ざる今日、何とか萬難を排して再刊の道を講せられん事を望んで已まない。

▲玉樹廬城氏の「典籍之研究」第三號將に發行されんとす、日夜東奔西走、天晴名士の金章玉句を蒐めて誌上絢又燦ゝ、大いに鳴物の喧しきものあり、折角多幸健全たるを祈る。

雜感一二

B・S生

頃日私は青山、齋藤兩兄編輯の無料雜誌「愛書趣味」創刊號を頂戴して大變嬉れしく思つた事であるが、近頃古書蒐集家が非常に眞摯になつて來た事である。今迄單に自分の道樂趣味から古書漁りをして珍書を書架深く藏して獨り悅に入つて居る人々が多く其の間何等の研究心がなく書籍を死藏するかの如く見うけられたものであつたが、此頃の愛書家には追々と此樣な人々が少くなつたことは何よりも賀すべき事だと思ふ。「愛書趣味」に於ても明治大正文學の研究を標榜して書史學上貢献する處大なるは單に二三愛書家の道樂出版とは云へ近來最も推奬すべき美擧であると思ふ。

それについて思ふ事は近頃實に驚く程頻々と書籍研究雜誌の發行を見る事であつて、私は試にその誌名を次に列擧するが如何に愛書熱が盛であるかはこの一事實がよく物語るではないか。

誌名	創刊	發行地
書物往來	大正十三、五、一創刊	東京
讀書人	大正十三、九、一創刊	東京
著書及藏書	大正十四、二、二七創刊	東京
書史	大正十四、四、一九創刊	大阪
書物禮讃	大正十四、六、一創刊	京都
典籍之研究	大正十四、七、一五創刊	大阪
ブックマン	大正十四、九、一創刊	東京
書誌	大正十四、一〇、一五創刊	東京
愛書趣味	大正十四、一〇、二〇創刊	神奈川

本年に入つてから既に七種以上の雜誌が發刊されたことはおそらく古今未曾有とも云ふべく私は之等の諸雜誌に對して衷心より永續發刊されんことを希望するものである。

書籍の考証解題批評等の研究と云ふことは流行的な浮調子で出來上るものでは決してないのであつて、かの尾崎雅嘉の「群書一覽」と云ひ澁江全善森立之の「經籍訪古志」の如き我國書史學上最も貴重なる文獻の一つでこれ等は彼等畢生の苦心によるものである。書誌學(ビブリオグラフイ)の至難にしてやゝもすれば椽の下の力持に終る所以、勞多くして功之にともない難きはすでに明なることではないか。私は今や全國的に此種研究の隆盛なる時にあたつて、各位おの〳〵協力して最も榮ある文獻を後世にのこされるやう希望して止まないものである。共倒れにならぬやう老婆心を起す所以である。(大正十四、一一、二六)

古本市の變遷と其の環境(五)

永樂町人

(四)石川の市(下)

石川の市での中心的人物は何んと云つても矢張り荒木サンと長谷川氏を推さなければならない。其買振りの如きも荒木サンは比較的一流品でないと買はない、松要老は割方安物に目を着ける、と云ふのは當時は今のやうに夜店へ行く同業者が直々に市へは來て居なかつた樣で、それ等の人々の爲めに元賣捌とでも云ひたい方針を執つて居たのが松要老であるから、從つて夜店向のやうな品物

を山程買ひ占めては、翌朝板車にギッシリ山盛りにして持つて歸る、それで金高が二三十圓乃至は四五十圓と云ふのだから驚かざるを得ない。すると松要の店先では此品物を買ふべく夜店連が待構へて居ると云ふ有樣で、此頃ならばこんな廻り遠い事をしないでドシ／＼と市場へ乘込んで勝手に好いた物を買ふに違ひないが、凡べてに呑氣でそして初心な處があり、錢儲けもモツト容易に出來たらしいのである。

荒木サンが上物で松要ハンが安物其中間の一寸數のある物とか白ぽい物とか、つまり前の二人の買殘した手を出さない物は何んでも彼でも買ふと云ふのが長谷川ハンの方針で、夫々チャンと役者が揃つて居た。それで長谷川ハンは市の用事も手傳ひ隨分融通の利いた人であつた。帳合は以前に云ふた今神戶に在る谷サンや羽間ハンなんかゞ代り／＼遣つて居たと云ふ。チョット忘れて居たが茲に夫等の人々よりもモツト熱心な市思ひのお爺いさんがあつた、それは前回に書漏らした鳥居正之助其人である。此人が石川の市へ携はる頃には正業として本屋はして居なかつた樣であるが、ズッと以前には本屋をして居たと云ふ事を、私（永樂町人）は最近或る本の中から「滑稽人情落語百種」と云ふ縮刷百三十頁程の本を見出して、奥附を見ると明治二十六年十二月發行鳥井正英堂とあるから、此人が古く本屋をして居たと云ふ事を肯づかされたのである。さう云ふ經驗もあつたから本屋に交つて市會の世話も燒き、後には古典會の會計方にもなつて居たが、市の儲けた金を少しも配當して呉れなかつたと誰かゞコボして居た。

其頃は餘程一流品でない以上は大底括り物で、中から初心な物がコロガり出たので、近頃のやうに十枚や二十枚しかない薄ペラなものを捻ねくり廻してイヤ絶版だ珍本だと囃し立てて居るのとは話しが違ふ。然し何時の時代でも流行品と云ふものがあつて、それも刻々に變遷して行く例へば德富の「新春」が盛んに賣れたり「死線を超へて」が仲間で二圓も賣買されたりした如く石川の市時代にはバーレーや須因頓の萬國史が人氣物であり、誰やらのスペルリングが安いなりにも盛んに賣れたと云ふのも面白い推移の一つである。

又市會の景氣を附ける爲め併せて奬勵法の意味から、年末には買方賣方の一年中の統計を拵へて番附を作つた事もある、そして其第一位の人々には賣買双方共賞品を贈つたりした。確かな記憶はないが買方の一二は松要、長谷川氏邊りで、賣方は文德堂、中正の兩氏が相伯仲して居たと云ふ事である。

斯くして石川の市は時に盛衰波瀾もあつたが、兎に角明治三十三四年から大正六七年迄、足掛二十年間と云ふ永い間の繼續を見たのは、主催者側の熱心もあるが一つは集合する人々が今日各々大を爲すに到る程、當時既に一廉の嘖々たる連中を以て網羅されて居た所以であると考へられる。其永い期間には中々盡きない珍聞奇談も澤山あるらしいが、遺憾

會がなかつたのとで非常な人氣を呼んで、豫想外の成績を擧げ當地即賣會としての新記錄を作つたさうで、同人達はホク／＼ものであつた。

倍加されて居るか／＼で、どちらかと云へば今一層の成績を得なかつたのは、曩の和本即賣會の後を受けて多少立遲れの姿であつたからである

ながら編者が實見して居ない事柄なので隔靴搔痒の憾があつて仕様がない。けれ共可成努力して先輩から拜聽する毎に稿を更めて諸君に見へる事とさする。

終りに當時使用された銀目の概略を記して此稿を擱筆しやう、

一リョウ　四匁二厘　　ナンリョウ　七錢五厘
ゼ一　十匁　　一分　十五錢
五リョウ　廿一錢五厘　　觀音　二十三錢
一枚　四十二貫　　小判　六十錢
二枚　八十六貫　　百日　一圓
三枚　一圓三十錢　　百五十日　一圓五十錢
十枚　四圓三十錢　　五百日　五圓
一貫目　十圓

これは今でも道具屋や古着屋の市へ行くと此種の隨分面倒な銀目を使つて居るが我古本界でも昔は—否ッイ此間まで此銀目がセリ市に徘徊して居たが何時の頃からか陰を潜めて仕舞つたのである一寸見ると非常に面倒のやうにも思はれるが馴れて仕舞へばさうでもない、けれ共よく腹に疊み込んで置かぬと突差の場合例へば二十錢と呼掛けて居る橫合から五リョウさ云つてタッタ一錢五厘違で取つて仕舞はれたり、八十五錢と呼んで居る後からニ枚と云つて僅か一錢の事でる餘所へ行つて仕舞ふやうな事は今の入札にも間々ある例である。（此稿了）

「コショクラブ」　投稿歡迎

○東京の知名の書店主が今度古本部を新たに開設するに就て下阪し諸店を訪ずれてこられた從來東京の買行きし品の豫想を裏切つて、不思議に妙な者のみであつたには驚いた、私は思つた、どんな本でもむざ〳〵ップして終ふ事を考へねばならぬ〟と

○本屋をして居つたら英語位讀める者と思つた人がモウパッサンの女の一生の原書の一部分を指さして君こゝを讀んで見給へ隨分露骨に書いてあるぜ……

○或店で一寸珍らしい本だと思つて手に取つて價を問ふたらそこの主人、そうですな高尾さんの目錄に參圓とありますから、まその八掛位にして置きましよ。

○（古書の組合に這入つたら、何ぞ利益がおまつか……）こうした問に接して私は困つた、只さ——と云ふより外に（

○月報の廣告欄に時折欠本の廣告が出ている若干の廣告料が入るらしいが、こんな事は會員に無料にしてはどうだろう。

○**カズオ**書店の目錄を拜見した、さすがに趣味豐かで風流味がある、短歌か詩の雜誌を見るようだとは僕のみの批評でない、誌上の古本屋は振つている、好漢自愛を望む。

（桃谷生）

謹啓　各位益々御繁榮御勇健之段奉大慶存候當市會義皆樣の御眷顧御引立に依り以御蔭日增盛大に趣き候段厚く御禮申上候就而今回會員協議上會務を擴張致度從前の七の日市會の外に更に五日十五日を差加へ月五回の定例市會と相定め開催可致候間何卒萬障御繰合せ御來會多數御出品成被下度偏に奉願上候一々參堂御案內可申上筈の處乍略儀以紙上御挨拶申上度如斯御座候

毎月　五日、十五日及七ノ日　三回

大正十四年十二月

南區御藏跡町十二（公園南）

佐藤會市場

會員一同

大正十四年十二月五日第十五號發行　發行兼編輯人　松本正治　發行所　大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東へ入　大阪古書籍商組合事務所

大阪古書組合月報

迎春の辭

神路の山みねいや高く
五十鈴の河水いと清く
九重の大奥いと榮えにまし〳〵て五穀豐穰、庶民國土
泰平を謳ひ鼓をうつて喜ぶ
顧みれば我邦文化文藝の進展は近時頓に各邦を凌駕
す吾等この地に生を享くものその恩慶を欣ばざるべ
けん哉、吾等幸ひにして先哲古賢の書を鬻ぐもの他
業と聊か異にする所多し、よつて須らく國家的感念
を以て聖恩に酬ひざる可からず、年茲に改まると
共に層一層同業組合の親睦と斯業の發展とを圖り我
邦文化の光輝を燦然たらしめざるべからず
謹んで丙寅の歳を迎ふる辭と云爾。

大正拾五年一月一日　大阪古書籍商組合事務所發行
（第十六號）

組合員移動

▲新加入者
北區堂島中一丁目五四
サクラヤ　田村芳之助氏

▲移轉
港區大正通六丁目一三
倉地隆一氏

▲訂正
住吉區天王寺町二一〇一ノ三
集珍書房　小倉規一氏

▲第十五回定例役員會

（十二月二十日）於日本橋倶樂部午後二時より定例役員會を開く、劈頭別項記載の如く今回成立したる大阪古書市場協會及其申合等を披露し次に來春早々開かるべき第三回組合定期總會の件に付別掲の通り取決めて四時半散會す、來會役員十五名

▲大阪古書市場協會成立

近來著しく其數を增したる大阪古書組合下に於ける各市場は相互間種々なる利害得失に關し、益々其親睦提携の必要を感じ、去る十二月六日十日、十六日の三回に亘り之が關係市會代表者の會合を見、協議を凝らしたる結果多年の宿題も遂に芽出度く其第一階梯に到達し、所謂懇親的互讓共存の精神に基き、大阪古書市場協會なるものを組織し、若干の申合的規約を作製したり。就ては一應組合の贊同諒解を得る爲めさて十二月二十日の評議員會に披露し併せて其諒解を求められたる次第なり、因に同協會加盟市會及其代表幹事左の如し

市會	代表幹事
西野田倶樂部	國枝信郎
書友會市場	伊藤一男
日本橋筋聯合市會	杉山末吉
書榮會市場	四方耕太郎
佐藤市場	佐藤光次郎
日本橋倶樂部	森谷清松
古典會	石川留吉
同友會市場	村瀬藤吉

謹告

組合規約第十七條ニ依リ來ル十五年一月十日午後一時ヨリ日本橋倶樂部ニ於テ第三回定時總會開催仕度候間萬障御繰合御出席相成度右御通知申上候

一組合規約改正ノ件
一役員改選ノ件　以上

十四年十二月二十日

▲注意▼

曩に市區改正に依り組合員名簿中訂正箇所を生じ町名地番其他變更訂正の申込を再三月報紙上にて請求したるも其申込は極く少數に過ぎざるを以て今回之が校正刷を各位の手許へ同送仕り來るべき組合定時總會迄に御訂正御申込なき分は變更なきものと看做し確定印刷可仕候間右特に御注意相成度候

大阪古書籍商組合事務所

▲十四年度役員出席表

最近新聞廣告についての對話

甲『おめでたう』

乙『イヤお目出たう』

甲『どうです去年はヨウ儲かりましたか』

乙『イヤ中々儲かりませんネ』

甲『君のやうにアノ位モガイて居て儲からないとは妙ですな』

乙『モガくは恐れ入りましたな。私等のはモガいて居ても公私混淆して何をモガいて居るのか結局自營の場合が少ないのかも知れませんよ』

甲『其點では御互ひにネ、賢い人は笑つてますヨ』

乙『馬鹿の骨頂ですな、他人の事迄齷齪して自分の金儲を等閑にするなんて、チト新年から改革しやうじやありませんか』

甲『それに就てネ、昨秋來盛んに行はれる同業者の新聞廣告です』

乙『ハアあの値段を明記して客を釣るヤツですか』

甲『世評はどう言つてますな』

乙『イヤ、あちこちで非難の聲を聞きますよ、一度評議員會に相談しやうかなんて言つて居た人もあつたやうです』

甲『實際目的の爲めには手段を選ばないにも程度がありますからネ』

乙『然し先生等は大いに新機軸のつもりで大發見でもしたやうな心持で居るかも知れませんヨ』

甲『デモ前號月報を見ると、高知邊りの古本屋からも苦情を云つて來てるやうですな』

乙『然うです、ア、云ふ風になると單なる當地ばかりの問題ではありませんからネ、何んとか反省的に改革をして貰はんと』

甲『ドウモ商業道德から論じると面白くありませんネ、迷惑を被むる者は組合員全般に及ぶんですからな』

乙『然し其又上を行く廣告が出て居したよ』

甲『ソウ／＼谷總本店ですか、あれは超努級的のものですな』

乙『谷サンは云つてましたよ、ア、云ふ風に値段を發表されると實に邪魔になつて困るから、ソコで挑戰的にソレ以上に買入れると宣言したさうです、ですから第一發表者が鉾を收めたら自然谷サシも中止するでせうヨ』

甲『そうですか面白い現象ですな、それで第一廣告者が改善せなければ何處迄追ッ驅けるんだらうね、全く走馬燈のやうですな』

乙『マア、もう暫くは傍觀するんですな、其上尙續行されるやうでしたら又何んとか御相談しませうヨ』

甲『デは御委せしますヨ、餘り新年早々から憎まれ口も感心しませんからネ』

乙『それよりか朝暾でも拜して大自然に向つて深呼吸でも試みるんですな、そして晴らやかな淸淨な氣分に浸りたいと思ひますヨ』

甲『同感です』

組合員外の方にて本紙御希望の向は郵送料一ヶ年分二十四錢封入の上左記へ御申込ありたし
南區鹽町二ノ一八　鹿田文一郎

辰田書店
辰田安吉
此花區上福島北三丁目一九八

正文堂書店
村上政七
西淀川區浦江町五七五ノ一

カズオ書店
伊藤一男
北區老松町二丁目

公立社書店
藤堂卓
南區日本橋南詰

天牛書店
天牛新一郎
店員一同

林成美堂書店
東區東雲町二丁目

紙上
名刺交換會

謹賀新年

甚だ乍勝手御同業者
各位への賀状を廢し
以紙上御挨拶申上候

大正丙寅元旦　（到着順）

伊藤書店
伊藤靜三
東區島町二丁目

民衆閣書店
北村元助
住吉區天王寺町四八九

柳屋支店
東區平野町

玉樹香文房
典籍之研究社
西成區玉出町九七九

梁江堂　杉本要
天王寺區上本町七丁目

中央堂書店
松本正治
氏野留松

古書販賣目録に就て

豚珍漢生

近頃古書の需要が著しく增加し來れる事は驚くばかりで過ぎし十年の昔を顧りみれば實に隔世の感がある殊に震災後の古本熱は『書物往來』の發刊を一期劃として益々高まりつゝある。業界の爲めに喜ばしき限りである。然し古本熱がかゝる勢を以て猛進しつゝある一方その價格が異常の騰貴を來し讀書子をなやましつゝあるのは事實である。

我々はその理由を震災にあるとする、之は當然の事であらふ。幾百萬册とも知れぬ書籍が一朝にして烏有に歸した。圖書舘は貴重な資料をなくした。學者は必要な本を燒いてしまつた。愛書家は折角苦心して蒐集した本を一册も持出さず燒いてしまつた。そこで所謂絶版書なるものが增加して定價より幾割、幾倍、かつ高い値で買はねばならないといふ珍現象が現れた。讀書家、愛書家の增加、讀書趣味の向上、等、等、等。

供給の減少と需要の增加に依る價格の騰貴はやむを得ない事ではあるけれども、その停止する所を知らぬ猛騰の原因をたづねて見ると、その一部は我々同業者にあるのではなかろふか。

近頃大阪でも盛んに販賣目録が發行されてゐるといふ事である。業界繁昌の徵として洵に慶賀に堪へぬ次第であるが往々その價値の如何を問はずいたづらに高い値段を附してあるのを見る事がある。

古本屋の販賣目録が讀書人にとつて殊に重寶なものであるだけその相場が確定的な標準價となつて行くのはあたりまへである。又甲の店の目録に依つて乙の店に高く賣るヒントを與へる事がある。乙が五圓の賣價の本を甲の目録に八圓とあれば當然八圓に賣つてゐる事がある。これ等はいたし方のない事であると云つてしまへばそれまでだが書物を單なる商品と考へる事の出來ない迂生にとつてはそれが正しい商ひであるとは思はれない。目録の話をするつもりがいらぬおせつかいを申し上げてすまない。

先月の中旬一誠堂に酒井君をたづねると豫ねて編纂中であつた目録が出來たからと云つて一本を贈られた見ると菊版七百八十余頁總クロス製の大册である。一年有余の歳月と四千幾百圓の費用をかけて和漢洋に亘る二萬數千余点の販賣目録を出した酒井君の努力とその度胸の好さには實に敬服の外はない。これも斯界から見ればとやかくと非難もあろふけれど日本の古本屋にもこれだけの目録を編纂發行する店があるといふだけで我々は大いに意を強くする事が出來ると思ふ。

和本の販賣目録では松雲堂の古典聚目創刊以來三十五ヶ年第百號がこの十一月に發行された卷頭に內藤湖南、大槻如電、幸田成友諸氏の先代古井翁追懷談が載つてある。堅實を店則とする松雲堂が發展の歷史を物語つて床かしく。四六版百五十頁。

創業弘化元年一百號の文字も西洋の古本屋にまけないうれしさである。兎に角く最近東西の店からこの二大書目の發行をみた事は業界の爲め慶賀の至りである。

しかしこの目錄も西洋にくらべるとその編纂方法には遺憾の個所が少くないと思ふ。

外國の古本屋の目錄をみると實に立派なものがある。獨逸のヒーゼマンと云ふ店では一部門づゝの專門的のカタログを毎月出してゐるこれなどは立派なリテラツールで特に貴重な稀書にはおしげもなくタイトルページと内容二三葉の寫眞を挿入してゐる。又ライプチッヒのケーラー、ウント、ホルクマールはデア、アンチクアリアーツ、マルクトと題する週刊の古書目錄を出して世界的に活躍してゐる。

珍書專門の店ではロンドンのマーグスブラザー、カリッチ、マドリードのビクトリア、ヴインデルなどは歷史も古いが實に立派な目錄で數十葉の挿畫を挿入し解題などが詳細に附してある。これなどは大學圖書館あたりにはなくてはならないものであろふ。

世界的に書籍を蒐集して居られる大鳥富士太郎氏は最近このヴインデルの目錄の合本に數百金をとうじて外國から取寄せられたといふ事である。

此等をみても我々が將來目錄を編纂するにあたつて改良を加へるべき點が多くある事と信ずる。

目錄に就いてまだ〳〵書きたい事があるが紙面の都合で又稿を改めて。（十二月五日記）

書籍に就ての詞藻

大江生

親のおやの　世をくみ知らる水莖の　跡や子の子の　しるべにせん　　春滿

下り行　この世のさがも知らざらん　書みて遠き跡を問はずば　　春海

ぬしや誰　見ぬ世のことを寫し行く　年のすさびの浮ぶ面かげ　　定家

昔今ひとの言の葉　はな紅葉　ふでの林のうへにこそ見れ　　乾門院

しのぶべき人もや　あると濱千鳥　かきおく跡を世に遺すかな　　乾門院

寫しおきて神代のことも曇りなき　書こそ道の鏡とは見れ　　儀同三司

書よめば大和もろこし昔いま　萬のことを知るぞうれしき　　宣長

書よめば　昔の人もなかりけり　皆いまもある我が友にして　　宣長

書よまで　何つれ〳〵に慰まん　春さめ頃我のながき代　　光圀

百千卷　ちまきのふみも尋ぬれど　我身ひとつの敎なりけり　　清濱臣

學問は尻からぬける螢かな　　蕪村

つとめよと親もあたらぬ火燵哉　　嵐雪

勸學院の雀は蒙求を囀り知者の邊の童は習はぬ經を讀む　　續狂言記

故きを溫ねて新しきを知るは其の人ある希なり　　續日本紀

朝朝に益し暮に習ひ小心翼翼たれ　　管子

多く見る者は博く、聞く者は知あり　　鹽鐵論

玉琢かざれば器を成さず人學はざれは行を成さず　　韓詩外傳

學ひて已まず棺を闔て乃ち止む　　韓詩外傳

子に黄金滿籯を遺すは一經に如かず　　漢書

人智を益すること書籍に若くはなし　　楊子

女は丹華の窕を亂るを惡み書は淫辭の法度を屈するを惡む　　楊子

鶴籠を開く處に君子を見書卷展く時に故人に逢ふ　白居易

開かざる書籍は木片に等し　英吉利

善良なる書籍は生ける威大なる人物血なり　ミルトン

書籍は活用の道を教へず　ベーコン

書籍の良否は其の表紙によりて判すべからず　英吉利

ひまあるを待て讀書せんとほつせば讀む時なし　易經

良書に優る良友なし　英吉利

（終り）

人相書の正邪に就いて

星山人

人相手相の本は澤山にあるけれども一冊として正しい本は無いと斷言する事が出來る、若し是れが正しい人相書だ、手相書だと言ふて只一冊でも提出する人あらば、余は立所に其正しからさる點を多く指摘する事が出來ると思ふ、殊に惡書の多い事は驚くばかりで、一つも信用する事が出來ぬ、人相手相の書は斯の如く無責任極まる者許りであるが、然かし書中の全部が不正許りと言ふ譯では無い、書中の一部には正しい所もあるから、正しい所の多い本を參考として自分の研究に由つて、其不正の所を摘み出すより外に仕方が無いのである、此の意味に於て從來の人相手相の本の中から參考と成るべき書籍を紹介して見よう。支那に在つては神相全篇、日本に在つては人相水鏡集、相法言彥解、西洋物の飜譯書としては讀顏術、以上四冊より外には參考して宜いと云ふべき物は無い。

水野南北著の南北相法は、神相全篇と相法言彥解とを參考して、而して自已の實驗談を書き加へた物であるから、神相全篇と相法言彥解とを充分に腹に入れたら、南北相法は自然に記述さるべき筈の物だ。

平澤菜の書いた人相千百年眼と云ふ本は、神相全篇の中の記述と、相法言彥解の乙の記述とを混和して、人相千百年眼の丙の記述とした物で、顏面の場所違ひを二つ寄せて、而して已れの人相本の他の場所の解釋に用いて居る、又此書の圖面を見ると神相全篇と相法言彥解とから盜んで來て、而かも盜んで來たと思はれない爲めに、圖面に惡訂を施し且つ其名稱までも變へて居る、此書の如きは後世の學者を誤る事甚しく惡書中の惡書である。必ず此の樣な書は讀むべき者でない害あるだけで、益する點は害する點を償ふ事が出來ない不都合な書物である。

博文館發行日用百科全書の內、易占及骨相法と題する本の中で、骨相人相手相を記述した所があるが、その八九分迄は人相千百年眼の轉載である。博文館は信用ある書肆であるけれども、其發行書の中には斯う云ふクヅもあるから、發行所を見て直ちに其書籍を信用する事は危險である、此書の如きは纔かに後世誤られたる學者の一人である、而して其の誤られたる學者の著書は、再び後人を誤る事が多い、此外是れに類した本は澤山あるから、余は茲に特に注意して置く次第である、此外の書に就ては餘り惜まれ口を利かずに置く事とする。

初市 四日
書榮會市場
天王寺區北日東町四七（四方内）

初市 五日
書友會市場
北區曾根崎上二丁目（梅田屋書店内）

初市 六日
日本橋倶樂部
南區日本橋一丁目交叉點北辻東入

初市 六日
西野田倶樂部
此花區龜甲町二丁目（松要書店内）

謹賀新年

相變らず御愛顧之程希上候

初市御案内

初市 七日
佐藤市會
天王寺區御藏跡公園南

初市 八日
古典會
西區南堀江（書林倶樂部）

初市 八日
同友會市場
港區九條中通一丁目交叉點（奥田書店方）

初市 十三日
日本橋筋聯合會
南區日本橋四丁目（五階倶樂部内）

モヨホシ

逢着して居たが遂に目出度最後の五分時に於て各方面の懐疑も一掃し、急轉直下共成立を見た

爲めに、該聯合會に對し、飽くまで純たる市會本位、地理的融和親睦の會合たる事を望むと同

市があつた、和本は珍品揃ひで可なりの盛會であつたらしい。

▲聯合會市の發會

當初種々の難問題に……大いに吾人の意を得たるものとして衷心より感謝するものであつた、希くば大阪古書組合を尊重するが故に、其神聖を永く光輝あらしめんが……復活第一回の會合を催した、之に就て多少詳報をもたらして居るがそれは古本市の變遷に於て書いて見たいと思ふ。

日本交通史書目解題（一）

芳水生

本編は『各科變遷史書目解題』[1]の一部たる交通編で、範圍を運輸、驛遞、郵便に及ぼして居る。書籍の解題は、客觀的記述のみならず、内面的にも見るべきが至當であると考へて居りながら、尚本編が客觀的記述のみに終つたのは誠に物足りないが餘暇の仕事であるので、これも止むを得ない次第である。

(1)本稿は各分科の編年的記述をなしたもの許りを蒐めるそして此題名は未定稿である

(2)發行年月は特に記入したものの外皆第一版のものを示す。

交通論　一冊　伊藤重治郎編　(2)大正五年十二月發行

「第一編」が發行されたのみである。內容は第一章「交通ノ概念」以下第十二章「交通政策」までに分けられ其內第四章に本邦交通發達略史がある、其細目を擧げると第一節上古及王朝時代（第一款上古時代、第二款王朝時代）第二節中古時代（第一款鎌倉時代、第二款足利時代）第三節德川時代（第一款總說、第二款驛傳、第三款交通政策、第四款町飛脚、第五款內水航、第六款御朱印船、第七款地方海運、第八款菱垣及樽回航）第四節明治時代である。寶文館發行

交通發達史　一冊　博文館編　明治三十九年十一月發行

雜誌「太陽」の臨時增刊、明治史の第五編として發行されたものであつて、明治以後の交通帝國通信の發達、通信政策の變遷、行政官署の變遷、帝國郵便の始祖、飛脚業の減落、明治海運の發達等主として明治時代交通の歷史を書いたものである　東京博文館發行

明治運輸史　一冊　宮本源之助氏著　大正二年十二月發行

內容を序編、陸運、海運、運送取扱業、動力の諸編に分けて、明治以後の運輸沿革を記述してある

運輸五十年史　一冊　運輸五十年史編纂局編　大正六年八月發行

維新後五十年間の運輸の歷史を統計的に詳細に亘つて記述したもので第一編序論、第二編鐵道、第三編海運、第四編道路及水路、第五編舊時代の交通機關、第六編燃料及動力、第七編運送取扱業附錄の諸編に分け此等運輸に關する寫眞版が隨所に挿入してある。運輸日報社發行

日本鐵道史　三冊　鐵道省編　大正十年八月發行

鐵道五十年記念として發行せられたもので上編鐵道創始時代は、明治二十五年鐵道敷設法公布までの沿革、中編官私鐵道並進時代は明治二十六年より明治三十九年鐵道國有法公布迄の沿革、下編鐵道國有時代は、明治四十年以降の沿革を敍してある。鐵道省發行

臺灣鐵道史　三冊（未定稿）　臺灣總督府鐵道部編

上　明治四十三年九月發行

第一篇　清國時代に於ける鐵道（領臺以前即ち清國政府に於て經營したる本島鐵道に關する事實を蒐集す）

第二篇　領臺後の鐵道（臺灣鐵道收有以來軍事輸送、運輸營業及縱貫鐵道起工に至るまでの事實を纂輯す）及び附錄

中　明治四十四年三月發行

臺灣縱貫鐵道（明治三十二年度より明治四十一年度に至る所謂臺灣縱貫鐵道建設並改良工事に關する各般の事實中官制組織、線路測量、建設工事、鐵道用地、保存の各款に就て記す）

下　明治四十四年二月發行

臺灣縱貫鐵道（明治三十二年度より明治四十一年度に至る所謂臺灣縱貫鐵道建設並改良工事に關する各般の事項中工事材料の供給、運搬、運轉機關、工作事業、運輸營業經理、鐵道財產、人事、衛生、災害、鐵道開通式及全通式、雜の各款に就て記述す）臺灣總督府發行

朝鮮鐵道史　一冊　朝鮮總督府鐵道部編

大正四年十月發行

總說、第一期創業時代、第二期建成時代、第三期統一以後の各期に分けて朝鮮鐵道の變遷を詳細に書いてある。朝鮮總督府鐵道部發行

日本海運史資料　一冊　遞信省管船局編

明治三十七年七月發行

本邦海運史の概要を記述したもの、柴謙太郎氏の起草である。建國前後に於ける海運の狀態、政府自ら海運を司りし時代、海運を寺院大名に特許せし時代、外洋航海の特許を商人に與へたりし時代、海外航行を禁じたる時代の諸編に分けてある。遞信省發行

日本海運論　一冊　日本經濟會編

明治二十七年四月發行

日本經濟會で日本海運論（第一日本海運の歷史及現在の實況第二將來の企圖）の懸賞募集を成し之れに當選した寺島成信氏（緖言第一編日本海運の沿革、第二編日本海運現在の實況、第三編日本海運將來の企圖）踏海散史氏（第一章總論、第二章古代の海運第三章現代の海運、第四章歐米の海運、第五章海運の擴張）齋藤和太郎氏（第一章日本海運の歷史、第二章海運現在の實況、第三章海運將來の企圖）の諸論文及び選外八木太一郎氏（緖言上篇過去及現在下緖將來）の論文を集めたものである日本經濟會發行（非賣品）

（未完）

或る古本屋の話

秋の夜も更けた或日の夜或町の露店に出ている古本屋の前に立つた。今まで本を讀んでいた主人が私の顔を見るなり「この間珍らしい洋本が或處から出ましたが日本橋の〇〇さんに**ねたまか**されましたと云ふ**ねた**。**まか**されたと云ふ言葉はどう云ふ風に解釋してよいか私は何となく不穩當であるように思ふ。何も知らなひ人の本を欺して買ふて行つたように思はれるので、よく聞き正して見ると、何の事言ふた價で買取つて行つたらしいに私は可笑しくなつた。此男は同業者に物を賣つた時にはこう云ふ言葉を用ひるのだろうと解釋し私も二三冊**ねたまか**して歸つた

此男でないが非常に同業者を恐ろしがる男がある聞けば無理のない事四五回重なつている。つまり掘出されたと云ふのが早分りだろう、それが爲めにすつかり仲間の人が恐ろしい者の一つになつて顔さに見たら敬遠主義を取つている。私も（考古學）を買ふてからすつかり同主義の渦中へ投ぜられた。今日はと云ふて這入つて行くとそれが如何にも厭そうな顔をするから可笑しい。そないに厭がれているのに行かなくてもと思はれるが、そこに亦物を買ふと云ふ趣味があるので、つい足が向く人物は別に厭味ある人でない話せば相當によく話して快活であるのに商賣になると妙に澁るから不思議だ。

試に一冊の本を買ほと思つて價を聞ひて見ると、大程の本はその買入の經路から話して行く、賣價の本題に入るのが仲々遠い巧みに謝絶の意味が含まれているのは云ふ迄もないが、尚も押して尋ねるとその困却の狀見る目も可笑しい様である。

或る時などは月の初めであるにも拘はらず、もう仲間賣は本月〆切ましたと云ふて、その人を煙に卷いた話がある。死んだ田里君などはその男の眞似をして皆を笑はした。

その位仲間が恐ろしいのなら素人に相當の價格で賣つているかと思つたら、私の店に來る某社の神官に（古今集）の筆禍史を一圓五十錢で宮竹氏の豆本を卅錢に引續いて賣飛しているから罪がない。

同業者でなかつたら、それで氣が濟んで居る處に面白味がある。その男の宅を訪ふた日の私の日記はいつも一枚で足りない。

（乙宗生）

本屋索引（二）

（禁轉載）　文一郎輯

第一　地誌篇

(B) 大　阪（その一）刊本之部

1 芦分船　六冊　一無軒道治　延寶三
2 難波十二景　一冊　山本洞雲　延寶四
3 大坂町盡　一冊　小本　延寶六
4 難波雀　一冊　横本　水雲子　延寶七、三
5 同跡追　一冊　同　難波隱士　延寶七、五
6 難波鶴　一冊　同　友月　延寶七、七
7 同跡追　一冊　同　蘆雪　延寶七、八
8 難波十觀　一冊　山本洞雲　延寶八
9 繪入名所名仁和鑑　六冊　一無軒道治　延寶八
10 古今芦分鶴大全　一冊　川合正俊
　天和板、貞享板、元祿板　三種
11 浪花隨筆　一冊　寶暦十
12 繪本名物浪花のながめ　五冊　隱山梅好　天明三
13 狂歌畫本浪花の梅　五冊　陰山白縑齋　寛政十二
14 難波舊地考　一冊　荒木田久老　寛政十二
15 浪速上古圖說　二冊　中村直尹　同
16 浪花なまり　二冊　魚鷹　享和二
17 女訓浪花名所　一冊　蔀關牛　天保
18 年中遊覽難波巡覽記（めぐり）　一冊　横本　春樹　同十二
19 大阪町名づくし　一冊　天保十四
20 大阪名所廻　二冊　小本　弘化二
21 繪入文章大阪往來　一冊　蔀關牛　嘉永元
22 浪華名勝帖　一冊　香川琴橋　同二
23 浪華の賑ひ　三冊　曉鐘成　安政二
24 浪花名所獨案内　一冊　安政六
25 大坂名所往來　二冊　年代不詳
26 難波名所記　六冊　同
27 攝州大坂名所記　一冊　横本　同
28 攝津大坂名所記　二冊　半紙本　同
29 春詠攝津名所　一冊　狂歌牛山齋　同
30 大阪町づくし　兩面摺　綿屋板　同
31 大阪宮寺巡り　一冊　横本　同
32 大阪寺社順拜記　一冊　同
33 大阪町手引　一冊　小本　同
34 難波丸綱目　四冊
　國華萬葉記之内　元祿十以降

（註）綱目につきては後日の再考にゆづる

35 同單行本　五冊　寶永以降
36 同　七冊　陰山三郎兵衛補　享和元以降
37 大阪町鑑　一冊　横本　小川愛道　寶暦六
38 增補大阪町鑑　一冊　同補里亭其樂　天保十三
39 增補改正大阪町鏡　兩面摺　安政二
40 增補大阪町鑑　一冊　横本　明治三
41 浪華風流繁昌記　二冊　檜垣貞種
42 浪華擷芳譜　二冊　安政四
43 浪華四時雜詞　一冊　嘉永二
44 大阪繁昌詩前編三冊　田中金峰　文久二？
45 同　後編三冊　田中華城　慶應二序
46 大阪新繁昌詩　二冊　田中内記　明治八
47 大阪繁昌雜記　二冊　奧澤信行　明治十
48 方今大阪繁昌記　二冊　石田魚門　同
49 大阪新繁昌記　一冊　明治二七
50 大阪繁昌誌　二冊　宇田川文海　明治三一
51 攝陽群談　十七冊　岡田溪志
　元祿十四（大本）享保二（半紙本）
52 攝津志　三冊　關祖衡　享保二十
53 攝津名所圖會　十二冊　秋里湘夕　寛政十

（以下次號）

清和堂書店
石川留吉
西區京町堀通二丁目

森谷清松
此花區上福島中一丁目二七

高尾書店
高尾彦四郎
南區日本橋筋四丁目

文林堂
林富藏
西區北堀江上通三丁目八

清泉堂
倉地健一
西區北堀江通三丁目三七

天牛東店
四方耕太郎
天王寺區勝山通二丁目三〇

紙上
名刺交換會

謹賀新年
本年は乍勝手同業者諸君への賀狀を廢し月報紙上にて御挨拶申上候
大正丙寅元旦 (到着順)

大集閣書店
越村春吉
南區日本橋筋五丁目

末廣書店
谷末松
南區日本橋筋四丁目

長谷川健治
大阪府中河内郡
堅上村字雁多尾畑

三五堂書店
木村嘉藏
南區日本橋筋二丁目

松雲堂
鹿田靜七
東區安土町四丁目

荒木書店
荒木伊兵衛
西區江戸堀南通三丁目

絶版書の數物時代

舊臘の或る日所用あつて、末吉橋の松要書店を訪れると折好く主人在店であつた、快談數刻、種々の話はそれからそれと際限なく繰り擴げられたが、いつか現下の古本界、就中絶版書の事に話が移つて行つた、曾て氏が取扱つて居られた物――恰度それは一昔前の事である――即ち數物見切品として殘酷な待遇を受けて居た書物の中で、當今では驚くべき市價の下に優遇されつゝあるものが澤山に出來て來た。その二三に就て氏の話を聞くと、隔世の感甚だしいものがある。

博文館から出て居る高頭式氏の「日本山嶽志」は誰れも宜く知る本で菊判千三百頁に餘る大本が定價僅に貳圓、内容の結構などは今更贅するまでもないが、卷末にある山嶽噴火年表と山嶽表だけでも立派な一冊の單行本になりさうな氣がする。

それが一冊四拾錢で松要氏が仕入れて入銀に廻つたのが六拾錢、高い處でも七十錢は超ゐなかつたと云ふ。それから歷史地理學會が編した、奈良時代史論、安土桃山時代史論、江戸時代史論等が壹圓貳參拾錢で賣出されたさうで、今割方伸びない攝津鄕土史論が却つて貳圓貳參拾錢位であつたと云ふのは不思議なやうな話である。

草書大辭典一名草露貫珠は菊判二冊背皮の立派な本、近頃或る市では拾五圓か六圓に賣れて居た、これも貳圓貳參拾錢で虐待されたと云ふから涙がこぼれるやうである――紙面に餘白がないので龍頭蛇尾に終るが又更めて書くことにする。

大阪と文藝雜誌（一）

▽梅の浪華の地は由來日本の文學史に由緣の深きところ、その大阪に生れた文藝雜誌を、思ひ出づるまゝ、順序さだめず數回に亘りて書いて見やう。

▽もう彼是三十五年の昔とならう、「小文壇」といふがあつた、木崎好尚磯野秋渚の兩子が其の中心となつて浪華文壇に一小國を形成してゐた。此の「小文壇」は菊版五十頁にも足らぬもので、いつの新年號であつたか忘れたが、その雜誌同人の雅號の自署を石版摺にして冊子の卷頭を飾つた事があつた。

▽「小文壇」より稍後れて生れたのに「蘆分船」といふのがある、題字は當年の文豪紅葉山人の筆になつたもので、その表紙畫は澪標と蘆と風を孕んだ船とで墨繪の極めて素朴なものであつた、創刊號の卷頭には紅葉山人の才走つた前途を祝ふ一文があつたと覺えて居る、その同人は神戸大阪の青年文學者で、山田芝廼園といふが其の牛耳を執つて居た、西鶴張の力あつて艶のある文章を巧に書いた芝廼園が、當時評壇の飛將軍森鷗外博士に對し、獨逸文の挑戰狀を發表し、謹嚴なる鷗外博士もまたしがらみ草紙の紙上に於て、これに應戰したるは其頃文壇の話柄に上つたものであつた。此の菊版十六頁より成つてゐた「蘆分船」は後に菊版二倍の大きさとなり、題字も一種異樣の篆書となり、總八號の氣の利いた雜誌となつたが三年とは續かず遂に廢刊の運命に遭遇した。

▽その頃、大阪朝日、大阪毎日兩新聞に根城を有する文士によりて生れた雜誌に、朝日派の「なにはがた」毎日派の「この花草紙」があつた。「なにはがた」は四六版の每號その表紙畫を變へてゐたが、「この花草紙」の方は菊判の大きさ、梅を模樣に四五度摺の表紙であつた、指折數へて見れば、これも早や三十年前の昔で、その「なにはがた」に艷麗の筆を誇つた本吉欠伸、「この花草紙」に清新の筆を誇つた木內蓼溪等が黃泉の人となつて墓木は既に拱するばかりの歲月を經た。

▽「なにはがた」は後に菊判の大きさとなり、「浪化文學」と改稱されたが、「この花草紙」と共に、いつ廢刊されたか、今はもう記憶してゐぬ。さりながら、尙ほ世人に讀まれつゝある博文館の「文藝俱樂部」春陽堂の「新小說」などは「なにはがた」や「この花草紙」よりも後に發行されたのは云ふ迄もない。

川三題　文一郎生

（その一）隅田川考

古來隅田川を考證せるものに契沖眞淵山岡明阿の諸老及び松平冠山侯三島政行高田與淸の數氏あれどその考證頗る詳細なるは中神守節の著す所「武藏國隅田川考」なりとす。守節は幕府の世臣にして新編武藏風土記の編修に當り此書は蓋し其餘暇に撰ぶ所なるべし（溫知叢書第六編所收）

鞠塢の「墨水遊覽誌」は隅田川に遊ぶものゝ好侶伴にして、鞠塢を知るものゝ忘じ難き書物ならずんば非ず。『墨水三十景詩』及『墨水二十四景記』は騷人の詩嚢を肥やし北齋の『隅田川兩岸一覽』に江戸の昔を慕ひ風雅の市人は『墨水流燈會の記』にありし日の雅遊を偲ぶなるべし。

謠曲『隅田川』は母子の愛情を骨子となせる傳説にして以後小說戲曲にこの川を題材せるもの數多あるを見る、その二三を次にかゝげんか

角田川物語　二冊　萬治頃の板

雙生隅田川　一冊　近松門左衛門作

隅田川鏡池傳　五冊　西白庵春張　天明元

（その二）飛鳥川

『飛鳥川』と名づくる書數多あり二三の書目に從ひて左に記すべし

好色飛鳥川　四冊　繪入半紙本元祿十一年印本作者は京師の者なるべし

飛鳥川　三冊　慶安五年印本花陽軒中山三柳著性理の道を敎にたる隨筆なり

八助飛鳥川　一冊　好色本なるべし

飛鳥川　一冊　横本寶曆年間に印行せし小歌本

飛鳥川　一卷及續一卷　或る老人の書集めし見聞の隨筆なり、享保より文化に至る江戸の風俗を主として記す（新燕石十種第一所收）

飛鳥川當流男　好色本なり

吉原飛鳥川　箕山作

（その三）書名に現はれたる二三の川名

つれ〴〵粹が川　五冊　滑稽本の一種艷好法師作耳鳥齋畫天明二年の刊本なり

十津川　一冊　新作十二番の一つにして學界居士の作

細見美名の川　一冊　明和五年の吉原細見なり

あいそめ川　二冊　寬文頃の假名草子なり

宮戸川物語　五冊　菱川流の繪入刊本なり延寶頃の著作なるべし

書籍に現はれたる川名について少しまとまりたるものを發表したく思ひ居りしが年末多忙と編輯者の請求又急にして、こんな愚にもつかぬこと許りしるして甚だ遺憾なり、新年御慶のお年玉として輕くみすごし給はれかし。

（大正十四年十二月十五日夜）

セリ市會に望む　無名生

凡そ賣買の仲立機關として市會の設けあるは至極結構な事である、我古本界にも當大阪は殊の外歷史の古い或は理想に近い市等が次から次へと出來て、今日では殆ど年中明き日がない迄に殷盛を極めるに到つた。

これ所謂時代の要求に依つて然らしめた現象と云はなければならない。が然し此の理想的とか永い歴史とかを誇る一面、又種々の缺陷がないとも云へぬ。即ち或るセリ市の如きは衆目監視の中に稍もすれば**フリドリ**を敢行して誰れ憚らず居ると云ふ行爲である、**フリドリ**とは事新しく説明する迄もないが**セリ**臺に立てる主催者側の者が自己の掌握し居る物品を客の隙き油斷を利用して不當な公平を缺ける値段に依つて買取る事である。是は畢竟會合者が不滿を懷きながら默過して居るからでもあるが他業の市會に徴すれば斯る輩は何等假借せず再び**セリ**臺に立つ能はないやうに其不德行爲を責めるを常とする。我業界には人格者が多い爲か未だ割合之が因となる紛糾を聞かないが、孰れは其市會の不振を來たす遠因となる所以であるから主催者側は宜く注意し敢て斯る手段を弄すべからずである。況して今日大大阪の古本界は組合の名の下に親睦提携益々向上を圖らんとしつゝある折柄一層商道德を重んじ、僅少なる私慾に依る**フリドリ**等を撤廢し尚ほ市會出品順序の抽籤等も公平を嚴守して同業者の期待に添ふべく努力されん事を敢て**フリ**市會主催者側に望むものである。

コシヨクラブ

投稿歡迎

▲お正月だといふ聲が、フト白ろい風呂敷の男の耳にも響いて、なんとなく正月テナ有難さにも、ほゝ笑まれて來る▲大正十四年中の古本屋界の軌道は、たゞ何となく早賣會何々臨時市サテは白人仲間の炭色など、未來派がはだしで逃げ出す程だと月報子は嬉涙をこぼす▲丸るいのと三角は御商賣柄共鳴點があるとかで、ヤッサもつさの高熱でモノやさしい協會ができたと▲しかしなんぼ若返り法に味噌がついても、英國のダイアナ・ワッツ女史などが來て、ハイカラな斷髮化粧で男子の領分を侵して來るのだから氣早やな連中は今から心配している▲イヨ〳〵組合の定休日がきまるとかきまつたとかで、何となく雲行が早いが今に妻君の小言を喰はないやうに用心せいと厳しいラヂオが聞へる▲女の武器は「死ぬる」といふ脅迫にあるのだそうな「死ぬる」ほどの手紙で病みついた艶な去年を憶ふ連中があるのだと▲店でフト數册盗まれて擾きまわる程へマなものはないが、このせちからい世の中に、盗られても知らない間が幸福で、氣がついてへたな達摩さんのやうに驚ろいた時が寒い滑稽だとはちとひどい▲I君が陽明學でD君が何風だとは何の事だが解らぬ―▲或る市場の人ごみの中に君の顔が見へると O君はシキリと嬉んで居た、冷めたい田螺のやうな眼になつている中にもこんな美くしい挿話がある▲然うかと思ふと市場の某勢力家ににらまれて明日でないと振り臺にのらないと言はれた出品者があつたとはほんとうか▲コレも寒む空らの暮の夜の事だ「皆んな同じ本ばかり持つて居るのです何が賣れるといふ事もなく賣れて行くもので す」などと新らしい人に教へて居た一夜の親しみを聞かされて限りなく嬉れしかつた▲「組合に入會したらどんな利益がおまんのや」とはまだ聞かされた、なんと言ふ淋しい魂性玉だ、不貞な妻を惡む氣もする。（**ラヂオ**生）

次號豫告

易書の撰び方に就て　星山人

古本市の變遷と其環境　永樂町人

本號記事輻輳の爲め次號に讓る

（○は出席●は欠席）

林倉井千　地口野

○○●○
○○○○
●○○○
●●●●
○●●○

人村森松　伊井谷葉

●○○
○○○
●○●
○○●
●○●

上紙 名刺交換會

謹賀新年

大盛堂書店
森村接松
此花區上福島北一丁目

松葉重造書店
南區日本橋五丁目

芳文堂書店
中村芳三
南區道頓堀日本橋南詰東

小ますや書店
増田和三郎
西區阿波座下通一ノ四六

年始手同業者諸君への賀状を廢し月報紙上にて御挨拶申上候

大正丙寅元旦　（到着順）

集成堂
村瀬藤吉
東區空堀通三丁目

京屋書店
千野勝太郎
港區市岡元町一ノ六四

和歌山
書和會市場

皆川啓次郎
和歌山市扇ノ芝

賀正

客歳は一方ならず御芳情を蒙り奉感謝候尚今年も不相變御引立の程偏に奉祈上候

佐藤會市場會員

佐藤光次郎
佐藤一郎
山野元次郎
黒部音次郎
淺野
中村萬次郎
宮岡春次
佐藤三郎
佐藤桑子

謹賀新年

不相變御引立の程願上候

各種印刷　文進堂印刷所
東區玉造山下町一二五

古書組合月報其他各書店目錄等の御用は常に弊店へ御下命被り居候

大正十五年一月一日第十六號發行

發行兼編輯人　松本正治

發行所　大阪市南區日本橋一丁目　交叉点北辻東へ入　大阪古書籍商組合事務所

大正十五年二月五日發行　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第十七號）

組合員移動

▲新加入者

南區末吉橋通一丁目五
松要書店　松浦一郎氏

西成區西天下茶屋一二五ノ七
川邊庄吉方　辻　盛夫氏

天王寺區天王寺町一〇七三
秋津屋書店　淺野義一氏

港區市岡町一〇六四
下位市太郎氏

天王寺區大道三丁目六六
小林市藏氏

住吉區東天下茶屋停留場西一丁
天青堂　栗田一二三氏

▲移轉

東區淡路町三丁目井池筋北入
中尾熊太郎氏

▲家族死亡

組合員松谷義治氏祖母あさ氏死亡せられ去る一月廿三日阿部野に於て葬儀執行組合よりは會旗を掲げて弔意を表した

▲新本組合定時總會

大阪書籍雜誌商組合では恒例の如く去る一月十五日午後一時から南堀江書林倶樂部に於て大正十五年度定時總會を催し前年度の庶務及決算報告等を爲し、豫算の承認を求め、評議員の改選を行ひたる結果左記諸氏の當選を見た。

卸商側

湯川松次郎氏　博多久吉氏　鈴木常松氏　矢部外次郎氏　三宅莊藏氏　柏佐一郎氏　服部勘太郎氏　佃要三郎氏　岡本三郎氏　脇阪要太郎氏　河村豐藏氏　前田梅吉氏　立川熊次郎氏　此村庄助氏　大淵善吉氏

小賣側

家林青兵衞氏　松本正治氏　石川留吉氏　中村卯之助氏　木村嘉藏氏　大塚覺二氏　野島藤次郎氏　所貞一郎氏　杉岡惣吉氏　田中庄二郎氏　淺井勇助氏　中村清三郎氏　森田勝太郎氏　上野榮三氏　立田茂三郎氏

尙ほ互選の結果組長に鈴木常松氏副組長に矢部外次郎氏、家村青兵衞氏再選せられ、大なる更迭を見なかつたが、來會者は遂年增加する趨勢で今年は百十餘名を算し頗る緊張した議場であつた。

▲次號豫告▼

記事輻輳に付次號に讓る記事は左の如く投稿者各位へ陳謝す

○日本交通史書目解題　芳水生
○市會の現狀と其對策　鈴木南北
○易書の撰び方に就て　星山人
○大阪古本屋變遷傳　瓢吾朗

▲市場協會發會式
兼第壹回協議會

落丁本始末の件を協議す

協會の設立は昨冬會合數回にして急轉直下的其成立を見たが、斯は元來古書籍商組合成立以前より醸されたる問題なれば寧ろ當然たる現象であらねばならぬ。然して其發會式兼第一回協議會を去る一月十四日午后六時より堂島ビルヂングホテルに於て開かれた、當日出席された代表者は

○日本橋筋聯合市會　杉山末吉氏
全　谷勘七氏
○佐藤市會　佐藤光次郎氏
○日本橋倶樂部市會　森谷清松氏
西野田倶樂部市會　米原一之氏
書友會市會　伊藤一男氏
古典會市會　石川留吉氏
同友會市會　村瀬藤吉氏

及び松本正治の諸氏で、右の中○印は一月以降半ヶ年間の當番幹事である。又谷勘七氏は次回より杉山氏に代り日本橋筋聯合市會を代表して出席する旨を披露された。當日當番幹事森谷氏は大要左の如き挨拶をなして開會の辭とされた。

我古本業者が明治初年以來殊に洋紙本など出版せらるゝにより著るしく增加を見、就ては同業者間これが必要上自營的交換或は數人の交換市會も日を經るに從ひ增加し、今日に到り現在の八市會の設立を見るに至つた、されど單に何等國家的福利の爲めに共同的改革を見る事も得ず、たま／＼それが必要なるを論ずれど其成立の日を見ざりしに、茲に大正十三年七月大阪古書籍商組合の成立を見るに及び愈々其成立の急なるものあるを知り、現在八市會より各一名の代表者を出して其が協議を計らしめし結果、茲に大阪古書籍市場協會の成立を見るに至りしは吾人の以て欣快となすべき所なり、されど今後この市場協會の重大なる目的の遂行には各代表者の多大なる責務たるは言を俟たず倚は益々各事項に對し愼重協議をなし、市場革新の實を擧げざるべからず、聊か以て我市場協會の成立を慶賀し其趣旨を述べんとする者なり。

それより協議會に入り種々希望事項等に對し討論の末先年來度々提唱されたる

落丁本始末の件

に付、各位の意見を求めたるに、今後市會へ出品したる物品の中、落丁本を發見したる時は其如何なる場合を問はず該品奥附に市場協會所定のサインを押捺して一見落丁本たる事を知らしむる事、以上の故を以て奥附のなき書籍は各位注意する事、但し前記落丁の部分へ不足分を補足し完本と爲したる場合は其届出に由り之又所定の消印を押し完本たるを知らしむる事等を決議し、近々是れが實行を期する事を申合して議事を終つた。それより設けの席に就き晩饗を共にして和氣藹々裡に九時過散會した。因に當日書榮會市會代表四方耕太郎氏は所用の爲め欠席された。

▲都新聞廣告特約

今回本組合は大阪都新聞社案内廣告を左の割引値段にて特約せる故廣告希望者は組合員なる旨を表示し直接同社へ申込まれたし

三行　定價　一圓を　六十錢
五行　同　一圓八拾錢を　一圓〇八錢
十行　同　三圓を　一圓八十錢

モヨホシ

▲佐藤市會　は同七日に

▲市場協會新年會　は一月十四日別掲

古本市の變遷と其の環境（六）

永樂町人

（五）錦水會同人

市會の事歴から少し脱線するやうであるが、それでも皆目關係のない話でもなからう。

石川の市が盛んに行はれた頃、其處へ來往する少壯店員連の一塊があつた。其顏觸と名前を紹介する―名前と云つても餘り小僧時代の名は失禮に當るので稍進級した中年時代の名を御披露すると――鹿田書店の熊七サン（中尾熊太郎氏）及び米七サン（奥谷某）長谷川書店の秀七サン（別所虓氏）島伊書店の靜三ハン（本名保田靜三氏）・石川書店の義助ハン（中村芳三氏）それに荒木書店の國井サン（今京都に在り）松要書店の貞一サン等が各々年輩に於ては多少の相違はあつたが少店員連であつたので、これ等の連中に依つて市會の荷物や糶物の用事を處理さられた事は今も昔も變りがない。處が是等中ある有志に依つて何時頃から熟議されたものか、一つの事業を起すべき前提、準備とも見るべき會合を拵へ、古今典籍の研究或は本屋システムに關する新智識の吸入に資せんものと明治四十四年の春、京都府長岡天神境内の錦水亭に其萌に出づるが如く發會式を擧げた。其時は各店主から多少の應援もあり古典會等からも若干の寄附があつたと聞いて居る。そして名も錦水會と稱へ爾後毎月一回は必ず研究的な茶話會を催す、勿論酒や女を近づけるやうな不純な會莚ではなかつた。

是等の子を主として指導したのは鹿田書店の和助ハン（加藤精一氏）であつて、會合毎に鹿田書店の寶庫から珍本奇籍を借覽しては、五山版はどうの光悦本は斯うであるとか云つた宛然大學の講師のやうな格で和助ハンは後輩を啓發した、又同人達も和助ハンを又となき良師として畏敬して居た。

或時は書籍集會所（安土町鹿田書店向ひ）などで會合したりして、同所の書記三輪ハンなんかも一方ならず世話を燒いて吳れたと云つて居る。斯くして大正二年の冬迄足掛滿三年間續いて來たが、時偶ま當番幹事保田靜三氏の病臥に依つて大蹉跌を來たし、當初の大なる野心を以つて臨んだ、此會合も何時とはなしに自然解散を餘儀なくせしめられたのである。

爾來十二三年の月日は夢の如く流れて、同人間の變遷も一と通りではなかつた。先づ第一に保田氏は伊藤書店を去つて靜文堂と唱し福島上天神の西に店舗を構へたが前主人伊藤丑松氏死去に及んで伊藤家の女婿となり、第二に別所氏は長谷川書店を出て福島の今の東角に巴屋書店を起し、中村氏は石川書店から獨立して道頓堀に烽火を揚げ、最も永く主家勤めに忠勤振を見せた中尾氏も今自立雄飛を試み最近又淡路町井池に堂々たる店舗を開かれると聞く、大いに慶賀の到りであるが、其昔業界の麒麟兒を以て目された別所氏も福島村に超社會的の隱栖生活を續け、當然現古書組合の中堅を把握すべき素質を有する同人等の退嬰主義を難ずる先輩等の勸告慫慂もあつて、錦水會の再興を企劃し、舊臘唐物町の魚松で其復活式を擧げ、又今春早々島の内梅團にて第一回茶話會を催し、前同人伊藤、中尾、中村、別所、荒木幸太郎等諸氏の外に新たに、杉山玉村の二氏を加へ、大いに為す所あらんとす、其活躍や期して待つべきものがあらう。諸君の多幸健在を祈つて置く。

一月十日‖於日本橋倶樂部

大阪古書籍商組合

第三回定時總會

出席者七十二名‖第三區議員增員説を固執して讓らず‖議場如湧大に緊張す

一月十日我古書組合にては第三回定時總會を迎へる事となつた、折柄十日戎にも拘はらず組合員は正午過より陸續として會場たる日本橋倶樂部へと詰め懸けた。開會時間勵行と案内してあつたが相變らず實行されない、正規に遲るゝ一時間午後二時に到つて漸く開會を宣せられた。例に依り森谷清松氏進行係となり、組長鹿田靜七氏の挨拶も型の如くあつて、會務經過報告は毎月報紙上を以て詳細報告しある故を以て之を略し次に藤堂卓氏は當日印刷物とした會計報告の朗讀を試みた。即ち

▲會計報告（第參回）（自大正十四年五月七日／至大正十四年十二月廿一日）

收入之部

項目	金額
前期殘金	二一円〇七
組合加入金	九九、〇〇
會費	八二四、〇〇
市會々費	六二、〇〇
月報報告料	八、〇〇
懇親會電車賃戻金	二五、四〇
會旗寄附金	四、五〇

計金壹千〇四拾參圓九拾七錢也

支出之部

項目	金額
會員名簿印刷代	三〇、〇〇
月報印刷及郵送費	一七二、五〇
集金手數料	五六、一二
第二回總會入費	四六、七七
金属製看板三百枚代	一六二、〇〇
顧問辯護士禮金	四〇、〇〇
雜費	一一二、六三
家賃	三五、〇〇

計金六百五拾五圓〇二錢也

差引金參百八拾八圓九拾五錢　現在殘金

夫れより森谷氏は議長を推擧する事を出席者に諮つた所、前例に依り藤堂氏を推して當日の議事を進行する事となつた。先づ第一に今回新たに設立された大阪古書市場協會が提案した、組合規約

▲第八條第一項

を左の如く改正する事である。

一、組合員ハ役員會ノ賛同ヲ得ズシテ定期書籍市會ノ新設、移轉並ニ日時ノ變更ヲナス事ヲ得ズ

に對しては二三字句の訂正或は改正の要なし等唱へる者もあつたが決局前規約の缺陷を認めて改正原案可決に賛成者多く簡單に通過したが、次の第十四條

▲役員選擧法改正

の件に逢着するや、當日提案された

△選擧セラルベキ區劃

第一區　東區、東成區、住吉區（計人員四十名）

第二區　西區、港區（計四十四名）

△規約第八條の

由來當組合圏外に、概ね夜店派なる

上強制的にも遂行し兼ねる點ありて

第三區　南區、浪速區、西成區
天王寺區（計七十九名）

第四區　北區、此花區、東淀川區
西淀川區（計六十五名）

△選擧方法

選擧方法は右第一區ヨリ順次各區（六名）宛全組合員ヨリ投票スルモノトス

と云ふ原案に就て、或者は第一區の人員四十名に對し第三區の七十九名の如く大差あるにも拘はらず尙役員を六名宛の同數を以て處理せしむるは不當なりと難し、又た選擧方法を全組合員に依つて投票を行ふものならば寧ろ普選を斷行して區劃を廢すべしと論じ、之れに對し若し普選を卽行せば第三區就中南區の如き多士濟々たる、同業者の集中せる方面に役員片寄りて端々の行政を如何に取扱ふやと駁し、各自持論を主張して互に讓らず、喧囂湧くが如く議場騷然として曾て見ない緊張振を發揮した。さすが議長も遽かに決する能はず拱手呆然たるもの久しかつたか、兎に角區劃を廢する普選を斷行するか、原案維持かを投票に問はんとした處、また覆へす者ありて決せず、八馬氏外二三の折衷案出でたが、越村氏第三區の增員を主張して肯かず遂に事態面倒と看取した小石川氏、第一區第二區を五名宛、第三區八名第四區七名と役員の人員を變更し、結局總計一名の增員をなして選擧法は原案維持とせば如何と勸むれば甲も乙も雙手を揚げて之に贊同し、奈邊迄進展するかと案じられた議場も漸くにして收拾し得られたのである

然して將に投票に入らんとする時、組合員湯川松次郎氏一隅より起ちて古書組合が新本組合に對し若干の評議員を送らんとするは當然の事にして又將來益々兩組合の融和協調を慾する旨の挨拶を述べたれば、同組合員松本正治氏之れに答へて簡單に謝意を表した。夫れより愈々當日の核心たる評議員の選擧に移り、第一區より順次投票を行ひ、其の

▲開票の結果

は左の諸氏が當選したのである。

第一區　（投票數六十三票）

五十五票　鹿田　靜七（再）
三十九票　高田幸三郞（再）
三十八票　長谷川健治（再）
三十六票　伊藤　靜三（再）
三十五票　石川　嘉助（再）
次點三十三票　村瀨　藤吉（再）
仝　十八票　中尾熊太郞（新）

第二區　（投票數六十二票）

六十　票　荒木伊兵衛（再）
五十　票　石川　留吉（再）
四十八票　林　富藏（再）
四十四票　倉地　健一（再）
三十四票　村井治郞吉（再）
次點十五票　下津　秀勝（新）
仝　十四票　千野勝太郞（再）

第三區　（投票數六十一票）

五十　票　藤堂　卓（再）
四十四票　木村　嘉藏（再）
四十三票　杉山　末吉（再）
四十　票　高尾彦四郞（再）
三十六票　八馬　英一（新）
三十五票　天牛新一郞（再）
三十三票　四方耕太郞（再）
二十九票　松葉　重造（再）
次點十九票　中村　芳三（新）

全　十八票　外山與次郎（新）

第四區（投票數六十票）

四十八票　松本　正治（再）
四十五票　伊藤　一男（再）
四十三票　森谷　清松（再）
四十　票　森村　接松（再）
三十二票　米原　一之（新）
二十五票　國枝　信郎（新）
二十一票　別所　　虓（新）
次點十四票　玉村多眞治（新）
全　十四票　松本　承藏（新）

投票箱

×

やゝ變態的ではあつたが、今度の選擧法では評議員が全市的に聲援されて出ると云ふことが各區にわたつて非常なる緊張味を横溢さして、總會はさながら選擧戰となつてしまつた。それがために今年あたりで議決されそうだつた問題を二つ程總會は忘れものをしたやうである。一つは落丁本問題。そしてもう一つは定休日問題

×

だがそれは新らしい評議員の方々の仕事としておまかせするとして、我々の眼に最も奇狂はせに映ずるのは、村瀬、井口、千野三君の當選もれである。創立以來幾多の難關に於ける功は今思ひかへして見るまでもなくそれは餘りに顯著なることであつて、その當選もれは遺憾至極である。小さい活字乍ら深くその功勞を謝して置こう。

×

八馬君の出現に依つて今迄の評議員會の人格を一段高め得たと云つても過言ではなかろう。しかり八馬君に對する期待は一の日本橋筋聯盟にとゞまらずして全市的であることは火をみるよりも明らかであつて、その活躍を熱望する所以である。

×

出づるべくしてむしろその遲きを嘆ぜしめられてゐた人は、新評議員別所君である。現評議員は餘りに市場係員が多數であり色彩が濃厚である。その中にあつて君の入閣は一味清風の感があつて、新人中の新人の意氣を如實に示して貰へることであろう。

×

米原、國枝兩君は西野田倶樂部の俊鋭であり西北大阪の重鎭である。溫厚なる二君の人格が如何に今後の評議員會に反映するか刮目してまつものは小生のみではなかろう。前記二君と共に今度の總會が生んだ大きな收獲であつて、ますますわが古書籍商組合の多幸なるを思ふべきである。（誤廳須利夫）

×

今度の選擧に當つて、其人を知らずに只だ無意識に名簿順に投票したものだから、初めの方に書かれたものは概して得票が多く、末尾に到る程、落選の憂目を見た氣の毒な評議員があつたやうだが、此點はモ少し人選の研究をする餘地があつたろう、之れでは眞に理想選擧が行なはれて居ないと云ふものだ。

×

總會に緊張味を帶びて來た事は否定し難い、それから黨閥關係も、ローカルカラーも漸次濃厚になつて來た。總會を重ねる毎に追々議員の運動の劇烈さを加ふる事だろう。最後に當日總會半ばにして鈴木南北堂氏が蜜柑を來會者全部に寄贈せられた厚意を感謝して置く。

▲各種の會合者に

月報紙上へ發表しても差支へないやうな會合でしたら盛んに御報告して下さい、『モヨホシ』欄に發表して組合の爲め記錄として殘して置きますから――

本屋索引（三）

（禁轉載）　文一郎輯

第一　地誌篇

(C)大　阪（その二）　刋本之部

54 改正區分町名錄　一册　橫本　明治五
55 大阪橋名　一册　學務課　同六
56 新撰大阪往來　一册　牧野吕玄　同七
57 大阪町名　一册　同八
58 大阪地誌　一册　日柳政愿　同一四
59 大阪府管內地誌　一册　阪棍達郎　同
60 大阪名所獨案內二册　伴源平　同一五
61 大阪府管內地誌提要　一册　藤井萬治郎　同一六
62 大阪穴探　一册　米樂笑史　同一七
63 大阪府史談　一册　鈴木直三郎　明治二七
64 大阪けんぶつ　一册　同二八
65 大阪みやげ　一册　同二八、三五
66 浪華名所　一册　同三五
67 東京對大阪　一册　伊藤銀月
68 大阪と神戸　一册　文藝倶樂部　同三五
69 經濟上の大阪　一册　神坂靜太郎　同
70 大阪名所圖繪　一册　文淵堂刊　同三六

71 大阪名所案內　一册　同三六、四〇
72 夜の京阪　一册　文藝界　同三六
73 おほさか　一册　加藤紫芳　同
74 大阪の經營　一册　同
75 大阪名勝　一册　秋浦生　同
76 京阪名所案內　一册　白土幸力　明治三七
77 大阪案內　一册　加藤紫芳　同四一
78 大阪案內　一册　電報通信社　同四二
79 浪華名所　一册　岡本省三　同四三
80 最近の大阪市及其附近　一册　大久保透　同四四
81 大阪大觀　一册　川田友之編　大正三
82 大阪府管內里程表　一册　石西主一　同
83 大阪府名所舊蹟案內　一册　同府編　大正三
84 大阪府寫眞帳　一册　同
85 大阪研究　一册　伊賀吉駒郎　大正四
86 大阪府市要覽　一册　大阪米穀會編　同
87 大阪府の歷史と地理　一册　佐々木恒清　大正五
88 最新大阪府地理　一册　中村醒園
89 畿內見物大阪之卷　一册　文淵堂刊　明治四五

○

90 大阪府誌　五册　明治三六
91 大阪市史　七册　附圖一帙　明治四五

92 大阪府全誌　五册　附圖十二枚　井上和雄　大正十一

○

93 なには草　一册　磯野秋渚　明治三三
94 浪華名家墓所一覽　一册　宮武外骨刊　同四四
95 近畿墓跡考（大阪之部）一册　鎌田春雄　大正十一
96 古版大坂地圖解說　一册　佐古慶三　大正十三

○

97 温古　一册　大阪伏見吳服町沿革
98 靭町誌　一册　靭小學校編　明治四〇
99 北大江沿革誌　一册　大正一〇
100 江戶堀誌　一册　江戶堀教育會編　同一四

○

101 大阪城誌　四册　小野清　明治三三
102 大阪城沿革小史　一册　上田穆　明治四三
103 天保山名所圖繪二册　曉鐘成　天保六
104 家隆塚之記　一册　有賀長伯序　享保六
105 澱川兩岸一覽　四册　曉鐘成
106 大川便覽　一册　岸春松書　天保十
107 上陸乘船三十石夜船便覽　一册　安政三
108 大阪安治川口細見　一册

（以下畧之、誤字、遺漏乞訂正）

▲日本橋倶樂部、西野田倶樂部の二市は一月六日初市を開催した。

▲組合定時總會　我組合十五年度定時總會は一月十日、日本橋倶樂部に於て開催され別項所掲の如く役員の改選を爲す。

星山人に問ふ

碧巖窟主人

月報子に對しては申譯のない次第だが、餘り月報に眼を通したことのない私が、どうしたはずみか一月號の頁を繰つて居ると『人相書の正邪に就いて』とある見出しに眼がついたので、早速一讀させていたゞいたが、氏は中々斯道に對する御造詣家と見ゐて非常なる大見識で『人相手相の本は澤山あるけれど一册として正しい本はないと斷言することが出來る』と前提されて『若し是が正しい人相書だと提出する人があらば、余は立所に其正しからざる點を指摘することが出來る』と、實にどうも鞍馬山の大僧正以上の御宣言振りには、只々參拜九拜の外は御座いませんが、ついでのことに一言教を乞ふて見たいと思ふのである。

先づ氏の『正しい本は一册もない』と斷定されながらすぐ下の方で『全部が不正許りといふ譯でない、書中の一部には正しい所のもある――云々』と論じて居られるあたりのロヂックの矛盾はあまりに揚足的だからやめにして、第一氏の所謂、人相手相の書の『正』と『不正』とは何を標準としてきめられるのであるか、主觀的單なる經驗を基礎としてか、たゞし普遍的妥的性を要求しての論理的價値を根據としてか、その邊の御說明からお伺ひしたいのである。そして氏は神相全編、人相水鏡、相法諺解、讀顔術の四書が最も參考となる書だといつて居られるが、それは單なる參考にとゞまるだけであるか又はこの四つの書が、氏の所謂『正しい書』なのか、又はこれ等の書物以外に所謂『正しい書』があるのか、氏の文章を通じては頗る不明瞭なのであるが、ついでのことにはこの邊の消息も明かにされたいのである。次に氏は『水野南北の南北相法は神相全編と相法諺解とを參考して而して自已の實驗談を書き加へたものであるから』といつて、頗る價値なきもの〻如く論じて居られるが、若しさうであるとしたら、氏は一体何を根據として氏の所謂『正しい書』なるの說がなされるのであるか、先覺の書を參考として自已の實驗を加へたのでない正しい說（殊に人相手相の如き說に於て）とは何を指されるのであるか、これ又甚だ了解に苦しむのである。そして氏は如上の同一筆法で平澤の『人相千百年眼』なる本が神相全編と、人相法諺解との混和說であると惡体をついて、遂に博文館といふ本屋の攻擊にまで戶惑つて居られるが、一体氏は書物のもつ内容的眞理（正邪）を問題にして居られるのか、書物自体の文字的表現のよしあし（たとへば、どの本の文字は何の本から剽竊したとか、混和したとか）を問題にして居られるのか、頗る足下があやういのであるが、も少しこの邊の態度をしつかりと定められてからあゝした議論がありたいものだと思ふ。殊に結論に『發行所によつて直に書籍を信用する事は危險だ』などゝ隨分讀書子を馬鹿にした言を弄して居られるが、だれが讀みもしない本の價値を發行所の名だけできめる馬鹿もありますまいてさ、老婆親切もこゝまでくると御笑草である。次號には氏の『易書の撰み方に就て』といふ論文が出るさうだが、も少し態度をきめて學究的なる御發表が願ひたいものである。眞理のための妄言として寛容されんことを――。妄言多謝

大正十五年二月五日第十七號發行
發行兼編輯人 松本正治 發行所 大阪市南區日本橋一丁目 交叉点北辻東へ入 大阪古書籍商組合事務所

大正十五年三月五日發行　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第十八號）

組合員異動

▲新加入者

東區東雲町一丁目二六
柾木秀太郎氏
紹介者　乙宗書店

南區日本橋筋五丁目二五
同人協會　百島操氏
紹介者　高谷清氏

此花區玉川町三丁目三八
文化堂　渡邊ミサホ氏
紹介者　米原一之氏

東淀川區本庄町九九七
衣川圭助氏
紹介者　松本正治氏

東區農人橋詰町六
家村吉兵衛氏
紹介者　石川留吉氏

南區日本橋筋五丁目四七
三京社　佐藤啓譽氏
紹介者　八馬英一氏

▲家族死亡

組合員宮川長之助妻とめ氏死亡され其葬儀は去る二月十五日執行され組合よりは最寄評議員が會葬された

▲第十六回定例役員會

（二月十七日）於日本橋倶樂部

役員改選後第一回の評議員會を開き二三案件を評議す、出席者二十餘名盛會なりき

▲第二回市場協議會

（二月六日）於日本橋倶樂部

午前十時より協議會を開き前回會合後の報告を爲し並に其他の諸件を協議した、來會者は九名であつた。

▲第三回組合定時總會　記事追補

前號月報所載第三回組合定時總會記事末段▲組長互選に關する一項を編輯の際脱漏いたしましたから茲に訂正追補して置きます。

各評議員當選後正副組長を互選の結果前年通り組長に鹿田靜七氏、副組長に荒木伊兵衛、藤堂卓の兩氏が當選就任されました。

月報原稿締切期日

は毎月十五日限りでありますから奮つて御投稿を願ます。

一誠堂酒井氏と語る

永樂町人

去る二月十日、日本橋倶樂部の特別市は先年開かれた里内文庫の入札と品の多寡には非常の懸隔があつたが、値段の點に於て略ぼ同格の吃驚相場を呈し、市人の腦底に何物かを深く印したかのやうに思はれた。

それは兎も角、市會終了後某氏の發起に依つて有志の晩餐會を江南某亭に催す事となつた、會するものは東京の一誠堂酒井、窪川、東陽堂高林、北澤の幸田、神戸の松浦正、古家眞、杉田大學堂の諸氏に當地の某々等合せて十五六名であつた。

宴將に酣となりて、絃歌耳を蔽ひ酒杯飛ぶの時、私かに酒井一誠堂氏を促がして其經歴及將來の方針見込等を叩いたが氏は欣然として語るに『どうして震災は御蔭で我々に豫想外に儲けさして呉れましたヨ、昨今は御得意の買物だけで到底も廻り切れない有樣で、東京では市會の方へは此一年中數を讀む程しか顏を出さなかつたですヨ、將來の見込や方針テ、其樣な事は何も考へて居ませんヨ、我々は平凡ですからね、其時々に當つて臨機應變に畫を描いて行くつもりです。今度の目錄に就いてもです、此間京都の進文堂君に實價が餘り高いと叱られましたが、事實あれだけの値段で全くの實費ですよ、震災以來起稿して或時等は七八人位も編輯に從事して居た時もあつたのですからネ、若し再版を出すとモ少し安くなりませうが、又内容の値段に就ても兎角の批難を聞いて居りますが、何も皆樣があれに準據せずに獨創的な徑を歩んで貰へば結構なんですヨ、私の目錄も私の獨創的のものなんですから、嗤はれても叱られても攻擊を受けても仕方がありません、兎に角私等は異端者扱にされてますが、要は自己の信ずるがまゝに邁進するのみです』

と云つた。傍に居た東陽堂高林氏（一誠堂の番頭で今獨立營業せる人）も口を添へて。

私も十七年（？）間其膝下に育てられましたが、何しろ主人（一誠堂氏の事）は何人も及ばない度胸を以て終始一貫して居るので、それに依つてどんな難事でも切拔けて遂行して行きます、震災直後の如きは每日朝の五時から夜の十二時迄苦戰奮鬪を續けて居りました、私等もいつも主人の後から起きて吃驚して居た始末です、それでも少しも部下を咎めないのが感心する所ですヨと附け加へた。

喬木は風に何とか、兎角異數の成功を收めた者には種々な批難攻擊は有り勝ちの事である。

一誠堂氏今僅に四十歲、實際はまだそれよりも若く見へる。私が大正八年高尾君と北陸から東北を商用旅行して歸路東京に立寄つた時、適ま一誠堂の店頭に現はれて面接した折、番頭さんではないか、是れが大一誠堂の主人とはどうしても受取れないと疑つた位、其時は尙更ら若かつた。

けれども大なる度胸の持主、機に乘じては電光石火的に先見の明が瞬間に閃く、明晰な頭の所有者である事は其頭から變りがない。

一般典籍に關する細密な個々の鑑識は、寧ろそれほど敬服すべきでもないらしいが、總括的な大まかな方面に活用する度量の大膽さは何者も追隨を許さない偉大さを感ぜずには居られない。學ぶべきは此點である斯くして東西を風靡する大一誠堂を成し遂げたのである。幸ひ一夕の機會を得て大いに學ぶ所があつた、此言を諸君に傳へて關西に於ける大一誠堂の出現を望むものである。

市會の現狀と その改善策

鈴木南北

大阪の市會中三ヶ所の入札會を除き他の五ヶ所のセリ市會に改良すべき點を左に列擧したい。

何れの會も個人の私宅を割いて內職的なるため、塲內狹隘にして參會者を滿足に容るゝ餘地なく、夏期は暑苦しく冬期は火鉢も錄に當らない到底二時間以上の辛棒は出來ない有樣である。

またその組織內容も全く舊式にして宛然德川時代の延長に異ならない殊に塵埃は室中に飛び、不潔の裡に食事を執るが如き非衛生極まるといふべしで、斯の如きを同業者がよく忍びをりしもの哉と呆きれるの外なし、同業者の品位向上を叫ぶ折柄、まづ斯くの如き市會の品位より改むべきである。

又其內容中、或時は出品者尠く或時は多過ぎて、セリの緩急時々變更し、充分審別の餘地なき事あり、コハ豫め市會主催者が出品點數の制限を設け置くべきものとす。

尚新物、數物營業者は古本の間に入らず午前中全部を出品せしめるとか、三回に一度とかそれのみ（數物新本）に開放して販賣すべきである又セリ臺の如きは顧客より一段低くしてあるべきが正しいものだと思ふ是等は群小市會の弊にして寧ろ合併して一大市場の設置あらんか、上述の如き缺點は除かれ且つ市價の公平を保ち、價格の激動を防ぐ等、種々の利益は生れ來るなり、斯る點は組合として奮つて注意すべきであり否寧ろ組合の事業の大部分はこの市會の改善に注ぐべきである、他は餘り問題とすべきものが無いやうに思はれる。

ある書籍から

英國のジョンソン博士は、晚年功成り名遂げて、故鄉へ歸つたとき、ゆくりなくも彼が少年の時、御父さんが古本の夜店を出して居つた町筋を通りかゝつた。

想ひ起すは亡父のこと、何思ひけん、御父さんが店を出して居たと思はるゝ地に、靴を脫ぎ佇立これを久ふし、凡そ二時間餘りも泣き續けた

彼はその昔、或夕べお父さんが『今夜は少し身體の具合が惡いから、御前代りに夜店を出しにいつてくれ、私は休みたい』と云はれた時に、イヤだと云つてその賴みを聞かざりしことを數十年後に思ひ出して、そゞろ悔恨の淚に咽んだのであつた。

日本交通史書目解題（二）

芳水生

國有十年 本邦鐵道國有後の施設並成績 一冊　鐵道省編

大正九年五月發行

明治四十年鐵道國有後十年間の本邦鐵道發達史である。第一章國有以前に於ける本邦鐵道の發達以下三十八章國有實施後に於ける私設鐵道並軌道に至るの諸篇に分け、附錄參考として鐵道國有法及鐵道に關する圖表、鐵道國有後建設改良線路圖が添へられてある。非賣品鐵道省發行

鐵道一瞥 一冊　鐵道省編

大正十年十月發行

鐵道五十年記念として出版し、日本鐵道史と共に配布されたもので鐵道創業當時の狀況と現今の狀況とを記述比較し、其間は年表に依つて沿革を知らしめてある、乃ち明治五年の鐵道

（鐵道―起因―鐵道資金始末―鐵道寮―新橋橫濱間開通―開業式擧行―京都神戶間建築）、鐵道年表、大正十年の鐵道（鐵道省の組織―運輸―車輛及工作―建設及改良工事―鐵道會計―職員に關する施設―地方鐵道及軌道）より成る。附錄、國有鐵道統計圖表、地方鐵道統計圖表添付、非賣品鐵道省發行

日本の海運 一冊　伊藤米次郎著

大正十一年十一月發行

海運に對する知識を知らしむる目的で書かれたものである。第一章に日本海運の沿革が書かれてある。第一節開國以來の史實、第二節中古海運の活躍と德川氏の海禁令、第三節幕末及明治初頭の海運、第四節征臺後の海運、第五節日清役中及役後の海運、第六節日露役中及役後の海運、第七節歐洲大戰中の日本海運の細目に分かたれてある。東京寶文館發行

海國日本 一冊

帝國海事協會大日本水產會發行

大正五年五月發行

海事水產博覽會を記念し編著發行せられたもので第三編海運第一章に本邦海運史がある上古から現代に至る海運に關する沿革が一通り書かれてあつて、其細目を擧げれば第一節太古より神功の征韓に至る。第二節三韓服屬より遣唐使時代に至る。第三節遣唐使初期より元兵入冦に至る。第四節弘安の役より文祿の役に至る第五節文祿元年より德川幕府鎖港の末に至る。第六節開國の初期より今日に至るの諸項である。株式會社國定敎科書共同販賣所發行

興國海運史 一冊　岸本稻巖著

大正七年十一月發行

內容二編より成り、第一編變遷誌は緒言、太古、中古、近古、明治、現代に分けた太古より大正六年に至る我海運變遷、大要の敍述で第貳編人物誌は海運關係者の略傳である、海陸運輸時報社發行（未完）

二十年前の 上町の露店（上）

乙宗生

燦として輝く、電燈の下にずらりと並んだ、兩側の露店は現代の夜店であるが、煤煙に渦卷いた竹ボヤのランプの下に木像の如に坐つて客を待つている。明治時代にくらべると露店情緒がなさ相だ。

明治三十四五年頃の上町の夜店に古本屋としては僅かに一軒、大正九年頃に死去した石橋君があつた丈だと記憶している。

現在はどんな小さな夜店でも五枚や七枚出ているのに比すると全く天地の差がある。石橋はその頃は二の日の農人橋筋、四日の空堀、八日の內安堂寺町位でその間の小さな夜店には出なかつた。

最も北船場の一六の平野町には、それでも五六の人々が今のように改

モヨホシ

▲錦水會の即賣會 は二月十四五の兩日間堀江書林倶樂部で催された、初日の午後から折株市會を開催した

▲出版協會三百年紀念文化展覽會

築しない古雅な構ゐのあつた酒問屋米喜の軒に出して居つた。

上町方面は石橋君只一人の獨占場所であつた。その當時は今のように誰も彼もが本を讀んだ時代と違つて子供の物としては、小波の少年世界か小國民位で大人の物としては博文館の文藝倶樂部があつたのみで時に小天地や新小説が交つて居つた。

山と積む華やかな今の雑誌と比して、如何に讀書力の貧しかつたかが知れる。震災以後特種な高價を示している本もその頃は全くの二束三文で、二錢三錢のよりどり物の中にゴロ〱として、そのまゝつぶしの運命に葬られたのがいくらあるか知れない、帝文の美しい本でも三十錢も出せばいくらでも買へたものだ。

私等は空堀の夜店に石橋のおつさんが眼がね越しにジロ〱と通行人を見てをつた樣をよく覺ゐてゐる。

後で聞いた話しだが、その當時の一晩の賣上高はよい時で一圓三四十錢、悪い時で五六十錢位い、その頃私の宅は古物商を遣つて居つた關係上時に古本を買入れる、一般の人も内店の古本屋と云ふ物が少い時分とて大抵は此道具屋の手か紙屑買の手に渡して居た、隨分初心な者があつたのは云ふ迄もない、空堀二丁目の大野と云ふ古道具屋に名所本の美本が悉皆揃つて桐の本箱に這入つたまゝ五十圓と云ふて居つたが誰も買手がない爲めに三四ケ月店頭に積み上げてあつた、噓の如な事實がある。

（未完）

▲各地の月報

今度神戸古書組合では我大阪のやうに組合月報を發行する事になり古家實三氏が專ら擔當して四月上旬發刊されるさうである。又東京組合でも以前の四頁を倍加して此新年號から八頁の立派なものとなつて大いに面目が一新された。

大阪と文藝雑誌（二）

▽雑誌「なにはがた」の創刊號が世に出たのは明治廿四年の四月、波に千鳥の表紙、四六判百餘頁のものであつた。その「なにはがた」が「浪花文學」となつて、やがて廢刊された頃に「花浪草紙」といふが生れた。「なにはがた」には何の由緣もないが朝日派の系統を引いたものであつた。僅に四號にて廢刊されたが其の「浪花草紙」に牛耳を執つてゐた加藤眠柳は、輕い、そして鋭い才氣を揮ふた人であつた。

▽その頃「藻しほ草」といふがあつた。艶なる派手な表紙、人の目を惹いたが永くは續かなかつた。たしか中川愛水といふ人が編輯してゐた筈である。

▽同じ頃に「喜樂」といふがあつた。その創刊號には大阪歌舞伎座の第一回興行の番附が寫眞版となつて巻頭に掲げられてあつた。九代目團十郎が其の柿葺落しに五萬圓で大阪に迎へられたと專ら噂された當時の事、明治廿一年か、廿二年頃のことである。此の「喜樂」は菊判型四五十頁の小册子で、その内容は小説雑錄などよりも、寧ろ演藝の報道に重きを置いてゐた。

▽それに同時代の雑誌として「大阪文藝」といふがあつた。「百千鳥」といふがあつた。「大阪文藝」は菊判型の三四十頁の雑誌で、その壽命は永く續かなかつた。又た「百千鳥」は其の創刊號の巻頭に文豪尾崎紅葉の麗筆に成る短篇「うかれ鳥」を掲載して花々しく世に顯れたものゝ、いつか講談はかりとなつた。それでも壽命は三四年も續いたであらう。

▽此の間に於て青年文學者の手に生れたのが「よしあし草」である。「よしあし草」は前身、それが改題されて「關西文學」となつたのである。此の一團の中から生れ出たのが歌壇の天才與謝野晶子であり、劇壇の有力者中村吉藏である。さりながら是れも早や二十八九年の昔となつた。

部市會では曾て見なかつた目錄を發行する特別市を催した處、東京同業者等が來阪して盛大な景況を呈した

日本橋俱樂部で[illegible]き教科書専門の市會を催した所、多數なる出品の爲め一日間に賣り切れず引續いて廿七日も同

立派なものが出來上るだらう、吾人同業者に是非見落すべからざる意義ある催しだらうと思ふ

本屋索引（四）

（禁轉載） 文一郎輯

第一 地誌篇

(D) 北海道、千島及樺太（刊本之部）

1 蝦夷風俗彙纂 二十册 開拓使編 明治一四
2 蝦夷年代記 一册 松浦武四郎 同三
3 蝦夷葉那誌 一册 同
4 蝦夷みやげ 二册 秦檍丸著？蝦夷島奇觀（寫）と內容同じ
5 蝦夷今昔物語 一册 英バチロル 明治一七
6 蝦夷經略考 一册 永田方正述（地學協會報告）
7 三國通覽圖說 一册 林子平 天明六
8 蝦夷志 一册 新井白石 多氣志樓刊
9 東蝦夷夜話 三册 大內餘庵 文久元
10 北蝦夷圖說 四册 間宮宗倫
11 北蝦夷餘誌 一册 松浦武四郎
12 北蝦夷新志 一册 岡本文平
13 鶉山道圖卷 一帖 雪溪畫 自函館至江差道修造圖 明治十九
14 北島志 四册 豐田亮 嘉永七
15 天塩、後志、石狩、十勝、納沙布 夕張、知床日誌 七册 松浦武四郎著
16 東蝦夷日誌 七册 松浦武四郎 文久四
17 西蝦夷日誌 六册 同
18 東西蝦夷山川地理取調圖 二十八舗 同
19 蝦夷地名奈留邊志 一册 同 安政六
20 北海道蝦夷語地名解 一册 永田方正 明治四三
21 北海道地名解 一册 磯部精一
22 壺の石 一册 松浦武四郎 嘉永七
23 於幾能いし 一册 同 安政二
24 松前蝦夷道中記 一册 同
25 蝦夷行程記 二册 阿部嘉任 同三
26 北海紀行 六册 林顯三 明治七
27 北海道旅行記 六册 佐藤喜代吉 同二三
28 北海道志 二十五册 開拓使編
29 日魯交渉北海道史稿 一册 岡本柳之助
30 北海史談 一册 千葉稻城編
31 北海道地誌要領 一册 明治七
32 北海道要覽 二册 村尾元長 同一八
33 北海之鍵 一册 同 同二四
34 北海要覽 一册 坂中祐直 同三五
35 北海道拓殖の進步 一册 道廳刊 同四五
36 箱館往來 一册 松浦武四郎
37 函館區史 一册 同區役所編 明治四四
38 函館沿革史 一册
39 札幌沿革史 一册 史學會編 明治三〇
40 小樽港史 一册 高畑宜一 同三二

○

41 千島紀行 一册 佐藤秀顯 明治八
42 千島探險錄 一册 關能太郎 同二六
43 千島樺太侵略史 一册 中村善太郎 同三六
44 千島探險實記 一册 多羅尾忠 同二六

○

45 唐太日記 一册 鈴木茶溪 多氣志樓註
46 終北錄 一册 高津泰安
47 樺太及北沿海州 一册 東亞同文會編 明治三八
48 樺太地誌 一册 地學協會編 同四一
49 樺太經營史 一册 大正元
50 極北の別天地 一册 （樺太アイヌの舊慣と風習）
51 樺太及勘チャツカ 一册 松永聽劍
52 樺太風土記 一册 西田源藏
53 樺太の話 一册 中目覺 大正六

易書の撰び方に就て（上）

星山人

易の起源は吾が朝にては天地創造以前に初る（古事記の説に因る）。此の系統は日本神道太占の法として傳へられ、その傳本は專ら口授に由りて繼承せられし者なれば、手記より外には見る事が出來ないから、一般世間には流布されて居ない。

此外に出來た占卜の一種としては辻占、感通傳、畳算の占、歌占、夢占などが有るが、夫れ等は今尚ほ使用されて居るもので在つて、而かも原本と云ふ者が見當らない、只僅かに雜書本や端本の一部に載せられて居る丈けである。

日本の次に易術の出來た事を傳へて居るのはトルコアラビヤで有ろう舊約聖書創世記以下を讀んで見ると天地創造の後に於て、神と人との對話して居る條に、占卜に由りて身をけがしてはならないと書いてある、して見れば當時既に易術を以て世に立つて居る何者かゞ在つた事は明であるが、其法は如何なる者で有つたかは傳はつて居ない模樣である、亦同じ舊約聖書の中に、神と人との對話する條に、ミコに由つて迷はされてはならないと書いてある、此のミコは日本のミコカンナギと同一の者で、神懸りして吉凶禍福を言ふ者で其後西洋にあるウラナイと日本にある稻荷下げとの祖先である、其方法は西洋うらなゐの手引と、日本神道の教會に屬する口授に傳へられて居るが、一般世間には流布されて居ない、ミコカンナギ稻荷下げなども占卜の一種と云ふて宜かろうが、茲には古本の優劣可否を論ずるのであるから、世間に著書の流布されて居ない者は、易術の一種でも可否を論ずる事は出來ない。

日本と同時代に易術が流行したかと思はるゝ國に印度がある、佛教以前、婆羅門教以前ヒンヅー教の始めに當つて既に易は在つた樣でもあるしかし案外新らしく天地創造後かも知れないから、トルコアラビヤの次に記述する、同時代の易と云ふは如何なる者であるか、其方法は詳しくは傳つて居ないが、ヒンヅー教の沿革と教典とその風俗の一端とに、易があつた事を証明すべき者がある、佛教隆興の後天竺は盛んに研究され運命順還説や前世現世後世三世相、緣因説即ち事皆前徴あり、幸も不幸も禍も福も、今日始めて來るに非ず既に前徴ありて、前徴が緣を引いて今日の果を引いた者である、故に今日の現在の事故を見ても、後日の果は必ず卜知さるべき者であると云ふ是れ易占の起る原因で、現在を以て過去を推し、又未來を洞察するに一点の相違が無いと云ふ、是に於て人相は研究され、四柱推命、家相地相宿曜説、印度易斷、皆佛教隆興時代に研究されて居た、しかし此れ等の易斷は宿曜經を除く外は、諸種の經典の中に介在して、單本として刊行されたる者は一つもないやうだ。佛教が日本に渡來して後に出來た占卜に御籤と云ふ者がある、元三大師御籤法華經御籤、淨土眞宗御籤などがそれである。（未完）

錦水會陳列即賣會の立聞咄是々非々

先月の十四日に書林クラブで錦水會同人の復興？捲土重來？の企として古書即賣會があつた、舊來のいゝ弊風に鑑みとして開會時間前には絶對に賣らなかつたので引續き即賣會のアトとて品薄の珍書稀れの折柄にも不拘四千圓とか二千五百圓とかの賣行マア茲許めでたし〳〵

【顧客甲】今度の卽賣會は時間前に賣らなかつたので我々は氣分がよかつた。

【顧客乙】……私は餘りよい感じがせなかつた、アレなら結局商賣人さんが前晩に素人の見ない内に拔いていたゞいた方がよいと思ひます、生中品物を見ても前晩におくことが充分に見られて何所に何にがあると場所を見定られて開會と同時に本の上にべつたりと据はられて拔かれて居るを素人は指をくはへて（品物の識別直段など考へて居る躊躇の折に）手を出す事も出來ず、夫れを見て居る心持などは一種イヤな氣分にとざゝれて共人を呪ひたくなるのです。

【顧客丙】ソウ〳〵私も同樣九時一寸すぎに參つたのですが同業者の御方が中々敏捷に（前夜から見られて居るので）買はれて居るので羨めしい氣がいたしました、同業者の御方が前晩に見定めて置いた本がないので鵜の目鷹の目で捜されて居る修羅道を見て商賈も却々と思ひました。

【顧客丁】私は用事がありまして電話をかけに參りましたが機械の下に積んであつたのを一寸拜見しましたが矢張商買人さんです珍本や割安ものは大抵買はれてありました、それもお一人かお二人さんの買物のやうでした。

【同業者甲】君何か掘出したか、僕は一寸遲れ馳せで全く駄目だつた。

【同業者乙】鬼の目にも見殘しがあるかと思ふに中々ない、併し二册や三册はあつたよ。

【同業者丙】九時過ぎに行つたが氣の弱い僕等は駄目だ、人が何んと言はうと搆はずに鐵面皮しう買はな損だ。

我田引水、自我＝自分の御都合のよい御託並べには恐れ入つた、私は即賣會への批評？の是非と斷案を下して見やう。

一、顧客本位を主としたるもの
二、名聲、名譽を主としたもの
三、同業者の好感を迎ふるもの
四、八方美人的に催すもの
五、利益を（收益）目的とするもの

との五件によつて判斷を下すがよい根本問題を論ぜずと自我的に考へると間違や苦情が出る、是々非々は根本を究めなけりや駄目よ……時に錦水會は右五件の内何れに標準されたのであろうか。（落丁生）

絶版書復活譚（三）

松崎實著

▲考註 切支丹鮮血遺書（きりしたんちしほのかきおき）

四六版一册特製更紗表紙六百頁、定價參圓五拾錢、十五年二月十三日東京改造社發行

初版は明治二十年八月佛人ビリヨン閲日本加古義一編となつて居る、四六假綴の薄い貧弱な裝訂であつた此書が名高くなつたのは新版の序文にもある通り內田魯庵氏の『獏の舌』が大正九年の秋讀賣新聞へ連載されてからである、初版や再版は今絶對に見る事が出來ない稀覯書となつて坊間偶まに流布して居るものは僅かに六版位のものであるさうな、舊版の書名は『日本聖人鮮血遺書』とあつて最近一誠堂目錄には十圓と揭載されて居る。原版が如何に史實的珍重にもせよ到底新版の內容外裝共に完璧された點に比較にならない、そして價は僅に三分の一の安價に過ぎないのである。

大正十五年三月五日第十八號發行
發行兼編輯人 松本正治
發行所 大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東へ入 大阪古書籍商組合事務所

大正十五年四月五日發行　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第十九號）

組合員異動

▲新加入者

港區九條北通三丁目五五九
川柳堂書店　大窪文美氏
紹介者　松浦一郎氏

西成區櫻通二丁目八四二
梅田嘉七氏
紹介者　村田政治氏

港區三條通三丁目三二
辻幸太郎氏
紹介者　藤堂卓氏

此花區上福島南通二丁目八
若松屋　菅生信三氏
紹介者　國枝佶郎氏

天王寺區大軌上六停留場一丁西
公立社支店　藤堂楢雄氏
紹介者　氏野留松氏

此花區四貫島宗安町七
近岡銀次郎氏
紹介者　朝倉巖氏

▲移轉

豊能郡豊中村大字櫻塚一二〇九へ
神谷槌藏氏

▲組合員名簿住所訂正

天王寺區上本町七丁目五六（に訂正）
杉本要氏

▲家族死亡

港區九條中通四丁目小橋貞一郎氏家族壽二郎氏死亡され三月十七日葬儀執行會旗を掲げ弔意を表した▲又長谷川健治氏嚴父長谷川熊造氏は別項の如く三月廿五日和歌山にて死亡され廿七日葬儀を同地に於て執行せらるゝに付組合員有志若干名は會葬した。

▲十七回十八回定例役員會

三月二十日第十七回評議員會を日本橋倶樂部に於て開き新加入者承認及び十五年度組合員懇親會の件を議し開催地を奈良方面に選定し其調査委員を選びたる處、木村、伊藤靜三、別所、伊藤一男、松本正治の五氏に託する事に決定出席者十五名▲同十八回評議員會を同所に四月六日午前十時過より開催前回委囑したる懇親會調査委員の報告を聞き其他二三件を議して散會出席者二十一名因に懇親會當日の各役員部署の配置左の如し

（受附係）杉山、高田、倉地、天牛、松葉、國枝
（案内接待係）長谷川、林、高尾、村井、森村、島伊
（記錄係）四方
（會場設備係）木村、大伊、松本
（進行係）小石川、八馬、別所
（會計係）藤堂、森谷
（餘興係）大石川、米原　以上

▲三回市場協議會

（三月廿三日）於佐藤市會

第三回例會を開催二三案件を協議したるも研究の餘地ありさて留保のまゝ散會した

長谷川熊造氏の追憶

寂しき一日

松本正治

此二三日來私は風邪で引籠つて居た。其枕頭へ二十六日の夕方、一男君が長谷川サンの訃報を傳へて呉れた、然し私は其時大して驚きはせなかつた、と云ふのは四五日前に別所君から其容體の餘程險惡な事を聞かされて居たから、一種寂しい氣持になつて衷心から氣の毒なとは思つたが、愕然とはしなかつたのである。

三月二十七日と云ふのに何んだか冬の名殘りのやうな日であつた。南海電車に搖られ乍らに窓外を見ると雲の去來頻りとして、しぐれたり雪が散らついたりうら悲しい日であつた。

堺を過ぎると湊、海松樓と故人に由緣多いものがいろ／＼と眼の先に展開される。よく集めよく散じた人であつたらしい。そして義俠的な温厚そのものゝやうな、快よく他人の世話を燒かれた人だつた。私等が地方などへ行くと西も東も何處でも長谷川氏を知る位の人なら皆口を揃へて其德を稱へない者はなかつた

晩年和歌山への隱栖はいろ／＼事情もあつたらうが決して本意でなかつたらうと私は思惟する。今頃大阪にあれば我組合唯一の先輩長老として必ず正副組長いづれかの椅子を占めらるゝ人であらねばならぬことは誰もが思つて居る事である。

も一つは私等は此業界へ泳ぎ出すに餘り遲かつた爲めに親しく聞いて置きたい組合の歷史などを一言も聞き得なかつた事を非常の恨事と思つて居る。

種々な追憶に耽けつて居る中に電車は紀泉の國境を越へて居た。見渡す海は穩かでも樹々には幾らか風が騷いで居た。遲れ馳せに赤十字病院前の其本宅へ驅附けて見ると葬列は既に出た後であつた、踵を廻らして告別式場に充てられたる稱名寺に着いて漸くにして私一人が名殘の燒香をした時、思はず熱い淚に咽んだのである。

噫、大阪なれば少くも業界關係筋五百の會葬者は降るまいに、近親の人々と僅に數へられる大阪の業者のみで知る顏とては到つて少ない。誠に寂寞の感禁じ得ざるものがあつた當然會し居らなければならない人までが見えなかつたのは尙更ら遺憾に思はれた。たゞ和歌山の同業者だけが全部懇ろな斡旋をして居られたのはせめてもの慰めとして感謝せなければなるまい。

長谷川熊造氏齡將に六十五、業界に馳驅せられしこと實に四十年餘、貴き經驗者であり偉大なる人格者であつた。あゝ、かへすがへすも惜むべき先輩の一人であつた。我等は聊か思文を連ねて謹んで哀悼の意を表するものである。

愧ぢ入る事

石川留吉

何んでも明治四十一二年の頃だつたと思ふ。鹿田書店の和助はん（加藤精一氏）が獨立して老松町で店舖を

開いて居た時の事である。
私は殆ど毎日のやうに往來をして親密に交際をして居たのに、或る日突如、東京の數物を買つて來たので市を開くと知らして來た事がある。それも昨夜まで會合した機會があつたのに何等の耳打ちもしなくて今日の今になつて出し抜け的に知らして來るのは餘り不穩當な仕打だらうと私は非常に憤慨して見た。けれども其市は同業者の扇卯之助、松浦貞一京林氏らの手傳ひに依つて完全に遂行された。會場は慥か天滿の亀の池であつたやうに思ふ。——これ等が數物の市としての抑もの初めであつたやうに記憶するのである。——成績は餘り香ばしくはなかつたが、それでも私は癪に觸つて仕方がない。其揚句加藤、扇氏等に對して（松浦京林氏等は只單に手傳つたに過ぎないから直接何等の交涉もないが）以後は斷然絕交だと最後の通牒に及んだ。すると先方も驚いて種々陳謝もし和解の方法も執つたが。私も頑迷であつたから中々聞き入れなかつた今でこそ凡ての事は圓滿主義にとやはらかい氣持になつて居るが過去の私は中々に圭角が多過ぎたのである其處で見るに見かねて、長谷川氏と荒木氏が一日態々私等相方の者を三四名ばかり、安土町の集會所へ招ばれて種々と宥めたりすかしたりして仲裁の勞を執られたが、相變らず是等先輩の言を排けて肯かなかつた程私は頭が曲つて居た。今から考へれば若氣の到りだとは云へ實に馬鹿らしい事であつた。……私はそれから後此事を思出す度に懇ろな先輩の言に從はなかつた事を恥ぢて居た。實に濟まなかつたといつも後悔して居たが、今又其人の訃に逢つて記憶を新たにして慚愧の情に堪へない次第である。

小さな思ひ出

伊藤一男

長谷川氏の御葬式から遲くなつて歸つた私は、しめきつた店で何心なく開く夕刊にアララギの先輩島木赤彥先生の訃に接した。今日は何といふ日だらうと思つた。アララギの徒にして先生の薰陶をうけないものがない中にあつて、私は不幸にも今日まで直接その指導をを受け得ず遂に終つてしまつたのである今にしてこれは非常に殘念である。

古くから大阪の我業界に籍を置く人で長谷川氏の大きな人格が產む恩惠を蒙らないものはないと云つても可い。その中にあつて私はやはり赤彥先生の場合のやうに蔭ばかりにゐて直接手を引いていたゞけなかつた不幸者なのである。だからそう云ふ貧しい私にも長谷川氏に一つの思ひ出があるのである。

それはもう和歌山に御隱居された時のことであるがだいぶん以前の樣に思ふ。ある日和歌山に一口の市が開催されて、それにどう云ふ譯か出席した、私は無人であつたその市に振手として少々計りお手傳したのである。今でこそ振手になつたと云つても不思議がる人もなかろうが、まだその時はやらなかつたのであるが仲氏や松本君の振聲を眞似ておづお

づしながら産聲を上げて見たのである。處が最初の私の聲に應じてその滑稽な場面では不似合な聲で堂々と如何にも本場所的な長谷川氏のつけ聲に接したのである。

一体に市を振ると云ふことは實に他動的である。買手が熱中すれば振手も自ら熱中する。聲の出ない市の草疲れやすいのは買手の聲の力を借らないからである。まして初めての振手には聲のパートナー次第でどうでもなるものではなからうか。大商人的な態度をそのまゝに鷹揚な長谷川氏の聲に逢著しておづおづと場馴れない私の聲が次第に落着いて行つた。若しその時の私に失敗がなかつたとしたら、そして和歌山の人が初めて振手臺に登つた私としらないでゐたとすれば私は實に長谷川氏によつて市を振る呼吸を敎へて貰つたのである。

振手として産聲の最初のパートナーが長谷川氏、それは何といふ光榮なことであらう。だがこう云ふ話は私一個の記錄であつて、故人をしのぶ逸話や言行記ではなく、又一方私達は往々にして偶然だといふ理由の下にこふ云ふ光榮なる事實を忘れてしまふもので記すべきものではなからう。しかも幾年後、これを思ひ出し、これを追悼記の材に選んだといふのは、私にも長谷川氏のわずか乍ら直接の出來事を披瀝したいからである。これはつまり故人の偉大さが私の心を引つけてやまないといふことになるのであらう。

大阪古書籍商組合

第二回懇親會順序

四月二十日於奈良新温泉舉行

柳は綠に花は紅、風暖く吹いて長閑な春が來た。我々業者が一堂に會して温かき親しい氣分に浸る懇親會は來た。いざ其順序を簡單に御披露しよう。

一、期日　四月二十日（晴雨不論）

一、集合時間　上本町六丁目大軌電車
午前九時集合
（時間勵行遲參者は電車賃御自辨）

一、會場　奈良公園新温泉
於温泉旅館樓上大廣間
（大軌奈良驛下車東へ半丁右側）

一、酒食　組合員一名宛に限り用意してありますが

一、家族　御同伴の節は豫め事務所迄、御申込置きを願ひます、凡て實費を頂きます

一、餘興　當日會場にて○○社中の餘興數番が催されます

大畧は右の通りでありますが集合時間等は特に御勵行を願ひます、でないと御一人の爲めに多勢が迷惑を被りますから。

（附記）贅する迄もないが奈良は家族連の遊山として最も適して居る會場の南窓からは手近に北圓堂や興福寺の堂塔が見へて、到る處に青毛氈を敷いたやうに美しい草原が我等を待つて居る。考證家は博物館や遠く西大寺唐招提寺や秋篠寺を探るも可い、花を訪ねるならば西大寺から平端へ行けば桃も盛りだらう。モ一つ足を延ばせば談山神社方面も結構である　北へ往つて木津川沿ひに南朝の遺蹟笠置に攀づるも妙である、兎に角一日は緩々と清遊が出來る。

日本交通史書目解題（三）

芳水生

大日本帝國驛遞志稿　一册　青江秀編

明治十五年三月上梓

驛遞局御用掛たる青江秀氏の編纂にかゝるもので、驛遞志稿と驛遞志考證の二編から成る、卷頭に『此書ヲ作ルノ本旨ハ世間年歳ヲ經ルニ從ヒ舊記漸漸ニ湮沒シ口碑モ亦從テ失亡シ往往古來ノ事蹟ヲ滅盡スルモノ多シ驛遞ノ事ノ如キ今ニシテ之ヲ採錄セスンハ後世或ハ噬臍ノ歎ヲ免レサルノ慮アルニ出ツ故ニ其收錄スル所ノモノハ多クハ舊幕府以前ノ事ヲ詳ニス』とあつて、我國上古以來の驛遞に關する法制的沿革を記述したものである。驛遞志稿の方は

第一章　上古施行する所の驛政を記す

第二章　始て唐制に摸擬して驛制を定しより以來天下の傳馬悉く廢止する次第を記す

第三章　大同貞觀の間驛政大に進歩すと雖得失相半し延喜中更に大に唐制を採用し大治に至て其驛政も亦王室と共に陵夷する次第を記す

第四章　鎌倉幕府創業以來足利氏及割據列國を經て織田豐臣兩氏に至る驛政を記す

第五章　德川氏驛政の一　第一世將軍家康より第五世將軍綱吉の時に至る次第を記す

第六章　德川氏驛政の二　諸道助鄕課役の事を記す

第七章　德川氏驛政の三　第五世綱吉より第十五世將軍慶喜の時に至る次第を記す

第八章　將軍慶喜驛遞の處分を申請し朝廷大に驛制を更革し終に傳馬所鄕の課役を廢止する次第を記す

第九章　諸道陸運會社の興廢及陸運元會社其社名を改めて內國通運會社と稱し其人馬遞傳所の興廢は皆會社に放任し唯民間に於て出兵驛傳の制を餘す次第を記す

第十章　幕府繼飛脚の制諸侯諸飛脚の制三都町飛脚の興廢及郵便創業の次第を記す

の十章に分け、簡略に敍述し其大綱を捕捉し易すからしめてある。

又驛遞志稿證の方は、綏靖天皇の三十三年五月山陽道の開かれたのを始めとして、古來よりの驛傳に關して道路、驛宿、公私旅行、人馬驛傳信書往來等の事項を網羅し、詳細な記述を以てし、驛遞志稿を讀む人の參考に供へたもので、卷末に添へた驛遞志稿考證の索引は『路傍行樹ノ部』『人馬賃錢ノ部』『里程及行程ノ部』『貨輿米金ノ部』『繼飛脚ノ部』『軍事驛傳ノ部』『肩輿制度ノ部』『公私旅行ノ部』『旗亭及間驛ノ部』『信書遞送並ニ郵便ノ部』『驛馬驛傳ノ部』『飛脚ノ部』『水陸運輸ノ部』等に分類し、各內容はこれを年代順に列記してあるから、既にこれのみを以て各々の年表を形造つて居る。尙本書には口繪として『大日本帝國信書往復沿革圖』八面を添附し、本文と相照するやうにしてある。此書は我國驛遞の變更を研究するには、是非共必要の書籍であるが、其數僅少の爲め現今では中々得難いものと成つて居る。

▲出版文化展覽會

三月二十四日から五日間大丸樓上で開かれた大阪出版創始三百年記念文化展覽會は豫想以上の盛況を納めて各方面から非常な賞讃の辭を呈せられた。就中住吉、天滿宮等の文庫及府立圖書館から出品された參考品の中には曾ていづれの方面へも出陳されなかつた稀覯の書を展覽されて我等は大いに得る處があつた、兎に角斯界に於ける最初の催しであつて且つ我大阪出版界の爲に萬丈の氣を吐いたものとして永く記念すべきである。

明治大正珍書競べ（一）

文一郎文庫藏

(1) 伊達正宗欧南遣使考　平井希昌著

明治九年十二月刊四六判五九頁

支倉六右衛門の事蹟について記るされた最初の著述であらう、巻末に支倉の肖像外二葉を寫眞紙のまゝ貼つてあるのが面白い。

(2) 歸參の武士　米國アンプラー著　日本　森　貞次校

菊判七〇頁明治卅年頃の刊

御維新當時の一日本人(加勢氏)のキリスト教的信仰について記したものだが表紙に菊の寫生かあつて挿入の數葉の圖書は西洋人のスケツチらしい。

(3) 五人組制度の起原　三浦周行

明治三十三年十二月刊菊判八二頁法理論叢第九編

穗積博士の五人組の研究に先つてすでに此著述がある。

(4) さとことば　幸田文時編

大正十四年九月刊四六判一八九頁

新潟縣西蒲原郡吉田村大字鴻巣に用ひらるゝ語にして、一般には用ゐられざるもの即ち鴻巣特殊の語を採集してこれに解釋が施してある。

(5) 上代の吉備　沼田頼輔

明治三十八年一月刊菊判四六頁

(6) 瓦の響　岩本米太郎編

大正六年七月刊和裝五十八丁

江戸四日市の珍本屋待賈堂達摩屋五一の遺稿である。我々の先輩にこんな本屋があつたことは心强い

(7) 性的行事としての盆踊の研究

北野博美著菊判五六頁　大正十年前後刊

一度雑誌に發表したものでその拔刷らしい。

(8) 北齋改名考　桑原羊次郎

大正十一年九月刊四六判四五頁

(9) 蒙古征歐史附羅馬法王遣使始末　田原禎次郎

明治三十八年十二月臺灣刊　菊判一六六頁

(10) 日本金燈籠年表　香取秀眞編

大正五年三月刊四六判一九頁

（本號に限り本屋索引休載）

絶版書復活譚（四）

編者が書く事に追はれる爲めと、も一つは次から次へと絶版書復活の勢力が旺盛な爲め到底限りある紙面では敏速により多く此方面を報道する事が出來ず、皆舊聞になり過ぎる憾みはあるが其邊は悪しからず御諒恕をこふ次第である。

▲日本隨筆索引　太田爲三郎編

菊判八百頁一册總クロース製箱入、定價六圓五十錢　十五年一月三日東京岩波書店發行

明治三十四年に初版が出たきり久しく絶版中にあつた原版は三百頁位迄の裝訂も到つて貧弱な本であつたが値段だけは如何な絶版書も追従を許さない程高く三十圓以上も稱へられたそれが内容に大増補を加へ組方も非常に見易く八百頁を越ゆる大册になつて高値の約五分の一程の定價で需められるやうになつた。

▲日本俳書大系　十六册

漸く豫約廣告が出た位だから眞價は判らないが、舊博文館の俳諧文庫二十四册の變態的訂正版である事だけは首肯し得られる、いづれ現品を見た上で詳報する事にする。

易書の撰び方に就て（下）

星山人

神代に出來た易に支那の伏義の八卦がある、日本で今日言ふ處の易と云ふは、專ら此の八卦の事を指して言ふ様だ、それほど八卦は易斷に於て有用となつたから、其著書は極めて多い、余が茲に易斷の書を撰拔して論評を試みんとするのも、目的はその數多い著書の中から、良書僞書を撰み分けて、始めて易を研究して見ようとする人の便としたいと思ふのである、伏義始めて八卦を作る、當時は八卦だけで判斷した者で、之を古易と云ふ、又先天易と云ふ、此の部類に屬する有名な易者は、支那で邵康節日本で阿倍晴明、新井白蛾である、邵康節の著書を日本に紹介した者に馬塲信武がある、元祿元年發行の梅花心易、斷易指南が乃ちそれである。阿倍晴明の著書は坊間に餘り傳つて居ない。新井白蛾の著書は秘密本ともに拾數種は有らうけれど、其内坊間に流布されて居て有名なのは古易斷である、而して古易斷を更に精撰したのは易學小筌であつて梅花心易、斷易指南、易學小筌此三册は、日本易者を濡した事はどれ丈けであるか知れない、易學研究第一の門である伏義が八卦を作つて後に、支那で文王の時に六十四卦が出來て、その解釋が附された、之を後天の易と云ふ、又古易に對して新易と云ふべきを略して單に易と云ふ。文王の後に周公生れて三百八十四爻に解釋を下した之を周易と云ふ、又周易を略して易とも云ふ、又後天の易とも云ふ。周公の後に孔子生れて文王の彖の辭及周公の爻の辭の難解を釋いて十翼を作つた、それが易經である。孔子の後に朱熹生れて、文王と周公と孔子との解釋の尙ほ難詰なのを歎いて易經集註と云ふ者を著した、是に於て始めて易道は世間に平易に解される様になつて、易術を研究する人が多く出來たのである

朱熹の易經集註を原本として、省略して和譯し多少自分の意見を加へて書いたのが、故高島嘉右衛門の高島易斷と云ふ和本である、此他にも易經集註を原本にして、省略して和譯した本はあるけれども論ずるに足らない。後天の易者で百發百中神の如き者は、文王の師匠で太公望、次に十翼を作つた孔子で有らうけれど太公望の易話も孔子の易話も餘り多くは傳つて居ない。吾が日本に於ては後天の易者で有名の者は、自稱百發百中の先生以外に聞いた事はない

支那より渡つた易占の一種に、黃帝著述の天眼通劉卦法と云ふのがある。又日本に來て變化した占法に眞勢中州一派の易學梯梯及周易策解其他がある。又日本に於て算木を用ゐて占ふ方法に風俗通と云ふ本がある以上三種は何れも算木を用ゐる者であるけれども、其の占方は先天とも後天とも異る處の特種の者である。

此他支那より渡つた占卜の一種に四柱推命、九星、干支、家相、人相等の書があるけれども、それは亦折を見て各部門に就いてお話する機會が有ろうも知れぬ。

二十年前の

上町の露店（下）

乙宗生

東京へ轉任する一官吏が呼びに來て道具一式を買つた時に山なす古本が順序として私の手に渡つた、勿論つぶしの價で買つたは云ふ迄もない石炭箱に十二三杯中車で運んだ事を忘れない、主なる者は太陽文藝、少年世界、温知叢書、日本文學全書、少年讀本薄い日本紙綴の何とか世界千山萬水型の袖珍本、帝國文庫位である、店に積で置た處でいつまで經つても賣れないので月は忘れたが八の日の内安堂寺町の夜店へランプを持出して見た。

よりどり物として二錢と五錢十錢の三口薄い本を二錢に温知叢書や文學全書を五錢に十錢の中へ太陽や帝國文庫、厚型の袖珍本を今思ふと涙ぐましいやうな感じかする。

如何にその頃の人が讀書力が貧弱とは云へ、どこかに初心をむき出した此小書店の品を見逃す人が少いと見へて宵から引きゝりなしに人の山を築いて、その日の賣上四圓を計上した、その日石橋は休んで居つた、私と一日位前後して村瀬君と死んだ阿部君が本屋を初めた此阿部君はこの間沒した田里君の性格そのまゝの人で好んで文筆を弄して短篇小説や小品文を作り趣味の豊かなる更に商業に熱心奮闘亦奮闘、友人間に將來を期待されたが惜しむべし肺患を病んで郷里に倒れて終つた。

私は日毎天氣でありさへあれば、そこゝの古道具屋や野天の市に行つて買廻した、松屋町の松要へもよく行つた、古書月報の松本君が市の變遷と其環境の中にその頃の事を書かれてゐるが、私等は市と云ふ者がある事を知つて居つたが、そう云ふ場所へ足を入れらるゝ處でないと初めから思つて居たらしい、最も我々の生活が平易であつた爲めにそれ以上を要求せない、まア遊び半分であつたとでも云はうか、先代の松要の主人公が車で積んで持つて歸つて店へ投げ出す、その中で是れと思ふ本を拔いて風呂敷に一杯持つて歸る、その當時のくゝり物の安い事は全く想像の外である。

明治三十六年に大阪に第五回博覽會が出來た當時に今の小石さんや骨董屋になつている田中君が清水谷學校の南横手の中嶋德兵衛さんの宅で小さい入札市を初められてよく露店向の品を持つて來られた、英語の先生が本屋を初めた人や坊主上りの若い男や諸々の人が寄合ふて市の度毎に高々銘々一圓四五十錢から二圓位の買物をした今思ふと冷汗が流れる樣な亦何とも云へぬ面白い氣がする中嶋さんはいつ頃亡くなられたやらその頃若い娘さんがどこかに嫁がれて今はもう初老に近いと思ふと妙な氣がする、夫にしてもいつ見ても變らないのは小石君だ…………（終）

大正十五年四月五日第十九號發行

發行兼編輯人 松本正治

發行所 大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東へ入 大阪古書籍商組合事務所

大正十五年五月五日發行　　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第二十號）

組合員異動

▲加入者

浪速區立葉町一二九四
柳光藏氏
紹介者　倉地健一氏

南區炭屋町六二
河德書店　久野德次郎氏
紹介者　倉地健一氏

北區曾根崎上四丁目四一
うきよ堂　倉橋一夫氏
紹介者　藤堂卓氏

南區日本橋筋五丁目六〇
谷文店　谷勘七氏

住吉區天王寺町一九九四
小河信行氏
紹介者　中谷勇次郎氏

此花區上福島中三丁目一八
文泉堂　杉本宇太郎氏
紹介者　村上政七氏

東區東雲町二丁目一八二
因野宇三郎氏
紹介者　北野卯三郎氏

西淀川區浦江町五六八
山本陸平氏
紹介者　稻山晴一氏

▲廢業

港區市岡町二六三
石川松次郎氏

▲黑部音次郎氏の奇禍

組合員黑部音次郎氏は去る四月十二日、柴島町崇禪寺馬場附近のある者の處へ古本の買物に行つたが、同家の主人と云ふのは兼ねて謀る處があつて黑部氏の隙を窺ひ背後から及渡り三寸に餘る大斧を振つて斬殺し懷中の所持金を強奪しやうとしたが、不幸中の幸か犯人が非常に周章てた爲め斧は裏返つて居つたので脊中をシタタカ毆打されたのみで斬れはしなかつた、黑部氏は驚いて防衛に努めたが多少傷手があるから組敷かれて咽喉部を締め上げられる事暫し終に人事不省に陷りかけた、此時戶外に物音を聞き附けて屋内を覗き込んだ老人があつたが此人が驚いて立去つたので犯人は其筋へ訴へられたと思ひ急ぎ黑部氏の懷中から金入を強奪し姿を晦ました。黑部氏は轉げるやうにして附近の人家へ驅込み急を訴へしめたが既に遲かつた、後十七日に到つて犯人は茨城縣下で捕まつた。黑部氏は幸ひ餘病を起さず經過良好に今日では殆ど常態に復して居るが實に前代未聞の大事件である各々は注意せなければならぬ、因に組合よりは早速見舞狀を出したそうである。

大正十五年四月二十日

大阪古書籍商組合 第二回懇親會記

於 奈良公園新温泉旅館擧行

青丹よし奈良の都は古くとも、草萌え出ずる野山は我業界の前途を祝ぐ如く新く又生々としたものがある。

其日は惠まれた懇親會日和とでも云はうか、旬日不順な氣候も今日ばかりは名殘なく晴れわたつて麗日は大地に微笑を浴びせたやうな感じがした。

從つて人の出も多かつた。懇親會場に充てられた奈良新温泉の旅館階上大廣間には定刻前既に續々と會員が詰めかけた。人の揃ひを待つ間は例の如く浪花節、喜劇などがあつて腹の皮をよぢらせ退屈を忘れた。夫れが濟み漸く定刻となると組合長鹿田靜七氏は來會者の拍手に迎へられて登壇。

本日は時恰も新學期教科書時期とて各位御多忙の折柄にも不拘斯く多數の御來會を得ましたのは自他共に光榮と致す所であります、思ひ起せば本組合も創立以來茲に三年間幸ひに各組合員の厚き親睦と役員諸子の熱誠なる御世話に依つて益々成績の擧がるものあるは眞に悦ばしい次第であります。

何かの書物にも報ぜられました通り我國は世界第二位の讀書國であると云ふ事で國民全体が割方多く讀書に親しむと云ふ事は實に喜ばしい現象であると思ひます。其讀書國である我國の然も大阪に在住する御同業諸君が此方面に於ける責務の大なるは言を贅する迄もない事と信ずるのであります。就ては斯くの如き意味を以て自己の發展と組合の增進の爲めに益々努力されん事を希望して已まないのであります。

今は恰度櫻花爛漫の折、殊に當地は名勝古蹟に富み、天氣もよし一日は緩々と古都の春を心ゆくまで觀賞せられたいと祈るのであります。

と所感を述べて挨拶に替へられ。それから用意の酒肴を配つて、曾つて見ない大家族的の略宴を張つた、さしも廣々とした二百疊からの大會場も彼方に三々此方に伍々と團欒を以て埋められて、その美しさは春の野に咲き亂れる花のやうであつた。斯くして第二回組合懇親會も芽出度無事に終了を告げ散會したのは午後一時頃であつた。因に當日の來會者は三百名に達したそうである

モヨホシ

▲綠友會即賣會　五月一日二日恒例に依つて綠友會は堀江書林俱樂部で古書展觀即賣會を催した、天氣が申分ないので客足は多く盛況を極めた。

▲新本組合表彰式及運動會　書籍雜誌商組合では五月七日を期して大津公會堂に於て組合店員勤續表彰式を兼ね運動會を開催する事になつた今年は斷續輪送を廢して特別仕立の列車で一度に全体を收容すると云ふから定めて賑かな事だらう。

▲長谷川熊造氏追悼法要　三月廿四日和歌山に於て逝去せられた同氏の德を追慕する爲め各方面有志相計り來る五月十一日午前正十時西區江戶堀下通（京町堀電停北辻角）正覺寺に於て追悼法要相營む由、心ある方は隨意御燒香せられたいのである。

日本交通史書目解題（四）

芳水生

國史問題正面觀側面觀　一冊　大森金五郎著
大正五年五月發行

歷史講座中の一冊に成つて居つて論文三編の内「國史上より觀たる旅舍の發達」と題する一編に、神代より德川時代に至る驛遞、旅宿の沿革が記述されてゐる。東京日本學術普及會發行。

內國通運株式會社發達史　一冊　內國通運株式會社編
大正七年十月發行

江戶定飛脚問屋時代、陸運元會社時代、內國通運株式會社時代と云ふ順序に該會社の設立から其事業の變遷が書かれてあるが、一面我が國運輸の沿革を研究する參考とすることが出來るものである。非賣品、內國通運株式會社發行。

日本鐵道史　三冊　鐵道省編
大正十年八月發行

此一稿は曾て本紙一月號に掲載されたのであるが其節には編輯上の錯誤から左の細別を漏らしたから今一度全文を掲げる事とする。

上編　鐵道創業時代、自發端至明治廿五年度
第一章創始以前の事蹟、第二章鐵道の創始第三章線路延長、第四章釜石鐵道及幌內鐵道、第五章私設鐵道の創始、第六章幹線敷設、第七章私設鐵道の發達、第八章鐵道敷設法の公布

中編　官私鐵道並進時代、自明治二十六年度至明治三十九年度
第九章全國鐵道線路調査、第十章鐵道敷設法の改正及比較線路決定、第十一章北海道鐵道敷設法の公布、第十二章官設鐵道、第十三章北海道官設鐵道、第十四章私設鐵道第十五章鐵道の監督及法令、第十六章軌制問題、第十七章鐵道國有始末

下編　鐵道國有時代、明治四十年度以降
第十八章國有鐵道、第十九章廣軌鐵道改築案、第二十章私設鐵道、第二十一章輕便鐵道、第二十二章軌道、第二十三章地方鐵道附錄鐵道年表、索引、鐵道省發行。

盜難と其豫防

まるた生

濱の眞砂は盡きても盜人の盡きる時はない殊に我古本屋と盜人は隣り同志のやうな近きを感ずる　是れから夏向きになると着物が薄着になるので店頭に現はれる彼等も一寸仕事が仕憎くなるが寒向の外套を着た學生などが二三人連れでドヤ〳〵と店頭に這入つて來ると主人の神經は遽かに尖らざるを得ない。彼等は共謀して一人が人垣となつて主人と話し込んだりしゐる中に他の一人が犯行をすると云つた風に組織的に惡事を働く又近頃は種々な事を考へ出して二十圓位の郵便爲替を持參して二三圓程の書物を買つて釣錢を取る。あとから本屋が郵便局で其爲替を金に替へやうとすると金高が巧みに變造されてある事を發見して親も子もフイになつたやうな話も聞いてゐる。それから女小供が店番などをして居ると大膽にも品物を攫つて逡つて走る奴が處々で流行する　物騒な世の中ぢや大いに注意せなければ終ひには目玉迄も引き抜かれるかも知れない暴力的の泥棒にはいざ知らず一寸したコソ泥の豫防には須らく店番は店の入口で風呂屋の番臺のやうに內部を向いて頑張るに限る、是れが總ての點に於て一番能率が上るやうに思はれる

人相書に就て

碧巖窟　神陀居士

人相學即ちフイシオグノミーは東西共に随分古くから行はれて居つたものであつて、西洋に於ても希臘の時代から説かれて居つたといふことは、現にプラトーやアリストテレスなどにさうした相法關係の著書があることを見ても明かなのである。又東洋に於ても阿含經や華嚴經、又は智度論などに説かれてある釋迦の三十二相説の如きも、當時の印度に於ける或種の人相説に基いたものであることは申すまでもないのである。

又支那に於ても相法といふことは餘程古代から行はれて居つたのであるが、その方術の明かに傳へられたのは宋以後であつて、日本に於ける相法書の如きも殆ごこの宋代以後の支那説の影響になれるものである　然らば、こうした人相學なるものが現代の科學から見て、ごの程度まで眞理であり、眞理を含んで居るかといふに、支那の昔に於ても刑名學派の荀子は、當時盛に行はれて居つた人相説に對して、

『人の形狀顔色を相して、其吉凶妖祥を知ると、世俗之を稱すといへども——學者は道はざるなり故に形を相するは、心を論ずるに如かず、心を論ずるは、術を擇ぶに如かず、形は心に勝たず、心は術に勝たず、術正しくして心順なれば、則ち形相惡しと雖も、而かも心術善し　君子たるに害なき也形相善しと雖も、心術惡しければ小人たるに害なき也』と論じて、

人相學なるものゝ眞價を否定して居るのであるが、如何も在來の相法學なるものは、牽强附會の説が多くつて、殆ご信ずるに足らないのであるが、然し一歩飜つて考へて見るに、吾人の形相(身体)と心(精神)とは全然別なものであるとはいへないのであつて、或程度までの關係のあることは『思ひ内にあれば色外に』で、必ずや何等かの交渉のあることは、既に現今の科學即ち生理的心理學なごの立証する所である。故に在來の相學中に含まれた附會説を捨てゝ、そのうちの相當な實驗と經驗とによつて歸納されたものを根據として(十八世紀以後の研究になれるフレノロヂー即ち骨相學の知識研究等と相待つて)更に層一層の研究と實驗を重ね行くことによつて、近き將來に於て或種の眞理を發見し得るのではなからうかと思ふのである　擱筆に當つて、今後人相學を研究しやうといふ人々のために、和漢に於ける代表的參考書の數種を擧げて置かう。

風鑑源理相法全書(九)麻衣相法全編(五)人相水鏡集(四)柳莊相法(五)神相全編(十)

以上は人相學書の根元ともいふべき唐宋に於ける代表書である。

石室剖秘(十)相學三書(三)神相全編正義(三)日本に於ける相學者の虎の卷ともいふべき書

眞相正義(五)眞相精進(九)相學辯蒙(二)相法窺管(五)相法天中卷(十二)本朝人相考(二)　相法類編(三)相法摘要(三)相法和解(二)相法言

彦書譜(一)相法無盡藏(五)相法示蒙解(五)相學提要(一)南北相法(十)相法秘受解(四)人相千百年眼(四)此の外に擧げるならば無數にあるが先づ大体に於て代表的のものは擧げ得たと思ふ。こゝに擧げたものゝうちでも、現在に於て數十金でも尙得難いものがある。

店頭の微苦笑

○古本屋の表まできて立止つた、二人の洋裝の紳士連の一人に向つて
（君こゝで本なと見て待つていてくれ給へ、成丈早く用事を濟ましてすぐくるから……）
一人の紳士は唯々として古本屋の棚を漁り初めた、物の三四十分も經つてから（やあお待遠だつた……行こう、中え這入つてきて、何を見ているのや……古本屋は氣持が惡いで新本を買給へ、行こう、行こう、
そのまゝ二人は表てへ、後に本屋の主人がポカン。喜劇以上の場面だ。

○五つ六つの女の子を連れた若い妻君が、或日•私の店に這入つきて、御面倒ですが……月足•らずの繪本をください。

○誰が目にも不良青年としか見えない廿年前後の二人連れの男が黑い引廻しの下からトムソン科學大系を二冊出して買つて呉れと云ふ、斷よく謝絶すると、フンと鼻の先で冷笑しながら連の男に云ふように、古本買入の看板を外して置くとよいにね……それでも對手にせなかつたら出て行く時に捨セリふ、オッサン心配しなや盜品じやないんだから……問はずに語る彼等の鐵面皮。

○廿七八の若い男が本を買つて呉れませんかと云ひながら薄汚れした夢二の三味線草を出して、君これは絶版だぜ……。

○京都の或古本屋が飯嶋先生の動物學提要を窃取された、僅かの本であつたら捨てゝ置く筈であつたらしいが、ふとした事から易を立ててもらつた處がその易の表にその失物は大阪の東南部に在つてこの月の中頃には手に這入ると云ふた、易を見てもらうほど信じている人がそのまゝ捨て置く筈がない、買手がてら大阪までやつてきた、梅田驛で下りたか天滿橋で下車したかそこまで聞ても見なかつたが兎に角東南を目標に迫つてきた、處がその本は○○君が知つて居つて某書店に在ると云つて教へてやつた。
當るも八卦當らぬも八卦であるが、これは亦巧く的中した者だと感心した。

大阪と文藝雜誌（三）

◈「よしあし草」や「關西文學」の一團、その中心は天眠小林政治といふ人であつた。數年前東京で出來た書籍出版業天佑社は此一團によつて基礎を作られたのである。

◈この「よしあし草」や「關西文學」の生れる以前、武富瓦全といふ人の經營の下に曾根崎に「一點紅」といふのが生れた。武田仰天子の「落人旅日記」と題する註釋入りの小說に、一風變つた作として當時世評に上つたものが、この誌上によりて紹介せられたのであつた。

◈「よしあし草」や「關西文學」に對抗して生れたのが「ふた葉」である、菊判型の大きさ、表紙は題字を白拔きにした簡素のもので、その頃、南本町心齋橋筋角にあつた金尾文淵堂から發行されたのであつた。

◈文淵堂主金尾種次郎は思西と號し、近く春莊と改號した、渠は故春陽堂主和田篤太郎と共に出版界の歷史に其の名を遺すべからざる功勞者、唯だ圖書出版にのみ沒頭し更に倦怠がない。

◈「ふた葉」は、やがて廢刊の運命に接したが、その後、同じ文淵堂より「小天地」が生れた。其の「小天地」こそは大阪が有して有したりし文藝雜誌の尤なるもの、遠國木田獨步の創作「富岡先生」「牛肉と馬鈴薯」などの名篇も皆この「小天地」により始めて世に公にされたのであつた。

◈「小天地」に對して、隆々堂より「小柴舟」といふが生れた、「小天地」は薄田泣菫によりて、「小柴舟」は三木天遊によりて編輯されたのであつた。その頃の泣菫、天遊、共に新體詩人として文壇に立ちたる人である。

◈「小柴舟」は十號に滿たずして倒れ、更に同じ發行所より新に「文藝」といふが生れた、しかし又一年の壽命を保たなかつたのであるが、この間「小天地」には鏡花の政黨十二社、柳浪の畫化の傳序の如などの佳作が掲載され「小天地」の名は大阪の文藝雜誌として燦たる北斗の星の如き觀があつた

市内市場巡り

(一) 古典會　みをつくし

月二回八、廿五の兩日堀江の書林俱樂部で開かれる古典會は流石古い老舗がついてゐる丈に中々盛大なもので、今では關西で和本の市と云へば古典會を指す位權威がある。そして市内は勿論京都和歌山神戸姬路と遠方からもどし〳〵出品があつて每回賣上高は數百圓を下らない、時によると數千圓の賣上のあることもめづらしくない。會員は石川御兄弟が中心となつて松本、木村、伊藤等皆腕揃ひの御連中で全員一致してきび〳〵と活動して居られるのは見てゐても氣持が好い。

去る一日私は古典會の近頃の盛況振りを拜見にと出かけた。市内の和本屋は數へる程しかないが大抵いつも欠かさずに出席される人は玉樹香文房、中尾松泉堂、中村積德堂、鹿田松雲堂、杉本梁江堂、柳屋支店、木村達磨屋等の御主人で地方からは京の細川開益堂、佐々木竹苞樓、山田聖華房、三浦其中堂、神戸の古家白雲堂等の御主人が列席される。他の市場と較べて如何にも御上品で家族的で和氣靄々としてゐる處はさすがとうなづける。時々香文房主人等の警句や洒落に笑聲も聞ゆるが概して靜肅である。積德堂の若主人は軟派本通で好きな珍本が廻つて來ると何時も相場のレコード破りが見られる。古俳書は近頃の流行本で近年著しく騰貴して一部何百圓とするものもさして珍らしくなくなつたが、是には梁江堂主人等のこの會での買占が大いに與つてゐるものと思ふ。松雲堂主人はいつも此會での買大將ではあるが、京の聖華房の老人の若い者に負けぬ買振りには感心する處で熱心に嵩高なものでも何でも厭はず落札される。佛書類は京の其中堂、西十、漢籍類は京の竹苞樓、聖華房大阪の松雲堂、松泉堂と大抵買手の範圍がきまつてゐる。近頃は活版本の珍書も中々多く出品せられて高尾書店や松雲堂若主人等が爭つて買上げてゐる。

總じて和本類は一寸素人にはどんな本が珍書でどんな本が賣れないか判別がつかぬもので薄つぺらな小冊子が何十圓に賣れてゐるかと思へば史記評林や資治通鑑等の嵩高物が涙が出る程安く落札されてしまふ。それが安くとも本屋の手にあればつぶされずにすむがもし村上さん等の反古專門の人の手に落ちればもうそれ迄で、聖賢の金句であらうが、書聖の名書であらうがすべて本の形を失ひ製紙原料の一つにされてしまうのである。每市ごとに此のつぶしに落ちて行く數の如何に多いことか、それは大層に云へば大震災で書物が灰燼に歸する數よりもはるかに多いとも云へる。だが又一面これ等の反古の中から貴重な古板本草稿等が少なからず掘出されるのである。殊に近頃のやうに古書が拂底すると零本殘冊でも高價に取引されるから出品者は皆血眼になつてこれ等の珍本を掘出してくる。そしてそれ等の多くは大抵反古屋の倉庫から表紙のはがれ

たものや、危く表紙取をまぬがれて出て來る最近でも西鶴の一代男や光悅の伊勢物語等皆これ等反古屋の屑物の中から見出されてこの古典會に出品された。そしてそれを見出した人は法外な儲けをしたことは勿論である。

大口の一口物が出品される事もないではないが大抵は皆の持寄りで每回この會に出品される人には竹野、四方、臼神、丸太、小野等の諸氏があつて、いつもどこからこうも集るものかと驚く程品物がよつてくる。神戶の古家君や姫路の神田老人等も地方から中々珍本を集めて來られるいつか神田氏が天正板の論語を出品されて數百金に落札されたり、白雲堂の主人が四國の田舍で西鶴本二十不孝か何かを反古値で買つて來て百何十圓かで賣れた事等はこの會として忘れられない語り草になつてゐる

和本の珍書は少くなる一方だが一面反つて古本の相場は日々に騰貴するから、和本專門のこの市會が時代に適ひ乍ら益々盛大になるのは御尤もなことである。會の提灯を持つのではないがこの上共に御繁昌を祈つておく。(大正十五、四、二五夜稿)

車中の書籍

見佳　盡子

學期前になると著しく電車の中や汽車の中の朝はまだ寢が足りない眼をこすりつゝ若い讀書家が開く國文敎科書を散見するのである。

京都の入札會に通ふ途すがら吹田から乘りこんで來た美しい四人連の女學生が汽車の中の一桝につゝましく坐つてガアルスクラウンリーダーをとりだした。その伴侶が四人が四人共コンサイスの英和だつたことは市で一圓四五十錢に賣れる偉力を痛感したのであつた。

ある日丸善の包紙で表紙をすつかり包んでしまつてある四六版の本をよんでゐる紳士があつた。

その紳士のかたはらを通りすぎる途端素早く活字の組をみてそれが藤村全集であることが判つた。

本屋としての第六感がスリよりも敏感であることを見出すと共にそれから深い興味を覺えて遠くからその本が何であるかを推定してひそかに變態的な興味を滿足さしたのである

電車の中の紳士淑女よ、以後は決して性に關するものや、惡趣味の書をひもどいてはなりません。何時なんどき本屋が同車して用心深く表紙を隱してゐても、スリよりも恐ろしく刑事よりも敏捷にあなたの趣味性がどんなにその服裝と調和がされないかを盜見してしまふことでせう讀めなくても原書ならばいゝでせうでも本屋はあまり英語をよみませんから……。

そこでまたある日、向ひ側に腰かけてゐるオールバックに桃色のショールといふ極彩色の令孃が、赤い表紙の菊版の本を用心深く讀んでゐるのを見受けたのである。本屋の江戶川亂歩は鋭く本の厚さを硏究して緒方さんの助産婦學と觀察を下して天晴れ頭の良きを誇つたのであるが、看護婦とはどうしても見ゐない程それは美しいお孃さんである。こいつは正木不如丘の樣に誤診かなあと思ふ途端である　その本をとなりに坐つて差しのぞいてゐる會社員が極めてエロチックな笑をしたのである。

(次は車中の[illegible])

年表類の解題（一）

永樂町人

各種の書目、目錄に次で讀書家や研究家を喜ばし又益するものは年表類であるだらう。其中で稀らしいと思ふものを多少解題御照會して見る●●●●●●

○近世邦樂年表（第一卷）常磐津、富本、清元之部

東京音樂學校編纂（明治四十五年三月）六合館發行、定價壹圓參拾錢、四六倍判洋裝、二九六頁本文三段組

本書は東京音樂學校邦樂調査部で編纂したもので、將來完成すべき近世邦樂年表の一部に屬するもの、高野辰之氏（最近日本歌謠史の著者）指導の下に福田勘藏氏專ら之を編成した物とある。即ち常磐津節の創始時代享保十五年（紀元二千三百九十年）から慶應三年（同二千五百二十七年）迄凡そ百三十年間に亘り　常磐津、富本、清元三流の淨瑠璃並に各流派の著名な太夫三味線彈きの歿時略傳を年次に列記し。而して劇場に上演せられたものは其外題、興行座等も併記し且つ其典據を明かに説明されてある。尚ほ劇場に用ひられた諸曲中比較的有名なものに限り登場俳優及其役名をも併記して取材を知るの便とし、最後に此年表使用者の爲め本外題、俗稱外題の索引を載せて便利を圖つて居る。隨分周到な用意を以て調査してあるやうに思はれるが本書序文には

『由來此類の資料は甚だ得易きが如くなれども極めて湮滅し易ければ探求實に容易ならざるものありき今尚ほ幾多の缺陷を認めざるにあらざれども暫く之を剞劂に附して世に公にし博雅の諸士に助言を求めて完成を他日に期せんとす』

と書いてあるから從つて讀書は未定稿として取扱はれて居るやうであるが、此方面に全然不明な私等が見ても内容の充實したものゝやうに察せられるし他に此種類書がないだけでも誇るに足るものと思はれる良書である。（次は近世邦樂年表（二卷）江戸長唄之部）

大阪古書籍商組合員長谷川健治氏嚴父長谷川熊造氏去る三月廿四日和歌山に於て逝去せられ候就而故人を追慕する爲我等有志相計り來る五月十一日午前正十時西區江戸堀下通一丁目（京町堀電停北辻角）正覺寺に於て追悼法要相營度候間隨意御燒香被成下度此段生前辱知諸君に謹告仕候

追伸　一々御案内狀可差出筈の處乍略儀此廣告を以て御通知に代へ申候

發起人　鹿田靜七
　　　　荒木伊兵衛
　　　　石川嘉助
總代　大阪古書籍商
　　　　有志一同

大正十五年五月五日第二十號發行

發行兼編輯人　松本正治

發行所　大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東へ入　大阪古書籍商組合事務所

大正十五年六月五日發行　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第廿一號）

組合員異動

▲加入者

東成區生野林寺村二二七　杉井榮次郎氏
　紹介者　四方耕太郎氏

東成區大今里六二〇　北村榮太郎氏
　紹介者　四方耕太郎氏

西區阿波座四番丁十三
　大文館　前田千代藏氏
　紹介者　四方耕太郎氏

東區小橋元町一一四ノ二　江口武雄氏
　紹介者　藤堂卓氏

港區八幡屋元町二丁目二二五
　青猫書林　中田輝親氏
　紹介者　澁谷云爲氏

▲訂正

前號加入者中山本陸平とありしは山本陸市氏の誤りに付訂正す

▲第十九回定例役員會

（五月二十六日）於日本橋倶樂部久し振りの役員會を開く、出席者十六名、先づ新加入者を承認し、次に四月二十日奈良に於て擧行されたる第二回懇親會の決算をなし、最後に別項記載の如く組合副組長壺木伊兵衛氏の病床を組合の名を以て見舞ふ事となり之を鹿田、藤堂兩氏に托して散會

▲市場協會協議會

（五月六日）於日本橋倶樂部例會を開催、落丁本處分のスタンプ押捺を實施する事、其他の件を議す、出席者佐藤光次郎、小石川、國枝、森谷、谷、伊藤一男の諸氏

▲落丁本の處分
愈々實施さる

豫て研究中であつた落丁本處分の件は古書市場協會設立後最初の事務として愈々此程から各市場に於て實施される事となつた、其方法は市場に於て落丁本を發見されたる場合又は申告に依りたる場合該品の奧附に協會所定の□の中にRのサインあるもの押捺して落丁本たる事を知らしめ尙落丁部分に補綴を加へ完全なるものとなしたる場合は申出に依り同じく□の中にKの文字あるものを押して消印とし完本たる事を知らしむると云ふ故に今後奧附のなきもの及びR印の故意に抹消せられたるらしきものは各自注意せられたいのである。因に取るに足らない貧弱なる書物とか赤本類似のものには其煩を避けて之を實施せないとの事である

長谷川熊造氏
追悼法要

於江戸堀眞宗正覺寺

五月雨の蕭條と降る五月十一日それは故長谷川熊造氏の追悼會を催すに相應はしい日であつた。

江戸堀一丁目の眞宗正覺寺は長谷川氏の菩提寺であるから、發起人有志は特に此寺を式場として選んだのである。

當日は早朝から祭壇を清め、玄關から本堂へかけては一面に白布を敷いて佛前には古典會、日本橋倶樂部緣友會さては神戸の谷神港堂書店等から贈られた供物や錦水會、明石忠雄氏其他淡路町附近有志の心を罩められた花輪、挿花等が所隘きまで美々しく飾られた。そして中央一段高き壇には故人の寫眞が恭々しく祀られてあつた。參拜者は降り頻きる雨にもめげず陸續として遠くは京都あたりから、また餘り常に見受けない舊知の人々迄も敬慕措く能はずとして今日の法要に來り會せられたのである。

十一時少し前、住職の唱道に依つて嚴かに法要は始められた、讀經半ばにして我組合長鹿田靜七氏は徐ろに起つて組合及び各會合を代表した弔詞を朗讀せられた、即ち

祭文

維時大正十五年五月十一日茲ニ長谷川熊造君ノ靈ヲ祭ル君資性溫厚篤實夙ニ書籍商ニ從事シ店舗ヲ大阪市ノ中央ナル淀屋橋筋ニ設ケ鋭意斯業ニ勉メ家運益々盛大ヲ致ス其客ニ接スルヤ溫容ヲ以テシ尤モ誠實ヲ旨トシ特ニ同業ニ對シテハ薄利ヲ以テ賣買コレ務メ爲ニ地ノ遠近ヲ論ゼズ君ノ堂名ヲ知ラザルナク足一度大阪ニ到ルヤ必ズ君ガ店舗ヲ訪ハザルナシ又後進ヲ誘掖シ君ノ指導ニヨリ今日斯業ニ盛大ヲナス人指ヲ屈スルニ到ルト云フ其德ヤ大ナリト云ベシ

君晩年本店ノ業務ヲ男健治氏ニ讓リ別ニ店舗ヲ君ノ愛スル風光明媚ノ地和歌山市ニ設ケ悠遊自適老後ヲ養ヒ時ニ大阪ニ出デ其溫容ヲ市場ニ見ウケシガ今春病ヲ得テ起ズ三月二十四日遂ニ不歸ノ客トナル嗚呼悲哉吾等同人君ノ德ヲ憶ヒ今日君ガ家ノ菩提寺ナル此ノ正覺寺ニ於テ聊カ法事ヲ營ミ其靈ヲ祭ル冀クハ來リ享ケヨ

大正十五年五月十一日

大阪古書籍商組合有志總代

鹿田靜七

それが濟むと、京都進文堂、丸三書店、國井氏、大阪森田正信氏等から寄せられた弔文電報の朗讀があり尙ほ讀經の中に親族から來會者一同交々靈前に燒香を呈して故人を敬弔した。

斯くして心から其德を追慕して已まない方々に依つて此壯嚴な法要は滯りなく終了したのであつた。

（寫眞は當日式場、中央起ちて祭文を讀めるは組長鹿田靜七氏）

故人追慕懇親會

式典が滯りなく終つて有志一同記念撮影を爲した後、故人の追慕懇親會が程遠からぬ川久樓で開かれた。集る者三十幾名、かはる〲起つて故人の德を慕ひ行を稱へた說話があつた　追悼會に絃歌は如何かと顧慮せられたが、故人が特に此方面にも心を染められたので構はないとあつて嚴肅な中に頗る打寬ろいだ宴が張られた、そして各々故人を中心にした追憶談に時を過して散會したのは午後二時頃であつた。

年表類の解題（二）

永樂町人

○近世邦樂年表（第二卷）　江戶長唄附大薩摩淨瑠璃之部

東京音樂學校編纂、大正三年五月、六合館發行、定價壹圓五拾錢、四六倍版洋裝、二七八頁、本文二段組

曩に發表したる第一卷常盤津富本淸元之部と共に近世邦樂年表の一部を爲すもの指導者及編成者は前のものと同人である。寶永元年（紀元二千三百六十四年）山村座顏見世番附に創めて「江戶長唄」の名稱見ゆと云ふ時から始まつて、慶應三年（同二千五百二十七年）迄凡そ百六十年餘に亘り。長唄及び大薩摩の外題、作曲者等を年次に列記し、劇場で上演せられたものは興行座、三味線引、囃子方、振付の連名並に之を演じた役者及役名をも併記し又名家の歿時略傳をも加へてある。以上が本欄即ち上段であつて、下段備考欄には本欄に載せた諸曲の解題信疑未定の傳說等も收錄してある

尙卷頭には「江戶長唄の起源」と云ふ考證を揭げて錦上更に花を添へ卷末には外題俗稱及變化物索引等をも加へてある事は殆ど前書と同じであるから其眞價は今更管々しく書き立てるまでもなく未定稿とした謙讓な序文は添へてあるが仲々堂々たるものである。そして將來上梓されんとする義太夫淨瑠璃之部と相俟つて近世邦樂年表が完成せられる譯であるが以上二書は今日既に絕版に屬し市場稀に見る事あれども非常な高價を投せねば獲得する事が出來なくなつた尙義太夫淨瑠璃之部は先頃物故せられた渡邊霞亭氏が秘藏する多くの院本等を參考資料として借覽したと云ふから遠からず發行される事と思はれる。（次は俳諧年表）

副組長荒木伊兵衞氏逝去さる

我組合の先輩にして組合創立以來副組長の席にあつて盡瘁せられた荒木伊兵衞氏は客月來食道癌を病み凡ゆる名醫の診療を受け專ら自宅に療養中の處其効もなく五月廿八日忽焉として逝去せられた。誠に痛惜に堪へず曩に長谷川翁を失ひ今又此訃に遭ふ轉た寂寞の感あり。葬儀は同三十日阿部野新齋場に於て盛大に行はれた。因に月報締切後の事なれば詳報は次號に讓る。

碧巖窟主人に答ふ

星山人

小論に對し御垂教を賜り忝く存じます。成るだけ文字を少くしようと思ふて、省略した爲めに種々誤解を蒙りまして申譯ありません。他にも先生のやうに解された方が有ろうも知れぬから、辯明さして頂きたいと思ひます。一月號七頁再讀、本文六十行を七段に分ける、十行點迄一段十六行點迄二段、二十二行點迄三段二十八行點迄四段、四十四行點迄五段、五十八行點迄六段、六十行終迄七段、

一、先生は先づ第一段を見て腹を立てられた摸樣である、井戸の中の蛙が大海を知らずして、大言を吐くと思はれた事と想ふ、是れは讀書慾に耽つた結果自信厚き言を吐く者に對する好教訓と成るで有ろう。

二、第二段は文簡なるが爲めに誤解された者らしい、意味は一冊の本の中には正しい所も有る、不正ばかり書いたと云ふ譯では無いから、正しい所の多い本を參考としたら良いだろうと言ふたので、人相手相書の中には內容の全部正しい者もあるから正しい所の多い本を參考とせよと言ふた譯では無い、從つて第一段と二段とは決して矛盾して居ない筈だ。一段二段再讀。

三、第三段は普通世間に有りふれた人相手相書の中から、比較的正しい所を多く含む書を撰み出したので、世に得易からざる本は假令書名を擧げても手に取る事は至難であろうと思ふたからである。余の全文は先生の如く多數の類書を集め得た人に見て頂くのでなくて只一二冊の本に依つて、人相手相を研究して見ようとする人の便利の爲めに書いた者と解釋して頂きたい。

四、右三段に掲げた四種の本も完全ではない假へば神相全編正義と云ふ本にしても、昔東都の石龍子が訂正して刊行した書と云ふた所で、其書の內容を吟味して見ると、前後矛盾した所がザラに有つて、終ひには見る事が厭になる、故に是等の代表的書物でも參考として見るべき者で、完全な者と思ふて見る事は出來ないのである。

五、第四段は南北氏を譏つた考では無かつた又其書を無用と云ふ意味でも無かつた、唯其書を見て感じたまゝを言ふたので、神相と言諺とを合せ見る事の出來る人の爲めには、取り柄が少いけれども、此の兩書を合せ見る事の出來ない人の爲めには、好參考書となるであろう

六、第五段は全く以て言外の話だ、余斯る不德漢を憎む、第六段第五段の書を信じたればこそ轉載した者で有ろう、後世も或は誤つて信ずる人がないとも限らぬ、故に余が本紙を借りて口を極めて罵倒した事が一部の人の注意を引く事が出來たならば余はそれだけでも善い事をしたと思ふて居る。

七、第六段を見て讀書子を馬鹿にした言だとの御腹立だが、先生の如き方に對して申したので有れば、成る

モヨホシ

よりは總てが小規模であつたが、相場は依然として高く今年上半期に於ける峠のやうに思

素人仲間混合の賣立會を催された。點數は可成り澤山にあつたが値段は割方安い方であつ

△日本橋倶楽部特別市　は五月十日同
倶楽部で催された今春二月十日にあつたもの

△柳屋書廊の賣立會　某氏委托の書畫
書籍類を五月十六日に堀江書林倶樂部に於て

回を五月十八日堀江書林倶樂部で開催、此方
面の珍本が可なり集つて盛會であつた。

程馬鹿にした言と解されても仕方がないが、若し世間一般の人に對してど有つたならどうだらうか、一例を擧げると何博士著とか、何々先生作とか言へば、何々堂發行辭書とか、未だ内容を見ずして買ひ込む新聞雜誌出版屋及讀者はたんとある世の中だ、原稿と云はず刊行本と云はず其多くは然りと云ふても良い、されば余が第六段の如く書いたからとて決して讀書子を侮辱して居ない心算だ先生及余等の如く出版元にも著作者にも一切お關いなく、内容を見た上で思ふた通りに批評する讀書子は、一般書籍の購求者の中では先づ少い方だろうと思ふのだが、こう書いたら又自惚れ野郎と怒る人も有るかも知れない　兎に角筆好法師の言草ではないが、思ふことは言はざらんは腹ふくるゝわざとかや、お叱り蒙つた上は辯明せねばならず辯明する上は思ふまゝに申上ます。妄言多謝八、第七段は得易からざる書と、多數の類書を批評する事を避けたのです、不肖寡聞をも顧みず大言壯語したる罪を許させ玉へ、内容完全したる者あらば教を垂れ玉へ、因に正と不正との標準論は論理と實驗との兩方面より行く、試に見給へ今日觀相に從事する人で一二の本を金科玉條と心得て見て居る人がありますか、如何に下手な觀相者でも二三の本では滿足しません、書籍以外の口授とか實驗とかに重きを置く者は、從來の相書に完全した者が無い爲めではありますまいか、再び尊顏を犯した罪を許させ給へ、願はくば愚頓な吾等に完全したる一冊にても教へ下され

△月報を盛に御利用下さい●●●●●●●●

我が組合一部の人々の間には漸く此月報も認められて居るやうですが尚無用の長物視せらるゝ方々があるやうです、それは御自身に大いに此紙面を御利用ならないからだと思ひます、盛んに御意見を發表されて自他の啓發研究に資せられ奮つて御投稿あらん事を祈ります。

大阪と文藝雜誌（四）

◈「小天地」や「文藝」と時を同じうして生れたのに「三角洲」といふがあつた。菊判二倍型の、印刷に、用紙に、頗る贅を盡したものであつた。地文學上より見て、大阪市の一部は淀川の三角洲の上にあるといふ、それよりヒントを得た題號であらう。

◈明治三十五年七月一日、大人國之可小雜誌、君子國之小人雜誌と標榜して生れたる此の「三角洲」は梁蔭南久太郎（今の公立社主藤堂卓氏）といふ人によりて經營されたのであつた。僅に六頁の小雜誌、會員以外は定價一部六錢を以て頒たれたのであつたが、評論あり、創作あり、感想あり、劇評あり、新詩あり殊に其の編輯振の水際立つたる今日の「新潮」に似た所があつた

◈故山田美妙も此の「三角洲」の爲めに其の嵯峨やゝの濃筆を揮つて題號を認めたこともあつた。江水社の才人噴菲水も折々寄稿して來た。中村星湖、川路柳虹等も此の「三角洲」とは淺からぬ緣を結んでゐた。

◈「三角洲」は日露戰役の最中に廢刊した。たしか廿四號を終刊號としたと記憶してゐる。それ以來、大阪には見るべき程のものはない。無論それより十餘年の間に、生れたる大阪の文藝雜誌は幾十、否、百を以て數ふべきであらう、しかも皆その壽命は長くなかつた。思ふに世の中は進歩した、思潮は變化したのである、青年をして文藝にのみ沒頭せしめ得るが如く、爾く餘裕あらしめぬのである、換言せば新時代の空氣は鋭くなつたのである。鋭くなつた爲めに愚にもつかぬ文藝雜誌の存在を許さぬやうになつたのであらう吾人の「大阪と文藝雜誌」もこれにて擱筆する。

外國の古書蒐集ばなし

清水生譯

次の一章は米國のある雜誌に掲載された古書蒐集家の話です、我國の古書蒐集と比較するのも面白いものと思ひ清水君に譯していたゞきました　（B・S生）

「讀書は完全なる人格をつくる」とはベーコンの言葉であるが、書物の蒐集は讀書の基礎的事業で書物蒐集家は常に書物の使徒として仕へ、書物の慈父として親しんで行かなければならない、そしてその蒐集する書物に對して鋭い鑑識を養つて行く必要がある　書物に親しむと云ふ事は即ちこの素質を養ふ上に與つて力があるのである、經驗ある書物蒐集家は甲の書物が乙の書物よりより良いといふことを知つてゐるばかりでなく、更に何故に然るかといふ理由を知つてゐなくてはならない。

よき書物蒐集と云ふことはこの上もなき投資と云へる、冬期になると市場では毎日のやうに某文庫の一口物が振りに出る、そしてそれが高價に取引されてゆく、一口の文庫を買ふことは決して浪費ではなくそれは集むる人にとつて確かによき投資である。

古本が年數を經るに從つてその價を增すといふことは當然である、總ての本が皆が皆まで高價になるといふのではないが併し書物の値段の一般的レベルが徐々に高くなるといふとは書物蒐集の歷史が證明してゐる人は相當價値ある書庫を作るためには、莫大な金がかゝるやうに思つてゐる、所が事實はこれと反對である新聞は一つの賣立があると常にその最高價な珍書を列べて書きたてるがそんなものばかりではない、書物がべラボウに高値を吹くといふ理由には二つある、第一は稀本であるといふことだ、併し稀本といふとは必ずしも高價を意味するものでない。どの賣立に於ても又どこの本屋の目錄をみてもたとへ數百年前の刊行物で一册二册若くは三册しかないと云はれる本でも大抵は最低の時價である唯その値段が火箭のように飛び上るといふのは一册の本を二人の金持が同時に買取ろうとする時だけである

ニューヨークにロバート、ホーといふ人があつてその藏書は裕にアメリカ中の本屋の持品に匹敵するといはれてゐたが一九一二年にその賣立をやつた、その賣上高は二百萬弗（約五百萬圓）であつた、書籍商の中での蒐集家として知られてゐた。ドヴィン氏の藏書は殊に書物に關する書物が大部分を占めてゐたがその賣立の上り高は二萬五千弗（約五萬圓）であつた。

蒐集家は或一定の方向に從つてそれ〳〵專門がある、ある友人は詩人シエレーに關する書物を集めてゐるメトロポリタンの有名な蒐集家は煙草に關する書物を集めてゐる、マクマートリ氏は活字鑄造又は校正についての書物を專門にし、メーソン氏はフランクリニアナに關するものをブリムプトン氏は寫本類を、エメット氏は印刷に關する本を專ら集めてゐる。

初心の蒐集家はその專門とする部門の普通の書籍を手に入れたら愈々第二段に移つて古本屋漁りをやつて絶版本を手に入れにかゝるのである

古本屋も追々組織立つて來て客の尋ねる書物は直樣さり出すようになつては來たが尙未だ完全ではなく古本屋自身が氣付かない珍本が書棚の片隅に投げ出されてあるといふことは屢々見當る所である

大都市に居住する蒐集家は先づ圖書館に行つて求めんとする書物の內容をよく調べてみるとよい、その中にはきつと欲しくてたまらぬ本が出てくる、それから本漁りをやることである、我々にとつて數年探しあぐんでゐた一册の本をある機會に安い値段で手に入つた時程愉快なことはないのである。

それから各古本屋へ住所と姓名を送りいつでも各所からカタログが手に入る樣にすることが必要だ、貧しいポケットマネーではとても是等の物を買占められないとは解つてゐても尙決してカタログ追求の熱は醒めないのである、そして年經る每にそれ等の新しいカタログの中で所藏の書物が皆て自分が買つたよりもずつと高値を吹いてゐるのを見るのもうれしい。

何か特別の目的で或る本を急にほしい時にはその事を古本屋に言つてやれば古本屋はそれ〳〵の機關に廣告して手に入れてくれるであらう。

書物と云ふものは又思はぬ場合に思はぬ所から手に入ることがある、大分古い話だが、ワレースの名著ベン、ハール（譯者註邦譯、星をめあてに）の初版が出たとき初版の一本が著者のもとへ送られて來た、そこで彼は喜んでその本を來合せた友人に見せた所、見てゐた友人がこのデエディケーションには「我が青年時代の妻に獻ず」と書いてあるが一體君は幾人妻君を持つてゐたのかねと云つた　ワレースは驚いた「幾人の妻だつて馬鹿な一人つ切りぢやないか」と答へたのである、併しワレースはよく考へて見ると成程この書方はそう誤解されるのも無理はないといふので直ぐ「我が青年時代の妻にしても今尙われと共に棲める彼女に」と書き改めたのである。私は約二十年間といふもの此書き直さぬ前のデエヂケーションのついてゐる初版のベン、ハールを探してゐた、しかし手に入れることはおろか見ることさへも出來なかつた、所が昨年自分の故鄕の婦人クラブで講演をやつたときその話をしてきかしたところ聽衆の一婦人がそれなら私の文庫にあるといふので一本を贈與して吳れたのであつた。

▲神戶古書組合會報生る

豫て懸案中であつた神戶古書組合の會報創刊號は去る五月十日を以て孤々の聲を揚げた。內容外觀共に整然たるものが出來上つた、擔當者たる古家白雲堂主人の苦心や察するに餘りあるものがある。古家君は年中殆ど席の温まる暇なき迄、家を外に出歩いて居る人だが、其人が縱令四回にもせよ此會報を纏めると云ふ事は餘程の努力が必要である。幸ひ健筆なる兄の奮鬪に依りて有終の美を完ふせられん事を祈りて已まない。

古書の思ひ出

乙 宗 生

大阪出版協會主催の文化展覽會が大丸に開催され、正平版の論語や柳原の珍藏になる曉鐘成の稿本が陳列されてあると云ふ事なので、もう閉會に押つまつた、春寒い三月廿七日にそれが展觀の光榮に浴した他の展覽會に見るように混雜する程の人も見ず、至極落着て十二分に鑑賞なし得た事を喜んだ、前記の二書は云ふに及ばず最後の組合記錄まで折返し廻覽したが何れ劣らぬ珍書稀本のその中に、別して圖書館の「好色盛衰記」は頗る珍重するに足る稀書たるを失はないが一般に本の美くしい事が驚く許りである、此古書展覽にヒントを得て思ひ出したのは、自分が斯業に手を染めてから賣買した古書籍の思い出である、幸ひ大正元年から日記が保存してあり。その以前は斷片的に記入してある露店賣上帳の手記によつて記憶を呼起して見る事にした、徒らに死兒の齡を繰るではないが古典全盛期の今日より見たる價格の相違と一露店商人の如何なる本が手にせられたるかの興味をそゝる上に於て徒事ならずと思ふからである題名の相違や賣買年月の轉動冊數の誤りは寬恕されたい。

○德川時代刑罰圖譜　一　買四〇　賣不明
繪面が面白いので二枚づゝ交代に看板代りに店頭に吊下げたら一人立ち二人立ちして店前時ならぬ混雜に巡査は何事ならんと立寄つて直ちに撤回を命ぜられた。

○江戸大地圖 大和版　一　買七〇　現存

○奈良繪本題不明　三　買一〇〇　賣不明
現今の地に開店第一日目に古道具店より買受けし物所謂幸先きよき品として印象深し。

○俳諧御傘　五　買七〇　賣三五〇

○南蠻寺興廢記　一　買二〇
初め裏の谷筋の道具屋の表てに積上げてあつたのを誰も買ふ人がなかつたが、死んだ中野の啓さんが掘出してきて、私に此書の説明をして呉れたので初めて知つて覺にて居つたが一年程經つて崇彈寺馬場の書店で手に入れた

○好色一代女　一丈　買二〇　賣不明

○狐の嫁入畵　一　買不明

○北齋筆三十六歌仙　一　折本買一〇〇　賣不明
頗る美本である若し現在まで保存しありとすれば、その價格如何程か我等元より不案内であるが少くとも七八十圓は下るまいと思ふ。
（此稿續く）

大正十五年六月五日第二十一號發行
發行兼編輯人　松本正治
發行所　大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東へ入　大阪古書籍商組合事務所

大正十五年七月十五日發行　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第廿二號）

組合員移動

▲加入者

此花區中江町一三八
太閤堂　今井藤次郎氏
紹介者　森村接松氏

南區日本橋筋三丁目二七
ミスミヤ　三隅貞吉氏
紹介者　藤堂卓氏

西區南堀江上通一
豐仲鍬之助氏
紹介者　高尾彦四郎氏

▲移轉

ミキヤ書店　小川信行氏
住吉區天王寺町一〇二七へ

九州堂書店　吉村長七氏
北區天神橋筋六丁目七五へ

▲市場協會協議會

（六月廿三日）於日本橋倶樂部

第四回例會開催、同友會及佐藤會市會の移轉を承認し、幹事滿期に付次幹事石川、村瀬、國枝氏に事務の引繼をなす、出席者森谷、四方、佐藤光、森村、國枝、谷勘七、村瀬、松本の諸氏。

副組長荒木氏の葬儀

前號所載の如く副組長荒木伊兵衛氏は今春來食道癌を患ひ專心療養に努められたが遂に起たず、五月廿八日長逝せられた、葬儀は同三十日午前十時阿部野新齋場に於て莊嚴なる佛式によつて營まれた、朝來細雨催したが各方面からの會葬者は五百名に達した、組合からは役員全部參列し、尚ほ會旗、花輪等を呈し弔意を表した。新本組合からも組長鈴木常松氏の參列を受け、且つ懇篤なる弔文をも添ふした。式半ばに我組長鹿田靜七氏は左の弔辭を朗讀された。

弔辭

大阪古書籍商組合副組長荒木伊兵衛君ノ英靈ニ告グ

君資性温厚ニシテ能ク人ニ接シ日夜業務ニ努ム壯年先代ノ家業ヲ繼ギ後居ヲ江戸堀ニ移シ時代ノ推移ヲ察シ早ク活版書及洋書ノ賣買ヲ專ラトシ廣ク内外ノ古書ヲ取扱ヒ業務益々隆盛トナル又同志ト古典會ヲ起シ同業ノ機關トシテヨク古書ノ疏通ヲ計リ以テ近時同會ノ盛々盛大トナル基ヲナス

大正十三年我ガ古書籍商組合ノナルヤ推サレテ副組長トナリ毎期推選今日ニ至ル恒ニ同業ノ發展福祉ヲ計リ去月病ヲ得ルモ尚努メテ評議員會ニ列シ我ガ古書業ノタメニ盡ス我等君ニ倚ツ所最モ多カリシガ天壽ヲ遐サズ五月二十八日溘焉トシテ長逝セラル哀情何ゾ堪エン然共君令息多ク皆聰明ニシテ長男幸太郎君家業ヲ勵ミ益々家聲ヲ揚グベシ君安ンジテ瞑スベキナリ

謹デ同業ヲ代表シテ以テ敬弔ノ意ヲ表ス

大正十五年五月三十日

大阪古書籍商組合組長　鹿田靜七

聽く者一種嚴肅の氣に打たれ涕泣の滂沱たるを禁じ得なかつた。

荒木氏の成功譚

某古老談

故荒木伊兵衛氏のモ一つ先代伊兵衛氏と云ふのは初め新町砂場で貸本の問屋――恰度今の三休橋にある樋口隆文館のやうな營業をして居られた貸本と云つても今の貸本と違つて粋書本の類である。其後堀江の新一橋の邊りへ轉居せられ更らに江戸堀現在の家の北向い今自轉車屋のある家に移られたのである。

今度逝かれた伊兵衛さんは初め辰さんと云つて、寶文館がまだ備後町心齋橋筋角にあつた頃は同店へ商業見習ひとして一年ばかりも奉公して居られた、それは二十一二歳頃だつたかと思ふ。

堀江から江戸堀に移られた頃から世の中は漸く活版本全盛となつて來たので此の方面に着眼し又古い教科書なども賣買するやうになつた。大阪に於て古教科書を扱つた殆ど元祖であつたらう。勿論四十年も前の事であるから大阪中を數へても洋本を取扱ふ古本屋は僅に四五軒位しかなかつた頃の事であるから、新學期時分になると、若い學生達が店頭市をなす程詰めかけて來る。そしてローヤルやロングマンリーダーと云つたものが盛んに賣れた。

又須因頓の萬國史なども教科書としてよく賣れたものであるから、荒木サンの店には何時も萬國史だけでも四十や五十は仕入れてあつたものだ。今頃の若い本屋サンが聞いたらソンなものが賣れた時代があつたのかと呵笑しくなる樣な話である。それから是等の學生連は教科書にしても參考書にしても荒木書店でなければならぬやうに常に蝟集し來つたものである。其連中が追々上級の學校へ進む、次では社會へ出て獨歩するやうになる。今では何々博士だとか何會社の重役だなどと云つた連中が皆昔ロングマンやローヤルリーダーを買いに行つた方々ばかりで三歳に附いた癖は百までゞ相變らず御用命が荒木書店へ舞ひ込むから、一寸かけ出しの本屋なんかの窺ひ難いお顧客が無盡藏に控へて居るのである。

また醫科大學の前身府立醫學病院や高等工業、關西大學と云つた高級な學校が附近にあつた爲め是等から受ける恩惠も決して少ないものではなかつた。それがために今日荒木サンの店には醫書もあれば工業、法律と云つた工合に割合堅苦しいものが列んで居るのである。

今から恰度二十年程以前、世は日露戰捷の凱歌を揭げて泰平を謳歌した頃だつた。神戸に光村利藻と云ふ御大盡があつて、寫眞は大の道樂で當時の美妓八千代、政彌、お染などは此光村氏の寫眞道樂のモデルとなつて夥しく社會に宣傳された。何しろ金錢を湯水のやうに道樂方面に蕩盡したので茲から製作された美術の寫眞帖も又贅澤なものであつた。彼の『鏨の花』や『若冲畫譜』(これは今巷間あまり見受けぬやうになつたが)などの殘本から數へ切れぬ種々の寫眞帖は皆荒木書店が一手に引受けて市場へ出た。

光村氏個人の藏書も又夥多しくあつた、其頃の二萬圓だから今にして見れば確かに十萬圓は下るまい。それ等の藏書は盡く荒木サンの手に落着いてゐるのである。

次には大谷光瑞師の二樂莊の藏書も可なり大したものであつた宮竹外骨氏の軟文學物も今の金目に直すと驚くほどに景氣の宜いものだらう、それに雅俗文庫即ち外骨氏の發行に關るものなら、何品でも荒木サンの御聲が掛らないと外骨氏は一般の商人には賣り出さなかつた。從つて『荒木から聞いて參りました、滑稽新聞の殘本があるそうですが御拂を願ひます』と云つた風にして行くと直ぐ出して吳れる。さうでなく一現で踏込でも鼻から相手にせない。此度每に荒木サンの懷ろへは幾許かの通行稅が這入る譯で、宮外氏との關係は隨分長い間であつたと思はれる

以上の如く荒木サンは非常な幸運な人で爲す事皆成功を收めないものはなかつた。其間他の知らない勤儉力行な又非常な打算的な緻密な頭の持主であつたからよく今日の大を成し遂げられたのであつた。劃期的には光村、二樂莊、雅俗文庫と云つたものが莫大な福音を齎らし、永續的のものには醫大、高工、高商、關大の系統に依つて不斷の信用が確保されてゐる。偉大なる哉荒木書店である。面白い逸話方面も可なり澤山の材料を持合してゐるが冗文繙讀に堪へないものがあるから、只成功譚の一端のみで擱筆する。（十五年七月十日記）

長谷川翁の事ども

——東京の月報から——

左の一文は去る五月發行東京古書組合月報に東京の鈴木勘三氏が寄せられた長谷川氏の追憶で移して以て故人の靈を慰めたいと思ふ、

私が初めて長谷川翁に御目にかゝりしは明治四十四年の秋、主家松山堂の勤めを辭し名古屋、京阪各地の商業狀態を知らん爲御伺したる時に初めての者に對して宛かも舊知に對する樣に溫情を以て萬事の御世話を受けたる好印象は一生を通じて忘るゝ事は出來ませぬ、氏の溫厚な笑ひ顏—淡路町の角の奧行の淺い細長いお店—若か刷の成形圖說を買つたのが初取引の事—晝飯を御馳走になつた事—娘さんが琵琶を彈いて居られた事—東京にて娘さんが琵琶を習ふ事なぞ無き故珍らしく感じた事—店に廿歲前後の色白の痩形の人が居て大阪辯が非常に流暢なりし事（今福島方面に店を出して居らるゝならん一石川留吉氏二階に開催の市會に案內して下された事など思ひ出は夫れかそれへと走馬燈の樣に轉回して中々盡きませぬ、東京にも一二回御出での時市にて御目にかゝつた限り此七八年は御目にかゝる機會も無く打ち過ぎて來ましたが、大阪を憶ひ出す每に氏の健在を心から祈つて居りました、和歌山に隱栖された事も知りませんでした位で其隱栖が如何なる事情であつたかは勿論知りませんでしたが、氏は萬事を達觀して居られたので今回逝去の際も心殘りなく瞑目せられた事と御察し申します

私は氏に二三回面接しました許りにて是以上の事を申上げる事を差し控へます、只氏が我々地方同業者に盡された義俠的な溫情を學んで氏の萬分一の心を以て今後に處したいと思ひます。

絶對公平を要する市場の振手

革正義 寄投

誰かゞかつて市場は古本學校であると云はれた、尤もな事と同感にたへぬ。一教室として買手は生徒であり振手は先生である、買手振手は師弟の關係である、故にお互に温情を持ち教へ學ぶべきである。

先づ買手の缺点は之れが生徒なるが故に免ずるとして振手先生の露骨なる缺点は大いに反省改革の要ありと思ふ。

入札市はさて措き、市内のセリ市中には最も公平に行なはれて居る市もあるが、たゞ一二の市會の振手と來たら殆どお話にならぬ程、不公平極まる行爲を敢て恥ずる處もなく行つてゐる、是れは僕だけの言ではなからう、曾ても短文ながら本紙上に發表された事と記憶する。それと今私の指摘する振手とは期せずして同一人のやうに考へる。

姓名を明らかに書き立てる事は第二段にするが、今筆誅せんとする某振手は隨分露骨な利已主義者として衆知の人物で、自分の勝手のよい本は公然と安く振取はする、買手にはつまらぬ物を買かぶらせ、出方にも其人により亂賣し或はシボリ倒し等數へ來れば枚擧に遑ない程非難して見たくなる。其振るタイプや買カブらせに於ては大阪第一人者として足る、私は此市で買つた品物にツイしか一度もウマ味を吸つた事がない、何時も賣るのに困難する次第である買手として一日の暇をつぶし之れ程不愉快な馬鹿らしい事はあり得ない

振手たるものが多くを買はんと欲する時は、自分が振臺に起つて振取りをしなくとも他の振手に起たしめて正々堂々と市價を以て買進めば他から苦情の出る筈はない。

今は特別寛大な處置を以て對者を匿名として置くが、再三批難して尚ほ革正するに非らざれば我等は强て斯の如き師を求むるを欲せない、よろしく同盟体校即ち不參同盟を作り或は不拂同盟をも團結申合はす者である。

此要求を容れ、振手先生の反省改心を得、公平を保つ事が出來れば同業として之れ程幸福な事はないであらう。私は敢て脅迫がましい行爲は執らないが場合に依れば多數同業者幸福の爲に恥を忘れても陣頭に進み第一不拂同盟團を組織する者である其時は宜しくそれが筆者たる事を知るべしである。何卒振手先生よ即刻此非を改め温情的生徒薫育に心懸け共存共榮の實を擧げられん事を祈る

年表類の解題(三)

永樂町人

○俳諧年表●●●● 一冊

牧野望東、星野麥人共著、角田竹冷閲、明治三十四年十月博文館發行、定價七十錢、菊版和裝本、二五〇頁

本書は延德元年(紀元二一四九年)足利の末期から明治三十四年に至る迄四百十三年間世に知られたる俳人及び之に關する著名な事蹟等は大方網羅してある、宗鑑の犬筑波集以下刊行年代の詳かなる俳書も略ぼ此書

に掲げてあり、別に歿年索引を附して俳號に據り各其歿年を知るに便利である。其内容の親切な事は三百種に餘る引用書目を列記してある事に於ても推知せらる。

○新選俳諧年表　一冊

平林鳳二、大西林外共著、大正十二年十二月
大阪書壽珍本雜誌社發行、定價四圓五十錢
四六版洋本五九六頁

牧野氏等が始めて俳諧年表を發表したるは前掲の如く明治三十四年、本書はそれより遲るゝ事二十二三年序文には引用參考に資せる書籍數千部に及び一々其書目を掲ぐる煩に堪えずとしてあるが体裁から總て前書を骨子として其足らざるを補ふた書と見て好い。前書が明治三十四年迄を二百五十頁に收めたるに對し本書は三百十六頁を費してゐるのは其後發見せられた諸項を増補した故で殆ど完成に近いものには相違なからう尚卷末に附せられた二百五十頁に餘る俳家人名錄は簡單な人名辭書の感があつて至便此上ないものである。以上二書は共に此方面に志す人の爲に好伴侶たるを失はない良書である

○日本博物學年表　一冊

理學博士白井光太郎氏著、明治二十四年二月
東京混古堂藏版、定價七十錢、菊判活版和本
八十六頁

著者は彼の植物妖異考などを著はした人。本書は我邦博物學に關する先輩の履歷生歿言行の概略及び著書成稿の年月等を蒐錄し以て我邦博物學の起源沿革師授傳統の一般を知らしめんが爲めに作るとある。然して本邦博物學を大別して、第一期本草學時代（上古より德川氏に至る）第二期博物學時代（德川氏より明治の初めに至る）第三期生物及地學時代（明治の初めより今日に至る）三期となし、其中明治以前即ち德川末期迄の事歷を詳細年表としてある。尚卷頭凡例に曰く「農林の學は物産學に密接の關係あるを以て農學家の生歿及農書成稿の年月等も併せ記載せり、考古學も亦博物學の一科たるを以て間々其事跡をも掲ぐ」と、卷末別に博物書目、農學書目等を附錄して初學者の便に供してある。明治以後に及んで居ない事が遺憾に堪へないが我邦の博物學發達沿革の依つて來る所以は充分に窺ふ事が出來る。

入札十句

古書交換同好會はさすがに風流人の寄合だけあつて其入札の袋に左の樣な句章が一々印刷されてあつた、面白いと思つたので一寸借用失敬する次第である、

好感で交換をする古書の會

稀書珍籍一堂ニ堆ク。
同好ノ持寄リ借モ盛ナル哉。
堪タリ喜ニ日頃搜索ノ物
安値ニ落シ來テ密ニ撫ツ腮ヲ。

念佛で古書を大事と札を入れ
十分に入れてほしいと賣手いひ
入れてから廻すはさても上手なり
あけて見て入れずにおけず氣を逸り
入れてから安かつたかと氣にしだし
よいのにはさすが入れ手が多いなり
惜しい事僅かな事でしてやられ

古書ノ交換尤モ堪ヘタリ歡。
同好催シ來テ札入レ圓カナリ。
可シ驚ク昔ハ銅錢ヲ買ヘシ物
今ハ何十両ノ商內繁シ。

市内市場巡り

(二) 書榮會

蘆の浦人

其創設は何時頃から出來たのものか知らないが現在大阪に存續してゐるセリ市の中で書榮會は最古のものである。毎月四の日三回と九の日三回都合六回宛開催されて回數の上から云つても又最大のものである。會場は南區日東町元四方耕太郎氏の宅で行はれてゐる、會員は御大四方耕太郎氏を中心に山野、淺野、谷末吉黒部の諸氏に近頃小林の市サンの顔もチョイ／＼見へて盛んに南部の業界に雄飛を試みてゐる。

素人が初めて本屋にならんとする場合には先づ市會なる學校に來つて商品たる本に對する概括的な智識を吸收し、同業間の着き合や商習慣の呼吸などを會得するのである。入札の交換會は少し自信が出來て來てからでないと一寸札を入れるのにも躊躇するが、セリ市は人の附けた値のあとから五錢キザミ或は十錢幅で追ふて行けば大した買カブリもない譯であるから初心者には入門の捷徑とされてゐる、

斯ふ云ふ意味で入札市（今は甲種市と云ふてゐる）が中學程度であればセリ市（乙種）は尋常程度であらねばならぬ　そして今は堂々たる店舗を構へ一廉の本屋で御座ると納まり歸つてゐる御連中も一度は大抵此尋常科の門を潜つた者である。世間には尋常科の先生達が老衰して退歩してゐる中に其敎へ子が中學から高等大學と遂には博士となつて昔敎へられた敎育方針を批難したり、又飜つては市村光惠博士のやうに自分の通過して來た各學校の先生や校長さんを招待して謝恩會を開いて見たり世は樣々である、それと同じやうに會ては其門を薄穢ない風呂敷を抱へて潜つた時代もあつたのに功成り名遂げて見れば弊履の如く捨てゝ顧みないのは人情の薄い事と慨嘆せざるを得ない。勿論成功した人の道程には一方ならず努力もした、人の知らない研究もやり、經驗と云ふ功も積んで出來上つた事であるからいついつまでも市會の功を多とせなくとも宜いやうなものだが。其第一歩を導かれた、何んとなしに周圍から刺戟されて大成に到達した事を考へる時。其母校たる市會が、今は縱し取引の交渉がなくとも、別に具体的謝恩を遣らなくとも心だけは母校を愛する事を忘れたくないのである。

セリ市會中の最も古き歷史を有する書榮會は第一期時代四方氏個人市から今第二期時代の會員組織に經營が變つてゐるが、系統に變化のない以上此門から巢立つて現在業界に覇を唱へてゐる者が隨分澤山あらうと思ふ。

此市會へ集る御常連にも其時代々々に新陳代謝があつて一概には云へないが。近頃では谷本店、栗本文化堂、越村大集閣と云つた風にどうしても地の理から日本橋界隈の本屋さんが多いやうに思はれる。それから丸田事田中、松浦〇〇堂の二氏も隨分古くからの常連で殆ど賣り一方の樣に見られる。毎會四十人から多い

時は五十人近くも來會者があつて場內はハチ切れそうになつてゐる。其過半は夜店へ行く人々で內店の人は三分の一位しか來てゐない。

入札市の發達せなかつた過去は隨分ウブな掘出もあつたらしいが、追々にさう云つた面白いものが減つて行く傾向がある。それでも時折には賣買双方を狂喜せしめるやうな珍品が出る事も間々ある。でなければ又年に二三回も特別市と云つて上物本位の市を開催して示威運動を試みる事もある。それから買手の方の色彩も大抵極まつてゐる、先づ和本類が出ると四方、山野、越村氏あたりが競爭をする、原書は大方栗本氏が引受ける、專門書になると谷氏兄弟が互に爭つて見たり栗本氏が割込んだりして、それ〱捌け口があるものである。

書きたい事は澤山あるが餘り長くなるので此邊で擱く。どうか多くの卒業生を出した書榮會が缺陷を改善して新時代に順應した經營振りに依り、生徒諸君の期待に添ふべく益々發展せられん事を祈る(大正十五・十二夜稿)

司法室の一時間

乙　宗　生

いつか古書月報の店頭買入一文中七年間未だ警察署の門を潜つた事がないと書いた、私が五月廿七日に突然某署員の來訪に接して翌日午前九時迄に出頭を命ぜられた。

セマ苦しい階段を地下室に下りて行くと留置室と隣り合ふて司法室がある、澤山な下駄が亂雜に脫ざ捨てある室內には早や二三の知人が謹嚴な態度で座つている。私の顏を見るなり『どうしたんや……』『一寸被害でね……品物を返してやると云ふとだから貰ひに、君は……』座の左手にある嵩高い風呂敷包みを無言に示して微笑した、私も只何とはなしに笑つた。

天井の低い薄汚れした室は妙な間取りである、窓から這入る朝の光線に小さな埃がキラ〱と空に舞ふている、稍や大きな鐵の火鉢はいつ掃除したのやら、中は煙草のすいがらがすき間もなく立つていた。洋服の上着を脫いだ巡査や和服姿に眼鏡をかけた署員がせまひ入口を出たり這入つたり朝の事務に忙しい。時折ケタヽマしい電話のベルが鳴る。

留置室から帶解のまヽな犯人を引出して來て巳が机の前に引据へて怒つたり、すかしたり何か聲高に罵つている刑事もある。今しがた柔道の稽古を濟ましてきた一人が隆々たる腕を廻しながら戾つてくる。

贓品だらうか古着の山を築いた前に此四邊の雜音も知らぬ顏にせつせと筆を走らしている人や、くど〱と一人の男をつかまへて何か言詰めているやヽ老年の刑事も見受けた、凡てが私等の日常生活とかけ隔てた目まぐるしい光景なので物珍らしげに只默つて見ていた　その時昨日來訪に接した署員がやつてきた、時計を見るともう間もなく十時だつた。

皆が差出す召喚狀を手に取つて一渡り眼を通してやがて明細帳の點撿が始まる。細大洩さず記入してから人にはさしての小言がないが附落や全然記入してないと手嚴しいお目玉

は傍で見る目も氣の毒であつた。規定の如く始末書の被害届と點撿受書を代書人に書いてもらつて私は被害の一部たる講談の五月號を落手した曾て警視廳の小泉前捜査課長が、自著の叙文に警察も亦救世軍と同じく社會事業の一であると云はれたが確かにその言葉の至言であると思つた代書料電車賃は知れた物であるが時間の空費は私等に取つて輕からぬ犠牲であるが此事業の爲めには致方なしと是認して私は事業員たる此署員に厚き禮をほどこして辭去した。

附記　私は曾て月報第六號に四聲會同人の名を以て明細帳記入の一文を寄せたが私の此拙文中に在るが如く明細帳の未だ充分に研究されてないのを遺憾とする、明細帳の原則は文中黒點を附した七字の以外に出でずと私は思つている。

願はくば賢明なる諸氏の一考を煩したい……私の明細帳が私自身が云ふ如くその原則を應用されてあると云へば世俗に曰く『易者身の上知らず』と答ふるより外はない。呵々。

モヨホシ

▲荒木伊兵衛氏葬儀　當組合副組長荒木伊兵衛氏の葬儀は別項の如く五月三十日阿部野新齋場で執行された會葬者五百名組合よりは會旗を掲げ役員全部參列して弔意を表した。

▲綠友會臨時市●●●●　六月五日書林倶樂部で一口物和本を主とした入札會が開かれた、午前は一般の下見として顧客から註文を聞き、午後は同業者ばかりの入札であつたが古作書が驚く高値を呈して盛會であつた、

▲錦水會處女市●●●●　仝十一日書林倶樂部で錦水會の處女市が開催された、同會は二三日の後に即賣會と云ふ大仕事を控へながら此奮闘振りである洋本大物揃ひの特別市で可なりの成績を收めたらしい。

▲錦水會即賣會●●●●　仝十三、十四の兩日書林倶樂部で第二回の卽賣會が催された、大方雨に祟られて前回ほどの盛况は見なかつたが、それでも世間の不振を餘所にこゝだけはホク〳〵ものであつた。

▲ビブリオクラブ原書會●●●●●　仝二十一日同所に於て第二回の原書交換會を催した。成績は聞き漏らしたが東京あたりからも特に來會者があつたらしい。

▲三宅氏の島原會●●●●●　當地好事家で名高い三宅吉之助氏が主催で三好柳屋氏の介添で六月廿一日正午から京の島原角屋樓上で島原會と云ふのが催された、案內狀から當日席上で配られた摺物まで皆凝つた物ばかり島原に由緣のある書什器は何んでも持寄るべしとあつたので種々な珍らしい物が角屋の座敷に展觀された、それに平常餘り足踏みの出來ない謹嚴な方々までが來會され頗る盛會を極め古典的な情調を味つた

▲市場協會協議會●●●●●　六月二十三日正午より日本橋倶樂部に於て別項記載の如く市場協會の協議會が催された。

▲杉本梁江堂の個人卽賣會●●●●●●●●　七月三四の兩日書林倶樂部で杉本書店の個人卽賣會があつた、時々襲來する梅雨の爲めに客足を鈍らしたが結局成績は悪い方ではなかつたらしい、これが當地に於ける個人卽賣會の嚆矢であろうか。

▲神戸の卽賣會●●●●●　仝七月三四兩日神戸でも其第三回卽賣會が催された、前回は大阪の出品を拒絕したが今回は又大阪を勸誘した。成績は判明しないが第一日の如きは阪邊から一番列車で乘込んでまだ在の開いてゐない會場を叩いたやうな御熱心家があつたと聞く。

大正十五年七月十五日第廿二號發行

發行兼編輯人　松本正治　發行所　大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東へ入　大阪古書籍商組合事務所

大正十五年九月一日發行

大阪古書組合月報

（第廿三號）

大阪古書籍商組合事務所發行

組合員異動

▲加入者

南區日本橋筋四丁目五三 星加彰氏
紹介者 越村春吉氏

此花區上福島北三丁目四九
福島書店 久保辰之助氏
紹介者 水野吉藏氏

西成區梅南通二丁目一二六 吉川庄次氏
紹介者 井上庫二氏

住吉區住吉町七八二ノ二
辨天堂 大塚寒氏
紹介者 鈴木貞一氏

▲移轉

天王寺區上塩町一六 蓮井米吉氏
同 南區空堀町一六 原田實太郎氏
西區阿波座二番町一五 小島庸助氏
小ますや 増田和三郎氏

▲町名變更

天王寺區東平野町三丁目三〇（に變更） 平井一之氏

▲襲名

西區江戸堀南通三丁目荒木幸太郎氏は五代目荒木伊兵衛氏を襲名

▲廢業

港區石田町二丁目一四 中川みち子氏
港區市岡町六七七 太田スヱ氏
西淀川區浦江町五六八 粂 吉藏氏

▲脱退

西成區天下茶屋西皿池 田中ま[illegible]氏
東成區中道町一四七 加藤萬[illegible]郎氏

▲死亡

組合員佐藤光次郎氏令息三郎氏死亡に付組合よりは會旗を掲げ弔意を表した

モヨホシ

▲**仲古谷の俳書市** 七月十六日堀江書林倶樂部に東都某氏所藏の俳書一口の賣立會が仲古谷尙古堂の手で開かれた、俳書熱の昂い折柄之は又珍品揃ひとあつたから驚くべき盛會であつた。

▲**ビブリオクラブ**の第三回原書交換會は七月廿八日書林倶樂部で催された、暑中の事とて前回に比し聊か不況らしかつた。

▲**打越氏藏書賣立** 當地愛書家打越氏藏書一切を鹿田松雲堂の手で同じく倶樂部で八月一日二日の兩日に亘り賣立てられた、一日に賣切れなかつたと云ふ位だから最も多く値も非常に高く盛會であつた。

▲**杉本氏の奇書展** 近頃和本界に非常な勢ひを以て勇躍な試みてゐる杉本梁江堂氏は自己の愛藏に係る和本中奇書百點を限り八月三日高津神社參集所に於て奇書百選會と名づけ一般好書家に展覽せしめた。暑中にも不拘來會者多數盛會を見た。因に當日發行された百選奇書の解題附目錄は振つたものであつた。

▲**書史會の虫干會**は八月十五日堀江書林倶樂部で開かれた、會員各自が各一題宛の題下に藏書又書籍に關する諸種の蒐集品を展覽した目錄も各自別個の様々なものが出來て面白かつた。

本屋事物起原私考

鹿田文一郎

1 書林の興業

江戸時代の初期書籍の出版、販賣を以て商業とするものは慶長頃迄にはまだなかつたが元和寛永頃になつて京都で中野市右衛門道伴と云ふ人が始めて書林を營んだ、中村富平の「辨疑書目」に

京都書林の與行は中野道伴と云ふ人なり此道伴は初め文之の儒門に事へし人なり云々

とある、寺町四條邊に店があつて多くの書物を出版してゐた、その主なるものを擧げると

四教儀集註（木活本）	元和三年
南浦文集（同）	寛永二年
禪儀外文集（同）	同
圜悟心要（同）	同
周易傳義	同 四年
性理字義	同 九年
日蓮註畫讃	同
釋氏要覽	同 十年

等仲々大部のもの迄梓行してゐる、寛文頃迄店は續いてゐた、初代道伴は寛永十六年四月六日に歿した、法名即中道伴居士、了蓮寺（今の百萬遍内）に葬る

またある人は慶長十四年刊の「古文眞寶」に「京都室町通近衛町本屋新七」とあるを發見されて慶長五六年頃すでに本屋があつたと假定されてゐるが未だ確証を得ない。

幽明之義未必…說專用力於人道之所宜而不惑於鬼神之不可知此謂亦人極爲親切未能事人焉能事鬼須是盡事人之道則事鬼之道斷無二致所以發子路者深矣

寛永九年壬申三月吉日
中野市右衛門刊行

性理字義卷下

2 豫約出版の最初

塙氏の群書類從は江戸時代の最大の出版物であつて、安永八年（三十四才）本書の編纂を思ひ立ち文政二年（七十四才）迄實に四十一年間の歲月をかけて初めて上木されてゐるそして類從刊行の當時左の文句を廣告した、豫約出版の濫觴である。

群書類從四百八十卷 八百餘種

神祇之部廿八卷、帝王之部十三卷、補任之部十卷、傳之部三卷、官職之部五卷、律令之部七卷、公事之部十七卷、有職之部卅二卷、裝束之部七卷、文筆之部十七卷、和歌之部百四十五卷、物語之部五卷、日記之部七卷、紀行之部十三卷、抄物之部卅二卷、管絃之部十卷、蹴鞠之部二卷、鷹之部五卷、遊戲之部七卷、合戰之部卅五卷、武家之部十五卷、釋敎之部二十三卷、雜之部卅六卷

右之書次第に拘らず望の者多く有之候卷去々月より一二冊づゝ開版

仕候、何れの部にても御好に任せ候間御懇望の方は當六月廿五日より十月六日迄に土手四番町塙撿校宅へ可被仰遣候、猥に開版不然ものも御座候に付摺たて二百部を限り候間其後は御斷申候、料は今物語の通りの紙仕立にて紙十枚六分二リン仕立四分五リンに御座候

3　即賣會の起

今でこそ毎月のやうに古書即賣會が當地や東京で開催されてさして珍らしくもないが、明治十四年に既に古書の即賣會を大阪で催したと云ふことは興味のあることである。催主は赤志忠雅堂と鹿田松雲堂であつた恐らく此種即賣會の嚆矢であらうかその時の廣告ビラを次に掲げやう、一枚摺の木版で茶色に摺つてある

過光眷候蓄積の書籍を求め遍く諸先生の一覽を請ひて大に恩顧を蒙る事を謝し奉る、今やある家に牛に汗するほども擁せられし史冊を購ひ再び德星の照臨を辱くしたまひて覽に供す、皇漢新舊の書籍西洋翻譯書はもとより古法帖等も増加し精々其價を低し正札に出して附す仰冀くは四方の君子有用御望の書を多に求めたまはん事を欽白

明治己年立春　書肆　忠雅堂　松雲堂

右は來る二月五日より左の所にて展觀仕候

大阪安土町心齋橋東入北側四番地　書籍集會所

年表類の解題（四）

永樂町人

○●●●●●國史研究年表　一冊

文學博士黒板勝美氏著、大正七年八月東京文會堂發行、定價九十五錢、菊判洋裝本、百二十八頁、

此書は著者が『國史の研究』總說各說の二冊の讀者の參考として國史上の重要なる記事を編年史的に年表に編んだもので、單に國史研究者に對しても好伴侶たる事は勿論である。故に國史の研究二冊の附錄に當るものである。

○浮世繪年表●●●●●　一冊

漆山又四郎氏著、大正九年二月吉川弘文館發行、非賣品、四六版和裝活版本百六十頁

藝苑叢書中の一冊で、浮世繪師の祖岩佐又兵衞十九歳に當る慶長元年より慶應三年に至る二百七十年間浮世繪に關する史實を網羅してある。

元々此書は著者の備忘錄に過ぎなかつたものを強ひて出版したから不備な個所が非常に多いだらうと著者は謙遜してゐるが、此著ある以前に寫本として傳はる飯島虚心氏の同名『浮世繪年表』は記載事項餘りに漠として、到底研究の資料に堪へないものがあるさうで、夫れに比すれば漆山氏の此年表は殆ど完璧に近いものであるらしい。又著者の見聞した浮世繪關係者の筆になる多くの繪本類を登載してあるから他面また繪本年表の感があるされど之れは其全部を網羅したとは云へないと著者は斷つてゐる。さる故にか本書諸所になるべく餘白を殘して多少の書入に備へてあるのは親切な遣り方であると思ふ。

本屋考古學（上）

永樂町人

八月十五日堀江書林倶樂部で開かれた書史會同人の蟲干會は一般愛書家の爲めにも我々業者に取つても結構な催してあつた。斷て置くが敢て同催の提灯を持つ譯ではないが、其展覽會を通じて見た本屋考古學の二三を紹介して見たいのである。

▲昔の貸本屋の引札

靭文庫主人三宅サンの出品中に『楠里亭寶故帖』と云ふ古い張交帳があつた、時代は文化文政から天保頃の年玉歳暮などに配られた種々の引札類の集りである。其中に江戸は本石町玉屋由兵衛と云ふ貸本屋の宣傳ビラが面白いと思はれるので轉載して見る。

伏稟

昔藏書の印を押して人に益ありし金澤文庫足利學校赤いとか黒いとか差別はつけても見料とらず識博にして欲さのお世話今は文華も益々ひらけ子供衆までも文學に委しく和漢歴代軍談記錄舊事記日本紀古事記傳博學世間一統志見料とつて貸本で世わたりとなる有難き太平記の御代に溶せし僕は前太平記東鑑の産にあらねど眞田三代北條五代六代勝事記正路に家業を守り出世を願ふ太閤記榮花物語の奢りは省き見料も格別源氏物語となし明間をかゝせぬ續世繼彌世繼と次本を勢出し名代の人を差出し其身は居ながら歌人にあらねど名所圖會の類も集め隨筆の隨意にまかして備書は勿論神佛雑書繪入讀本冊子まで澤山仕入玉由の藏書の花押を御目印御得意方の御ひいきを願ひたくそこでも三河後風土記爰へは口入慶安太平記き傳へ由井にはあらで小說ものは通俗本の十二朝漢楚軍談水滸傳眞片假名と平假字と兩漢紀事やら兩國志御注文を受け貸本手廣く人眞似猿の西遊記黄金の花の金翹傳演義もよしや三國志富士より高く御取立を仰ぎ願ふ商賣繁昌雲顧君子の御餘光に磨きあげ度き評判の玉屋と申せばしやぼんに似たれど寫本を基手の貸本屋が得意廻りも口上も代りで濟す主の需めに一筆庵醉中に誌るす

新古の書物軍書の類ひ寫本板本何によらず賣買も仕候

本石町三丁目

倭漢貸本所　玉屋山兵衛

當時は貸本屋と云ふものが可なり手擴く且つ非常に勢力があつた事が察せられ、盛に流行つた書物の種類も窺はれる。それらの書名を網羅してうまく言ひ廻してある口上は何うせ名ある戯作者の筆になつたのであらうが、斯う云ふ引札を配つた百年前の本屋から較べると現代の業界は左迄進歩の域に達したとは云はれない。

▲古き書籍展目錄

書籍を持寄つて展覽會を開いたと云ふ抑もの初めはいつ頃であつたかいま遽かに知る由もないが、同蟲干會に鹿田文一郎氏が出品せられた左の記錄一册は書籍展覽會目錄の最も古きものとして誇るに足るものであるから、其表紙と內容の一端を移して考古慾を滿たす事とする。

維明治十五年十一月三日以天長佳節席開
於安土坊集會所使同志人士縱覽之

展觀出品錄

附影鈔宋槧尙書正義序寫

書籍商仲間

即ち明治十五年天長節に其頃の大阪の書籍商仲間が安土町の集會所に展覽會を開いて同好の士に縱覽さしたとある。我々に取つてはいとも嬉しい記錄と云はねばならぬ。當時はまだ出品錄を印刷に附する程進んで居なかつたが故に、此目錄も筆寫したものであるが、其代り後にも先にも一册しか拵へてないので此一册こそは實に該展覽會の總てを物語る貴い文獻である。

是等出陳の典籍の中には今日萬金を積めども尙ほ價ひ難いものが多々あるであらうと考へられるのである今其數行を借用すると。

展觀出品錄 維明治十五年十一月三日 天長佳節催之

品目	備考	員數	出品者
一本屋仲間規則	（文化年間）	一册	松雲堂
一本屋仲間記錄	（享保元文寬保）		書籍仲間
一中古唐本市水場帳	文化年間新渡		文榮堂
一本屋往來		一册	松雲堂
一文化年間版木市水揚帳		四册	文榮堂
一殿村茂濟藏書市水揚帳			文榮堂
一御文庫帳面	御文庫中出品	二册	
一中古唐本價錄		三卷	墨香居
一篠崎家藏書市目錄			同上
一足利藏書目		一册	同上
一和漢書籍考		一册	同上
一八文字屋本品目		一册	松雲堂
一白石先生著述書目		一册	同上
一課業私式		一册	同上

是れを察するに本屋仲間の記錄も可なり古くから傳はり、また唐本市版木市の水揚帳及び何々氏藏書市水揚帳と云つたものから見る時は今日以上に各種の市會が殷盛であつたかも知れぬと思ふのである 煩を避ける爲めに以上品目のみに止めたが全卷を一々仔細に研究する時は實に趣味津々たり參考に資する事は隨所に横溢してゐるやうに思はれる。

最後に此目錄に附載された宋槧尙書正義の序と云ふものは、天下奇書中の珍ともすべきものゝ覆刻本のまた寫しである。目錄最終の扉に

尙書正義宋槧本足利學校藏本タリ肥後細川公覆刻シテ世公ニストヒ雖モ製本稀ナリ生前後二部取扱仍テ其序ヲ謄寫セシメ後世本書見サル人ニ知ラシメントス

松雲堂主人

と記してある。淺學なる我等其眞價を斷ずる事は出來ないが、兎にも角にも只だ宋本と聞いただけでも何んとなく有難い心持がするのである

市内市場巡り

（三）同友會　さくらん坊

『市場巡り』の稿は市場を巡るばかりでなく筆者も巡りめぐつて來て僕には高砂倶樂部の同友會をみてこいと云ふ編輯局の嚴命である。即ち命旨しがたく、所用あり九州にゐたが八日は「一口物あり」といふ案内狀に誘はれて鐵路はろけく歸阪するなり旅裝をそのまゝに堀江の會場へかけつけたものであるが、舊日本橋倶樂部を思ひ出す三階への高い階段をみては、昨夜一睡もしなかつた三等車の疲れがにはかに覺へてくるのである、が山は登つて見よである。

會つて月報誌上に於て鈴木南北氏が德川時代の延長だと痛快な筆致で喝破した大阪市場特有の場内の狹隘さは夢にもなく、そこには山上の如きひろびろさと文化的な窓の光が颯爽たる氣分を迸つてゐるではないかもう商賣なんか放つて置いて**ビール**の泡をなめて晝寢でもしたい樣なこゝろ良さである。

これは僕の第一印象であると共に高砂倶樂部の大きな第一特長であろう。そして第二の特長は會員の多いことである。

昔と云つても五六年前は金中の市土屋の市といふ風に呼びもし、その制度も個人的であつたが、次第に遷滅して今では會員制度の市會が全盛である。現代の共同生活がいつのまにやらかく市會の上に現はれて急激に進歩した大阪市場史の原因を物語つてゐる樣である。同友會は如上の意味に於いて……と一つ論じもしたいがこの暑いのにそれは野暮だ。會場は**グランド**の樣に廣い。野球を見に行つた野次の樣に下馬評を試みて責をふせいで置こう。

さて同友會**チーム**の第一投手としては村瀬、四方の二君を有してゐるひとたび壇上に立ちては何やらの小唄のたとへで村瀬君は實に朗々としたいゝ聲の持主である。振手の第一條件たる本の價値も熟知せられてゐるし、時には男らしき果斷を以つて一軍を統帥してゐる處、正に御大の貫目がある。村瀬君が强球本位の投手とすれば四方君は**カーブ**の人である。時に**スローボール**を出して敵を苦笑さす時もあるが、落着いて**ピンチ**を切りぬけてゆく老巧な態度は**プレツシヨナルチーム**の投手の面影を憶ふ。二君の外に補欠として倉地、加集の二大投手があるそうである。不幸にして僕にはその雄姿に接し得なかつたが、加集君は山本の市時代の昔雄飛した人で頭の惡い僕にもあの時分のあざやかさをはつきりと覺へてゐる。以上の如き堂々たる投手團をひかへてこれは又堅實そのものゝ井口氏の帳合は市中その比を見ない名補手でこの好**バツテリー**は羨しさ限りなきものである。

バツクメン林氏初め諸兄の人々も潑剌たる元氣のもとに活躍してゐられる。ます／＼多幸ならんことを祈る次第である。「市場巡り」は買ひ手の方の印象も書いてその**ローカルカラー**を出すのが本位だそうであるが、何分感受性がのろいので初めて

見たゞけでは筆意が及ばない。こゝでもやはり谷本店、末廣、大集閣と云つた日本橋系と、丸中、荒木、松村の若い夜店の三羽烏の跳梁とが目に映つたのみ、甚だ漠然としたもので申譯ないがあしからず御容赦を冀ふ。

東京の一同業者より

S・S生

去る五月十一日長谷川翁の追悼會を催され總代として記名せられた荒木氏が長谷川翁墳墓の土未だ乾かざる同じ月廿八日翁の後を追ふて御逝去になり幽明處を異にせられた事は、世は無常迅速の習とは申せ眞に哀惜の念に耐にませぬ錦地同業界不案内の私共から見ますと、西の方に光芒を放つて居た二明星が、突然空から消に失せて闇黒になつた樣に感じます。さあれ側聞する處に依りますと近時の御地は二耆宿亡き後も嶄然頭角を擢んずる方々あり、又新進氣鋭の方々が轡を並べて居られ眞に多士濟々たるものありとの事で御座いますから益々我業界の爲めに盡され以て後進を誘掖せらるゝ事と存じます小生も何事かの機會に一度御地に御伺ひ致し皆樣の御活動振りを拜見致し且つ御高見を拜聽致したいと存じます。

これは話は違ひますが我々同業者として是正す可き事ではないかと存じますから一言申上げ置き度いと思ひます。

去る五月の或日の市會に突然御地のT氏が御見えになりました、私は未だ一面の識もありませぬけれども近頃仕出された方とは云へ中々熱心に御盛大に營業して居らるゝ事は、蔭乍ら承知致して居り同業者も御地へ伺つた人は大概御世話になる樣に聞いて居りました。

市の開會中ではありますが同業者と對話されて居るのを伺ひますと、夜行にて御出でになり朝十時半かに着かれたとの事にて仕入以外の商用との御話にて多少疲れて居らるゝ御樣子に見受けました。我々も隨分旅行しましたが、如何に熟睡するも汽車の夜行の疲るゝ事を体驗してよく承知して居る處であり、一日の商用を濟ませて宿に着き一杯の酒に陶然と醉ふ事が、先づ一大悦樂で御座います。

市は七時頃果てました。大阪に伺つた時御世話になり且又御歡待に報ゆ可く同業の誰れ彼れが申合はせまして、或る料理店に自動車を飛ばせて、御案内致したそうで御座います誠に結構にて又御禮に答ふ可く當然な事と思はれます。然し是れも程度を過しては却つて虚禮になりますまいか、其夜は深夜の午前三時に漸く宿へ歸られて寢られたとの事です。

其翌日も矢張市會が御座いましたが、御出でにはなりませんでした。後にて聞けば其の日も某々氏の招待を受け一日の歡迎宴にて少しも商用を達せられず、其日の夜行とか其翌日とかに要事もそこ〳〵になされ御歸阪になつたとの事で御座います。

私は斯かる義理の爲めに成す長時間の浪費然して此の歡迎を受くる人の眞に感謝して受けて居らるゝかを疑ふもので御座います。行く度毎に亦來らるゝ度毎の歡待の爲めに、折角の商用も充分に出來得ざる事は、誰人も望む處ではあるまいと思ひます。

人は知らず私は山海の珍味佳肴よりも寧ろ中食に有り合せの蔬菜を撰された故長谷川翁の心からの御接待を有難きものと今更乍ら感じます

廣告

酒呑友達又は同氣相求むる標郎の輩は別として、一般商取引を爲す同業同志の交際は極めて簡易に極めて自由に御互に遠慮し合はぬ程度に心からの接待が宜しかろうと思ふもので御座います。

謹啓 殘暑酷敷候折柄尊堂益々御清穆に被爲渉欣慶至極に奉存候陳者過般父死去致候爲め不肖相續仕り更に今般先代名伊兵衛を襲名致しその遺業を承繼仕候不敏素よりその器にあらず候得共希くば先代同樣渝らざる御同情を仰ぎ何卒倍舊の御厚誼御引立を賜らむことを切に悃願申上候

先は襲名の御挨拶旁々得貴意度如此に御座候　敬具

大正十五年八月二十五日

襲名

荒木書店主

五代目 荒木伊兵衛

大阪市西區江戸堀南通り三丁目二番地

阪急沿線箕面百樂莊

荒木幸太郎

電話土一四六三番

追而九月一日より阪急沿線石橋に支店を新設致候に付本店同樣御引立御利用の程御願申上候

大正十五年九月一日第廿三號發行

發行兼編輯人 松本正治　發行所 大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東へ入 大阪古書籍商組合事務所

大正十五年十月十五日發行　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第廿四號）

組合員移動

△加入者

東成區本野一二二ノ二町
松本長次郎氏
紹介者　四方耕太郎氏

天王寺區谷町九丁目七
影山寅造氏
紹介者　井上庫二氏

西成區花園町三七七
靜觀書房　原田政一氏
紹介者　玉村多喜治氏

西淀川區姫島中通三丁目一二三
河田久志氏
紹介者　藤堂卓氏

△家族死亡

組合員泉尾町佐々木傳一氏息女トクヱ樣死去致され九月二十四日小林葬儀所に葬送、組合よりは會旗を揭げて弔意を表したり

△定例役員會

||九月六日及十月五日||

九月六日久方振の役員會を日本橋倶樂部に開く、曩に委員附托となりたる古書倶樂部案に對し協議する所ありたり、（以上月報原稿締切後に付遲報）又十月五日同倶樂部に於て前回同樣倶樂部案に付一層の審議をなす所あり漸く具体化せんとす。

△市場協會協議會

九月二十三日夕刻より八幡男山々上某亭に於て久方振の市場協會協議會を開きたり、出席者左の如し

小石川、村瀨、國枝、四方、佐藤、谷、森谷、松本

モヨホシ

△緑友會臨時市

九月十八日書林倶樂部にて緑友會の臨時市あり神戸和露文庫の供書一口に他の持寄品等にて相當に出來たり

△三宅氏藏書一部賣立

愛書家三宅吉太郎氏は藏書の一部をだるまや、柳屋、緑友會、古典會の手を經て九月二十二日同倶樂部にて賣立てしめたり、出來高相當にて非常の人氣なり。

△高尾書店の即賣會

同書店主催の即賣會は九月廿六七の兩日同上倶樂部にて開催、同書店七に對する他書店寄々三分位の出品にて今秋最初の即賣會として未曾有の成績を擧げたり。

△錦水會と和歌山の即賣會

錦水會主催の即賣會は來る十月廿三四の兩日堀江書林倶樂部にて又和歌山市同業者も同市丸之内多賀館に於て十月十七八の兩日處女即賣會を催す由。

緊急を要する

古書倶樂部設置に就て

一組合員投稿

近來社會文化の進展は一般世人をして智慾の吸收に精進せしめて、最もその近道とする讀書界は目醒ましき進歩のあとを示して來たかのやうに窺はれる。

從つて我業界の前途は洋々たるものがあるとともに吾人の責務もまた重大なるを感せずにはゐられないのである。

幸ひにして我大阪の業界は彼の東都大震災を劃し、一躍全國的に雄飛して今日にては東西需給の中心地と目される程度に發達した、就ては最も統一し難くあつた大組合も極く短時日の間に結晶成立を見て、爾來三年間何等の支障もなく順調に且つ堅實に發展を遂げ、今や牢固として動かすべからざる基礎を築くに到つた是れ偏へに全組合員が眞摯なる態度を以て組合を愛する精神の篤きと、理解ある互讓協調に依つて保全し得らるゝものとして深く感謝するものである。

尙此上我々は業務の向上發展に勇往邁進すると共に、常に同業間の友情を益々温めんが爲めに古書倶樂部の設立を衷心より希望するものである。

今我等の理想とする倶樂部なるものはあながち各員の親和を計る交際機關たるのみならず、我々の業務を統率する組合の事務所を茲に置き或は各方面に對峙する現下の各種市會交換會をも是れに移して統一を圖るなれば複雜なる市會の距離問題や種々の紛糾事件は自ら氷解され商取引は愈々圓滑に助成發達を遂げるものと確信するのである。斯る意味に於て古書倶樂部の設立は刻下の急務と信じて已まないものである。

東京は古くより組合員の所有する獨立した倶樂部を設置してあつたが先年震災に依り全部烏有に歸して了つた。けれ共不撓寢食を忘れ之れが再興を企圖し、今日では既に舊態に復し各種の機關に利用され、相當の成績を擧げつゝあり、實に羨望に堪へざる次第である　又聞けば京都も先般組合總會に於て全會一致賛同の下に事務所設置案を可決し、既に是が資金を積立てつゝありと云ふ。折柄我組合に於ても敢て諸君の蹶起を促す所以である。

倶樂部事業經營たるや最も至難を感ずる問題も多々逢着するならん、また設立早々收支の到底相償はざるは勿論なれども、洋々たる業界の前途を控へ、益々繁劇ならんとする商取引の增進に考へ及ぶならば、多少の犧牲を拂ひ機宜に應じ善處したならば强ひて悲觀の要はないであらうと思ふのである。

試みに當地新本組合員が所有する

堀江書林倶樂部(株式會社組織)の歷史を見れば、當初非常に經營難を傳へられたるも、時代の進運は再三所有土地の債賣をなし、初め拂込みたる株金は幾倍となつて株主の手許に返還され、現在の資本金は殆ご利益金或は積立金に依つて振替拂込まれたるものばかりにて、最初よりの株主は殆ご腹を傷めたる出資をなさずに其權利を獲得するの福音に預つて居るのである。然かして最近其株價は頓に昂騰して、拾株券額面五百圓(一株拂込は五拾圓)のものは貳千圓乃至參千圓を投ずるも尙ほかつ賣手がないやうな有樣となつてゐる。畢竟是は該倶樂部事業の確實さを裏書する唯一の證據と云はなければならぬ。

此時に方り我が古書倶樂部設置案は決して尙早の論ではない、無論改めて設置の可否等を論評すべき場合では最早ないのである。何んとなれば此問題は我々が今更ら事新しく主張する迄もなく今春來有志間に寄々審議硏究されつゝあるこの報を仄聞してゐた結果、該問題が或は等閑に附せられゐるやにあらざるかと焦燥の餘り督促した迄の事で、若し此儀立ち消えるやうな事があつても、該問題はまたいづれの日にか必要に驅られ強調して已まない者が叢出するに相違ない、要は只だ時間の問題であつて、如何なる方法に依つて之が遂行を期するかを研究するの時である

希くは全組合員諸君、我古書組合繁榮の爲め、此事業に滿腔の賛意を表すると共に、事業進行委員に相當の聲援を與へて即行を期したいのである。各役員諸君は如上の意味を帶して一日も早く最善の具體案を公表して之が實行に着手せられん事を敢て祈るものである。

年表類の解題(五)

永樂町人

○長崎年表●●●●　三冊

金井俊行氏編、明治二十一年二月　以文會社發行、[illegible]本三冊、第一卷八十六頁第二卷九十一頁第三卷不明

本書は我國文明輸入の唯一の門戶たる長崎を中心とした史籍年表である。神武紀元二千二百三十年即ち元龜元年「南蠻船始メテ來リ貿易ヲ請フ」と云ふ記事より始まり慶應三年に到る約三百年の間、西國文化東漸の狀態或は切支丹宗傳播に關する記事等擧げ盡さざるなく近來漸く旺んならんとする紅毛關係硏究家などに執り缺くべからざる座右の寶典ならんが、惜むらくは流布本追々に減じ市價異常に騰貴せし爲め容易に入手し能はざる狀態となつた　著者は同地役所に勤務の傍ら舊記の臆說多きを嘆じ、正確なる年表編成を志し、役所に傳はる豐富なる記錄等を基準參考として稿を改める事五度、漸く成りしものなるが故に其內容の信憑すべきは勿論にして、之を通覽する時は長崎史又は文化輸入史の輪廓を容易く知悉し得べきの良書である、蓋し年表類中右翼に屬するものの一つならん。

本屋事物起原私考（二）

鹿田文一郎

(4) 古本屋の起原

德川の初期、寛永以後、書林の發達も著しく出版又は飜刻せらるゝ書籍の數も年々增して來た。此時古本屋の興起は昭代の反映であり、文化の隆盛を意味するものである。

延寶板の横本「京雀跡追」を見ると

古本うり　西ほり川三條より南
　一條ほり川より西

とある。そして此書の挿繪に本屋の店先が描いてあつて柱掛に「古本賣買」と明かに刻まれてゐる。店頭には四五冊の古本とも覺しきもの亂雜に置かれ、その中に一人の客が端坐してゐる。延寶頃（今より二百五十年余前）の古本屋の有樣が活寫されてゐる。さて更に延寶七年板の「難波雀」の奥付を見ると

京堀川　小島屋長右衛門
大坂しんさいばし筋
古本屋淸右衛門

とある。前記の「京雀跡追」で推察するに小島屋は場所柄古本　賣買もしてゐたのであらう。古本屋淸右衛門の屋號は柏原屋であるが古本を賣買する關係上古本屋と言ならはしてゐたものであらう。秋田屋市兵衛が古本屋市兵衛と云つたのと同樣である尚前記「難波雀」の五十八丁を見ると

本屋　高麗橋一丁目
同古本　眞齋はしすぢ

とある。即ち當時は古本屋が今の心齋橋すぢに集まつてゐた事が明かである。（序に云ふが心齋橋筋の古本屋は明治維新前後迄ずつと續いてゐた。勿論その頃は古本許りでなく新本も兼ねてゐる）

以上の記事で古本屋の起原は延寶前後で右に記した二三の本屋が古本屋の鼻祖と考へても差つかへなからう。尚江戸の古本屋はこれより後になつて發達して來たものと思はれる

(5) 書籍商（仲ヶ間）組合の始

享保七年十二月時の町奉行大岡越前守の名によつて出版物に關する二三の法令が出たのでそれに對する仲間組合がこゝに始めて生れた。

その法令の終りに

右之趣ヲ以テ自今新作ノ書物出候共遂ニ吟味ー可ㇾ致ニ商賣ー若右定ニ背候者有ㇾ之ハ奉行所エ可ニ訴出ー候經ニ數年ー相知候共板元問屋共急度可ニ申付ー候仲ヶ間致ニ吟味ー違犯無ㇾ之樣可ニ相心得ー候

とある。出版書に付仲ヶ間（今の書林組合）吟味致しとあるより其吟味役たる行事役なるものも生れて來た

日本交通史書目解題（五）

芳水生

大日本史　卷之三百三十一　德川家藏版

食貨十四　驛傳馬牛　津濟船舶水戸德川家編纂大日本史中の一卷で驛傳交通に關する沿革が書かれてある。

飜刻版に吉川弘文舘複刻本「大日本史食貨史九」一册（大正元年十一月發行）がある。尚吉川弘文舘發行のものは別に和裝のものがある。

國史問題正面觀側面觀

一冊　大森金五郎氏著

大正五年五月發行

歴史講座中の一冊に成つて居つて總支三編の內「國史上より觀たる旅館の發達」と題する一編に神代より德川時代に至る驛遞、旅宿の沿革が記述されてある。東京日本學術普及會發行。

萬國郵便聯合加盟二十五年祝典紀念志　一冊　遞信省通信局編

明治三十五年六月發行

本書は萬國郵便聯合加盟二十五年祝典にあたつて編纂されたもので、本邦內外郵便電信の沿革を記述し、祝典當日の內外來賓及び萬國郵便聯合諸國郵便政廳へ配布された。例言に曰く、「本志ハ我帝國ノ萬國郵便聯合加盟滿二十五年ノ記念祝典ヲ擧グルニ際シ加盟當時ノ顛末ヲ叙シ併セテ明治二十年ヨリ同三十五年三月ニ至ル通信事業ノ沿革及統計ノ梗概ヲ序セルモノナリ」とある。萬國郵便聯合加盟顛末、外國通信、內國通信、局所及經營等收入支出、臺灣の六項に分けて叙述してある。郵便沿革に關する彩色刷の諸種の統計圖表數枚挿入。非賣品、遞信省通信局發行。

通信事業五十年史　一冊　遞信省編

大正十年三月發行

通信事業五十年記念祝典に際し、關係方面に配布する目的で編纂發行されたもので、例言に「本書の刊行は通信事業發達の由來及其各種制度變遷の大要を、最も平易に紹介するの趣意に出づ」とある。內容を第一編序說、第二編郵便、第三編電信、第四編電話、第五編爲替貯金、第六編簡易保險の六編に分けて、創業から大正九年までの各其沿革を記述し通信事業に關係のある銅版、原色版、石版等印刷の口繪及び挿畫、統計圖を多く添へてあつて、我國郵便の沿革研究上重要なる書籍である。

附錄に編年表、遞信省所屬官署一覽、通信に關する統計、通信に關する現行規則摘要等が添へられてある。　非賣品。遞信省發行

通信事業五十年紀念史　一冊　通信事業五十年紀念史編輯所編

大正十一年四月發行

通信事業五十年紀念として編纂發行されたもので序に「通信事業更革の五十年を紀念とし大化の昔唐代の制度を取つて以來、德川時代に至る通信機關の發達せる狀況、明治維新の革新より現今に至る政府者の施設と相待つて各種商工業の發達せる沿革を編纂し云々」とある內容を第一編維新以前の通信事業、第二編明治初年の通信事業、第三編通信事業の組織並各論（郵便、電信、電話、爲替貯金簡易保險）第五編新版圖及租借地の通信事業第六編通信事業と各種產業の發達（海運、陸運、鑛業、水產業、農業、林業、工業、商業貿易）第七編通信事業と文化、に分ち驛遞及郵便の現今に至る沿革並に產業の發達を一通り記述し口繪に遞信省全景、歷代の遞信大臣の肖像を掲げ、附錄として橫濱郵便局長列傳（肖像を入れ）を添へてある。編者發行

帝國大日本電信沿革史　一冊　前田銀次郎氏著

明治二十五年十月發行

明治前半に於ける我國の電信の發達を書いたもので、例言に「本書ハ我帝國電信ノ沿革ヲ列叙スルモノニシテ其編纂ノ體ハ大綱ニ依リテ編ヲ立テ綱ヲ細分シテ章ヲ置キ毎編其綱領ヲ提擧シ毎章其顛末ヲ辨折シ總テ編年ノ體ニ由リテ之ヲ列叙シ明治元年ニ起リ明治二十四年ニ至ル」とある。第一編官制第二編內國電信第三編海外電信、第四編技術に分かたれ、電信關係の地圖及諸表を附錄として添付されてある。明治二十五年七月上梓、同年十月發行とある　遞信省電務局發行

本邦電信史資料　一冊　遞信省通信局工務課編

大正七年發行

我國電信沿革に關する資料を集錄したもので第一章總說、第二章電信線路建設及保守、第三章電信機械裝置及保守、第四章電信線路試驗、第五章空氣傳送管、第六章電信局所建築、第七章無線電信、第八章電報送達、第九章電報料附本邦殖民地と海外地間電信聯絡、第十章職員附電信修技生及建築專門生養成、第十一章電信電話技術調査會事業成績、第十二章電信經濟概要の十二章から成り各種統計表を附錄としてある　遞信省通信局工務課發行

現下の我業界

乙宗生

▲世俗に雨後の筍の語あり、山雨一過後翌朝、竹林を逍遥すれば、前日まで姿を見せざりし筍のこゝかしこにつく〳〵と頭をもたげいる様を云へるもの、それにも似たるは我大阪の古書界となす。

▲毎月報誌上に紹介せらるゝ新加入者の繁殖は驚くべき急速力を以て増加しつゝあり、我國産兒の出生率よりも多かるべしとは或人の戯言なれど現今古書界の趨勢より見る時は正しく至言の語と謂ひつべし。

▲各方面に小圖書館の設置、巡回文庫、有志の常設圖書、青年團備付等惠まれたる都人士の讀書力は日一日と向上なし行く。

▲今より十四五年前の貧弱なる讀書力と、現時一般社會に行亘れる正に幾十倍、誠に文化の隆盛なる深く欣快とせざるべからず。

▲中にも日本橋筋の繁殖は驚くべきほどにて、世人は神田の神保町と比較せんとす、然り大阪の古本屋町は遂に日本橋筋と極印は打たれたり、谷町筋の洋服屋、松屋町の菓子屋御祓すじの道具屋、と相並んで大阪の新名所を出現せり。

▲電車道の東西兩側に櫛比せる古本屋の中、谷本店、高尾書店、公立社書店等を此筋の草分とし杉山、谷二書堂之に次ぎ、群雄次第に來り會し今や將に戰國時代の壯觀を呈するに到る歟。

▲更に年次を經るに從ひ益々多く益々繁殖すべきを惟はしむ、曾て大毎社の募集せる五十年後の太平洋にあらざるも、試みに三十年後の日本橋筋の古本街を想像する時、空想は際限なく展開して滾々たる興趣の盡ざるものあるを覺ゑしむ。

▲更に新市及舊市の接續町に足を入るれば、こゝかしこに新店の簇出せるを見る、都市の擴張に伴ふ自然の結果にて何等怪むに足らずと云へどもその數の意外に多きには一驚を喫せざるを得ず。

▲店舗は全市に渉りて殆んど同一タイプに改造されつゝあり、時に多少の例外はあれど大体に於て大同小異と云つて可なり。

▲京都の如く古本店に美術棚を備付けるが如きは大阪にては新本屋以外に是を見ず、されど中央の書臺、家によりて廣く周圍の歩道せまく漸く一人を通行し得るに止まる店あり、その不便や甚だしく**トンビ**の袂にて臺上の物品を掃きて、時に思はぬ失策を演ずる事あり。

▲かゝる不備は直ちに改造の必要なるは論を俟たず、間口一間半にて少くも二尺五寸づゝの通路を要し、二間間口ならば三尺、高尾書店の如きは優に四尺を存せり、若し改造を企圖するの人あらば、よろしくその範を他店の長所に考へ、一夕の散歩に他人の店舗を見學する、亦必ずしも徒事にあらざるべし。

▲書籍の分類は各々その店主の趣味性格の異なりたる爲め、千様萬態、整然として見易きあり、雑然として

ウブらしきあり何れを是と云ひ難けれど化學書の中に小說を交へ或は宗教書と數學書を混同するが如き何となく見苦しきものなり。

▲美本も汚本も只心のまゝに並び入れて、客の選ぶに委せたる店舗あり或は見上ぐる上方の棚に、整然と光輝を放つ金ピカ本を並べ、手の屆く程度の棚には比較的汚本のみを並べたる店あり。

▲今こゝに雜然たる店に就ては○○書店を擧ぐべし、その混亂せる狀態は玩具箱を引つくり返したるが如く玉石混淆恰も衛生掃除の町を行くが如き感あり、その落着かざると見憎くきは一見初心らしくも見ゆれども餘りに品位なき憾みなしとせず。

▲文運日に進めど、不況また不況の聲道路に滿ち、好況の曙光未むるに由なく、前途は只暗雲の低迷するありされど爽涼の氣は天地を蔽ひ、將に讀書期に入らんとす、果して豫期の收獲を得るや否や。

スクラップブック

○此頃の新小說

早稲田文學が度々發行する明治文學研究號に刺戟されたものか、雜誌新小說は七月に特輯「浮世繪趣味號」を出し八月には同じく「南蠻紅毛號」を出した。讀書界の潮流に投じた好い試みであるが、其南蠻紅毛號が早くも數物となつて市場に横行するのは**オカシ**な事だ、然しいづれは尊重さる時代が來るものと推定する。

○新聞雜誌保存館

東大の吉野作造博士等が熱心な研究者の一人である明治時代の新聞雜誌保存館と云ふのが東京帝大内に設けられると云ふ。新聞雜誌の蒐集は明治文化の研究資料として缺くべからざるものであるが、一方是等に依つて我古本界に與へる刺戟は可なり大なるものがあらうと思ふ。（九月廿八日大朝）

○絕版書續々復活

近來の絕版書復活の勢ひは全く古本屋の神經を焼々たらしめてゐる夕へに破格な高價を投じて飛びつき買うた稀書は、且に復活の廣告を見て半價或は三分の一五分の一の値下げに逢つて、**アタラ**掌中の玉は瓦礫同様になり終るのである。其間種々な珍談滑稽を演じられて喜ぶ人悲む人が出來てゐる、一寸頭に浮んだゞけでも左の如きものである。

- 大日本租稅志
- 日本考古學
- 本居全集
- 日本經濟史論（坂西）
- 福澤全集
- 國書解題
- 商業史（横井）
- 近世日本世相史
- 支那人名辭書
- 筆[illegible]史
- 大日本時代史（十二冊）
- 海上保險講義要領
- 國史大辭典
- 大日本不動產法沿革史
- 俗曲評釋（博文館）
- 小說年表（朝倉）

○即賣會の仲間賣

或は優先賣と云ふ

事に就ては、いつも問題になり易い事だ。仲間賣は何か其處に確固たる申合せでも拵へて置けば厳守もされやうが、一般顧客に對する優先賣は開場時間以前に來場されると強て峻拒し難い情實もあるので、ズル〳〵ベッタリになつて、他から叱言を頂戴する何んとかして之れを醜曲に防止する最良の方法はないものか、然かし顧客にしても仲間にしてもそれ〳〵掘出慾、稍取慾に驅られた問題だけに到底解決は不可能だらうよ。

○講座と讀本の大流行

其昔[illegible]

であつたものが何んでも彼でも講座になつて了つた内容は講義でも講座でも餘り新しくなつて居ない、只耳に響く時に讀者は新しく聞こゆるだけの事である、つまり用語が時代化したまでの事。それから今年に入つて何々讀本と讀本名を附したものが恐ろしく澤山出來た、一体幾種類あるか諸君に考へて貰ふ事とする。

店頭の微苦笑（その二）

○或人の世話で最近或場所へ初めて店を出した若い男がつい近頃某書店に客の注文の品を、さがしに來て無造作にも一々その店の棚の物を引出して、附價を調べて……驚いたような顏をして、此頃は不景氣で市に行つても本が安いのにあんた處は隨分高い價が附てますんな……その愚直な物の言方にその家の主人はあつと呆れて、その若い男の顏をまじまじと眺めた。

○どこの小僧さんか一人自轉車に乘つて長篇を交換にきた、それと同時刻に廿歳位の店員風の男が這入つきて、新青年を買ふなりその小僧さんの自轉車に乘つて行つて終つた、小僧は勿論店番している私も少しも知らなかつた物の三十分も經つたが小僧さんの長篇は仲々に極らない、その時前の男が自轉車を表に置て笑ひながら這入つてきた。いつも自轉車に乘つてますやろ……その癖が付て壚町の心齋橋まで行つて初めて氣が付て大急ぎで戻つてきました……笑ひながら大きな聲で話しながら出て行つたが、長篇に夢中になつてゐる、小僧さんの耳に這入らないのか素知らぬ顏をしている……本を選つてゐる僅かなひまに、自分の自轉車が心齋橋まで往復した事を少しも知らない……私は何かの外國雜誌の漫畫に、かうした事が思ひ浮べて獨りで面白く思つた。

○[illegible]形の會社員らしい男が一寸々々と、私の店を訪づれて時々雜誌を買ふて行く或日、日本鑛物學の全篇を四五日間少し調べたい事があるので、七十錢の見料で貸してくれと云ふ事なので、別に差支へないと思つて敷金を受取つて持たして歸つた。約束の四日後に言葉を低うして持つてきたので、七十錢の見料を差引て預つた代金を何氣なく渡した……が錢の勘定もせず、あたふたと出て行く時の擧動が妙にソワソワしてゐる、まるで萬引でもした樣な落着がない……私は急に何かの不安を感じたので、その本を取上げて調べて見た、僅かであつたが四ページと、附圖一枚を巧みに切取つてあつた、あつと驚いて立上つたが時すでに遲くて空しく犯人は逃走してその影さにも見出せなかつた。

○外語の生徒らしい三人連れ或書店に岩波の論理學と美學の美くしい本を二册賣りにきた、二册で一圓と評價すると……生徒の一人が突然おッサン……君の處の看板塗り代へるといゝネ……書店の主人公吃驚したような顏なして、何の事かと思つて生徒の顏を眺めてゐる（古本飛切高價買入を）……飛切安價買入にネアハヽヽヽと三人は大笑しながら本を持つたまゝ退場………。

（乙宗生）

大正十五年九月一日第廿三號發行

發行兼編輯人　松本正治

發行所　大阪市南區日本橋一丁目交叉点北辻東へ入　大阪古書籍商組合事務所

大正十五年十一月二十日發行　大阪古書籍商組合事務所發行

大阪古書組合月報

（第廿五號）

組合員移動

▲加入者

東淀川區本庄町九九三　小柳津（オヤイヅ）保氏
紹介者　藤野德次郎氏

天王寺上本町八丁目五九　開文堂　三島定從氏
紹介者　高尾彥四郎氏

西淀川區塚本町五六四　郁文堂　井津郁二氏
紹介者　藤堂卓氏

浪速區稻荷町三丁目八九八　西村德松方　西田朝市氏
紹介者　倉地健一氏

▲移轉

南區日本橋筋四丁目三一（五丁目停留所前）　六文館書店　戸川春一氏
住吉區阿部野町一二九　山野元次郎氏
住吉區天王寺町二〇七二（ミサキヤ）　小河信行氏

▲脫退

港區市岡町三四六　愛知捨藏氏

▲定例役員會

十一月十四日於日本橋倶樂部前二回の役員會にて審議したる大阪古書倶樂部設立案も漸く本會議にて協議纏りたれば直に各役員にて部署を定めて株式募集に着手することに可決したり、

▲市場協會協議會

十月三十日午後南堀江福家料亭にて協議會を開く、日本橋筋聯合市會の移轉の議を承認可決したり、出席者左の如し。

村瀨、小石川、谷、佐藤、森谷、伊藤一男、松本

モヨホシ

▲**荒木柳屋臨時市**　十月十二日當地愛書家にして史談會の理事であつた故永江爲政氏の藏書全部と他に美術書類を混ぜた市會が書林倶樂部で開かれ京阪神の錚々連は全部顏合せ加ふるに東京より一誠堂北澤氏等も見へて盛會であつた。

▲**同友會特別市**　十月十八日高砂倶樂部に於て久方振の特別市を催し盛會なりし

▲**リブリオクラブ**　原書交換會も同日書林倶樂部で催した。

▲**藤堂檜雄氏結婚披露宴**　同十八日公立社藤堂卓氏令息檜雄氏は辻井喜代子孃と華燭の典を擧げられ順慶町天狗傳で盛大な披露宴を催された。

▲**錦水會即賣會**　十月廿三四日書林倶樂部に於て十五年度秋季即賣會を開く、每時雨に祟られるが今度は惠まれた日和に可なりの盛會を呈した、

▲**日本橋聯盟移轉特別市**　同市會は今回道頓堀天牛書店隣接朝日倶樂部に會場を移し其披露市として十一月三日特別市を開催した來會多數盛況

▲**和歌山、京神の即賣會**　和歌山は十月十七八兩日京都杉田書店主催は十一月六七兩日全市公會堂に於て、神戸同業は十一月六七湊川倶樂部にて共に古書即賣會を催した。

▲**綠友會即賣會**　は來る十二月四五兩日書林倶樂部にて開催する由

古書株式會社設立愚案

（南　北　生）

私は前號の『古書倶樂部設立案』に大賛成をするものである、これを株式會社組織になし、統一ある健全なる互助、共榮の機關となす事は萬人の希望たるに相違ない、小さい感情古い慣習に囚はれずして、多數人の利益のためこの仕事を充分援助すべきであらう。

さて株式にしたならば差當り資本金であるが、これは最初より大資本はいけない、先づ拾萬圓とする。五拾圓拂込として二千株である、同業者約三百名に割當てると一名約六株となる、この内多數持つものもあるだらうが、尠くとも組合員は一人最低一株宛は持つ覺悟でありたい、第一回の拂込は半額の二十五圓とする合計五萬圓、これが創立の資本金である、これを如何に按配するかと云ふに卑見によれば

第一項　事務所費

市の中央部で、必ずしも大道路に添はなくても宜い、現に幾多の組合は事務所或は倶樂部なるものは横町にあるから、安くて廣い處が宜しい全額拂込までは、建物買收及修繕費のみで、土地買收、新築等は後廻しにしたい、これは實際に當らねば決定し兼ねるが不景氣の今日可成安く買へると見て、約貳萬圓位、こゝでは市會を開催し得る設備を設ける、當分は散在して居ても宜いが、合併し得るものは直ちに合併するが好い

第二項　各市會解散費

これは買收費ではない、こふ云ふ時は權利云々は斯業の爲め讓歩して貰ひたい、只だ解散費として若干の報酬金を拂ひたい、尙當分は從前通やつて戴くし、その幾部分の係員は引續き新會社の市場係に採用するわけである。一市會五百圓位の解散費を最高としたい、これは各個人ではない市會へとしてである、何となれば掛け持の係員等があるから、但し分配は元より勝手たるべき事であるが之に要する金額が八ヶ所で計四千圓である。

第三項　製本部費

製本部は是非新會社に副業として置きたい、これは新規に設けるよりも、ある製本店をその儘買收したら宜い、機械及殘材料と權利とも云ふべきものを合計一千圓もあれば足りるだらう。

第四項　什器、消耗品費

什器、消耗品及印刷物等で壹千圓はどうしても必要だ、消耗品など小買は損である。

第五項　創立費

約五百圓、これは要らない樣でも眼に見へぬ方面に消へるものであるまた誰もタダでは働かぬから。

ザットこれだけあれば宜ろしからう。計貳萬六千五百圓であつて拂込資本金五萬圓に對して殘額貳萬參千

五百圓である。此殘額の使途は別に方法を立てるか又はイッソ四分の一拂込の貳萬五千圓に豫算を切り詰めて殘額を拵へないかである。

　收入の方は一市會平均每回の出來高五百圓として多過るかも知れぬが年に三百四十五日開會せば、年收の步口錢が八千六百貳拾五圓ある支出では五名の係員月六拾圓として、又主事一名八拾圓として年額四千五百六拾圓、取締役監査役等の報酬は尠く見て五百圓（之れは年當であるから別に多くを出さずともよい、殘參千五百六拾五圓の、六拾五圓を切捨て參千五百圓として、拂込資本五萬圓ならば六分だが、貳萬五千圓なら一割四分に當る、悪い配當ではない製本部は收支が一杯々々でも結構である、これは私の一夜作りの思案で內容は余り當にならぬが取り敢へず參考迄に披露をした次第である。

古物商取締法
改正期成同盟會生る
大阪古物商組合の壯擧

我々古物業者を取締るべき法則たる『古物商取締法』は明治二十八年三月議會の協賛を經て公布せられたるものなるも、自來三十幾年、社會の進歩は滔々として已まざる狀態にかゝはらず、獨り取締法のみが古く且つ諸所に不備の点あるを痛切に感ずる故を以て、夙に識者間に於て之が改正を唱導されつゝありしが、今回我大阪の古物商組合は奮然と起ち其改正運動を實現すべく古物商取締法改正期成同盟會なるものを組織し專ら之が研究並びに當局に向つて改正申請を計る事となつた。其の第一回協議會去る十一月八日大阪古物商組合事務所に於て開かれ、先づ期成同盟會々則なるものを協議可決した曩に東京古書組合等に於ても之が同樣の運動に就て狼火を揚げたる折柄、我々古物商法の下に支配さるゝ一員として大いに此擧を賛すると共に將來意義ある成果を見るべく相當の應援を吝まざらん事を希望するものである。其會則は左の如き要領である。

古物商取締法改正期成同盟會々則

第一條　本會ハ古物商取締法改正期成同盟會ト稱ス

第二條　本會ハ古物商取締法ノ改正ヲ促進シ之レガ達成スルコトヲ目的トス

第三條　本會ノ本部ヲ大阪市東區瓦町四丁目五十六番地大阪古物商組合事務所内ニ設置ス

第四條　本會ハ大阪古物商組合員ヲ以テ組織ス
但シ組合員外ノ同志ヲ會員トスルコトヲ得

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク
會長　一名
副會長　七名
理事、評議員、顧問

第六條　正副會長ハ理事會ニ於テ選擧ス
理事ハ組合ノ役員、議員、委員全員及機關新聞主幹ヲ以テ之レニ充ツ
但互選ニ依リ常任理事ヲ設クルコトヲ得
評議員ハ組合員中ヨリ會長若干名ヲ囑託ス
顧問ハ必要ニ應ジ會長ヨリ囑託ス

第七條　會長ハ本會ヲ代表シ諸般ノ事務ヲ總理ス
副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ之レヲ代理ス
理事評議員ハ本會重要事項ヲ審議シ目的ノ遂行ニ關スル事務ヲ擔當ス

第八條　會長ハ事務員若干名ヲ置キ庶務ヲ處理セシムル事ヲ得

第九條　本會ノ經費ハ大阪古物商組合及ビ會員ノ醵出金ヲ以テ之ニ充ツ
會計ハ常任理事之レヲ擔當ス但シ互選ニ依リ數名ヲ定メ之レヲ擔當セシムルコトヲ妨ケス

第十條　本會ハ左ノ運動宣傳ヲ爲ス
一、全國同業ノ各團体ニ對シ協力ヲ求ムル事
二、新聞紙公開ノ演說ニ依リ輿論ヲ喚起スル事
三、代議士ヲ介シテ帝國議會ニ提案スル事
四、其他會長ニ於テ適當ト認メタル方法

仄聞する處に依ると之が運動費は可なりの額を豫算したそうで、飽くまで其改正斷行を見ねば已まない決心であると。因に古物商評議員會には常に我大阪古書組合として藤堂卓佐藤光次郎の二氏出席されつゝありしも、今回此改正期成同盟會には二氏共に理事として選ばれたのである我古書組合の爲め、古物同業の爲め折角の御健闘を切に祈るものである

本屋考古學（中）

永樂町人

前號に掲載すべき筈の處記事輻輳にて繰越して居つたので何んだか間の抜けたやうになりましたが中止する譯にも行かないので續載する事としました。

▲雅俗文庫目錄

書史會虫干會に清和堂主人石川氏の出陳中、雅俗文庫圖書目錄と云ふのがあつた。

雅俗文庫は誰もが知る如く往年の圖書蒐集狂宮竹外骨氏が滑稽新聞經營中に蒐集された文庫の名であつた宮竹氏は其文庫に蒐集した夥多の珍籍奇書を眞面目な讀者に無料貸出の目的を以て、まづ該文庫の圖書目錄を大阪滑稽新聞第一號（明治四十一年）から毎年續いて最終頁に、一回に百点乃至百五十点宛を紹介した。それは凡そ一年間二十八號の間、續載されたのであるから点數にすると三千点は降るまい。其殆とが和本の軟派物或は書本類であるから今日にして見れば恐ろしい金額のものである。其頃でも約一萬圓の大金を投じて蒐集したと書いてあるから、それから後の和本昂騰の急進さを考へるならば、上物で二十五倍普通の物でも十倍位の累進率を示してゐるから今日の相場に直して十五六萬圓は確かな所であらう。

今其詳細を摘錄するには餘りに煩雜であるし、其悉くが珍本揃ひであるやうに見受けられるから、どれを抜書すると云ふ事も出來ず、茲では省略して置くが、一点宛に書名の下には雅俗文庫が買入た値段を記入してある、其値段が又今日から見て恐ろしい安價なもので、轉た時世の推移を感ぜずには居られない　何故に斯る買入値段などを發表したかと云ふに、前にも云ふた一般に公開貸出をしやうとするのに其貸出の規程の中には『貸付は無料なれども汚損又は紛失したる時は相當の辨償金を徵收すること』としてある。其辨償金の標準ともなるべく此買入値段を記入したものと思はれる。然し此貸出は果して實行されたものか否かゞ判明しないが、若し實行されて居たものとすれば相當の辨償金否數倍の辨償金を拂つても尙は且つ垂涎措く能はざる珍本には望み手が澤山あつた事と推察せられるのである。

之れはさて措き此圖書目錄は僅か二十八頁に過ぎない薄いものではあるが、軟派物の書目は凡ゆるものが網羅されて居るから此方面を研究する者にとりては、貴重な目錄と云はねばならぬのである。

市内市場巡り

（四）日本橋倶樂部

十日菊生

日本橋倶樂部が華々しい初市を開いたのはたしか今から四五年前の七月の六の日であつたかのやうに覺ゐてゐる。あの道頓堀通りの賑ひを見下した三階の古びた部屋で毎日のやうに登り下りした日がなつかしい。

その頃の會員の主なる人々は伊藤松本、高尾、藤堂、長谷川、木村、村井の諸兄で皆熱心に協力して市會のために好いものを出品し市會のためにほんとに働いて居られたやうに思ふ地方からもつぎ／＼と上物の出品があつてお客も皆熱心にかゝさず六の日には集つた。私自身あの當時市で買つた數々の書物を回想する毎に恒に懐舊の氣分にひたる。今のやうに絶版本をやかましく騒ぐ人も少く好書物が市毎に出品せられた。

關東の大震災は好い意味にも悪い意味にも我々の心持をすつかりと別なものにした。震災氣分で古本屋の成金者流が跋扈するやうになると人の氣も自づと變つて來た、今迄の悠長な氣持がいらだゝしい競争となつた、大阪の同業者はこの機會をつかんで機敏な働きをしたものも數多くあつた。そして今や大阪が關西に於ける古本取引の中心点たらんとすることは最も喜ぶべきことである。

我が日本橋倶樂部も又此間種々の事情でこの發生の記念すべき古巣を去つて今の日本橋倶樂部に移つてゐつた。そして十日會との合同によつて會員を增し益々市會の隆盛を計つてゐる事は誠に芽出度い事である。

日本橋倶樂部も關西に於ける有數なる定市として全國的に認められる事となつた。會員達は是に馴れる事なしに私心を去つて益々會のため否我が大阪の古書業のために一臂の力を惜まざらんことを切に希ふ次第である。

私は最初この市場の印象を書かせて貰ふつもりでゐたが遠い過去の回想へと走つた。私自身としての舊日本橋倶樂部の忘れられない感銘からつい懐古に多くの頁を費した事をお詫びする次第である（大正十五、十一、九）

古本漫遊人國記（一）

南北氏が寄せられた神戸雜觀にヒントを得て此欄を設けたいと思ふ。諸君の南船北馬古本行脚記事の御寄稿を期待する譯である

（一）神戸雜觀

南北生

近くに居て神戸を知らぬと云ふは可笑しな事であるが、實際十四五年間神戸の街を歩いた事がない、いつも素通りばかりであつた。今度序でがあつたので一寸素人顔をして同業店の見學をやつて見た。勿論私などは批評する柄ではないが、ホンノ素人觀察を書かして貰ふ事にする。間違つた事や御氣に召さぬ事は御寛大に願つて、

時間に着和し得ないと云ふ時間に某氏は既に和

出る電車のも一つ以前に乘務員丈けな沿道に運

込所北區永樂町中央堂書店宛

神戸で比較的古本屋の纏まつてゐるのは三の宮驛前と葺合區の阪急終點迄であらうまづ三の宮驛前の古本屋では東からでは古家書店、神港堂、大崎正文舘、三軒とも何處へ出しても恥しくない一流店、何れも間口が廣いので二つ程中置きがあり、本がギッシリ詰まつてある。勘定場は總てテーブル組織である、正文舘の立看板に曰く「猛烈高價買入」とは奇抜である、この三軒共甲乙はない。

次は柴谷書店これは極々小さい、雜誌の古いのが多いのと古教科書が棚づめになつてゐるのが目立つ。次は博文堂これも小さい、古教科書の棚づめ、次は澤田書店、間口は廣いし店内も廣いが、中の置臺の淋しい事、棚にも上等のものはない、それに正しい分類が施されてない、以上三軒は前三軒より二段も三段も落ちる、これは折角あの場所で勿体ない事だ、後の三軒が前の三軒の提灯を持つてゐる樣なもの、今少し考へを要する。

飛んで葺合方面即ち阪急終點から熊内通四丁目まで距離で六町余りの間に六軒ある、南側五軒と北側の一軒と北側の一軒は阪急で下車して直ぐの大洋堂これは新本屋兼業であつて奥行の極く狹い店で大した事はない、南側の東から一番目が白雲堂支店、白の煉瓦建（尤もこの邊は新開地で新建が多い）可成品物もある樣だが店内の通路が廣過ぎる、（まあ三尺五六寸を超へて中臺がないとそう云ふ風に見ゐる）ので淋しい。次は白雲堂である、本店であるらしいが、支店より宜いとも申し兼ねる、殊に何でもかでも、棚づめは一寸威嚴が無さ過ぎる。次はロマンス書房通路複雜たる面白い構造だ、まあ中處であらうか、次は伊藤書店これは小さい家で、ゴテ〳〵置いてゐる處が素人から受けるかも知れない、一体このゴチャ〳〵主義は掘出物を漁さる癖せのある客の喜ぶ處であるが、普通大衆にはどうか、やはり整然たるが宜い樣だ。次は後藤書店、新本兼業で大きな店舖、實によく目立つ、古書は店内に道路と平行してトンネルのやうな暗い處に陳列されてある、これでこの一帶は終る。この白雲堂、ロマンス書房、後藤書店の三軒は三の宮驛前の古家、神港堂正文舘よりは輕く一段劣つてゐる樣に感ずるはヒガメか、當日は丁度即賣會があつたので覗いて見た、詳細は略するが、包紙に主催者書店の名前が印刷してあつた、曰く、哲文舘武内書店、集古舘、福岡書店、神港堂、古家書店、朝倉書店、後藤書店なつめや書店、白雲堂、ロマンス書店の十一軒、ケダシ神戸古書界の白眉なるか。妄言多謝。

北澤書店欠本欄

左の欠本御持合に候はゞ御手數ながら御報知被下度候尚此欄御切拔の上見易き所へ御張の上御入手の節御一報煩はし度候

▲古事類苑　外交部　一冊　兵事部　一冊　官位　三冊　動物部　一冊　植物部　上下　政治部　四冊　服飾　一冊

▲漢籍國字解　荀子　下

▲帝國文庫　俠客全集、文耕堂淨瑠璃集、名家短篇傑作集

▲日本文庫　九卷

▲國華　第九　第廿六　第廿八　第百五十四

▲國書刊行會　德川文藝類從　1　2　12　信仰叢書　全部　日本書誌　1　2　參考太平記　1　2　橘守部全集　全部・

▲化學工業全書　2卷　12卷

▲有朋堂文庫　日記記行集、風俗文選、醒睡笑　先哲像傳、古今著聞集、日蓮上人文集、雜文小說集、古事記、繪本太閤記中、花暦八笑人

▲好子古纂、第1編自第1集至第11集

▲日本文學全書　19　21　24

▲日本風俗史　上卷、

▲日本文明協會　（第四期）歐州大戰ノ效果　結婚ト兩性問題　經濟的道德觀　幸福學　能率增進ト實業　兒童生活　婦人ノ犯罪　產業組織論　應用心理學　科學精神ト共効用　社會進心論、岐路ニ立ツデモクラシ　社會改造ノ理論ト實際　（第七期）今日太平洋問題　（第八期）近代科學ト問題　結婚心理　戀愛ト進化

▲俳諧文庫　6　也有全集　6　蕉門十哲集　11　一茶　大江丸全集　12　蕪村曉台全集　16　俳諧句合集　20　俳諧逸話全集　21　附合作法全集　22　俳諧類題前後

▲農業大辭書　第一

▲德川禁令考　第1帙　後聚第2帙

▲續日本經濟叢書　第2　第3

▲逸話ノ泉　自第1至第14

▲大日本地名辭書　小形1　2

▲大阪市史　第1　第2　索引　附圖

▲史記國字解　第1　第2　第5　第6

▲甲斐國志　和本　第1

▲有朋堂文庫　狂言記下　先哲像傳　太平記上　大岡政談　源平盛衰記上下　上田秋成　浮世風呂　膝栗毛　繪本西遊記　名家俳句　近世美少年

▲幾何學正解　佐之井上

▲植物學各論　隱花部　本文

▲樂翁公遺書　中卷

▲（牧野）新撰日本植物圖說　第1卷　5集　2集

▲國史大系　第7卷　續國史大系　第5卷

▲社會問題研究　37　38　41　46　57　60　61　62　63　64　65　66　67　68　69　70　71

▲國文注釋全書　源氏細流抄　岷江入楚上中下　枕草紙旁註　古今和歌余材抄　源註拾遺

▲經濟資料　東西經濟調查局發行　第1卷6號　第2卷6　7　8號　第3卷6號以後全部

▲國譯大藏經　第1帙（經部）和裝　第18　第13

▲益軒全集　第4　第6

▲存採叢書中　和名抄諸國郡鄉考　第6卷

▲統計年鑑　9　15　28　31　32　33　37　38

▲大日本地誌　7　8

▲支那省別全誌　10　11　15

▲史學雜誌　第六篇　1　2　3　4　5　6　7　8　12　第三十四篇　11　第三十六篇　7　8　9　10　11　12　第三十七篇　1　2　3　4　5　6

▲歷史地理　第七卷　1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　11　12　第八卷　1　2　3　4　5　6　7　8　9　第十五卷　3　第三十六卷　1　第三十七卷　2　第三十八卷　1　2　4　第三十九卷　1　2　3　4　5　6　第四十卷　4　第四十一卷　3　4　5　第四十二卷　1　2　第四十三卷　1　3　4　5　6　第四十四卷　4　5　第四十五卷　2　4　5　6　第四十六卷　1　2　第四十七卷　1　2　3　4　5　6

▲支那時報　自第1號至第25號

▲山岳　第1年2號　第5年1　2　3號　第6年1　2　3號　第11年1號　第17年2號　第19年3號　第18年全部

▲工業會誌　自1號至14號及18　21　22　23　25　30　32　42　70　83　110　112　131　182　222　289

▲哲學雜誌　自59號至63號及大正五年以後全部

▲東京物理學校雜誌　5　12　13　14　19　38　57　58　59　60　61　62　65　66　68　69　71　72　73　74　75

▲植物雜誌　第36卷　1　3　5　6　第37卷　1　2　3　4　第384　39卷　1

▲動物雜誌　32卷　375　376　377　｜　｜　383　34卷　401　406　407　35卷　414　417　418　419　420　421　422　36卷全部　37卷全部

東京市神田區南神保町一〇

北澤書店仕入部

電話四谷（五七一一番／五八四三番）

大正十五年十一月十日第十五號發行　發行兼編輯人[illegible]　發行所　大阪市南區日本橋一丁目　[illegible]